國譯大藏經

經部

第十巻

目次

維摩詰所說經解題……………………………一—二四
國譯維摩詰所說經……………………………一—一三三
大毘盧遮那成佛神變加持經解題……………一—二五
國譯大毘盧遮那成佛神變加持經……………一—二六五
解深密經解題…………………………………一—一六
國譯解深密經…………………………………一—一四九
大乘本生心地觀經報恩品解題………………一—二
國譯大乘本生心地觀經報恩品………………一—五一

漢譯原文

維摩詰所說經……………………………………一―三六
大毘盧遮那成佛神變加持經……………………一―九四
解深密經…………………………………………一―四三
大乘本生心地觀經報恩品………………………一―一八

以上

姚秦三藏鳩摩羅什譯

維摩詰所說經解題

【一、本經の名義】本經はその原語に題して、毗末羅詰利帝涅提舍 Vimalakīrti-nirdeśa といふ。毗末羅詰利帝は無垢稱若くは淨名と漢譯す。卽微瑕なき白玉の如き名聲を有し、內德充溢して、淸譽外に發するの謂にして、此一經の主人公。印度の古時、學問思辨を以て名ありし、毘舍利國 Vaiśāli 梨呫毗 Licchvi 共和市の一富紳の名。元是法身の大士、跡を塵界に現して、廣大不測の妙用を顯示す。事本經の序分に讚述するが如し。維摩詰は是この對譯を約言したるものなり。涅提舍は詳說・敍述等の義あり。今之を所說と譯す。此語を用ふるの聖典其例乏しからず、無盡意菩薩所說經 Akṣayamati nirdeśa の如き、本經と同例とすべく、更に首楞嚴三昧經 Śūraṃgamasamādhi-nirdeśa 大悲經 Tathāgatamahākaruṇa-nirdeśa の如き、皆涅提舍の語を用ひたり。

浩澣の佛敎聖典、若古譯家に從へば其說者よりして之を五種に分つを得べし。卽ち佛說・聖弟子說・

諸天說・神仙說・變化說なり。佛說は佛陀親ら獅子吼して大敎を宣揚したるもの、大小乘の諸經多くは是なり。聖弟子說已下は菩薩・羅漢・天神・龍・鬼等、佛力の加被を得て、大道を宣傳し、其說く所佛意に順じ至理に契ひて、能く上求菩提・下化衆生の樞要を握り、轉迷開悟・眞空妙有の眞詮を顯すもの、是佛陀の自說にあらざるも、佛意に契合し眞諦に合一するを以て直に之を佛說と同じと認めらる。大小乘聖典の中此類また乏しからず、本經亦實に此第二類聖弟子說に屬す。蓋し下に示すが如く、本經三會の中、初會は佛陀の自說、終會は佛陀維摩の合說と雖、其大宗本分たる中部の第二會は、純ら維摩の說を敍述するを以てなり。故に之に題して、維摩詰所說經といふ。

【二、本經の原文】　本經の原文は惜い哉、散佚して傳らず。法華・楞伽・般若・金光明等の梵本嚴存に對して研究家の特に痛嘆する所なり。但し西曆紀元八世紀の頃、那爛陀大學の法將寂天論師 Śāntideva の著はしたる大乘集菩薩學論 Śikṣāsamuccaya の中、本經を引用して文證に具ふる頗る多く、中に引文數紙に亙るものあり。本經原文の一部分はこの論中の引證に於て今に嚴存し、金鱗珠爪、以て全龍の偉形雄姿を推し得べきものあり。眞に至重の珍材とすべし。引く所の經文左の如し。

1. 論第一集布施學品に本經佛道品の一節を引く
2. 論第七護受用福品に本經觀衆生品の一節を引く
3. 論同品に本經香積品の文一節を引く

4. 論第十四自性清淨品に同く觀衆生品の一節を引く

5. 論第十五正命受用品に觀衆生品及香積品の各一節を引用す

6. 論同品に本經菩薩行品の一部を引用す

7. 論同品に問疾品の一小節を引く

8. 論最後第十八品に佛道品の頌第十六より第四十一に至る全文を引く

今參考の爲に前記引文の對照表を付せん

	ベンドール氏集菩薩學論刊本	縮藏維摩（羅什譯）黃七
1	P.6.10—11	24a2—3
2	P.145.11—15	22b10—12
3	P.153.20—22	26b15
4	P.264.6—9	22b12—13
5	P.269.11—12; 13—270.3	23a10—12;26a13—15
6	P. 270.4—8	27a18—19
7	P.273.6—7	21a15—16
8	P.324.6—327.4	24a12—26

【三、本經の飜譯】 本經最古の支那譯は、後漢靈帝の中平五年（西一八八）嚴佛調の雒陽に於て譯したる所、經錄稱して古維摩といふ、一卷あり、早く佚して傳はらざるを遺憾とす。吳の黃武二年（西

二二三）より初めて建興年間に至る終始三十餘年、優婆塞支謙、武昌に於て頗る譯經の事業に力め、出す所、十八部あり、此中本經の第二譯あり。題して維摩詰經といひ、或は佛法普入道門三昧經又は維摩詰所說不思議法門經の題を安く、二卷あり現に存在す。次で竺叔蘭、西晋惠帝の元康元年（西二九一）毘摩羅詰經三卷の譯あり、是第三譯なり、竺法護の一卷の維摩詰所說法門經續きて出づ。之を第四譯とす。法護は叔蘭に先ちて支那に來り譯經事業を始めしも維摩の譯は大安二年（西三〇三）にして十年の後にあり。此譯出でゝ後支敏度、支謙叔蘭法護の三本を合糅して一部とし五卷の合維摩詰經を編し、『偏に一經を執しては兼通の功を失ひ、廣く三經を披けば則ち文煩はしくて究め難き』を救はんが爲に支謙譯を底本とし、彼此相對通讀に便したり。この合部經前の第三第四の譯本と皆湮滅して存せず、甚だ惜むべしとす。東晋の代に至り西域の沙門祇多密 Gitamitra あり、維摩詰經四卷を譯出す、是第五譯なり、又今傳はらず。後秦の弘始八年（西四〇六）鳩摩羅什 Kumārajīva 常安大寺に於て義學の沙門千二百八の集會の前に於て重ねて三卷の本經を譯成す。是を第六譯とす。唐の玄奘、貞觀年間長安の大慈恩寺に於て六卷の說無垢稱經を譯す、是最終の第七譯たり。

已上七譯の中今存するものは支謙羅什及び玄奘の三本のみ。此中古來最も盛に行はるゝは羅什本にして、玄奘の新譯の如き、其譯密精確諸譯に超出するに關らず、學者多く羅什本を本として註疏を製し、慈恩の註已外殆ど之を依用するものなし。今回の國譯また羅什の譯を取れり。

此等諸譯の原本は如何なるものなりしや、今全く對校の便を缺くを以て、確言するを得ずと雖、大體同一の底本に依れるが如し。是三經品目の同一なるに徵して推し難からず。

支謙		羅什		玄奘	
卷上	一、佛國品	卷上	一、佛國品	卷一	一、序品
〃	二、善權品	〃	二、方便品	〃	二、顯不思議方便善巧品
〃	三、弟子品	〃	三、弟子品	第二	三、聲聞品
〃	四、菩薩品	〃	四、菩薩品	〃	四、菩薩品
〃	五、諸法言品	卷中	五、文殊師利問疾品	卷三	五、問疾品
〃	六、不思議品	〃	六、不思議品	〃	六、不思議品
卷下	七、觀人物品	〃	七、觀衆生品	卷四	七、觀有情品
〃	八、如來種品	〃	八、佛道品	〃	八、菩提分品
〃	九、不二入品	〃	九、入不二法門品	〃	九、不二法門品
〃	十、香積佛品	卷下	十、香積品	卷五	十、香臺佛品
〃	十一、菩薩行品	〃	十一、菩薩行品	〃	十一、菩薩行品
〃	十二、見阿閦佛品	〃	十二、見阿閦佛品	卷六	十二、觀如來品
〃	十三、法供養品	〃	十三、法供養品	〃	十三、法供養品
〃	十四、囑累彌勒品	〃	十四、囑累品	〃	十四、囑累品

三譯を比較するに文義の精粗巧拙異なりと雖、羅什の譯は文理の許す所謙譯を採用し、玄奘の新譯も多く羅什の舊譯文を參酌してその全文を襲踏したるもの少からず。以て其愼重苟くもせざることを見

るべし。但し細處に至りては舊傳の梵本必ずしも新渡のものと同じからず、時代の推移と共に經文の上に多少の増補刪定を見たるは譯文に照らして之を證すべし。即ち第一品の讃佛偈の如きも最古譯は十頌、羅什譯は十八頌、最新譯は十九頌半にして其增廣の痕跡自ら明なるものあり。左圖に見て其出入を知るべし。

支謙	羅什	玄奘	備考
1	1	1	▲數字は偈數、ａｂは一偈の前半と後半、小數字１２３４は一偈中の四句を代表す
		2	
2	2	3	
3a	3a	4a	
—	3b	4b	
3b	4a	5a	
4a	4b	5b	
4b	5a	6a	
5a	5b	6b	
5b	6a	7a	
6a	6b	7b	
6b	7a	8a	
7a	7b	8b	
7b	8a	9a	
8a	8b	9b	
8b	9a	10a	
9a	9b	10b	
9b	10a	11a	
10a	10b	11b	
10b	11a	12a	
—	11b	12b	
—	12	13	
—	13	14	
—	14	15	
—	15	16	
—	16	17	
—	17	18	
—	18.1	19.2	
—	18.2	19.1	
—	18.3	16.3	
—	18.4	20.1	
—	—	19.1	
—	—	20.2	

第八品の偈頌支謙譯は四十頌、什奘兩譯共に四十二頌にして、この中四十一二の兩頌は古譯に於て之を見るを得ず。

已上は唯偈頌に就きての比較なるも、本文の所々に於ても亦之に類する出入あるを免れず、今煩を恐れて一々之れを指摘するを省く。

羅什と玄奘との兩譯に於ては、前に一言したる如く文理の許す限りは什譯の文字を用ひ、奘が平素大小經論を譯するに當り、語毎に舊譯家を非難し之を更正するが如き態度なし。試に左の比較を見よ。

梵文（集菩薩學論所引）	羅什	玄奘
yeṣām anantā ṣiksaā hi	如是道無量	如是無邊行
anantaś câpi gocaraḥ	所行無有涯	及無邊所行
ananta-jñāna-sampannā	智慧無邊際	無邊智圓滿
ananta-praṇime calaḥ 140	度脫無數衆	度脫無邊衆
na teṣām kalpa-koṭibhiḥ	假令一切佛	假令一切佛
kalpa-koṭiśatair api	於無量億劫	住百千劫中
buddhair api vadadbhis tu	讃嘆其功德	讃述其功德
guṇāntaḥ syaco bhaved .141.	猶尙不能盡	猶尙不能盡

但し特に注意すべきは、玄奘の用ひたる梵本は那爛陀に於ける瑜伽教系の學者の傳承したるものにして、羅什は寧ろ三論教系の古本に依れる痕跡あること是なり。

羅什（國譯一一四）	玄奘 縮藏黃七、六十五左
無所歸を觀じて而も趣きて善法に歸し、無生	樂うて阿賴耶を觀察すと雖、而も淸白の法藏

を觀して而も生法を以て一切を荷負し

を捨てず。諸法畢竟無生なるを觀ずと雖、而も常に荷負して衆生の事を利す

此中重要なるは羅什譯は無所歸 Alaya の原本を用ひ、新譯は Ālaya とあるに依れる事にして、單に阿字一字の長短音の差に過ぎざるも、古譯は諸大乘經に屢見る、無住無所依等の眞空の異名を取り新譯は之を夫の第八識の名に用ひて、法相宗義の八識論の根底に立てるを證したるを示せり。蓋し敎理史及び聖典史上少からざる趣味あるを見る也。

支那譯の外、現に西藏の大藏經佛說部の經集 (Mdo) 中に維摩の譯本あり、Dri· ma· med· par· grags· pas· bstan· pa 是なり、經集第十四頗字 Pha 函に收め、大本一百苓八紙に亙る。大體漢本と同じ。滿蒙譯はこの藏譯を底本となせり。

古代西域佛敎の盛なるや、本經西域古語の譯本ありき。余嘗て恩師ロイマン敎授を助け、其斷片二葉を證定したることあり。是實に本經佛國品寶積奉蓋の文なりき。この報告は載せて獨逸東洋學會報第四十二卷(千九百八年)にあり。よく羅什の漢譯と合す。この斷片はかの西域探檢家スタイン氏の于闐の故趾に於て蒐集したる所にして、今英國オックスフォードの東洋學老匠ヘルンル博士の手に保管

せらる。

此等各國の古譯を記するに當り、特に最後に錄すべきは英譯の維摩經存すること是也。是明治三十一年より同じく二年に亙りて、英文反省雜誌に於て十一回を重ねて、大原嘉吉氏の公表したる所なり。大原氏篤く佛教を信じ、大德櫻井敬德阿闍梨に就き深旨を究め、聖典の英譯を以て其大誓願となし、大乘諸經の譯本少からず。其譯必らずしも善美と稱すべからざるも、摯實弘敎の大志、拮据倦まざるの精進、眞に欽仰すべし。維摩英譯は即この至難事業中の優秀なるものなりき。惜い哉天年をこの人に藉さず、壯歲白玉樓中の客となりしより既に十有餘年、この國譯を刊するに當り、自ら限りなき感慨あり。

【四、本經の敎理史的位置】本經は不思議解脫を以て大宗となす。至理は言詮を絕し、思慮を超え、蕩蕩乎として能く名づくるなし。古譯家假に之を實在・認識・論理の三方面に觀て、不思議境、不思議智、不思議敎となす。解脫は即この至理の體得と本具とを示す。而してこの不思議敎は即ち不二の法門なり。空有・生滅・因果・迷悟、本體と顯象と、主觀と客觀と、目的と方法と二にして一、一にして二、且く有無の相對に就き其一邊を說かんに、花紅柳綠、萬象歷歷として而も本來空寂なり、非空にして空なり、之を眞空とす。夢幻泡沫宇宙何物か定相あらん、而も荻露葭霜、秋光自ら目に滿つ、非有にして有、之を妙有とす。實在論と虛無說と其偏せるを捨て執せるを祛けて、無執の

大道、無著の至理、大公にして大平、大自由大光明の乾坤自ら存す。本經この大道至理を說くや徹底痛快、夐然他經と別樣の機軸を出だし、雄大の奇想、警拔の妙句、聖經中比類を見る稀なり。故に古來の賢哲特に此經を尊重し、援引以て文理を莊嚴し、造疏作註、盛に眞詮を研尋毘贊したり。印度の大論師龍樹が大品般若の釋論一百卷の大作あるや、大小諸聖典一百餘部を博引廣證する中本經と法華とを引證する最も多く、其文十數に上る。下りて靑目・月稱・法稱等那爛陀大學の諸學匠雲の如く起りて中論研究の盛なるや、其釋論の中好みて本經を引けり。一例として漢譯の般若燈論を擧ぐべきか。前既に記したる寂天論師の大乘集菩薩學論またこの適例たり。支那に於ては此經の研鑽特に盛なるを見る。經錄を案ずるに其最古は西晉廬山慧遠の高弟曇詵の維摩詰子註經五卷あり、前齊の蕭子良亦維摩義略五卷抄維摩詰經二十六卷の大作あるも共に亡佚して傳ふるなし。羅什の飜譯を了るや自ら疏を造り、其門下道生僧肇をして輯錄せしむ。是註維摩經十卷にして今に學者必需の書なり。淨影の慧遠之に義記八卷を加へて更に其精妙を發揮せり。天台諸祖の註疏また美を百代に擅にす、即智顗の玄疏六卷廣疏二十八卷を大宗とし、湛然の略疏十卷疏記三卷あり、道暹の疏記抄之に次ぐ。三論家にありては吉藏の淨名玄論八卷義疏六卷略疏五卷遊意一卷あり、又學人の祕珍たり。唐代に於ける傑出の註釋は慈恩大師窺基の說無垢稱贊六卷にして、玄奘新譯の本經註解に於ける唯一の依憑とす。宋より明に至り孤山智圓の略疏垂裕記十卷、明の傳燈の無我疏十二卷今人の好みて依用する所。

明の楊起元の評註、講の淨挺の饒舌の如き、白衣俗士の著と雖、亦捨つべからざるものあり。是等の疏釋は今幸にして現存するもの、日本續藏經の第二十七已下の四套之を纂集し、學界の便極めて多し。若し其散佚したる註疏を數ふれば唐已前既に三十部に上る。書目載せて義天錄、東域傳燈目錄等の古書に出づ。此等逸書の中、敦煌石窟祕龕の中より再び世に出でしもの、僅に道液の集解關中疏の如きあるも、餘は今之を見るを得ず。眞に嘆ずべき也。

吾が國に於ては聖德太子天縱の睿智、絕倫の神材を以て、國基を恢宏し文物を拓開し、帝道を隆昌にし民福を增進し、特に大教を其歸宗とし、親ら疏を製して範を百世に垂る。即ち所謂御註三經疏にして、實に法華勝鬘及本經の御疏とす。此中本經義疏御製は、推古帝二十年の正月神筆を起し翌二十一年九月に至り稿を了り給へり、是勝鬘御疏製作の後一年法華義疏下筆の前二年にありとす。實に太子四十二歲の大作とす。太子御疏の教理史上の價値に至りては、近世の碩學普寂律師が勝鬘の顯宗鈔を稱するに當り、御疏を嘉祥大師の勝鬘寶窟に對して隱義を究め幽賾を探る聖皇の義疏獨り其美を擅にすとなし、之を勝鬘至高の司南とし聖智の自得なりと讃せり。本經の義疏亦律師の評語を還して其妙解を賞揚すべきか。近時支那に金陵刻經處あり。清信の士令法久住の赤誠を以て聖典を公刊するに其力む。此中特に太子御疏を梓行して讃嘆措かず。盛德誰か欽仰せざらんや。御疏の後常騰・行賀・神英・學範・最澄・道銓等の碩學疏を製し註を作ると雖、殆と亡佚して存せず。唯寶池房證眞の玄略鈔私

記を傳ふるに過ぎず。而も之を御疏に比するに月前の螢火のみ。支那の註脚に就き、更に註を作るは、由來本邦佛學者の常習、發明を缺き、獨創の見なきの憾は、何れの方面に於ても邦人の病弊と雖、また其比較評隲の鋭利なるもの之なきにあらず。其最古のものは淨名玄論を釋したる大安寺智光の略述なり。古籍幸にして存し日本大藏經中に收む。上宮御疏を細釋するもの東大寺凝然の菴羅記四十卷あり。先に日本佛教全書此南都の祕書を公刊したり。近代に於ては華嚴の鳳潭註維摩に發矇抄五卷を作り、光隆寺智空註維摩日講左券十卷を選み、善久興隆義心錄十二卷を製す。天台の末疏には安樂院本純の玄義籤錄五卷、垂裕記を主とせるもの同作籤錄十卷あり。最近故島地・織田諸師の講義出で、又加藤咄堂居士の楊起元の評註を合璧せる和譯一卷及講話二卷あり。通俗平明、最も入門の研究者に適す。其他諸家の講錄一にして足らず。今追次之を枚擧するの煩を避く。

【五、本經の教會史的置位】 印度支那に於ける本經研究の盛なるは前既に記する所の如し。但し信仰上の持誦崇奉に至りては法華・金光明・金剛諸經に比して甚振はざるの觀なき能はず。三寶感通錄の中、宋の孝建中沙門普明・法華と本經とを持し、其本經を誦するや空中に倡樂の聲を聞くを記し、梁の天監の末年釋道琳本經讀誦の功に依りて魔事を除くことを錄するも、之を法華の効驗に較ぶれば十の一に過ぎず。文藝敎化に至りては、本經の結構文辭諸經に卓出するが故に、自ら他と異なるもの存す。隋の王胄病に閩海の僻地に臥すや、親友顒法師の勸に由りて、本經を以て身心を調伏し、詩を作

りて之を法師に致せり。曰く。

客行萬餘里。渺然滄海上。五嶺常炎欝。百越多山瘴。乘以勞神形。遂此嬰疲恙。桐雷邈已遠。砭石良難訪。抱影私自憐。霑襟獨惆悵。毗城有長者。生平夙所尚。復藉大因緣。勉以深廻向。心路資調伏。於焉念實相。水沫本難摩。乾城空有狀。是生非至理。是我皆虛妄。求之不可得。誰其受業障。信矣大醫王。慈力誠無量。

と。唐の王維詩を以て鳴り、本經を渇仰する深く、自ら字して摩詰といへり。王摩詰の好尚は實に支那一部藝術に遊ぶものを代表す。宋より元明に逮びて本經を題材とせる詞賦繪畫少からず。熾盛なる教義の研究と相待ちて、本經の流傳を洽くしたり。

吾國に於ては上宮の御疏、先づ本經崇奉の端を發せし已來、其講傳奠供の嚴肅殷盛なりしこと、實に佛教國中第一に推すべし。卽ち興福寺の維摩會は藥師寺の最勝會、大極殿の御齋會と鼎立し、本朝三大勅會の隨一として、保元年間興福寺僧綱の上表したる如く、一年化を計るもの五百一歲、凡そ大命嚴重にして齋莚の儀式昔より今に至り增あるも滅するなし。是本朝佛法の濫觴、我國希代の齋會なり。自宗餘宗の碩學斯が爲め帙を披き、專寺他寺の英賢、此に因りて燈を揭ぐ。誠に鎭護國家の鴻基にして興隆佛法の勝躅なり。況や齋會鄭重、聲名を異域に傳へ、唐朝の聖哲、遙に難義を此場に問ふ。眞に當寺の光華、大會の面目なるもの歟。而してこの創建は大織冠鎌足が百濟の尼僧法明の勸說に

依り、維摩講說の功德に由りて痼疾快癒したるに感激して、其山城陶原の別業を寺院として元興寺の福亮法師を請じて齊明帝の四年本經の講莚を開きしを濫觴とし、公の薨後、其忌辰に當り、淡海公不比等等、遺志を奉じ講說を續け、爾來一時中絕せしも、天平寶字元年藤原仲麿の奏に依り、功田一百町を興福寺に施入して講會を興復し、大織冠の祥忌十月十六日を結願とし十日より初めて一週間之を行ひたり。是藤原氏は外戚の尊貴、功勳の家格を以て特に皇家藩屛の至上たりしを以て、最初藤原氏の家祖追資の爲の私講法會は、皇室の寵遇に依り、次第に勅會の嚴儀として每年の例となるに至り、其講師及參列の淨侶は僧綱嚴に之を簡定し藤原氏長者の認可を得て、勅裁を仰ぎ、辨官下向して儀式嚴重を極め、講師の銓考の如き頗嚴峻を極め、承和六年已後維摩會講師を以て宮中最勝會の講師となすの恒例を開けり。之より先き維摩會は其講場必らずしも興福寺と一定せず、或は法華寺其他に於ても開會せしも延曆二十年已後宣下ありて之を興福寺の專修講會となし他所に移すべからざるを嚴勅したり。爾來永祿七年に至り綿綿絕えず古式を傳へ、其講師を初め研學・探題・宣聽・會參等の役者の列名載せて三會定一記に存す。最近光格帝の天明年中また此會の記事舊記に見え、明治維新に至るまで、盛儀古に比すべからずと雖、猶古格を存して本經贊嘆の盛なる他に全く其例を見ず。この嚴儀の一斑は寬永年間の記錄に就る大會日記、天正年間の維摩會竪儀日記等の古文書之を詳にす。此等古記錄は大日本佛教全書中、興福寺叢書に之を纂輯公刊したり。

【六、本經の分文】

本經全體の解剖科段に至りては、古來學者の說一定せず。蓋本經卷帙甚大ならずと雖、構造頗複雜巧妙を極め、峯巒重疊、烟霞互に映じ、容易に渾然たる雄景を分つに難きを以てのみ。佛國の一品先づ菴羅園の說法、寶積居士の讚佛を以て其序幕を開き、次で維摩室內の神變說法絕大雄偉の局面を演出し來り、還た菴羅園の一場に復して經を畢る。十有四品明珠連貫、陸離の色彩互に映發し、奇正相承けて變幻端倪すべからず。嘉祥大師は之を夫の華嚴の七處八會の說法に例して二所四會の經說といへり。旣に此の如し。諸師の科を分ち段を取る、同じからざる其所のみ。

羅什道生の兩賢及び當時の古釋家は槪ね科段を開かず、直ちに文を帖して解釋に從ふ。天台の疏に依るに僧肇は明かに分科を言はずと雖、初品の寶積大士發問の前を序文とし已下第十三品に至る之を正宗となし最後の一品之を流通とす。靈味法師は方便品已後を正宗とす、餘は前と同じ。開善法師は段を設くる稍詳なり、卽ち佛國・方便・弟子・菩薩の前四品之を序說となし、維摩室內の六品を正說とし、菩薩行・阿閦佛の二品を證定とし、後二品を流通となす。嘉祥大師等三論の諸師また此分科を依用せり。莊嚴・光宅の諸師また略之に同ず。唯後の四品を流通となすこと稍異なる。蓋し本經旣に維摩詰所說といふ。卽維摩出場に至るまでは、畢竟本經の準備弄引の序幕たるに過ぎざればなり。天台は開卷如是我聞より寶積大士讚佛偈を說くに至る之を序分とし、通別の二に分つ、寶積請問より佛國の因果開示已後見阿閦佛品に了る十有二品半是正宗分なり、法供養・囑累の二品流通たる前の如

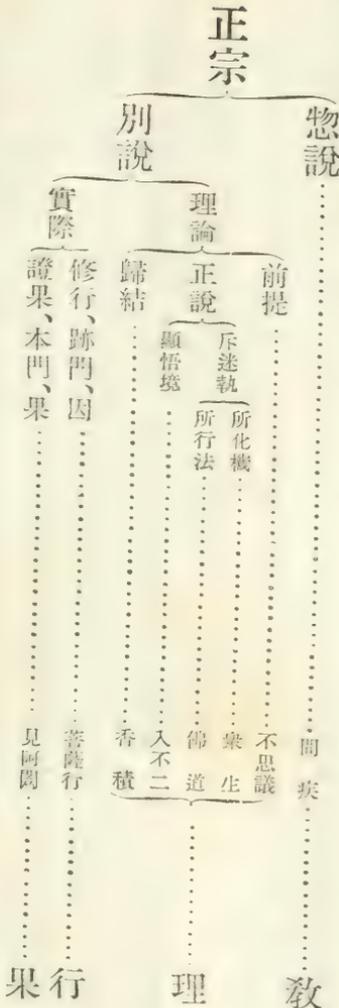
し。慈恩は新經に出りて疏を製し註する所新意に富む。而も科文に至りては簡明なりと雖、稍平凡を免れず。卽ち『初一品說法緣起分。次十一品正陳本宗分。後二品讚授流通分』となしたり。我が上宮聖皇の御疏を製し給ふや、大體嘉祥に依り給へり。是三論家の敎を承け給へるに由る。而も睿智天縱必ずしも、古說に盲從せず、精確明快、古今に超出す。是太子勝鬘の分科が挺然として諸家を拔き、高妙獨り美を擅にすると同轍なり。今謹みて之を圖示して本經の全局を大觀せん。

- 序分（菴羅會）
  - 通序……………………佛國品
  - 別序
    - 原起序……………佛國品
    - 述德序……………方便品
    - 顯德序……………弟子品・菩薩品
- 正宗分
  - 方丈會
    - 化上根……………問疾品・不思議品
    - 化中根……………觀衆生品・佛道品
    - 化下根……………入不二法門品・香積品
  - 菴羅會
    - 維摩來詣…………菩薩行品
    - 維摩正說…………見阿閦佛品
- 流通分（菴羅會）
  - 流通因緣…………見阿閦佛品・法供養品
  - 正勸流通…………囑累品

通序は諸經共通の敍景にして、經首の菩薩羅漢天人等の列名の部分即是也。別序は寶積の奉蓋讃佛よりして佛國因果の說法に了る是維摩を起し來るの伏線にして即所謂原起序なり。述德は經文廣く本經主人公の大德偉行を敍述し、顯德は菩薩大弟子の口を藉りて其難測の妙用・無礙の妙辯大智を讃說す、而も主人公未だ場に上らず、是猶序幕として之を序分に攝する所以也。次の七品半正しく維摩を起し來り、縱橫の大獅子吼不可思議の神變、宇宙の至快至妙を極む、是を正宗分とす。流通分は即第十一品の末尾、佛陀と舍利子との問答より初めて卷を終ふ、文相知り易し。唯太子の疏特に此末尾に著眼したるの精確は古來釋家に嶄然として一頭地を拔く所以とす。

太子の分科謂ふに一毫も加ふるなく一絲も減すべきなし。而も其正宗分につき、蛇足其妙解を莊嚴せば、太子の疏、問疾・不思議二品は、上根の機を化するを示し、衆生・佛道は中根攝化の爲とし、入不二・香積の二品は下根の機を開導すとなす。而も是素より一應の配當、實は品品相承け、章章相應して唯一乘の上機成熟の爲のみ。第五の問疾は事に即して理を起し惣じて本經の大觀を示す、是正宗中の惣論たり。不思議品は事を起して理を談ず。寶座を燈王に借りて不測の神通を顯示す、是惣提なり。この客觀の大用、之を主觀に一言して不思議 Acintya といふ。衆生品は所化の衆生に付きて其空寂を說き大悲の妙用を敎へ、男女相の差別なきを斷ず、正に次の佛道品の邪正別なきを演べて所行の大法を述ぶると照合して迷執を拂ひ、巧妙の相反論理の批判、辛辣の逆說を用ひて、否定遮詮の鋒機を

現す。入不二法門は衆生佛道の二品に說く所の悟境を說き、前の逆語に對する包容融會の綜說として實に本經の主要部分たり。此悟境之を客觀に名づけて不二 Advaita といふ。香積品はこの悟境の自由應用を示したるもの。惣論の寶座を燈王に借るに對して、香飯を香積世界に覓め、受用の不盡を示して方丈會を結び菴羅會を起すの素地となす。結構の絕巧、意義の甚深、鑽りて彌堅く仰ぎて益高し。菩薩行品は卽ち實地跡門の修行を說き、見阿閦佛品は本門證果の德を示したるもの、兩品自ら因果の關係をなす。今試に此私見を圖示せば略左の如し。

正宗
- 惣說……開疾……教
- 別說
  - 理論
    - 前提……不思議
    - 正說
      - 斥迷執
        - 所化機……衆生
        - 所行法……佛道
      - 顯悟境……入不二
    - 歸結……香積
    - （不思議・衆生・佛道・入不二・香積）……理
  - 實際
    - 修行、跡門、因……菩薩行……行
    - 證果、本門、果……見阿閦……果

流通分は本經の廣宣流布の功德を勸說し。慇懃聖懷を累して、之を聖弟子に附囑す。文相甚明なり。特に箋釋を要せじ。

【七、本經內容概說】

一 佛國品　如來毘耶離菴羅樹園に在りて、諸大菩薩大弟子天神等の禮敬を受くる時、毘耶離の長者子寶積其五百の同族と共に佛所に來詣し、各七寶莊嚴の寶蓋を獻ず、佛陀神力を以て此五百の寶蓋を合して一大蓋となし、三千大千界を覆ひ、佛國土淸淨の相を其中に映現せしむ。寶積卽偈を說きて佛陀を讃嘆し、淸淨佛土の因を請問す。佛之に答へて萬善悉く淨土の因なるを敎へ、要結して一心の淸淨卽淨國の因なりと斷ず。曰く『其心淨きに隨ひて卽佛土淨し』と。舍利子時に謂へらく、佛心既に至淨至潔なり、何ぞ此地に荊棘泥土ありて、穢積斯の如くなるやと。佛之を洞鑑して、日月光あるも、盲者は見る能はず、國土純淨なるも、之を見る能はざるは實に衆生罪垢の致す所なりと說破し、遂に螺髻梵王と舍利子との問答となり、丘陵坑坎、荊棘沙礫、悉く凡心の高下差別に由ることを論じ、佛陀が足指を以て地を按じ、此土の本來淸淨を實現し給ふを以て品を閉づ。蓋し是本經一卷の大序にして、歸結阿閦佛品の說相と、首尾照應し、雄大の結構、凡慮の及ぶ所にあらず。

二 方便品　此品に至り、初めて維摩居士の性格道德を敍述し、筆を極めて、其無盡の妙慧、無礙の辯才、無際の盛德を贊し、俗塵市井の間に身を置きて、大乘究竟の大用を具し、轉化自在、適く所として化せざるなく、觸る所悉く春を生ず、夐然として夫の小乘聲聞の徒の、獨善自濟、山居澗飲徒らに高うして、頑石朽株、利物の妙機を缺くと反す。此達人今や病惱を示し、疾苦を現じて、人の

訪ふある毎に、悉く開導攝化して、益を被らざるなし。本品この無上勝方便の力を讚說す、即ち方便品の名ある所以なり。

三　弟子品　佛陀維摩の病蓐にあるを知り、弟子を遣はし之を慰問せしめんとし、先づ之を智慧第一の舍利子に命ず。舍利子嘗て居士の爲に難詰せられたる屈辱を申べて、詣りて病を問ふに堪へざるを訴ふ。佛陀更に之を目連に命ず、亦其屈を受けたる甚しきを白して、之くことを固辭す。斯の如くして迦葉・須菩提・富樓那・迦旃延・阿那律・優波利・羅睺羅・阿難等の十大弟子順次に其往昔の打擊を自白し、恐れて一も往くを肯ずるものなし。

四　菩薩品　佛陀大弟子の往訪に堪ふるものなきを憫れみ、更に之を大乘の菩薩に命じ、先づ佛嗣彌勒に旨を告ぐ、大士彼が若きも其昔時難詰の辱を說きて行くを難しとし、光嚴・持世・善德の諸大菩薩、亦皆其失敗を告白して、問疾の大任に堪へざるを陳述し、一座茫然殆ど爲すなきの狀を敍して品を了る。

五　問疾品　大士文殊師利終に起ちぬ。彼維摩の偉器、甚だ酬對し難きを知るも、聖旨を奉じて往きて疾を訪はんとす。方に是龍虎相搏ち、鯤鵬力を角するの壯觀、滿座の聖賢神仙悉く文殊を圍繞して、摩詰の室に到る。維摩この珍客の至るを知り、洞然その矮小の四方唯一丈の室を空くし、悉く僮僕婢媵を退け單に一臥牀を安きて之に靜臥し、應接一番、不來不去の大問題を提起し、先づ滿座の

心膽を寒からしめ、話頭一轉、病惱の起因と除滅につき、菩薩の病は大慈悲を以て起り、一切衆生病むが故に、大哲隨ひて病むを辯し、病相の空寂虛妄を教へ、疾苦の慰安と調伏とを極論し、痛快徹底を極む。其論ずる所は卽無執無著の大道、般若實相の至理、本經正說の總論として見るべし。

六　不思議品　時に舍利子文殊に隨ひてこの矮小の病室にあり、病牀已外空曠にして一の牀座なきを視て心甚だ滿たず、維摩其意を察知し、之に告げて、法の爲に來るや牀座の爲に來るやを詰り、法の爲に來るもの軀命を惜まず況んや牀座をやと大喝し、顧みて文殊に何處の佛土に上妙の師子座あるやを問ひ、其答に由りて東方須彌燈王如來より高廣八萬四千由旬の寶座三萬二千を借りて、この方丈の室に入る、小室依然として而もこの巨大山嶽の如き多數の師子座を包容して毫も障礙する所なし。方に是不思議解脫の實現、須彌の大山、之を芥子の中に納め、四大海水寸滴を餘さず一毛孔中に注ぎ、綽綽餘裕あり。大乘活殺自在の妙境力用說き來りて餘蘊なし。品末大迦葉の讃嘆を以て已る。

七　觀衆生品　開品直に文殊と維摩の衆生を觀ずるに就きての問答あり。菩薩の衆生を見るや水月鏡像呼響泡沫の如し、而も此幻虛の上に寂滅無諍無邊平等の大慈悲を起して饒益濟度常に止む時なく、無住の大本に立ちて一切衆生を度するを說く、此妙理開闡の際、至難の理路窮まる所、忽ちにして、窈窕の一天女を現じ來り、娉婷羅綾を飜して妙華を大衆の上に散ず。夫何等の情趣ぞや。この華菩薩の身に著かずして、却て之を不如法と執する聲聞弟子の衣上に著く。舍利子之を去らんとするも能

はず、天女茲に於てか嫣然として分別差別の結習是不如法なりと喝破し、嬌音滔滔として一切諸法は是解脱の相、婬欲瞋怒愚痴直に解脱なるを論じ、大乘の妙理、男女を別たざるを痛言し、其實證を示して品を結ぶ。

八　佛道品　非道即是道、非道を行じて佛道に通達するを說く。通品辛辣の言、警拔の語、峻峰の劍を植ゑて攢立するが如く、前品の婬怒痴是解脱なる所以を詳說し、一切の煩惱皆佛種なるを論じ、人をして身毛竪立するの思あらしむ。時に會中普現色身と名くる菩薩あり、維摩に對し、父母妻子等の眷屬・奴婢僮僕象馬車乘等何れにあるやを問ふ。維摩即ち偈頌を以て般若是母にして方便是父、法喜は妻にして慈悲は是女、誠實即ち男、空寂直ちに舍宅、乃至大乘は車にして解脱法は飮食なるを明かにし、其攝化無礙の大用を提示す。頌文瑰麗、眞に方等聖經中の魁たるに恥ぢず。

九　入不二法門品　理を談じ、妙を語る、益佳境に入れり。維摩衆菩薩に謂つて、各樂む所に隨ひ、不二法門に入るを說かんことを請ふ。法自在等の三十一菩薩各其見る所に隨ひて生滅垢淨罪福等の不二を說き來る。而も是不二の一面にして全體にあらず、即ち各自ら其說く所に安せずして却つて文殊に質す。文殊曰く『一切の法に於て言もなく說もなく示もなく識もなく、諸の問答を離る』是也と斷ず。此至道言詮を超越する所。最後に維摩は、實を以て證し、默然として言なし、この一默大千に震ひ、盡天盡地大獅子吼の雷轟を聞かざるなし。本經は茲に至りて最高調に達す。最後に文殊の讚

說を以て此品を終ふ。曰く、善哉、善哉、乃至文字語言あることなし、是眞に不二法門に入ると。

十　香積品　本經の敎說至高處に達し、午時方に至る。舍利子念へらく、大衆何をか食せんと。維摩其意を知り、大神變を現し、香飯を衆香國に取り、大衆をして如來甘露味の食を受用せしめ。身心の大安樂を與ふ。次で來會の衆香國菩薩と維摩との問答あり。穢土と淨土との修行の差別を說き品已る。此品維摩方丈內の說法の最後に位し、不二法門の實修を敎へて前を結び、次の菴羅園に於ける說法を起し來る。卽ち室內と室外の關鎖連絡にして釋家の所謂結前生後なり。

十一　菩薩行品　菴羅園說法の大會忽然として金色の瑞祥を呈し、文殊大士維摩居士を伴ひて佛處に詣す。阿難衆香國菩薩の身香に感じて問を起すより佛陀の說法となり、香飯佛事をなすより初めて、諸佛一切の威儀進止諸の施爲する所、皆佛事にあらざるなきを敎へ、一切諸佛の法門と盡無盡無閡の法門に就き廣く菩薩の因行を明かす。

十二　見阿閦佛品　如來と維摩との佛身に就きての問答に起り、如來の身に一切超越の眞身なるを述ぶ。舍利子次で維摩に對し、その何れより沒して此に生ぜるやを問ひ、居士の一棒を喫す。佛陀卽ち居士は阿閦の淨土妙喜國の本地より跡を此地に垂れたるを明かにし、維摩をして神力を以て妙喜國土を大衆の前に現ぜしむ。是卽ち維摩本地の淨果を顯はしたるもの。大序の佛國品と照應して一經正宗の總結たり。

十三　法供養品　前品末尾の本經受持の勝益を說きたるに續き、天帝釋に對し本經受持讀誦供養の大利を擧げ、藥王如來と月蓋王の舊緣を提起し來り、本經の了解は實に最上の法供養なるを勸說す。

十四　囑累品　佛陀彌勒に告げて慇懃に本經の廣宣流布を附囑し、更に阿難に命じて其受持流傳に當らしむ。佛勅の至重、佛意の至深實に見るべし。

譯者　渡邊海旭　識

國譯維摩詰所說經

卷の第一

（一）佛國品第一

（二）是の如く我れ聞く、一時、佛（三）毘耶離の菴羅樹園に在して、大比丘衆八千人と倶なりき。菩薩（四）三萬二千有り。（五）（一）衆に知識せられたり。（二）衆に知識せられて、大智本行皆悉く成就せり。（三）諸佛威神の建立する所なり。（四）法城を護らんが爲に、正法を受持し、（五）能く師子吼して（六）名十方に聞ゆ。（七）衆人請はざれども友として之を安じ、（八）三寶を紹隆して能く絕えざらしめ、（九）魔怨を降伏し諸の外道を制す。（十）悉く已に清

【一】佛國品とは寶積長者の奉獻せし蓋に因んで、十方諸佛の淨土及び廣く菩薩淨土の行を明す、故に名づく。

【二】諸經の起首の定例語。我聞とは阿難傳持し、傳聞の謬りなきを明にす。

【三】毘耶離（Vaiśālī）（廣嚴城、舊譯に新稱毘舍離といふ）現時の下ベンガル州（Gandak 河東岸）の都市なり、古代菴菓の美を以て名あり、菴羅樹園（Amra-Pālivana）は Mango 果園、舊女奉獻の林の意、西域記第七を見よ。

【四】觀無量壽、說無垢稱經等三萬二千の菩薩を擧ぐる大乘經典少からず。摩訶衍また此數を以て標する經あり。

【五】已下菩薩の德を讃する三十九句あり。支謙は之を三段に分ち、一より九までを嘆實德、十より三十三までを嘆實名、三十四より三十九までを總結となす、大體左の如し。

淨にして永く(六)蓋纏を離れ、(十一)心常に無礙解脫に安住して、(十二)(七)念・定・總持・辯才斷えず、(十三)(八)布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧・及び方便力具足せざる無く、(十四)(九)無所得不起法忍に逮べり。(十五)(一〇)已に能く隨順して、不退の輪を轉じ、(十六)(一一)善く法相を解し、衆生の根を知り、(十七)諸の大衆を蓋うて無所畏を得たり。(十八)功德・智慧以て其の心を修め、(一二)相好身を嚴りて色像第一なり。(十九)諸の世間の所有の飾好を捨つ。(二十)名聲の高遠なること須彌に踰え、(二十一)深信の堅固なること猶し金剛のごとし。(二十二)法寶普く照して甘露を雨らし、(二十三)衆の言音に於て、微妙第一なり。(二十四)(一三)深く緣起に入りて、諸の邪見を斷じ、有無の二邊復た餘習無し。(二十五)法を演ぶるに畏無きこと師子吼の猶く、(二十六)其の

一 自利德 一―四
　 利他德 五―九
二 自利德 十―十四
　 利他德 十五―二十八
三 自利 二十九―三十五
　 利他 三十六―三十八
　 總結 三十九

【六】五蓋(Nīvaraṇa)と十纏(Paryavanaddha)即ち貪・瞋・睡眠・掉舉・疑の五と、瞋・覆・睡・眠・戲・掉・無慚・無愧・慳・嫉の十にて、總じて煩惱を指す。

【七】念(Smṛti)・定(Samādhi)・總持(Dhāraṇī)・辯才(Pratibhāna)。第一は正念にして、第二は三昧の力、第三は法義包持の能力なり。

【八】十度(Pāramitā)の中、七を舉げて、願・力・智を攝す。

【九】無所得不起法忍は、位と名なり。眞理は本と能得所得の別無きが故に無所得と云ふ。忍とは慧なり、能く無生の理に安ずる故に忍と云ひ、有無の二邊に動ぜざる故に不退と云ふ。亦之を無生忍といふ。

【一〇】衆生の機に順ひて說法不退なり。

【一一】能く諸法の實義に通じ、久之を傳ふべき衆生の機根を見ること分明なり。

【一二】内德具し、外形自ら備はる、三十二相八十種好の生ずる偶然ならず。

【一三】佛教の理、唯緣起の法のみ、能く緣起の理を知るとき、正見生じ、邪見悉く盡く。邪見は有Sat (To be)、無Asat (Not to be) の二邊に偏執するもの即、常見 (Realism) と斷見 (Nihilism) となり。

【一四】海導師とは、船長諸の商人を將ゐて大海に入り、善く寶を採る方法を教へて多くの

講說する所乃ち雷の震ふが如し。(二十七)量有ること無く、已に量を過ぎたり。(二十八)衆の法寶を集むること(一四)海導師の如し、(二十九)諸法深妙の義に了達して、(三十)(一五)善く衆生往來の所趣、及び心の所行を知り、(三十一)(一六)無等等の佛自在慧、(一七)十力無畏、十八不共に近し。(三十二)(一八)一切諸惡趣の門を關閉すれども、而も五道に生じて以て其の身を現じ、(三十三)大醫王と爲りて善く衆病を療じ、(三十四)病に應じて藥を與へて服行することを得せしむ。(三十五)無量の功德皆成就し、(三十六)(一九)無量の佛土皆嚴淨す。(三十七)其の見聞する者にして益を蒙らざる無く、(三十八)諸有所作亦唐捐ならず。(三十九)是の如く一切の功德皆悉く具足せり。」(二〇)其の名を(一)等觀菩薩・(二)不等觀菩薩・(三)等不等觀菩薩・(四)定自在王菩薩・(五)法自在王菩

利を得せしむるを云ふ。

【一五】衆生生死流轉の有様(結果)と其精神の善惡(原因)。

【一六】無等等とは佛道は無上にして等しきもの無く、而も佛佛相等しきが故に云ふ。

【一七】十力とは是處非處力・業報力・定力・根力・欲力・性力・至處道力・宿命力・天眼力・漏盡力にして諸佛所得の實智の力用なり。無畏とは之に一切智無所畏・漏盡無所畏・說障道無所畏・說盡苦道無所畏の四ありて佛の具し給ふ德なり。十八不共法は無有誤失・無卒暴言・無念失念・無不定心・無種種想・無不擇捨・志欲無退・念無退・慧無退・解脫無減・一切身業隨智首轉・一切語業隨智首轉・一切意業隨智首轉・知過去無礙・知未來無礙・知現在無礙の十八種の、佛にあらざれば具する能はざる勝法。

【一八】塵に同じて塵に著せず、大丈夫の爲す所。

【一九】菩薩の修行、畢竟佛國の莊嚴を目的とす、本品を精讀せよ。

【二〇】其名已下は會座に列して聞法せし菩薩を列名す、實には三萬二千人なれども今は且く五十二の菩薩を擧ぐ。此中普通大乘經典に出づる菩薩少からず。

1. Samekṣa.（サメークシャ）
2. Asamekṣa.（アサメークシャ）
3. Samāsamekṣa.（サマーサメークシャ）
4. Samādhīśvararāja.（サマデイーシユワララージヤ）
5. Dharmeśvararāja.（ダルメーシユワララージヤ）
6. Dharmaketu.（ダルマケーツ） (法幢—新譯)
7. Prabhaketu.（プラバケーツ） (光幢—舊譯)
8. Prabhavyūha.（プラバギユーハ）
9. Mahāvyūha.（マハーギユーハ）
10. Ratnakūṭa.（ラトナクータ）
11. Pratibhānakūṭa.（プラテイバーナクータ）

薩・(六)法相菩薩・(七)光相菩薩・(八)光嚴菩薩・(九)大嚴
菩薩・(十)寶積菩薩・(十一)辯積菩薩・(十二)寶手菩薩・
(十三)寶印手菩薩・(十四)常擧手菩薩・(十五)常下手菩薩・
(十六)常慘菩薩・(十七)喜根菩薩・(十八)喜王菩薩・(十九)辯
音菩薩・(二十)虛空藏菩薩・(二十一)執寶炬菩薩・(二十二)寶
勇菩薩・(二十三)寶見菩薩・(二十四)帝網菩薩・(二十五)明網
菩薩・(二十六)無緣觀菩薩・(二十七)慧積菩薩・(二十八)寶勝
菩薩・(二十九)天王菩薩・(三十)壞魔菩薩・(三十一)電德菩
薩・(三十二)自在王菩薩・(三十三)功德相嚴菩薩・(三十四)師
子吼菩薩・(三十五)雷音菩薩・(三十六)山相擊音菩薩・
(三十七)香象菩薩・(三十八)白香象菩薩・(三十九)常精進菩
薩・(四十)不休息菩薩・(四十一)妙生菩薩・(四十二)華嚴菩
薩・(四十三)觀世音菩薩・(四十四)得大勢菩薩・(四十五)梵網
菩薩・(四十六)寶杖菩薩・(四十七)無勝菩薩・(四十八)嚴土菩
薩・(四十九)金髻菩薩・(五十)珠髻菩薩・(五十一)彌勒菩薩・

---

12. Ratnapāṇi.
13. Ratnamudrahasta.
14. Nityotkṣiptahasta.
15. Nityāvakṣiptahasta.
16. 般若の常啼 Sadāpraru-dita なり。
17. Muditendriya.
18. Muditarāja.
19. Pratibhānaghoṣa.
20. Ākāśagarbha.
21. Ratnolkapāṇi.
22. Ratnaśūra.
23. Ratnadarśana.
24. Indrajāla.
25. Jālinīprabha.
26. Anīraṇadhyāna. (無障靜慮 新譯)
27. Jñānagarbha.
28. Ratnaśaikhara.(新譯寶峰)
29. Devendra.
30. Mārapramardana.
31. Vidyudguṇa.
32. Īśvarendra.
33. Guṇaketuvyūha.
34. Siṃhanādanādi.
35. Galjitaghoṣa.
36. Sumeruketusvara.
37. Gandhahasti.
38. Sretagandhahasti.
39. Nityaprayakta.
40. Anikṣiptadhura.
41. Susaṃbhava.
42. Puṣpavyūha.
43. Avalokiteśvara.
44. Mahāsthānaprāpta.
45. Brahmajāla.
46. Ratnadanta.
47. Aparājita.
48. Kṣetravyūha.
49. Suvarṇacūḍa.
50. M ṇicūḍa.
51. Maitreya.

(五十二)文殊師利法王子菩薩と曰ふ、是の如き等の三萬二千人なり。

(二一)復た萬の梵天王・(二二)尸棄等有り。餘の四天下より佛の所に來詣して法を聽く。復た萬二千の(二三)天帝有り、亦餘の四天下より來りて會座に在り。幷に餘の大威力の諸天・龍神・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等、悉く會座に來りぬ。(二四)諸の比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷倶に會座に來りぬ。

彼の時に佛無量百千の衆の與めに恭敬し圍繞せられて、爲めに法を說きたまふ。譬へば須彌山王の大海に顯るゝが如し。衆寶師子の座に安處して、(二五)一切諸衆の大衆を蔽ひたまへり。

爾の時、毘耶離城に長者子あり、名けて(二六)寶積と曰ふ。五百の長者子と倶に、(二七)七寶の蓋を

---

52. Mañjuśrī-kumārabhūta.

【二一】梵天王已下は色界梵王、欲界の帝釋、八部衆及人衆の凡夫衆を列す。

【二二】尸棄(Śikhi)とは色界梵王の名にして頂髻と翻す。

【二三】天帝(Devendra)は須彌の頂、六欲天の第二天忉利天(三十三天)の主なり。

夜叉(Yakṣa)は秦に輕健と言ひ、飛で虛空に在るものと、地に在る者と、天に在りて諸天の守門たる者との三種あり。

乾闥婆(Gandharva)は諸天の樂神なり。

阿修羅(Asura)は無酒神と言ひ、男醜女美の威を有す。

迦樓羅(Garuḍa)は金翅鳥神なり。

緊那羅(Kiṃnara)は諸天の樂神、乾闥婆に比して劣る。人に似て頭上に一角あり。

摩睺羅伽(Mahoraga)に地龍にして脚無く腹行す。

【二四】比丘比丘尼とは出家の男女を云ふ。優婆塞優婆夷とは在家にして持戒せる者の男女を云ふ。

【二五】大空の一切を覆蔽する如く、威神の極、稱すべからず。

【二六】寶積(Ratnākara)は維摩詰と同じく法身の大士にして常に法城を護るの親友たり、然るに寶積獨り來るは後段維摩疾あるの伏線なり。構造の妙、眼を著けよ。

【二七】金・銀・瑠璃・玻璃・硨磲・赤珠・碼碯の寶蓋(Chattra)。

【二八】蓋甚大ならずして大千世界、中に現ず、維摩一經の精要、早く既に其端緒を露出し來る。

【二九】須彌山(Sumeru)、目眞隣陀山(Mucilinda)、摩訶目眞隣陀山(Mahāmucilinda)、香山(Gandhamādana)等、須彌を

持して佛所に來詣して、頭面に足を禮し、各其の蓋を以て佛に供養したてまつる。(二八)佛の威神、諸の寶蓋をして合して一蓋と成さしめ、遍く三千大千世界を覆ひ、而も此の世界の廣長の相悉く中に現ず。又此の三千大千世界の諸の(二九)須彌山・雪山・目眞隣陀山・摩訶目眞隣陀山・香山・寶山・金山・黑山・鐵圍山・大鐵圍山・大海・江河・川流・泉源及び日・月・星辰・天宮・龍宮・諸尊神宮悉く寶蓋の中に現ず。又十方の諸佛も諸佛の說法も、亦寶蓋の中に現ず。爾の時に一切の大衆、佛の神力を覩たてまつりて、未曾有なりと歎じ、掌を合せて佛を禮し、尊顏を瞻仰して、目暫くも捨てず。

(三〇)長者子寶積、卽ち佛前に於て、偈を以て頌して曰く、

『(一)目は淨く修廣にして(三一)青蓮の如く、心淨くして已に諸の禪定を度り、久しく淨業を積で(三二)稱無量なり、衆を導くに寂を以てす。故に稽首したてまつる。

(二)既に大聖の神變を以て、普く十方無量の土を現ずるを見たてまつる。其の中の諸佛・法を演說したまふを、是に於て一切悉く見聞す。

(三)(三三)法王の法力群生に超え、常に法財を以て一切に施し、能善く諸の

中心として世界中央に聳立せる諸大山の名にして Mahācakravāḍa (大鐵圍山) を最外側とす。

【三〇】 長者子寶積蓋中所見の淨土を見て頌を以て其因果の義を請問す、通計十八頌あり。初め佛の三業を嘆じ、次に合蓋因現の淨土を嘆じ、次に佛に法王の德有ることを嘆じ、後に佛化始終の德を嘆ず。

【三一】 青蓮華 (Utpala) は其華の修長にして廣く、青白分明なり。

【三二】 稱は名稱の義。其名稱十方に超ゆと雖、衆を導く唯一寂あるのみ、一寂とは大空の法なり。

【三三】 法王 (Dharmarāja) とは萬法に於て能く自在を得たるに名く。世王の力を以て民に臨み威一國に及ぶが如く、法王は法力を以て衆に超ゆ，王

法相を分別して、(二四)第一義に於て動かず。

(四)已に諸法に於て自在を得たまへり、是の故に此法王を稽首したてまつる。(二五)法は有ならず亦無ならず、因縁を以ての故に諸法生ずと說きたまふ。

(五)我無く造無く受者も無く、善惡の業亦亡せず。始め(二六)佛樹に在して力魔を降し、甘露の滅を得て覺道を成じたまへり。

(六)已に心意無く受行無し、而も悉く諸の外道を摧伏し。(二七)三たび法輪を大千に轉じ、其の輪本來常に淸淨なり

(七)(二八)天人道を得るに此を證と爲し、三寶是に於て世間に現ず。斯の妙法を以て群生を濟ひ、一たび受けて退せず常に寂然たり。

(八)老・病・死を度する大醫王、當に法海の德の無邊なるを禮したてまつるべし。毀譽に動ぜざること須彌の如く、善と不善とに於て等しく慈を以てす。

(九)心行平等なること虛空の如し、孰れか(二九)人寶を聞きて敬承せざらん。今世尊に此の微蓋を奉りしに、中に於て我が三千界を現ず。

は財を以て民を惠恤し、佛は法財を以て衆生を濟ふ。

【二四】第一義(Paramārtha)。眞諦・究竟の理。

【二五】法は有ならず云云とは、法は畢竟卽空なるが故に有ならず。有既に有に非ざれば無何ぞ無とする所あらん、故に無ならず。有無定相無き故に因縁に依て諸法生ずるなり。因縁生の故に主宰(我)するもの無し、而も善惡の業一毫も變ずる所なく、眞諦は空なるも俗諦は自ら昭明たり、平等と差別說き來りて痛快。

【二六】佛樹は菩提樹を指す。甘露滅は涅槃を云ふ。

【二七】三たび法輪を大千に轉ずとは成道後十二年の說法にして四諦の敎なり、三轉とは、一には是、二には敎、三には利なり。

【二八】證とは阿若等五人の比丘

(十)諸天と龍神と居る所の宮、乾闥婆等及び夜叉、悉く世間の諸の所有を見たり。〔四〇〕十力哀れんで是の化變を現じたまへり。

(十一)衆は希有なるを視て皆佛を歎じたてまつる。今われ〔四一〕三界の尊に稽首す。大聖法王は衆の歸する所、淨心に佛を觀たてまつりて欣ばざる靡し。

(十二)各世尊の其の前に在すを見る、斯れ則ち神力〔四二〕不共の法なり。

〔四三〕佛一音を以て法を演說したまふに、衆生類に隨て各解することを得、

(十三)皆謂く世尊其の語を同じくすと、斯れ則ち神力不共の法なり。佛一音を以て法を演說したまふに、衆生各各解する所に隨ふ。

(十四)普く受行することを得て其の利を獲、斯れ則ち神力不共の法なり。佛一音を以て法を演說したまふに、或は恐畏する有り或は歡喜するあり。

(十五)或は厭離を生じ或は疑を斷ず。斯れ則ち神力不共の法なり。十力の大精進を稽首したてまつる。已に無所畏を得たまへることを稽首し

は羅漢果を得、八方の諸天は須陀洹道を得たる事を云ふ。佛陀の說法ありて、得度解脫の聖弟子あり、佛法僧の三寶具足す。

【三九】人寶。人中の至寶。古に曰く唯善以て寶とすと、至善の妙法は人中の至寶なり。

【四〇】十力とは十力尊の略語、佛陀を指す。十力佛の具し給ふ所の實智力。註【一七】を見よ。

【四一】欲・色・無色の三界中佛陀最尊なり。

【四二】不共とは佛のみ得たまふ所にして聲聞緣覺の二乘と共にせざること。之に十八事あり。註【一七】を見よ。

【四三】此句は古來釋家の屢引用する有名の句なり、佛陀は唯一種の言語を以て法を說くも聞く所の衆生は根に隨ひて、解する所各別なり。

【四四】結(Samyojana サムヨージヤナ)縛(Ban- バン

たてまつる。
(十七)不共の法に住したまへることを稽首し、一切の大導師なることを稽首し、能く衆の(四四)結縛を斷じたまへることを稽首し、已に彼岸に到りたまへることを稽首したてまつる。
(十八)能く諸の世間を度したまへることを稽首し、永く生死の道を離れたまふことを稽首したてまつる。悉く衆生來去の相を知り、善く諸法に於て解脱を得たまへり。
(十九)(四五)世間に著せざること蓮華の如く、常に能く空寂の行に入る、諸の法相に達して罣礙無し、空の如く所依なきことを稽首し奉つる。』
爾の時に長者子寶積、此の偈を説き已りて佛に白して言さく、『世尊是の五百の長者子、皆已に(四六)阿耨多羅三藐三菩提心を發し、佛國土の清淨なるを得ることを聞かんことを願ふ。唯願くは世尊、諸の菩薩の淨土の行を説きたまへ。』
佛の言はく、(四七)『善哉寶積、乃ち能く諸の菩薩の爲に如來の淨土の行を問ふことや。諦に聽け、諦に聽け、善く之を思念せよ、當に汝が爲に説く

dha)は衆生を結び縛りて生死の牢獄を出でざらしむるもの即煩惱結業を云ふ。五結十纏等の名目廣く藏經に出づ。
【四五】處世如蓮は清淨なるを譬へて用ふる譬喩。無罣礙如空は般若の妙用を云ふ。
【四六】阿耨多羅三藐三菩提(アヌッタラサムミャクサンボーディ anuttarasamyaksambodhi)とは、阿耨多羅は無上と譯し、三藐三菩提は正徧知或は等正覺と譯す。五百長者既に寶蓋中に淨土を見て、其清淨を致すの行を聞かんと願ふ。次段の答辯、奇正交錯、妙極りなし。
【四七】此段淨土の修因行法を明す。
【四八】所化の衆生を以て直に淨土とす、菩薩の行、唯利他の大仁あるのみなるを以て也。[illegible]

べし。』

是に於て寶積、五百の長者子と教を受けて聽く。

(四八)佛の言はく、『寶積、衆生の類、是れ菩薩の佛土なり。所以何んとなれば、菩薩(四九)所化の衆生に隨ひて佛土を取り、調伏する所の衆生に隨ひて佛土を取る。(五〇)諸の衆生の何の國を以て佛智慧に入るべきかに隨ひて佛土を取り、諸の衆生の何の國を以て菩薩の根を起すべきかに隨ひて、佛土を取る。所以何んとなれば、(五一)菩薩の淨國を取ることは皆諸の衆生を饒益せんが爲の故なり。譬へば人有て空地に宮室を造立せんと欲するに、意に隨て無礙なるも、もし虛空に於てすれば終に成ずること能はざるが如し。菩薩も是の如く衆生を成就せんが爲の故に、佛國を取んと願ふ、佛國を取んと願ふことは空に非ざるなり。

(五二)寶積當に知るべし。(五三)直心は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、不諂の衆生來りて其の國に生ず。(五五)深心は是れ菩薩の淨土なり、菩薩(五四)成佛の時、功德を具足する衆生來りて其の國に生ず。(五六)菩提心は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、大乘の衆生來りて其の國に生ず。(五七)布施は是

大乘の至致、深く味ふべし。華嚴に曰く、菩薩、衆生をして、んば、無上菩提を成ぜしむるを得ずと、蓋此意なり。

【四九】所化は寶積、諸善い衆生、調伏は剛強難化の類をいふ。

【五〇】何れの國土にても、佛智慧に入り、菩薩大乘の機根を起す、國土即淨土なり。

【五一】說法の眼目茲にあり、利他の行なき所佛果あるなし、饒益衆生の大功なき所淨土あるなし。

【五二】已下三心九行を擧げて淨土の行因を明し、之に萬善を攝す。三心は直心・深心・大乘心なり。九行は後註を見よ。

【五三】直心は是れ菩薩の淨土とは、菩薩因位に在りて、自ら無相平等の直心を修し、衆生に敎へて直心を修せしむ、而して菩薩の無相の直心は佛果を感じ、衆生の有相差別の直

れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、(五八)一切能捨の衆生來りて其の國に生ず。(五九)持戒は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、十善道を行ずる滿願の衆生來りて其の國に生ず。(六〇)忍辱は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、三十二相莊嚴の衆生來りて其の國に生ず。精進は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、一切の功德を勤修する衆生來りて其の國に生ず。禪定は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、心を攝めて亂れざるの衆生來りて其の國に生ず。智慧は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、(六一)正定の衆生來りて其の國に生ず。(六二)四無量心は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、慈・悲・喜・捨を成就する衆生來りて其の國に生ず。(六三)四攝法は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、解脫所攝の衆生來

心は自ら淨土を感ず。然れば衆生の直心は正因、菩薩の直心は違緣なれども、今は緣を以て因と爲して明す、故に直心は是れ菩薩の淨土と云ふ。已下の十六事之に例して知るべきのみ。

【五四】不諂とは直心の異名なり。

【五五】第二深心。

【五六】第三大乘心。

【五七】已下九行の中第一六度卽布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧、順次經文を見よ。

【五八】一切能捨とは、外は國財身命を捨て、內は貪愛憎嫉を捨つるを云ふ。

【五九】持戒、戒は無量なれども、今は菩薩戒の十善戒のみを略して擧ぐ、之を具持せば願として成ぜざる無き故に滿願と云ふ。

【六〇】忍辱は修寨なり、故に諸相を具定す。三十二相は微妙の身相として三十二の德相を說けるもの、或は三十二大人相といふ。

【六一】正智慧を得るには禪定を先とす、故に正定の衆生來生すと說く。

【六二】九行の中第二四無量心。慈・悲・喜・捨の四心周く修して際無し、故に四無量心と云ふ。

【六三】九行の第三、四攝法卽衆生を攝する四法。一には財法施、彼の須つ所に隨ふ、二には愛心を以て和言し彼の適する所に隨ふ、三には利行、彼の適する所に隨て方便を以て之を利す、四には同事、惡に遭うては惡に同じて而も其の惡を斷じ、善に遭ては善に同じ其の善を進む、是なり。今は自ら攝を行じて他の攝を免るることを得たる故に解脫所攝

りて其の國に生ず。(六四)方便は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、一切の法に於て方便無閡なる衆生來りて其の國に生ず。(六五)三十七道品は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、念處・正勤・神足・根・力・覺・道の衆生來りて其の國に生ず。(六六)廻向心は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、一切功德を具足する國土を得。(六七)八難を除くことを說く、是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、國土に三惡八難有ること無し。(六八)自ら戒行を守りて彼の闕を譏らざる、是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、國土に犯禁の名あること無し。(六九)十善は是れ菩薩の淨土なり、菩薩成佛の時、命中夭せず、大富・梵行、言ふ所誠諦にして、常に軟語を以てし、眷屬離れず、善く諍訟を和し、言は必ず饒益し、嫉まず恚らざる、正見の衆生、來りて其の國に生ず。(七〇)是の如く寶積、菩薩、其の直心に隨ふときは、則ち能く行を發し、其の發行に隨ひて則ち深心を得、其の深心に隨ひて則ち(七一)意調伏し、其の調伏に隨ひて則ち說の如く行じ、如說の行に隨ひて則ち能く廻向し、其の廻向に隨ひて則ち方便あり、其の方便に隨ひて則ち衆生を成就し、成就衆生に隨ひて、則ち佛土淨し、(七二)佛土の淨きに隨ひて則ち說法淨し、說法の

と云ふ。

【六四】九行の第四、四方便。

【六五】九行の第五、四念處・四正勤・四禪定・五根・五力・七菩提・八聖道分。之を三十七菩提分法或は三十七道品といふ。茲に擧ぐる所の如し、覺は七菩提分、道は八聖道分の略。即左の如し。

四念處（不淨・苦・無常・無我）四正勤（未生惡令不生・已生惡令滅・未生善令生・已生善令長）四禪定（欲・念・進・慧）五根五力（信・進・念・定・慧）七覺支（念・擇・進・喜・輕安・定・捨）八正道（正見・正思・正語・正業・正精進・正定・正念・正命）是なり。

【六六】九行の第六。

【六七】九行の第七、除八難。八難とは三途と北倶單越と長壽天との五の地難と、世智辨聰の

淨きに隨ひて則ち智慧淨し、智慧の淨きに隨ひて則ち其の心淨し。其の心の淨きに隨ひて則ち一切の功德淨し。是の故に寶積、若し菩薩、淨土を得んと欲せば當に其の心を淨くすべし、（七三）其の心の淨きに隨ひて、則ち佛土淨し。』

（七四）爾の時に舍利弗、佛の威神を承けて是の念を作さく、「もし菩薩心淨ければ則ち佛土淨しと云はゞ、我が世尊、本菩薩たりし時、意豈に淨からずして、而して是の佛土の不淨なること此の若くなるや。」と。

佛其の念を知り、卽ち之に告て言はく、『意に於て云何ん。日月豈に不淨にして、而して盲者は見ざるや。』對へて曰さく、『不なり。世尊是れ盲者の過にして、日月の咎に非ず。』と。『舍利弗、衆生の罪の故に、如來の國土の嚴淨なることを見ず、如來の咎に非ず。舍利弗、我が此の土は淨けれども、汝は見ざるなり。』

爾の時に（七五）螺髻梵王、舍利弗に語るらく、『是の念を作して、此の佛土を謂て以て不淨と爲すこと

心難と、佛前後の時難と、聾盲瘖瘂の形難と是なり、三途とは、地獄と餓鬼と畜生となり。

【六八】九行の第八。

【六九】九行の第九、十善。不中夭は不殺の報、大富は不偸盜、梵行は不邪婬、誠諦は不妄語、軟語は不綺語、眷屬離れざるは不惡口、諍訟を和するは不兩舌、不嫉は不貪、不恚は不瞋恚、正見は不邪見の報なり。

【七〇】是の如く、已下は諸行相資けて共に成ずることを明す。

【七一】意調伏すとは、道心既に淨きが故に意能く惡を棄て善に隨ふを云ふ。

【七二】此れ行は心に因て成る、心は萬德の本なり、心既に淨ければ所行の行、所生の功德淨し、始め直心より終り佛土淨に至て一貫す。

【七三】此の句本品全體の主眼なり、一結甚だ緊嚴、獅子吼大千に震ふ。

【七四】爾の時已下隨其心淨則佛土淨の疑難を釋す。初に舍利弗疑念の相を叙し、後に正しく疑を釋す。

【七五】Śaṅkhacūḍa.（シャンカチユーダ）

勿れ。所以は何ん。我れ釋迦牟尼佛の土の清淨なることを見ること、譬へば（七六）自在天宮の如し。』舍利弗の言く、『われ此の土を見るに、丘陵・坑坎・荊棘・砂礫・土石・諸山・穢惡充滿せり』と。螺髻梵王の言く、（七七）『仁者心に高下有りて佛慧に依らざるが故に、此の土を見て不淨と爲すのみ。』舍利弗、菩薩は一切衆生に於て悉く皆平等にして深心清淨なり。佛の智慧に依れば、則ち能く此の佛土の清淨なることを見る。』

（七八）是に於て佛、足の指を以て地を按したまふに、即時に三千大千世界、若干百千の珍寶をもて嚴飾すること。譬へば寶莊嚴佛の無量功德寶莊嚴土の如し。一切の大衆、未曾有なりと歎ず。（七九）而も皆自ら寶蓮華に坐することを見る。

佛舍利弗に告たまはく、『汝且く是の佛土の嚴淨なることを觀よ』と。舍利弗言さく、『唯然り、世尊、もと見ざる所、もと聞かざる所なり。今、佛國土の嚴淨悉く現ず。』佛舍利弗に告たまはく、『わが佛國土（八〇）常に淨きこと此の若し。斯の下劣の人を度せんと欲するが爲の故に、是の衆惡不淨の土を示すのみ。譬へば諸天の寶器を共にして食するも、其の福德に隨ひて飯の色に異有るが如し。

【七六】自在天宮（Parinirmita）。欲界最高の天にして、慾情の盡くし得る限りの嚴淨を極めし宮殿。

【七七】心の高下差別は世界の凸凹好醜を見る、無差別平等の達觀者にありては到る處春風常に吹く。

【七八】先に長者子に對して蓋中且く淨土の相を映出し、今舍利子に向ひて直に佛心所現の寶土を現ず。先には因を明かさんが爲に映出し、今は果を明かにせんが爲に現示す。

【七九】箇箇皆當來佛たるを知らずや。人人終始寶蓮華に坐せり、唯知らざるは箇の大乘心なきが爲のみ。

【八〇】法華常住を說き、今常淨を說く、彼は法身の本體、此は其大用、心を注いで見よ。

是の如く舍利弗、もし人心淨ければ、便ち此の土の功德莊嚴を見る。』

佛此の國土の嚴淨を現じたまふ時に當りて、寶積の將ゐる所の五百の長者子、(八一)皆無生法忍を得、八萬四千の人、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發す。佛神足を攝めたまふ。是に於て世界還た復た故の如し。(八二)聲聞乘を求むる三萬二千の諸天及び人、(八三)有爲法は皆悉く無常なりと知り、塵を遠ざかり垢を離れ、(八四)法眼淨を得、八千の比丘諸法を受けず(八五)漏盡きて意解しき。

【八一】無生法忍とは初地以上の菩薩の位を云ふ。無生とは無生無滅常住不變の義にして眞如の理を指す。忍は認知の義にして智慧なり。

【八二】聲聞乘とは佛教を聞きて眞諦の理を悟り解脫するに名づく。羅漢の聖果を求むるをいふ。

【八三】有爲法は無爲法と對し、因緣和合の顯象の諸法をいふ。

【八四】法眼淨とは聲聞四果の中初果を得ることなり。

【八五】漏盡きて意解すとは羅漢果を得たるなり。大乘の妙理を說き妙境を示し、然も聲聞の小乘を果とせず、前の衆生隨類各得解の聖頌(十二)茲に至りてか味長し。

卷の第二

（一）方便品第二

爾の時に、毗耶離大城の中に長者有り、維摩詰と名づく、（二）已に曾て無量の諸佛を供養して深く善本を植ゑ、無生忍を得て、辯才無礙なり。神通に遊戲して諸の（三）總持に逮び、（四）無所畏を獲て魔の勞怨を降し、深法門に入り、智度に善くして方便に通達す。（五）大願成就して、衆生の心の所趣を明了にし、又能く諸根の利・鈍を分別す。久しく佛道に於て心已に純淑し、大乘を決定して、諸有の所作能く善く思量し、佛の威儀に住して、心の大なること海の如し。諸佛咨嗟し、弟子・釋・梵・世主の敬ふ所なり。

【一】方便品は本經の主人公なる長者（Śreṣṭhi シュレースチ）維摩大居士の出場に先ちて、豫め其廣大の勝德を讃述す。是れ此品を古釋家が述德序と稱する所以なり、その方便品と稱するは居士、種種の善權方便を設けて群機を化導するが故に云ふ。本品の文段は大に別ちて二大段となすべし。即ち、第一に維摩內面の大德を述べ、第二に其外用の善權方便の廣大なるを示して、居士疾を現ずるの一段に入る、文科、文に當りて註記すべし。

【二】已に已下內證の德を讃述す、諸佛供養、深植善根、得無生忍の三は道體なり、辯才・方便・大願・衆生の心及其利鈍を明了にするは是道用なり、其心大海の如きは道量なり。諸佛人天の恭敬は總結の讃なり。

【三】總持とは、文持と義持との不忘を具することなり。

【四】無所畏とは四無畏にして先の註の如し。

【五】大願とは上弘佛道下化萬生の願にして、此の願は願中の要なるを以て大と云ふ。

(六)人を度せんと欲する故に、善方便を以て毗耶離に居す。(七)資財無量にして諸の貧民を攝し、奉戒清淨にして諸の毀禁を攝し、忍調の行を以て諸の恚怒を攝し、大精進を以て諸の懈怠を攝し、一心禪寂にして諸の亂意を攝し、決定の慧を以て諸の無智を攝す。(八)白衣爲りと雖も、沙門清淨の律行を奉持し、居家に處すと雖も、常に三界に著せず、妻子有ることを示せども、常に(九)梵行を修し、眷屬有ることを現ずるも常に遠離を樂ひ、(一〇)寶飾を服すと雖も而も相好を以て身を嚴り、復た飲食すと雖も、而も禪悅を以て味と爲す。(一一)若し博奕・戲處に至ても、輙ち以て人を度し、(一二)諸の異道を受くれども正信を毀らず、(一三)世典を明かにすと雖も、常に佛法を樂ひ、一切に敬せられて供養中の最と爲り、正法を執持して諸の長幼を攝し、(一四)一切の治生諧偶して、俗利を獲ると雖も、以て喜悅せず。諸の四衢に遊びて衆生を饒益し、(一五)治正の法に入りて、一切

【六】人を度せんと云云已下、第二外用の德卽外に善權方便を現ずるを示す。此中また二段と見ば文義明ならん、卽第一は隨緣善權にして本經を說く已前總じて攝化利生の妙用の偉大なるを顯はす、凡そ四小段あり。

【七】此段六度を以て攝化す。文に當りて知るべし。是一。

【八】此段世間種種の相を以て攝化するを述ぶ。世塵に同じて德化甚だ大なり、是二。白衣とは緇衣に對する語にして在家の人を云ふ。沙門は出家のこと也。

【九】Brahmacarya. 淸淨の行、特に色欲に超脫するを讀す。

【一〇】百福莊嚴の德相、金紫珠玉の服飾と相待つ、豈沐猴の冠ならんや。

【一一】古代印度は博戲を公開せること今の中歐二三の諸小國及回教諸邦の若し。

【一二】新舊約も哥蘭も以て第一義を莊嚴すべし。斯の如くして方めて大乘の大丈夫兒也。

【一三】已下の文段世間種種の道を以て攝化の大用を舉ぐるを述ぶ。是第三段。

【一四】治生產業の調諧し善偶して快樂極りなき大乘の正信に基く、百萬千萬の俗利、寧ろ大丈夫兒を喜ばすに足らんや。

【一五】治正の法は卽ち裁判、刑罰の法律なり。

を救護し、講論の處に入りては導くに大乘を以てし、〔二六〕諸の學堂に入りては、童蒙を誘開し、諸の婬舍に入りては、欲の過を示し、諸の酒肆に入りては、能く其の志を立つ。〔二七〕若し〔二八〕長者に在りては長者中の尊として勝法を說き、若し〔二九〕居士に在りては居士中の尊として其の貪著を斷じ、若し〔三〇〕刹利に在りては刹利中の尊として敎ふるに忍辱を以てし、若し〔三一〕婆羅門に在りては婆羅門中の尊として、其の我慢を除かしめ、若し大臣に在りては、大臣中の尊として敎ふるに〔三二〕正法を以てし、若し王子に在りては、王子中の尊として示すに忠孝を以てし、若し內官に在りては內官中の尊として、宮女を化正し、若し庶民に在りては、庶民中の尊として福力を興さしめ、若し〔三三〕梵天に在りては梵天中の尊として誨るに勝慧を以てし、若し〔三四〕帝釋に在りては帝釋中の尊として無常を示現し、若し〔三五〕護世に在りては護世中の尊として諸の衆生を護る。長者維摩詰是の如き等の無量の方便を以て衆生を饒益す。

【二六】卽是頑石朽木の道學先生たらず、又攀花折柳の遊蕩兒たらず。難い哉、達人や。

【二七】已下第四段尊貴を以て攝化す十一支段あり、卽長者・居士・刹利・婆羅門・大臣・王子・內官・庶民・梵天・帝釋・護世是なり、化用、神人に亙る。

【二八】長者は邑中有德の者にして多く俗法を以て世に訓ふ。故に爲に出世の勝法を說く。

【二九】居士は財を積み、德を具す、故に其の貪著を除き、財を散じて福を求めしむ。

【三〇】刹利(Ksatriya)は四姓の中の王種なり、是れ自己の尊貴威力を恃んで瞋多し、故に忍辱を修せしむ。

【三一】婆羅門(Brahman)は四姓中の一にして神典祭祀に達し智有りて慢多し、故に我慢を除かしむ。

【三二】國家の統治、正法に依る、是大臣に敎ふる所以。

【三三】梵天は多く禪定の樂に著して悲を忘るゝが故に勝慧を敎ふ。

【三四】帝釋は五欲自恣なり、故に敎へて無常を觀ぜしむ。

【三五】護世(Lokapala)。四天王也、鬼神を典領す、故に其屬をして人を害せしめざる也。

〔二六〕其の方便を以て、身に疾有ることを現ず。其の疾を以ての故に、國王・大臣・長者・居士・婆羅門等及び諸の王子、并に餘の官屬無數千人、皆往いて疾を問ふ。其の往く者には、維摩詰、身の疾を以て　〔二七〕廣く爲に法を說く、「諸の仁者、〔二八〕是の身は無常にして、強きこと無く、力無く、堅きこと無く、速に朽つるの法なり、信ず可からず。〔二九〕苦たり、惱たり、衆病の集まる所なり。諸の仁者、此の如きの身は、明智の者の怙まざる所なり。〔三〇〕是の身は聚沫の如し、撮摩すべからず。是の身は泡の如し、久しく立つことを得ず。是の身は焰の如し・渴愛より生ず。是の身は芭蕉の如く、中に堅有ること無し。是の身は幻の如く、顚倒より起る。是の身は夢の如く、虛妄の見たり。是の身は影の如く、業緣より現ず。是の身は響の如く、諸の因緣に屬す。是の身は浮雲の如く、須臾に變滅す。是の身は電の如く、念念に住まらず。〔三一〕是の身は主無し、〔三二〕地の如

【二六】維摩外用の大德中、隨緣善權に對し廣大善權の第二大段に入る、卽是本經を說くる特別の大化用なり、前段の總功德に對すれば方に別功德と云ふを得。

【二七】已下維摩の說法・無常・苦・空・無我の四相を說き、世の賴むべからざるを數へて法身の常住を樂はしむ。

【二八】第一に無常門。

【二九】內心適はざるを苦と謂ひ外より逼めらるを惱と云ふ。

【三〇】聚沫已下の十喩は第二に空門を明す、就中前五譬は內の我所空なることを明し、後の五譬は外の我所空なることを明す、金剛經また星・翳・燈・幻・露・泡・夢・電・雲の九種を以て有爲法の空を示す。後代首楞嚴にも十喩あり、本經と相類す。

【三一】是身は主無し已下は第三無我門を舉ぐ、就中初に地水火風の四大の譬を以て無我を明し、次に是身無實已下條事に寄せて無我なることを明す。主(Svāmin)我(Ātman)壽(Jīvaka)人(Pudgala)何れも我の異名なり

【三二】地は假に因緣假作持して主なし、此の身も五蘊假和合にして主無きこと地の如し。

し と爲す。是の身は我無し、(三三)火の如しと爲す。此の身は壽無し、(三四)風の如しと爲す。是の身は人無し、(三五)水の如しと爲す。是の身は不實なり。(三六)四大を家と爲す。是の身は空なり、我我所を離る。是の身は知無し、草木・瓦礫の如し。是の身は作無し、風力の轉ずる所なり。(三七)是の身は不淨にして穢惡充滿せり。是の身は虛僞たり、假に澡浴衣食を以てすと雖も、必ず磨滅に歸す。是の身は災たり、(三八)百一の病惱あり。是の身は丘井の如く、老の爲に逼めらる。是の身は定無く、要ず當に死すべしと爲す。是の身は毒蛇の如く、怨賊の如く、空聚の如し、(三九)陰・界・諸入の共に合成する所なり。(四〇)諸の仁者、此れ患厭す可し。當に佛身を樂ふべし。所以は何ん。佛身とは卽ち(四一)法身なり。無量の功德智慧より生じ、(四二)戒・定・慧・解脫・解脫知見より生じ、(四三)慈・悲・喜・捨より生じ、布施・持戒・忍辱柔和・勤行精進・禪定解脫三昧・多聞智慧の諸(四四)波羅蜜より生じ、方便より生じ、(四五)六通より生じ、(四六)三明より生じ、

【三三】火は假なり、薪焚燒して焰に揚り主無し、此の身も其の如し。

【三四】風は連持鼓動して主無し身の念念に連持して主無きこと風の如し。

【三五】水は方圓に隨うて實無し此の身の屈折して體に從ひて主無きこと水の如し。

【三六】四大とは地水火風を云ふ身は此の合成する所なる故に家と云ふ。

【三七】此身は不淨なり已下は第四不淨門を明す。就中初めに事不淨を說き、次に虛僞已下は理不淨を明す。

【三八】百一は大數凡百といふ程の意義。

【三九】陰(Skandha)界(Dhātu)諸入(Āyatana)とは五陰・十八界・十二處なり。

【四〇】諸仁者已下は佛身の欣樂を勸む

【四一】金剛不壞不滅の眞身。

【四二】此五を五分法身といふ。

【四三】四無量心なり。前註參照。

【四四】波羅蜜(Pāramitā)とは梵語にして度と譯す、布施持戒等の六法を六度と稱す、菩薩此六法を修して彼岸に到る。

【四五】六通とは天眼通・天耳通・他心通・宿命通・身如意通・漏

三十七道品より生じ、(四七)止觀より生じ、十力・四無所畏・十八不共法より生じ、一切の不善法を斷じ、一切の善法を集むるより生じ、眞實より生じ、不放逸より生ず。是の如きの無量清淨の法より如來の身を生ず。諸の仁者、佛身を得て(四八)一切衆生の病を斷ぜんと欲せば、當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。」

是の如く、長者維摩詰。諸の疾を問ふ者の爲に、應の如く法を說きて、無數の千人をして皆阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。

盡通にして阿羅漢の得る所の通力なり。

【四六】三明とは六神通の中の宿命通と天眼通と漏盡通とを云ふ。

【四七】止(Samatha シヤマタ)觀(Vipaśyanā ギパーシヤナ)とは亂心止息を止とし、妙境觀照を觀といふ、三昧の初門。

【四八】維摩の疾を示す、實に一切衆生悉く貪瞋痴慢の業病に惱めるを證せんが爲なり。一切病惱、有爲轉變の根本の救治は唯金剛不壞の佛身を得るにあるのみ、知れ大菩提心は是業病の唯一の妙藥たるを。

巻の第三

(一)弟子品第三

爾の時、長者維摩詰自ら念へらく、「疾に牀に寢ぬ。世尊の大慈寧ろ愍を垂れざらんや」と。佛其の意を知り、卽ち(二)舍利弗に告たまはく、『汝行きて維摩詰に詣り、疾を問へ。』舍利弗佛に白して言さく、『われ彼に詣りて、疾を問ふに堪任ず。所以何ん、憶念するに、われ昔曾て林中に於て樹下に(三)宴坐しぬ。時に維摩詰來りて我に謂て言く、「唯だ舍利弗、必ずしも是れ坐するを宴坐と爲さざれ。夫れ宴坐とは、(四)三界に於て身意を現せざる、是を宴坐と爲す。(五)滅定を起たずして諸の威儀を現ずる、是を宴

【一】弟子品とは如來維摩詰に疾ありと聞き、五百弟子の代表者を遣はして疾を問はしむることを明かす、故に名づく。當品及次下の菩薩品は維摩未だ上場せず、聲弟子及菩薩の口を藉りて其大德の不測なるを贊す、故に釋家之を顯德序と稱し、別序に數ふ。

【二】第一に舍利弗(Sāriputra)に命ず、舍利弗は十大弟子中に智慧第一なり、故に第一に命を被る。

【三】宴坐とは舍利弗は小乘聲聞の行人たるの故に、世の憒亂を患へて、山林に隱れ以て身心を攝めんと宴坐す、而も大乘至極の理より見れば至らざるの甚しきもの、卽若し萬境卽空と解して彼此を存せずんば何ぞ身心有てか散亂を生ぜん、若し萬法有なりと存して亡ずること能はずんば、山林に入ると雖も散亂何ぞ離るることを得ん、故に居士舍利弗を呵す

【四】三界に身心なく、空性に安住する、眞の宴坐なり。

【五】羅漢の滅盡定に入りて心性空寂なるも、而も從容として諸の威儀を現す。

坐と爲す。(六)道法を捨てずして、凡夫の事を現ずる、是れを宴坐と爲す。心、內に住せず亦外に在らざる、是を宴坐と爲す。(七)諸見に於て動ぜずして、三十七道品を修行する、是を宴坐と爲す。(八)煩惱を斷ぜずして涅槃に入る、是を宴坐と爲す。若し能く是の如く坐せば、佛の印可したまふ所なり」と。時にわれ、世尊、是の語を聞き、默然として止み、(九)報を加ふること能はざりき。故にわれ彼に詣りて疾を問ふに任へず。」

佛(一〇)大目犍連に告げたまはく、「汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ」と。目連佛に白して言さく、「世尊、われ彼に詣りて、疾を問ふに堪任せず。所以何んとなれば、憶念するに、われ昔毘耶離大城に入り、里巷の內に於て諸の居士の爲に法を說きぬ。時に維摩詰來りて我に謂て言く、『唯だ(一一)大目連、白衣居士の爲に法を說くこと當に仁者の所說の如くなるべからず。夫れ說法とは當に(一二)法の如く說くべし。法には衆生無し、(一三)衆生

【六】聖道の法に安住して、跡凡夫に同ず、維摩の如き是。

【七】略して云へば身・邊・邪・見取・戒禁取の五見、廣く云へば外道の六十二見等。

【八】煩惱を斷ぜずして涅槃に入るとは、煩惱卽涅槃なる故に斷ずるを待たず。

【九】舍利子大智と雖、世諦と眞諦とを別ち煩惱と涅槃とを二とす、報ゆる能はざる所以たり。

【一〇】第二に大目犍連(Mahā-maudgalyāyana)に命ず、此人婆羅門種に生れ、聰明智慧あり、十大弟子中神足第一人の者也。

【一一】大目犍連の所說に二失有り、一には無相の機の爲に妄りに有相を說き、二には大乘の機の爲に妄に小乘を說く、此の二失あるが故に居士之を呵して眞法の義を辯す。

【一二】法の如しとは、法性本來空寂、平等一如なり、卽如如の法なり。此平等一如の中、豈衆生あらんや、我あらんや、壽あらんや、人あらんや。

【一三】衆生の垢を離るとは、法體空の上に無衆生を觀ずる時に理と相符して能く衆生を計著するの垢を離るるを云ふ、離とは空ずと云ふに同じ。

の垢を離れたるが故に。法には我有ること無し、我垢を離れたるが故に。法には(一四)壽命無し、生死を離れたるが故に。(一五)法には(一)人有ること無し・前後際斷せるが故に。(一六)法は常に(二)寂然たり、諸相を滅するが故に。(三)法は相を離る、所緣無きが故に。法には(四)名字無し・言語を斷ちたるが故に。法には(五)說有ること無し、(一七)覺觀を離れたるが故に。(一八)法には(六)形相無し、虛空の如くなるが故に。(一九)法には(七)戲論無し、畢竟空の故に。法には(八)我所無し、我所を離れたるが故に。法には(二〇)(九)分別無し、諸識を離れたるが故に。法には(二一)(十)比有ること無し、相待無きが故に。法は(十一)因に屬せず、因に在らざるが故に。法は(十二)(二二)法性に同じ、諸法に入るが故に。法は(二三)(十三)如に隨ふ、隨ふ所無きが故に。法は(二四)(十四)實際に住す、諸邊に動ぜざるが故に。法には(十五)動搖無し、(二五)六塵に依らざるが故に。法には(十六)去來無し、常に住せざるが故に。(二六)法は(十七)空

【一四】壽命は生死の中間に在り始終の生死空なれば壽命も亦た空なり、故に無と云ふ。

【一五】諸法寂滅相は大乘の通義なり、已下二十七句を以て法が本來平等、一切の時、空間、因果を超絕し、言詮差別を越踰せるを說く。

【一六】前後際とは、生死の二際、或は過去・未來の二際にして、これ空なれば中間の人空也。

【一七】說は境界差別の覺觀に由て起る。然るに理中に之れ無し、故に說無し。

【一八】眞理は形相にあらず、虛空豈に形相あらんや。

【一九】無戲論 (Aprapañcana) 種種紛紛の議論を絕す、龍樹中論の說を見よ。

【二〇】Akalpana. 無分別、感官の差別を超ゆ。

【二一】Aprameya. 無比、絕對にして比量すべきものなし。

【二二】Dharmatā. 法性、法の本體、眞如の異名。

【二三】Tathatā. 眞如の略語。

【二四】Bhūtakoṭi. 眞實際、至上の眞理。

【二五】六塵の法は其の體無相なりと明すが故に法は法性に同すと云ふ、蓋し爾る所以は眞諦諸法に通ずるが故なり、若し眞諦諸法に異ならば、六塵の法何ぞ眞諦に同することを得ん。

【二六】已下十七より十九に至る

に順じ、(十八)無相に隨ひ、(十九)無作に應ず。(二七)法は(二十)好醜を離れ、法は(二十一)增損無く、法は(二十二)生滅無く、法は(二十三)所歸無し。法は(二十四)眼耳鼻舌身心を過ぎたり。法には(二十五)高下無し。法は(二十六)常住にして動ぜず。法は一切の(二十七)觀行を離る。唯だ大目連、法相是の如し、豈に說く可けんや。(二八)夫れ說法者は說くこと無く、示すこと無し。其の聽法者は聞くこと無く、得ること無し。譬へば幻士が、幻人の爲に法を說くが如し。(二九)當に是の意を建てゝ爲に法を說くべし。當に衆生の根に、利鈍有ることを了じて、善く知見に於て、罣礙する所無く、大悲心を以て、大乘を讃じ、佛恩を報ぜんと念ひ、三寶を斷ぜず、然して後に法を說くべし」と。維摩詰是の法を說ける時、八百の居士、阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。我に此の辯無し、是の故に彼に詣りて、疾を問ふに任へず』と。

(三〇)佛大迦葉に告げたまはく、『汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。』迦葉佛に白して言さく、『世尊、

法、三解脫門なるを明す即空(Śūnyatā)、無相(Animitta)。無作(即無願)(Apraṇihita)にして、此三者は涅槃の妙理に通入するものなるを以て門といふ。

【二七】世諦の中には六根の美醜あれど眞諦の中には此別無し故に法は好醜を離ると云ふ。

【二八】法性平等、一切の因果時空を超絕す、說きて一語なく、聞きて半字なし。假相幻術を善くするの士、幻人を現じ之に話するが如し。

【二九】諸法本來寂滅平等なりと雖、一たび、眞諦界より俗諦の第二義門に下るとき、化すべき衆生の根機を觀じて大悲心大乘を說き、報恩を念ふべし。この大悲と報恩是大乘の實修の全體なり、小乘の徒自ら利し自ら脫するを知りて、他を知らざるものと雲泥天地なり、是れ維摩詰の舍利子に對し痛棒ある所以とす。

【三〇】第三に大迦葉(Mahākāśyapa)に命ず。もと大婆羅門にして司祭の長たり、此の人は十大弟子中に頭陀即苦行第一なり。

われ彼に詣りて疾を問ふに堪任ず。所以何んとなれば、憶念するに、われ昔貧里に於て乞を行ず。時に（二一）維摩詰來りて我に謂て言く、「唯だ大迦葉、（二二）慈悲心有りて、而も普きこと能はず、豪富を捨てゝ貧に從ひて乞ふ。迦葉、平等の法に住して次に應じて乞食を行ずべし。（二三）不食の爲の故に應に乞食を行ずべし、和合の相を壞せんが爲の故に應に摶食を取るべし、不受の爲の故に應に彼の食を受くべし。（二四）空聚相を以て聚落に入れ、所見の色は盲と等しく、所聞の聲は響と等しく、所嗅の香は風と等しく、所食の味分別せざれ。諸觸を受ること智證の如く、諸法を知ること幻相の如し。自性無く、他性無く、本と自ら然らず、今は則ち滅すること無し。（二五）迦葉もし、能く（二六）八邪を捨てずして、八解

【二一】維摩詰迦葉を呵するに迦葉の四の過失あり。

【二二】一、迦葉思へらく、富者は宿世に罪を畏れて福を修せし故に、今富樂を得、貧者は宿世に福を修せざりし故に、今貧賤に生る、今善を修せずんば後復貧困愈甚しからん、其の長苦を愍み貧者をして修福せしめんが爲に貧家に乞食す、即ち迦葉の貧者のみを慈し、不平等なる過を呵す。

【二三】二、不食云云已下、迦葉の施主を利せんとするに人の劣果報を以てし佛果に在らず、即ち其所期の遠大ならざる過を呵す。其中三あり曰く不食とは涅槃不食の報を云ふ　和合の相を壞すとは、施主をして五陰生死和合の身を壞し無相の法身を得せしむること。不受とは、無受法身即ち涅槃法是なり。

【二四】三、空聚相云云已下、迦葉の富里は境界美にして執著の心を生ぜんことを恐れ、富鄕を捨てゝ貧里に行かんと思ふ。其の六塵を亡ぜざることを呵す、蓋し六塵即空と觀しなば美惡を存せず、何ぞ避くべき六塵か有らん。美色は盲、妙聲は響、馨香は風、甘味に分別なく、細觸は唯知を以て了じ、意に諸法を了じて幻の如くならんには六塵豈人を累せんや。

【二五】四、迦葉云云已下、迦葉謂らく、われ能く智斷兩德を具する故に、勝田の德あり、若し我に施さば多く益を得ん。故に勤て乞食せんと思へる、其の勝田德の過を呵す。蓋し邪正を亡し、尊卑の差別を存せざる是眞の勝田と謂つべき

脱に入り、邪相を以て正法に入り、一食を以て一切に施し、諸佛及び衆の賢聖を供養して、然して後に食す可し。是の如く食するは、煩惱有るに非ず、煩惱を離るゝに非ず。定意に入るに非ず、定意を起つにあらず。世間に住するに非ず、涅槃に住するに非ず。其れ施す者の有るとも、大福無く小福無し。益と爲さず、損と爲さず。是を正に佛道に入りて聲聞に依らずと爲す。迦葉、もし是の如く食せば、空しく人の施を食せずと爲す」と。

時にわれ、世尊、是の語を説くを聞きて、未曾有なることを得、即ち一切の菩薩に於て、深く敬心を起す。復た是の念を作す、「斯の家名有りて、辯才・智慧乃ち能く是の如し。其れ誰か阿耨多羅三藐三菩提心を發さざらんや」と。われ是より來、復た人に勸むるに聲聞・辟支佛の行を以てせず。是の故に、彼に詣りて疾を問ふに任へず」と。

佛、(三七)須菩提に告げたまはく、「汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ」と。

須菩提佛に白して言さく、「世尊、われ彼に詣りて疾を問ふに堪任せず。所以何んとなれば、憶念するに、われ昔其の舍に入りて從ひて食を乞ふ。時に(三八)維摩詰、わが鉢を取り飯を盛り滿して、我に謂て言く、「(三九)唯だ須菩

を以て也。

【三六】八邪とは一に邪見・二に邪思惟・三に邪語・四に邪業・五に邪命・六に邪念・七に邪精進・八に邪定是なり、八解脱とは、解脱に三種有れども今は八正道を以て八解脱と爲す、八邪に相對して知るべし。(他の二種は八禪定の道と、外道所問の八解脱の道なり)

【三七】舍衞國に須菩提(スブーティ)に會す、此の人般若會上の聽者として有名なり、故に十大弟子中に於て解空第一と稱せらる。

【三八】維摩詰、須菩提の問難を呵す。

【三九】唯須菩提已下は第一に貧者は宿世に施さざることを悔い慳心を起さざるも、富者は然らず、爲に今世に富めるも來世に必ず貧たらんことを愍み、富家に乞食す、其の貧を

提、若し能く食に於て等しき者は、諸法も亦等し、諸法等しき者は食に於ても亦等し。是の如く乞を行じ、乃ち食を取る可し。（四〇）若し須菩提、（四一）婬・怒・痴を斷ぜず、亦與に俱なはず。身を壞せずして、而も一相に隨ひ。痴愛を滅せずして、明脫を起し、（四二）五逆相を以て、而も解脫を得、亦解せず、縛せず。（四三）四諦を見ず、四諦を見ざるに非ず。（四四）果を得るに非ず、果を得ざるに非ず。凡夫に非ず、凡夫法を離るに非ず。聖人に非ず、聖人にあらざるに非ず。一切の法を成就すと雖も、而も諸法の相を離るれば、乃ち食を取る可し。（四五）若し須菩提、佛を見ず、法を聞かざる彼の（四六）外道六師、富蘭那迦葉・末伽梨拘除梨子・刪闍夜毗羅胝子・阿耆多翅舍欽婆羅・迦羅鳩馱迦旃延・尼犍陀若提子等は、是れ汝の

捨て慈心不平等なることを呵す。

【四〇】第二に若し須菩提已下は、彼れ解空第一たるの故を以て富鄉に入るも塵美に著する畏無ければ、富鄉に入りて化を爲さんと思ふを呵す。蓋し理には能解不解の別無し、若し我解を存せば何ぞ解空第一ならん。

【四一】三毒なり、貪瞋痴といふに同じ、已下無執無著の大自在を說く、不斷煩惱得涅槃、婬欲卽是道、六大常瑜珈の深旨を見るべし。

【四二】殺父・殺母・殺羅漢・出佛身出・破和合僧の五大罪にして之を五無間業と稱し、必らず地獄に生ずべきものとす。

【四三】四諦を見るは眞理を領解するを云ふ。小乘にては初果を指す。

苦 Duhkha.——迷界の現狀(苦惱)——果。

集 Samutpada.　迷界の原因(煩惱)——因、

滅 Nirodha.——悟界の妙境(涅槃)——果、

道 Mārga.——悟界の修因(聖道)——因。

【四四】小乘にて云へば阿羅漢の位、大乘にては無上菩提の佛果。

【四五】第三に若須菩提云云已下は、彼れの外道を避けて佛に就學せるが故に正學なりと思へるを呵す、蓋し邪正其の性を異にすと雖も第一義諦の中其異あらんや、若し須菩提の如く思へば自ら邪正を存じ是非を成ず、豈に是れ正學たらんや。

【四六】外道六師とは

1. Pūraṇa Kāśyapa.
2. Maskari Gośālīputra.
3. Sañjayī Vairaṭīputra.

師なり。其に因て出家し、彼の師の墮する所に、汝も亦隨ひて墮すれば、乃ち食を取る可し。(四七)若し須菩提、諸の邪見に入りて、彼岸に到らず、(四八)八難に住して、難無きことを得ず、煩惱に同じて、淸淨の法を離るべし、汝無諍三昧を得ば、一切衆生も亦是の定を得べし。其れ汝に施す者は福田と名づけず、汝を供養する者は三惡道に墮すべし。爲に衆魔と一手を共にして、(四九)諸勞の侶と作る、汝と衆魔及び諸の塵勞と等うして異有ること無し。(五〇)一切衆生に於て怨心有り、(五一)諸佛を謗し、法を毀りて、衆の數に入らず、終に滅度を得ず。汝もし是の如くならば、乃ち食を取る可し」と。時にわれ、世尊、此語を聞き、茫然として、是れ何の言なるやを識らず。何を以て答へんと云ふことを知らず。便ち鉢を置きて其の舍を出でんと欲す。維摩詰言く、「唯だ須菩提、鉢を取りて、懼るること勿れ。意に於て云何ん、(五二)如來所作の化人、若し是の事を以て詰らんに、寧ろ懼るること有りやいなや。」われ言く、「不なり。」維摩詰の言く、「一切の諸法は幻化の相の如し、汝今懼るる所有るべからざるなり。所以何んとなれば、一切の言說は是の相を離れず、(五三)智者に至りては文字に著せず、故に懼るる所

---

4. Ajita Keśakambala.
5. Kakudaḥ Kātyāyana.
6. Nirgrantho Jñātiputra.

【四七】 第四に若須菩提云云已下彼れの智斷兩德を具するが故に必ず勝田の德有り故に乞食して施主を利せんと思へる過を呵す、蓋し第一義中には智を以て結を斷ずる無ければなり。

【四八】 前品の註を見よ。

【四九】 勞は罪業煩惱をいふ。

【五〇】 已下徹底して煩惱卽菩提の斷案を下す、辛辣の手段身毛竪立するを覺ゆ。

【五一】 謗三寶の大罪を擧ぐ、衆の數に入らざるは僧伽を破るの謂なり。

【五二】 邪正善惡、畢竟空華水月の如し 維摩辛辣の毒舌も唯幻の亦幻のみ、之を懼るる所以は之に執する所あれば也。

【五三】 不著文字の四字此品の精

無し。何を以ての故に、(五四)文字は性を離る、文字有ること無し、是れ則ち解脱なり、解脱の相とは卽ち諸法なり」と。維摩詰是の法を說ける時に、二百の天子、(五五)法眼淨を得たりき。故にわれ彼に詣りて疾を問ふに任へず』と。

佛(五六)富樓那彌多羅尼子に告げたまはく、『汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。』富樓那佛に白して言さく、『世尊、われ彼に詣りて、疾を問ふに堪任ず。所以何んとなれば、憶念するに、われ昔大林の中に於て一の樹下に在りて、諸の新學の比丘の爲に法を說きぬ。時に維摩詰來りて我に謂て言く、(五七)唯だ富樓那、先づ當に定に入りて、此の人の心を觀じ、然して後に說法すべし。(五八)穢食を以て寶器に置くことなかれ。當に是の比丘の心の所念を知るべし。瑠璃を以て水精に同ずることなかれ。汝衆生の根源を知ること能はず。發起するに小乘の法を以てすることを得ること無れ。彼れ自ら瘡無し、之を傷ふこと勿れ。大道を行かんと欲せんに、小徑を示すこと莫れ、大海を以て牛跡に內るること無れ、日光を以て彼の螢火に等くせしむること無れ。富樓那、(五九)此の比丘久しく大乘心を發し、中ごろ此の

【五四】玄奘此文を「一切の文字は性相亦離る」と譯す、意味更に明なり。

【五五】法眼淨とは初果の位なり。

【五六】第五に富樓那（Pūrṇa-maitrāyaṇīputra）に命す、此人は十大弟子の中に於て說法第一たり。彌多羅とは其の母の名に從ひ名づく。

【五七】維摩詰富樓那が衆生の根性を知らざるが爲に大機の爲に小法を說き、所說の法と機と相違せることを呵す。

【五八】穢食とは小乘法にして、寶器とは大乘の機根なり、瑠璃は大乘の機、水精は小乘の機に譬ふ。已下之に例して知るべし。文の妙、層精の勢をなす。

【五九】人人悉く大乘心あり。小乘と外道と凡夫と唯獨子の長

意を忘る。如何ぞ小乘の法を以て之を敎導するや。われ小乘の智慧微淺なることを觀るに、猶し盲人の如し。一切衆生の根の利鈍を分別すること能はず」と。時に維摩詰、卽ち三昧に入り、此の比丘をして自ら宿命を識らしむ。曾て五百の佛の所に於て衆の德本を植ゑ、阿耨多羅三藐三菩提に廻向しぬ。（六〇）卽時に豁然として還りて本心を得たり。是に於て諸の比丘稽首して、維摩詰の足を禮す。時に維摩詰因て爲に法を說き、阿耨多羅三藐三菩提に於て、（六一）復た退轉せざらしむ。われ念ふ、「聲聞人の根を觀ぜずして說法す應からざることを。」是の故に彼に詣りて疾を問ふに任へず。』

佛、（六二）摩訶迦旃延に告げたまはく、『汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。』迦旃延佛に白して言さく、『世尊、われ彼に詣りて疾を問ふに堪任ず。所以は何んとなれば、憶念するに、昔 佛 諸の比丘の爲に略して法要を說きたまひき。われ卽ち後に於て其の義を敷演す。（六三）謂く、「無常の義・苦の義・空の義・無我の義・寂滅の義なり」と。時に維摩詰來りて我に謂て言く、「（六四）唯迦旃延、（六五）生滅の心行を以て實相の法を說くこと無れ。迦旃延、諸法の畢竟じて不生不滅なる、是れ無常の義なり。五受陰の洞達して空にして所起

者制たるを忘るるに同じ。

【六〇】 大心退轉の比丘又法王子たるの自覺を生ず、後段不退轉を得るの伏線。

【六一】 Avaivartika・不退轉位、再たび小乘に歸らず。

【六二】 第六に摩訶迦旃延（Mahākātyāyana）に命ず、此人は十大弟子中に於て論議第一たり。

【六三】 無常・苦・空・無我・寂滅の五義を擧ぐ、この五義は佛教の大旨三法印なり、卽ち、
一、諸行無常（苦と空とを含む）
二、諸法無我
三、涅槃寂靜

【六四】 如來の言說は平等にして常に有心ならず、常に有相ならず、然るに迦旃延無常の法を宣演するや有相の道理を以て說く、維摩詰其の謬を破す。

無き、是れ苦の義なり。諸法の究竟じて所有無き、是れ空の義なり。我と無我とに於て而も不二なる、是れ無我の義なり（六六）法は本と然らず、今則ち滅すること無き、是れ寂滅の義なり」と。是の法を說ける時、彼の諸の比丘、心に解脫を得たりき。故にわれ彼に詣りて疾を問ふに任へず。』

佛（六七）阿那律に告げたまはく、『汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。』阿那律佛に白して言さく、『世尊、われ彼に詣りて疾を問ふに堪任ず。所以何んとなれば、憶念するに、われ昔一處に於て（六八）經行したりき。時に梵王有り名づけて（六九）嚴淨と曰ふ。萬の梵と俱に淨光明を放ちて、わが所に來詣し、稽首し禮を作して我に問うて言く、（七〇）「幾何か、阿那律、天眼の見る所ぞ。」われ卽ち答て言く、「仁者、われ此の釋迦牟尼佛土の三千大千世界を見ること、掌中の（七一）菴摩勒果を觀るが如し」と。時に（七二）維摩詰來りて我に謂て言く、「唯だ阿那律、天眼の見る所、作相と爲さんや、作相無きや。假使作相ならば外道の五通と等し、若し作相無くんば卽ち是れ無爲にして、見ること有るべからず」と。世尊、われ時に默然たり。彼の諸梵其の言を聞きて、未曾有なることを得、卽ち爲に禮を作して、而して問うて

【六五】實相の法は生滅差別にあらず、無常の本體は本來不生不滅なり、因緣所生法、我說卽是空の所に苦の義あり、有無を絕する是空、我と無我と不二なる無我の義成す。

【六六】小乘法は三界差別して生滅歷然たり、之を滅して無爲を求む、然るに大乘法は本自ら然らず、諸法本來自ら寂滅の相なり、今何ぞ滅する所有らん、滅せざる乃ち眞の寂滅なりとす。

【六七】第七に阿那律（Aniruddha）に命ず、此の人は剎利種に出で十大弟子中天眼第一たり。

【六八】Caṅkrama. 威儀を正し、逍遙しつゝ誦經思念するを云ふ。

【六九】Pariśodhana.

【七〇】梵王は阿那律が天眼第一たることを聞くを以て見る所の遠近を問へる也。

曰く、「世に孰れか眞の天眼を有する者ぞ」と。維摩詰言く、「(七三)佛世尊のみ有りて、眞の天眼を得たまへり。常に三昧に在りて、悉く諸佛の國を見たまふに、(七四)二相を以てしたまはず」と。是に於て嚴淨梵王及び其の眷屬、五百の梵天皆、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、維摩詰の足を禮し已りて、忽然として現せず。故にわれ彼に詣りて疾を問ふに任へず。』

佛(七五)優波離に告げたまはく、「汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。」優波離佛に白して言さく、『世尊、われ彼に詣りて疾を問ふに堪任ず。所以何んとなれば、憶念するに、昔(七六)二りの比丘有り、律行を犯し、以て恥と爲して、敢て佛に問ひたてまつらず、來りて我に問うて言く、「唯だ優波離、我等律を犯す、誠に以て恥と爲して、敢て佛に問ひたてまつらず。願くば疑悔を解いて、此の咎を免るることを得しめよ」と。われ即ち其れが爲に(七七)法の如く解說す。時に維摩詰來りて我に謂て言く、「唯だ優波離、重ねて此の二比丘の罪を增すこと無れ、當に直に除滅すべし、其の心を擾すこと勿れ。所以何んとなれば、(七八)彼の罪性内に在らず、外に在らず、中間に在らず。佛の所說の如く、心垢るるが故に、衆生垢る、心淨きが故に、

味甚美なり。

【七二】阿那律、梵王に答ふるに佛陀無相の天眼を以てすべかりしに、小乘の所見に隨て有相を以て答ふ、故に維摩詰之を詰す。

【七三】眞の天眼は一切超絶の大慧眼なるを要す、是佛陀のみあり。

【七四】有無・内外・主客兩觀の差別なきを無二相(Advaita)といふ。

【七五】第八に優波離(Upāli)に命ず、此人賤種に出づと雖十大弟子中に於て持律第一也。

【七六】二比丘の佛に問はずして優波離に問ふは、佛は本師にして受戒の主なるが故に慙愧極て深し、然るに優波離には然らざるが故に慙愧猶可なり、且つ如來は既に三毒を離して永く餘習無く、都て違犯無し、

衆生淨し。心も亦內に在らず、外に在らず、中間に在らず。其の心の然るが如く、罪垢も亦然り。諸法も亦然り。(七九)如を出でず。優波離の如き、心相を以て、解脫を得る時、寧ろ垢有りやいなや。」われ言く「不なり。」維摩詰の言く、「(八〇)一切衆生の心相、垢無きこと亦復是の如し。唯だ優波離、(八一)妄想は是れ垢なり、妄想無きは是れ淨なり。顚倒は是れ垢なり、顚倒を離るるは是れ淨なり。我を取るは是れ垢なり、我を取らざるは是れ淨なり。(八二)優波離、一切の法は生滅して住せざること、幻の如く電の如し。諸法は相待せず、乃至一念も住せず。諸法は皆妄見なり、夢の如く、燄の如く、水中の月の如く、鏡中の像の如し、妄想を以て生ず。其れ此を知る者、是を奉律と名づく。其れ此を知る者、是を善解と名づく」と。是に於て二比丘の言く、「上智なる哉、是れ優波離の及ばざる所なり。持律の上すら說くこと能はざるなり」と。われ答て言く、(八三)「如來を捨て、未だ聲聞及び菩薩能く其の樂說の辯を制すべきもの有らず。其の智慧明達なること此の若し」と。時に二りの比丘、疑悔卽ち除きて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、是の願を作して言く、「一切衆生をして皆是の辯を得しめん」と。

故に煩惱深し、優波離は[illegible]習有り、異見有る故に、己が氣類に相似たるを以て[illegible]可なり、故に問ふ、是實に人情の欲を穿てり。

【七七】　法の如く解說すとは律文に準じ大衆僧廿人の中に於て悔過すれば罪を免ることを得べきことを說く。卽ち罪を罪と爲して罪報を說き有相を以て答へしを以て、維摩詰之を呵す。蓋し罪を以て罪と爲せば則ち心垢愈累を生ず、罪業の自性空なるを了じ罪を以て罪と爲さざれば則ち淨心にして衆生淸きなり。故に文に重ねて此の二比丘の罪を增すこと勿れといふ。

【七八】　彼の罪性內に非ず已下罪體の空なることを明す。

【七九】　一切の諸法は眞如を離れず。

【八〇】　優波離は淨心を以て、諸

故にわれ彼に詣りて疾を問ふに任へず。』

佛(八四)羅睺羅に告げたまはく、『汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。』羅睺羅佛に白して言さく、『世尊、われ彼に詣りて疾を問ふに堪任へず。所以何んとなれば、憶念するに、昔時(八五)毘耶離の諸の長者子わが所に來詣し、稽首し禮を作して我に問うて言く、「唯だ羅睺羅、汝は佛の子なり。(八六)轉輪王の位を捨てて出家して道の爲にす。其れ出家は何等の利か有るや」と。われ能く法の如く爲に(八七)出家の功德の利を說きたりき。時に維摩詰來りて我に謂て言く、「唯だ羅睺羅、出家功德の利を說くべからず。所以何んとなれば、利無く功德無き是を出家と爲す。(八八)有爲の法ならば、利有り功德有りと說く可し。夫れ出家とは、無爲の法なり。無爲の法の

を得、衆生は淨心なくして悟を得ずと雖、心性元來平等にして些の差別あるなし。

【八一】妄想・顚倒・我相の本元は差別の見なり。迷悟を二分する見なり。

【八二】優波離云云已下は罪の空なることを證す。若欲懺悔者、端坐思實相、衆罪如霜露、慧日能消除の意旨を思ふべし。

【八三】如來を捨つるは如來已外の義、新譯に「唯だ如來を除きて未だ聲聞菩薩のこの大士の慧辯を制するものあらず」とせる甚明なり。

【八四】第九に羅睺羅 Râhula に命ず、佛陀の嫡子、出家して、十大弟子中には密行第一なり。

【八五】新譯に、此長者の族名を詳譯し、「諸の童子離呫毘種(Licchavi)あり」とす。吠舍釐

衆中最も思辯智識に富む。

【八六】Cakravarti. 世界統一の理想的帝王をいふ、此輪に其寶物たる輪寶を轉回するが爲に云ふ。

【八七】出家の功德の利とは、羅睺羅四沙門の果、涅槃の功德と道品等の利とを說く、是れ小乘出家の有相功德の利なる故を以て維摩詰は呵す。

【八八】孟軻既に王何ぞ必しも利を言はん、唯仁義あるのみと喝破す、佛陀大乘の法中、唯平等無爲の大道のみ、何の利か之あらん。

【八九】外道の種々の異見を總攝したるもの、もと長阿含經中の梵網六十二見經に出づ、卽ち過去前際に關する宇宙論的(Cosmology)見解に十八種、未來後際の終局論的(Eschatology)見解に四十四種あり、合して六十二見となる。

中には利無く功德無し。羅睺羅、夫れ出家とは、彼無く、此無く、亦中間も無し、(八九)六十二見を離れて涅槃に處す。智者の受くる所、聖の所行の處なり。衆魔を降伏し、(九〇)五道を度し、五眼を淨め、(九一)五力を得、五根を立て、彼を惱まさず、衆の雜惡を離れ、諸の外道を摧き、(九二)假名を超越し、(九三)淤泥を出で、繫著無く、我所無く、所受無く、擾亂無く、内に喜を懷き、彼の意を護り、禪定に隨ひて、衆過を離る。若し能く是の如くんば是れ眞の出家なり」と。是に於て維摩詰、諸の長者子に語るらく、「汝等正法の中に於て宜しく共に出家すべし。所以何んとなれば、佛世値ひ難ければなり」と。諸の長者子の言く、「居士、われ聞く、佛の言はく、父母聽さざれば出家することを得ざれ」と。維摩詰の

- I 宇宙論的（十八）
  - 1 常住論……四
  - 2 半常半無常論……四
  - 3 宇宙限量論……四
  - 4 詭辯說……四
  - 5 無因論……二
- II 終局論的（四十四）
  - 1 死後有想論
    - a 形狀（有色無色）に關する論……四
    - b 限量（有邊無邊）に關する論……四
    - c 性質（苦樂）に關する論……四
    - d 分量（一多）に關する論……四
  - 2 無想論
    - a 形狀論……四
    - b 限量論……四
  - 3 非想非非想論
    - a 形狀論……四
    - b 限量論……四
  - 4 斷滅論……七
  - 5 現在得涅槃論……五

大乘の釋家は、其解釋頗る異なる。即斷 Uccheda.（虛無的偏見）。常 Sāsvata.（實在的偏見）の二大邪見を根本とし、色・受・想・行・識の五蘊に付き各、1小我、物の中にあり、2物、我の中にあり、3我物と離れて存在す、4我と物と同一の四見あるが故に、二十の見を數ふべく、更に過去の色、現在の色、未來の色等三世に亙りて論ずれば五蘊總計六十となり、前の根本二見と合せて六十二見となる。

【九〇】五道は天・人・畜生・餓鬼・地獄の五趣をいふ。普通六道

言く、「然り、汝等便ち(九四)阿耨多羅三藐三菩提心を發せば、是れ即ち出家なり、是れ即ち具足なり」と。爾の時に三十二の長者子、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。故にわれ彼に詣りて疾を問ふに任へず。」

佛(九五)阿難に告げたまはく、『汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。』阿難佛に白して言さく、『世尊、われ彼に詣りて疾を問ふに堪任ず。所以何んとなれば、憶念するに、昔時世尊の身に小し疾有り、當に牛乳を用ふべし。われ即ち鉢を持して大婆羅門家に詣り、門下に立ちたりき。時に維摩詰來りて我に謂て言く、「唯だ阿難、何爲ぞ晨朝に鉢を持して此に住するや」と。われ言く、「居士、世尊の身に小し疾有り、當に牛乳を用ふべし、故に來りて此に至る」と。(九六)維摩詰の言く、「止めよ、止めよ、阿難、是の語を作すこと莫れ。如來の身は金剛の體なり、諸惡已に斷じて、衆善普く會せり、當に何の疾か有るべき、當に何の惱か有るべき。默して往け、阿難。如來を謗ずること勿れ。異人をして此の麤言を聞かしむること莫れ。大威德の諸天、及び他方淨土の諸來の菩薩をして、此の語を聞くことを得しむること無れ。阿難、轉輪聖王すら少福を以ての故に、尚ほ病無きことを得

の爲め修羅道は天と餓鬼とに分屬す。五眼は肉眼・天眼・慧眼・法眼・佛眼の五つなり。

【九一】 五力は、信・進・念・定・慧の五つ、五根も名義同じ。根は善根の發生、力は破惡の力を指す。故に先づ五根を修し次に五力を得。

【九二】 有爲の世界、現象界を指す。

【九三】 生死の涯界を譬ふ、諸經論に其例多し。

【九四】 在家にして大乘心を發す即是既に出家のみ、形式を重ぜず、精神に取る所、此經の眼目なり。具足は具足戒を受けし比丘のこと。新譯の「是則受具足して苾芻性を成ず」の文解し易し。

【九五】 第十に阿難(Ānanda)に會す、此人、佛陀侍者の職役に當らんが爲に特に證果を遲くす。常に佛に侍して說法を聽

たり。豈に況んや、如來は無量の福會、普く勝れたまへる者をや。行け、阿難、我等をして斯の恥を受けしむること勿れ。外道梵志若し此の語を聞かば、當に是の念を作すべし。何ぞ名づけて師と爲さん、自の疾すら救ふこと能はず、而して能く諸の疾人を救はんやと。密かに速に去るべし。人をして聞かしむること勿れ。(九七)當に知るべし、阿難、諸の如來の身は即ち是れ法身なり、思欲の身に非ず、佛は世尊爲り、三界に過ぎたり。佛身は無漏なり、諸漏已に盡せり。佛身は無爲なり、諸數に墮せず。此の如きの身、當に何の疾か有るべき」と。時にわれ、世尊、實に慚愧を懷く、「佛に近づきて謬りて聽くこと無きを得んや」と。即ち空中の聲を聞く、曰く、「阿難、居士の言の如し。但だ(九八)五濁惡世に出でて、(九九)現に斯の法を行じて衆生を度脱せんが爲なり、行きね、阿難。乳を取りて慚ること勿れ」と。世尊、維摩詰の智慧辯才これ此の若し。是の故に彼に詣りて疾を問ふに任へず。』

是の如く、(一〇〇)五百の大弟子、各各佛に向て其の本緣を說き、維摩詰の言へる所を稱述して皆曰く、『彼に詣りて疾を問ふに任へず』と。

き、十大弟子中多聞第一なり。

【九六】 如來金剛不壞の妙身を知らず、唯俗情に從ひて乳を與ふ、維摩の一喝ある所以なり。

【九七】 維摩眞諦門より一擊し來る、俗諦の攝化示病是水月鏡華の幻技なるを答ふる能はざる所、小乘僧の小乘僧たる止むを得ざるなり、阿難何ぞ直に維摩の病牀を訪うて灑ぐに三斗の牛乳を以てせざる。

【九八】 五濁惡世とは、劫濁・衆生濁・煩惱濁・見濁・命濁を五濁と云ひ、是等の濁有る故に惡世と稱す。

【九九】 法身涅槃を示現すると同一轍なり、生滅なき所、生滅を現し、病惱なき所、病惱を示す。

【一〇〇】 十大弟子既に往くに堪へず、他の五百亦然り。

卷の第四

(一)菩薩品第四

是に於て (二)佛彌勒菩薩に告げ給はく、『汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。』彌勒佛に白して言さく、『世尊、われ彼に詣りて疾を問ふに堪任ず。所以何んとなれば、憶念するに、われ昔 (三)兜率天王及び其の眷屬の爲に、(四)不退轉地の行を說きたり。時に維摩詰來りて我に謂ひて言く、(五)彌勒、世尊仁者に記を授く、(六)一生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。これ何れの生を用て受記し得るや、(七)過去なりや、未來なりや、現在なりや。若し過去の生ならば、過去の生は已に滅しぬ。若し未來の生ならば、未來の生

【一】菩薩品とは聲聞弟子皆往くに堪へず、卽ち菩薩に命じて維摩詰の疾を問はしむ故に名く。當品は前弟子品と連なり顯德序なり。

【二】第一に彌勒菩薩（Maitreya マイトレーヤ）に命ず、彌勒は既に尊位を紹ぎ又常に此土に於て成佛すべく、衆生の宗とする所なり、故に先づ之に命ず。

【三】Tuṣita（ツシタ）欲界第四の天、彌勒常在の天界

【四】不退轉地とは無生法忍なり

【五】維摩詰は彌勒に四の執あるを呵す。

一、己れに勝行ありと存するの執。

二、受記を存すとの執。

三、菩提の果を存すとの執。

四、滅度の涅槃を存すとの執。

前四執中始めの二は因の執、後の二は果の執なり、天の讃は無相の空行を開かんとするに此四執あれば居士之を呵す。

【六】彌勒は次生成佛して佛位を紹ぐべき豫言（受記）を得たり、卽ち所謂一生補處の大士なり。

【七】是又龍樹中論の至辛至辣の論法。

は未だ至らず。若し現在の生ならば、現在の生は住すること無し。佛の所說の如く、比丘汝今卽時に亦生じ、亦老し亦滅すと。若し〔八〕無生を以て受記を得るといはば、無生は卽ち是れ正位、正位の中に於て亦受記無し。亦阿耨多羅三藐三菩提を得ること無し。云何んか彌勒、一生の記を受くるや。〔九〕如の生從り受記を得と爲んや。如の滅從り受記を得と爲んや。若し如の生を以て受記を得るといはば、如には生有ること無し。若し如の滅を以て受記を得るといはば、如には滅有ること無し。一切衆生皆如なり、一切の法も亦如なり、衆の〔一〇〕聖賢も亦如なり、彌勒に至るまでも亦如なり。若し彌勒受記を得といはば、一切衆生も亦記を受くべし。所以何んとなれば、〔一一〕夫れ如とは不二不異なればなり。若し彌勒阿耨多羅三藐三菩提を得といはば、一切衆生も皆亦得べし。所以何んとなれば、一切衆生卽ち菩提の相なればなり。若し、彌勒滅度を得といはば、一切衆生も亦當に滅度すべし、所以何んとなれば、諸佛は一切衆生の畢竟寂滅なること、卽ち涅槃の相にして、復た更に滅せずと知ればなり。是の故に彌勒、此の法を以て、諸天子を誘ふこと無れ。〔一二〕實には阿耨多羅三藐三菩提を發す者なく、亦退

〔八〕無生は茲には究竟の無生にして佛位をいふ、已に佛位たり、更に記莂の授くべきなし。

〔九〕如（Tathatā タタター）卽ち眞如をいふ。眞如は平等の理なるを以て、生滅あることなし、一切の法、眞如にあらざるなきを以て、皆平等ならざるべからず。

〔一〇〕小乘には七賢と七聖の階位、大乘菩薩の階級にては三賢と十聖、悉く平等一如の眞如に過ぎず。

〔一一〕已下眞如の不二を示す、此中一に煩惱卽菩提に就きて論ず、卽一切衆生菩提の相なりといふ是なり。第二に生死卽菩提に就きて論ず、卽一切衆生涅槃の相なりと說く是なり。文段緊密嚴正、一字虛著なし。

〔一二〕諸法皆空、不增不減なり、

する者無し。彌勒當に此の諸の天子をして、【一三】菩提を分別するの見を捨てしむべし。所以何んとなれば、菩提とは、身を以て得べからず、心を以て得べからず。(一)寂滅は是れ菩提なり、諸相を滅するが故に。(二)不觀は是れ菩提なり。諸緣を離るるが故に。(三)不行は是れ菩提なり、憶念無きが故に。(四)斷は是れ菩提なり。諸見を捨つるが故に。(五)離は是れ菩提なり。諸の妄想を離るるが故に。(六)【一四】障は是れ菩提なり、諸願を障ふるが故に。(七)不入は是れ菩提なり、貪著無きが故に。(八)順は是れ菩提なり、(九)【一五】如に順ずるが故に。(十)住は是れ菩提なり、法性に住するが故に。(十一)【一六】至は是れ菩提なり、實際に至るが故に。(十二)不二は是れ菩提なり、意法を離るるが故に。(十三)【一七】等は是れ菩提なり、虛空に等しきが故に。(十四)無爲は是れ菩提なり、生・住・滅無きが故に。(十五)知は是れ菩提なり、衆生の心行を了するが故に。(十六)【一八】不會は是れ菩提なり、諸入會せざるが故に。(十七)不合は是れ菩提なり、煩惱の習を離るるが故に。(十八)無處は是れ菩提なり、形色無きが故に。(十九)假名は是れ菩提なり、名字空なるが故に。(二十)【一九】如化は是れ菩提なり。取捨無きが故に。(二十一)無亂は是れ菩提なり、常に自ら靜なるが故に。(二十二)禪

何れの處にか、道果を退し又發すものあらんや。

【一三】彌勒の菩提と煩惱とを差別するを不是とす、故に今無分別の行を說く、通じて二十六句あり。教義上之を眞性（法身）・實智（報身）・方便（化身）の三菩提に配すれば大略左の如し。

I 眞性（法身より見たる菩提）1. 8. 9. 10. 12. 13. 14. 21. 22. 23. 24. 25. 26.

II 實智（報身より見たる菩提）2. 3. 4. 5. 6. 7. 11. 16. 17. 18. 19. 20.

III 方便――15.（化身の菩提）

【一四】障は一切の分別の顚見を障す。

【一五】眞如に順ずると法性に住すると、其言異にして、其理は、本來清淨・寂滅を說くに

寂は是れ菩提なり、性清淨なるが故に。（二十三）無取は是れ菩提なり、（一〇）攀緣を離るるが故に。（二十四）無異は是れ菩提なり、諸法等しきが故に。（二十五）無比は是れ菩提なり、喩ふ可きこと無きが故に。（二十六）（一一）微妙は是れ菩提なり、諸法知り難きが故に」と。世尊、維摩詰是の法を說ける時、二百の天子、無生法忍を得たりき。故にわれ彼に詣りて疾を問ふに任へず。』

佛（一二）光嚴童子に告げたまはく、『汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。』光嚴佛に白して言さく、『世尊、われ彼に詣りて疾を問ふに堪任ず。所以何んとなれば、憶念するに、（一三）われ昔毘耶離大城を出づる時に、維摩詰、方に城に入る。われ卽ち爲に禮を作して、而して問うて言く、「居士、何れの所より來る。」我に答へて言く、

過ぎず。

【一六】實際は眞如の本體、至高の理をいふ。

【一七】等は平等の意。

【一八】諸入は新譯の十二所にして、六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）と六境（色・聲・香・味・觸・法）をいふ。

【一九】如化は幻化の如きの意。

【二〇】攀緣は客觀を取んとする不可抗の主觀の傾向をいふ。

【二一】難思は諸法の實體言說思慮を離れたる超絕的のものなるが故に名く。

【二二】第二に光嚴菩薩（Prabhavyūha）に命す。

【二三】光嚴は但だ釋迦得道の摩竭の道場のみを知る故に、路遠し來ること疾し、更に復近きに道場有るかの疑を起して「道場とは何れの處か是なる」と問ふ。然るに理に就て論ぜば大士の萬行は皆能く衆生を利益し同く佛果に歸す、故に萬行是れ道場に非ざる無きなり、豈獨り菩提樹下のみならんや。卽ち萬行は是れ道場の因なれば因中說果し說く、光嚴之を知らざる故に廣く之を明す。

【二四】已下維摩十八事を擧げて萬行悉く道場にあらざるなきの一端を示す。第一に四心卽直心・發行・深心・菩提にして第一品の三心と開合の異、また起信論の直心・深心・大悲心と同じ。

三心 ─ 直心 ─────────── 直心 ─ 四心
三心 ─ 深心 ─┬─ 發行 ─ 四心
　　　　　　└─ 深心 ─ 四心
三心 ─ 菩提心（大悲心）─ 菩提心 ─ 四心

深心は樂ひて一切の善行を集むる心なるが故に發行なり。

【二五】第二、六度、文相知り易し。

【二六】第三、四無量心、捨は平等

「吾道場より來る」と。われ問ふ、「道場とは何れの所か是なる。」答て曰く(二四)「直心は是れ道場なり、虚假無きが故に。發行は是れ道場なり、能く事を辨ずるが故に。深心は是れ道場なり、功徳を增益するが故に。菩提心は是れ道場なり、錯謬無きが故に。(二五)布施は是れ道場なり、報を望まざるが故に。持戒は是れ道場なり、願具を得るが故に。忍辱は是れ道場なり、諸の衆生に於て心無礙なるが故に。精進は是れ道場なり、懈怠ならざるが故に。禪定は是れ道場なり、心調柔するが故に。智慧は是れ道場なり、現に諸法を見るが故に。(二六)慈は是れ道場なり、衆生を等しくするが故に。悲は是れ道場なり、疲苦を忍ぶが故に。喜は是れ道場なり、法を悅樂するが故に。捨は是れ道場なり、憎愛斷ずるが故に。(二七)神通は是れ道場なり、六通を成就するが故に。解脱は是れ道場なり、能く背捨するが故に。(二八)方便は是れ道場なり、衆生を教化するが故に。四攝は是れ道場なり、衆生を攝するが故に。(二九)多聞は是れ道場なり、聞の如く行ずるが故に。伏心は是れ道場なり、正しく諸法を觀ずるが故に。(三〇)三十七品は是れ道場なり、有爲法を捨するが故に。(三一)四諦は是れ道場なり、世間を誑かさざるが故に。(三二)緣

の行なり、故に怨親平等なり。

【二七】第四、自利の二法、神通と解脱是なり、六通は、天眼・天耳・神足・宿命・他心・漏盡の六種の神力

【二八】方便と四攝（布施・愛語・利行・同事）の二つは利他の二法なり、是第五。

【二九】多聞と伏心の二は正修二法にして第六なり、伏心は、心差別の見を伏して無分別の空觀を修するをいふ。

【三〇】第七、三十七助道品、說明前に出づ。

【三一】第八、四聖諦、世間を誑かさざるは四諦の眞理、寸毫も違ふなきを云ふ。

【三二】第九、緣[illegible]無明乃至[illegible]行・識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・老死の十二[illegible]法。

【三三】第十、[illegible]・[illegible]・[illegible]・[illegible]に大[illegible]なればなり

起は是れ道場なり、無明乃至老死皆盡くること無きが故に。(三三)諸の煩惱は是れ道場なり、如實を知るが故に。(三四)衆生は是れ道場なり、無我を知るが故に。(三五)一切の法は是れ道場なり、諸法の空なることを知るが故に。(三六)降魔は是れ道場なり、傾動せざるが故に。(三七)三界は是れ道場なり、所趣無きが故に。(三八)師子吼は是れ道場なり、畏るる所無きが故に。(三九)力無畏不共法は是れ道場なり、諸過無きが故に。(四〇)三明は是れ道場なり、餘礙無きが故に。(四一)一念に一切の法を知るは是れ道場なり、一切智を成就するが故に。是の如く、善男子、菩薩、若し(四二)諸の波羅蜜に應じて、衆生を教化せんに、諸有の所作・擧足下足・當に知るべし、皆道場より來りて佛法に住することを」と。是の法を說ける時に、五百の天人、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發したりき。故にわれ彼に詣りて疾を問ふに任へず。」

佛(四三)持世菩薩に告げたまはく、『汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。』

持世、佛に白して言さく「世尊、われ彼に詣りて疾を問ふに堪任ず。所以何んとなれば、憶念するに、われ昔、靜室に住する時に、(四四)魔波旬、萬二千の天女を從へ、狀(四五)帝釋の如く、鼓樂・絃歌して、わが所に來詣し、

【三四】 第十一、衆生ありて佛あり、菩提あるが故に。

【三五】 第十二、一切の諸法、諸法の本體即空寂なる故に。

【三六】 第十三、降魔。

【三七】 第十四、三界（欲・色・無色）是道場。

【三八】 說法是道場。第十五。

【三九】 第十六、力無畏不共法とは十力・四無畏・十八不共法の略言なり。

【四〇】 第十七、三明は天眼・宿命・漏盡なり。

【四一】 第十八、知一切法。

【四二】 菩薩六波羅蜜の行を修して衆生を敎化するに、進止悉く道場にあらざるなし。新譯に曰く「あらゆる所作・往來・進止・擧足・下足・一切皆妙菩提より來る」と、更に詳明なり。

【四三】 第三に持世（Jagatiddhara ジャガティー・ダラ）菩薩に命ず。

其の眷屬と與にわが足を稽首し、合掌恭敬して一面に立ちき。われ意に是れ帝釋なりと謂ひて、之に語りて言く、「善く來れり、(四六)憍尸迦、福有るべしと雖も、自ら恣にすべからず、當に五欲の無常を觀じて、以て善本を求め、身・命・財に於て、(四七)堅法を修すべし」と。即ち我に語りて言く、「正士、是の萬二千の天女を受けて、掃灑に備ふ可し。」われ言く、(四八)「憍尸迦、此の非法の物を以て、われ沙門釋子に要すること無れ、此れわが宜しきに非ず」と。言ふ所未だ訖らざる時に、維摩詰來りて我に謂て言く、「帝釋に非ず、是はこれ魔の來りて汝を嬈固するのみ。」即ち魔に語りて言く、「是の諸女等、以て我に與ふ可し、我の如きは受くべし。」魔即ち驚き懼れて念へらく、「維摩詰、將に我を惱すなからんや」と、形を隱して去らんと欲すれども、而も隱るること能はず、其の神力を盡すとも亦去ることを得ず。即ち空中の聲を聞くに、曰く、「波旬、女を以て之に與へば乃ち去ることを得可し」と。魔、畏を以ての故に俛仰して與へぬ。爾の時、維摩詰諸女に語りて言く、「魔汝等を以て我に與ふ。今汝皆當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし」と。即ち所應に隨て爲に法を說きて、道意を發さしむ。

【四四】魔波旬(Māra-pāpiya)とは、波旬は漢に殺者と翻し、魔王の名なり、欲界天の頂に住し、大象に乘り、百將を有し、種種奇異の相を現じ、常に其の子女を人界に下して惡人を煽動し、聖者を擾亂す。

【四五】帝釋は(Indra)護法の神なり、魔之を現じて先づ行者の心を迷はす。

【四六】憍尸迦(Kausika)とは、憍尸は姓にして字は摩迦陀、是れ未だ帝釋天王とならざる已前の名なり。

【四七】三堅法なり。身・命・財の不堅法を棄捨し、無極・無窮・無盡の法を得るをいふ。

【四八】沙門の法、[illegible]美麗を要せず、之を要する所以は、蓋し、[illegible]の見に依る、大乘廣大の海中に於ては聖哲美人畢竟同一の波瀾に過ぎず。

復た言く、「汝等已に道意を發しぬ、法樂有るを以て自ら娯むべし。」復た【四九】「五欲の樂を樂むべからず」と。天女即ち問ふ、「何をか法樂と謂ふ。」答へて言く、【五〇】「樂は常に(一)佛を信じ、樂は法を聽かんと欲し、樂は衆を供養す。(二)樂は五欲を離れ、(三)樂は五陰を怨賊の如しと觀じ、(四)樂は【五一】四大を毒蛇の如しと觀じ、樂は內入を空聚の如しと觀ず。(五)樂は隨ひて道意を護り、(六)樂は衆生を饒益し、(七)樂は師を供養し。(八)【五二】樂は廣く施を行じ、樂は堅く戒を持し、樂は忍辱柔和なり、樂は勤めて善根を集め、樂は禪定にして亂れず、樂は離垢・明慧なり。(九)樂は菩提心を廣む。(十)樂は衆魔を降伏し。(十一)樂は諸の煩惱を斷じ、(十二)樂は佛國土を淨め、(十三)樂は相好を成就するが故に諸の功德を修し、(十四)樂は道場を莊嚴し、(十五)樂は深法を聞きて畏れず、(十六)樂は【五三】三脫門なり、非時を樂はず、(十七)樂は同學に近づき、樂は非同學の中に於て心恚礙する無し。(十八)樂は惡知識を將護し、樂は善知識に親近し、(十九)樂は心に淸淨を喜し、(二十)樂は無量の道品の法を修する、是を菩薩の法樂と爲す」と。是に於て波旬・諸女に告げて言く、「われ汝と倶に天宮に還らんと欲す」と。諸女の言く、「我等を以て此の居士に與ふ、

【四九】 五欲とは眼・耳・鼻・舌・身の五根の上に起す色・聲・香・味・觸の五境に對する欲情なり。天女は五欲を樂と爲す、故に居士之に與ふるに法樂を以てす。即ち病に應じて藥を與ふる此の如し

【五〇】 已下法樂を明す。二十事あり、第一は敬信三寶・第二は離五欲、已下文に就きて見よ。

【五一】 四大(地・水・火・風)は外形の物質、內入は內心の感受なり。

【五二】 六度を擧ぐ。

【五三】 三脫門とは空(Śūnyatā)と無相(Animitta)と無作(無願)(Apraṇihita)となり、縛は此の三に依て解く、故に脫と云ふ、眞諦に通入するが故に門と云ふ。其の極に至らずして中途に證を取る即ち二乘の證果之を非時と云ふ。是れ大士

法樂有り、我等甚だ樂みぬ。復た五欲の樂を樂はず。」魔言く、(五四)居士、此の女を捨つ可し。一切の所有彼に施す者、是を菩薩と爲す。」維摩詰の言く、「我れ已に捨つ。汝便ち將ゐて去れ。一切衆生をして法願具足することを得せしむべし。」是に於て諸女維摩詰に問ふ、「我等云何んか魔宮に止まらん。」維摩詰の言く、「諸姉、法門有り、(五五)無盡燈と名づく。汝等當に學すべし。無盡燈とは、譬へば一燈を百千燈に然すが如し。冥き者皆明かなり、明、終に盡きず。是の如く諸姉、夫の一りの菩薩、百千の衆生を開導して、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。其の道意に於て亦滅盡せず、所說の法に隨ひて、而も自ら一切の善法を增益す、是を無盡燈と名く。(五六)汝等魔宮に住すと雖も、是の無盡燈を以て、無數の天子天女をして、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめば、佛恩を報じ、亦大に一切衆生を饒益すると爲す」と。爾の時に天女、頭面を以て維摩詰の足を禮して、魔に隨ひて宮に還る、忽然として現せず。世尊、維摩詰は是の如きの自在の神力、智慧・辯才有り。故にわれ彼に詣りて疾を問ふに任へず。」

佛(五七)長者子善德に告げたまはく、「汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ」と。善德佛に白して言さく、

の樂にざる所なり。

【五四】見よ、他の巧言便佞詰の如きを、而も此便巧を以して、一切衆生の法願具足を說き來る。大士の道量眞に海の如し。

【五五】Akṣayadīpa(アクシャヤディーパ). 何等の妙語、無盡三昧の名は般若其他に出づ、無盡燈の名は此經を獨特とす。佛慧一たび輝きて傳燈絶えず、十方を通じ三世に亘りて佛日に無盡なるを見る。

【五六】紅粉青黛、直に慈悲の妙相を現じ、媚目艶笑即ち如如の大法を說く、大乘の面目茲にあり。

【五七】第四に善德長者(Sudatta [illegible])に命ず。

「世尊、われ彼に詣りて疾を問ふに堪任ず。所以何んとなれば、憶念するに、われ昔自ら父の舍に於て、(五八)大施會を設けて、一切の沙門、婆羅門及び諸の外道、貧窮・下賤・孤獨・乞人を供養すること、期して七日を滿す。時に維摩詰會中に來入し我に謂て言く、(五九)「長者子、夫れ大施會は、汝が設くる所の如くなるべからず。(六〇)當に法施の會を爲すべし。何ぞ是の財施の會を用て爲すや。」われ言く、「居士、何をか法施の會と謂ふや。」「法施の會とは、前無く後無く、一時に一切衆生を供養する、是を法施の會と名づく。」曰く「何の謂ぞや。」(六一)「謂ゆる(一)(六二)菩提を以て慈心を起し、(二)衆生を救ふを以て大悲心を起す。(三)正法を持するを以て喜心を起し、(四)智慧を攝するを以て捨心を行ずる(五)(六三)慳貪を攝するを以て(六四)檀婆羅蜜を起し、(六)犯戒を化するを以て(六五)尸羅波羅蜜を起し、(七)無我の法を以て(六六)羼提波羅蜜を起し、(八)身心相を離るるを以て(六七)毗梨耶波羅蜜を起し、(九)菩提の相を以て禪波羅蜜を起し、(十)一切智を以て(六八)般若波羅蜜を起す。(十一)(六九)衆生を教化して空を起し、(十二)有爲法を捨てずして無相を起し、(十三)衆生を示現して無作を起し、(十四)正法を護持して方便力を起し、(十五)衆生を度するを

【五八】大施會は、道生曰く、婆羅門の法、七日、梵天を祀りて大施を行ふと。

【五九】諸經說く所施に二種あり 一に財施、二に法施なり。財を以て人に施すを財施と云ひ、慈心法を說きて人を利するを名づけて法施と云ふ。華嚴・金光明其他を見よ

【六〇】維摩詰が財施を呵する四意あり。
一、財施は多しと雖も猶窮竭する所有り。
二、財施は精神を益せず。
三、財施は前に來る者は精を得、後に來る者は麁を得。
四、財施は施す時に於ても前後ありて一時に等しく與ふる事能はず。

【六一】已下法施を明す、總て三十二句あり、初の十六句は自行を明かし、後の十六句は外

以て四攝法を起し、(十六)一切を敬事するを以て除慢の法を起す。(十七)身命財に於て三堅の法を起し、(十八)(七〇)六念の中に於て思念の法を起し、(十九)(七一)六和敬に於て質直の心を起し、(二十)正しく善法を行じて淨命を起し、(二十一)心淨く歡喜して賢聖に近くことを起し、(二十二)惡人を憎まずして、調伏の心を起し、(二十三)出家の法を以て、深心を起し、(二十四)如說の行を以て、多聞を起し、(二十五)無諍の法を以て、空閑處を起し、(二十六)佛慧に趣向して、宴坐を起し、(二十七)衆生の縛を解きて、修行地を起し、(二十八)(七二)相好を具し、及び佛土を淨むるを以て、福德の業を起し、(二十九)一切衆生の心念を知り、應の如く法を說きて、智業を起し、(三十)(七三)一切の法は不取・不捨なりと知りて、一相門に入りて慧業を起し、(三十一)一切の煩惱と、一切の障礙と、一切の不善法とを斷じて、一切の善業を起し、(三十二)(七四)一切の智慧と、一切の善法とを

化の用を明かす。

【六二】一より四迄は四無量心。

【六三】五より十迄は六波羅蜜。

【六四】檀(Dāna)波羅蜜とは檀は布施と譯し、波羅蜜は度と譯す、即ち布施行なり。

【六五】尸羅(Śīla)は戒と譯す。

【六六】羼提(Kṣānti)とは忍辱と譯す。

【六七】毘梨耶(Vīrya)は精進と譯す

【六八】般若(Prajñā)は智慧と譯す。

【六九】十一より十三までは三解脫門。

【七〇】六念(Anusmṛti)即ち、戒・施・天・佛・法・僧の六を思念して忘れざるを思念の法を起すと云ふ。

【七一】六和敬。身・口・意の三の和敬と、[illegible]人に與て之を共にす、五に持戒清淨、六に[illegible]の理を修す、若し此の六を行ずれば物と和して而も敬あり。

【七二】相好を具するに莊嚴即人の莊嚴、佛土を淨むるは依報即國土の莊嚴なり。

【七三】一相は絕待の異名。有・無・生・滅あるの二相即相待を離れたるを指す。不取は無、不捨は有なり。

【七四】最後にいふ所、本體の精要なり、盡天蓋地一物一法として佛法にあらざるなし、大[illegible]

得るを以て、一切助佛道の法を起す。是の如き、善男子、是を法施の會と爲す。若し菩薩にして是の法施の會に住する者をば、大施主と爲し、亦一切世間の福田と爲す」と。世尊、維摩詰是の法を說ける時、婆羅門衆の中の二百人、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發す。われ時に心清淨なることを得、未曾有なりと歎じて、稽首して維摩詰の足を禮し、卽ち瓔珞の價直百千なるを解いて以て之を上まつる。(七五)肯て取らず。われ言く、「居士、願はくは必ず、納受して意の與ふる所に隨へ」。(七六)維摩詰乃ち瓔珞を受けて、分ちて二分と作し、一分を持して、此の會中の一りの最下の乞人に施し、一分を以て彼の難勝如來に奉る。(七七)一切の衆會皆光明國土の難勝如來を見たてまつり、又珠瓔、彼の佛上に在りて變じて、四柱の寶臺と成りて、四面嚴飾して相障蔽せざることを見る。時に維摩詰神變を現じ已りて、又是の言を作さく、(七八)「若し施主等しき心をもて、一りの最下の乞人に施すこと、猶し如來の福田の相の如く分別する所無く、大悲を等うして、果報を求めずば、是を則ち名づけて具足法施と曰ふ」と。城中の一りの最下の乞人、是の神力を見、其の所說を聞きて、(七九)皆阿耨多羅三藐三菩提心

【七五】旣に法施の妙を說く、有相の財施何するものぞ

【七六】瓔珞を二分して最卑の乞人と最尊の如來とに奉るは是れ尊卑殊なりと雖も、福を生ずること異ならず、財施なりと雖も平等を以て本旨とすべきことを示す。

【七七】二の神變を上宮の御疏には、四柱は一切如來の字・語・身・法の四等普く四生を覆ふことを表示し、又四面の不障蔽は佛陀の義・法・詞・樂說の四辯を以て物を化するに障なきの表徵となせり。

【七八】若し平等の心ありて、佛凡を分たず、聖愚を論ぜずんば、財施中旣に法施あり。具足法施とは卽財施中に法施を具足するの意なり。新譯に「是を圓滿法施祠祀」となすと語盡せり。

【七九】乞者一人にて皆道心を發せりとは稍文義矛盾す、新譯

を發したりき。故にわれ彼に詣りて疾を問ふに任へず。』

是の如く、諸の菩薩、各各佛に向ひて其の本緣を說き、維摩詰の所言を稱述して、皆曰ふ、『彼に詣りて疾を問ふに任へず』と。

曰く「時にこの乞人かの神變を見、その所說を聞きて不退轉增上意樂を得たり」と、文理今譯に比して明了なり。

卷の第五

〔一〕問疾品第五

爾の時、佛、〔二〕文殊師利に告げたまはく、『汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。』文殊師利佛に白して言さく、『世尊、(一)〔三〕彼の上人は酬對を爲し難し。(二)深く實相に達して、(三)善く法要を説き、(四)辯才滯り無くして、(五)智慧無礙なり、(六)一切の菩薩の法式悉く知り、(七)〔四〕諸佛の祕藏に得入せざるなし。(八)衆魔を降伏して、(九)神通に遊戲し、(十)其の〔五〕慧・方便皆已に得度せり。然りと雖も、當に佛の聖旨を承けて彼に詣りて疾を問ふべし』と。是に於て、衆中の諸の菩薩〔六〕・大〔七〕弟子、釋・梵・四天王、咸く是の念を作すらく、

【一】問疾品とは、世尊上來五百の聲聞弟子及び八千の菩薩に疾を問ふことを命ずと雖も、各昔日の屈辱を受けたるを陳べて、皆辭して往くに任へずと曰ふ、今ま文殊に至りて旨を奉じ即ち往訪慰問の大任に當り、方に問疾を成ずる故に問疾品と稱す。是の品に至り本經の主人公初めて上場し文殊と龍虎相搏つの壯觀を現出せんとす。實に本經の正宗分の利[illegible]なり。

【二】文殊師利（Mañjuśrī マンジユシユリー）とは漢に妙德と曰ふ。經に曰く曾て已に成佛し、名づけて龍種尊と曰ふと。

【三】維摩の勝德を嘆美するに十句あり、第一句は總じて其德を讚し、第二已下の九句は別して其大用を嘆ず。

【四】諸佛の祕藏とは、諸佛の身・口・意の三祕密藏なり。

【五】慧は實智、方便は權智なり、眞俗兩面の大智能。

【六】會座の菩薩三萬二千の中此た八千、聲聞八千の中唯五百、蓋し是衆中の錚錚なるもののみを撰み來る。

【七】此室内の空虛と侍者の除遣と一一深意あり、後段兩雄問答の伏線、

「今二大士文殊師利・維摩詰共に談ぜば、必ず妙法を說かん」と。即時に(六)八千の菩薩、五百の聲聞、百千の天人、皆隨從せんと欲す。是に於て文殊師利、諸の菩薩大弟子衆、及び諸の天人のために恭敬圍遶せられて、毘耶離大城に入る。爾の時に、長者維摩詰心に念ずらく、「今文殊師利大衆と倶に來る」と。即ち神力を以て、(七)其の室內を空くして、所有及び諸の侍者を除去し、唯だ一牀を置きて、疾を以て臥す。文殊師利既に其の舍に入りて、其の室空にして諸の所有無く、獨り一牀に寢ぬるを見る。時に維摩詰の言く、(八)「善來、文殊師利。(九)不來の相にして來り、不見の相にして見る。」文殊師利の言く、「是の如し、居士。(一〇)若し來り已れば、更に來らず。若し去り已れば更に去らず。所以何んとなれば、來る者從來する所無く、去る者所至無し、見る可き所の者は、更に見る可からず。(一一)且く是の事を置く。居士、是の疾寧ろ忍ぶ可きや不や。療治損有りて增するに至らざるや。世尊慇懃に問を致すこと無量なり。(一二)居士、是の疾何の所因より起れる、其の生ずること久しきや、當に云何か滅すべき。」維摩詰の言く、「(一三)癡より愛あり、則ち我が病生ず。(一四)一切衆生病めるを以て、是の故

【八】先づ一問答、賓主の禮、堂堂として既に是尋常ならず。

【九】主の迎辭は本より跡を現するに就きて云ふ、向下門の意、法身跡を現して降臨す、自ら是主言の體をなす。

【一〇】賓の答辭は跡より本を推す、化主既にあり、蓋し是法身の所現のみ、文殊備使として來れる自重、正に賓客の體を得。

【一一】且く是の事を置く一轉して世諦に同じ來る、情味十分なり。

【一二】文殊の問三箇あり、病因と、病間と、病滅なり。

【一三】維摩は一切衆生の貪瞋の病、並に是の愚を病とす、先づ第一の病因を喝破して、[illegible]より愛あり、即ち無明[illegible]を本として、愛(六・三三)の[illegible]則生ず、更に無明は十二縁起も[illegible]見なり、即ち迷の本は

にわれ病む。若し(一五)一切衆生病えざることを得れば、則ち我が病滅せん。所以何んとなれば、菩薩は衆生の爲の故に生死に入る、生死有れば病有り、若し衆生病を離るることを得れば、則ち菩薩は復た病無けん。譬へば長者、唯一子有りて、其の子病を得れば、父母亦病み、子の病愈れば、父母も亦愈るが若し。菩薩も是の如し、諸の衆生に於て之を愛すること子の若し、衆生病むときは菩薩も病み、衆生の病愈れば菩薩も亦愈ゆ。』又言ふ、『是の病何の所因よりか起る。』『菩薩の疾は(一六)大悲を以て起る。』文殊師利の言く、(一七)『居士、此の室何を以てか空にして侍者無きや。』維摩詰の言く、(一八)『諸佛の國土も、亦復た皆空なり。』又問ふ、『(一九)何を以てか空なる。』答て曰く、(二〇)『空を以て空なり。』又問ふ、『空何を用てか空なる。』答て曰く、(二一)『無分別空を以ての故に空なり。』又問ふ、『空、分別す可きや。』答て曰く、(二二)『分別も亦空なり。』又問ふ、『空當に何に於てか求むべき。』答て曰く、(二三)『當に六十二見の中に於て求むべし。』又問ふ、『六十二見當に何に於てか求むべき。』答て曰く、(二四)『當に諸佛の解脱の中に於て求むべし。』又問ふ、『諸佛の解脱當に何に於てか求むべき。』答て曰く、(二五)『當に一切

無明なるを明す。

【一四】衆生迷へる間、吾病む、衆生無邊誓願度なればなり。

【一五】化すべき衆生なきに至りて大願盡く。

【一六】天下の憂に先ちて憂ふるは大丈夫の事、菩薩の疾は唯大慈悲の爲に起る、一結の獅子吼威大千に震ふ。

【一七】維摩詰の室の空なるに由りて玄旨を發揮す、文殊は事を以て問ひ、居士は理を以て答ふ。

【一八】一切皆空、固より論を待たず。

【一九】已下六番の問答ありて往復辯難して空性を明にす。

【二〇】一切皆空、空已外に一法なし、是空を以て空なる所以。

【二一】主觀より說き來る。

【二二】主客兩觀唯共に空なり。

【二三】特に外道迷妄の見を擧ぐ

衆生の心行の中に於て求むべし。又仁の問ふ所の、「何ぞ侍者無き」とは、一切の(二六)衆魔及び諸の外道、皆わが侍なり。所以何んとなれば、衆魔は生死を樂ふ、菩薩は生死に於て捨てず。外道は諸見を樂ふ、菩薩は諸見に於て動せざればなり。』

文殊師利の言さく、『居士の疾む所、何等の相とかせん。』(二七)維摩詰の言く、『わが病形無し、見る可からず。』又問ふ、『此の病、身と合するや、心と合するや。』答て曰く、『身と合するに非ず、身相離るるが故に。心と合するに非ず、心如幻なるが故に。』又問ふ、『地大・水大・火大・風大、此の四大に於て、何れの大の病なるや。』答て曰く、『是の病は、地大に非ず、亦地大を離れず、水・火・風大も亦復是の如し。(二八)而も衆生の病は四大より起る。其の病あるを以て、是の故に我が病あり。』

(二九)爾の時に文殊師利、維摩詰に問うて言さく、『菩薩云何が、疾有る菩薩を慰喩すべきや。』維摩詰の言く、『(三〇)身の無常なることを説きて、身を厭離することを説かざれ。身は苦有ることを説きて、涅槃を樂ふことを説かざれ。身の無我なることを説きて、而も衆生を教導すべきことを説き。

卽その六十二見の擧體卽空なり、中に就て求む可き也、既に空中に求むべしと云ふ、卽ち求む可き無きの意なり。六十二見は上に已に註す。

【二四】迷見と解脱と畢竟空に歸す。

【二五】諸佛の解脱は畢竟一切衆生の內心と外行とに過ぎず。

【二六】言何ぞ痛快、流轉を樂ふもの、迷見に著するもの、取りて之を僕婢とす。

【二七】已下疾の相に因て論す。四大の本性、自ら患無し、衆緣既に會して、增損相越すれば患乃ち生ずるのみ、從つて病有りと云はんと欲するも、本性自ら病無きが故に言はん樣なし、相假つて有るが故に病は地に非ず亦地を離れたるに非ず、

【二八】金光明の除病品を見よ。

【二九】已下新學の菩薩の爲に汎

身の空寂なることを說きて、畢竟寂滅なりと說かざれ。先罪を悔ゆべきことを說きて、（三一）過去に入ることを說かざれ。己が疾を以て、彼が疾を愍み、（三二）當に宿世無數劫の苦を識るべし。當に一切衆生を饒益せんことを念ふべし。所修の福を憶ひ、淨命を念じて、憂惱を生ずること勿れ。常に精進を起して、當に（三三）醫王と作りて、衆病を療治すべし。菩薩、是の如く疾有る菩薩を慰喩して、其をして歡喜せしむべし。』文殊師利の言く、

（三四）『居士、有疾の菩薩云何が其の心を調伏せん。』維摩詰の言く、『有疾の菩薩、應に是の念を作すべし。（三五）今われ此の病は、皆、前世の妄想・顚倒・諸の煩惱より生せり、實法有ること無し、誰か病を受くる者あらん。所以何んとなれば、四大合するが故に假に名づけて身と爲す、四大は主無し、身も亦我無し。又此の病の起るは、皆我に著するに由る、是の故に我に於て著を生ずべからず。既に病の本を知れば、卽ち我想及び衆生の想を除く。當に（三六）法相を起すべし。是の念を作すべし。（三七）但だ衆法を以て此の身を合成す、起は唯だ法のみ起り、滅は唯だ法のみ滅す。又此の法は各相知らず、起る時われ起ると言はず、滅する時われ滅すと言はず。（三八）彼の有疾の

く一、慰喩（外化行）。二、調伏（自行）を論明す。今第一段

【三〇】 無常・苦・無我・空の四相に就きて無著無執の大道を示す。

【三一】 過去に入るは過去に罪業の性定めてありと執し、罪性畢竟空寂なるを知らざるをいふ。

【三二】 今世病苦の輕を以て宿世多生の苦痛重かりしを推す。

【三三】 身心の救療を指す。

【三四】 已下第二段調伏の問答。維摩の答凡て三大段あり、第一は自行化他につき調伏を明し、第二は執著を離るゝにつきて論じ、第三は菩薩の種種中道の行に就て論ず。今第一大段、此段下に二支段あり第一小段は先づ自行上より見て病性の畢竟空無なるを觀す。

【三五】 病體實法なく、唯假法のみ。既に身なく、我なく、衆

菩薩、法想を滅せんとせば、當に是の念を作すべし、此の法想とは、亦是れ顛倒なり、顛倒とは即ち是れ大なる患なり。我れ之を離るべし。云何なるをか離ると爲す、（三九）我と我所とを離るるなり。云何が我・我所を離るる、謂く（四〇）二法を離るるなり。云何が二法を離るる、謂く內・外の諸法を念せず、平等を行ずるなり。云何が平等なる、謂く我も等しく、涅槃も等し。所以何んとなれば、我及び涅槃、此の二は皆空なればなり。何を以てか空と爲す、但だ名字を以ての故に空なり。此の如きの二法は決定の性無し。是の平等を得れば餘病あること無く、（四一）唯だ空病のみ有り、空病も亦空なり。（四二）是れ有疾の菩薩は、所受無きを以て（四三）諸受を受け、未だ佛法を具せず、亦受を滅して證を取らず。（四四）設し身に苦有らば惡趣の衆生を念じて大悲心を起すべし。われ既に調伏す、亦當に一切衆生を調伏すべし。但だ其の病を除きて、法を除かず。病の本を斷せんとせば、而も之を敎導す。何をか病の本と謂ふ。謂く、（四五）攀緣有り、攀緣有るに從ふ則ち病の本と爲す。何ぞ攀緣せらるる。（四六）謂く之れ三界なり。云何か攀緣を斷ずる。無所得を以てす。若し無所得なれば則ち攀緣無し。何をか無所得と謂ふ。謂く

生なし、誰か病を受くるものあらん。これ假名空卽人空の方面より見たるもの。

【三六】實法の合成を以て論ず、是れ小乘倶舍諸家の觀なり。

【三七】一切身我の起滅は唯七十五の諸法の起滅のみ、全く機械的の觀察なり。

【三八】向きには實法を以て我を濟す、已下は空を以て法を遣り、心を調伏す。是法空觀なり。

【三九】我は萬物の主たり、萬物は我所と爲る、若し我と我所とを離るれば即ち法として離れざるなきに至る。

【四〇】內外・主客等の差別對立を離る、即平等唯一の眞性のみなり。

【四一】空病の一語、本經の眼目なり、深く玩味せよ。

【四二】第二小段、第一小段の自行に就て心を調伏せしに相對

(四七)二見を離る。何をか二見を離るると謂ふ。謂く内見・外見是れ無所得なり。文殊師利、是を有疾の菩薩其の心を調伏すと爲し、老・病・死の苦を斷ずと爲す、是れ菩薩の菩提なり。若し是の如くならずんば、已に修治する所、慧利無しと爲す。譬へば怨に勝ちて、乃ち勇と爲す可きが如し。是の如く、兼て老・病・死を除く者は菩薩の謂なり。

(四八)彼の有疾の菩薩、復た是の念を作すべし、わが此の病の眞に非ず、有に非ざるが如く、衆生の病も亦眞に非ず有に非ずと。是の觀を作す時、諸の衆生に於て、(四九)若し愛見の大悲を起しなば、卽ち捨離すべし。所以何となれば、菩薩は(五〇)客塵煩惱を斷除して大悲を起す。愛見の悲は卽ち生死に於て疲厭の心有り。若し能く此

し今は外化を憶うて心を調伏することを明す。

【四三】 受(ヴエーダナ Vedana)とは苦・樂・捨の三受を謂ふ。若し能く受を解いて受無ければ、卽ち能く衆生の爲に生を受けて、忍んで三受を受け得ん。

【四四】 天下更に我より苦あるもの多し、人世の極苦剝毒を極むと雖、阿鼻の猛炎熱鐵に比する尙甚輕し。

【四五】 諸境の無を攀緣して有なりと執するが故に苦惱生じ病苦至る。

【四六】 有を執する所、卽欲・色・無色歷然たり。

【四七】 二見とは内に内我の妄想有り外に諸法有りと爲すの顚倒なり、此の二虛假にして終に得る所なし。故に内見外見是れ無所得と云ふ。

【四八】 第二大段執著脫離の點より病を論す、卽先に自行外化を憶うて以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存じて修行すれば所修廣からず、物と其の苦樂を同うする能はざれば此に著を離るるを勸めて心を調伏することを明す。

【四九】 愛見の大悲とは、衆生有ることを見て心に愛著を生じ此に悲を生ず是なり、此は善なりと雖も、猶ほ是れ相を存じて、自他の二境を平等にして廣く化すること能はざれば是を排す。

【五〇】 客塵煩惱とは、一切の不善。煩惱は理恒に在るに非ず、終に必ず除遣するの義ある故に客と爲す。菩薩は自他の客塵・煩惱を斷除して無相の大悲を起す。

【五一】 已下縛と解とにつき詳論す。

【五二】 縛(バンダ Banda)解(ニルヴンダ Nirbanda)の說明。

を離るれば、疲厭有ること無し。在在の所生、愛見の爲に覆はれざればなり。(五一)所生に縛無し、能く衆生の爲に法を說きて縛を解く、佛の所說の如し。若し自ら縛有りて、能く彼の縛を解くといはば、是の處有ること無けん。若し自ら縛無くして彼の縛を解くといはば斯れ是の處有り。是の故に菩薩縛を起す應からず。(五二)何をか縛と謂ひ、何をか解と謂ふ。(五三)禪味に貪著する、是れ菩薩の縛なり、(五四)方便を以て生ずる是れ菩薩の解なり。

(五五)又方便無き慧は縛なり、方便ある慧は解なり。慧無き方便は縛なり、慧有る方便は解なり。何をか方便無き慧は縛なりと謂ふ。謂く菩薩愛見の心を以て佛土を莊嚴し、衆生を成就し、空・無相・無作の法の中に於て而も自ら調伏す。是を方便無き慧は縛なりと名づく。何をか方便有る慧は解なりと謂ふ。謂く、愛見の心を以て佛土を莊嚴し、衆生を成就せず、空・無相・無作の法の中に於て、以て自ら調伏して、而も疲厭せざる、是を方便有る慧は解なりと名づく。何をか慧無き方便は縛なりと謂ふ。謂く、(五六)菩薩貪欲・瞋恚・邪見等の諸の煩惱に住して、而も衆の德本を植う、是を慧無き方便は縛なりと名づく。何をか慧有る方便を解なりと謂ふ。謂く、諸の貪欲・瞋恚・邪見等の諸の煩惱を離れ、衆の德本を植ゑて、阿耨多羅三藐三菩提に迴向する。是を慧有る方便は解なりと名づく。文殊師利、彼の有疾の菩薩は、

【五三】禪味に貪著するものは業に從ひ生を受く。

【五四】生死は厭ふ可きに然も厭はずして善く其の嶮難に處す故に之を方便と稱す。卽衆生化度のために自在に應生する是方便なり。

【五五】大乘の通軌として慧（Prajñā）と方便（Upāya）とは必らず相帶するを要とす。

【五六】空慧なく、唯行の一面のみ、貪・瞋・邪見の爲に制縛せらるゝ止むを得ざる所なり。

是の如く諸法を觀ずべし。　(五七)又復た身は無常・苦・空・非我なりと觀ずる、是を名づけて慧と爲す。身に疾有りと雖も、常に生死に在りて、一切を饒益して厭倦せざる、是を方便と名づく。又復た身を觀ずるに、身病を離れず、病身を離れず、是の病、是の身、新に非ず、故に非ず、是を名づけて慧と爲す。(五八)設ひ身に疾有りとも永く滅せざる、是を方便と名づく。

(五九)文殊師利、有疾の菩薩は是の如く其の心を調伏して、其の中に住せず、亦復た(六〇)不調伏の心に住せざるべし。所以何んとなれば、若し不調伏の心に住すれば、是れ愚人の法なり。若し　(六一)調伏の心に住すれば、是れ聲聞の法なり。是の故に菩薩は、　(六二)當に調伏・不調伏の心に住すべからず。(一)此の二法を離るる是れ菩薩の行なり。(二)生死に在て汙行を爲さず、涅槃に住して永く滅度せざる、是れ菩薩の行なり。(三)凡夫の行に非ず、賢・聖の行に非ざる、是れ菩薩の行なり。(四)　(六三)垢行に非ず、淨行に非ざる、是れ菩薩の行なり。(五)魔行を過ぐと雖も、衆魔を降伏することを現ずる、是れ菩薩の行なり。(六)(六四)一切智を求めて、非時の求むる無き、是れ菩薩の行なり。(七)(六五)諸法の不生なることを觀ずと雖も、而も正位に入らざる、

【五七】已下更に方便智慧の相に付き、其顯著の點を說明す、要するに慧は觀照にして方便は無疲倦、有情利益の大行なり。

【五八】永く滅せざるとは病を恐れて滅度を取らざるの義也、新譯に曰く「身心及び諸の疾の畢竟寂滅を求めず」と。譯し得て更に明了。

【五九】已下第三大段廣く菩薩の種種の行を明して、調伏するの義を結成するなり。

【六〇】不調伏心は貪・瞋・癡・慢・生死流轉の心相なるを以て是凡愚の法なり。

【六一】一切の煩惱を斷滅したるもの貪・瞋・癡・慢・生死の法永く止みたるもの甚贊すべし、而も之に著して生死に入りて度生するの意なくんば、是聲聞自利の行のみ。

【六二】卽二邊に執著せざる中道

是れ菩薩の行なり。(八)【六六】十二縁起を觀ずと雖も、而も諸の邪見に入る、是れ菩薩の行なり。(九)一切衆生を攝すと雖も、而も愛著せざる、是れ菩薩の行なり。(十)【六七】遠離を樂ふと雖も、而も身心の盡くるに依らざる、是れ菩薩の行なり。(十一)【六八】三界を行ずと雖も、而も法性を壞せざる、是れ菩薩の行なり。(十二)【六九】空を行ずと雖も、而も衆の德本を植うる是れ菩薩の行なり。(十三)無相を行ずと雖も、而も衆生を度する、是れ菩薩の行なり。(十四)無作を行ずと雖も、而も受身を現ずる、是れ菩薩の行なり(十五)無起を行ずと雖も、而も一切の善行を起す、是れ菩薩の行なり。(十六)六波羅蜜を行ずと雖も、而も遍く衆生の心・心數の法を知る、是れ菩薩の行なり、(十七)【七〇】六通を行ずと雖も、而も漏を盡さざる、是菩薩の行なり。

の法なり。已下三十二の中道行を列擧す。本文中の標數に徵して知れ。

【六三】垢行(或は穢行)煩惱罪業具足の行、淨行之に反す。

【六四】非時の求めとは功行未だ足らずして而も至足の果を求むるを云ふ。

【六五】諸法不生卽ち卽空觀を爲して空を證して住すべきに住せず有の中に物を化す。

【六六】十二緣起・無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死、この緣起の正見斷邪の道を修し却て邪見に同ず。

【六七】遠離とは煩惱を離る也。身心の盡くるに依らずとは是れ二乘に異る所以なり。

【六八】三界差別の行を修し、而も平等無二の法空に順ず。

【六九】空を行じて萬善を植う、是佛の中道なり、頑空、禪を談じて念佛を誹る野狐禪輩、

此至文を三誦せよ。

【七〇】六通の名目前に出づ、漏を盡さざるは一分の煩惱を餘して度生の爲にする也。

【七一】四無量心は普道梵世(Brahmaloka)(卽四禪)に生ずる因なれども度生の爲に自己の靜樂を欲せず

【七二】念住(Smṛtyupasthāna)。身は不淨と觀じ、受は苦と觀じ、心は無常と觀じ、法は無我と觀ずるなり、この四念處は畢竟身・受・心・法の滅を主とするも大乘中道の義は然らず

【七三】四如意足(或は四神足)(Ṛddhipāda)は、欲(Chanda)念(Citta)勤(Vīrya)觀(Mīmāṃsā)是なり。

【七四】止觀助道とは、止は定にして觀は慧なり。此の二は助道の勝法なり。

【七五】外儀聲聞內觀菩薩の意。

【七六】空竟淨相は第一義空本來

(十八)(七一)四無量心を行ずと雖も、而も梵世に生ずるを貪著せざる、是れ菩薩の行なり。(十九)禪定・解脫三昧を行ずと雖も、而も禪に隨ひて生ぜざる是れ菩薩の行なり。(二十)(七二)四念處を行ずと雖も、畢竟じて永く身・受・心・法を離れざる、是れ菩薩の行なり。(二十一)四正勤を行ずと雖も、而も身心の精進を捨てざる、是れ菩薩の行なり。(二十二)(七三)四如意足を行ずと雖も、而も自在神通を得る、是れ菩薩の行なり。(二十三)五根を行ずと雖も、而も衆生の諸根の利鈍を分別する、此れ菩薩の行なり。(二十四)五力を行ずと雖も、而も佛の十力を求むるを樂ふ、是れ菩薩の行なり。(二十五)七覺分を行ずと雖も、而も佛の智慧を分別する、是れ菩薩の行なり。(二十六)八正道を行ずと雖も、而も無量の佛道を行ずるを樂ふ、是れ菩薩の行なり。(二十七)(七四)止・觀・助道の法を行ずと雖も、而も畢竟じて寂滅に隨はざる、是れ菩薩の行なり。(二十八)諸法の不生・不滅を行ずと雖も、而も相好を以て其身を莊嚴する、是れ菩薩の行なり。(二十九)(七五)聲聞・辟支佛の威儀を現ずと雖も、而も佛法を捨てざる、是れ菩薩の行なり。(三十)(七六)諸法の究竟淨相に隨ふと雖も、而も所應に隨ひて爲に其身を現ずる、是れ菩薩の行なり。(三十一)諸佛の國土の永寂如空なるを觀ずと雖も、而も種種の清淨の佛土を現ずる、是れ菩薩の行なり。(三十二)(七七)佛道を得て法輪を轉じ涅槃に入ると雖も、而も菩薩の道を捨てざる、是れ菩薩の行なり。」是の語を說ける時、文殊師利の將ゐる所の大衆、(七八)其中の八千の天子、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發したりき。

形相なし。

【七七】成佛・轉法輪・入涅槃は衆生化益の法儀なり、菩薩之を現すと雖永く滅せず、還た生死に入りて菩薩の行を修す。

【七八】菩薩聲聞弟子等は皆發大乘心の聖衆なり、其中未得道の八千の諸天茲に始めて大乘心を發す。

卷の第六

(一)不思議品第六

爾の時、舍利弗、此の室中に牀座有ること無きを見て、是の念を作すらく、「斯の諸の菩薩・大弟子衆、當に何れに於てか坐すべきや」と。長者維摩詰其の意を知りて、舍利弗に語りて言く、『云何ぞ仁者、法の爲に來るや、牀座を求むるや。』舍利弗の言く、『われ法の爲に來る、牀座の爲に非ず。』維摩詰の言はく、『(二)唯だ舍利弗、夫れ法を求むる者は、軀命を貪らず、何に況んや牀座をや。夫れ法を求むる者は、(三)色・受・想・行・識の求め有るに非ず、(四)界・入の求め有るに非ず、(五)欲・色・無色の求め有るに非ず。唯だ舍利弗、夫れ法を求むる者は、(六)佛に著して求めず、法に著して求めず、衆に著して求めず。夫れ法を求むる者は、(七)苦を見て求むる無く、集を斷ずるの求め無く、盡證・修道に造たるの求め無し。(八)所以何んとなれば、(九)法には戲論無し。若しわれ當に苦を見て集を斷じ、滅を證し道を修

【一】不思議品とは維摩居士種種の不思議の事を示現し不思議解脫の法門を說くが故に名づく。

【二】舍利弗が牀座を念ひつゝ尙法の爲に來ると云へるを訶し、眞實に法を求むる者は一切の法に於て求むる所無きことを明す。

【三】是五蘊なり。

【四】界入とは十八界、十二入を云ふなり。六根・六識・六境を十八界とし、六根・六境を十二入といふ。

【五】三界に於て求むるにあらず

すべしと言はば、是れ即ち戲論なり、法を求むるに非ざるなり。(二)唯だ舍利弗、法をば、(一〇)寂滅と名づく、若し生滅を行ずれば、是れ生滅を求むるなり、法を求むるに非ざるなり。(三)法をば、(一一)無染と名づく、若し法乃至涅槃に染すれば、是れ即ち染著なり、法を求むるに非ざるなり。(四)法は行處無し、若し法を行ずれば、是れ即ち行處なり、法を求むるに非ざるなり。(五)法は(一二)取・捨無し、若し法を取捨すれば、是れ即ち取捨なり、法を求むるに非ざるなり。(六)(一三)法には處所無し、若し處所に著せば、是れ即ち著處なり、法を求むるに非ざるなり。(七)法をば無相と名づく。若し相に隨ひて識れば、是れ即ち相を求むるなり、法を求むるに非ざるなり。(八)法は(一四)住すべからず、若し法に住せば、是れ即ち法に住するなり、法を求むるに非ざるなり。(九)法は、(一五)見・聞・覺知すべからず、若し見・聞・覺知を行ぜば、是れ即ち見・聞・覺知なり、法を求むるに非ざるなり。(十)法をば(一六)無爲と名づく、若し有爲を行ぜば、是れ有爲を求むるなり、法を求むるに非ざるなり。是の故に舍利弗、若し法を求むる者は、一切の法に於て求むる所無かるべし』と。是の語を說ける時、五百の天子、諸法の中に於て法眼

【六】佛・法・衆(僧)の三寶に於て著求するにあらず。

【七】苦集滅道の四諦につきいふ。盡證は滅諦にして修道は道諦なり。

【八】已下、法の體性の中、十種を舉げて法の求むべからざるを說く即ち一無戲論(Aprapañca)二無寂(Śānta)三無染(Abipsa)四無行處、五無取捨六無處所、七無相(Animitta)八無住、九無見聞覺知、十無爲(Asaṃskṛta)是なり。

【九】無戲論は法性の不可說の邊をいふ。

【一〇】法性本來空寂にして生滅の相なし。

【一一】生死・涅槃共に一方に染すれば、是既に法にあらず、法は無染を體とすればなり。

【一二】善法の取るべきなく、惡法の捨つべきなき、平等の性これ法なり。

淨を得たり。

(一七)爾の時に長者維摩詰、文殊師利に問ふ、『仁者、無量千萬億(一八)阿僧祇の國に遊びて、何等の佛土にか好き上妙の功德成就せる師子の座有りしや。』文殊師利の言く、『居士、東方三十六(一九)恒河沙の國を度りて世界有り、(二〇)須彌相と名づく、其の佛を須彌燈王と號し、今現に在したまふ。彼の佛身の長さ八萬四千(二一)由旬なり。其の師子座の高さ八萬四千由旬にして、嚴飾第一なり』と。是に於て長者維摩詰、神通力を現じ、即時に彼の佛、三萬二千の師子の座の高廣にして嚴淨なるを遣して、維摩詰の室に來入す。諸の菩薩・大弟子・釋・梵・四天王等、昔より未だ見ざる所なり。(二二)其の室廣博にして悉く皆三萬二千の師子座を包容するに妨礙する所無し。毘耶離城及び閻浮提(二三)四天下に於ても亦迫迮せず、悉く見るに故の如し。爾の時、維摩詰、文殊師利に語るらく、『師子の座に就て、諸の菩薩・上人と倶に坐したまはば、當に自ら身を立すること彼の座像の如くなるべし』と。

(二四)其の神通を得たる菩薩は、即ち自ら形を變じ、四萬二千由旬と爲りて、師子の座に坐す。諸の新發意の菩薩、及び大弟子は皆昇ること能はず。爾

【一三】 所謂空間超越なり。

【一四】 不守自性、是法の體相、豈永く一事一態に住せんや。

【一五】 法は所謂過境的不可知の實體なり。

【一六】 前九總じて無爲の一語に盡く。

【一七】 已下、座を須彌燈王 (Sumerupradīparāja) に借りて以て所須に應す。

【一八】 阿僧祇とは梵語の阿僧祇耶 (Asaṃkhyeya) の略にして、阿は無、僧祇耶は數の義、即ち無數の意なり。

【一九】 恒河沙 (Gaṅgānadyupama) とは印度の大河ガンジス河の沙の數程の大を云ふ。

【二〇】 Sumeruketu. 新譯山幢とす。

【二一】 Yojana. 一由旬は現今の約九英里に當る。

【二二】 小中大を容れて些の妨礙なし、廣大の不思議にあらず

の時、維摩詰舍利弗に語りて師子の座に就かしむ。舍利弗の言く、『居士、此の座高廣なり、われ昇ること能はず。』維摩詰の言く、（二五）『唯だ舍利弗、須彌燈王如來の爲に禮を作せば、乃ち坐することを得べし。』是に於て新發意の菩薩及び大弟子、即ち須彌燈王如來の爲に禮を作して、便ち師子の座に坐することを得たり。

（二六）舍利弗の言く、『居士、未曾有なり、是の如きの小室に乃ち此の高廣の座を容受するに、毗耶離城に於て妨礙する所無し。又閻浮提の聚落・城邑及び四天下、諸天・龍王・鬼神の宮殿に於ても、亦迫迮せず。』

維摩詰の言く、『唯だ舍利弗、諸佛菩薩に（二七）解脱有り不思議と名づく。若し菩薩にして是の解脱に住する者は、須彌の高廣を以て芥子の中に内るるに、增減する所無し、須彌山王の本相故の如し。而も四天王忉利の諸天己が入る所を覺らず知らず、唯だ度すべき者は乃ち（二八）須彌の芥子の中に入ることを見る、是を不可思議解脱の法門と名づく。又四大海水を以て、一毛孔に入る、（二九）魚・鼈・黿・鼉・水性の屬を嬈さず、而も彼の大海の本性故の如し。諸の龍・鬼神・阿修羅等己が入る所を覺らず知らず。此の衆生に於

や。而も小大共に空、空中空を現ず。果して何の疑かあらんや。

【二三】須彌四邊にある四大洲、東弗婆提(Pūrvavideha)、西俱耶尼(Avaragodānīya)、南閻浮洲(Jambudvīpa)、北俱留州(Uttarakuru)。

【二四】大乘究竟の理、二乘及初心菩薩の解了する能はざる所なるを表示す、また大乘無染の行は彼等の堪ふる能はざるを明にす。

【二五】一念信佛の因緣、勝果を得るを明す、起信の修行信心分の意のみ、空法の中、淨土あり、讀者の眼光紙背に徹するを要す。

【二六】舍利子の讃嘆に因て廣く其の不思議の迹を明す、蓋し迹の甚く所無かるべからず、即ち是れ不思議解脫の法門なり。

ても亦嬈す所無し。又舍利弗、不可思議解脱に住する菩薩の三千大千世界を斷取すること、陶家の輪の如し。右の掌の中に著けて恒沙世界の外に擲過す、其の中の衆生、己が往く所を覺らず知らず、又復た還りて本處に置く。都て人をして往來の想有らしめず、而も此の世界の本相故の如し。又舍利弗、或は衆生有りて、久しく世に住することを樂ひて、而も度すべき者には、菩薩、【三〇】即ち七日を演べて以て一劫と爲し、彼の衆生をして之を一劫なりと謂はしむ。或は衆生有りて久しく住することを樂はずして、而も度すべき者には、菩薩即ち一劫を促て以て七日と爲して、彼の衆生をして之を七日なりと謂はしむ。又舍利弗、不可思議解脱に住する菩薩は、一切佛土の嚴飾の事を以て、集めて一國に在て衆生に示す。又菩薩は一切佛土の衆生を以て之を右の掌に置きて、十方に飛到して、遍く一切に示し、而も本處を動ぜず。又舍利弗、十方の衆生の諸佛を供養する具を、菩薩は一毛孔に於て皆見ることを得しむ。又十方國土の所有る日・月・星宿を、一毛孔に於て、普く之を見しむ。又舍利弗、十方世界の所有の諸の風を、菩薩は能く口の中に吸著すれども、而も身は損せず、外の諸の樹木亦摧け

【二七】 Acintya-vimokṣa.

【二八】 小中大を容れて綽綽餘裕あり、蓋諸法皆空なればなり。皆空なるが故に小大相礙ふる所なし。

【二九】 黿は鼈の大なるもの、鼉は鱷魚の一種、この字面は中庸より借る。新譯も亦これを用ひて曰く、『彼魚・鼈・黿・鼉及餘種種の水族の生類・諸の龍神等の一切の有情をして憂怖惱害せしめず』と。

【三〇】 空間に於て大自在を得たるのみならず、又時間に於ても大自在を得たり。時劫修短自在の大用を見よ。

【三一】 劫波 Kalpa の略語、一劫は一世界の生起より終盡までの一期を指す、世界滅盡の際には大火先づ洞然として至り一切を燒き盡すも、この大火を腹中に選けしむなり。

【三二】 Pratyekabuddha. の略語、

て折れず。又十方世界の(三一)劫、盡きて燒くる時、一切の火を以て、腹中に内るるに、火事故の如くして、而も害を爲さざるなり。又下方の過恒沙等の諸佛の世界に於て、一佛土を取り、擧げて上方に著け、恒河沙無數の世界を過ぐる、針鋒を持ちて一棗葉を擧ぐるが如くにして、而も嬈す所無し。又舍利弗、不可思議解脱に住する菩薩は、能く神通を以て佛身と作し、或は(三二)辟支佛の身を現じ、或は聲聞の身を現じ、或は帝釋の身を現じ、或は梵王の身を現じ、或は(三三)世王の身を現じ、或は(三四)轉輪聖王の身を現ず。又十方世界の所有の衆聲、上・中・下の音、皆能く之を變じて、佛の聲と作さしめて、無常・苦・空・無我の音、及び十方諸佛所説の種種の法を演出し、皆其の中に於て普く聞くことを得しむ。舍利弗、われ今略して菩薩の不可思議解脱の力を説く。若し廣く説かば劫を窮むるとも盡きず。

是の時に(三五)大迦葉、菩薩の不可思議解脱の法門を説くを聞きて未曾有なりと歎じて、舍利弗に謂へらく、『譬へば、人有りて盲者の前に於て、衆の色像を現ずれども、彼の見る所に非ざるが如し。一切の聲聞の是の不可

覺して獨覺となす、聲聞(Śrāvaka)の師教を聞きて悟了するに對し、無師獨悟するを獨覺とす、また、之を緣覺といふ、十二緣起の理を觀じて獨り解脱に入るが故なり。

【三三】新譯に依るに世王は護世王(Lokapāla-rāja)の略にて、四天王を指すが如し、古譯には之を缺けり。或は本世主(Prajāpati)に作る、是世界創造の主梵天の異名なり。

【三四】(Cakravartirāja)世界統一の王者、轉輪は其七寶の一なる輪(Cakra)を轉ずるが故に名づく。

【三五】大迦葉自ら其の分に非ざることを慨歎して新學の者に發心を勸むることを明す、蓋し法は一にして而も其れを聽く者に於て異有り、此の法を聞きて分を得る有り分を得ざる者有り。

思議解脫の法門を聞きて、解了する能はざること、此の如しと爲す。智者は是を聞きて、其れ誰れか阿耨多羅三藐三菩提心を發さざらん。我等何んすれぞ、(三六)永く其の根を斷ち、此の大乘に於て已に敗種の如きや。一切の聲聞は是の不可思議解脫の法門を聞きて、皆應に(三七)號泣し、聲、三千大千世界に震ふべし。一切の菩薩は大に欣慶して此の法を頂受すべし。若し菩薩有りて、不可思議解脫の法門を信解せん者は、一切の魔衆之を如何ともすること無けん』と。大迦葉此の語を說ける時、三萬二千の天子、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。

(三八)爾の時に、維摩詰大迦葉に語るらく、『仁者、十方の無量阿僧祇の世界の中に魔王と作る者は、多くは是れ不可思議解脫に住せる菩薩なり。方便力を以ての故に、衆生を敎化し、現じて魔王と作る。(三九)又迦葉、十方無量の菩薩、或は人有りて從ひて手・足・耳・鼻・頭・目・髓・腦・血・肉・皮・骨・聚落・城邑、妻・子・奴婢、象・馬・車乘、金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀・眞珠・珂貝、衣服・飮食を乞ふものあらんに、此の如く乞ふ者は、多く是れ不可思議解脫に住する菩薩なり。方便力を以て、往きて之を試み、其をして

【三六】大乘菩薩の機根を斷絕して菩提の道芽を發生する能はざること猶敗種の如し。

【三七】羅漢等は三界見思一切の煩惱を斷じて號泣するなし、況んや三千に震ふことあらんや。今號泣すといふは假に讓して之を云ふ耳と。或曰く二乘は界內の一切煩惱を斷ずるも、結習未だ斷ぜず、故に次品天女の投華身に著す。故に二乘の絕望の悲泣ある所以なり。

【三八】已下、維摩詰、迦葉の歎を進成す。蓋し迦葉先に「若し菩薩有りて不可思議解脫の法門を信解せば、魔衆之を如何ともすること無けん」と言ひ、今現に新學の菩薩の魔の爲に擾亂せらるるを嫌す。所以に皆是れ魔は不可思議解脫に住する菩薩の方便なりと釋す。是進歎を以て大志を成ずるの第一なり。

堅固ならしむるなり。所以は何んとなれば不可思議解脱に住する菩薩は、威德力有り、(四〇)故に逼迫を行じて諸の衆生に、是の如きの難事を示す。凡夫は下劣にして力勢有ること無し、是の如く菩薩を逼迫すること能はず、(四一)譬へば龍象の蹴踏は驢の堪ふる所に非ざるが如し。是を不可思議解脱に住する菩薩の智慧方便の門と名づく。」

【三九】已下菩薩惡乞を現して布施波羅蜜修行の盡きんとして極まらざるものをして具足堅固ならしむるなり、是逆緣大志を成す第二。

【四〇】羅什曰く、衆生若し眞實の定相あらば則不思議の大士徒らに逼試を行じて其をして苦を受けしむべからず、眞實にあらざるを以て成就すべきこと易しと、至言なり。

【四一】此一句、直に大乘菩薩の器度自ら紛紛たる小乘輩の企及すべからざるを說破して餘蘊なし。

卷の第七

[一]觀衆生品第七

爾の時、文殊師利維摩詰に問うて言く、[二]「菩薩云何が衆生を觀ずる。」維摩詰の言く、「譬へば(一)幻師の所幻の人を見るが如し、菩薩の衆生を觀ずること此の若しと爲す。(二)智者の水中の月を見るが如く、(三)鏡中の其の面像を見るが如く、(四)熱時の炎の如く、(五)呼聲の響の如く、(六)空中の雲の如く、(七)水の聚沫の如く、(八)水上の泡の如く、(九)芭蕉の堅きが如く、(十)電の久く住するが如く、(十一)第五の[三]大の如く、(十二)第六の陰の如く、(十三)第七の情の如く、(十四)十三入の如く、(十五)十九界の如し。菩薩衆生を觀ずること此の

【一】觀衆生品とは菩薩衆生を觀ずることを明すに名づく。當品と次下の佛道品とは中根の人を化せんが爲なり。蓋し中根の人は上の問疾品を聞きて四の疑を起す、此の疑を已下次第に消解す。

【二】第一疑卽問疾に答へて菩薩は本と實病無し、但物の爲に病ありと說くを聞き、中根の人は理の中に實に衆生有るが故に病を現すとなし、必ず衆生を本と爲すと執す、此の執を遣らんが爲に廣く三十の譬を說きて衆生の畢竟無なるを喩し其執を去る。

【三】四大の外には大なく、五陰の外に第六陰なく、十二入・十八界等の法相已外に法なきを說き、衆生の假立なるを明す。

【四】Srotāpanna(シローターパンナ). 初果の聖者なり、見惑を斷盡す、身見(Satkāyadṛṣṭi)(サツトカーヤドリシユチ)は肉體實在を執する見にて、見惑中の一なり。

【五】Anāgāmin(アナーガーミン). 第三果の聖者、此位卽不還果を得れば其名の如く、復た三界に來生せず。

【六】無生忍位に入れる菩薩は已に根本無明を破る、況んや

若しと爲す。(十六)無色界の色の如く、(十七)焦穀の芽の如く、(十八)㊃須陀洹の身見の如く、(十九)㊄阿那含の入胎の如く、(二十)阿羅漢の三毒の如く、(二十一)得忍の菩薩の㊅貪・恚・毀禁の如く、(二十二)佛の煩惱の習の如く、(二十三)盲者の色を見るが如く、(二十四)滅盡定に入る者の㊆出入の息の如く、(二十五)空中の鳥の跡の如く、(二十六)石女の兒の如く、(二十七)化人の煩惱の如く、(二十八)夢の所見の已に寤めたるが如く、(二十九)滅度の者の受身の如く、(三十)無烟の火の如し。菩薩衆生を觀ずること此の若しと爲す。』

文殊師利の言く、㊇『若し菩薩是の觀を作さん者、云何か慈を行ぜん。』

維摩詰の言く、『菩薩是の觀を作し已りて自ら念ず、われ當に衆生の爲に斯の如きの法を說くべし、是れ卽ち眞實の慈なり。(一)寂滅の慈を行ず、所生無きが故に。(二)不熱の慈を行ず、煩惱無きが故に。(三)等の慈を行ず、三世に等しきが故に。(四)無諍の慈を行ず、所起無きが故に。(五)不二の慈を行ず、㊈内外合せざるが故に。(六)不壞の慈を行ず、畢竟盡の故に。(七)堅固の慈を行ず、心に毀るること無きが故に。(八)淸淨の慈を行ず、諸法の性淨きが故に。(九)無邊の慈を行ず、虛空の如くなるが故に。(十)阿羅漢の慈を行ず、結

毀禁の如き麁事をや、毀禁とは戒法を破るをいふ。

【七】滅盡定に入りしものは出入の息なし。

【八】第二疑問疾品に於て菩薩の衆生を愛する世の父母の子を愛するに喩ふるを聞きて中根の人は疑ひて謂へらく、世の父母の子を愛する重しと雖も是れ偏愛に過ぎず。菩薩の慈若し之に同ぜば愛見已ます何ぞ能く平等に物を化することを得んやと。故に今は其の疑を遣らんが爲に菩薩の慈は世相の慈悲なることを明す。二十九の慈悲を說く。

二十九慈
- 一—九……空理に依り
- 一〇—一三……三乘人に依り
- 一四—一七……佛果に依り
- 一八—二九……因中萬行に就き

（以上）慈悲の體を說く

【九】內とは根(感覺)にして、外とは塵(對境)なり。空理の

賊を破るが故に。(十一)菩薩の慈を行ず、衆生を安ずるが故に。(十二)如來の慈を行ず、【一〇】如相を得るが故に。(十三)佛の慈を行ず、衆生を覺せしむるが故に。(十四)自然の慈を行ず、【一一】無因にして得るが故に。(十五)菩提の慈を行ず、等しく【一二】一味なるが故に。(十六)無等の慈を行ず、諸愛を斷ずるが故に。(十七)大悲の慈を行ず、導くに大乘を以てするが故に。(十八)無厭の慈を行ず、空・無我を觀ずるが故に。(十九)法施の慈を行ず、遺惜無きが故に。(二十)持戒の慈を行ず、毀禁を化するが故に。(二十一)忍辱の慈を行ず、彼我を護るが故に。(二十二)精進の慈を行ず、衆生を荷負するが故に。(二十三)禪定の慈を行ず、味を受けざるが故に。(二十四)智慧の慈を行ず、時を知らざる無きが故に。(二十五)方便の慈を行ず、一切示現するが故に。(二十六)【一三】無隱の慈を行ず、直心清淨なるが故に。(二十七)【一四】深心の慈を行ず、雜行無きが故に。(二十八)無誑の慈を行ず、虛假ならざるが故に。(二十九)安樂の慈を行ず、佛樂を得しむるが故に。菩薩の慈は此の若しと爲す。』

【一五】文殊師利又問ふ、『何をか謂ひて慈と爲す。』答へて曰く、『菩薩所作の功德は皆一切衆生と之を共にす。』『何をか謂ひて喜と爲す。』答へて曰く、

中根と摩と合す可きこと無し即ち相對の慈に非ざることを顯す。

【一〇】眞如平等の相。

【一一】大乘の道は師なくして成る、之を自然といふ。本來清淨寂滅の道なり、慈も亦本來清淨、其因あるなし。

【一二】一味無相平等の法。

【一三】無隱に三あり、教無隱・行無隱・理無隱なり、苟くも隱す所あれば清淨の法にあらず。

【一四】二十七・二十八・二十九は直心・深心・大悲心の三心に當る。安樂慈は衆生をして安樂を爲らしむるの意なり。

【一五】已下慈・悲・喜・捨の四無量心に就き深旨を發揮す。

【一六】第三疑を釋す、上の譬喩を明す段に「菩薩は無常を觀すと雖猶ほ生死に留りて、苦を忍んで物を濟ふ」と云ひ、又調伏を明して「菩薩は身を

『饒益する所有れば歡喜して悔ゆること無し。』『何をか謂ひて捨と爲す。』答へて曰く、『所作の福祐、希望する所無し。』

(二六)文殊師利又問ふ、『(一)生死に畏有り。菩薩當に何れにか依る所なるべき。』維摩詰言く、『菩薩、生死の畏の中に於て、當に(一七)如來功德の力に依るべし。』文殊師利又問ふ、(二)『菩薩、如來功德の力に依らんと欲すれば、當に何に於てか住すべき。』答へて曰く。『菩薩、如來功德の力に依らんと欲すれば、當に一切衆生を度脫するに住すべし。』(三)又問ふ、『衆生を度せんと欲すれば、當に何をか除く所なるべき。』答へて曰く、『衆生を度せんと欲すれば、其の煩惱を除くべし。』(四)又問ふ、『煩惱を除かんと欲すれば、當に何をか行ずる所なるべき。』答へて曰く、『當に正念を行ずべし。』(五)又問ふ、『云何が正念を行ぜん。』答へて曰く、『當に不生・不滅を行ずべし。』(六)又問ふ、『何の法か不生なる、何の法か不滅なる。』答へて曰く、『不善は生ぜず、(一八)善法は滅せず。』(七)又問ふ、『善と不善と孰れか本なる。』答へて曰く、(一九)『身を本と爲す。』(八)又問ふ、『身孰れを本と爲す。』答へて曰く、(二〇)『欲貪を本と爲す。』(九)又問ふ、『欲貪孰を本と爲す。』答へて曰く、(二一)『虛

受くるの業無しと雖、但物を化せんが爲に猶ほ六道の身を受け、設ひ身に苦有るとも惡趣の衆生を念じて大悲心を起す」と云ふ、中根の人は之を聞きて疑を生じ、之れ唯だ上地菩薩の所爲にして新發意の堪ふる處に非ずと爲す、此の疑を遣らんが爲に文殊師利已下、佛の功德力に住する故に新發意の者も能く堪ふることを明す。中に十二問答有り。

【一七】如來の功德の力に依るに二あり、一に他佛の功德力に依る即明薰加被に賴る　第二に自所修の佛功德力に依る。

【一八】善の當體は如に順ず、至善は即如なり。

【一九】善惡の業因は身ありて初めて生ず。

【二〇】一切の業因欲貪を本とする、知り易し。

【二一】欲貪は畢竟、彼此自他の

妄分別を本と爲す。』(十)又問ふ、『虛妄分別孰を本と爲す。』答へて曰く、『顚倒の想を本と爲す。』(十一)又問ふ、(二二)『顚倒の想、孰を本と爲す。』答へて曰く、(二三)『無住を本と爲す。』(十二)又問ふ、『無住孰を本と爲す。』答へて曰く、『無住は卽ち本無し。文殊師利、無住の本より、一切の法を立つ。』

(二四)時に維摩詰の室に一天女有り、諸の天人を見、所說の法を聞きて、便ち其の身を現じて卽ち天華を以て諸の菩薩と大弟子との上に散ず。華、諸の菩薩に至れば卽ち皆墮落す。大弟子に至れば便ち著きて墮ちず。一切の弟子(二五)神力を以て華を去れども、去らしむること能はず。

爾の時に天、舍利弗に問ふ、『何が故ぞ華を去る。』答へて曰く、(二六)『此の華、不如法なり、是を以て之を去る。』天の曰く、(二七)『此の華を謂ひて不如法とすること勿れ。所以何んとなれば、是の華、分別する所無し、仁者自ら分別の想を生ずるのみ。若し佛法に於て出家して分別する所有るを不如法と爲す。若し分別する所無ければ是れ則ち如法なり。諸の菩薩を觀るに、華の著かざることは、已に一切の分別の想を斷じたるが故なり。譬へば人の畏るる時、非人其の便を得るが如く、是の如く弟子生死を畏るるが故に、

差別より生ず。

【二二】萬法平等の所、强て差別を生ず。是顚倒（Viparyaya）なり。

【二三】顚倒の想は諸法の無住を知らざるより起る。一切法は空にして自性なし、無住なる所以なり。

【二四】第四疑を釋す、種種の中道の菩薩行を擧げて、調伏を說くを聞き中根の人疑を生ず。卽ち空法の理上、何れにも執せず、偏らざるの極、或は爲し或は爲さざるの疑を生じ、不定の行相となり、心を不安に置く。此の定り無きの疑を遣らんが爲に「時に維摩詰」已下の一段を開す

【二五】突然、花藏王宮の仙媛を出し來り、[illegible]手[illegible]を揮せしむ、何等の多趣・何等の妙構。

【二六】宛として是道學先生の口吻、心頭去り得ざるものあり

色・聲・香・味・觸其の便を得るなり。已に畏を離れたる者は、一切の五欲、能く爲すこと無し。(二八)結習未だ盡きざれば、華、身に著くのみ。結習の盡きたる者は華著かざるなり。』

(二九)舍利弗の言く、『天此の室に止まること其れ已に久しきや。』答へて曰く、『われ此の室に止まること、(三〇)耆年の解脱の如し。』舍利弗の言く、(三一)『此に止まること久しきや。』天の曰く、『耆年の解脱亦何如が久しき。』(三二)舍利弗默然として答へず。天の曰く、『如何ぞ耆舊、(三三)大智にして默せる。』答へて曰く、(三四)『解脱は言說する所無し、故にわれ是に於て云ふ所を知らず。』天の曰く、(三五)『言說文字皆解脱の相なり。所以何んとなれば、解脱は內ならず外ならず、兩間に在らず。文字も亦內ならず外ならず、兩間

故に故らに去るのみ、二乘の境地憐れむべし。

【二七】時に感ずれば花にも涙を灑ぐ、青山流水悲愁なし、之に對するものの心に愁あるのみ。花を見て不如法となすの差別心、直に是不如法のみ。

【二八】諸法に差別を見るは猶執あるが故なり、卽煩惱(結)の習氣餘勢尙存す、故に去らんと欲するの華、著きて落ちず、無執無關心のものは結習なきが爲に花、意とせざるに自ら落つ。

【二九】舍利子、天女の辭辯縱橫機鋒峻辣頗る維摩の餘風あるを見て、久しく居士に隨へるや否やを問ふ。

【三〇】耆年は舍利子を尊みて云ふ。新譯には明かに『舍利子住する所の解脱の如し』となせり。蓋し解脱には久近の別なきを說きて、止室云云の問に答ふ。

【三一】舍利子、誤り解して解脱を得しよりの年月と謂ふ、故に此問あり。

【三二】後段維摩の一默と此默と天地の別あるを見よ。

【三三】舍利子十大弟子中智慧第一と稱す。

【三四】解脱無相なるが故に言說する能はず。

【三五】舍利子は但だ解脱の無言なるを知りて未だ齊一なるを知る能はず、故に天之を呵して言卽不言、不言卽言、諸法皆然なるを論ず、故に言說文字皆解脱の相なりと云ふ。文中に於て、內ならずとは六根なり。外ならずとは六塵なり。兩間ならずとは六識なり。或は次での如く生死・涅槃・道品なり、或は能說の身、所說の法、音聲なり。是の三處皆な空なり何の疑有てか答へざる

に在らず。是の故に舍利弗、文字を離れて解脫を說くこと無し。所以何んとなれば、一切の諸法は是れ解脫の相なればなり。』舍利弗の曰く、『復た婬・怒・癡を離るるを以て解脫と爲さざらんや。』天の曰く、〔三六〕『佛は增上慢の人の爲に、婬・怒・癡を離るるを解脫と爲すと說きたまふのみ。若し增上慢無き者には、佛は婬・怒・癡の性卽ち解脫なりと說きたまふ。』

舍利弗の言く、〔三七〕『善哉、善哉、天女、汝何の得る所ぞ、何を以て證と爲して辯ずること乃ち是の如くなる。』天の曰く、〔三八〕『われ得ること無く、證すること無し、故に辯ずること是の如し。所以何んとなれば、若し得有り、證有らば、則ち佛法に於て增上慢と爲せばなり。』

舍利弗天に問ふ、〔三九〕『汝三乘に於て、何の志求をか爲せる。』天曰く、『聲聞の法を以て衆生を化するが故に、われ聲聞と爲る。因緣の法を以て衆生を化するが故に、われ〔四〇〕辟支佛と爲る。大悲の法を以て衆生を化するが故に、われ大乘と爲る。舍利弗、人の〔四一〕瞻蔔林に入りて唯だ瞻蔔を嗅ぎて、餘香を嗅がざるが如し。是の如く、若し此の室に入りぬれば、但だ佛の功德の香のみを聞ぎて、聲聞・辟支佛の功德の香を聞ぐことを樂は

やと（太子御疏）。

【三六】 增上慢のものには三毒を離るるを解脫とす、卽有見に執する深きものは煩惱を拂ふの要あり、然らざるものには煩惱卽解脫の大道自ら坦然たり。

【三七】 『汝何を證するを得て、辯斯の如き』（新譯）。

【三八】 無我の故に得證なく、空の故に何をか得、何をか證せん。有所得、有所證を執するものは是有相執著の增上慢の徒のみ。

【三九】 舍利弗三乘（聲聞・緣覺・佛）の中に於て天の所求を問ふ、蓋し天先に得無く證無しと云ふと云へばなり。天女は此の室に唯大乘有りて小乘無きを以て答ふ。

【四〇】 前品の註三を見よ。

【四一】 Campaka（チャンパカ）(Michelia Campaka Linn.) 强烈の芳香を有す

ざるなり。舍利弗、其れ釋・梵・四天王・諸天・龍・鬼神等有りて、此の室に入る者は、斯の（四二）上人の正法を講說するを聞きて、皆佛の功德の香を樂ひて發心して出づ。舍利弗、われ此の室に止まること、（四三）十有二年、初より聲聞・辟支佛の法を說きたまふを聞かず、但だ菩薩の大慈・大悲・不可思議諸佛の法のみを聞く。舍利弗、此の室は常に八の未曾有難得の法を現ず。何等をか八と爲す。此室常に金色の光を以て照して、晝夜異なること無し、日月の所照を以て明と爲さず、是を一の未曾有難得の法と爲す。此の室に入る者は、（四四）諸垢の爲に惱まされず、是を二の未曾有難得の法と爲す。此の室常に釋・梵・四天王・他方の菩薩有りて、來り會して絕えず、是を三の未曾有難得の法と爲す。此の室常に六波羅蜜不退轉の法を說く、是を四の未曾有難得の法と爲す。此の室常に天人第一の樂を作して、（四五）絃より無量法化の聲を出す、是を五の未曾有難得の法と爲す。此の室（四六）四の大藏有りて衆寶積滿せり、窮せるを周し乏しきを濟ふ、求め得ること盡ること無し、是を六の未曾有難得の法と爲す。此室（四七）（一）釋迦牟尼佛・（二）阿彌陀佛・（三）阿閦佛・（四）寶德・（五）寶餤・（六）寶月・（七）寶嚴・（八）難勝・（九）師子響・（十）一切利成、是の

る樹、黃色の花を著く。

【四二】維摩を指す。

【四三】十有二年は古印度に於ける習學の一時期なり、出遊十二年、苦離十二年等、又古史詩に見ゆ。

【四四】垢は煩惱罪業を指す。

【四五】『諸樂の中に於て無量百千の法音を演出す』（新譯）。

【四六】四大藏（四大寶藏―新譯）は菩薩の四攝法を表示す。四攝法のこと前に出づ。

【四七】釋尊已下の十方佛。

1. Śākyamuni.（釋迦牟尼）シヤーキヤムニ
2. Amitābha.（阿彌陀）アミターバ
3. Akṣobhya.（阿閦）アクシヨービヤ
4. Ratnottama.（寶德、寶勝）ラトノーツタマ
5. Ratnojvalita.（寶炎）ラトナーユヷリタ
6. Ratnacandra.（寶月）ラトナチヤンドラ
7. Ratnavyūha.（寶嚴）ラトナギユーハ
8. Aparājita.（難勝）アパラジタ
9. Siṁhasvara.（師子響）シムハスヷラ

如き等の十方の無量の諸佛、是の上人の念ずる時、卽ち皆爲に來りて、廣く諸佛の祕要法藏を說きたまひ、說き已りて還り去る、是を七の未曾有難得の法と爲す。此の室に一切の諸天嚴飾の宮殿、諸佛の淨土、皆中に於て現ず、是を八の未曾有難得の法と爲す。舍利弗、此の室常に八の未曾有難得の法を現ず。誰か斯の不思議の事を見て、而も復た聲聞法を樂ふこと有らんや。」

舍利弗の言く、（四八）『汝何を以てか女身を轉ぜざる。』天曰く、『われ十二年より來た女人の相を求むるに、了に不可得なり。當に何の轉ずる所か有るべき。譬へば幻師の幻女を化作するが如し、若し人有りて何を以てか女身を轉ぜざると問はば、是の人正問と爲すや不や。』

舍利弗の言く、『不なり、幻は定相無し、當に何の轉ずる所かあるべき。』天曰く、『一切の諸法も亦復た是の如く、定相有ること無し、云何ぞ女身を轉ぜざることを問ふや』と。（四九）卽時に天女神通力を以て、舍利弗を變じて天女の如くならしめ、天自ら身を化すること舍利弗の如くして、而して問うて言く、『何を以てか女身を轉ぜざるや。』舍利弗天女の像を以て、而して答へて曰く、『われ今何んが轉ずといふことを知らずして、而も變じて女身と爲る。』天曰く、『舍利弗、若し能く此の女身を轉ず

---

10. Sarvarthasiddha.（一切利成）

【四八】舍利弗、今、汝は三乘たりと雖、汝は是れ天と云ふことを聞き、然れば德を積むこと既に深し、理として女身を受くべからずと思惟し、何を以てか女身を轉ぜざるやと天に對して問を爲す。天之に對して萬物幻の如く、定相無し、誰か好、誰か醜、然も之を轉ずることを欲せんやと、理を以て答を爲す（太子御疏）。

【四九】痛快甚し、男女の定相畢竟不可得の理、徹底す。

れば、則ち一切の女人も亦當に能く轉ずべし。舍利弗の女に非ずして而も女身を現ずる如く、一切の女人も亦復た是の如し。女身を現ずと雖も、而も女に非ず、是の故に佛一切の諸法は男に非ず、女に非ずと說きたまふ。』

〔五〇〕即時に天女還りて神力を攝む、舍利弗の身の還復すること故の如し。天舍利弗に問ふ、『女身の色相、今何の所にか在る。』舍利弗の言く、〔五一〕『女身の色相、在も無く不在も無し。』天曰く、『一切の諸法も亦復た是の如く、在も無く、不在も無し。夫れ在無く不在無しとは佛の所說なり。』

〔五二〕舍利弗天に問ふ、『汝此に於て沒して、當に何れの所にか生ずべき。』天曰く、〔五三〕『佛化の生ずる所、われ彼の生の如し。』曰く、『佛化の所生は沒生に非ざるなり。』天曰く、〔五四〕『衆生猶然り、沒生に非ざるなり。』

〔五五〕舍利弗天に問ふ、『汝久如か、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べき。』天曰く、〔五六〕『如し舍利弗還りて凡夫と爲らんには、われ乃ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。』舍利弗の言く、『われ凡夫と作ること是の處有ること無し。』天曰く、『われ阿耨多羅三藐三菩提を得ること、亦是の處無し。所以何んとなれば、菩提は住處無し、是の故に得る者有ること無ければな

【五〇】見よ、天の擒縱自在、諸法皆空、無執無我の大道を說くことを。

【五一】女身の色相、本來生滅無きが故に在も無く不在も無しと云ふ。

【五二】舍利弗既に現相の在る無きを知る、更に其の當に生ずべきの所在を問ふ。此に於て沒するは此世に於て死沒するの意。

【五三】佛化の生とは佛の神力を以て化作する所のもの、是生滅を超絕す、若し生るとせば此の如き生のみの意。

【五四】佛の如く衆生も亦然りの意、猶の字、字眼なり、新譯曰く『天の曰く、尊者、諸法も有情も應に知るべし、亦爾り、沒なく生なし』と詳にして明。

【五五】既に生所を問ひ、次で高行の天の菩提を得る時を問

り。』舍利弗の言く、『今諸佛は阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。已得と當得とは恒河沙の如し。皆何をか謂ふや。』天曰く、[五七]『皆世俗の文字の數を以ての故に、三世有りと說く。菩提に去・來・今有りと謂ふには非ず。』天曰く、『舍利弗、汝阿羅漢道を得たりや。』曰く、『無所得の故に而も得たり。』天曰く、『諸佛菩薩も亦復是の如し、無所得の故に得たり。』

爾の時、維摩詰、舍利弗に語るらく、『此の天女已に曾て九十二億の諸佛を供養し、已に能く菩薩の神通に遊戲して所願具足し、無生忍を得て不退轉に任せり。本願を以ての故に、意に隨ひて能く現じて衆生を敎化す。』

ふ。天之に對して菩提は無爲無相空なる故に住處無く行人も無し、誰か之を得る者有らんと理を以て答ふ。

【五六】 機辯惡辣、實に當り易からず。

【五七】 第一義の眞諦門より云へば菩提は無相無住本來清淨にして得もなく所得もなし、假に第二義の俗諦よりして三世を立て已得と當得とをいふ。

卷の第八

(一)佛道品第八

爾の時、文殊師利、維摩詰に問うて言く、『菩薩云何が佛道に通達せん。』維摩詰の言く、『若し菩薩非道を行ぜば、是を佛道に通達すと爲す。』又問ふ、『云何が菩薩非道を行ずる。』答へて曰く、(二)『若し菩薩(三)五無間を行じて、惱恚無く、地獄に至るも、諸の罪垢無く、畜生に至るも無明・憍慢等の過有ること無く、餓鬼に至るも功徳を具足し、色・無色界の道を行ずるも以て勝れたりと爲さず。貪欲を行ふことを示して諸の染著を離れ、瞋恚を行ふことを示して諸の衆生に於て恚礙有ること無く、愚癡を行ふことを示して、而も智慧を以て其の心を調伏す。慳貪を行ふことを示して、而も內外の所有を捨て身命を

【一】佛道品とは、菩薩の行は非を以て佛道に通達することを明すに名づく。當品は中根の人を化する第二品にして上の不思議品に「十方世界に魔王と作る者多く是れ不可思議解脫に住する菩薩なり、方便力を以て衆生を敎化せむが爲に現じて之となる」と說けるを聞き、中根の人は疑ふらく、如來の道は是(正道)を以て是を弘むべし、非(邪道)を以て是に通すべからず、云何んが猶ほ魔王と作りて、以て佛事に通ぜんやと、是の疑を通ぜんがために、此の品を說くなり。

【二】初めに菩薩內に無相の大悲を懷き、外に現じて非を行じ、物の機宜に隨て方便して物を度する、卽ち非を以て是に通ずることを明す。

【三】殺父・殺母・殺羅漢・破和合僧・出佛身血の五大罪にして邪の最大、非の最極なるものなり。

惜まず。毀禁を行ふことを示して、而も淨戒に安住し、乃至小罪にも猶大懼を懷く。瞋恚を行ふことを示して而も常に慈忍あり。懈怠を行ふことを示して而も功德を勤修す。亂意を行ふことを示して而も常に念・定あり。愚癡を行ふことを示して、而も世間・出世間の慧に通達す。諂僞を行ふことを示して、而も善方便をもて諸の經義に隨ふ。憍慢を行ふことを示して、而も衆生に於て猶し橋梁の如くす。諸の煩惱を行ふことを示して、而も心常に清淨なり。魔に入ることを示して、而も佛智慧に順じて他の教に隨はず。聲聞に入ることを示して、而も衆生の爲に未聞の法を說く。辟支佛に入ることを示して、而も大悲を成就して衆生を敎化す。貧窮に入ることを示して、而も寶手有りて功德盡ること無し。(四)形殘に入ることを示して、而も諸の好相を具して以て自ら莊嚴す。下賤に入ることを示して、而も佛種性の中に生じて諸の功德を具す。羸劣醜陋に入ることを示して、而も(五)那羅延の身を得て一切衆生に樂見せらる。老病に入ることを示して、而も永く病根を斷じ死の畏を超越す。資生有ることを示して、而も恒に無常を觀じて實に貪する所無し。妻妾、婇女有ることを示して、而も常に五欲の淤泥を遠離す。訥鈍を現じて、而も辯才を成就し、總持して失すること無し。(六)邪濟に入ることを示して、而も正濟を以て諸の衆生を度す。遍く諸道に入ることを現じて、而も其の因緣を斷じ、涅槃を現じて、而も生死を斷ぜず。文殊師利、

【四】不具を云ふ、「諸の缺根の趣」(新譯)

【五】那羅延 Nārāyaṇa は天上の力士の名、端正殊妙にして志力無猛なり。

【六】『復た現に諸の邪道の趣に處すと雖も、而も正道を以て諸の世間を度す。』(新譯)

菩薩能く是の如く非道を行ずる、是を佛道に通達すと爲す。』

(七)是に於て維摩詰、文殊師利に問ふ、『何等をか如來の種と爲す。』文殊師利の言く、『有身を種と爲し、(八)無明・有愛を種と爲し、貪・恚・癡を種と爲し、(九)四顚倒を種と爲し、(一〇)五蓋を種と爲し、(一一)六入を種と爲し、(一二)七識處を種と爲し、(一三)八邪法を種と爲し、(一四)九惱處を種と爲し、(一五)十不善道を種と爲す。要を以て之を言はば、六十二見、及び一切煩惱、皆是れ佛種なり。』曰く、『何の謂ぞや。』答へて曰く、『若し無爲を見て正位に入る者は、復た阿耨多羅三藐三菩提心を發すこと能はず。(一六)譬へば、高原の陸地に蓮華を生ぜず、卑濕の淤泥に乃ち此の華を生ずるが如し。是の如く無爲の法を見て、正位に入る者は、終に復た能く佛法を生ぜず、煩惱の泥中に乃ち衆生有りて佛法を起すのみ。(一七)又種を空に植れば終に生ずることを得ず、糞壤の地に乃ち能く滋茂する如し。(一八)是の如く無爲の正位に入る者は佛法を生ぜず。我見を起すこと、須彌山の如くなるものは、猶能く阿耨多羅三藐三菩提心を發して、佛法を生ず。是の故に當に知るべし、一切の煩惱を如來の種となすことを。譬へば巨海に下らざれば、能く無價の寶珠を

【七】 上に非を行じて是に通ずと說くを聞きて中根の人疑ふらく、只物を化せんと欲するが故に然かならん、是れ實に非ず、實には成佛は唯善に在りと、是の故に已下善は惡に由て起り、善自ら生ずること無し、塵勞猶ほ如來の種たることを明して類證す。

【八】 無明と愛は生死の二大根本なり。

【九】 無常・苦・無我・不淨の世相を常・樂・我・淨と執するをいふ。

【一〇】 五蓋とは、貪・瞋・睡眠・悼悔・疑なり。

【一一】 六入とは、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根なり。

【一二】 七識とは、三禪・三空と欲界人天合して一と爲し、七を成ず。

【一三】 正見・正思・正語・正業・正精進・正定・正念・正命の八正

得ること能はざるが如し。是の如く煩惱の大海に入らざれば、則ち一切智の寶を得ること能はず。』

爾の時に大迦葉歎じて言く、『善哉善哉、文殊師利、快く此の語を說く、誠に言ふ所の如し。塵勞の儔如來の種たり。(一九)我等今は復た阿耨多羅三藐三菩提心を發すに堪任ず。乃至五無間の罪猶ほ能く意を發して佛法を生ず、而るに今我等永く發すこと能はず。譬へば、(二〇)根敗の士の其れ五欲に於て復た利すること能はざるが如し。是の如く聲聞、諸結斷せる者は、佛法の中に於て復た益する所無し、(二一)永く志願せず、是の故に文殊師利、(二二)凡夫は佛法に於て反復する有り、而も聲聞は無なり。所以何んとなれば、凡夫は佛法を聞きて能く無上道心を起して三寶を斷せず、(二三)正に聲聞をして身を終るまで佛法の力無畏等を聞かしむるも、永く無上道意を發すこと能はず。』

爾の時會中に菩薩有り、(二四)普現色身と名づく。維摩詰に問うて曰く、(二五)『居士、父・母・妻・子・親戚・眷屬・吏・民・知識、悉く是れ誰とか爲す。奴婢・僮僕・象・馬・車乘、皆何れの所にか在る。』

道に反するものをいふ。

【一四】 九惱とは、我が善友を憎む、我が怨家を愛する、我が己身を惱む、之を三世に就て計へて九惱と爲す。

【一五】 殺生・偸盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪・瞋・邪見にして十善に反す。

【一六】 無爲極善の高原陸地は妙花を生ぜず、有爲渴愛の泥中白蓮花を開く。

【一七】 煩惱即菩提の眞義說き來りて餘蘊なし。

【一八】 空見に墮するものは遂に度する能はず、有執あるものは、尙佛種あり。

【一九】 二乘は無爲寂滅を喜びて衆生救濟の大用を思はず、此嘆ある所以なり。

【二〇】 根敗、[illegible]、不具の感官を有するものは享樂の器にあらず。

【二一】 既に無上菩提志願の資格

是に於て維摩詰（二六）偈を以て答へて曰く、

（一）（二七）『知度は菩薩の母なり、方便以て父と爲す。一切衆の導師、是に由りて生ぜざる無し。

（二）法喜を以て妻と爲し、慈悲心を女と爲す。善心誠實なるは男、畢竟空寂なるは舍なり。

（三）弟子の衆は塵勞なり、意の所轉に隨ふ。道品は善知識なり、是に由りて正覺を成ず。

（四）諸度は法の等侶なり、四攝を妓女と爲す。歌詠法言を誦し、此を以て音樂と爲す。

（五）總持の園苑に、無漏法の林樹あり。覺意・淨妙の華、解脱・智慧の果あり。

（六）（二八）八解の浴池に、定水湛然として滿てり。布くに（二九）七淨華を以てす、浴するは此れ無垢の人なり。

（七）象・馬の五通馳せ、大乘を以て車と爲す。調御するに一心を以てして、八正の路に遊ぶ。

なきなり。

【二二】『この故に異生（凡夫）は能く佛恩を報ず、聲聞緣覺は報ずること能はず』（新譯）。この方明了なり、今文の反復は報復、報恩の意。

【二三】假使終身、開説如來力無畏等乃至所有不共佛法一切功德、終不能發正等覺心（新譯）。

【二四】普現一切色身（新譯）。Sarvarūpakāyāvabhāsa.

【二五】維摩既に大富の長者たり故に此問あり、以て本品の非を行じ是に通ずるを結成す。

【二六】全體四十二偈あり。第一至第十二（本德自行）種種の道品を以て眷屬、器用とす、世法にあらず。第十三至第三十九（跡用化他）無にも有を現ずる大士の妙用。第四十至第四十二（本迹通結）

(八)相具以て容を嚴り、衆好其の姿を飾る。慚愧の上服、深心を華鬘と爲す。

(九)富は(三〇)七財の寶あり、教授して以て滋息し、所説の如く修行し、廻向するを大利と爲す。

(十)四禪を牀座と爲し、淨命より生ず、多聞にして智慧を增し、以て自覺の音と爲す。

(十一)甘露法の食、解脫味を漿と爲す。淨心以て澡浴し、戒品を塗香と爲す。

(十二)煩惱の賊を摧滅し、勇健なること能く踰ゆる無し。(三一)四種の魔を降伏して、勝旛道場に建つ。

(十三)起滅無きことを知ると雖も、彼に示すが故に生あり。悉く諸の國土に現じ、日の見ざる無きが如し。

(十四)十方の、無量億の如來を供養し、諸佛及び己身、分別の想有ること無し。

(十五)諸佛の國、及び衆生の空なることを知ると雖も、而も常に淨土を修して、羣生を敎化す。

(十六)諸有る衆生の類の、形と聲及び威儀と、無畏力の菩薩は、一時に能く盡く現ず。

(十七)衆魔の事を覺知して、而も其の行に隨ふことを示す。善方便智を以て、意に隨ひて皆能く現ず。

【二七】知度は般若波羅蜜。

【二八】八解脫のこと、前註を見よ。

【二九】七淨とは、戒淨・心淨・見淨・度疑淨・分別淨・行淨・涅槃淨、之なり。

【三〇】七財(或は七聖財)とは、信・戒・聞・捨・慧・慚・愧、之なり。

【三一】四種の魔とは、煩惱魔・五陰魔・天魔・死魔、是なり。

（十八）或は老病死を示して、諸の羣生を成就す。幻化の如くなることを了知して、通達して礙有ること無し。

（十九）或は劫の盡く燒くことを現じて、天地皆洞然たり。衆人に常想有るを、照して無常なることを知らしむ。

（二十）無數億の衆生、俱に來りて菩薩を請ずれば、一時に其の舍に到りて、化して佛道に向はしむ。

（二十一）經書・（三）禁・呪術、工巧・諸の技藝、盡く此の事を現行して、諸の羣生を饒益す。

【三】是れ外道の諸經典、吠陀及其註疏の儀軌等をいふ。

（二十二）世間の衆の道法、悉く中に於て出家して、因て以て人の惑を解きて、而も邪見に墮せざらしむ。

（二十三）或は日・月・天、梵王世界の主と作り、或時は地・水と作り、或は復た風・火と作る。

（二十四）劫の中に疾疫あれば、現じて諸の藥草となり、若し之を服する者有らば、病を除き衆毒を消す。

（二十五）劫の中に饑饉あれば、身を現じて飲食となり、先づ彼の饑渴を救ひて、却つて法を以て人に語る。

（二十六）劫の中に刀兵有れば、之が爲に慈悲を起して、彼の諸の衆生を化して、無諍地に住せしむ。

(二十七)若し大戰陣有らんに、【三三】之を立つるに等力を以てすれば、菩薩威勢を現じて、降伏して和安ならしむ。

(二十八)一切國土の中の、諸有地獄處、輙ち往きて彼に到り、其の苦惱を勉めて濟ふ。

(二十九)一切國土の中に、畜生相ひ食噉すれば、皆生を彼に現じて、之が爲に利益を作す。

(三十)五欲を受ることを示し、亦復禪を行ふことを現じ、魔心をして憒亂するに、其の便りを得ること能はざらしむ。

(三十一)火中に蓮華を生ずる、是れ希有なりと謂つ可し。欲に在て而も禪を行ずる、希有なることも亦是の如し。

(三十二)或は現じて、【三四】婬女と作りて諸の色を好む者を引き、先づ欲の鉤を以て牽て、後に佛智に入らしむ。

(三十三)或は邑中の主と爲り、或は商人を導びき、【三五】國師及び大臣と作りて、以て衆生を祐利す。

(三十四)諸有る貧窮の者には、現じて無盡藏と作りて、因て以て之を勸導して、菩提心を發さしむ。

(三十五)我心憍慢の者には、爲に大力士を現じて、諸の貢高を消伏して、無上道に住せしむ。

(三十六)其れ恐懼の衆あれば、前に居いて慰安し、先づ施すに無畏を以てして、後に道心を發さしむ。

(三十七)或は婬欲を離るることを現じて、五通の仙人と爲り、諸の羣生を開導して、戒忍慈に住せしむ。

【三三】「朋黨なきことを示現し」(新譯)解し易し。

【三四】華嚴入法界品の婆蘇蜜女(Visvamitra)の如し。

【三五】Purohita. 婆羅門にして王者の補佐たるもの。

(三十八)供事を須る者を見ば、現じて爲に僮僕と作りて、既に其の意を悅可せしめて、乃ち發すに道心を以てす。

(三十九)彼が須ふる所に隨つて、佛道に入ることを得しめ、善方便力を以て、皆能く之を給足す。

(四十)是の如きの道無量にして、所行涯り有ること無く、智慧邊際無く、無數の衆を度脫す。

(四十一)假令ひ一切の佛、無數億劫に於て、其の功德を讚歎すとも、猶尙し盡すこと能はず。

(四十二)誰か是の如きの法を聞きて、菩提心を發さざらん。(三六)彼の不肖の人と、癡冥無智の者をば除く。』

【三六】『下劣の有情、都て智慧なきものを除く』(新譯)。

卷の第九

(一)入不二法門品第九

爾の時、維摩詰衆の菩薩に謂て言く、『諸の仁者、云何が菩薩の不二法門に入る。各所樂に隨ひて之を說け。』

(二)會中に菩薩有り、(三)法自在と名づく。說きて言く、『諸の仁者、生・滅をもて二と爲す。法は本不生なり、今則ち滅無し。此の無生法忍を得る、是を不二法門に入ると爲す。』

(四)德守菩薩曰く、『我と我所とを二と爲す。我有るに因るが故に、便ち我所有り、若し我有ること無ければ、則ち我所無し。是を不二法門に入ると爲す。』

【一】當品は菩薩の不二法門を明すを以て名づく。當品と次の品との二品は、三根を化する中に、下根を化す。蓋し上の觀衆品に於て菩薩は衆生即空なり、鳥跡・水月・鏡像の如しと觀すと說けるを聞き、下根の人は疑を生じて謂らく、若し爾らば菩薩も亦二乘と同じく空を觀するを以て宗と爲す、何ぞ菩薩を以て尊と爲さんやと。是の故に當品を說きて是の疑を遣る。即ち同じく空を觀すと雖も、二乘の觀は心に空有の別を存するが故に、有を捨てて空を證し、但だ自度を求めて化他に在らず、即ち相空を成す。之に反して菩薩の觀は有に在れども空を失せず、空に在て萬化を成じ、空即有、有即空、有無の一邊に偏せず、等く會して不二なり即ち眞の空觀なり。

【二】已下三十の菩薩各其解する所に從つて不二の法門を說く。

【三】第一 Dharmeśvara(ダールメーシュヴラ). 生滅の不二を說く。

【四】第二 Guṇagupta. 我我所の依る所のもの二共に空なるを說く。

【五】第三 Animiṣa(アニミシャ). 受は本無

(五)不眴菩薩曰く、『受と不受とを二と爲す。若し法受けざれば則ち不可得なり、不可得を以ての故に、取無く、捨無く、作無く、行無し。是を不二法門に入ると爲す。』

(六)德頂菩薩曰く、『垢・淨を二と爲す。垢の實性を見れば、則ち淨相無し、滅相に順す。是を不二法門に入ると爲す。』

(七)善宿菩薩曰く、『是れ動、是れ念を二と爲す。不動なれば則ち念無し、念無ければ卽ち分別無し。此に通達する者、是を不二法門に入ると爲す。』

(八)善眼菩薩曰く、『一相と無相とを二と爲す。若し一相卽ち是れ無相なることを知る、亦無相を取らず、平等に入る。是を不二法門に入ると爲す。』

(九)妙臂菩薩曰く、『菩薩心と聲聞心とを二と爲す。心相空にして幻化の如しと觀ずる者は、菩薩心無く、聲聞心無し。是を不二法門に入ると爲す。』

(一〇)弗沙菩薩曰く、『善と不善とを二と爲す。若し善・不善を起さず、無相際に入りて通達する者、是を不二法門に入ると爲す。』

(一一)獅子菩薩曰く、『罪と福とを二と爲す、若し罪性則ち福と異なること無しと達すれば、金剛の慧を以て此の相を決了して、縛無く解も無き者、是を不二法門に入ると爲す。』

對立の差別卽有漏の五陰、不受は之に反す。

【六】第四 Guṇasiri. 垢は煩惱、淨は解脫、此二者不二なり。

【七】第五 Sunakṣatra. 動・念の二者なければ不動なり。

【八】第六 Sunetra. 一と無との不二。

【九】第七 Subahu. 小乘心と大乘心との不二。

【一〇】第八 Puṣya. 善と不善との不二、無相際は平等一如の極、善惡の相を絶したるをいふなり。

【一一】第九 Siṃha. 罪業と福業と不二、隨ひて、本來縛(罪業の結果)もなく、解脫(福業の極)もなし。

〔一二〕師子意菩薩曰く、『有漏と無漏とを二と爲す。若し諸法の等しきことを得ば、漏・不漏の想を起さず、相に著せず、亦無相に住せず。是を不二法門に入ると爲す。』

〔一三〕淨解菩薩曰く、『有爲と無爲とを二と爲す。若し一切の數を離るれば心虚空の如し、清淨慧を以て所閡無き者、是を不二法門に入ると爲す。』

〔一四〕那羅延菩薩曰く、『世間と出世間とを二と爲す。世間の性空なれば、卽ち是れ出世間なり。其の中に入らず、出でず、溢れず、散らざる、是を不二法門に入ると爲す。』

〔一五〕善意菩薩曰く、『生死と涅槃とを二と爲す。若し生死の性を見れば則ち生死無く、縛無く、解無く、燃せず、滅せず。是の如く解する者、是を不二法門に入ると爲す。』

〔一六〕現見菩薩曰く、『盡と不盡とを二と爲す。法若し究竟じて盡き、若しくは盡きず、皆是れ盡相無し、卽ち是空なり、空なれば盡・不盡の相有ること無し。是の如く入る者、是を不二法門に入ると爲す。』

〔一七〕普守菩薩曰く、『我と無我とを二と爲す。我尚ほ不可得なり、非我何ぞ得可き。我の實性を見る

【一二】第十 Siṃhamati. 有漏は煩惱業の迷界、無漏は解脫の悟界。

【一三】第十一 Śuddhimokṣa.（淨勝解）有爲・無爲の不二。

【一四】第十二 Nārāyana. 世間と出世間と究竟差別なし。世間とは三界なり。出世間とは無漏道品法なり。

【一五】第十三 Kuśalamati.（順調慧）生死と涅槃と區別なし、縛と燃とは生と死との異名、解と滅とは涅槃の相なり。

【一六】第十四 Abhisamaya. 盡とは有爲法の無常、不盡とは無爲法の常なるに名づく、而し一空に就て論を爲せば卽ち無二なり。

【一七】第十五 Samantagupta. 我と無我の不二。

者は復た二を起さず。是を不二法門に入ると爲す。』

(二八)電天菩薩曰く、『明と無明とを二と爲す。無明の實性卽ち是れ明なり。明亦取るべからず、一切の數を離る。其の中に於て平等無二なる者、是を不二法門に入ると爲す。』

(二九)喜見菩薩曰く、『色と色空とを二と爲す。色卽是空、色滅して空なるに非ず、色性自空なり。是の如く受・想・行・識と識空とを二と爲す。識卽是空なり、識滅して空なるに非ず、識性自空なり。其の中に於て通達する者是を不二法門に入ると爲す。』

(三〇)明相菩薩曰く、『四種の異と空種の異とを二と爲す。四種の性卽ち是れ空種の性なり。前際・後際の空なるが如く、故に中際も亦空なり。若し能く是の如く諸種性を知る者、是を不二法門に入ると爲す。』

(三一)妙意菩薩曰く、『眼と色とを二と爲す。若し眼性色に於て貪ならず、恚ならず、癡ならざるを知る、是を寂滅と名づく。是の如く耳は聲・鼻は香・舌は味・身は觸・意は法を二と爲す。若し意性法に於て貪ならず、恚ならず、癡ならざるを知る、是を寂滅と名づく。其の中に安住する、是を不二法門に入ると爲す。』

(三二)無盡意菩薩曰く、『布施を一切智に廻向するを二と爲す。布施の性卽ち是れ一切智に廻向する性

【二八】第十六 Vidyuddeva. 明(悟)無明(迷)の不二。

【二九】第十七 Muditadarśana. 色空の不二、乃至受想行識と空と皆不二なり、大旨、般若心經の如し。

【三〇】第十八 Prabhāketu 四種とは地・水・火・風の四大なり、空種とは空大なり。

【三一】第十九 Sumati. 六識と六境卽心境二者の不異な明す。

【三二】第二十 Akṣayamati. 實行と理想との不二、卽六度と一切智との不二なり。

なり。是の如く持戒・忍辱・精進・禪定・智慧、一切智に廻向するを二と爲す。智慧の性卽ち是れ一切智に廻向する性なり。其の中に於て一相に入る者、是を不二法門に入ると爲す。』

(二三)深慧菩薩曰く、『是れ空、是れ無相、是れ無作を二と爲す。空卽ち無相、無相卽ち無作なり。若し空・無相・無作卽ち心・意・識無ければ、一解脱門に於て卽ち是れ三解脱門なる者、是を不二法門に入ると爲す。』

(二四)寂根菩薩曰く、『佛と法と衆とを二と爲す。佛卽ち是れ法、法卽ち是れ衆なり。是の三寶皆無爲の相にして、虛空と等し。一切の法も亦爾り。能く此の行に隨ふ者、是を不二法門に入ると爲す。』

(二五)心無閡菩薩曰く、『身と身滅とを二と爲す。身は卽ち是れ身滅なり。所以何んとなれば、身の實相を見る者は、則ち身を見及び滅身を見ることを起さず、身と滅身と、二無く分別無し。其の中に於て驚かず、懼れざる者、是を不二法門に入ると爲す。』

(二六)上善菩薩曰く、『身・口・意業を二と爲す。是の三業皆作相無し。身に作相無ければ卽ち口に作相無し、口に作相無ければ卽ち意にも作相無し。是の三業作相無ければ卽ち一切法も作相無し。能く是の如く無作の慧に隨ふ者、是を不二法門に入ると爲す。』

【二三】第二十一 Gambhīramati. 三解脱門の不異、蓋し解脱は一空行なり、但だ達せずして以て假に空・無相・無作の三と分つのみ。

【二四】第二十二 Śāntendriya. 三寶の不一・不異を説く。

【二五】第二十三 (Cittavaraṇa). 舊譯には有身見と身滅とす。

【二六】第二十四 Kṣalottama. 身口意三業の別なし。

（二七）福田菩薩曰く、『福行と罪行と不動行とを二と爲す。三行の實性は卽ち是れ空なり。空には卽ち福行無く、罪行無く、不動行無し。此の三行に於て起さざる者、是を不二法門に入ると爲す。』

（二八）華嚴菩薩曰く、『我に從ひて二を起すを二と爲す。我の實相を見る者は二法を起さず。若し二法に住せざれば卽ち有識無く、所識無き者、是を不二法門に入ると爲す。』

（二九）德藏菩薩曰く、『有所得の相を二と爲す。若し所得無ければ卽ち取捨無し。取捨無き者、是を不二法門に入ると爲す。』

（三〇）月上菩薩曰く、『闇と明とを二と爲す。闇無く明無ければ卽ち二有ること無し。所以何んとなれば、滅受想定に入れば闇無く明無きが如く、一切法相も亦復た是の如し。其の中に於て平等にして入る者、是を不二法門に入ると爲す。』

（三一）寶印手菩薩曰く、『涅槃を樂ふと、世間を樂はざるとを二と爲す。若し涅槃を樂はず、世間を厭はざれば、則ち二有ること無し。所以何んとなれば、若し縛有れば解あり、若し本と縛無ければ、其れ誰か解を求めむ、

【二七】第二十五 Puṇyakṣetra. 三行の不異。福とは是れ欲界の善行なり、罪は是れ十惡なり、不動とは色・無色の禪定の行なり。三行は皆是れ一相にして無二なり。

【二八】第二十六 Puṣpavyūha. 我に從ふとは卽ち我なり、起すとは彼なり、此の彼・我の二法亦一也。新譯曰く、『一切の二法皆我より起る、若し諸の菩薩我の實性を知れば卽ち二を起さず。』

【二九】第二十七 Guṇagarbha. 得は我に在り、相は彼に在り、我は得相無し、誰か取捨有らん。

【三〇】第二十八 Candrottama. 明暗二相なし。

【三一】第二十九 Ratnamudrapāṇi. 生死を厭ひ涅槃を欣樂する、差別の見を去り、生死卽

縛無く解無ければ則ち樂厭無し。是を不二法門に入ると爲す。』

(三二)珠頂菩薩曰く、『正道と邪道とを二と爲す。正道に住する者は、則ち是れ邪是れ正なりと分別せず。此の二を離るる者、是を不二法門に入ると爲す。』

(三三)樂實菩薩曰く、『實と不實とを二と爲す。實見の者は尙ほ實を見ず、何に況や非實をや。所以何んとなれば、肉眼の所見に非ず、(三四)慧眼乃ち能く見る。而も此の慧眼は見ること無く、見ざること無し。是を不二法門に入ると爲す。』

是の如く諸の菩薩、各各說き已りて、文殊師利に問ふ、『何等か是れ菩薩不二法門に入る』(三五)文殊師利曰く、『我意の如きは、一切の法に於て、言も無く、說も無く、示も無く、識も無く、諸の問答を離るる、是を不二法門に入ると爲す。』

是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、『我等各自ら說き已んぬ。仁者當に說くべし。何等をか是れ菩薩不二法門に入ると爲す。』

涅槃の境地に立ちて此の不二門を說く。

【三二】第三十 Maṇicūḍarāja.（マニチユダラージヤ）(新譯、珠髻王)、邪正二道別なしと達觀す。

【三三】第三十一 Satyapriya.（サトヤプリヤ）虛實不二。

【三四】見ること無しと雖も而も見ざる所無し、是れ眞に慧眼の體なり。

【三五】第三十二 Mañjuśrī.（マンジユシユリ）前來諸の菩薩各不二の義を說くも自ら義ありて說くべきもの存するが如し。是を以て文殊は說く可き無きを以て當に不二と爲すことを明す。新譯の文更に明にして解し易し、曰く、『汝等言ふ所、皆是善しと雖、我が意の如くんば汝等の此說猶名けて二とす。若し諸の菩薩一切の法に於て言なく說なく、表なく示なく、諸の戲論を離れ、分別を絕する是を不二法門に悟入すとなす』

（三六）時に維摩詰、默然として言無し。文殊師利歎じて曰く、『（三七）善哉善哉、乃至文字語言有ること無き、此れ眞に不二法門に入る。』是の入不二法門品を說ける時、此の衆中に於て、五千の菩薩皆不二法門に入り、無生法忍を得たりき。

【三六】文殊理を以て說き、維摩實を以て證す、所謂一默大千を震ふもの、無言說・無表示の說尚言語あり、維摩に至り上天言なく、威風眞に堂堂たり、前品舍利子の默と、此一默と對比し來れ。

【三七】然るに下根の人は維摩詰の默然無言が不二の極たることを知らずしてこれを疑ふを以ての故に、文殊其の意を衆生に傳へんが爲に言を發して無言を讚述せる也。（御疏）

卷の第十

(一)香積品第十

是に於て舍利弗心に念へらく、『日時至らんと欲す、此の諸の菩薩當に何をか食すべき。』

時に維摩詰其の意を知りて語て言く、『佛八解脫を說きたまふ。仁者受行す。豈欲食を雜へて而して法を聞かんや。若し食せんと欲せば、且く待つこと須臾せよ、當に汝をして未曾有の食を得せしむべし。』

時に維摩詰卽ち三昧に入りて、神通力を以て諸の大衆に示す。上方の界分四十二恒河沙の佛土を過ぎて國あり、(二)衆香と名づけ、佛を(三)香積と號す、今現に在ます。其の國の香氣、十方の諸佛の世界の人天の香に比ぶるに最も第一なり。彼の土に聲聞・辟支佛の名有ること無く、唯だ清淨の大菩薩衆のみ有り。佛爲に法を說く。其の界の一切皆香を以て樓閣を作り、經行香地苑園皆香し。其の食の香氣十方無量の世界に周流す。(四)時に彼

【一】當品は下根の人を化するの第二品にして、上の佛道品に於て非を行じて是に通ずと聞き、此の人但だ言のみにして實に非ずと謂へり。故に今揣食(普通俗界の飲食)は是れ累なり、而るに今飯(最上の法食)を香積佛土に請ひて大に佛事を爲すことを明して以て非を行じて是に通ずる、信在らば微有ることを知らしむ。其の飯を請ふの佛に就て品目を立て、香積品と云ふ。(太子御疏)

【二】Sarvagandha. (サルヴスガンダー) 衆香・一切妙香)

の佛と、諸の菩薩と、方に共に坐して食す。諸の天子有り、皆(五)香嚴と號す。悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發して、彼の佛及び諸の菩薩を供養す。此の諸の大衆目に見ざる莫し。

時に維摩詰衆の菩薩に問ふ、『諸の仁者、誰か能く彼の佛の飯を致さん。』(六)文殊師利の威神力を以ての故に、咸く皆默然たり。維摩詰言く、(七)『仁、此の大衆無乃恥づ可きや。』(八)文殊師利の言く、『佛の言ふ所の如し、未學を輕ずること勿れ。』

是に於て維摩詰、座を起たず、衆會の前に居しながら、菩薩を化作す、相好光明威德殊勝にして衆會を蔽ふ。而して之に告げて曰く、『汝上方の界分に往け。四十二恒河沙の如き佛土を度りて國有り、衆香と名づけ、佛を香積と號す、諸の菩薩と方に共に坐して食したまふ。汝往き彼に到りて、わが詞の如く曰すべし、「維摩詰、世尊の足下を稽首して敬を致すこと無量なり。起居、少病少惱にして氣力安きや否やと問訊し、願くは世尊所食の餘を得て、當に娑婆世界に於て佛事を施作して、(九)此の小法を樂ふ者をして大道を弘むることを得しむべく、亦如來の名聲をして普く聞えしめん」と。』時に化の菩薩、即ち會の前に於て上方に昇る。衆を擧げて皆其の去

【三】Gandhakūṭa.（新譯、最上香臺）

【四】法食を享くるを示す。

【五】Gandhavyūha.

【六】文殊、維摩詰の德を顯はさんと欲して威神力を以て衆をして答ふる無からしむ。

【七】淨名は未學を勵まさんと欲して則ち無乃恥づべきやと言ふ。

【八】文殊、新學を進めんと欲して故らに佛言を引きて未學を輕ずる勿れと言ふ。

【九】是實に主眼なり、聲聞唯聲を以て佛教を聞く、一切の色・香・味・觸悉く是大法たるを知らず。

て衆香界に到りて、彼の佛の足を禮することを見る。又其の言ふことを聞く、〔一〇〕『維摩詰世尊の足下を稽首して敬を致すこと無量なり、起居少病少惱氣力安きや不やと問訊す。願はくは世尊の所食の餘を得て、娑婆世界に於て佛事を施作して、此の小法を樂ふ者をして大道を弘むることを得しめ、亦如來の名聲をして普く聞えしめんと欲す」と。

彼の諸の大士、化菩薩を見て未曾有なりと歎ず、『今此の上人何れの所より來れる、娑婆世界は何れの許にか在るとやせん、云何ぞ名づけて小法を樂ふ者と爲す』と。卽ち以て佛に問ひたてまつる。佛之に告げて曰はく、『下方四十二恒河沙の如きの佛土を度ぎて世界あり、娑婆と名づけ、佛を釋迦牟尼佛と號す、今現に五濁惡世に在まして、小法を樂ふ衆生の爲に道敎を敷演す。彼に菩薩有り、維摩詰と名づく。不可思議解脫に住して、諸の菩薩の爲に法を說く、故に化を遣し來りて我が名を稱揚し、幷に此の土を讚めて、彼の菩薩をして功德を增益せしむ。』彼の菩薩の言く、『其の人何如が乃ち是の化を作し、德・力・無畏・神足斯の若くなるや。』佛の言はく、『甚だ大なり、一切の十方に皆化を遣はし、往て佛事を施作して衆生を饒益す。』是に於て香積如來、衆香の鉢を以て香飯を盛り滿てて化の菩薩に與へたまふ。時に彼の九百萬の菩薩、倶に聲を發して言く、『われ娑婆世界に詣りて釋迦牟尼佛を供養したてまつらんと欲す。幷に維摩詰等の諸の菩薩を見んと欲す』と。佛の言はく、〔一一〕『往く可し。汝が身香を攝めて、

【一〇】 [illegible]令甚巧妙、楊起元曰く、「楚楚一幅上摩詰の畫」と。
【一一】 一には身香を攝めて、惑著の心を起さざらしめ、二に

彼の諸の衆生をして惑著の心を起さしむる無れ。又當に〔二〕汝が本形を捨てて、彼の國の菩薩を求むる者をして、而も自ら鄙恥せしむる勿れ。又汝彼に於て輕賤を懷きて、礙想を作すこと勿れ。所以何んとなれば、〔三〕十方の國土は皆虛空の如し。又諸佛、諸の小法を樂ふ者を化せんと欲するが爲に、盡く其の淸淨の土を現せざるのみ』と。時に化菩薩既に鉢飯を受け、彼の九百萬の菩薩と倶に佛の威神及び維摩詰の力を承けて、彼の世界に於て忽然として現せず、須臾の間に維摩詰の舍に至る。

時に維摩詰卽ち九百萬の師子の座を化作して、嚴好なること前の如くし、諸の菩薩皆其の上に坐す。時に化菩薩滿鉢の香飯を以て維摩詰に與ふ。飯香普く毘耶離城及び三千大千世界に熏ず。時に毘耶離の婆羅門・居士等是の香氣を聞ぎて、身意快然として未曾有なることを歎ず。是に於て長者主〔四〕月蓋、八萬四千人を從へて維摩詰の舍に來入す。其の室中に菩薩甚だ多く、諸の師子の座の高廣嚴好なることを見て、皆大に歡喜し、衆の菩薩及び大弟子を禮して、却いて一面に住す。諸の地神・虛空神及び欲色界の諸天、此の香氣を聞ぎて、亦皆維摩詰の舍に來入す。時に維摩詰、舍利弗等の諸の大聲聞に語るらく、『仁者、如來の甘露味の飯を食す可し、大悲の熏ず

は本形を隱して鄙恥を懷かざらしむ、三には輕賤を生ずるを戒む。

〔二〕『汝等皆應に自ら色相を隱して堪忍界に入り、彼菩薩をして心に愧恥を生ぜしむること勿れ』(新譯)。蓋し此界の菩薩は身形衆香世界に比し若く醜惡なればなり。

〔三〕諸佛の宗法を說くや一なり。

〔四〕Somacchattra. 此長者の名・方等諸經に見ゆ。長者主と云ふは栗呫毘共和市の主長たるを示す。新譯曰く、『此城中、栗呫毘(Licchavi)主の月蓋と名づくるあり。』

る所なり、(一五)限意を以て之を食し消せざらしむること無れ。』(一六)異の聲聞有りて念へらく、「是の飯少し、而して此の大衆の人人當に食すべきや。」化の菩薩の曰く、『聲聞の小德・小智を以て、如來の無量の福慧を稱量すること勿れ。四海は竭くること有りとも、此の飯は盡くること無かるべし。一切の人をして食摶せしむること須彌の若くして、乃至一劫すとも猶ほ盡くす能はず。所以何んとなれば、無盡の(一七)戒・定・智慧・解脫・解脫智見の功德具足せる者の所食の餘なれば、終に盡く可からざるなり。』是に於て鉢飯、悉く衆會を飽かしむれども、猶ほ故のごとくして盡きず。其の諸の菩薩・聲聞・天・人此の飯を食する者は、身安して快樂なること、譬へば(一八)一切樂莊嚴國の諸の菩薩の如し。又諸の毛孔より皆妙香を出すこと、亦衆香國土の諸樹の香の如し

爾の時、維摩詰、衆香菩薩に問ふ、「香積如來何を以てか法を說きたまふや。」彼の菩薩の曰く、『(一九)我が土の如來は文字の說無し、但だ衆香を以て諸の天人をして、律行に入ることを得しむ。菩薩各各香樹の下に坐して此の妙香を聞ぎて、一切德藏三昧を獲。是の三昧を得る者は、菩薩所有の功德、皆悉く具足す。』

【一五】色卽空なり、食卽法なり、差別の限意あるもの、豈香飯を喫するに堪へん乎。新譯曰く、『少分下劣の心行を以て此食を食する勿れ。』

【一六】新譯『時に衆會の中に諸の劣聲聞あり。』舍利子等はよく佛意を解す、而も下劣の聲聞は佛維摩の語を聞くも尙解する能はず鈍根憐れむべし。

【一七】諸佛の五分法身は常住にして盡きず、其功德無限なり。

【一八】Sarvasukhāvatīvyūha.（サルヴスカーヴァティーヴユーハ）（新譯、一切安樂莊嚴世界）

【一九】文字言語なく、唯衆香を以て化度の大用をなし、諸天人民を佛道に入らしむ。

彼の諸の菩薩、維摩詰に問ふ、『今世尊釋迦牟尼、何を以てか法を說きたまふ。』維摩詰の言く、「此の土の衆生剛强にして化し難し、故に、佛爲に剛强の語を說き、以て之を調伏したまふ。曰く、「是れ地獄、是れ畜生、是れ餓鬼、是れ（一〇）諸難處、是れ（一一）愚人生處、是れ身邪行、（一二）是れ身邪行の報、是れ口邪行、是れ口邪行の報、是れ意邪行、是れ意邪行の報、是れ殺生、是れ殺生の報、是れ不與取、是れ不與取の報、是れ邪婬、是れ邪婬の報、是れ妄語、是れ妄語の報、是れ兩舌、是れ兩舌の報、是れ惡口、是れ惡口の報、（一三）是れ無義語、是れ無義語の報、是れ貪嫉、是れ貪嫉の報、是れ瞋惱、是れ瞋惱の報、是れ邪見、是れ邪見の報、是れ慳悋、是れ慳悋の報、是れ毀戒、是れ毀戒の報、是れ瞋恚、是れ瞋恚の報、是れ懈怠、是れ懈怠の報、是れ亂意、是れ亂意の報、是れ愚癡、是れ愚癡の報、（一四）是れ結戒、是れ持戒、是れ犯戒、是れ應作、是れ不應作、是れ障礙、是れ不障礙、是れ得罪、是れ離罪、是れ淨、是れ垢、是れ有漏、是れ無漏、是れ正道、是れ邪道、是れ有爲、是れ無爲、是れ世間、是れ涅槃。」化し難き人の心、猨猴の如くなるを以ての故に、若干種の法を以て其の心を制御して、即ち調伏す可し。譬へば象・馬（一五）𢤱悷にして不調なれば

【一〇】諸難處とは八難處なり、先に述ぶるが如し。

【一一】愚人生處とは外道異習なり、新譯には"諸の根缺"とす、即不具の人を指す。

【一二】身・口・意の三、先總して邪行を舉げ、次で別して種種の惡行を說く。

【一三】無義語とは美言を以て人を悅ばしむる者なり。普通綺語と譯す。

【一四】已下淨穢、善惡、迷悟を相對して之を擧ぐ十對あり、第一の結戒の下、新譯に依るに一句を脫せるが若し、宜く是れ結戒、是れ越戒となすべし。（新譯に曰く、『此受所學此越所學』と。所學は戒を指す。）

【一五】人意に乖き戾り、甚だ御し難きの意。

諸の楚毒を加へ、乃至骨に徹して、然して後に調伏するが如し。是の如く剛强難化の衆生の故に、一切苦切の言を以て、乃ち律に入る可し。』

彼の諸の菩薩是を說くを聞き已りて、皆曰く、『未曾有なり』と。

『(二六)世尊釋迦牟尼佛の如きは、其の無量自在の力を隱して、乃ち貧所樂の法を以て、衆生を度脱したまふ。(二七)斯の諸の菩薩も、亦能く勞謙して、無量の大悲を以て是の佛土に生ぜり。』維摩詰の言く、『此の土の菩薩、諸の衆生に於て大悲堅固なること、誠に言ふ所の如し。(二八)然るに其の一世に衆生を饒益すること、彼の國の百千劫の行よりも多し。所以何んとなれば、是の娑婆世界には、(二九)十事の善法有り、諸餘の淨土には之有ること無き所なり。何等をか十と爲す、(一)布施を以て貧窮を攝し、(二)淨戒を以て毀禁を攝し、(三)忍辱を以て瞋恚を攝し、(四)精進を以て懈怠を攝し、(五)禪定を以て亂意を攝し、(六)智慧を以て愚癡を攝し、(七)除難の法を說きて(三〇)八難の者を度し、(八)大乘法を以て小乘を樂ふ者を度し、(九)諸の善根を以て無德の者を濟ひ、(十)常に四攝を以て衆生を成就す。是を十と爲す。』彼の菩薩の曰はく、(三一)『菩薩幾くの法を成就してか、此の世界に於て行ずるに、瘡疣無く

【二六】新譯『世尊釋迦牟尼能く難事をなし、無量尊貴の功德を隱覆し、是の如き調伏方便を示現し、下劣貧匱の有情を成熟し、種種の門を以て調伏し饒益す』

【二七】此世界に於ける菩薩の勞苦は他界の菩薩よりも甚し

【二八】大無量壽經の此土に於て善を修する十日十夜なれば、諸佛國土に於て千載の修善に勝るといふと同義。

【二九】他方佛土は純善の衆生多し、此土は之に反す、故に十善の法を以て此に於て物を化し利せしむ、是彼の百千劫の修行に勝る所以なり。十善は六度に除八難法・大乘法・諸善根及四攝法の四を加ふ。

【三〇】前註を見よ

【三一】維摩詰の言へるが如く此の土の妨難甚だ多し、然も菩薩何の道を修行してか此の過

して淨土に生ずるや。【二】維摩詰の言く、『菩薩八法を成就すれば、此の世界に於て行ずるに、瘡疣無くして淨土に生ず。【三】何をか八と爲す。(一)衆生を饒益して、而も報を望まず。(二)一切衆生に代りて諸の苦惱を受け、所作の功德盡く以て之を施す。(三)心を衆生に等しうし、謙下して礙無し。(四)諸の菩薩に於て之を視ること佛の如し。(五)未だ聞かざる所の經、之を聞きて疑はず。【四】聲聞と、相ひ違背せず。(六)彼の供を嫉まず、己が利を高うせず、而も其の中に於て其の心を調伏す。(七)常に己が過を省みて、彼の短を訟へず。(八)恒に一心を以て諸の功德を求む。是を八法と爲す。』

維摩詰、文殊師利、大衆の中に於て是の法を說ける時、百千の天人、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、十千の菩薩は無生法忍を得たりき。

を免るることを得て淨土に生ずるやと云ふ問ひに對して八法を說く。

【三】 八法は、今經數目を置かず、今新譯の標數に依る。古釋家及上宮の御疏、第一第二を合して一となすも、恐くは當らず。

【四】 古釋家及上宮疏之を第五となす、而も、是れ小乘諸經を聞くも疑謗を生ぜざる義のみ。新譯曰く、『未だ聽受せざる甚深の經典に於て、暫く聽聞することを得るも疑なく謗なし。』

卷の第十一

(一)菩薩行品第十一

爾の時、佛、法を菴羅樹園に說きたまふ。其の地忽然として廣博の嚴事あり。一切の衆會、皆金色と作る。阿難佛に白して言さく、『世尊、何の因緣を以てか、此の瑞應有り、是の處、忽然として廣博の嚴事あり、一切の衆會皆金色と作れるや。』佛阿難に告げたまはく、『是れ維摩詰、文殊師利、諸の大衆のために恭敬圍繞せられて、意を發して來らんと欲す。故に先づ此の瑞應を爲す。』

是に於て維摩詰、文殊師利に語るらく、『(二)共に佛を見たてまつりて、諸の菩薩と禮事供養す可し。』文殊師利の言く、『善哉行かん、今正く是れ時なり。』(三)維摩詰卽ち神力を以て諸の大衆幷に師子の座を持して、右の掌に置て佛所に往詣す。到り已りて地に著いて佛足を稽首し、右に遶ること七帀して、一心に合掌して一面に在りて立つ。其の諸の菩薩卽ち

【一】當品は佛、衆香菩薩の爲に菩薩の行を說きたまふが故に名づく。當品より以下、見阿閦品の「衆を擧げて皆見る」まで維摩方丈の會座に對し正說の中の第二に屬す。卽佛菴羅樹園に於て菩薩の種種の妙行を明して、方丈の說を證誠する也。蓋し上六品の所說は皆是れ難信難受の要行にして且つ維摩は俗家の居士に屬す[illegible]れば其不思議解脫の境界を知らず、惑者[illegible]して、悉く其の所說[illegible]信ぜざることを虞るるが故に、方丈の一會了りて今此の證誠の一座あり。

【二】菩薩「我等今佛に諸の大

皆座を避けて、佛の足を稽首し、亦遶ること七帀して一面に於て立つ。諸の大弟子、釋・梵・四天王等も亦皆座を避けて、佛足を稽首して一面に於て立つ。是に於て世尊、法の如く諸の菩薩を慰問し已りて、各をして座に復らしむ。即ち皆教を受けて衆座已に定まる。佛舍利弗に語りたまはく、『汝、菩薩大士の自在神力の爲す所を見るや。』『唯然り、已に見る。』『汝の意云何ん。』『（五）世尊、われ其の爲すを視るに不可思議なり、意の圖る所に非ず、度して測る所に非ず。』

爾の時、阿難佛に白して言さく、『世尊、今聞く所の香、昔より未だ有らず、是れ何の香とやせん。』佛阿難に告げたまはく、『是れ彼の菩薩の毛孔の香なり。』是に於て、舍利弗、阿難に語りて言く、『吾等が毛孔も亦是の香を出す。』阿難の言く、『（六）此れ從來する所ありや。』曰く、『是れ長者維摩詰、衆香國より佛の餘飯を取る。舍に於て食する者の一切の毛孔、皆香しきこと此の若し。』阿難、維摩詰に問ふ、『是の香氣住すること當に久如かるべきや。』維摩詰の言く、『（七）此の飯の消するに至るべし。』曰く、『此の飯久如か當に消すべき。』曰く、『（八）此の飯の勢力七日に至りて然して

士と與に、如來の所に詣り、頂禮し供事し、世尊を瞻仰して妙法を聽受せん。』詳にして盡くせり。

【三】新譯「諸の大衆をして本處并に師子座を起たず、右掌の中に住せしめ云云」本譯に比し詳悉にして更に可。

【四】神通妙用彌出でて彌大、不可思議解脫の大能充分に發揮し來る。

【五】神通大用、思議を超絕す、新譯に曰く『我大士を見るに不可思議なり、其作用神力功德に於て算數する能はず、思惟する能はず、稱量する能はず、述嘆する能はず。』

【六】『仁等の身内に何の緣ありてか有るや。』（新譯）

【七】『乃至この食味皆消盡するも其香猶住まらん。』（新譯）

【八】『この食の勢分、七日七夜、住りて身内にあり、これ

後に乃ち消すべし。又阿難、若し聲聞人の未だ（九）正位に入らずして此の飯を食する者は、正位に入ることを得、然して後に乃ち消す。已に正位に入りて此の飯を食する者は、（一〇）心解脱を得て、然して後に乃ち消す。若し未だ大乘の意を發さずして此の飯を食する者は、（一一）發意に至りて乃ち消す。已に發意して此の飯を食する者は、（一二）無生忍を得て然して後に乃ち消す。已に無生忍を得て此の飯を食する者は、（一三）一生補處に至りて然して後に乃ち消す。譬へば、藥有り名づけて上味と曰ふ、其を服する者有らば身の諸毒滅して、然して後に乃ち消するが如し。此の飯も是の如く、一切諸の煩惱の毒を滅除して、然して後に乃ち消す。』

阿難佛に白して言さく、『未だ曾て有らざるなり、世尊、此の如き香飯の能く佛事を作すことや。』佛の言はく、『（一四）是の如し是の如し、阿難、或は佛土有り、佛の（一）光明を以て佛事を作し、（二）有は諸の菩薩を以て佛事を作し、（三）有は佛の所化人を以て佛事を作し、（四）有は菩提樹を以て佛事を作し、（五）有は佛の衣服・臥具を以て佛事を作し、（六）有は飯食を以て佛事を作し、（七）有は園・林・臺觀を以て佛事を作し、（八）有は三十二相・八十隨形好

を過ぎて已後漸く消すべし。久しく消せずと雖、而も患となさず』（新譯）。これ凡夫につき大約七日として物質の方面を舉ぐ、實は聲聞人の得果已下の靈的修得を本旨とす。

【九】正位卽正性離生に入る內凡の位、初果に達するをいふ。

【一〇】心解脫とは羅漢果なり。

【一一】發意に至るとは、大乘の人內凡（十信位）を得ると云ふことを明す。

【一二】無生忍とは七地の菩薩位なり。

【一三】一生補處は次生に佛位に補するもの卽第十地の菩薩位なり

【一四】已下佛、阿難の歎に因て諸佛の威儀進止悉く佛事を作すを從ひ、其佛種山不同を明かさんが爲に十三の佛事を舉ぐ、是下の四魔・煩惱又佛事たるを明すに對すれば顯說なり

を以て佛事を作し、(九)有は佛身を以て佛事を作し、(十)有は虚空を以て佛事を作す。衆生應に此の緣を以て律行に入ることを得べし。(十一)有は夢・幻・影響、鏡中の像、水中の月、熱時の焰、是の如き等の喩を以て佛事を作し。(十二)有は音聲・語言・文字を以て佛事を作す。(十三)【一五】或は清淨の佛土有り、寂莫・無言・無說・無示・無識・無作・無爲にして佛事を作す。【一六】是の如く阿難、諸佛の威儀進止、諸の施爲する所、佛事に非ざること無し。阿難、【一七】此の四魔八萬四千諸の煩惱門有り、【一八】而して諸の衆生之が爲に疲勞す、諸佛は卽ち此の法を以て佛事を作す。是を一切諸佛の法門に入ると名づく。

【一九】菩薩此の門に入る者は、若し一切の淨好の佛土を見るも、以て喜と爲さず、貪らず、高ぶらず。若し一切の不淨の佛土を見るも、以て憂と爲さず、礙せず、沒せず、但だ諸佛に於て清淨の心を生じて、未曾有なりと歡喜恭敬す。諸佛如來功德平等なれども、衆生を敎化せんが爲の故に、而も佛土を現ずること同じからず。阿難、汝諸佛の國土を見よ、【二〇】地に若干有りとも、而も虚空には若干無し。【二一】是の如く諸佛の色身に若干有るのみ、其の無礙の慧は若干無し。阿難、諸佛の色身・威相・種性・戒・定・智慧・解脫・

卽是を以て是に通ず。

【一五】是最も清淨の佛土なり、最上の佛事なり。

【一六】『是の如く應に知るべし。十方世界の諸佛國土、其數無邊なり、所作の佛事も亦無數なり、要を以て之を言へば、諸佛の所有、威儀進止、受用施爲、皆所化の有情をして調伏せしむ。是故に一切皆佛事と名づく。』(新譯)

【一七】是所謂非を擧げて是に通ずるもの、前に對して逆說なり。蓋し上の佛道品の中非を行じ佛道に通達するを證す。

【一八】『有情の類、それが爲に惱まさる。』(新譯)

【一九】諸佛は平等無二なり、但物を化せんが爲に物に應じて土を現ず、淨穢は彼に在り。佛に在ては無二なり、何んぞ憂喜を生ぜん、勝劣の想を爲さん。

解脱知見・力・無所畏・不共の法・大慈大悲・威儀の所作及び其の壽命、說法・敎化、衆生を成就して佛國土を淨め、諸の佛法を具すること、悉く皆平等なり、是の故に名づけて〔二二〕三藐三佛陀と爲し、名づけて〔二三〕多陀阿伽度と爲し、名づけて〔二四〕佛陀と爲す。阿難、若しわれ廣く此の三句の義を說かば、汝劫壽を以てするも盡く受ること能はず。正使三千大千世界の中に滿てる衆生、皆阿難の如く多聞第一にして、念總持を得たらんに、此の諸人等、劫の壽を以てすとも亦受くること能はず。是の如く阿難、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は限量有ること無く、智慧・辯才・不可思議なり。』

阿難佛に白して言さく、『〔二五〕われ今より已往、敢て自ら謂ひて以て多聞なりと爲さじ。』佛阿難に告げたまはく、『退意を起すこと勿れ。所以何んとなれば、われ說く、汝は聲聞の中に於て最も多聞なりと、菩薩を謂ふには非ず。且く止めよ、阿難、其れ有智の者は、諸の菩薩を限量すべからず、一切の海淵は尙ほ測量すべし、菩薩の禪定・智慧・總持・辯才・一切の功德は量る可からず。阿難、汝等菩薩の所行を捨て置け。是の維摩詰の一時所現の神通力は、一切の聲聞・辟支佛、百千劫に於て力を盡して變化すとも、作すこと能はざる所なり。』

【二〇】若干は勝劣不同の差別あるの意、新譯に曰く『所依の地、勝劣不同と雖、上の虛空には都て差別なし。』

【二一】『諸佛世尊は諸の有情を成熟せんと欲するが爲の故に、種種の色身の不同を現すと雖而も障礙なし、福德智慧究竟圓滿して都て差別なし。』（新譯）

【二二】Samyaksambuddha. 正徧覺と翻す、徧字字眼なり。

【二三】Tathāgata. 如來、如は平等の義。

【二四】Buddha. 佛陀は漢に覺と云ふ。覺體平等なる意なし。

【二五】前の佛道品の中の迦葉自ら敗種なりと嘆ずるに對比して、大乘の至致は阿難の境界にあらざるを說く。

（二六）爾の時、衆香世界の菩薩の來れる者、掌を合せて佛に白して言さく、『世尊、我等初め此の土を見て下劣の想を生じき。今自ら悔責して是の心を捨離しぬ。所以何んとなれば、諸佛の方便は不可思議なり、衆生を度せんが爲の故に、其の所應に隨ひて、佛國の異を現じたまふ。唯然なり、世尊、願はくは少法を賜へ、彼の土に還りて當に如來を念ずべし。』

佛、諸の菩薩に告げたまはく、『盡・無盡解脱法門有り、汝等當に學すべし。（二七）何をか謂て盡と爲す、謂ゆる有爲の法なり。何をか無盡と謂ふ、謂ゆる無爲の法なり。（二八）菩薩の如きは有爲を盡さず、無爲に住せず。（二九）何をか有爲を盡さずと謂ふ、謂ゆる大慈を離れず、大悲を捨てず、深く一切智の心を發して忽忘せず、衆生を敎化して終に厭惓せず、四攝の法に於て常に念じて順行し、正法を護持するに、身命を惜まず。諸の善根を種ゑて疲厭有ること無く、志常に方便と廻向とに安住し、法を求めて懈らず、法を說きて悋む無く、勤めて諸佛を供し、故に生死に入りて而も畏る所無く、諸の榮辱に於て、心に憂喜する無く、未學を輕ぜず、學を敬ふこと佛の如くし、煩惱に墮する者には正念を發さしめ、遠離の樂に於ても以て貴しと爲さず、己が樂に著

【二六】衆香菩薩、勝劣差別の見を悔い、法を請うて本土に還ることを明す、佛爲に盡無盡解脱法門（Kṣayākṣayavimokṣadharma-paryāya）を說く。

【二七】有爲は是れ相あるが故に盡と名づく、無爲は是れ無相なるが故に無盡と名づく。『有盡とは、是有爲有生滅の法無盡とは、是無爲無生滅の法也。』（新譯）

【二八】有爲を盡さざるは菩薩の大用にして功德門に屬し、無爲に住せざるは其大智にして智慧門に屬す。

【二九】已下第一功德門につき、大用を述ぶ。

せず、彼の樂を慶び、〔三〇〕諸の禪定に在りて、地獄の想の如くし、生死の中に於て園觀の想の如くし來り求むる者を見ては善師の想を爲し、諸の所有を捨て一切智の想を具し、戒を毀る人を見ては救護の想を起し、諸の波羅蜜には父母の想を爲し、〔三一〕道品の法には眷屬の想を爲し、善根を發行して齊限有ること無し。〔三二〕諸の淨國嚴飾の事を以て、己が佛土を成じ、無限の施を行じて、相好を具足し、一切の惡を除きて身・口・意を淨む。〔三三〕故に生死無數劫なれども、意而も勇有り、佛の無量の德を聞きて、志而も倦まず、智慧の劒を以て、煩惱の賊を破りて、〔三四〕陰と界と入とを出で、衆生を荷負して、永く解脫せしめ、大精進を以て、魔軍を摧伏し、常に無念實相の智慧を求め、〔三五〕少欲知足を行じて、而も世法を捨てず、威儀を壞せずして、而も能く俗に隨ひ、神通の慧を起して、衆生を引導し、念總持を得て、聞く所を忘れず、〔三六〕善く諸根を別ちて衆生の

【三〇】禪定の妙樂に執著せず、之を見る地獄の如く、生死の怖畏すべきに縛せられず、遊ぶこと園觀の如し。

【三一】所謂三十七道品をいふ、前註を見よ。

【三二】淨國嚴飾の事は種種の善行を修し之を佛國莊嚴の因となすこと、佛國品に說くが如し、新譯此處文特に詳なり、曰く「諸の佛土に於て、恒に莊嚴を樂ひ、他の佛土に於て、深心に欣び讚し、自の佛土に於て、能く速に成就す」

【三三】無數劫の生死に處して意疲倦せず、大精進を行ずるをいふ。

【三四】五陰・十八界・十二處、前註を見よ。

【三五】是大士のなす所、維摩其實例なり。

【三六】衆生諸根の勝劣を分別し、之に應じて疑を斷ず。

【三七】「種種の無礙の辯才を得て、正法を敷演すること常に擁滯なし」(新譯)

【三八】已下新譯稍意義を異にす圖示の如し。

人天の樂を得んが爲に――十善
梵天の路を聞くが爲に――四無量
諸佛上妙の音聲を得んが爲に――起法勸請　修
諸佛上妙の威儀を得んが爲に――寂靜三業

疑を斷じ、(三七)樂說辯を以て法を演ぶること無礙なり。(三八)十善道を淨めて人天の福を受け、四無量を修して梵天道を開き、說法を勸請して隨喜讚善し、佛の音聲と身・口・意の善とを得、佛の威儀を得て、深く善法を修し、所行轉た勝り、大乘敎を以て菩薩僧と成り、心に放逸無くして衆善を失せず。此の如く法を行ずる是を菩薩有爲を盡さずと名づく。(三九)何をか菩薩無爲に住せずと謂ふ。(四〇)謂ゆる(四一)空を修學して、空を以て證と爲さず、無相・無作を修學して、無相・無作を以て證と爲さず、無起を修學して、無起を以て證と爲さず、無常を觀じて、而も善本を厭はず、世間の苦を觀じて、而も生死を惡まず、無我を觀じて、而も人に誨ふること倦まず、寂滅を觀じて、而も永く寂滅せず、遠離を觀じて、而も身心善を修し、(四二)無所歸を觀じて、而も趣きて善法に歸し、無生を觀じて、而も生法を以て(四三)一切を荷負し、無漏を觀じて而も諸漏を斷せず、無所行を觀じて、而も行法を以て衆生を敎化し、空無を觀じて而も大悲を捨てず、(四四)正法の位を觀じて、而も小乘に隨はず、諸法虛妄にして、牢きこと無く、人無く、主無く、

【三九】 已下第二智慧門の達理に就いて無爲に住せざることを釋す。

【四〇】 三乘共に空を觀ずるも其の造觀同じからず二乘の空觀は唯無我に在るを難しとし、大乘の空觀は法として在らざる無きが故に空法も亦空にして而も證せず。(楊起元)

【四一】 已下、空・無相・無作・無起・無常・苦・無我・寂滅・遠離・無所歸・無生・無漏・無所行・空無・正法・諸法虛妄の十六句を以て無住の深義を說く。要は空にありて空に執せず、空理に明にして有を攝化することを盡きざるにあり。

【四二】 此は Alaya の譯字なり、新譯は Alaya. とある本に隨ひて『阿賴耶を樂ひ觀ずと雖而も淸白の法藏を棄捨せず』となせり。

【四三】 一切の衆生を荷負するなり、無量壽經の「群生を荷負して重擔となす」の意。

【四四】 正法位は羅漢の位。

相無きことを觀じて、本願未だ滿せざれば、福德・禪定・智慧を虛くせず。此の如きの法を修する、是を菩薩無爲に住せずと名づく。(四五)又福德を具するが故に無爲に住せず、智慧を具するが故に有爲を盡さず。大慈悲の故に無爲に住せず、本願を滿ずるが故に有爲を盡さず。法藥を集むるが故に無爲に住せず、隨ひて藥を授くるが故に有爲を盡さず。衆生の病を知るが故に無爲に住せず、衆生の病を滅するが故に有爲を盡さず。諸の正士、菩薩已に此の法を修して、有爲を盡さず無爲に住せず、是を盡無盡解脫法門と名づく。汝等當に學すべし。』

爾の時に、彼の諸の菩薩、是の法を說きたまふを聞きて、皆大に歡喜し、衆妙華の若干種の色、若干種の香あるを以て、三千大千世界に散遍して、佛及び此の經法、幷に諸の菩薩を供養し已りて、佛の足を稽首し、未曾有なることを歎じて言さく『釋迦牟尼佛、乃ち此の善巧方便を能くす』と。言ひ已りて、忽然として現せず、還りて彼の國に到る。

【四五】この下、上の功德・智慧二門に就て結釋す。四雙あり、曰く福德・智慧、曰く大悲・本願、曰く法藥・與藥、曰く知病・滅病是なり。

卷の第十二

（一）見阿閦佛品第十二

爾の時、世尊維摩詰に問ひたまはく、『汝如來を見んと欲す、何等を以てか如來を觀んと爲るや。』維摩詰の言さく、『（二）自ら身の實相を觀ずるが如く、佛を觀ることも亦然り。われ佛を觀たてまつるに（三）前際來らず、後際去らず、今則ち住せず。（四）色と觀ぜず、色の如と觀ぜず、色性と觀ぜず、受・想・行・識と觀ぜず、識の如と觀ぜず、識性と觀ぜず。四大より起るに非ず。虛空に同じ。六入積むこと無し。眼・耳・鼻・舌・身・心已に過ぎて三界に在らず、（五）三垢已に離れて三脫門に順ず。（六）三明と無明とを等しく具足し

【一】當品は衆をして彼の阿閦(Aksobhya)如來の國を見しむる故に名づく、若し文に隨ひて品目を作らば觀如來身品と謂つべきなれども、今は得益に因て見阿閦佛品と言ふ。

【二】佛身無相にして見る可らざることを明す。蓋し此の說の來る所以は、上の菩薩行品の初に維摩詰文殊と共に佛を見たてまつる可しと語れり、大衆之を聞きて、理中に佛の見るべき無きを知らず、本迹の義を解せず、迹を見て實に佛身有ること今の如く見る可しと謂へり。此の迹に執して本に惑へるの惑を遣らんが爲に此說起る。

【三】時間を以て律すべからず超三世是佛身なり。

【四】五蘊につきていふ。色にあらず、色と等しきにあらず、また色の本體にあらず。中間の三蘊を略し、次に識につき亦此三にあらざるを說く。

【五】三垢は貪・瞋・癡の三毒をいふ。三脫門の解上に出づ。

【六】三明のこと上に出づ。明・無明一如なり。

【七】此岸は生死、彼岸は涅槃、中流は道品なり。

【八】已下新譯稍異なる。

て、一相ならず、異相ならず、自相ならず、他相ならず、無相に非ず、取相に非ず。(七)此岸ならず彼岸ならず、中流ならずして而も衆生を化す。寂滅を觀じて、亦永滅ならず、(八)此ならず、彼ならず、此を以てせず、彼を以てせず、(九)智を以て知るべからず、識を以て識るべからず。晦も無く、明も無く、名も無く、相も無く、强も無く、弱も無く、淨に非ず、穢に非ず、方に在ず、方を離れず、有爲に非ず、無爲に非ず、示すことも無く、說くことも無く、施ならず、慳ならず、戒ならず、犯ならず、忍ばず、恚らず、進まず、怠らず、定らず、亂れず、智ならず、愚ならず、誠ならず、欺かず、來らず、去らず、出でず、入らず、(一〇)一切の言語道斷なり。福田に非ず、福田にあらざるに非ず、供養に應ずるに非ず、供養に應せざるに非ず、取に非ず、捨に非ず、有相に非ず、無相に非ず、(一一)眞際に同じく法性に等し。稱すべからず、量るべからず、諸の稱量を過ぎたり。大に非ず、小に非ず。見に非ず、聞に非ず。覺に非ず、知に非ず、衆の結縛を離れ、(一二)諸智に等しく衆生に同じ。諸法に於て分別無し。一切得無く、失無く、濁無く、惱無く、作無く、起無く、生無く、滅無く、畏無く、憂無く、

【九】『智にあらず境にあらず、能識にあらず、所識にあらず』(新譯)今文に比し解し易し。

【一〇】『一切の語言施すに斷滅とす。』(新譯)

【一一】『增なく減なく、平等平等にして眞實際に同じく、法界の性に等し。』(新譯)更に詳悉とす。

【一二】『一切智智の平等を證會し、一切有情の二なきを獲得し、諸法無差別の性に逮ぶ。』(新譯)

【一三】金剛經の偈に『若色を以て我を見、音聲を以て我を求めば、是人邪道を行ず、如來を見る能はず』と、正に今の意なり。

【一四】舍利弗の維摩詰の本處を問ふに因て更に理の本生沒無きことを明し、物の迷執を遣る。蓋し先に維摩詰、われ佛身を觀ずるに無相にして見る

喜無く、厭無く、已有無く、當有無く、今有無し、一切の言說を以て分別顯示す可からず。世尊、如來の身は此の若しと爲す。(一三)是の如きの觀を作すべし。斯の觀を以てする者を名づけて正觀と爲す。若し他觀する者をば名づけて邪觀と爲す。

(一四)爾の時舍利弗、維摩詰に問ふ、『汝何くに於て沒して、而して來りて此に生ずるや。』維摩詰の言く、『汝が所得の法、沒生有りや。』舍利弗の言く、『(一五)沒生無し。』『若し諸法沒生の相無くんば、云何ぞ問うて、汝何くに於て沒して、而して來りて此に生ずると言ふや。意に於て云何ん。譬へば幻師の男女を幻作するが如き、寧ろ沒生するや。』(一六)舍利弗の言く、『沒生無きなり。』『汝豈に佛の諸法は如幻の相なりと說くを聞かざるや。』答て曰く、『是の如し。』『若し一切の法、如幻の相ならば、云何ぞ問うて汝何くに於て沒して而して來りて此に生ずるやと言ふや。(一七)舍利弗、沒とは虛誑の法の壞敗の相なり。生とは虛誑の法の相續の相なり。(一八)菩薩沒すと雖も善本を盡さず、生ずと雖も諸惡を長ぜず。』

是の時、(一九)佛舍利弗に告げたまはく、『國有り(二〇)妙喜と名づけ、(二一)佛

べからず、自ら身の實相を觀ずるが如く見るべからず」と言へり、之を聞ける衆疑ふらく、若し自身空にして見るべからずんば、今自ら生じて見る居士たること何ぞやと、卽ち之の一論を生ず。

【一五】羅漢所證の諦理、不生不滅なり。無爲の法豈沒生あらんや。

【一六】問答重出、響の如く應ず、文辭簡淨、眞に得易からず。

【一七】沒は斷見(Uccheda ウッチェーダ)に傾き、生は常見(Śāśvata シャースヷタ)に墮す、此虛誑の相と離る、是大乘の極理也。

【一八】沒すれども善本を盡さゞるは沒にして沒に非ず、生ずれども諸惡を長ぜざるは生にして生に非ず、是れ生沒の相無きなり。

【一九】至理(眞諦)の中には生沒無しと雖假相(俗諦)の中には

を無動と號す。是の維摩詰彼の國に於て沒して、而して來りて此に生ぜり。』舍利弗の言く、『〔二一〕未曾有なり、世尊、是れ乃ち能く淸淨の土を捨てて、來りて此の怒害多き處を樂ふ。』維摩詰、舍利弗に語るらく、『意に於て云何ん。日光出づる時冥と合するや。』答て曰く、『不なり、日光出づる時は則ち衆冥無し。』維摩詰の言く、『夫れ日、何が故に閻浮提に行くや。』答て曰く、『明照を以てし、之が爲に冥を除かんと欲す。』維摩詰の言く、『菩薩も是の如し。不淨の佛土に生ずと雖も、衆生を化せんが爲にして、愚暗と共に合するにはあらざるなり、但だ衆生煩惱の暗を滅するのみ。』

〔二二〕是の時に大衆渴仰して、妙喜世界の無動如來及び其の菩薩聲聞の衆を見んと欲す。佛一切衆會の所念を知ろしめして維摩詰に告げて言はく、『善男子、此の衆會の爲に妙喜國の無動如來及び諸の菩薩聲聞の衆を現はすべし、衆皆見んことを欲す』と。是に於て維摩詰心に念ずらく、「われ當に座を起たずして妙喜國の鐵圍・山・川・溪・谷・江・河・大海・泉源・須彌諸山・及び日・月・星宿・天・龍・鬼神・梵天等の宮・幷に諸の菩薩・聲聞の衆・城・邑・聚落・男・女・大・小・乃至無動如來及び菩提樹、諸の妙蓮華の能く十方に於て佛事を作す者を接すべし。〔二四〕三道の寶階は、閻浮

之無きに非ず。佛今此第二義に下りて、維摩の本を顯はす。

〔二〇〕Supramuditā. 寶積第十九無動如來會に、此國の叙述あり。

〔二一〕Akṣobhya. 阿閦佛、無動はこの直譯なり。

〔二二〕東方妙喜世界は西方の極樂世界と對して佛典中最淨最妙の土とせらる、故に此問あるなり。

〔二三〕近くは大衆の渴仰に因り遠くは上の不思議品の說を證誠せんが爲に其の本を見せしむ。

〔二四〕三道寶階の奇跡は、此他佛典の諸處に出づ、佛陀其母摩訶摩耶天上にあるに說法せんが爲にまたこの奇跡を現じたり。

提より忉利天に至る。此の寶階を以て諸天來下して、悉く爲に無動如來を禮敬し、經法を聽受す。閻浮提の人亦其の階を登りて忉利に上昇し、彼の諸天と妙喜世界を見る。是の如きの無量の功徳を成就す。上（三五）阿迦尼吒天に至り、下水際に至るまで。右の手を以て斷ち取ること、陶家輪の如くして、此の世界に入ること華鬘を持するが猶くして一切の衆に示さん」と。是の念を作し已りて、三昧に入り、神通力を現じ。其の右の手を以て妙喜世界を斷ち取りて、此の土に置く。彼の神通を得たる菩薩、及び聲聞衆、幷に餘の天人、倶に聲を發して言く、『唯然り、世尊、誰か我を取り去る、願くは救護せられよ。』無動佛言はく、『わが所爲に非ず。是れ維摩詰の神力の作す所なり』と。其の餘の未だ神通を得ざる者は、己が往く所を覺らず知らず。（三六）妙喜世界此の土に入ると雖も、而も增減せず。是の世界に於ても亦迫隘せず、本の如くして異なること無し。爾の時、釋迦牟尼佛諸の大衆に告げたまはく、『汝等、且だ妙喜世界の無動如來と、其の國の嚴飾にして、菩薩の行淨く、弟子清白なることとを觀るや。』皆曰く、『唯然り、已に見る。』佛の言はく、『若し菩薩是の如きの清淨の佛土を得んと欲せば、當に無動如來の所行の道を學すべし。』此の妙喜世界を現ずる時、娑婆世界の十四（三七）那由佗の人、阿耨多羅三藐三菩提心を發して、皆妙喜佛土に生ぜんことを願ふ。釋迦牟尼佛卽ち之に記して曰く、『當に彼の國に生ずべし。』時に妙喜世界、

【三五】Akaniṣṭha. 色究竟天、色界最高の天なり。

【三六】方丈の師子座と同一手法にして更に雄大、更に莊嚴、眞に是不可思議解脫の所現也。

【三七】Niyuta. 普通兆を以て之に充つ、Koṭi (100.000)×10=Ayuta×10=Niyuta.

此の國土に於て饒益すべき所。其の事訖已りて本處に還復し、衆を擧りて皆見る。

〔二八〕佛舍利弗に告げたまはく、「汝此の妙喜世界及び無動佛を見るや不や。」『唯然り已に見る。世尊、願くは一切衆生をして清淨の土を得ること無動佛の如く、神通の力を獲ること、維摩詰の如くならしめよ。世尊、我等快く善利を得、是の人を見ることを得て親近供養しぬ。其の諸の衆生、若くは今現在し、若くは佛の滅後此の經を聞かん者、亦善利を得べし。況や復た聞き已りて信解受持し、讀誦・解說し、法の如く修行せんをや。若し手に是の經典を得る者有らば、便ち已に法寶の藏を得たりと爲す。若し其の義を讀誦し、解釋し、說の如く修行するものあらば、則ち諸佛の爲に護念せらる。其れ是の如きの人を供養する者有らば、當に知るべし、則ち佛を供養すと爲す。其れ此の經卷を書し持する者有らば、當に知るべし。其の室に卽ち如來有すことを。若し是の經を聞きて能く隨喜せん者、斯の人は則ち一切智に趣くと爲す。若し能く此の經の乃至一四句偈をも信解して、他の爲に說く者は、當に知るべし。此人は卽ち是れ阿耨多羅三藐三菩提の記を受くといふことを』。

【二八】古師に依るに已下は本經の流通分にして、就中此れより次下の法供養品とは流通の緣由にして、最後の囑累品は正しく付屬流通なり。

卷の第十三

(一)法供養品第十三

爾の時、(二)釋提桓因大衆の中に於て、佛に白して言さく、『世尊、われ佛及び文殊師利より、百千の經を聞くと雖も、未だ曾て此の(三)不可思議自在・神通決定・實相の經典を聞かず。わが佛の所說の義趣を解する如くんば、(四)若し衆有りて此の經法を聞きて、之を信解し・受持し・讀誦せん者には、必ず是の法を得んこと疑はじ。何に況や說の如く修行せんをや。斯の人は則ち衆の惡趣を閉ぢ、諸の善門を開くと爲す。常に諸佛の爲に護念せられて、外學を降伏し、魔怨を摧滅し、菩提を修治し、道場に安處して、如來所行の跡を履踐せん。(五)世尊、若し受持し・讀誦し・說の如く修行する者有らば、われ當に諸の眷屬と與に供養し給事すべし。所在の聚落・城・邑・山・林・曠野、是の經有らん處、われ亦諸の眷屬と與に、法を聽受するが故に、共に其の所に到りて、其の未だ信ぜる者をば、當に信を生ぜしめ、其の已に信ずる者は、當に爲に護ることを作すべし。』

【一】當品は法を弘通する者の得益守護を說き、法寶供養の最上なるを明す、故に名く。

【二】Sakra-devendra. 帝釋天王。

【三】この三句、實に本經の要、特に第一句はその特秀となす所なり。

【四】已下信經受持の人の得益を擧ぐ。

【五】已下外諸天の冥護加祐あるを敎ふ。

佛の言はく、『善哉、善哉、天帝、汝が所說の如し。われ爾の喜を助けん。此の經廣く過去・未來・現在の諸佛の(六)不可思議の阿耨多羅三藐三菩提を說く。是の故に天帝、若し善男子善女人、是の經を受持し・讀誦し・供養せん者は、則ち去・來・今の佛を供養すと爲す。

(七)天帝、正使三千大千世界に如來中に滿ること、譬へば甘蔗・竹・葦・稻・麻・叢林の如くならん。若し善男子・善女人有りて、或は一劫を以てし、或は減一劫恭敬し尊重し讚歎し供養して、諸の所安を奉り、諸佛の滅後に至りて、一一の全身舍利を以て、七寶の塔を起て、縱廣一四天下、高さ梵天に至るまで、(八)表刹莊嚴し、一切の華・香・瓔珞・幢・幡・伎樂の微妙第一なるを以て、若しは一劫、若しは減一劫、之を供養せんに、天帝の意に於て云何ん、其の人福を植うること寧ろ多とせんや不や。』

釋提桓因の言さく、『甚だ多し。世尊、彼の福德若し百千億劫を以て說くとも、盡くすこと能はず。』佛天帝に告げたまはく、『當に知るべし、是の善男子善女人、是の不可思議解脫の經典を聞きて、信解し・受持し・讀誦し・修行せば、福彼よりも多からん。所以何んとなれば、(九)諸佛の菩提皆此より生じ、菩提の相は限量す可からず、是の因緣を以て福量る可からざ

【六】正等正覺に多面あり、餘經は不可思議を說くこと略して徹底せず、その廣說徹底は唯本經あるのみ。
【七】法の供養は財の供養に勝ること無量なり。
【八】「表・柱・輪盤」(新譯)
【九】諸佛淨妙の身相悉く不思議解脫の至理より發す。
【一〇】法の供養の財の供養に勝るることを例證す。
【一一】[illegible] 如來・應供已下の十種の尊號は佛の十號と稱し、佛の十種德に名づく。
1. Tathāgata.
2. Arhat.

るなり。』

〔一〇〕佛天帝に告げたまはく、『過去無量阿僧祇劫の時、世に佛有しき、號けて〔一一〕藥王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ふ、世界をば〔一二〕大莊嚴と名づけ、劫をば莊嚴と名づく。佛の壽は二十小劫、其の聲聞僧は三十六億那由佗なり、菩薩僧は十二億有りき。天帝、是の時轉輪聖王有り、名づけて〔一三〕寶蓋と曰ひ、〔一四〕七寶具足して〔一五〕四天下を主る。王に千子有り、端正勇健にして能く怨敵を伏す。爾の時に寶蓋、其の眷屬と與に、藥王如來を供養して、諸の所安を施すこと五劫を滿ずるに至る。五劫を過ぎ已りて其の千子に告ぐ、「汝等、亦當に我の如く、深心を以て佛を供養すべし」と。

是に於て千子、父王の命を受けて、藥王如來を供養すること復た五劫を滿ちて、一切に安きを施す。其の王の一子を名づけて〔一六〕月蓋と曰ふ、獨坐して思惟すらく、「寧ろ供養の殊に此に過ぎたる者有らんや」と。佛の神力を以て空中に天有りて曰く、「善男子、法の供養は諸の供養に勝れたり」と。即ち問ふ、「何をか法の供養と謂ふ。」天の曰く、「汝往きて藥王如

---

3. Samyaksambuddha.
4. Vidyācaraṇa sampanna.
5. Sugata.
6. Lokavit.
7. Anuttara.
8. Puruṣadamyasārathi.
9. Śāstā.
10. Bhagavān.

【一二】 Mahāvyūha, 莊嚴 (Vyūha) 劫は現在世界の一劫の劫名なり。

【一三】 寶蓋 (Ratnacchattra)。

【一四】 金輪・白象・寶馬・神珠・玉女・典財・主兵の七寶にして、轉輪王は其聖德よりして必らずこの七種を自然に具足す。

【一五】 全世界といふ程の意味にて、東弗婆提 (Pūrvavideha)(東勝身州)。南贍部州 (Jambudvīpa)。西瞿耶尼 (Aparagodānīya) (西牛貨州)。北俱盧 (Uttarakuru)。

【一六】 Somacchattra.

來に問ひたてまつる可し、當に廣く汝が爲に法の供養を說きたまふべし」と。

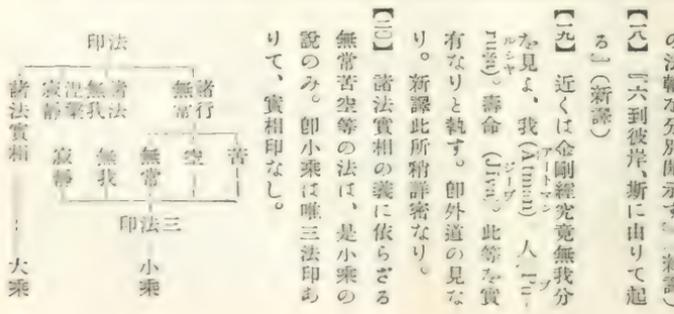
卽時に月蓋王子、行きて藥王如來に詣で佛足を稽首し、却て一面に住まり佛に白して言さく、「世尊、諸の供養の中に法の供養勝れたり。云何が名づけて法の供養と爲す。」佛の言はく、「善男子、法の供養とは諸佛の所說の深經なり、一切世間、信じ難く受け難し、微妙にして見難し、淸淨にして染無し。但し分別思惟の能く得る所に非ず。菩薩の法藏の所攝なり。(一七)陀羅尼の印、之を印して不退轉に至る。(一八)六度を成就し、善く義を分別して菩提の法に順ず、衆經の上にして大慈悲に入る。衆魔の事及び諸の邪見を離れて、因緣の法に順ず、(一九)我無く、人無く、衆生無く、壽命無し。空・無相・無作・無起にして能く衆生をして道場に坐し、而して法輪を轉せしむ。諸天・龍・神・乾闥婆等共に歎譽する所なり。能く衆生をして、佛の法藏に入らしめ、諸の賢聖の一切の智慧を攝し、諸の菩薩の所行の道を說く。(二〇)諸法實相の義に依て、明に無常・苦・空・無我・寂滅の法を宣べ、能く一切毀禁の衆生を救ひ、諸魔外道、及び貪著の者を能く怖畏せしむ。諸佛・

【一七】Dhāraṇī(ダーラニー) 玆には神咒の意義にあらず、衆經の精要を總約せるを開持するの意。「總持經王、佛印の印する所、不退轉の法輪を分別開示す」(新譯)

【一八】『六到彼岸、斯に由りて起る』(新譯)

【一九】近くは金剛經究竟無我分を見よ、我(Ātman アートマン) 人(Puruṣa プルシャ)。壽命(Jīva ジーヴ)。此等を實有なりと執す。卽外道の見なり。新譯此所稍詳密なり。

【二〇】諸法實相の義に依らざる無常苦空等の法は、是小乘の說のみ。卽小乘は唯三法印ありて、實相印なし。

法印
諸行無常　諸法無我　涅槃寂靜　諸法實相
苦—空—無常—無我—寂靜
三法印—小乘
諸法實相—大乘

賢・聖の共に稱歎する所なり。生死の苦に背き、涅槃の樂を示す。十方三世の諸佛の所說なり。(二一)若し是の如き等の經を聞きて、信解し受持し、讀誦して、方便力を以て諸の衆生の爲に分別し解說して、顯示分明ならば、法を守護する故に、是を法の供養と名づく。(二二)又諸法に於て說の如く修行し、(二三)十二因緣に隨順して、諸の邪見を離れ、無生忍を得、(二四)無我を決定して、衆生有ること無く、而も因緣の果報に於て違ふこと無く、諍ふこと無し。諸の我所を離れ、(二五)義に依て語に依らず。智に依て識に依らず、了義經に依て不了義經に依らず、法に依て人に依らず、法相に隨順して、所入無く所歸無し。(二六)無明畢竟じて滅するが故に、諸行も亦畢竟じて滅す。乃至生畢竟じて滅するが故に老死も

【二一】 已下供養を述べ、第一に流布解說を供養とし、第二に修行觀證を供養とす、文に當りて讀め。

【二二】 已下第二如說修行。

【二三】 佛陀の正法は大小を通じ唯緣起の法なり、邪見は緣起の暗きより起る。

【二四】 我相既に空なれば、衆生の相に執著する所なし。

【二五】 已下四依（Pratiśaraṇa プラティシャラナ）を明かす、是大乘敎理上頗る重要の眞理標準なり。

一、依義（Artha アルタ）
　不依語（Vyañjana ギャンジャーナ）
二、依法（Dharma ダルマ）
　不依人（Pudgala プドガラ）
三、依智（Jñāna ジュニャーナ）
　不依識（Vijñāna ギジュニャーナ）
四、依了義經（Nītārthasūtra ニータールタ・スートラ）
　不依不了義經（Neyārthasūtra ネーヤールタ・スートラ）

第一は文字言語を取らず其意義に取り、第二は其說人の如何を論ぜず、其所說の法に取り、第三は理智を重んじ、單なる感覺を取らず、第四は意義具足の經典に依り之に反するものに依らざるをいふ。上宮の御疏この實例を舉げ、義とは無常の義にして語とは外道の常語なり、智とは無常の知にして識とは外道邪常の知を云ふ。了義經とは無常を說く經にして不了義經とは外道の常を說く敎なり、法とは無常の法にして人とは外道の常を說く人を云ふ。

【二六】 已下十二緣起につき畢竟滅を說く。

【二七】 滅するは空相に歸するなり、空相は平等なるを以て盡相あるなく、又有無の見に墮せず。

【二八】 Damakṣānti（ダマクシャーンチ）. 柔順忍とは三忍の一にて一切法平等の理

亦畢竟じて滅す。是の如き觀を作せば、十二因緣（二七）盡相有ること無し、復見を起さず、是を最上の法の供養と名づく」と。』

佛天帝に告げたまはく、『王子月蓋、藥王佛に從ひて是の如きの法を聞きて、（二八）柔順忍を得たり。卽ち寶衣・嚴身の具を解きて以て佛に供養す。佛に白して言さく、「世尊、如來の滅後、われ當に法の修養を行じて、正法を守護すべし。願くは威神を以て、哀を加へて建立し、我をして魔怨を降伏し、菩薩行を修することを得しめたまへ。」佛其の深心の所念を知ろしめして、之を記して曰はく、「汝末後に於て、法城を守護すべし」と。天帝、時に王子月蓋、法の淸淨なるを見、佛の授記を聞きて、信を以て出家して、善法を修習し、精進すること久しからずして、五神通を得て、菩薩の道を具し、（二九）陀羅尼と無斷の辯才とを得て、佛の滅後に於て、其の所得の神通・總持・辯才の力を以て、十小劫を滿ちたる藥王如來の所轉の法輪、隨ひて分布す。月蓋比丘法を守護して勤行精進なるを以て、卽ち此の身に於て百萬億の人を化して、阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退轉に立たしむ。十四那由他の人、深く聲聞辟支佛の心を發し、無量の衆生、天上に生ずることを得たりき。

天帝、時の王寶蓋、豈に異人ならんや。今現に佛を得て、（三〇）寶焰如來と號す。其の王の千子は卽ち（三一）

な觀にて、正念を起し、諸法に隨順し、淸淨の直心を以て能く諸法を分別する之なり。

【二九】陀羅尼とは是れ聞持なり上註を見よ。

【三〇】Ratnajvala.

【三一】Bhadrakalpa. 現在の一世界期を呼べる名にて、此一時期中に千佛出世すべしと說かる、賢劫經、三千佛名經等を見るべし。

賢劫の中の千佛是なり。(三)迦羅鳩孫駄を始と爲して佛を得る、最後の如來を號して樓至と曰ふ、月蓋比丘は則ちわが身是なり。

是の如く、天帝、當に此の要を知るべし。法の供養を以て諸の供養に於て、上と爲し最と爲す、第一にして比するもの無し。是の故に天帝、當に法の供養を以て佛を供養すべし。』

【三】Krakucchanda. 過去七佛中の第四佛にして、釋尊より三世前の佛陀、Ruci.(樓至)は賢劫千劫の最後なり。

巻の第十四

(一)囑累品第十四

是に於て佛、彌勒菩薩に告げて言はく、『彌勒、われ今是の無量億阿僧祇劫に集むる所の阿耨多羅三藐三菩提の法を以て汝に付囑す。(二)是の如き輩の經、佛滅後末世の中に於て、汝等當に神力を以て、廣宣流布して、閻浮提に於て、斷絕せしむること無かるべし。所以何んとなれば、未來世の中に當に善男子・善女人、及び天・龍・鬼神・乾闥婆・羅刹等有りて、阿耨多羅三藐三菩提心を發して、大法を樂ふべければなり。若し是の如き等の經を聞かざらしめば、則ち善利を失はん。此の輩の人の如き、是等の經を聞きて必ず信樂多くして、希有心を發すべし。當に以て頂受して諸の衆生の利を得べき所に隨ひて、爲に廣く說くべし。彌勒、當に知るべし、菩薩に二相有り。何を謂て二と爲す、(三)一には雜句・文飾の事を好む。(四)二には深義を畏れずして、實の如く能く入る。若し雜句・文飾の事を好む者は、當に

【一】 囑累品とは佛の憂累即最懸念する所を以て彌勒阿難に囑し永く後世に光布せしむるを明す故に名づく。是れ流通說の中の第二、正しく附屬流通するの段なり(上宮)。彌勒に附屬して維摩詰に附屬せざりしは、居士は實は此の土の菩薩に非ざるが故なり、文殊に附屬せざりしは神通遊戲定方なきが故なり、今ま彌勒に附屬するは彌勒は之を以て當來成佛し、佛位を紹ぐが故なり(楊起元)。

【二】 輩の一字甚し、駢濫なり。舊譯は唯曰く、「是の如き經典」

知るべし、是れ新學の菩薩たり。若し是の如きの無染・無著・甚深の經典に於て恐畏有ること無く、能く其の中に入りて聞き已りて心淨く、受持し讀誦し、說の如く修行せば、當に知るべし、是れ久しく道行を修すと爲す。

㈤彌勒、復た二法有り。新學の者と名づく。甚深の法を決定すること能はず。何等をか二と爲す。㈥一には未だ聞かざる所の深經、之を聞きて、驚怖して疑を生じて、隨順すること能はず、毀謗して信ぜず、而して是の言を爲す、われ初より聞かず、何れの所より來れるやと。二には若し是の如き深經を護持し、解說する者有りとも、肯へて親近し供養し恭敬せず、或時は中に於て其の過惡を說く。此の二法有れば當に知るべし、是れ新學の菩薩なり。自ら毀傷を爲して深法の中に於て其の心を調伏すること能はず。彌勒、㈦復た二法有り、菩薩深法を信解すと雖も、猶ほ自ら毀傷して而も無生法忍を得ること能はず。何等をか二と爲す。一には新學の菩薩を輕慢して而も敎誨せず。二には深法を信解すと雖も、而も相を取りて分別す。是を二法と爲す。」

彌勒菩薩、是を說きたまふを聞き已りて、佛に白して言さく、『世尊、未

と、甚通じ易し。

【三】本經を讀みて、唯其結構の雄大奇警なるを讃び、造語文辭の瑰麗を弄するもの、此教訓に依り覺醒せよ。

【四】神通妙用、不可思議の手段、心膽寒く、身毛竪つもの少からず。

【五】新學の菩薩に二あり、第一類は自ら信敬する能はず、又他の信敬するものを重ぜず是至劣の機なり。第二類は信ずと雖も徹せず至らず、大悲を缺き大智を有せず、是稍進めるも尙新學たるを免れず、今は第一類に二種あるを示す新譯には各四種なりとす。

【六】佛道品の非道を行ずるを說く、不二法門品の、不二の一默を示す、是至深至高の法、凡小甚だ信じ易からざる也。新譯には分ちて四種とす。一、驚怖し疑惑して隨喜を生

曾有なり。佛の所說の如く、われ當に斯の如きの惡を遠離して、如來の無數阿僧祇劫に集むる所の阿耨多羅三藐三菩提の法を奉持すべし。若し未來世に善男子・善女人あり、大乘を求めん者には、當に是の如き等の經を得しめ、其に念力を與へて、受持し、讀誦し、他の爲に廣く說かしむべし。世尊、若し後の末世に能く受持し讀誦して、他の爲に說く者有らば、當に知るべし、是れ彌勒神力の建立する所なりと。』

佛の言はく、『善哉、善哉、彌勒、汝が所說の如し。佛爾が喜を助けん。』

是に於て(八)一切の菩薩、掌を合せて佛に白さく、『我等も亦如來の滅後に於て、十方國土に、阿耨多羅三藐三菩提の法を廣宣流布すべし。復た當に諸の說法の者を開導して此の經を得しむべし。』

(九)爾の時に四天王、佛に白して言さく、『世尊、在在處處の城・邑・聚落・山・林・曠野に是の經卷有りて、讀誦し解說する者あらんに、われ當に諸の官屬を率ゐて聽法の爲の故に、其の所に往詣して其の人を擁護し、(一〇)面たり百由旬、伺求せんも其の便を得る者無からしむべし。』

是の時に　(一一)佛阿難に告げたまはく、『是の經を受持して廣宣流布すべ

ぜず。

二、聞き了りて誹謗す。

三、深法尊信者を親近供養禮拜せず。

四、之を輕慢・憎嫉・毀辱・誹謗す。

【七】第二類、これに二種あり、一は大悲なくして教誨の力なく、他は大智なくして差別有相の見に執はる。新譯は之を分ち四種とす。

一、初學菩薩を輕蔑す。

二、請示教授教誨を樂はず。

三、甚深廣大の學處を敬重せず。

四、世間の財施を樂ひ法施を好まず。

【八】單に彌勒のみならず滿會の諸菩薩之を流通することを誓へるを明す。

【九】滿會一切の菩薩既に流通を誓ふ、護法の善神、豈袖手傍觀せんや。

し。』阿難の言さく、『唯然り、われ已に要なる者を受持せり。世尊、當に何んが斯の經を名づくべき。』佛阿難に告げたまはく、『是の經をば名づけて維摩詰所說と爲し、亦は不可思議解脫法門と名づく。是の如く受持すべし。』

佛是の經を說きたまひ已はんぬ。長者維摩詰、文殊師利、舍利弗、阿難等及び諸の天人、阿修羅、一切の大衆、佛の所說を聞きて皆大に歡喜し、信受奉行しぬ。

國譯維摩詰所說經　終

【一〇】新譯「四方面百由繕那に於て皆安穩にして諸の障難なからしめ、伺求するものあらんも其便を得るなからん」更に明了とす。

【一一】彌勒に屬して足れりとせず、更に阿難に付屬す、聖懷深重を見よ。

大唐天竺三藏輸波迦羅（唐言善無畏）譯

大毗盧遮那成佛神變加持經解題

【大日經傳來】　敎主自性法身大日如來金剛法界宮に於て無上正覺を成じ給ひ、大日如來の心より流出する四重圓壇曼荼羅海會の聖衆と共に、自受法樂の故に此經を說き給ふ。此位は自證の極意なる故に、總總絕對本有總阿の位にして、主伴と授受とを分つべきにあらずと雖、法爾に一を擧げて主とすれば餘は自ら伴と成て互爲主伴重重無盡なり、恒恒常說なり、何の能所かあらん、何の說不說かあらん。此れを本地極意の說法、自然法爾の流傳と爲す、是れ則ち古義眞言の依憑とする所なり。斯の如く說法なきに非ずと雖、極位は絕對にして機の及ぶべきにあらざる故に、衆生を利益すること能はざるを以て、大日如來本有の大悲と因位の悲願とに薫發せられて、本地自證の位を動せずして加持門に出で、遠く未來實行の機に對し、金剛手菩薩を對告衆として、身語意平等句の法を說き給ふ。今の經是なり。是れ則ち新義眞言の根據とする所なり。故に大日如來を以て法界流傳の根本祖宗となす。金剛手菩薩は未來の機に代て傳受相承して、其正說の無量頌なるものを結集して約十萬頌となして、南天の鐵塔

に納めて時機の至るを待てり。釋尊佛滅後八百年間に、龍猛菩薩、如來の懸記を擔うて南印度に出生し、初は塵に混じて外道の群に入り、後には佛教に投歸して廣く佛事を作し、機緣徐に熟して遂に南印度の鐵塔を開扉し、親たり金剛手菩薩に隨て、大毗盧遮那經を傳受相承せり。然るに十萬頌の廣本は澆末の劣機或は能く堪ふる所にあらざるなきかを顧慮して、廣本の要を採て三千頌となせり、此を略本と云ふ、是れ世間に流布する最初なり。復南印度に龍智菩薩ありて龍猛に隨て祕密の法門を相承し、此の經を五天に流布せり。龍智菩薩密教附法の弟子に二人の上足あり、卽ち善無畏三藏と金剛智三藏なり。善無畏三藏は淨飯王の末にして既に踐祚すと雖宿緣に催されて、遂に王位を捨て那蘭陀寺に入て出家入道し、後に南印度に往て龍智菩薩に隨て密教を傳受し此經を傳へたり。唐の玄宗帝開元四年に來唐し、同く十二年大福先寺に於て大日經三千頌の略本を譯して六卷三十一品となし、又金粟王の塔下に於て感見する所の供養次第法を記して一卷五品となし、合して七卷三十六品として、譯場の筆受たる一行阿闍梨に授く。然るに一行阿闍梨は附法の資なく開元十五年に早世せしを以て、無畏の法系は斷絕せりと云ふ。金剛智三藏は南印度の人なり、此れ亦那蘭陀寺に於て出家し、後に龍智菩薩に投じて密教を相承し、金剛頂經の大本及び略本等を持して、弟子の不空を伴うて大唐に入らんとして海上風波の難に逢ひ、船主の哀求止むを得ずして大本を海中に投じ、唯略本のみを持て開元八年大唐に入ることを得て、金剛頂の略本を翻せり、卽ち金剛頂略出經四卷是れなり。然るに無畏

金智の兩三藏、相互に其名聲を聞いて拜見し、無畏は自ら譯する所の大日經を以て金智に傳へ、金智亦自ら翻ずる所の略出經を以て無畏に授けたり。今東密の事相に傳ふる所の金善互授の大事は此時の大事なり。金剛智三藏は大日經を以て不空三藏に傳へ、不空三藏は之を以て大唐青龍寺の惠果和尚に授けたり。弘法大師は桓武帝延暦二十三年命を銜て入唐し、同く二十四年二月以後に惠果和尚に隨つて兩部の大法を相承し、此經及び本經の疏を傳へ、大同元年二月歸朝して、以て眞言密教を日域に弘通せり。之を以て大毘盧遮那經本朝傳來の略緣起となすなり。

【大日經大意】 次に大日經宗の大意を演れば、一切衆生が本來有する所の大菩提心を以て六凡四聖、十法界の有情非情、一切法の根本となす。此菩提心は卽ち地水火風空識の法爾の六大なり、是れ則ち六大法身大日如來なり。十法界の萬有は法爾の六大が自然の緣に隨て流れ出て現はれたるものなる故に、一として大日法身ならざるなし。大日法身ならざるなき故に、無畏三藏は一切衆生、色心實相、從本以來、常是毘盧遮那平等智身と釋せり。此經は此眞理を開示して菩提心を發さしめ、身語意三密の行を修行して、衆生心內本有の曼荼羅を開顯して、智法身を圓成せしむるにあり、故に本有の菩提心卽理法身を開示するを以て大宗とす。故に經には云何が菩提とならば、謂く實の如く自心を知るなりと說けり。然るに經の文面は八心三劫十地六無畏等の行位を明して、修生なるは本有横平等の菩提心の功德を明すに、金剛頂宗の修生の法門に寄せて顯せり。然らざれば横平等不二の功德を分開し

て示すこと能はざるを以てなり。

【大日經題目】　次に經の題目を釋せば、大毘盧遮那成佛神變加持經とは、毘盧遮那とは世間の日の別名にして三義を含めり。一には暗夜を照す光明の義、二には日光の照すに由て草木等は生長し、人は能く諸務を成すの義、三には雲霧覆ふとも光明には生滅なきの義、此三義が法身如來の大智の光明に少分相似するを以て、喩に從て日と名く、日の外に喩ふべきものなきを以てなり。然れども世間の日の照す所に分限あるに對して、大の字を以て之を簡で周遍法界の義を顯はす、卽ち大日如來にして教主の人體なり。成佛とは自ら正覺を證する位にして卽ち極位なり。神變加持とは、其極位を動ぜずして遠く未來の機を鑒知して、之に對して此經を說く位を云ふ、卽ち加持門なり。加持の神變は成佛の極位を依り所として起る、故に成佛神變加持と題す。經とは線なり。能詮の文字の線を以て所詮の義を貫攝して散逸せざらしむるの義なり。又經は、織物の縱絲なり、卽ち此經に說く所の法門を經とし、一切衆生の菩提心を緯として、心地の曼荼羅を織り作すの意なり。若し深祕の釋に依らば、大毘盧遮那は身密佛部大定なり。成佛は意密金剛部大智なり。神變加持は語密蓮花部大悲なり。更に問へ。

【序正流通の三分】　淺略の釋には經の第一住心品の初の「是の如く我聞く」より、「後芽は種より生起することあり」と云ふに至る迄を序分とし、住心品の「爾時に執金剛祕密主より、經の第六世出世持誦品の終の念誦の數量の如く是の如くの教に異なること勿れ」と云ふに至る迄を正宗分とし、囑累品を以て流

通分となす。卽顯教の判ずる所と差なし。若し深秘の釋に依らば、序分は身無盡莊嚴藏を示現す、卽身密佛部なり。「爾時に執金剛祕密主」より、囑累品の終りの「皆大に歡び喜んで」迄を正宗分とし、語無盡莊嚴藏を示現す、卽語密蓮花部なり。囑累品の最終の信受して奉行すの一句を以て流通分とし、意無盡莊嚴藏を示現す、卽意密金剛部なり。經は胎藏法の四重圓壇三部曼荼羅を織り成すの義なり。

【入眞言門住心品大意】 眞言門に入て心に住する品と訓ずべし。眞言門とは所入の門にして卽曼荼羅なり。入とは能入の門にして卽三密の修行を云ふ、身口意三密の修行に由て自心內の曼荼羅に證り入り、本有の菩提心に安住不動なるを住心と云ふ。卽初地淨菩提心の位なり。是の故に能入の三密の修行は地前三劫の位にあるなり。此品は阿字本不生の眞言門の教相を說示するを以て大意となす。其教相とは何ぞや。卽因根究竟の三句八心三劫十地六無畏等にして、眞言行者の修行進趣の用心、及び行位を明すを云ふ。密教に教相と事相とありて、教相は事相に對して淺き樣に思ふ人あれども、それは大なる誤りなり。何となれば住心品は眞言行者が本有の菩提心に安住すること堅固不動如須彌山にして、大悲萬行を修して成佛する教理を明せばなり。住心とは卽安心なり、又此安心を修養する事作法を明すは具緣品以下なり。約言すれば住心品は實修の教理を說く、故に教相と云ひ、具緣以下は其教理を實修する事作法を說く、故に事相と云ふ。故に兩翼兩輪の如くなるべし。然るに住心品は三密の規則を說かざる故に傳授に及ばずと云ふは大なる誤解なり。大日經は全部明法の師に隨て講傳を

受くべきものなり。

【入曼荼羅具緣眞言品大意】七日間の種種の作法を經て、曼荼羅を建立して弟子を引入し、華鬘を投げて佛を得せしめ、五智の瓶水を以て弟子の頂に灌いで、當來成佛を印證するを入曼荼羅と云ふ。其に就いて必須の支分の具の助緣と、加持する眞言即ち三密とを說く、故に入曼荼羅具緣眞言品と云ふ。住心品には曼荼羅の敎理を說く。具緣品は其敎理を實修せんと欲する者は、先づ曼荼羅に入て阿闍梨の許可を受くべきものなる故に、次に此品を說けり。此品最初に支分生の曼荼羅を明す。大凡そ曼荼羅に三重ありて、一には本地極位の曼荼羅、即支分生の曼荼羅是れなり。二には嘉會壇の曼荼羅、即加持門に於て從身流出の內眷屬大眷屬等を會し、說聽の儀式を張り、此經を說き給ふ說會の曼荼羅是れなり。三には心外事業の曼荼羅、即凡夫の弟子の爲に、地を擇び壇を造る等の作法を以て心外に建立する所の繪畫或は彫刻の曼荼羅なり。曼荼羅は此處に輪圓具足と飜じて、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六凡と聲聞、緣覺、菩薩、佛との四聖の十法界に於て、各十法界の一切法を圓かに具して毫も缺けたることなく、融會無礙なる義を、丹靑の功を假りて顯したるものなる故に、只其一相を示すのみにして、法界を盡すにはあらざることを知るべし。彫刻亦然り。故に餓鬼界には餓鬼の曼荼羅あり。人界には人道の曼荼羅あるなり。今經に說く所は佛界の曼荼羅にして、佛界に餘九界を圓かに具足することを示したるものなり。

【入曼荼羅具縁眞言品餘大意】 上に於て大日如來、已に空と無相と無願との三解脱の三昧印を説き給ふと雖、普門進趣の行者をして修行に留難なからしめんが爲の故に、復重て三昧道の中の差別の印を説き給ふ。前の三重曼荼羅に示す所は、種種の形色性類同じからずと雖、皆な是れ大日如來の一種の法門身なり。故に悉く名けて佛となすなり。此等の一切の諸佛各各に内心より流通する所の法門に於て、各自に彼の三昧道を説き給ふ。若し世天の身を現しては則世天の三昧道を説き、若し聲聞の身を現しては聲聞の三昧道を説き、若し縁覺の身を現しては縁覺の三昧道を説き、若し菩薩の身を現しては菩薩の三昧道を説き、若し執金剛の身を現しては其三昧道を説く等なり。是の故に此中所説の頌は無量なり、結集の經卷の能く具さに載する所にあらず。行者若し瑜伽の三昧に入れば、了了聽聞如正説時なり。

【息障品大意】 上の具縁品に擇地造壇等の支分を説く。然るに此の造曼荼羅の事業を爲すに就いて、内外の障難雜起せん。何となれば淺行の阿闍梨及び弟子にありては、内心には煩惱隨煩惱あり、外方には毗奈耶迦等の障難ある故に、具縁品の次に此品を説く。又灌頂壇は露地に起立して作法するものなる故に、風雨等の難なきにあらず。又日本にては堂内に於て修行すれども、亦障難なきにあらざれば、除障の法を行ずべきなり。此品の本尊は大聖不動明王なり。

【普通眞言藏品大意】 息障品の初に金剛手三問を擧げたり。中に於て第二の問に云く、云何が眞言を

持する」と。然るに今大日如來金剛手及び普賢菩薩に教勅して、諸尊の眞言を說かしむるは、前問の眞言を明さんが爲なり。故に息障品の次に此品を說く。普く諸尊の眞言に通ずる故に普通眞言と云ふ。其諸佛菩薩の眞言を此品に藏むる故に藏と云ふ。是れ卽ち前品に說く所の曼荼羅海會の諸尊の眞言なり。又此品に說く所は諸尊の法曼荼羅なり。一一の文字法界に周遍して輪圓具足なり。故に藏と云ふ。此品初に眞言を說き、後に種子の字を說く。阿闍梨の傳を得るにあらざれば眞言に種子を加誦すること能はざるものなり。此品惣じて一百十九の眞言を說くと雖、阿字の功德を轉釋するに外ならざるなり。阿字それ何ものなるや。吾人本有の實空、不空、空實、不實の菩提心なり。

一切の眞言の精心は阿字なり。若し阿の聲を離るれば、則餘の字なし。卽是諸字の母、卽ち一切の眞言の生ずる處なり。一切の法門及び菩薩等は、阿字より有情を饒益せんが爲に、加持力を以て、是の事を現し給ふ、故に其體は阿字に同じ。阿字は眞言の中に於て最上とす、是故に行者常に阿字を受持すべし。

【世間成就品大意】　息障品の三問の中の第二問に云く、「云何が眞言を持する」と。第三問に云く。「云何か彼の果を成ずる」と。其眞言は上の普通眞言藏品に已に之を說けり。今は眞言を持すると、彼の果を成ずるとの二事を答へ給ふ。故に眞言藏品の次に此品を說き給ふ。此品に明す所は四種念誦と三月念誦となり。心と聲と句と命息とを別にするは卽ち世俗諦の法なり。何となれば四聲等は悉く皆阿

字淨菩提心に外ならざれば實際は不二なり、此を第一義諦とす。又三月も世俗諦なり、眞勝義に依らば世間の日月卽實相圓明の日時なり、何ぞ三月の別を要せん。然るに此品は四念誦と三月持誦の世俗諦の法に由て眞言持誦して、世間の悉地の果を成就することを明す。故に世間成就品と云ふなり。

【悉地出現品大意】 上の品に於て世間の成就を明す、是れ則有爲有相の悉地なり。經に是の如きの相現ずることあり。吽の聲等は有爲有相なり。之れに對して無爲無相の佛果菩提の悉地の出現する法を說く、故に悉地出現品と名く。悉地とは印度語なり、此には成就と翻ぶ。今は無爲無相の果の成就を悉地と云ふ。而して當品の眼目とする所は、三月念誦と四種阿字門とにあり。大日經一部の始終は、唯此の遍法界無所不至の眞言を說明するなり。

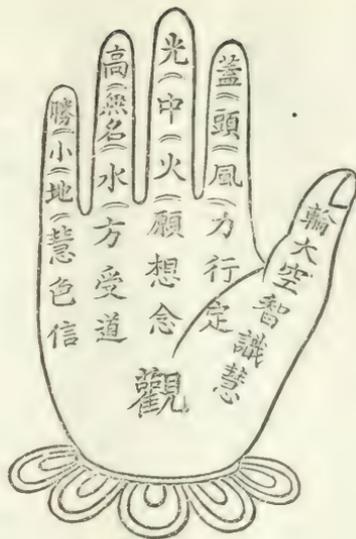
【成就悉地品大意】 上の品には外に出現する悉地の相を說く、然るに外相は必ず內心に悉地を證得するに由る、故に此品を說て內心の悉地を明す。內心の悉地は本有修生不二の菩提心にして所成就の法なり。卽阿字の妙體菩提心の種子なり、能く之れを生じ、能く之れを成就する法を明す、故に成就悉地品と云ふ。悉地の能生の法體を明し、行者修入の方便を明すなり。

【轉字輪曼荼羅行品大意】 上の品には阿字の妙體の悉地を修生し、修顯する法を說く。然るに未だ阿字の轉變に具する所の功德を說かざる故に、次に此品を說くなり。阿字は體なり、百光遍照は用なり。卽ち阿の一字を轉じて百光の多字と爲し、阿の一音を轉じて百道の聲音と爲す。阿字の光明無量な

りと雖も一百を以て總統す、其の光明字輪を觀じて行者頂上の十字縫交の處に輪轉す。輪轉に二義あり、一は周遍法界の義、一は無明煩惱を摧破するの義なり。是れを轉字輪と云ふ。斯の如きの作法は曼荼羅に入て、卽身成佛するの行なる故に曼荼羅行と云ふなり。卽身成佛に四重あり。世間成就品に說く所は修生の卽身成佛なり。悉地出現品に說く所は本有の卽成身佛なり。成就悉地品に說く所は本修不二の卽身成佛なり。此品に說く所は無相絕對の卽身成佛にして、萬有諸法みな法性身なる義を開示するものなり。

【密印品大意】 上の品に於て字輪轉じて曼荼羅と成るの相を說き了て、今は印契を說いて三祕密身を具足圓滿せしむるが故に、轉字輪品の次に此品を說けり。印とは、慈氏菩薩念誦法上に云く、「手印相とは、謂く誓教の法、卽國王の勅して印文を級して驗するに、所行の處に隨て人の敢て違乖すること無きが如く、此如來の誓教法印を承くることも亦復是の如し、一切の凡聖及び諸天、龍、鬼、魔神、皆違越すること能はず」と。以て知るべし、印は諸佛等の印契にして、卽ち實相印なり。行者此印を以て身の四處或は五處を加持すれば、自身本尊と成つて內外の魔障を降伏するものなり。一指伸れば能く天地を感動し、一指縛すれば能く鬼神を哭泣せしむ。雨を招けば雨來り、風を彈ずれば風散ず。其不可思議の功德は唯佛與佛乃能知之の境界にして、等覺以還の人の測知する所にあらざる故に密と云ふ。卽祕密の義なり。又其機にあらざれば佛之れを祕惜して授けざる故に密と云ふなり。其密印を說く

故に密印品と云ふ。然り而して此品四十種の印契を說くと雖、大日心王の印契を說かざるは何ぞや。謂く初の入佛三昧耶の印より終荼吉尼に至る迄、悉く大日如來の印契ならざるはなし。何となれば諸尊皆同毗盧遮那佛心の故に、又諸尊即ち毗盧遮那の故に。眞言行者深く此理を觀察すべきなり。又印契を結ぶことを理解せんと欲する者は、四種拳と十二合掌と十指の異名とを知らざるべからず。四種拳とは、第一胎藏拳、亦は蓮花拳とも云ふ。世間に拳を作る法の如く大指を上に出すなり。第二金剛拳、大指を以て掌中に入れて餘の四指を以て之れを拳り、風指を鉤屈して大指の背を押すなり。第三外縛拳、左右の十指右を以て左に加へて叉へ合せて十指を外に出す、亦は指在外拳とも云ふ。第四內縛拳、左右の十指相叉へて其指頭を掌內に入る、亦右の指を以て左の指の上に加ふべし、此れを四種拳と云ふ。十二合掌とは、第一堅實合掌、合掌の中心堅く相著け、十指の頭稍く相離れて少し計り之れ開く。第二虛心合掌、亦は空心合掌とも云ふ、十指の爪を以て相當て齊く等うして、指の頭を以て相合せて掌の中心少し相著けざるなり。第三未敷蓮合掌、十指の頭を以て相合せて指も亦齊く等うして、掌の內を空にして稍高からしむるなり。第四初割蓮合掌、二地と二空指とを以て相著けて餘の六指を稍開かしむるなり。第五顯露合掌、兩掌を以て仰いで相並べ倶に上に向て正く相並ぶ。第六持水合掌、兩掌を並べ仰げ諸指をして相就けしめ、稍屈して之れを合せ、水を掬する狀の如くす。第七歸命合掌、右の指を以て左の指の上に加へて十指の頭を相叉へしむ、即金剛合掌なり。第八反叉合掌、又右の

手を以て左の手に加へ、掌を反へして十指の頭を以て右の指を左の指の上に加へて相絞ふ。第九反背互相著合掌、右の手を以て左の手の上に仰げ、左の手を覆せて右の手の下にあり。第十横柱指合掌、兩手の掌を仰げ、二手の中指の頭相接して之れを仰ぐ。第十一覆手向下合掌、兩掌を覆せて亦二中指の頭相接く。第十二覆手合掌、雙べて兩手を覆せて二大指を以て並べて相接て十指の頭を外に向くるなり。此れを十二合掌と云ふ。

十指異名、立印の大跡なり、委く之れを知るべし。

兩手を二羽と云ひ、又二翼と云ひ、又日月と云ふ。

掌中を月と云ひ、左右の十指を十度と云ひ、又十峰十輪等と云ふ。又五指を五輪と云ひ、指節を文と云ひ、大指と頭指との股を虎口と云ふ。

又五指を五大の梵文に配すれば、小指より大指に至て次の如く阿嚩羅賀佉なり。

右の手を觀と云ひ、慧と云ひ、智と云ひ、福と云ひ、又般若の手、悲念の手等と云ふ。

左の手を止と云ひ、定と云ひ、福と云ひ、權と云ひ、智と云ひ、又三昧の手、慈念の手等と云ふ。

此等の事は經軌の異說なり、概論す可らず。又今の圖の壇戒等の十度の配當は且く大日經疏に依る。

不空三藏は之れに反せり。又大指を大拇指と云ひ、頭指を金剛指と云ひ、又食指と云ふあり。

【字輪品大意】阿娑嚩の三字より加遮吒多婆等の多字を生じて、輪轉して窮りなき故に字輪と云ふ。輪とは曼荼羅の義なり。前の密印品には普門の印契、卽諸佛の身密を說くと雖、未だ諸佛の意密を說かざる故に、次に此品を說けり。一一の文字悉く衆德を圓滿して、毫も缺けたることなき故に、卽輪圓具足の義なり、故に遍一切處の法門と說く。此字輪を觀ずるは意密なり、又上來は廣く擇地造壇等、及び弟子引入等の次第法用を說いて、弟子の菩提心をして堅固ならしむと雖、未だ阿闍梨の身の何たるを說かず。此品に於ては、阿闍梨たる人、弟子の爲に曼荼羅を造立して、弟子を引入し、灌頂を與へんと欲せば、字門を以て一身の支分に布置して、自身大日如來と成つて、

曼荼羅を造立し、灌頂を行ずべき義を明すものなり。正く布字觀を行ずる時には、分て四分となすべし、卽四重曼荼羅なり。行者の頭を初分とす、單の阿字、菩提心の位なり、迦佉俄伽仰等の單聲の字は皆菩提心に屬す。當に行者の眉間白毫の處に迦字を觀じ、佉より以下は右に旋て、次第を以て一匝して、之れを布して環の轉ずるが如く、初後相接せしむべし。次に瞑より以下を第二分となす、長の阿

字菩提行の位なり、右に旋て布することは前の如し。次に心より以下を以て第三分となす、暗字菩提の妙果の位なり、右に行て布字する等前の如し。次に臍より以下を第四分とす、惡字大涅槃の位なり、右に旋て一匝布字する等は前の如し。此れを三部四處輪の觀と云ふ。第五の噁引字は羯磨は遍入一切輪の故に、身外に置き佛の身光の如く現ずべし、阿闍梨斯の如く自身に布字し畢て、亦弟子の身上に布字して佛身を成ぜしむべし。委く面授にあるべし。更に問へ。

【祕密曼荼羅品大意】　前の字輪品に於て、三部四處輪等、字輪の法門を說くと雖、之れを成就せざれば卽身成佛することを能はず。故に次に此品に於て、三重曼荼羅〔遍字乃至訶字周匝するを第一重とす、卽是れ行者最初の菩提心輪なり。次に阿引暗の二輪を同く第二重とす。次に噁字輪を以て第三重とす。卽三轉法輪なり〕を修證し成就する祕密曼荼羅の法を說き給ふ。故に字輪品の次に此品を說く。此品に說く所の曼荼羅は、七日作壇にあらざる故に深祕の壇なり。又所說の法の中に於て、三種灌頂と五種の三昧道は、密敎の骨目修行の肝心なり。眞言門に依て修行する人は深く意を注ぎ、明法の阿闍梨に投じて傳授を請ふべきなり。

【入祕密曼荼羅法品大意】　前の祕密曼荼羅品には行者所入の祕密壇の威儀形色等、又三種の灌頂、五種の三昧道等を明せり。此品は其の能く祕密曼荼羅に入ることを得るの法を說けり、故に入祕密曼荼羅品と云ふ。卽ち前品に說く所の十二支生句の眞言を以て、弟子の身分に布字して法器とならしめ曼

茶羅に引入する等、文に臨て知るべし。

此の品より第十五に至る迄は、傳法灌頂を受けて阿闍梨位を成就せし者にあらざれば傳授せざる規則なり、注意すべし。

【入祕密曼荼羅位品大意】　前の入祕密曼荼羅品には能入の方便を明すと雖、未だ其所入の內心の曼荼羅を示さず、衆生の內心本有の菩提心地の阿字に法爾として具足する所の曼荼羅は、總總絕對なる故に本地極位の曼荼羅なり。而して前の祕密曼荼羅品所說の曼荼羅は、具緣品所說の心外事業の曼荼羅に對すれば、阿闍梨の淨菩提心上に觀置する所なる故に、深祕にして以心傳心なりと雖、尚是れ加持化他の壇にして、修生修顯の曼荼羅なり。然るに此の加持の壇に引入せられ、此因緣に由て自心本有の曼荼羅に入住するものなり、故に入祕密曼荼羅位品と云ふ。位とは住を顯す此內心の曼荼羅は卽ち蓮花成の壇なり。又此品の明す所は灌頂には以心灌頂、三昧道には第五の三昧と傳ふ。

【祕密八印品大意】　上の品に於て本地自證心內本有の曼荼羅を說くと雖、未だ其印契及び眞言を說かざる故に、此品に於て之れを說く。然るに中胎大日の印明を說かざることは、八印悉く大日の印眞言なるを以てなり。又前の密印品等に說く所の印契、皆祕密にあらざるなしと雖、此八印殊に祕密にして、祕密の中の祕密なる故に祕密八印品と云ふ。祕密卽ち八印なり。

【持明禁戒品大意】　上來は淺略と深祕との曼荼羅、及び眞言持誦の法、又弟子引入の法等を說くと雖、

未だ眞言門の行者の持明に由て起る所の制戒禁戒を說かざる故に、今此品を說くなり。戒に二あり、尸羅の戒と沒栗多の戒となり、尸羅は本性の戒なり。沒栗多は制戒なり。本性の戒は諸根を淨む、制戒は悉地を成就すべき故に之れを制す、彼の聲聞の律藏の事に因て制するが如し。性戒は長時に持する所の戒なり、制戒は時有て願する戒なり、今の戒は卽ち沒栗多の戒なり、持明に由て起る所の六月持誦等の期限ある戒を明す、故に持明禁戒品と云ふ。其戒とは菩提心と六波羅蜜等の一切の功德の法と、修行する所の如來の事業及び所得の果とに於て、差別の相を脫して、平等一相、畢竟不生に住して、佛智に異ることなきを云ふ。之れを持する者を具戒者と名く。此れを得するは六月念誦法に依るものなり。

【阿闍梨眞實智品大意】上に於て阿闍梨の相等を說くと雖、未だ阿闍梨の眞實智の相を說かざる故に今此品を說けり。卽毘盧遮那如來の三密に於て不倒不謬に了解して、阿字に安住して不動なるを眞實智と云ふ。又經文の我れ卽心位に同じとあるは、阿字なり。一切の處に自在に普く種種の有情と非情とに遍しとある文に依て、非情成佛の義を成立す。又大日經の中に於て、我れ卽心位に同と云ふより、佉字虛空に同じと云ふ迄の文は、地水火風空識の六大を說く文なることを知れ。

【布字品大意】上の品には、阿闍梨眞實智の體性、及び三部の部主の布字法を說くと雖、未だ三部の心數の諸尊の布字法を說かざる故に、此品に於ては之れを說けり。前品に明す所の眞實智の體は卽阿

字なり。此一の阿字に具する所の功德を別開すれば、佛蓮金の三部卽阿鑁吽となる、亦此の三部の功德を別開すれば、各各に三十二と成る。卽ち變化身の相好は三十二相なりと雖も、三十二、各に三十二を具し、其三十二各に亦三十二を具して、遂には無盡無際の相好海と爲る、之を法身の相好となす。而して皆阿闍梨の眞實智に具する所の功德なり。それ然り、今布字の法を說くは阿闍梨此布字法の加持力に由て、眞實智に具する所の本有の功德を修生顯得するの義なり。淺略には此布字觀に由て自身卽本尊の身と成るの義なれども、深秘には此布字の加持に由て自心本有の功德を顯得するの義なり。

【受方便學處品大意】上の品には阿闍梨の眞實智の體と、其眞實に具する所の功德の三部の用と、三十二の相と、卽ち體相用を說くと雖、未だ阿闍梨の造曼茶羅の方便に受持すべき所の學處、卽ち戒法を說かざるが故に、此品に於て之を說くなり。上の具緣品入曼茶羅の中の、彼れに命じて三び自ら歸すとある文の次に之れを說くべしと雖、延て此處に於て初て之れを說く所以は、尚此戒法は阿闍梨の眞實智を以て體とする義を顯さんが爲めなり。此品は世間の十善戒を以て其まま眞言行者秘密の學處となすにあり、是れ卽ち法性自爾の十善戒なり。何となれば世間相常住にして世諦卽ち第一義諦の故なり。方便とは慧の方便を云ひ、學處とは此の方便に隨順して俱轉する所の戒法を云ふ、故に受方便學處品と題するなり。又此品所說の十善戒は祕密の十善戒と云ふべし、何となれば大日如來の所說なるを以てなり。

【説百字生品大意】　暗字より迦佉伽伽仰者車社社壤吒侘荼荼拏多他陀陀曩波頗婆婆麼の二十五字を生じ、二十五字各各に發心修行菩提涅槃の四轉を具して百字と成る、卽ち暗字より百字を生ずることを說く、故に說百字生品と題するなり。其百字は卽百光遍照なり、故に上の轉字輪曼荼羅行品に於て此眞言等を說くべきなり。然るに此處に來つて之を說くは、慢法の人を防がんが爲に故意を以て亂脫せしめたるものなり。又頌の此一切眞言眞言救世者とは卽ち暗字なり。

【百字果相應品大意】　上の品に於ては百光遍照の行儀を說けり。此品は前の百光遍照の三昧を修するに由て、得る所の果と定慧と相應することを明す、故に百字果相應と題す。卽ち百字は能生なり、果は所生なり、故に百字の果なり。此果は定慧と相應するなり、入大覺世尊大智灌頂地は卽ち果なり。

【百字位成品大意】　百字は百光遍照王なり、此百光王の三昧を修するに由て位を成就することを明す。其位は自證三菩提無相の極位なり。前品に於て百光王所得の果を說くと雖、其果無相無所得なることを明さず、然るに今所得の三菩提の果も悉く皆行者自身の影像にして、畢竟は唯名字のみなりと示して。無自性なることを明す。此無相無自性の處が百光王の三昧に由て成就したる所の位なり。

【百字成就持誦品大意】　百光王三昧耶を修して、三十二相と八十隨好を成就するに就ての持誦の法を明す、故に百字成就持誦品と云ふ。一傳に云く。迦等の二十字と、遍口聲の野等の八字とを以て、阿阿引暗噁の四の摩多をかけて觀ずるが故に、四字を合て三十二字なり。卽ち此觀に由て三十二相を成

就す。又仰等の五字を以て自身を加持する故に八十隨好を成就すと。

【百字眞言法品大意】 上の品に百字の眞言卽ち百法明門を說くと雖、未だ互相涉入無礙圓融の義を說かず。此品は阿等の諸字各各に諸字を攝することを說く、卽ち百字の明門圓融無礙にして無盡無盡なることを示す。是れ則ち一字攝多門なり、卽ち法身如來の莊嚴無量無邊なることを示す。百字とは二十五の體文、卽ち迦等の字發心修行菩提涅槃の四轉に涉る故に百字と成る、此を百字眞言と云ふ。此百字の眞言一一の字內に衆多の功德を具して、外に種種の法を生ずるを法と云ふ。卽ち百字の一字一字に百字を具して又之を生ずるを云ふなり。

【說菩提性品大意】 上の品には百字の眞言各各に互相攝入して一字に多字を攝し一字多字を生ずる深義を說くと雖、未だ百光王の種子の暗字の法界に周遍することを說かざるが故に此品に之を說く。菩提とは暗字なり、性とは本不生なり。

【三三昧耶品大意】 前品に菩提の性は無相にして法界に周遍することを說くと雖、未だ其無相の菩提に住せしむるの法を說かず。上の百字果相應品に云く、「自ら三三昧耶の句に住するを見る」と、之を追て金剛手問起す、之に由て佛心智悲と佛法僧と法報化との三平等の法を說て、此觀に由て無相の菩提に住せしむるなり。

【說如來品大意】 上來の諸品に於て如來菩薩正覺等の名字を說くと雖、未だ其名義を明さざる故に、

此品に於て之れを說くなり。金剛手の問は四問なれども、且く初問に就て說如來品と題す。佛の答說の中、初の「菩提虛空相」と云ふより「菩提薩埵と名く」迄は菩提を答へ、「十地等を成就して」と云ふより、「故に名けて正覺と爲す」迄は正覺を答へ、「法は虛空の相の如し」と云ふより、「三菩提」迄は菩提を答へ、「唯し慧を以て」以下は如來を釋す。正覺は能證の智なり。菩提は所證の理なり。

【世出世護摩法品大意】前品に於て如來自證の智慧能く無明を斷ずる法門を說くと雖、未だ其の作法を說かざる故に、此品に於て護摩の事業を說きて其作法を示すものなり。佛の本意は出世間の正護摩にありと雖、對辨して正と邪とを了知せしめんが爲の故に、先づ梵天所說の世間の四十四の邪火を說けり。是れ則ち彼の一類祠火の外道をして、邪火法を捨て正法に歸せしめんが爲の大悲方便なり。眞言行者護摩法を修する者は、外道の邪火法に混ぜざる樣深く注意すべきなり。內觀と外の作法と相應せざれば敢て外道の護摩と簡ぶ所なかるべし。愼まざるべからず。

內護摩の作法とは本尊卽火天、火天卽行者の自身なり。本尊は大日如來なり、大日如來は法性自然の智火に異らず、自然の智火は行者の自身に異らざるなり。一自性三和合を觀じて、無明差別の妄執を燒き盡すを內護摩と名くるなり。

【說本尊三昧品大意】上の護摩品に於て十二の火法の本尊を說くと雖、未だ其本尊の字印形の三平等不二なる法を說かざる故に、此品に於て之れを說くなり。本尊とは何ぞや。行者自身に具足する所

の本有の淨菩提心なり。此心は一切法の中に於て最尊最上なる故に尊と稱す。此淨菩提心を以て火法の本尊となす。十二の差別あるに似たりと雖、悉く淨菩提心の差別智なり。而して此菩提心は一切法の原則なる故に、一切法に周遍して平等平等なり。一切法廣博なりと雖、該括するに字と印と形像とを以て之れを盡せり。斯の如きの三種の身は淨菩提心所具の功德なるが故に不二平等なり、是れを三昧と云ふ。故に說本尊三昧品と題す。其字とは阿阿引伊伊引等なり、聲とは其の阿等の音聲を云ふ。前後次第して間絕せず、眞言の字を以て出入の息に和して調息して觀ずるを聲と云ふ。又其字義の實相を觀ずるを菩提と云ふ。印の二の有形は彼の像の手に執る所の一股三股等を云ふ。無形は行者心內所觀の物を云ふ。身の二の淸淨は顯形表の三色を離れたる無相法身なり。非淸淨は加持界の三身及び繪木の形像等なり。

【說無相三昧品大意】 前品に「是の故に一切種當さに非想に住すべし」と說くと雖、未だ其所住の非想卽無相の三昧を說かざる故に此品に於て之を說く、故に說無相三昧品と題す。諸の世間外道等の横に計度し分別する所の顯形表の三色等を離るるが故に無相と云ふと雖、離相の相は相として具せざることなきが故に、表德實相の法爾の三色は無に非ざるなり。故に無相三昧は卽ち表德實相の三昧なり。

【世出世持誦品大意】 前に無相の三昧を說くと雖、此は是れ所行の三昧法なり、之を修觀して成就せんとせば、必ず其能行の軌則なかるべからず。故に此品に於て、世間と出世間との悉地を成就するに

就ての眞言を持誦する軌則を説く。此品の大意は四種の念誦に過ぎず、「所緣ありて相續す」等の句は聲念誦を説き、「心意念誦を作す」とは心想念誦を説き、「出入の息を二と爲す」とは命息念誦を説く。以上の三は有相にして有所得の故に世間の持誦とす。當さに知るべし出世の心は無相無分別の念誦を明す、能く眞言の字の本性即本不生際に通達せば、即ち菩提心に通達するなり。其心は圓明湛寂にして無相無念なり、之れより生ずる文字も亦一一に圓明にして無相なり、故に「遠く諸字を離る」と云ふ。是の如く行者文字の本不生際に達する時は自身と本尊と無二平等と成る、何となれば共に倶に本不生なるが故なり。又「種子の字と句とに住す」とは、長き眞言は觀じ難き故に唯種子の字のみを觀じ、或は眞言の中の一句一句、或一字一字取り替て觀ずるなり。其眞言の文字を觀置する處は、行者自身の心月輪、或は又本尊の心月輪なるべし。

更に云く、大日經臺部の經意は總じて眞言行者の爲に持誦入道の法を示すにあり。然るに特に此品に持誦の名を得るは一部を總結する意と知るべし。

【第七卷大意】　此卷に就て古來より異説あり。一義に云く、三千餘頌の略本の梵文中に此卷ありと雖も供養修行の儀則に於て明了ならざる所あるに由て、無畏三藏金粟王の塔の邊にて、妙吉祥の加被を請求し其指授を蒙りて記せしもの、即ち此の第七卷なり、故に此本全く三千餘頌の經中の供養次第法なり、更に別經あるに非ず。然るに無畏三藏翻譯の時は、文殊指授の作法明了なる經を譯出し給ふ、故

に菩提心論に引く所の經は、三千餘頌の中の供養次第法の文なりと。私に云く此義は三千餘頌の略本の中に此第七卷ありと云ふ説なり。一義に云く、三千餘頌の略本を翻譯して六軸三十一品と爲す。此中に於て供養修行の儀則を説かざるに非れども、散漫にして明了ならざる故に、無畏三藏大聖の指授を請求す、之に依て大聖文殊前六卷中に於て供養の作法を説く文を拔出し、秩序的に綜合して空中に文字を現はして之れを指授し給ふ。無畏三藏之を記憶し結集して一卷の經と爲すもの是れなり。故に三千餘頌の梵本の中に、此第七卷に相當する經文あるには非るなり。然るに翻譯の時に無畏三藏三千餘頌の經と共に、文殊指授の經をも併せて翻譯し合して大日經七軸と爲せしものなり。然れども其由來全く前六卷と別なることを顯して、第一第二等と品號を安ずるものなり。又菩提心論の引證は前六卷中の供養次第を説く所の文なるべしと。私に云く無畏三藏感得の因緣は不可思議の供養法の疏に出でたり。又此二説共に經の終りの阿闍梨は無畏三藏を指して云ふ。又斷り書は一行阿闍梨なりとす。更に一義あり云く、龍猛菩薩開塔以前に於て、大日如來眞身を現して菩薩の爲に持誦の略本を説き給ふ、龍猛は之を結集して一卷となせり、是れ則ち今の第七卷なり。此經卷を以て大日經の廣略二本と共に龍智菩薩に授く、龍智は之れを以て無畏金智の兩師に授く。然るに金智は之れを譯して要略念誦法と題して一卷別行す、無畏は之れを翻じて大日經第七となせり。彼此對照せば同本異譯なることを掌を見るが如しと。私に云く此説に依らば、此卷の終りの阿闍梨は龍猛菩薩にして、斷り書きをな

せし人は無畏三藏なるべし。

【供養念誦三昧耶法門眞言行學處品大意】供養念誦三昧耶法門とは、曼荼羅海會の諸佛等を供養し念誦する三密の法を云ふ。此三密は眞言の行なる故に眞言行と云ふ、故に法門即眞言行なり。此の三密の行を修行するに就て、眞言行者の持すべき戒法を明すが故に學處品と云ふ。學處とは即ち戒法なり、即ち止持の戒なり。

【增益守護淸淨行品大意】前品に說く所の戒法は止持の戒なり、此品に說く所の淸淨行は作持の戒なり。故に遮惡持善を以て其次第をなせり。又淸淨の行を隨修して身體を保護するを守護と云ふ、即ち因行なり。之れに依て得る所の果を增益と云ふ。其因行其得果淸淨行に依ることを明す、故に增益守護淸淨行品と題す。即ち下に明す所の九方便及び五箇の印明は淸淨行なり。

【供養儀式品大意】曼荼羅海會の諸尊を供養するに就て身口意の三業に亙て其法式作法を明す、故に供養儀式品と云ふ。儀式とは即ち身口意の作法なり。其供養に三あり、一は外の供養、香花飲食及燈明等、又道場を莊嚴する等なり。二は行の供養、如說に修行する持戒懺悔等なり。三は理の供養心、阿字本不生際に住して專注するなり。其作法儀式に就て十段あり、文に臨で知るべし。又前品は行者供養を行ずるに就て身を守護することを明す、故に正く供養を行ずる前方便なり。

【持誦法則品大意】前品には壇場を建立して、本尊を勸請し、供養を行ずる儀式作法を明すと雖、

未だ本尊の三密を持誦して、悉地を成就する法則を說かざる故に、此品に於て之れを說けり。其の明す所は四支の禪門。有相と無相との法に過ぎざるなり。

【眞言事業品大意】法則に由て本尊の眞言を持念して、悉地を請求する者は、必ず諸如來諸菩薩等に對し供養廻向發願等を以て事業とすべき故に、此品に之れを說けり。卽ち此供養次第法の流通分なり。密教を受持して遠く當來世に流通し、其機の宜きに隨て濟度するは、眞言行者の最も務むべき廣作佛事の業なる故に流通分を以て眞言事業と題するなり。

譯者　權田雷斧　識

國譯大（一）毘盧遮那成佛神變加持經

卷の第一

（二）入眞言門住心品第一

（三）是の如く我聞けり、一時（四）薄伽梵、如來、加持廣大金剛法界宮に住し給ひ、一切持金剛者悉く集會せり。（五）如來の信解遊戲神變より生ずる大樓閣寶王は、高くして中邊無く、諸の大妙寶王を以て種種に間飾し、菩薩の身を師子座と爲す。（六）其金剛を名て、（七）虛空無垢執金剛、虛空遊歩執金剛、虛空生執金剛、被雜色衣執金剛、善行歩執金剛、住一切法平等執金剛、哀愍無量衆生界執金剛、那羅延力執金剛、大那羅延力執金剛、妙執金剛、勝迅執金剛、無垢執金剛、刃迅執金剛、如來甲執金剛、如來句生執金剛、住無戲論執金剛、如來十力生執金剛、無垢眼執金剛、金剛手祕密主と曰ふ。是の如きを上首として（八）十佛刹微塵數等の持金剛衆と倶なりき。及び（九）普賢

【一】毘盧遮那は日の別名なり故に大日と云ふ。
【二】眞言門とは、曼荼羅を云ふ。曼荼羅に入て吾人の固有せる本覺の菩提心に安住す、故に住心と云ふ。
【三】以下通序なり、廣本の梵本に依て三藏之れを加ふ。
【四】經主成就
【五】處成就。
【六】眷屬成就。
【七】是等十九執金剛は十九無知に對す。

菩薩、慈氏菩薩、妙吉祥菩薩、除一切蓋障菩薩等の、諸大菩薩に前後に圍繞せられて、而も法を演說し給ふ。

(一〇)所謂、三時を越えたる如來の日加持の故に、身語意平等句の法門なり。

(一一)時に彼の菩薩には、普賢を上首となし、諸の執金剛には秘密主を上首と爲す。(一二)毘盧遮那如來加持の故に、身無盡莊嚴藏を奮迅示現し給ふ。是の如く語意平等無盡莊嚴藏を奮迅示現し給へる(一三)毘盧遮那佛の身は、或は語或は意より生ずるに非ず。一切處に起滅の邊際不可得なり。而も毘盧遮那の一切の身業一切の語業一切の意業よりして、一切處と一切時とに有情界に於て眞言道句の法を宣說し給ふ。(一四)又執金剛・普賢・蓮花手菩薩等の像貌を現じて、普く十方に於て眞言道淸淨句法を宣說し給ふ。所謂(一五)初發心より乃至十地に至るまで次第に此生に滿足す。(一六)緣と業とより生じて增長する有情類の(一七)業壽の種を除きて、復(一八)芽は種より生起することあり。

(一九)爾の時に執金剛祕密主、彼の衆會の中に於て、坐して佛に白して言さく、『世尊、云何が如來應供正遍知、一切智智を得給ひ、彼に一切智智を得せしめて、無量の衆生の爲に廣演分布し、種種の趣と種種の性欲とに隨つて、種種の方便道を以て

【八】佛の十智力を標す。
【九】この四菩薩は佛の常樂我淨の四德を標す。
【一〇】總じて所說の法門を表す。
【一一】以下別序なり。
【一二】以下加持世界三身說法卽ち現瑞なり、中に於て此段は他受用身。
【一三】變化身。
【一四】等流身。
【一五】三身說法の得益。
【一六】緣は煩惱、業は其所造の善惡業、生は之に依つて感ずる生死の苦果なり。
【一七】業壽とは第八阿賴耶識なり。
【一八】芽は第八修生の菩提心、種は本有の菩提心なり。
【一九】以下正宗分。

一切智智を宣說し、或は聲聞乘道、或は緣覺乘道、或は大乘道、或は五通智道、或は願つて天に生じ、或は人中、及び龍、夜叉、乾闥婆に生じ、乃至摩睺羅伽に生ずる法を說き給ふや。若し衆生有つて佛を以て度すべき者には、即ち佛身を現し、或は聲聞の身を現し、或は緣覺の身を現し、或は菩薩の身、或は梵天の身、或は那羅延と毘沙門の身、乃至摩睺羅伽と人と非人等の身に至るまで、各各に彼の言音に同じき種種の威儀に住し給ふ。而も此の一切智智の道は一味なり。謂ゆる、如來の解脫味なり。世尊、(一〇)譬へば虛空界の一切の分別を離れ、分別も無く無分別も無きが如く、是の如く一切智智も一切の分別を離れ、分別も無く無分別も無し。世尊、譬へば大地は一切衆生の依たるが如く、是の如く、一切智智も天人阿修羅の依たり。世尊、譬ば火界は一切の薪を燒くに厭き足ること無きが如く、是の如く、一切智智も、一切の無智の薪を燒くに厭き足ること無し。世尊、譬へば風界は一切の塵を除くが如く、是の如く、一切智智も、一切の諸の煩惱の塵を除き去る。世尊、喩へば水界は一切衆生之れに依て歡樂するが如く、是の如く、一切智智も、諸天世人の利樂を爲す。(一一)世尊、是の如きの智慧は、何を以てか因と爲し、云何が根と爲し、云何んが究竟する。』是の如く說き已りたまひて、(一二)毘盧遮那佛、持金剛祕密主に告て言はく、『善哉、善哉、執金剛、善哉、金剛手、汝吾に是の如きの義を問ふ。汝當に諦かに聽き、極て善く作意すべし。吾今之を說か

【一〇】五喩は預め胎藏曼荼羅を發起す。

【一一】一經の大宗たる因根究竟の三句の問。

【一二】大日如來の答說の中、初に三句の略答。

ん。』金剛手の言さく、『是の如し、世尊、願樂くは聞かんと欲ふ。』佛の言はく、『菩提心を因と爲し、大悲を根本と爲し、方便を究竟と爲す。(二三)祕密主、云何んが菩提とならば、謂く實の如く自心を知るなり。祕密主、是の阿耨多羅三藐三菩提は、乃至彼の法として少分も得べきこと有ること無し。何を以ての故に、虚空の相は是れ菩提なり、知解の者も無く、開曉のものも無し。何を以ての故に、菩提は無相なるが故に。祕密主、諸法は無相なり。謂く虚空の相なり。』爾の時に金剛手、復佛に白して言さく、『世尊、誰か一切智を尋求する。誰か菩提の爲に正覺を成ずる者ぞ。誰か彼の一切智智を發起するや。』佛の言はく、『祕密主、自心いゝ尋求なり、菩提なり、及び一切智なり。何を以ての故に、本性淸淨なるが故に。(二四)心は內に在らず、外に在らず、及び兩中間にも得可らず。祕密主、如來應正等覺は、靑に非ず、黃に非ず、赤に非ず、白に非ず、紅紫に非ず、水精色に非ず、長に非ず、短に非ず、圓に非ず、方に非ず、明に非ず、暗に非ず、男に非ず、女に非ず、不男女に非ず。祕密主、心は欲界と同性に非ず、色界と同性に非ず、無色界と同性に非ず、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人趣と同性に非ず。祕密主、心は眼界に住せず、耳鼻舌身意界に住せず。見に非ず、顯現に非ず。何を以ての故に、虚空相の心は諸の分別を離れて無分別なればなり。(二五)所以は何となれば、性、虚空と同なれば卽ち心

(二三) 大日如來後に廣く菩提心を說くところの菩提心觀の正觀を明す。

(二四) 以下菩提心觀の助觀を明す。

(二五) 心と靈、空と菩提とは無二平等にして因緣を壞せざることを明す祕密の大事なり。

に於て同なり。性、心に於て同なれば卽ち菩提と同なり。是の如く祕密主、心と虛空界と、菩提との、三種無二なり。此等は悲を根本と爲して、方便波羅蜜を滿足す。是の故に祕密主、我諸法を說くこと是の如し。彼の諸の菩薩衆をして、菩提心清淨にして其心を識知せしめんとなり。祕密主、若し族姓の男、族姓の女、菩提を識知せんと欲はば、當に是の如く自心を識知すべし。(二六)祕密主、云何んが自ら心を知る。謂く、若くは分段、或は顯色、或は形色、或は境界、若くは色、若くは受想行識、若くは我、若くは我所、若くは能執、若くは所執、若くは清淨、若くは界、若くは處、乃至一切分段の中に求むるに得べからず。祕密主、此の菩薩の淨菩提心門を(二七)初法明道と名く。菩薩此れに住して修學すれば、久く勤苦せずして便ち(二八)除一切蓋障三昧を得るなり。若し此れを得れば、則ち諸佛菩薩と同等に住して、當に五神通を發し、無量の語言音陀羅尼を獲、衆生の心行を知り、諸佛に護持せられ、生死に處すと雖も而も染著無く、法界衆生の爲に勞倦を辭せず、住無爲戒を成就し、邪見を離れ、正見に通達すべし。復次に祕密主、此の除一切蓋障に住する菩薩は、信解力の故に、久く勤修せずして一切の佛法を滿足す。祕密主、要を以て之れを言はば、是の善男子善女人は、無量の功德皆成就することを得。」

爾時に執金剛祕密主、復偈を以て佛に問ひ上る。

【二六】重て法に歷て菩提心の助顯を明す。

【二七】初地の入心の前半刹那なり、初て明かに一切法の實相を覺る位なる故に初法明道と云ふなり。

【二八】初地入心の後半刹那なり、自心の眞理の光明を覆ふ所の人執と法執とを斷ずる故に除一切蓋障と云ふなり。

『云何んが、世尊、此の心に菩提の生ずることを説き給ふ。復云何なる相を以てか菩提心を發すことを知る」

願くは、識心と心と勝れたる自然智生ずるとを説き給へ。大勤勇、幾何の次第あつてか心續生するや。

心の諸相と時と、願くは佛廣く開演し給へ。功徳聚も亦然なり、及び彼の行を修行すると、心と、心に殊異有ると、唯大牟尼説き給へ。」

是の如く説き已て、摩訶毘盧遮那世尊、金剛手に告げて言はく、

『善哉、佛の眞子、廣大の心を以て利益す。勝上大乘の句、心續生の相は諸佛の大祕密なり、外道は識ること能はず。

我今悉く開示せん、一心に應に諦に聽くべし、百六十心を越て廣大の功徳を生ず。

其の性常に堅固なり。知るべし、彼れは菩提の生なり、無量なること虚空の如し、染汚せずして常住なり。

諸法も動ずること能はず、本より來た寂にして無相なう。

無量智を成就し、正等覺顯現す。

供養行を修行して、是れより初て發心す。」

（二九）祕密主、始め無き生死の愚童なる凡夫は、我名と我有とに執著して無量の我分を分別す。祕密主、若し彼我が自性を觀せざれば則ち我と我所とを生ず。餘は復時と、地等の變化と、瑜伽の我と、建立の淨と、不建立の無淨と、若くは自在天、若くは流出及び時、若くは尊貴、若くは自然、若くは內我、若くは人量、若くは遍嚴、若くは壽者、若くは補特伽羅、若くは識、若くは阿賴耶と、知者と、見者と、能執と所執と、內知と外知と、社怛梵と、意生と、儒童と、常定生と、聲と非聲と有りと計す。祕密主、是の如き等の我分は、昔より以來、分別と相應して、理に順じて解脫することを希ひ求む。祕密主、愚童凡夫の類は猶ほ羝羊の如し、或時は一法の想生ずること有り、所謂齋を持するなり。彼此の少分を思惟して歡喜を發起し數數修習す。祕密主、是れ初めの種子善業の發生するなり。復此を以て因と爲して、六齋日に於て、父母と男女と親戚とに施與す、是れ第二の芽種なり。復此の施を以て親戚に非る者に授與す、是れ第三の皰種なり。復此の施を以て器量高德の者に與ふ、是れ第四の葉種なり。復此の施を以て歡喜して伎樂の人等に授與し及び尊宿に獻る、是れ第五の敷華なり。復此の施を以て親愛の心を發して、而も之を供養す、此れ第六の成果なり。復次に祕密主、彼戒を護つて天に生ずるは、是れ第七の受用種子なり。復次に祕密主、此の心を以て生死に流轉して、善友の所に於て是の如きの言を聞く、此れは是れ天なり、大天なり。一切の樂を與ふる者、若し虔誠に供養すれば一切の所願皆滿つ、所謂、自在天と、梵天と、

【二九】以下順世の八心を明す。

那羅延天と、商羯羅天と、黑天と、自在天と、日天と、月天と、龍尊等と、及び倶吠濫毗沙門と、釋迦毗楞伽と、毗首羯磨天と、閻魔と、閻魔后と、梵天后と、世の宗奉する所の火天と、迦樓羅子天と、自在天后と、波頭摩と、德叉迦龍と、和脩吉と、商佉と、羯句啅劍と、大蓮と、倶里劍と、摩訶洋尼と、阿地提婆と、薩陀難陀等の龍と、或は天仙と大圍陀論師となり、各各に善く供養すべし。彼れ是の如くなるを聞いて、心に慶悅を懷ひて、殷重に恭敬し、隨順し修行す。祕密主、是を愚童異生の生死流轉の無畏依の第八の嬰童心と名く。祕密主、復次に殊勝の行あり。彼の所說の中に隨て殊勝に住して解脫を求むる慧生ず、所謂常無常空なり。是の如きの說に隨順す。祕密主、彼空と非空とを知解するに非ず、常と斷と、非有と非無とを、倶に彼は分別を以て分別無しとす。云何んが空を分別する。諸空を知らざれば彼能く涅槃を知るに非ず。是の故に應に空を了知して斷と常とを離るべし。』

〔三〇〕爾の時に金剛手、復た佛に請うて言さく、『唯願くは世尊、彼の心を說き給へ。』是の如く說き已て、佛、金剛手祕密主に告て言はく、『祕密主諦かに聽け、心相といふは、謂く貪心、無貪心、瞋心、慈心、癡心、智心、決定心、疑心、暗心、明心、積聚心、鬪心、諍心、無諍心、天心、阿脩羅心、龍心、人心、女心、自在心、商人心、農夫心、河心、陂池心、井心、守護心、慳心、狗心、狸心、迦樓羅心、鼠心、歌詠心、舞心、擊鼓心、室宅心、師子心、鵂鶹心、烏心、羅刹心、刺心、窟心、風心、水心、火心、泥心、顯色心、板心、迷心、毒藥心、

【三〇】以下煩惱の六十心を明す即ち見惑なり。

羂索心、械心、雲心、田心、鹽心、剃刀心、須彌等心、海等心、穴等心、受生心なり。秘密主、彼云何んが貪心、謂く染法に隨順す。云何んが無貪心、謂く無染の法に隨順す。云何んが瞋心、謂く怒法に隨順す。云何んが慈心、謂く慈法に隨順し修行す。云何んが癡心、謂く修行不觀の法に隨順す。云何が智心、謂く殊勝増上の法に順修す。云何んが決定心、謂く尊の敎命を說の如く奉行す。云何んが疑心、謂く常に不定等の事を收持す。云何んが闇心、謂く疑慮無き法に於て疑慮の解を生ず。云何んが明心、謂く不疑慮の法に於て疑慮無くして修行す。云何んが積聚心、謂く無量を一とするを性と爲す。云何んが鬪心、謂く互相に是非するを性と爲す。云何んが諍心、謂く自己に於て是非を生ず。云何んが無諍心、謂く是非倶に捨つ。云何んが天心、謂く心念に隨て成就せんと思ふ。云何んが阿脩羅心、謂く生死に處せんと樂ふ。云何んが龍心、謂く廣大の資財を思念す。云何んが人心、謂く利他を思念す。云何んが女心、謂く欲法に隨順す。云何んが自在心、謂く思惟して我一切意の如くならんと欲ふ。云何んが商人心、謂く初には收め聚めて後には分析する法に隨順す。云何んが農夫心、謂く初に廣く聞て而も後に求むる法に隨順す。云何んが河心、謂く二邊に依り因る法に順修す。云何んが陂池心、謂く渴して厭き足ること無き法に隨順す。云何んが井心、謂く是の如く思惟すること深くして復た甚深なり。云何んが守護心、謂く唯此の心のみ實なり、餘心は不實なり。云何んが慳心、謂く己が爲にして他に與へざる法に隨順す。云何んが狸心、謂く徐ろに進む法に順修す。云何んが狗心、

謂く少分を得て以て喜び足れりと爲す。云何んが迦樓羅心、謂く朋黨羽翼の法に隨順す。云何んが鼠心、謂く諸の繫縛を斷せんと思惟す。云何んが歌詠心、云何んが舞心、謂く是の如きの法を修行して、我當に上昇して種種に神變すべし。云何んが擊鼓心、謂く是の法に修順して我當に法鼓を擊つべし。云何んが室宅心、謂く自ら身を護る法に順修す。云何んが師子心、謂く一切の怯れ弱むこと無き法を修行す。云何んが鵂鶹心、謂く常に暗夜に思念す。云何んが烏心、謂く一切處に驚き怖る思念なり。云何んが羅刹心、謂く善の中に於て不善を發起す。云何んが刺心、謂く一切處に惡作を發起するを性となす。云何んが窟心、謂く窟に入ることを爲す法を順修す。云何んが風心、謂く一切處に變じて發起するを性と爲す。云何んが水心、謂く一切不善を洗濯する法に順修す。云何んが火心、謂く熾盛の炎熱を性と爲す。云何んが泥心、云何んが顯色心、謂く彼に類するを性と爲す。云何んが板心、謂く量に隨ふ法に順修して、餘の善を捨て棄つる故に。云何んが迷心、謂く執する所異に、思ふ所異なる。云何んが毒藥心、謂く生分無き法に順修す。云何んが羂索心、謂く一切處に我縛に住するを性と爲す。云何んが械心、謂く二足止まり住するを性と爲す。云何んが雲心、謂く常に雨を降す思念を作す。云何んが田心、謂く常に是の如く自身に事ふることを修す。云何んが鹽心、謂く思念する所に彼復た思念を增し加ふ。云何んが剃刀心、謂く唯是の如く剃除する法に依り止まる。云何んが彌盧等心、謂く常に思惟して心高擧なるを性と爲す。云何んが海等心、謂く常に是の如く自身に受用して而も住す。

云何んが穴等心、謂く先には決定して、彼後には復變改するを性と爲す。云何んが受生心、謂く諸の行業を修習して彼に生ずることを有り。心是の如く同性なり。〔三一〕祕密主、一二三四五再數すれば凡そ百六十心あり。〔三二〕世間の三妄執を越えて出世間の心生ず。謂く是の如く唯蘊無我を解し、根と境界とに淹り留て修行し、業と煩惱、株杌と無明の種子との十二因緣を生ずるを拔く、建立宗等を離れたり。是の如きの湛寂は一切の外道の知ること能はざる所、一切の過を離れたりと、先佛は宣說し給へり。祕密主、彼の出世間の心、蘊の中に住するに、是の如くの慧隨て生ずることあり。若し蘊等に於て著するに離るることを發起して、當に聚沫と、浮泡と、芭蕉と、陽焰と、幻等とを觀察して解脫を得べし。謂く蘊と、處と、界と、能執と、所執と、皆法性を離れたり。是の如きの寂然界を證する、是を出世間心と名く。祕密主、彼の違と順との八心の相續と、業と煩惱との網を離るるは、是れ一劫を超越する瑜祇の行なり。〔三三〕復次に祕密主、大乘の行あり、無緣乘の心を發して法に我性なし。何を以ての故に、彼の往昔に是の如く修行せしものの如く、蘊の阿賴耶を觀察して、自性は幻と陽焰と、影と、響と、旋火輪と、乾闥婆城との如しと知る。〔三四〕祕密主、彼是の如く無我を捨つれば、心

【三一】 以下眞言行者の經る所の修行の位を明す。此は初に十地の前にある三劫を明す、故に三劫段と云ふ。但し時間にあらず、妄執なり、故に卽身に之れを斷ずることを得るなり。諸教の說と混ずること勿れ。

【三二】 以下初劫を明す。聲聞の見道と修道と無學道と緣覺と湛寂の菩薩と寂然界の菩薩とに寄せて明す。

【三三】 以下第二劫を明す、二心あり、卽無緣乘と覺心乘となり、大乘三乘教の有教と空教とに寄せて明す。

【三四】 以下覺心乘なり。

主自在にして自心本不生を覺る。何を以ての故に、秘密主、心は前と後との際に得べからざるが故に。是の如く自心の性を知るは、是れ二劫を超越する瑜祇の行なり。〔三五〕復次に秘密主、眞言門に菩薩の行を行ずる諸菩薩は、無量無數百千倶胝那庾多劫に積集する無量の功德智慧と、具さに諸行を修する無量の智慧方便と皆悉く成就す。天人世間の歸依する所にして、一切の聲聞と辟支佛地とを出過せり。釋提桓因等親近し敬禮す。所謂空性は根と境とを離れ、相も無く、境界も無く、諸の戲論を越えたり。虚空に等しき無邊一切の佛法、此に依て相續して生ず。有爲と無爲との界を離れ、諸の造作を離れ、眼と耳と鼻と舌と身と意とを離れて、〔三六〕極めて自性無き心を生ず。秘密主、是の如きの初心をば、佛は成佛の因と說き給ふ。故に〔三七〕業と煩惱とに於て解脫すれども、而も業と煩惱との具依たり、世間宗奉して常に供養すべし。〔三八〕復次に秘密主、信解行地には三心を觀察す、無量の波羅蜜多の慧を以て、四攝の法を觀ず。信解地は對無く、量無く、不思議なり。十心を建立し、無邊の智生ず。我が一切の諸の說く所あるは皆此に依て而も得るなり。是の故に智者は當に此の一切智と、信解地とを思惟すべし。復一劫を越えて此の地に昇り住す。

【三五】以下第三劫直に眞言行者に就て明す。寄することなし、亦二心あり、一道無爲心と極無自性心なり。

【三六】此二句極無自性心なり。

【三七】業煩惱は解脫し畢れば還て菩提心の功德なることを明す、無非佛事の故に。

【三八】以下眞言行者修行の位の十地を明す。三妄執の煩惱等は前の三劫に斷盡すれども、十地の位には成佛の威儀を修習す、故に無惑の十地と云ふ。餘教と混ずること勿れ。

【三九】四分とは下方便、中方便、上方便、上上方便の四なり。四分の一とは其中の上上方便を云ふ、即佛果なり。

【四〇】以下六無畏を明す　故に

此の（三九）四分の一に信解を度するなり。」

（四〇）爾の時に、執金剛祕密主、佛に白して言さく、『世尊、願はくは救世者、心相を演說し給へ、菩薩は幾種の無畏處をか得ることある。』是の如く說き已て、摩訶毘盧遮那世尊、金剛手に告げて言はく、「諦に聽き、極て善く思念せよ。祕密主、彼の愚童凡夫は諸の善業を修し、不善の業を害するときは、當に善無畏を得べし。若し實の如く我を知るときは、當に身の無畏を得べし。若し取蘊の集むる所の我身に於て、自の色像を捨てて觀ずるときは、當に無我無畏を得べし。若し蘊を害して、法の攀緣に住するときは、當に法無畏を得べし。若し法を害して、無緣に住るときは、當に法無我無畏を得べし。若し復た、一切の蘊と、界と、處と、能執と、所執と、我と、壽命等と。及び法と、無緣と、空にして自性無性なり、此の空智生ずるときは、當に一切法自性平等無畏を得べし。（四一）祕密主、若し眞言門に菩薩の行を修する諸菩薩は、深く修して十緣生句を觀察し、當に眞言の行に於て通達して證を作すべし。云何んが十と爲す。謂く幻と、陽焰と、夢と、影と、乾闥婆城と、響と、水月と、浮泡と、虛空華と、旋火輪との如し。祕密主、彼れ眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、當に是の如く觀察すべし。云何んが幻と爲す。謂く呪術と、藥力との能造と、所造との種種の色像の如きは、自の眼を惑はすが故に希有の事を見る。展轉相生じ十方に

六無畏段と云ふ。眞言行者が三劫十地を經過するに就て難處に六あり、漸くにして之を越えて一息ついて休む處を云ふなり。

【四一】以下は眞言行者因位の觀行に修觀する所、十喩を明す故に十喩段と云ふ。卽迷情を遣する觀門なり。

往來すれども、然も彼去るに非ず、去らざるに非ず。何を以ての故に、本性淨の故に。是の如く眞言の幻を持誦し、成就して、能く一切を生ず。復次に祕密主、陽焔の性は空なり、彼世人の妄想に依て、成立して談議する所あり。是の如く眞言の相も唯是れ假名なり。復次に祕密主、夢中に見る所の晝日と、牟呼栗多と刹那との歳時等に、種種の異類に住して、諸の苦樂を受くるが如きは、覺め已て都て見る所無し。是の如く夢の眞言行も、應に知るべし亦爾なり。復次に祕密主、影の喩を以て眞言の能く悉地を發くことを解了す。面は鏡に緣て面の像を現ずるが如く、彼の眞言の悉地も當に是の如く知るべし。復次に祕密主、乾闥婆城の譬を以て悉地宮を成就することを解了すべし。復次に祕密主、響の喩を以て眞言の聲を解了すべし。聲に緣て響あるが如く、彼の眞言者當に是の如く解すべし。復次に祕密主、月の出るに因るが故に、淨水を照して月の影像を現はすが如く、是の如く眞言の水月の喩を以て彼の持明者、當に是の如く說くべし。復次に祕密主、天より雨を降し泡を生ずるが如く、彼の眞言の悉地種種の變化も、當に知るべし亦爾なり。復次に祕密主、空中には衆生も無く、壽命も無く、彼の作者も得べからざるなり。心迷亂するを以ての故に、是の如きの種種の妄見を生ずるが如し。復次に祕密主、譬へば火燼の、若し人執持して手に在りて、而も以て空中に旋轉するに、輪の像生ずることあるが如し。祕密主、應に是の如く大乘の句と、心の句と、無等等の句と、必定の句と、

【四二】此の住心品は眞言の教相を明す、又卽一經の大意なり。次品已下は實修の作法を明す故に事相を明すと云ふ。

正等覺の句と、漸次大乘生の句とを了知すべし。當に法財を具足し、種種の工巧大智を出生し、實の如く遍く一切の心想を知ることを得るなり。』(四二)

入曼荼羅具緣眞言品第二

爾の時に執金剛祕密主、佛に白して言さく、『希有なり、世尊、此の諸佛自證の三菩提を說き給ふ。不思議法界は心地を超越せり。種種の方便道を以て、衆生類の爲に、本性信解の如く、而も法を演說し給ふ。唯願くは世尊、次に眞言行を修して、大悲胎藏より大曼荼羅王を生ずることを說き給へ。彼の諸の未來世の無量の衆生を滿足せしめ救護し安樂ならしめんが爲の故に。』

爾の時に薄伽梵毗盧遮那、大衆會の中に於て遍く觀察し已て、執金剛祕密主に告げ言はく、『諦に聽け、金剛手、今曼荼羅の行を修行して、一切智智を滿足する法門を說かん。』爾の時に毗盧遮那世尊、本昔無盡法界を成就し、無餘の衆生界を度脫せんと誓願し給ふが故に、一切如來同じく共に集會して、漸次に大悲藏發生三摩地に證入し給ふ。世尊〔一〕一切の支分より皆悉く如來の身を出現し給ふ。彼の初發心より、乃至十地の、諸の衆生の爲の故に、遍く十方に至り、佛身の本位に還り來つて、本位の中に住して、而も復還り入り給ふ。時に薄伽梵、復執金剛祕密主に告げて言はく、『諦に聽け。金剛手、曼荼羅の位の初の〔二〕阿闍梨は、應に菩提心を發し、妙慧と慈悲とあつて、兼て衆藝を綜べ、善く巧に般若波羅蜜を修行し、三乘に通達し、善く眞言の實義を解し、衆生の心を知り、諸佛菩薩を信じ、傳教灌頂等を得、妙へに曼荼羅の畫を解し、其

〔一〕支分生の曼荼羅を明す。
〔二〕阿闍梨の相を明す。

性調柔にして我執を離れ、眞言行に於て善く決定することを得、瑜伽を究め習ひ、勇健の菩提心に住すべし。祕密主、是の如きの法則の阿闍梨は諸佛菩薩の稱讃し給ふ所なり。復次に祕密主、彼の阿闍梨は、㈢若し衆生を見るに法器と爲るに堪へて諸垢を遠離し、大信解と、勤勇と、深信とありて常に利他を念ぜん。若し弟子是の如きの相貌を具せば、阿闍梨應に自ら往いて勸發して是の如く告げ言ふべし。

「佛子、此の大乘眞言行道の法を、我今ま正しく開演せん、彼の大乘器の爲めなり。

過去の等正覺、及與未來世、現在の諸の世尊、饒益衆生に住し給ふ。

是の如きの諸賢者、眞言妙法を解して、勤勇にして種智を獲、無相の菩提に坐せり。

眞言の勢は無比なり、能く彼の大力の、極忿怒の魔軍を摧く、釋師子救世なり。

是の故に汝佛子、應に是の如きの慧の方便を以て、成就を作し、當に薩婆若を獲べし。

行者悲念の心を以て、發起して增廣せしめ、彼堅住して教を受けば、當に爲に平地を擇ぶべし。

㈣山林に華果多く、意を悅ばしむる諸の清泉は、諸佛の稱歎し給ふ所なり。應に圓壇の事を作すべし、

或は河流の處に在て、鵝鴈等の莊嚴をなせば、彼處に慧解を以て、悲生曼荼羅を作るべし。

【三】資の相を明す。

【四】曼荼羅を建立する地處を揀擇することを明す。

正覺と緣導師と、聖者と聲聞衆と、會し此の地分に遊び給ふ、佛常に稱譽し給ふ所なり。
及び餘の諸の方所、僧坊と阿練若と、華房と高樓閣と、勝妙の諸池と苑と、
制底と火神祠と、牛欄と河渾中と、諸天廟と空室と、仙人得道處と、
上の所說の如く、或は所意樂の處に、弟子を利益せんが故に、當に曼荼羅を畫くべし。」

祕密主、彼地を揀擇して礫石と、碎瓦と、破器と。髑髏と、毛髮と、糠糟と、灰炭と、刺骨と、朽木等、及び蟲と、蟻と、蜣蜋と、毒螫との類を除去すべし。是の如くの諸過を離れ、良日晨に遇ひ、日と時分とを定め、(五)宿直の諸執皆悉く相應じて、食前の時に於て吉祥相に値うて、先づ當に一切如來の爲めに禮を作し、(六)是の如き偈を以て、地神を警發すべし。

「汝天親り護る者は、諸佛導師に於て、殊勝の行を修行し、地波羅蜜を淨む。
魔軍の衆を破せし、釋師子救世の如く、我も亦魔を降伏す、我曼荼羅を畫くべし。」

彼應に長跪して手を舒べ、地を按じて頻りに此の偈を誦へ、塗香と華等とを以て供養すべし。供養し已て、眞言者は應に復一切如來を歸命すべし。然して後に地を治して、其次第の如く當に衆德を具すべし。」爾の時に執金剛祕密主、頭面を以て世尊の足を禮して、偈を說て言さく、

【五】曼荼羅を建立するに就て日時と曜宿とを擇ぶべきことを明す。

【六】警發地神の作法を明す。

『佛法は諸相を離れたり、法は法位に住せり、所說は譬類無し、相も無く爲作も無し。
何んが故ぞ、大精進、此の有相、及び眞言行を說き給ふ、法然の道に順せず。』
爾の時に薄伽梵毗盧遮那佛、執金剛手に告ぐ。
『善く法の相を聽け、
法は分別及び一切の妄想を離れたり。若し妄想と心思と諸の起作とを淨め除けば、
我最正覺を成じ、究竟すること虛空の如し。凡愚は知らざる所なり、邪にして妄りに境界を執る。
時と方と相貌等の樂欲は無明に覆はる。彼等を度脫せんがための故に、隨順して方便を以て說く。
而も實には時と方となく、作も無く造者も無し、彼の一切の諸法は、唯實相に住せり。

(七)復次に祕密主、當來世の時に於て、劣慧の諸の衆生は、癡愛を以て
自ら蔽はるるを以て、
唯有相に依て、恒に諸の斷と常と、時と方と所造の業の、善と不善と
の諸相を樂ふ。
盲冥にして果を樂ひ求め、此の道を知解せず。彼等を度せんが爲の故に、隨順して是の法を說く。」

祕密主、是の如く所說の處所に隨て、一地在るに治めて、堅固ならしめて未だ地に至らざる瞿摩夷、及び瞿摸怛羅を取て和合して之を塗り、次に香水の眞言を以て(八)灑淨せよ。卽ち眞言を說て曰へ、

【七】有相方便を說く佛意を明す。
【八】灑水の法を明す。

「南麼三曼多勃馱喃一凡そ眞言の中に平聲字あらば皆稱上に之を呼べ已下此に准じて之を呼べ阿鉢囉二合底丁以反下同三迷二伽伽那三迷三三麼多奴揭帝四鉢囉二合吃㗚二合底微輸上睇五達摩馱睹微戍達你六莎訶」

「行者次に中に於て、意を定めて大日を觀ぜよ、白蓮華座に處し、髮髻を以て冠と爲す。種種の色の光を放ち、身に通じて悉く周遍せり。復當に正受に於てすべし。次に四方佛を想ふべし。

東方をば寶幢と號く、身の色日の暉の如し。南方は大勤勇なり、遍く覺華開敷せり。金色にして光明を放ち、三昧にして諸の垢を離れたり。北方は不動佛なり、惱を離れたる清涼の定なり。

西方は仁勝者なり、是を無量壽と名く。持誦者思惟して、佛室に住せよ。

當にこの地を受持せんには、不動大名を以てし、或は降三世を用ゐ、一切の利成就すべし。

[九]白檀を以て圓妙の曼荼羅を塗り畫け。中は第一我身、第二は諸の救世、第三は彼に同じて、等しき佛母虛空眼、第四は蓮花手、第五は執金剛、第六は不動尊なり。想念して其下に置いて、塗香と華等とを奉れ。諸の如來を思念して、誠を至して殷重を發し、是の如きの偈を演說せよ。

【九】白檀九位の曼荼羅を明す。

〔一〇〕諸佛慈悲者、我等を存念し給ふが故に、明日地を受持すべし。幷に佛子當に降し給ふべし」と。

是の如く說き已て、復當に此眞言を誦すべし、曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一 薩羅婆怛他櫱多引二 地瑟姹二合 那引 地瑟祉二合 帝三 阿者麗四 微麼麗五 娑麼羅嬭二合 鉢囉六 吃嘌平 底二合 丁以反 鉢嚟輸上 睇七 莎訶」

「眞言を持する行者、次に悲念の心を發して、彼の西方に依て、念を繫け以て安く寢て、菩提心清淨の中に、我なきことを思惟せよ。〔一一〕或は夢の中に於て、菩薩大名稱と、諸佛の量ある無き現れて、衆の事業をなすを見るに、或は安慰の心を以て、行者を勸囑し給ふ。汝衆生を念ふが故に、曼荼羅を造作す。善哉、摩訶薩、畫くところ甚だ微妙なり。復次に餘日に於て、度すべき人を攝受せよ。若し弟子の信心あつて、種姓清淨に生れ、三寶を恭敬し、深く悲を以て身を嚴り、堪忍にして懈り倦むこと無く、尸羅淨らかにして缺ること無く、忍辱にして慳恡ならず、勇健にして行願を堅くせん。是の如くならば應に攝取すべし、餘は則ち所觀なし。

〔一二〕或は十或は八七、或は五二一四に、當に灌頂を作すべし。若は復

〔一〇〕地を受持する法を明す。
〔一一〕好相感見を明す。
〔一二〕同壇に於て灌頂を受くる人數を示して三六九を簡ぶ、佛意測り難し。

數此れを過ぎてもせよ」と。』

〔三〕爾の時に金剛手祕密主、復佛に白して言さく、『世尊當に云何が此を曼荼羅と名くべき。曼荼羅とは其の義云何ん。』佛の言はく、『此は發生諸佛の曼荼羅と名く。極て比無き味、過上無き味なり。是の故に說て曼荼羅と爲す。又祕密主、無邊の衆生界を哀れみ愍むが故に、是れ大悲胎藏より生ずる曼荼羅の廣き義なり。祕密主、如來の無量劫に於て、積集せる阿耨多羅三藐三菩提の加持する所なり。是の故に無量の德を具せり。當に是の如く知るべし。祕密主、一衆生の爲の故に、如來は正等覺を成じ給ふに非ず、亦二に非ず、多に非ず、無餘記と、及び有餘記との諸の衆生界を憐れみ愍み給ふが爲の故に、如來は正等覺を成じ給へり。大悲願力を以て無量の衆生界に於て、其の本性の如く而も法を演說し給ふ。祕密主、大乘の宿習無く、未だ曾て眞言乘の行を思惟せざるものは、彼れ少分をも見聞し、歡喜し、信受すること能はず。又金剛薩埵、若し彼の有情、昔大乘眞言乘道の無量の門に於て、進趣し已て、曾て修行す。彼等が爲の故に、此に限て名數を造立す。彼の阿闍梨も亦當に大悲心を以て、是の如くに誓願を立てて無餘の衆生界を度せんが爲の故に、應當に彼の無量の衆生を攝受して、菩提種子の因緣を作すべし。

「眞言を持する行者、是の如く攝受し已て、彼に命じて三たび自ら歸して、說いて先の罪を悔いしめよ。

【三】曼荼羅名義を問答して顯す。

塗香と華等とを奉り、諸の聖尊を供養せしめ、彼に三世無障礙智戒を授くべし。
次に當に齒木を授くべし、若は優曇鉢羅と、或は阿說他等を、結護して而も淨を作せ。
香華を以て莊嚴せよ、端直にして本末を順にせよ、面を東にし或は面を北にして、嚼み已て而も
之れを擲げしめよ。
當に彼の衆生の成器と、非器との相を知るべし。修多羅を三結して、次に等持の臂に繫げよ。
是の如くして弟子に受けしむれば、諸の塵垢を遠離す。信心を增發せしめんが故に、當に隨順して法を說き、譬喩して其の意を堅うせしむべし。是の如く偈を告げて言へ、

汝無等の利を獲て、位大我に同じ、一切の諸の如來、此の敎の菩薩衆、
皆已に汝を攝受して、大事を成辦せしむ、汝等明日に於て、當に大乘の生を得べしと。

是の如く敎授し已て、(一四)或は夢寐の中に於て、僧の住處と、園林の悉く嚴妙なると、
堂宇の相殊特なると。顯敞なる諸の樓觀と、幢と蓋と、摩尼珠の寶と、刀と悅意の華と、
女人の鮮かなる白き衣あつて、端正にして色姝麗なると、密親と或は善友と、男子の天身の如くなると、
群牛の牸乳に豐かなると、經卷の淨無垢なると、遍知と因緣覺と、幷に佛の聲聞衆と、

【一四】夢中觀見の好相を明す。

大乘の諸菩薩と、現前に諸果を授け、大海と河と池とを度り、及び樂ふ所の聲を聞き、空中に、吉祥なり當に意樂の果を與ふべしと言ふを覩見せん。是の如き等の好相を、宜しく諦に分別すべし。

此と相違せんものをば、當に善夢に非ずと知るべし。善く戒に住せんもの、晨に起きて師に白し已れ。

師は此の句法を說て、諸の行人を勸發せよ、此の殊勝の願道は、大心の摩訶衍なり。

汝今能く志求す、當に如來自然智の大龍を成就すべし、世間に敬ふこと塔の如し。

有と無とを悉く超越して、垢無きこと虛空に同じ。諸法は甚だ深奥なり、了じ難し、含藏無し。

一切の妄想を離れ、戲論本より無なるが故に、作業妙にして無比なり。

常に二諦に依る。是の乘の殊勝の願なり、汝當に斯の道に住すべし」と。』

(一五)爾の時に住無戲論執金剛、佛に白して言さく『世尊、願くは三世無礙智戒を說き給へ。若し菩薩此に住するものは、諸佛菩薩をして皆歡喜せしむるが故に。」是の如く說き已て、佛、住無戲論執金剛等に告て言はく、「佛子、諦に聽け、若し族姓の子、是の戒に住する者は、身と語と意とを以て合せて一と爲して、一切の諸法を作さざれ。云何をか戒とする。所謂觀察して自身を捨てて諸佛菩薩に奉獻す。何を以ての故に、若し自身を捨つる時は彼の三

【一五】灌頂入壇の前方便の佛性戒を明す。

事を捨つと爲す。云何んが三とする、謂く身と語と意となり。是の故に族姓の子、身語意の戒を受るを以て菩薩と名くることを得。所以何んとなれば、彼の身語意を離れたるが故に。菩薩摩訶薩應に是の如く學すべし。次に明日に於て金剛薩埵を以て自身を加持し、世尊毘盧遮那の爲に禮を作せ。淨き瓶を取て香水を盛り滿てて、降三世の眞言を持誦して用て之を加し、初門の外に置いて、用て是の諸の人等に灑ぐべし。彼の阿闍梨、次に(一六)淨香水を授與して彼に飲ましめよ。心淸淨の故に。」爾の時に執金剛祕密主、偈を以て佛に問ひ上つる、

「正智說中尊、願はくは彼の時分を說き給へ、大衆は何れの時に於てか、
普く集りて靈瑞を現じ、
曼茶羅の闍梨は、慇懃に眞言を持せん。」爾の時に薄伽梵、持金剛慧に告げ給はく。
常に當に此の夜に於て、曼茶羅を作るべし。傳法の阿闍梨、是の如く、
次に五色の修多羅を取て一切の佛に稽首すべし。大毘盧遮那を以て、親たり自ら加持を作せ。
東方を以て首と爲し、對して修多羅を持せよ。臍に至り、空に在いて、漸次に右に旋り轉じて、
是の如く南及び西、終に北方に竟はれ。第二に界を安立せんとき、亦初方より起せよ。
諸の如來を憶念し、所行は上の說の如くせよ。右方及び後方、復た勝方に周らせよ。
阿闍梨、次に廻りて涅哩底に住る。受學對持のものは、漸次に以て南に行れ。

【一六】 香水を明す、弟子香水を啜て盡未來際菩提心を捨離せずと盟誓する作法なり

此れより右に旋り繞つて、轉じて風方に依る。師位は本處を移して、火の方に居せよ。
眞言を持する行者、復是の如きの法を修せよ。弟子は西南にあり、師は伊舍尼に居す。
學者復た旋り繞つて、轉じて火の方に依れ、師位は本處を移して、風の方に住せよ。
是の如く。眞言者。普く四方の相を作る、漸く次に其の中に入る、三位を以て之れを分つ。
已に三の分位を表して、地相普く周遍せば、復一一の分に於て、差別して以て三とせよ。
この中の最初の分は、作業所行の道なり。其の餘の中と後との分は、聖天の住處なり。
方に等しく四門あり、其の分劑を知るべし。誠心を以て殷重に、諸の聖尊を運布せよ。
是の如く衆相を造んには、均調にして善く分別せよ。(一七)内心に妙白蓮をかけ、胎藏は正しく均等にして、藏の中に一切の悲生曼荼羅を造れ、十六央具梨にせよ、此れを過ぎても是れ其の量なり。
八葉正しく圓滿にして、鬚蘂皆嚴好にせよ。金剛の智印を、遍く諸の葉間に出せ。
此の華臺の中より、(一八)大日勝尊現れ給ふ、金色にして暉曜を具し、首に髮髻冠を持せり。
救世圓滿の光ありて、熱を離れ三昧に住せり。(一九)彼の東には一切遍知印を畫き作るべし。

【一七】曼荼羅の中臺八葉院を明す、卽ち一曼荼羅の惣體なり。
【一八】大日如來なり。
【一九】遍知院を明す、三角印は院主なり、又以下は外三重の第一院なり。

三角にして蓮華の上にあり、其の色皆鮮白なり、光焔遍く圍遶し、皓潔にして普く周遍せり。
次に其の北の維に於る、〔二〇〕導師諸佛の母は、晃曜ありて眞金色なり、縞素を以て衣と爲せり。
遍く照すこと猶し日光のごとし、正受にして三昧に住せり。復彼の南
方に於て、救世の佛、菩薩、
大德、聖尊の印をなせ、號して滿衆願と名く。眞陀摩尼珠を、白蓮の
上に住せしめよ。

〔二一〕北方に大精進觀世自在者あり、光色皓月と商佉と軍那華との如し。
微笑して白蓮に坐し、髻に無量壽を現はせり、彼の右に大名稱聖者多羅尊あり。
青と白と色を相ひ雜へて、中年の女人の狀にせよ。合掌して青蓮を持し、圓光遍せざること靡く
して、
暉り發せること淨金の猶し。微笑して鮮白の衣なり。左邊に毗俱胝をおけ、手に數珠鬘を垂れ、
三目にして髮髻を持し、尊形皓素の如し。圓光の色主無くして、黃赤白相ひ入れり。
次に毗俱胝に近づきて、得大勢尊を畫け。彼の服は商佉の色にして、大悲蓮花手なり。
滋榮して未だ敷けず、圍繞するに圓光を以てす。明妃を其の側に住せしめよ。持名稱者と號す。
一切の妙なる瓔珞を以て、金色の身を莊嚴せり。鮮妙の華の枝を執れり、左は鉢胤遇を持せり。

〔二〇〕佛眼佛母尊なり。
〔二一〕觀音院を明す、大精進は院主なり。

聖者の多羅に近づきて、白處尊を住せしめよ。髮冠にして純帛を襲ひて、鉢曇摩花の手なり。
聖者の前に於て、大力持明王を作せ。晨朝の日の暉り色にして、白蓮を以て身を嚴る。
赫奕として焔鬘を成し、吼え怒て牙を出現せり。利爪にして獸王の髮あり、(二二)阿耶掲利婆なり。
是の如き三摩地は、觀音の諸の眷屬なり。(二三)復次に華臺の表、大日の
左の方に、
能く一切願を滿たせる、持金剛慧者あり、鉢孕遇華の色なり。或は復
綠なる寶の如くせよ。
首に衆寶の冠を戴き、瓔珞を以て身を莊嚴せり。間錯して互に嚴飾
し、廣多にして數無量なり。
左に拔折羅を執り、周環して光焔を起せり、金剛藏の右には、所謂忙莽雞あり。
亦堅慧の杵を持し、身を嚴るに瓔珞を以てせり。彼の右の次に、大力金剛針を置くべし。
使者衆圍繞して、微笑して同じく瞻仰せり。聖者の左方には、金剛商羯羅あり。
金剛の鏁を執持し、自部の諸使と倶なり、其の身淺黃色にして、智杵を以て幖幟とせり。
(二四)執金剛の下に於て、忿怒降三世あり、大障を摧伏するものなり、號して月黶尊と名く。
三目にして四の牙を現せり、夏時の雨雲の色にして、阿吒吒の笑ふ聲あり。金剛寶をもつて瓔珞

【二二】馬頭觀音なり、卽蓮花部の忿怒明王なり。
【二三】金剛手院を明す。持金剛慧者は卽ち金剛薩埵にして院主なり。
【二四】以下の降三世不動等は持明院を明す。

とし、
衆生を攝護するが故に、無量の衆圍遶せり。乃至百千の手に、衆くの器械を操り持せり。
是の如きの忿怒等は、皆蓮華の中に住せり。次に西方に往いて、無量の持金剛を畫け。
種種金剛の印と、形と色と各の差別にして、普く圓滿の光を放つ、諸の衆生の爲の故なり。
眞言主の下に、涅哩底の方に依つて、不動如來使あり、慧刀と羂索とを持し、
頂髮を左肩に垂れたり。一目は諦に觀、威怒にして身に猛き焰あり、安住して盤石に在す。
面門に水波の相ありて、充滿せる童子の形なり。是の如きは具慧者なり。次に風方に往いて、
復忿怒尊を畫くべし。所謂勝三世なり。威猛の焰圍繞し、寶冠にして金剛を持せり。
自の身命を顧みず、專ら請うて教を受く。已に初の界域の、諸尊の方位等を說く。

(三五)眞言を持する行人、次に第二院に往て、東方の初門の中に、釋迦
牟尼を畫け。
圍繞して紫金色なり、三十二相を具せり。袈裟衣を被服し、白蓮華の
臺に坐り。
教をして流布せしめん爲に、彼に住して法を說く。次に世尊の右に於て、遍知眼を顯示せよ。
熙怡の相にして微笑せり、遍體に圓淨の光あり、喜見無比の身なり、是れを能寂母と名く。

【三五】以下第三院を明す、第二院と云ふは祕密語なり。更に問へ。

復彼の尊の右に於て、毫相の明を圖寫せよ。鉢頭摩華に住し、圓かに照して商佉の色なり。
如意寶を執持して、衆の希願を滿足す、暉光ありて大精進なり、救世の釋師子なり。
聖尊の左の方に、如來の五頂あり。最初をば白傘と名く、勝頂と最勝頂と、
衆德の火光聚と、及與捨除頂と、是を五大頂と名く、大我の釋種なり。
應當に是處に依て、精進にして衆相を造るべし。次に其の北の方に於て、淨居衆を布列せよ。
自在と普華と、光鬘と及び意生と、名稱遠聞と等なり。各其の次第の如し。
毫相の右に於て、復三佛頂を畫け。初をば廣大頂と名け、次をば極廣大と名け、
及び無邊音聲となり、皆善く安立すべし。五種の如來の頂は、白と黃と眞金との色なり。
復次の三佛頂は、白と黃と赤とを兼ね備へたり、其の光普くして深廣なり、衆の瓔珞を以て莊嚴せり。

發す所の弘誓力、一切の願を皆滿ず。行者の東の隅に於て、火仙の像を作れ。
熾焰の中に住す。三點灰を以て標と爲す。身色皆な深赤なり。心に三角の印を置く。
圓焰の中に在て、珠と及び澡瓶とを持せり。左の方に閻魔王あり。手に壇拏の印を秉り、
水牛を以て座と爲す。震電玄雲の色なり。七母と幷に黑夜と、死后等と圍繞せり。
涅哩底鬼王は、刀を執る恐怖の形にせよ。縛嚕拏龍王は、羂索を以て印と爲せり。

初の方には釋天王あり、妙高山に安住せり。寶冠の瓔珞を被りて、跋折羅の印を持せり。
及び餘の諸の眷屬を、慧者善く分布せよ。左に日天衆を置く、輿輅の中に在らしめよ。
勝無勝の妃等、翼從して侍衞せり、大梵を其の右に在け。四面にして髮冠を持せよ。
唵字の相を印と爲し、蓮を執て鵝の上に在す。西の方には諸の地神と、辯才と及び毘紐と、
塞健那と風神と、商羯羅と月天となり。是等は龍方に依て、之れを畫いて遺謬すること勿れ。
眞言を持する行者、迷惑せざる心を以てせよ。佛子次に應さに、持明大忿怒を作るべし。
右をば無能勝と號し、左は無能勝妃なり。持地神は瓶を奉げて、虔み敬ひて長跪せり。
及び二の大龍王、難陀と跋難陀と對して、廂の曲れる中に處せり、通門の大護なり。
所餘の釋種の尊の、眞言と印壇との、所說の一切の法は、師具さに開示すべし。

(三六)眞言を持する行者、次に第三院に至て、先づ妙吉祥を圖せよ。其の身鬱金色なり。
五髻の冠り其の頂にあり、猶し童子の形の如し。左に青蓮花を持し、上に金剛印を表せり。
慈顏を以て遍く微笑して、白蓮臺に坐し、妙相圓普の光、周匝して互に暉映せり。

【三六】以下第三院を明す。第三院と云ふは秘密語なり、謂く阿闍梨先づ第一の遍知院を畫き、越えて第二に第三の釋迦院を畫き畢て、立還て第三に第二の文殊院を畫く、是の故に釋迦院を第二院と云ひ、文殊院を第三院と云ふなり。

右邊に次に、網光童子の身を畫くべし、衆の寶網を執持し、種種の妙たる瓔珞あり。
寶蓮華座に住して、而も佛長子を觀ず。左邊には五種の、與願の金剛使を畫け。
所謂髻設尼と、優婆髻設尼と、及與質多羅と、地慧と幷に請召となり。
斯の如きの五の使者に、五種の奉教者あり、二衆共に圍繞して、無勝智を侍衞せり。
行者右方に於て、次に大名稱の、除一切蓋障を作れ、如意寶を執持せり。
二分の位を捨てて、當に八菩薩を畫くべし、所謂除疑怪と、施一切無畏と、
除一切惡趣と、救意慧菩薩と、悲念具慧者と、慈起大衆生と、
除一切熱惱と、不可思議慧となり。次に復斯の位を捨てて、北の勝方に至れ。
行者一心を以て、憶持して衆の綵を布して、善忍を具する地藏摩訶薩を造れ。
其の座極めて巧麗ならしめよ。身焰胎に處せり、雜寶莊嚴の地、綺錯互に相ひ間へたり。
諸の寶を以て蓮華と爲す、聖者の安住する所なり。乃與大名稱の、無量の諸の菩薩あり。
謂く寶掌と寶手と、乃與持地等と、寶印手と堅意となり。上首の諸の聖尊、
各無數の衆と、前後に共に圍繞せり。次に復龍方に於て、當さに虛空藏を畫くべし。
勤勇にして白き衣を被、刀の焰光を生ぜるを持す。乃與諸の眷屬、正覺所生の子、
各其の次第に隨て、正蓮の上に列坐せり。今彼の眷屬の大乘の菩薩衆を說かん。

善く圖し藻繢すべし。諦誠にして迷忘すること勿れ。謂く虛空無垢と、次に虛空慧と名くると、
及び淸淨慧等と、行慧と安慧と等なり。是の如きの諸の菩薩は、常に勤めて精進する者なり。
各其の次第の如く、畫いて身を莊嚴せよ。略して大悲藏曼荼羅の位を說き竟ぬ。』
爾の時に執金剛祕密主、一切衆會の中に於て、諦に大日世尊を觀じ奉つて、目暫くも瞬かず、而して偈を說て言く、
『一切智慧者、世間に出現し給ふ。彼の優曇華の、時に乃ち一たび現はるるが如し。
眞言所行の道は、倍復甚だ遇ひ難し。無量俱胝劫に、作れる所の衆の罪業、
此の曼荼羅を見るときは、消滅して盡く餘すことなし。
何に況んや無量に稱して、眞言の行法に住するをや。
此の無上句の、眞言救世者を行ずれば、諸の惡趣を止斷し、一切の苦生せず。
若し是の如きの行を修するときは、妙慧深くして動ぜざるなり。』
時に普く集り會する一切大衆、及び諸の持金剛者。一の音聲を以て金剛手を讚歎して言さく、
『善哉、善哉、大勤勇、汝已に眞言の行を修行す。能く一切の眞言の義を問はんとす、我等も
咸く意に思惟することあり。
一切理に汝が證驗となるべし、眞言の行力に住するに依るなり。及び餘の菩提大心の衆も、當に

眞言の法に通達することを得べし。』

爾の時に執金剛祕密主、復世尊に白して、而も偈を說て言さく、

『(二七)云何なるか彩色の義。復當に何の色を以てすべき。云何なるか而も運布せん、是の色は誰をか初とせん。

(二八)門標の旗の量等、廂衞も亦是の如し。云何なるか諸門を建てん、願くは尊、其の量を說き給へ。

(二九)食と華と香等と、及與衆の寶瓶とを奉る。(三〇)云何んが弟子を引かん、云何んが灌頂せしめん。

云何なるか師を供養せん、(三一)願くは護摩の處を說き給へ。(三二)云何んが眞言の相。(三三)云何んが三昧に住する。

是の如く問を發し已て、牟尼諸法の王持金剛慧に告げ給はく、一心にして諦に聽くべし。

最勝の眞言の道は、(三四)大乘の果を出生す。汝今ま我に請問す、大有情の爲に說かん。

彼の衆生界を染るに。(三五)法界の身を以てす、古佛の宣說し給ふ所なり、是れを名けて色の義と

【二七】第一に曼荼羅彩色の義を問ふ。

【二八】第二諸門の標相を問ふ。

【二九】第三供養具を問ふ。

【三〇】第四加持教授の方便を問ふ。

【三一】第五護摩を問ふ。

【三二】第六眞言の部類字義句義を問ふ。

【三三】第七眞言三昧門淺深差別の相を問ふ、此れ皆曼荼羅を建立する支分なり。

【三四】卽ち是れ佛の無上の覺智なり。

【三五】眞淨の菩提心を法界の味と云ふ。卽ち無過上味にして曼荼羅味なり。

爲す。

先づ內色を安布す、外色を安布するに非ず。（三六）潔白を最も初と爲して、赤色を第二と爲す。

是の如く黃と及び靑と。漸次にして彰かに著けよ。一切の內は深き玄にせよ。是れを色の前後と謂ふ。

門の標幟を建て立てんこと、量中胎の藏に同うせよ。廟衞も亦是の如し。華臺は十六節にせよ。

應さに彼の初門は、內壇と齊等なることを知るべし。智者、外院に於ては、漸次に增し加ふ。

彼の廟衞の中に於て、當に大護者を建つべし。略して三摩地を說かん、一心にして緣に住せよ。

廣義は復殊異なり。大衆生諦かに聽け、佛一切空と、正覺の等持とを說き給ふ。

三昧を以て心を證知す、異緣に從つて得るに非ず。

彼れ是の如く境界は、一切如來の定なり。故に說いて大空と爲し、薩婆若を圓滿す。」

【三六】白色は大日如來、赤は寶幢佛、黃は開敷花王佛、靑は無量壽佛、黑は鼓音佛の色なり。

卷の第二

入曼荼羅具縁眞言品第二の餘

爾の時に毗盧遮那世尊、一切の諸佛と同じく共に集り會して、各各に一切の聲聞と、縁覺と、菩薩との三昧道を宣說し給ふ。時に佛（一）一切如來一體速疾力三昧に入り給ふ。是に於て世尊、復執金剛菩薩に告げて言はく、

『我れ（二）昔し道場に坐して、四魔を降伏し、大勤勇の（三）聲を以て、
衆生の怖畏を除く。
是の時に梵天等、心に喜んで共に稱說す。此に由て諸の世間に、號して大勤勇と名けき。
（四）我れ本不生を覺り、語言の道を出過す。諸の過を解脫することを得て、遠く因緣を離れたり。
（五）空は虛空に等しと知つて、如實相の智生ず。已に一切の暗を離れて、第一實にして垢無し。

【一】一切如來は同一法界の智體なりと證知して、一念の中に於て無量の衆生を度する故に、一體速疾力と云ふ。卽ち阿字觀なり。
【二】成道の外迹を明す。
【三】吽字の聲なり、又所持の印は三角智印なり。
【四】菩提の實義を明す、五句は次の如く阿娑縛賀佉の五字なり、又第二句以下は阿字の義を轉釋するなり。
【五】世諦を釋通して敎起の所

諸趣は唯相と名とのみなり。佛相も亦復然なり。(五)此の第一の實際は、
加持力を以ての故に、
世間を度せんが爲めに、而も文字を以て說き給ふ。」
(六)爾の時に執金剛具德者、未だ曾て有らざる(七)開敷の眼を得て、頂を以て一切智を禮して、偈を說いて言さく、
『諸佛は甚だ希有なり、權智は不思議なり。(八)一切の戲論を離れて、
法佛自然の智あり。
而も世間の爲に說て、衆の希願を滿足せしめ給ふ、眞言の相は是の如し、常に二諦に依る。
(九)若し諸の衆生有て、此の法敎を知る者は、世人の應に供養すること、猶し制底を敬ふが如くすべし。」
時に執金剛、此の偈を說き已て、諦かに毗盧遮那を觀たてまつつて、目暫くも瞬かず、(一〇)默然として住す。是に於て世尊、復執金剛祕密主に告げて言はく、(一一)『復次に祕密主、一生補處の菩薩は、佛地の三昧道に住して造作を離れ、世間の相を知り、業地に住し、堅く佛地に住す。復次に祕密

由を明す、如來神力加持を以て世間の文字を加持して自證の法を說き給ふなり。

【六】以下は金剛手の領解を明す。

【七】心蓮花眼の開敷なり。

【八】麁と細と極細との三妄執なり。

【九】佛の本不生の菩提印を信解すれば無量の福業を得ることを明す。

【一〇】言語を以て問へば恐くは眞理に乖かん、故に默然たり。即ち是れ甚深の發問なり。

【一一】佛と菩薩と聲聞と緣覺と世間との五種の三昧道を明す。中に於て出世間の三昧道は實益あり、世間の三昧道は但し權益のみなり、若し大日經宗に就かば、五種の三昧門は、皆是れ心實相を開くの門なり。

主、八地の自在の菩薩の三昧道は、一切の諸法を得ず。有の生を離れて、一切の幻化なりと知る。是の故に、世に觀自在者と稱す。復次に祕密主、聲聞衆は、有緣の地に住して、生滅を識り、二邊を除き、極觀察智を以て、不隨順の修行の因を得、是れを聲聞の三昧道と名く。祕密主、緣覺は、因果を觀察し、無言說の法に住して、無言說を轉せず、一切の法に於て、極滅語言三昧を證せり、是れを緣覺の三昧道と名く。祕密主、世間の因果と及び業とは、若は生じ若は滅して、他の主に繫屬して、空三昧生ず。是れを世間の三昧道と名く。』爾の時世尊、偈を說いて言はく、

『祕密主、當に知るべし。此等の三昧道、若し佛世尊と、菩薩救世者と、
緣覺と聲聞との說に住するときは、諸の過を摧き害す。若し諸天世間の、眞言法敎の道は、
是の如きの勤勇者には、衆生を利せんが爲の故なり。』

(二)復次に世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、『祕密主、汝ぢ當に諦に諸の眞言の相を聽くべし。』

金剛手の言さく、『唯然り、世尊、願樂くは聞かんと欲す。』爾の時に世尊、復頌を說て曰はく。

(三)『(四)等正覺の眞言の、言名成立の相は、因陀羅宗の如くにして、諸義利成就せり。

【二】曼荼羅具緣の中、眞言の支分を明す。

【三】以下諸眞言の相を說く、中に於て初の四句は如來眞言の通相を明す。

【四】次に眞言の別相を明す、諸佛菩薩の眞言は一言の中に於て具さに衆德を含めり。

(二四)増加の法句と、本名と行と、相應することあり。
若は唵字と吽字と、及與び發磔迦と、或は頡唎嬖と等は、是れ佛頂の名號なり。
若は揭嘌恨擎と、佉陁耶畔闍と、訶那と摩囉也と、鉢吒也と等の類は、是れ奉教使者の、諸の忿怒の眞言なり。
若し納麼の字と、及び莎縛訶と等あらば、是れ三摩地を修する、寂行者の標相なり。
若し扇多の字と、微戍陀の字と等あらば、當に知るべし能く一切の希願する所を滿足す。此れ正覺佛子、救世者の眞言なり。
若し聲聞の所說は、(二五)一一の句安布せり。是の中に辟支佛は、復た少しきの差別あり。謂く「(二六)三昧分に異にして、業生を淨め除く。」
復次に祕密主、(二七)此の眞言の相は、一切の諸佛の作る所に非ず、他をして作らしめず、亦隨喜せず。何を以ての故に。是の諸法は、法として是の如くなるを以ての故に。若し諸の如來出現し給ふにまれ、若は諸の如來出でたまはざるにまれ、諸法は法爾として是の如く住す。謂く諸の眞言は眞言にして法爾なるが故に。(二八)祕密主、等正覺を成ぜる一切知者、一切見者、世に出興して而も自ら此の法

【二五】聲聞は法性に入ること未だ深からざる故に、一言の中に於て衆德を含むこと能はざれば、一一の句安布と云ふなり。

【二六】緣覺も聲聞の如くなれども、其眞言は四聖諦にあらずして、十二因緣寂滅の理を說く。故に三昧分異と云ふ。

【二七】眞言の相等は常住不變なることを明す、生住異滅の四相に移さるるものは眞實語にあらざる故なり。

を以て、種種の道を説き、種種の樂欲と、種種の諸の衆生の心とに隨つて、種種の句と、種種の文と、種種の方に隨ふ語言と、種種の諸趣の音聲とを以て、而も加持を以て眞言の道を説き給ふ。祕密主、云何なるか如來の眞言道なる。(一九)謂く、此の書寫の文字を加持するなり。祕密主、如來は無量百千俱胝那庾多劫に、(二〇)眞實の諦語、四聖諦、四念處、四神足、十如來力、六波羅蜜、七菩提寶、四梵住、十八佛不共法を、積集し修行し給へり。祕密主、要を以て之れを言はば、諸の如來の一切智智と、一切如來の自福智力と、自願智力と、一切の法界の加持力とを以て、衆生に隨順して、其の種類の如く、眞言教法を開示し給ふ。云何なるか眞言教法なる。(二一)謂く、阿字門は一切の諸法は本より生ぜざるが故に。迦字門は一切の諸法は作業を離れたるが故に。佉字門は一切諸法は虚空に等しくして得べからざるが故に。哦字門は一切諸法は一切の行得べからざるが故に。伽（重聲）字門は一切諸法は一合相得べからざるが故に。遮字門は一切諸法は一切の遷變を離れたるが故に。車字門は一切諸法は影像得べからざるが故に。若字門は一切諸法は生得べからざるが故に。社字門は一切諸法は戰敵得べからざるが故に。吒字門は一切諸法は慢得べからざるが故に。咤字門は一切諸法は長養得

【一八】法爾なれども佛は之を以て衆生を利益し給ふことを明す。

【一九】世間の文字の外に眞言の文字なきことを明す。世間の文字卽法性の文字なる故に。

【二〇】能加持の法を明す。

【二一】其實は眞言の法教は一切の隨方の言語及び文字に通ずべしと雖如來は印度に出で給ふを以て、傳法者且く梵文に就いて一途の釋をなすなり。又阿字は一切の法教の本なり、凡そ最初に口を開く音に阿の聲あり、若し阿を離れては一切の言語なき故に衆聲の母となすなり。

べからざるが故に、挐字門は一切諸法は怨對得べからざるが故に、荼重聲字門は一切諸法は執持得べからざるが故に。多字門は一切諸法は如如得べからざるが故に。他字門は一切諸法は住處得べからざるが故に。娜字門は一切諸法は施得べからざるが故に。馱重聲字門は一切諸法は法界得べからざるが故に。波字門は一切諸法は第一義諦得べからざるが故に。頗字門は一切諸法は堅からずして聚沫の如くなるが故に。麼字門は一切諸法は縛得べからざるが故に。婆字門は一切諸法は一切有得べからざるが故に。野字門は一切諸法は一切乘得べからざるが故に。囉字門は一切諸法は一切の諸の塵染を離れたるが故に。邏字門は一切諸法は一切相得べからざるが故に。縛字門は一切諸法は語言道斷の故に。奢字門は一切諸法は本性寂の故に。沙字門は一切諸法は性鈍の故に。娑字門は一切諸法は一切諦得べからざるが故に。訶字門は一切諸法は因得べからざるが故に。秘密主、仰若拏那麼は、一切の三昧に於て自在に速に能く諸事を成辦し、所爲の義利皆悉く成就す。〔二二〕爾の時に世尊、而も偈を説いて言はく、

〔二三〕『眞言の三昧門は、一切の願を圓滿す、所謂諸の如來の、不可思議の果なり。
衆の勝願を具足するは、眞言の決定の義なり、三世を超越して、垢無きこと虚空に同じ。
不思議の心に住して、諸の事業を起作す、修行の地に到るものに、不思議の果を授け給ふ。

【二二】以下の五偈は眞言の功德を歎ず。

【二三】上は正く眞言の功德を明し、以下の二偈は勸信印成す。

【二四】諸佛同道を引いて世諦を

（二三）是れ第一の眞實なり、諸佛の開示し給ふ所なり。（二四）若し此の法教を知りぬれば、當に諸の悉地を得べし。
（二五）最勝眞實の聲と、眞言と眞言の相と、行者諦かに思惟して、當さに不壞の句を得べし。』
（二六）爾の時に執金剛祕密主、佛に白して言さく『希有なり世尊、佛不思議の眞言の相の道法を說き給ふ、一切の聲聞緣覺に共せず、亦普く一切衆生の爲にし給ふに非ず。若し此の眞言道を信ずる者は、諸の功德の法は皆當に滿足すべし。唯願くは世尊、次に曼荼羅に須る所の次第を說き給へ。』
是の如く說き已て。世尊復金剛手に告げて、偈を說いて言はく、
『眞言を持する行者、諸の聖尊を供養するには、（二七）意を悅ばしむる華の。潔白黃朱色なる、
鉢頭摩と靑蓮と、龍華（二八）奔那伽と、（二九）計薩囉と末利と、得蘖藍と瞻蔔と、
無憂と底羅劍と、鉢吒羅と娑羅と、是れ等の鮮妙華と、吉祥にして衆の樂ふ所とを奉るべし。

信ぜよと勸む。
【二五】以下は眞言を信ぜよと勸む。
【二六】上來は廣く入曼荼羅の眞言の支分を說き竟ぬ、以下は上を躡て入曼荼羅に須ふる所の次第を說き給へと請するなり。
【二七】供養の具の中、先づ花を明す、佛部には白、蓮花部には黃、金剛部には赤を以てすべし。又諸佛には白、諸菩薩には黃、諸の世天には赤を以てすべし。
【二八】紅蓮花と譯す、龍の中に尙ぶ所の花。
【二九】計薩羅より婆羅に至る花は皆是れ印度の花にして支那にも之れなし。
【三〇】錯雜して或は綴り或は結ぶなり。
【三一】次に塗香を明す。
【三二】次に焚香を明す、佛部に

採り集めて以て(三〇)鬘と爲して、敬心にして而も供養すべし。

(三一)栴檀と及び青木と、苜蓿香と鬱金と、及び餘の妙塗香とを、盡く持ち以て奉獻すべし。

(三二)沈水と及び松香と、嚩藍と龍腦と、白檀と膠香等と、(三三)失利婆塞迦と、及び餘の焚香の類との、芬馥にして世に稱美せしを、當に法教に随つて聖尊に奉るべし。

(三四)復次に大衆生、敎に依て諸の食を獻むべし。乳の糜と酪の飯と、(三五)歡喜と(三六)曼荼迦と、百葉の甘美の餅と、淨妙の砂糖餅と、

(三七)布利迦と間穴と、及び(三八)末途失囉と、(三九)娩諾迦と(四〇)無憂と、播鉢吒食等との、

是の如きの諸の餚饍と、種種の珍妙の果と、(四一)蹇茶と石蜜と、糖蜜と生と熟との蘇と、種種の諸の漿飲と、乳と酪と淨牛味とを奉れ。

(四二)又諸の燈燭を奉るには、異類の(四三)新淨の器に、妙なる香油を盛り滿てて。布き列ねて照明を爲せ。

は白檀沈水、蓮花部には樹汁香、金剛部には黑沈香等を供養するを法と爲すなり。

【三三】此方の薫陸香に似た物。

【三四】次に飯食を明す。

【三五】蘇を以て餅を煮て衆味と羹と胡椒と蓽茇とを雜へたものを歡喜丸と云ふ。

【三六】曼荼迦。薄き餅なり。

【三七】布利迦は餡を著けたる餅。間穴は蘇して穴を爲す餅。

【三八】餡を著けたる上に更に糖蜜を塗る餅。

【三九】娩諾迦は起麪を以て餅を作て餡を著けて油を以て煮たるもの。

【四〇】無憂は縷りを巻きたる砂糖餅、播鉢吒は不起麪の饅頭なり。

【四一】蹇茶は白糖なり。

【四二】次に燈明を明す。

【四三】供養の器物は衆寶を以て

四方の繒幡蓋は、種種の色を相ひ間ふべし。(四四)門標は異形類にして、幷に懸くるに鈴と鐸とを以てす。(四五)或は心を以て供養す。一切皆な之れを作せ。眞言を持する行者、意に存して遺し忘るること勿れ。

(四六)次に迦羅奢を具せよ、或は六或は十八なり。諸の寶と藥とを備へ足らしめ、衆の香水を盛り滿てよ。枝條上に垂れ布いて、華の果實を間へ挿さめ、塗香等嚴飾し、結護して作淨すべし。頸に繫くるに妙なる衣を以てし、瓶の數或は增廣にす。上首の諸の尊等に、各各に(四七)兼服を奉れ。

諸餘の大有情に、一一に皆之れを獻れ。是の如く供養を修して、(四八)次に度すべき者を引け。之れに灑ぐに淨水を以てし、塗香と華とを授け與へ、菩提心を發して、諸の如來を憶念せしめよ。一切皆當に淨き佛家に生るることを得べし。法界生の印と、及與法輪の印を結んで、金剛有情等、而も用て加護を爲せ。

次に當に自ら諸佛の三昧耶を結んで、三轉して淨衣を加し、眞言法敎の如くせよ。

造るを上とす、能くせざれば新淨の瓦器も亦得べし。

【四四】其莊嚴は入祕密曼荼羅品中の示す所に准ずべし。

【四五】前は事供養なり、此れは三密の理供を明す。

【四六】次に吉祥瓶の法を明す、迦羅奢は瓶なり。

【四七】上服なり、其價常の服に兼倍す故に兼服と云ふ。

【四八】次に受者引入の法を明す。

而も用て其の首に覆うて、深く悲念の心を起して、三たび三昧耶を誦すべし。
頂に戴くに囉字を以てし、嚴るに大空點を以てし、周帀して焔鬘を開け、字門より白光を生ず、
流れ出づること滿月の如し。
現に諸の救世に對して、而も淨華を散せしめよ。其の所至の處に隨て、行人而も尊奉すべし。
曼荼羅の初門の、大龍廂衞の處、二門の中間に於て、學人を安立せよ。
彼に住して法教に隨て、而も衆の事業を作せ。是の如く弟子をして、遠く諸の過を離れしむべし。

【四九】次に息災護摩法を明す。

【四九】寂然護摩を作すべし、護摩は法に依て住す。初め中胎藏より、第二の外に至つて、曼荼羅の中に於て、無疑慮の心を作す。
其の自の肘量の如く、陷りて光明壇を作れ。
四節を周界と爲し、中に金剛印を表す。師位の右方に、護摩の具支分をおけ。
學人其の左に住して、蹲踞して敬心を増す。自ら吉祥草を敷き、地に藉いて以て安坐す。
或は衆の綵色を布すべし。彫輝し極めて嚴麗ならしめて、一切の績の事を成せよ。
是れ略護摩の處なり。周帀して祥茅を布け、端と末と互に相ひ加して右に旋らし、
普廣く厚くして、遍く灑ぐに香水を以てす。火光尊を思惟すべし。一切を哀み愍むが故に、

當に滿器を持して、而も以て之れを供養すべし。爾の時に善く住する者は、當に是の眞語を說くべし。

(五〇)南麼三曼多勃馱喃一唖揭娜二合曳二莎訶、

復三昧の手を以て、次に諸弟子の慧手の大空指を持して、略して護摩を奉持せよ。獻る每に輒ち誠に誦して、各別に三七に至せ。當に慈愍の心に住すべし、法に依て眞實の言を以てす。

(五一)南麼三曼多勃馱喃一阿去急呼摩訶引扇底丁以反下同蘗多二扇底羯囉三鉢囉二合睒摩達磨儞入聲蕟多四阿婆去嚩薩嚩二合婆嚩五達麼娑麼多鉢囉下同二合鉢多莎訶、

(五二)行者護摩し竟て、敎へて儭施をせしむべし。金と銀と衆の珍寶と、象と馬と及び車乘、牛と羊と上の衣服と、或は復餘の資財なり。弟子當に誠を至して、恭敬して殷重を起すべし。深心に自ら忻び慶んで、而も所尊に奉れ。淨捨を修行するを以て、彼をして歡喜せしむるが故に。已に爲に加護を作して、召して告げて言ふべし、「今此の勝れたる福田は、一切の佛の說き給ふ所なり。廣く一切の諸の有情を饒益せんと欲ふが爲

【五〇】火天の眞言なり、初の阿字を種子とす。

【五一】息災の眞言なり、初の阿字を種子とす。

【五二】阿闍棃を供養する法を明す。世財を捨てて出世の法財を得しめんが爲めなり。

なり」と。

一切の僧に施し奉つて、當に大なる果を獲べし。盡ること無き大資財は、世に常に隨つて生ずと說けり。

僧を供養するものは、德を具するの人に施すを以てなり。

是の故に世尊、當に歡喜を發して、力に隨つて肴膳を辦へて、現前僧に施すべしと說き給ふ。』

〔五三〕爾の時に毗盧遮那世尊、復執金剛祕密主に告げて、而も偈を說いて言はく、

『汝摩訶薩埵・一心に應に諦に聽くべし、當に廣く灌頂を說くべし、古佛の開示し給ふ所なり、

師〔五四〕第二の壇を作りて、中曼荼羅に對して、外界に圖畫せよ。相ひ距ること二肘量なり。

四方正に均等なり、內に向ひて一門を開け。四執金剛を安じて、其の四維の外に居らしむ。

謂く住無戲論と、及び虛空無垢と、無垢眼金剛と、被雜色衣等となり。

內心には大蓮華をなせ。八葉及び鬚藥あり、四方の葉の中に於て、四伴侶の菩薩あり。

彼の大有情の、往昔の願力に由るが故に。

云何んが名けて四と爲る、謂く總持自在と、念持と利益心と、悲者菩薩と等なり。

【五三】以下は灌頂法を明す、甚だ秘密なり。

【五四】十二肘の灌頂曼荼羅也。大壇に對して大小の故に第二と云ふ。

餘す所の諸の四葉には、四奉教者を作る。雜色衣と滿願と、無礙と及び解脫となり。

(五五)中央に法界不可思議の色を示す。(五六)四寶所成の瓶に、衆の藥と寶とを盛り滿つ。

普賢と慈氏尊と、及與除蓋障と、除一切惡趣と、而も以て加持を作す。

彼れを灌頂の時に於て、當に妙蓮の上に置くべし。獻るに塗香と華と、

燈明と及び閼伽とを以てし、

上に幢幡蓋を蔭ひ、攝意の音樂と、吉慶伽陀と等の、廣多の美妙言を

奉れ。

是の如く而も供養して、歡喜を得しめ已れ。親り諸の如來に對したてまつりて、而も自ら其の頂に灌ぐ。

復當に彼の妙善の諸の香と華とを供養すべし。

(五七)次に應さに金篦を執て、彼が前に在て住して、慰喩して歡喜せしめ、

是の如きの伽陀を說くべし。

佛子佛汝が爲に、無智の膜を決除し給ふ。猶し世の醫王の、善く金籌を用ふるが如し。

眞言を持する行者、復當に明鏡を執て、無相の法を顯さんが爲に、是の妙伽陀を說くべし。

諸法は形像無し、淸く澄んで垢濁無し、執無く言說を離れたり、但し因業より起る。

【五五】純白色なり、卽ち六大法界の標幟なり。

【五六】事物は金銀瑠璃水精なり、若し深祕に就けば無盡願行の寶、無盡淨知見の寶、無盡利益衆生の寶、無盡大悲方便の寶にして、卽ち大日如來四德の寶なり。卽ち普賢等の四菩薩なり。

【五七】凡そ密敎の深旨は皆因緣事相に託して以て之を諭す、故に此の如くの物品の傳授作法を爲すなり、更に問へ。

是の如く此の法の自性は、染汙無きことを知れば、世の比無き利を爲す、汝佛心より生ずと。
次に當に法輪を授けて、二足の間に置き、慧の手に法螺を傳へて、復是の如きの偈を說くべし。
汝自ら今日に於て、救世の輪を轉ず、其の聲普く周遍して、無上の法螺を吹くべし。
異慧を生ずること勿れ、當に疑悔の心を離れて、世間に於て勝れたる行の眞言の道を開示すべし。
常に是の如きの願を作して、佛の恩德を宣べ唱へよ、一切の持金剛、皆當に汝を護念すべし。
次に當に弟子に於て、而も悲念の心を起すべし、行者應に中に入て、

〔五八〕三昧耶の偈を示すべし。

佛子汝今より、身命を惜しまざるが故に、常に法を捨て菩提心を捨離し、一切の法を慳悋し、衆生を利せざる行をなすべからず。
佛三昧耶を說き給ふ、汝は善く戒に住する者なり、自の身命を護るが如く、戒を護ることも亦是の如くせよ。
應さに誠を至して恭敬して。聖尊の足を稽首したてまつるべし。所作教に隨て行ぜよ、疑慮の心を生ずること勿れ。」

〔五九〕爾の時に金剛手、佛に白して言さく、「世尊、若し諸の善男子と善女人と有て、此の大悲藏より生ずる、大曼荼羅王の三昧耶に入る者は、彼れ幾所の福德聚を獲るや。」是の如く說き已て、佛、金剛

【五八】此れは祕密の四重禁にして、一切戒法の根本なり。
【五九】以下は祕密の四重禁を受け竟るに由て得る所の眞言門の中の無作の功德を明す。

手に告げて言はく、『祕密主、初發心より。乃至如來を成ずるまでの、所有の福德の聚なり。是の善男子と善女人との福德の聚は、彼と正しく等し。祕密主、此の法門を以て、當に是の如く知るべし。彼の善男子と善女人とは、(三〇)如來の口より生ず、佛心の子なり。若し此の善男子と善女人との在る所の方所には、卽ち爲めに佛有して佛事を施作し給ふべし。是の故に祕密主、若し佛を供養せんと樂欲する者は、當に此の善男子と善女人とを供養すべし。若し佛を見たてまつらんと樂欲せば、卽ち當に彼を觀ずべし。』時に金剛手等の上首の執金剛と、及び普賢等の上首の諸の菩薩と、聲を同うして說て言さく。『世尊、我等今より已後、應當に是の善男子と善女人とを恭敬し供養すべし。何を以ての故に、世尊、彼の善男子と善女人とを見れば、佛世尊を見たてまつるに同きが故なり。』

(三一)爾の時に毘盧遮那世尊、一切の衆會を觀じて、執金剛祕密主等の諸の持金剛者と、及び大衆に告て言はく、『善男子、如來出世の無量の廣長の語輪の相有り。巧色摩尼の如く、能く一切の願を滿し、無量の福德を積み集め、害すべからざる行に住する三世無比力の眞言句なり。』是の如く言ひ已て、金剛手祕密主等の諸の執金剛、及び大會の衆、聲を同うして說いて言さく、『世尊、今正しく是れ時なり、善逝、今正しく是れ時なり。』

爾の時に毘盧遮那世尊、一切の願を滿せる廣長の舌相を出して、遍く一切の佛刹を覆ふ(三二)清

【三〇】　●●●如來の口とは阿字本不生の實際なり、卽ち法界なり。

【三一】　以下は曼荼羅法事の時の所要の眞言を明す。

淨法幢高峰觀三昧に住し給ふ。時に佛定より起つて、爾の時に一切如來の法界に遍く、無餘の衆生界を哀愍し給ふ聲を發し、此の大力大護の（六三）明妃を說て曰はく、

『南麼薩婆怛他引蘖帝弊毗也反下同一薩婆佩野微蘖帝弊二微濕嚩二合曰契弊三薩婆他引（六四）含四欠羅吃沙二合摩訶引沬麗五薩婆怛他六蘖多奔昵也二合爾入闍引帝七吽吽八怛囉二合怛囉二合九阿鉢囉二合底丁以反訶諦十莎訶』

（六五）時に一切如來と及び佛子衆と、此の明を說き已て、卽時に普く佛刹に遍くして（六六）六種に震動す。一切の菩薩、未だ曾て有らざる開敷眼を得て、諸佛の前に於て意を悅ばしむる言音を以て、而も偈を說いて言はく、

（六七）『諸佛は甚だ奇特なり、此の大力護を說き給ふ。一切の佛護持し給ふこと、城池皆固密の如し。

彼れ心を護つて住するに由て、有ゆる障をなす者、毗那夜迦等の、惡形の諸の羅刹、一切皆退き散る、眞言を念ずる力の故に。』

時に薄伽梵、廣大法界の加持を以て、卽ち是の時に於て法界胎藏三昧に住し給ふ。此の定より起て、入佛三昧耶の持明を說て曰はく、

【六二】眞淨の菩提心は萬行を指麾する幢旗にして、高く阿字本不生の第一義諦の山上に住して堅固不動なる故に、法幢高峰觀三昧と云ふ。

【六三】明とは智光、妃とは三昧の義なり、卽ち大悲胎藏三昧なり。此三昧は淨菩提心の母なり。

【六四】此眞言の中に於て含欠の兩字正く眞言の體にして、亦種子なり。以下の諸句は此二字を轉釋するなり。

【六五】十方佛土六種に震動して以て佛の本願眞實不虛なることを明す。

【六六】祕密の釋には貪瞋癡見慢疑の六根本煩惱なり、今煩惱開散して佛芽萌生する故に六種震動と云ふ。

【六七】十方の菩薩讚佛の偈なり。

『南麼三曼多勃駄喃一阿三迷二呾嚟三迷三三麼曳四莎訶』

卽ち爾の時に、一切の佛刹の一切の菩薩衆會の中に於て、此の入三昧耶の明を說き給ひ已て、諸の佛子等同じく是を聞くもの、一切の法に於て違越せず。

時に薄伽梵、復法界生の眞言を說いて曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一達摩駄睹二薩嚩合二婆嚩句痕三』

金剛薩埵の加持の眞言に曰く、

『南麼三曼多伐折囉合二赧一伐折囉引二合呾麼合二句痕二』

金剛鎧の眞言に曰く、

『南麼三曼多伐折囉合二赧一伐折囉合二迦嚩遮鈝二』

如來眼又觀の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一怛他引揭多斫吃芻合二尾也合二嚩路迦也三莎訶』

塗香の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一微輸上駄健杜引納婆合二嚩二莎訶』

華の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一摩訶引妹呾嚟也合二二毗庾合二弩蘖帝三莎訶』

燒香の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一達摩馱睹弩蘖帝二莎訶』

飲食の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一阿囉囉二迦羅羅沫隣捺娜弭沫隣捺泥三摩訶引沫履四莎訶』

燈の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一怛他二揭多喇旨合二三薩叵合上二囉儜嚩婆去婆娜三伽伽娜陁哩耶四二合莎訶』

閼伽の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一伽伽那三摩引三摩二莎訶』

如來頂相の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一伽伽那難多薩發合二囉儜二上微輸上駄達摩儞入闍引多三莎訶』

如來甲の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一伐折囉合二入嚩合二羅二微薩普合二囉許三莎訶』

如來圓光の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一入嚩合二羅引摩履儞二怛他引蘖多引喋旨三二合莎訶』

如來舌相の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一摩訶摩訶二怛他蘖多爾訶嚩二合三薩底也二合達摩鉢囉二合底丁以反悉恥二合多四莎訶」

息障品第三

爾の時に金剛手、又復毘盧遮那世尊に請ひ問うて、而も偈を說いて言さく、

「云何んが道場の時に、諸の障者を淨く除きて、
眞言行を修する人をして、能く惱害をなすこと無からしむる。
云何んが眞言を持する、云何んが彼れ果を成ずる。」

是の如く問を發し已つて、大日尊歎じて言はく、「善哉、摩訶薩、快よく是の如きの語を說く、汝が心の問ふ所に隨て、今當に悉く開き示すべし。(一)障者は自心より生じて、昔の慳悋に隨順す。彼の因を除かんが爲の故に、此の菩提心を念ずべし。善く妄分別の、心思より生ずる所を除かんには、菩提心を憶念すべし。行者諸の過を離るる、常に當に意に(二)不動摩訶薩を思惟し、而も彼の密印を結んで、能く諸の障礙を除くべし。祕密主、復聽け、散亂の風を繫ぎ除かんには、阿字を我が體となして、心に訶字門を持すべし。(三)健陀を以て地を塗て、而も大空點をなして、轉輿の方に依て圍ふに(四)捨囉梵を以てす、彼の器に大心の輪盧山を思念すべし。時時に其の上に在て、阿字の大空點

【一】 一切の內外の障碍は法を慳み財を慳む慳貪より生ず、慳貪は諸障の母なり。又妄想分別及び煩惱隨煩惱は障者の所生なり、能く之れを對治する者は、法に就て云へば菩提心、人に就て云へば不動明王なり。又此一段の明す所は調伏の法門なり。

【二】 大日如來本願力の故に無相法界の中に於て、不動明王の相を現じて眞言行者を護り

あり、先佛の宣説し給ふ所なり。能く大風を縛る。大有情諦かに聽け、行者駛き雨を除くには、囉字門を思惟す、大力火光の色なり、威猛にして熾んなる焰鬘あり。忿怒にして(五)遏伽を持せり。起る所の方分に隨て、地を治め蔭雲を興す。斷ずるに慧刀の印を以てす。昏黷して尋いで消散す。行者畏れ無き心を以て、或は(六)荊羅劍を作り、是の金剛橛を以てすれば、一切金剛に同じ。(七)復次に今當に一切の諸の障を息ることを説くべし。眞言の大猛不動大力者。(八)本曼荼羅に住すと念ずべし。行者或は中に居して、而も彼の形像は三昧の足を頂戴すと觀ずべし。彼の障當に淨く除かるべし。息滅して而も生ぜず。或は(九)羅遮迦を以て、(一〇)微妙と共に和合して、行者形像を造つて、而も以て其の身に塗れ。彼れ諸の執著の者、斯の對治に由るが故に、彼れが諸根熾然たり。疑惑の心を生ずること勿れ。乃至釋梵の尊も、我が敎に順はざるが故には、尚當に爲に焚かるべし。況んや復た餘の衆生をや。』

爾の時に金剛手、佛に白して言さく。『世尊、我れ佛の説き給ふ所の義を解るが如くば、我も亦是の如く、諸の聖尊の本曼荼羅の位に住し、威神有

給ふ、常に念ずれば自ら卽不動となつて一切の障難を離る此明王一目を閉づるは佛眼を以て明かに阿字本不生の一理を見て無二無三の義を表するなり。更に問へ。

【三】塗香なり、卽ち塗香を以て七箇の大空點をなすなり。

【四】瓦椀なり。

【五】大刀印なり。

【六】獨股金剛杵なり、卽ち佉陁羅木を以て之れを作る。之を金剛橛と云ふ。

【七】上には別して風水等の障を治する法を説く、以下惣じて一切の障を治する法を説く。

【八】三角の曼荼羅なり、此中二意あり、一は不動王壇の中に在て彼の障者の頂を蹈むと想ふと、二は行者自身不動王と成て彼の頂上を蹈むとなり。彼形像とは障者の形像な

らしむることを知ぬ。彼れ是の如く住するに由るが故に、如來の敎勅を能く隱し蔽ふこと無し。何を以ての故に、世尊、即ち一切の諸の眞言の三昧耶とは、所謂自種性に住するが故なり。是の故に眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、亦當に本位に住して諸の事業をなすべし。又祕密主、若は諸色と彼の諸の聖尊の曼荼羅位とを說かば、諸尊の形相も當に知るべし亦爾なり。是れ先佛の說き給ふ所なり。祕密主、未來世に於て、劣慧無信の衆生、是の如きの說を聞いて信受すること能はず、無慧を以ての故に疑惑を增す。彼れ唯聞くが如く、堅く住して修行せざれば、自ら損じ他を損ず。是の如きの言を作さん、彼の諸の外道に是の如き法あり、佛の所說に非ずと。彼の無智の人は當に是の如きの信解を作すべし。』

爾の時に世尊偈を說いて言はく、

『一切智の世尊は、諸法に自在を得たり、其の通達する所の如く、方便を以て衆生を度し給ふ。
是れ諸の先佛の說なり、法を求むるものを利益し給ふ、彼の愚夫は、諸佛の法相を知らず。
我れ一切の法は、所有の相皆空なりと說く。常に當に眞言に住して善く、作業を決定すべし。』

り。又三昧足とは左足なり。
【九】芥子なり。
【一〇】諸毒物なり。

(一)普通眞言藏品第四

(二)爾の時に諸の執金剛には祕密主を上首と爲し、諸の菩薩衆には普賢を上首と爲し、毘盧遮那佛を稽首したてまつり、各各の言音を以て世尊に請白して、「此の大悲藏より生ずる大曼荼羅王に於て、通達する所の(三)法界の清淨門の如くに、眞言の法句を演說し給へ」と樂欲す。

爾の時に世尊、壞すること無き法爾の加持を以て、諸の執金剛と及び菩薩とに告げて言はく、『善男子、當に通達する所の法界の如くに、衆生界を淨め除く眞實語句を說くべし。』時に普賢菩薩、卽時に(四)佛境界莊嚴三昧に住して、無礙力の眞言を說て曰く、

『南麼三曼多勃駄喃 一 三麼多 引 奴揭多 二 微囉闍達摩啀入闍多 三 摩訶 引 摩訶 引 四 莎訶』

時に彌勒菩薩、(五)發生普遍大慈三昧に住して、自心の眞言を說いて曰く、

『南麼三曼多勃駄喃 一 阿爾單若耶 二 薩婆薩埵 引 捨耶弩蘖多 三 莎訶』

爾の時に虛空藏菩薩、(六)淸淨境界三昧に入て、自心の眞言を說いて曰

【一】此の中の眞言は一切處に通じて用ゐよ、故に普通眞言と云ふ

【二】下に明す所の二の眞言能說の主、卽ち執金剛菩薩金剛天等は、皆是れ大日如來の差別智印なり、廣く衆生を利益せんと欲ふが故に、各各一門の眞言を說く。彼の一門に由て進行すれば、彼の尊に同ずることを得て成佛するなり。

【三】阿字本不生の事理不二の法界なり。

【四】阿字本不生の眞理を佛境界と云ふ、卽ち諸佛自證の境界也、無盡の德を以て自ら莊嚴す、諸佛自證の境界は無言說の故に、眉間より光明を放ちて光中に此の眞言を說くな

く、

「南麼三曼多勃馱喃一阿引迦舍三麼多引弩糵多二微質怛㘓引嚩羅達羅三莎訶」

衞の時に除一切蓋障菩薩、(七)悲力三昧に入て、眞言を說いて曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一阿去薩埵係多引毗庾合二弩糵多二怛嚂合怛嚂三莎訶」

衞の時に觀世自在菩薩、(八)普觀三昧に入て、自心と及び(九)眷屬との眞言を說て曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一薩嚩怛他引糵多嚩盧吉多二羯嚕傳麼也三囉囉囉吽若四莎訶、」

(一〇)得大勢の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一髯髯索二莎嚩合訶」

(一一)多羅尊の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一羯嚕妬嗢婆上二吠合二多羅哆㘑捉三莎訶」

大(一二)毗俱胝の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一薩婆陪也二怛囉合二散儞平吽吽薩破合二吒也一莎嚩合二

り。下之に准じて知るべし。

【五】普通は平等なり、一切衆生に對して平等に菩提の大樂を與ふる大悲を發生する三昧にして卽ち佛の大慈なり。

【六】自心の本性淸淨の境界に了達する三昧にして卽ち自證なり。

【七】大悲自在の力能く一切衆生の自心の菩提を蓋ふ障を除く三昧にして、卽ち化他なり、如來の大悲なり

【八】平等の智眼を以て遍く衆生界を觀ずる故に普觀と云ふ。

【九】觀音の眷屬は皆普觀三昧に入つて眞言を說くなり。

【一〇】煩惱所知の二障を離れて菩提心の大勢を得るなり。

【一一】多羅は度なり、遍く一切衆生を度するなり。大本の中に五百の多羅尊あり、皆觀音の眼より生ず。

訶』

(一三)白處尊の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一怛他引蘖多微灑也二三婆去吠平三鉢曇摩二合摩履儞平四莎訶』

(一四)何耶揭嚟嚩の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一吽佉引陀畔闍二薩破二合吒也三莎訶』

時に地藏菩薩、(一五)金剛不可壞行境界三昧に住して、眞言を說て曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一訶訶訶二素上怛弩三莎訶』

時に文殊師利童子、(一六)佛加持神力三昧に住して、自心の眞言を說て曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一係係俱摩囉迦二微目吃底丁以反二合鉢他悉體他以反下同多三薩麼二合囉薩麼二合囉四鉢囉二合底丁以反然五莎訶』

爾の時に金剛手、(一七)大金剛無勝三昧に住して、自心と及び眷屬との眞言を說て曰く、

『南麼三曼多伐折囉被一戰拏麼訶路灑被平二吽』

(一八)忙莽計の眞言に曰く、

【一二】額の上の皺の文を云ふ。人怒る時に額上に波文あるが如く、此菩薩大忿怒の狀を作すなり。

【一三】白とは菩提心なり、此菩提心に住するを以て白卽ち住處なり、之に住して能く諸佛を生ず、之れ卽ち觀音の母なり、蓮花部の主なり。

【一四】是は馬頭と翻す、卽ち白馬頭なり、馬の但だ水草のみを念じて餘念なきが如く、但だ三毒を噉食することのみを念ず、故に馬頭と云ふ。喩に從つて名く、卽蓮花部の明王なり。

【一五】菩提心を不可壞と云ふ、此れに依て進行するを金剛と云ふ、卽ち行なり。

【一六】經題の神變加持と同也。

【一七】等比なき諸佛の金剛智に入る三昧なり、無勝とは等比なきの義なり、卽ち大空三昧なり。

『南麼三曼多伐折囉赧一怛囇二合吒輕怛囇二合吒二合若衍底丁以反三莎訶』

(一九)金剛鎖の眞言に曰く、

『南麼三曼多伐折囉赧一滿陀滿陀也二慕吒慕吒也伐折路二合嗢婆去二合吠三薩嚩怛囉引鉢囉二合底丁以反訶諦四莎訶』

(二〇)金剛月黶の眞言に曰く、

『南麼三曼多伐折囉赧一頡唎二合吽發吒輕二莎訶』

(二一)金剛針の眞言に曰く、

『南麼三曼多伐折囉赧一薩婆達摩儞入唎吠二合達儞平二伐折囉二合素旨嚩入囉泥三莎訶』

(二二)一切持金剛の眞言に曰く、

『南麼三曼多伐折囉赧一吽吽吽二發吒發吒發吒髯髯三莎訶』

(二三)一切諸奉敎者の眞言に曰く、

『南麼三曼多伐折囉赧一係係緊質囉引也徒二紇㗚二合佷儜二合紇㗚二合佷儜二合三佉陀佉陀四鉢履布囉也五薩婆二合鉢囉二合底丁以反然六莎訶』

時に釋迦牟尼世尊、(二四)寶處三昧に入て、自心と及び眷屬との眞言を說いて曰く、

【一八】忙は母の義、莽計は多の義即ち一切の金剛の母なり。

【一九】諸佛の金剛智を以て菩提心を結護して壞せざらしむるの義なり。金剛部の眷屬は皆大金剛無勝三昧に入つて眞言を說く。

【二〇】額上に月の如きほくろあり、一切の魔を訶して降伏し退散せしむ、即ち忿怒尊なり。

【二一】金剛の慧を以て無明を穿徹して法性に通達するの意なり。

【二二】十佛刹塵數の執金剛なり。

【二三】持金剛の側に在て命を承け往來して、隨つて所作ある者なり。

【二四】三乘一乘等の無量の法寶は彼の處より出するが故に寶處三昧と云ふ。

『南麼三曼多勃馱喃 一 薩婆吃麗 合 二 奢儞入 素捺那 二 薩婆達摩嚩始多鉢囉 合 二 鉢多 三 伽伽那 三 摩 引 三 摩 四 莎訶』

(二五)毫相の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃 一 嚩囉泥 去 二 嚩囉鉢囉 合 二 鉢帝吽 三 莎訶』

(二六)一切諸佛頂の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃 一 鑁鑁鑁 二 吽吽 三 發吒發吒莎訶』

(二七)無能勝の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃 一 地入唆 合 二 地入唆 合 二 三 唆唆馹唆 合 二 馹唆 合 二 三 莎訶』

無能勝妃の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃 一 阿鉢囉 合 二 儞帝 二 若衍底 丁以反 怛捉帝 三 莎訶』

(二八)地神の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃 一 鉢嘌 合 二 體 他以反 無蓋 梅反 曳 平 合 二 莎訶』

(二九)毘紐天の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃 一 微瑟傳 合 二 吠 二 莎訶』

(三〇)嚕捺囉の眞言に曰く、

【二五】無量の功德の聚る所なり、三昧の故に女形なり。

【二六】法に八十八不共法あり、頂は尊勝の義なり、形像は釋迦に同じ、但し頂髻は菩薩の髻なり、

【二七】釋迦の化身にして無能勝は慧を表し妃は定を表す。

【二八】大菩提心の大地を表す、此亦釋迦の方便身なり

【二九】毘紐は空進の義也、即ち迦婁羅鳥に乘じて自在に空中に行くなり、即ち那羅延天也。

『南麼三曼多勃馱喃一嚕捺囉二合也莎訶』

風神の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一嚩引也吠平二娑嚩二合訶』

【三一】美音天の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一薩囉娑嚩二合底丁以反曳曳二合二莎訶』

【三二】禰哩底の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一邏吃灑二合二娑地鉢多曳三莎訶』

【三三】閻魔の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一梅無蓋反嚩娑嚩二合哆也一莎訶』

【三四】死王の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一沒㗚二合二怛也二合吠平娑嚩二合訶』

【三五】黑夜神の眞言に曰く。

『南麼三曼多勃馱喃一迦囉囉唎二合曳平二莎嚩訶』

【三六】七母等の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一忙怛哩二合弊毘也反二莎嚩二合訶』

【三〇】暴惡と譯す、是れ欲界の第六他化自在天なり
【三一】辯才天なり。
【三二】羅刹天なり、卽ち障害の義なり
【三三】斷罪と翻す。
【三四】閻魔と同體なり。
【三五】閻魔の侍后なり。
【三六】閻魔の眷屬、卽ち七姉妹なり。行疫神なり。

（三七）釋提桓因の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一 鑠吃囉二合也二 莎嚩二合訶』

（三八）嚩嚕拏龍王の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一 阿半鉢多曳平二 娑嚩訶』

梵天の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一 鉢囉二合闍鉢多曳平二 娑嚩二合訶』

日天の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一 阿儞怛夜二合耶二 娑嚩二合訶』

月天の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一 戰捺羅二合也二 娑嚩二合訶』

諸龍の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一 謎伽引設濘曳平二 娑嚩訶』

（三九）難陀と跋難陀との眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一 難徒鉢難捺瑜一 娑嚩二合訶』

（四〇）時に毘盧遮那世尊、樂欲して（四一）自の教跡の不空悉地、一切佛菩薩母、虚空眼明妃の眞言を說いて

【三七】帝釋天なり。
【三八】水天なり。
【三九】守門の二龍王なり。以上は皆釋迦の眷屬なり、皆是れ寶處三昧に住して、佛の化身を以て大悲曼荼羅を成ぜんが爲の故に、而も眞言を說くなり。
【四〇】上の諸の菩薩等眞言を說くは、各各に同類を引攝せんと欲するが故なり。今大日如來自ら明妃の眞言を說いて修行することある者は、我が如く異ることなからしめんとなり。
【四一】祕密平等の教なり。

曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一伽伽上那鉢囉落囉灑二合嬭二平伽伽那糝迷三薩婆覩嗢蘗二合多四避婆去囉三婆吠五平入嚩二合羅去那讃阿日伽難去六娑嚩二合訶七」

復次ぎに薄伽梵、一切の【四一】障を息めんが爲の故に、火生三昧に住して、此の大摧障聖者不動主の眞言を說て曰く、

「南麼三曼多伐折囉𧹞一戰拏摩訶路灑儜二上薩破吒也三鈝怛囉二合迦四悍引曼引」

復次に降【四二】三世の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折囉𧹞一訶訶訶二微薩麼合曳三薩婆怛他引揭多微灑也三婆嚩四怛囉二合路枳也二合微若也五鈝若六莎訶」

【四四】諸の尊聞の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一係睹鉢囉二合底丁以反也二微蘗多三羯摩涅八闍多四鈝」

諸の緣覺の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一嚩莎訶」

普一切佛菩薩心眞言に曰く、

【四一】障に二あり、一は內障、即ち自心より生ず、其類甚多し。二は外障、即ち外事より生ず、亦甚多し。皆悉く摧滅す故に息と云ふ。

【四二】三世とは貪瞋癡の三毒なり、亦三界なり、三界主の身を現じて、三界の諸天を降伏し、亦三毒を降伏するなり。初發心より守護し增長して菩提心を退せず佛果を成ぜしむるは不動明王なり。世間難調の衆生を降伏するに降三世明王なり、皆是れ法佛の三昧なり。

【四四】大日如來大悲願力を以て衆生を利せんが爲に、三乘の中に於て三乘の眞言を現じ玉ふ、若衆生ありて此法を以て道に入るべき者には此門より大悲胎藏曼茶羅に入らしむ。

『南麼三曼多勃馱喃一薩婆勃馱菩提薩埵二訶㗚捺耶三寗夜二合吠奢儞四南麼薩婆尾泥五去莎訶』

普世天等の諸の心眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一路迦路迦羯囉也二薩婆提婆那伽藥吃沙二合健達婆阿蘇囉揭嚕茶緊捺囉摩護囉伽儞三訶㗚二合捺耶四寗夜二合羯履灑二合也三微質怛囉二合瞿底丁以反六莎訶』

一切諸佛の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一薩婆他二微麼底三微枳囉儜四達摩馱睹㗚入闍多五參參訶六莎訶』

(四五) 不可越守護門者の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一訥囉馱二合履沙二合摩訶路灑儜二上佉那也薩鑁平引怛他櫱多然矩嚕三莎訶』

相向守護門者の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一係摩訶鉢囉二合戰拏阿毗目佉三蘖㗚二合訶拏二合佉那耶四緊質囉也徙五三麼耶麼拏娑麼二合囉六莎訶』

(四六) 結大界の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一薩婆怛囉二合努蘖帝二滿馱也徙瞞引三摩訶三摩耶㗚入闍去帝四娑麼二合囉嬭五阿鉢囉二合底丁以反訶諦六馱迦馱迦七折囉折囉八滿馱滿馱九捺奢儞羶十薩婆怛他引蘖

【四五】不可越と次の相向とは曼荼羅第一重の西門に在て之れを守り、又教命する所あれば必ず之れを行ず。

【四六】持眞言行者、結界し守護せざるを以ての故に、能く法事を破して持誦の人を損すべきを以ての故に結界の法を設くるなり。結界に由るが故に一切破壞すること能はざるなり。

多跢壤帝十一鉢囉二合縛囉達摩馱微若曳平十二薄伽嚩底丁以反十三微矩麗微矩麗十四嚨嚕補履十五毗(四七)矩履十六莎訶』

(四八)菩提の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一阿上』

行の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一阿去』

成菩提の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一暗』

涅槃の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一噁』

降三世の眞言に曰く、

『南麼三曼多伐折囉赧一訶去』

不動尊の眞言に曰く、

『南麼三曼多伐折囉赧一悍』

除蓋障の眞言に曰く、

【四七】以上の眞言は界の體相を說く。

【四八】以下は種子の字を說く、一字より能く多を生ずる故に種子と名く。

『南麼三曼多勃駄喃一阿去急呼』

觀自在の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一娑上』

金剛手の眞言に曰く、

『南麼三曼多伐折囉赦一𠹕急呼』

妙吉祥の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一𠹕』

虛空眼の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一嚴輕呼』

法界の眞言に曰く。

『南麼三曼多勃駄喃一𠸪』

大勤勇の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一欠平』

水自在の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一髯去』

多羅尊の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一䭾二」

毗俱胝の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一勃嚕二合」

得大勢の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一參」

白處尊の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一半」

何耶揭哩婆の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一含」

耶輸陀羅の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一閻」

寶掌の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一參」

光網の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一髯』

釋迦牟尼の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一婆上』

三佛頂の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一𤙖吒嚂』

白傘佛頂の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一藍』

勝佛頂の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一苫』

最勝佛頂の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一賜』

火聚佛頂の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一怛嚕二合』

除障佛頂の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一訶啉二合』

世明妃の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一躭含半含闇』

無能勝の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一餅』

地神の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一微』

髻設尼の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一枳履』

鄔波髻設尼の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一儞履』

質多童子の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一弭履』

財慧童子の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一係履』

除疑怪の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一訶娑難』

施一切衆生無畏の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一囉娑難』

除一切惡趣の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一特懵(二合)娑難』

哀愍慧の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一微訶娑難』

大慈生の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一諂(勅滅反)』

大悲纏の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一閻』

除一切熱惱の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一縊』

不思議慧の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一汙』

寶處の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一難上』

寶手の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一衫』

持地の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一唅』

復次の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一糝輕呼鼻聲』

寶印手の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一泛普含反』

堅固意の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一擮』

虛空無垢の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃駄喃一含』

虛空慧の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一㘑』

清淨慧の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一藥丹都痕反』

行慧の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一地藍』

安慧の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一件』

諸奉教者の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一地室唎合二唅沒嚂合二』

諸菩薩所說の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一吃沙合二拏囉闍劒』

淨居天の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一滿弩囉麽二達摩三婆去嚩三微婆上嚩迦那四三三五莎訶』

羅刹娑の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一吃嚂合二計履』

諸茶吉尼の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一訶唎二合訶』

諸藥叉女の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一藥吃叉二合尾儞夜二合達嚟』

諸毗舍遮の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一比旨比旨』

諸部多の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一喁縊喁伊上懵散寧去』

諸阿修羅の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一囉吒知姧反囉吒同上特懵鈮沒囉波囉二合』

諸摩睺羅伽の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一蘖囉藍尾囉藍二』

諸緊那羅の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一訶散難微訶散難』

諸人の眞言に曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一壹車去鉢嚂二麼弩輕麼曳迷三莎訶』

祕密主、是れ等の一切の眞言を、我れ已に宣說せり。是の中の一切の眞言の心は、汝當に諦に聽くべし、所謂阿字門なり。此の一切諸の眞言の心を念ずるを最無上と爲す。是れ一切の眞言の住する所なり。此の眞言に於て而も決定を得べし。』

卷の第三

世間成就品第五

爾の時に世尊、復た執金剛祕密主に告げて、而も偈を說いて言はく、

『眞言教法の如くすれば、〔一〕彼の果に於て成就す。當に〔二〕字と字とに相應すべし。〔三〕句と句とも亦是の如し。

〔四〕心想を作して念誦して、善く一落叉に住せよ。初の字は菩提心なり。第二をば名けて聲と爲す。句を想ふを本尊と爲す。而も自處に於て作すべし。第三の句は當に知るべし、即ち諸佛の勝句なり。

行者彼の極めて圓淨なる月輪に住すと觀じて、中に於て諦誠に諸の字を想うて次第の如くす。中に字句等を置いて、而も想うて其の命を淨む。

命とは所謂風なり。念は出入の息に隨ふべし。〔五〕彼等を淨め除き已て、

【一】無上菩提の妙果なり。

【二】前の普通眞言藏品に說く所の眞言の一一の字を云ふ。一一の字皆實相に入る門なり。眞言を念誦するに一一の實相と相應すべしとなり。

【三】眞言の諸字合して句と成る、此句は正く實相の體を全す。故に念誦の時は句と相應すべしと云ふ。

【四】心をして專注して一緣不亂に字字句句相應するを云ふ。

【五】上來は心想と聲と句と命と息との四種念誦を明し畢て、

先持誦の法を作せ。

善く眞言に住するものは、次に一月念誦すべし。行者前方便に、一一の句に通達す。

諸佛大名稱、此の先受持を說き給ふ。（六）次に當に所有に隨て、塗香と華等とを奉り、正覺を成ぜんが爲の故に、自の菩提に廻向すべし。

是の如く兩月に於て、眞言當に無畏なるべし。（七）次に此の月を滿し已て、行者持誦に入るべし。

（八）山峰と或は（九）牛欄と、及び諸の（一〇）河潬等と、（一一）四衢道と（一二）一室と、（一三）神室と（一四）大天室となり。

彼の曼荼羅處は、悉く（一五）金剛宮の如くせよ。是の處にして而も（一六）結護し、行者成就を作せ。

卽ち中夜の分を以てし、或は日出の時に於て、智者當に知るべし、是の如きの相現ずることあり。

吽聲あり或は鼓の音あり、若は復た地震ひ動き、及び虛空の中に、意を悅ばしむる言辭あるを聞く。

以下は三月念誦を說く。三月念誦とは、先受持法を一月とし、六種供養等を二月とし、能く所願を滿ずるを第三月とす。

【六】第二月念誦。

【七】第三月念誦。

【八】二の事皆理と相應す、菩提心高く諸法の上に出で不動なるを標して山峰と云ふ。

【九】牛の屎尿は能く穢れを却けて障を除き、清淨の事を成就す故に欄と云ふ。菩提心の妄想分別を防ぎ諸の心地を淨むることを表す。

【一〇】生死と涅槃との兩河なり。菩提心は二河の中間に在て中道の境なる義を表す。

【一一】苦集滅道の四諦なり。

【一二】如如の一行。

【一三】不思議の妙用。

【一四】涅槃の室なり、此等の功德を以て菩提自在の力を成就

知るべし、是の如きの相あらば、悉地總て意の如し。
諸佛兩足尊、彼の果を宣說し給ふ。是の眞言行に住すれば、必定して
當に成佛すべし。
一切の種類に應じて、常に眞言を念持すべし。古佛大仙の說なり。故
に當に憶念すべし。』

するなり。
【一五】 三股金剛杵を以て周匝して相接するを云ふ。
【一六】 降三世と不動とを以て加持するなり。

悉地出現品第六

爾の時世尊、復諸の大衆會を觀じて、一切の願を滿足せしめんと欲ふが爲の故に、(一)復た三世の無量門に於て、決定智圓滿法句を說き給ふ。

『(二)虛空は垢無く自性無ければ、能く種種の諸の巧なる智を授く。本より自性の常に空なるに由るが故に、緣起甚だ深くして見るべきこと難し。(三)長き恒の時に於て殊に勝進して、念に隨て上無き果を施し與ふ。譬へば一切趣の宮室は、虛空に依ると雖も著行無きが如く、此の淸淨の法も亦是の如し。三有をして餘り無くして淸淨にして生ず。(四)昔の勝生嚴は此れを修するが故に、一切如來の行を有つことを得たり。他句の有に非ず得べきこと難し。世の遍明を作すこと世尊の如し。

(五)極淸淨修行の法を說き給ふ。深く廣くして盡ること無く分別を離れたり。』

(六)爾の時に毘盧遮那世尊は是の偈を說き已り給ひ、金剛手等の諸の大衆

【一】此二句は三世無量決定智門の句を明す、一念に三世の中に於て無量無盡なる智門を說く。卽ち所入の定體なり。

【二】已下の十六句は此品の體なり、卽ち十六大菩薩を表す。中に於て初の四句に心體を明し、次の六句に心相を明し、次の四句は心用を明し、後の二句は歎德の相なり。文に臨で知るべし。

【三】以下の六句心相を明す。

【四】以下の四句心用を明す。勝生嚴とは過去の菩薩を云ふ卽ち是れ光行者なり。

【五】以下の二句は歎德なり。

【六】此一段は法界神力悉地流出の句を明す。

會を觀察して、執金剛に告げ言はく、『善男子、各各に當に法界神力の悉地を流出する句を現ずべし。若し諸の衆生、是の如きの法を見ば、歡喜踊躍して安樂の住を得べし。』是の如く說き已つて、諸の執金剛、毘盧遮那世尊の爲に禮を作し、是の如く法主の敎勅し給ふ所に依る。復佛に請うて言さく、『唯願くは世尊、我等を哀れみ愍んで、悉地を流出する句を示し現はし給へ。何を以ての故に、尊者薄伽梵の前に於て、而も自ら通達する所の法を宣べ示すは、是れ宜しき所に非ず。善哉、世尊、唯願くは、未來の衆生を利益し安樂ならしめ給ふ故に。』時に薄伽梵毘盧遮那、一切の諸の執金剛に告げ言はく、『善哉、善哉、善男子、如來の說き給ふ所の法の、毘奈耶一法を稱讃す、所謂羞あるなり。若し羞ある善男子善女人、是の如きの法を見ば、速に二つの事を生ず。謂く作すべからざる所を作さざると、衆に稱讃せらるるとなり。復た二つの事あり、謂く未だ至らざる所に至らしむると、佛菩薩と處を同うすることを得るとなり。復二つの事あり、謂く尸羅に住すると、人天に生まるとなり。善哉、諦に聽き善く思ひ之れを念ずべし。我當に眞言の成就を流出する相應の句を宣說すべし。諸の流出相應の句は、眞言門に菩提を修する諸の菩薩、速に是の中に於て當に眞言の悉地を得べし。若は行者曼荼羅を見奉りて、尊に印可せられ、眞語を成就し、菩提心を發し、深く信じ、慈悲あつて慳悋あることなし、調伏に住し善く緣より生ずる所を分別し、禁戒を受持し、善く衆學に住し、巧なる方便を具し、勇健にして時と非時とを知り、好んで惠捨を行じ、心に怖れ畏るること無く、眞言行法を勤め修し、眞言の實義に

通達し、常に坐禪を樂ひ、成就を作さんと樂ふ。(七)祕密主、譬へば欲界に(八)自在悅滿意の明あり。乃至一切の欲處の天子、此に於て迷ひ醉うて、衆妙の雜類の戲れたる笑を出し、及び種種の雜類の受用遍受用を現して、自の變化する所を他化自在天等に授け與へ、而も亦自ら之れを受用するが如く、又善男子、(九)摩醯首羅天の勝意生の明あり、能く三千大千世界の衆生の利益を作し、一切の受用遍受用を化して、淨居の諸天に授け與へ、亦復自ら之れを受用するが如く、又幻術の眞言の能く種種の園林人物を現ずるが如く、阿修羅の眞言の幻化の事を現ずるが如く、世の咒術の毒及び寒熱等を攝し、摩怛哩神の眞言の能く衆生の疾疫災癘を作し、及び世間の咒術の衆毒、及び寒熱等を攝除し能く熾なる火を變じて而も清涼を生ずるが如し。是の故に善男子、當に是の如きの流出の句の、眞言の威德を信ずべし。此の眞言の威德は、眞言の中より出るにも非ず、亦衆生に入るにもあらず。持誦者の處に於て、得べきこと有るにもあらず、善男子眞言加持力の故に、(一〇)法爾にして而も生じ、過ぎ越ゆる所無し、三昧を越えざるを以ての故に、甚深不思議の緣より生ずる理なるが故に。是の故に善男子、當に不思議の法性に隨順し通達して、常に眞言道を斷絕せざるべし。』

【七】以下眞言成就の相を說く。且く世事を取て喩となして、諸法實相の中に種種の事相あることを示すなり。

【八】第六他化自在天、卽ち伊舍那なり。此天自然の報力を以ての故に此眞言を成就す。明とは眞言なり。

【九】色界第四禪天なり。意生とは變易自在なるを云ふ。

【一〇】悉地の體は阿字本不生にして常住不變なる故に法爾なり。此不思議の果は眞言の加持力に由て自ら生起すべし。

（一一）爾の時に世尊、復た（一二）三世無礙力の依たる、（一三）如來加持不思議力の依たる、莊嚴清淨藏三昧に住し給ふ。即時に世尊（一四）三摩鉢底の中より、無盡界の無盡の語表を出し給ふ。法界力と無等力と正等覺の信解とに依て、（一五）一の音聲を以て（一六）四處に流出し給ふなり。普く一切法界に遍く虛空と等しうして、至らざる所なし。眞言に曰く、

（一七）「南麼薩婆怛他引蘗帝弊反一微濕嚩二目契弊毗也薩婆他三（一七）阿阿引闇噁四」

正等覺の心、是れより普く遍ず。即時に一切法界の諸の聲聞、正等覺幖幟の音より而も互に（一八）聲を出す。諸の菩薩是れを聞き已つて未だ曾て有らざる（一九）開敷眼を得、微妙の言音を發して、一切智離熱者の前に於て、而も頌を説いて曰く。

「奇哉、眞言行、能く廣大の智を具す、若し（二〇）此を遍く布する者は、佛兩足尊と成る。是の故に勤て精進して、諸佛の語心に於て、常に無間の修を作し、心を淨め我を離るべし。

【一一】此下は如來の自證の大智化他大悲の所依たる莊嚴清淨藏三昧を明す。此三昧は如來衆德の根本にして、無盡莊嚴毫も闕滅あることなき故に清淨莊嚴と云ふなり。

【一二】自證の大智。

【一三】化他の大悲。

【一四】此れを等至と譯す、即ち定なり。

【一五】本有絕對の總阿なり。

【一六】阿阿引暗噁の四字なり、次の如く東南西北の四處なり。

【一七】此の四字は大日經中正宗の體なり。一切の祕密藏は皆此れより生ず、即ち大日如來の心なり。

【一八】聲を出す處を聲門と云ふ。即ち阿字なり、即ち四字なり。一字より二字を生じ、二字より四字を出し、四字より八字を生じ、八字より十六字を生ず。是の如く展轉無窮なり。

【一九】蓮花の未だ開けざるが日光に因て開くが如く、此の菩薩の心眼も亦備り、佛の加持に因て開くなり

【二〇】即ち此眞言の字を以て普く一切世界に遍するなり。即ち阿字門なり。

爾の時に薄伽梵、復此の法句を説き給ふ。

正等覺心に於て、成就を作さんとする者は、(二一)園苑と(二二)僧房とに於てし、若は(二三)巖窟の中に在てし、

(二四)或は意に樂ふ所の處にして、彼の菩提心を觀じて、乃ち初安住に至れば、疑慮の意を生せず。

隨て彼の一心を取て、(二五)心を以て心に置け、極淨の句を證して無垢なり。安ずること不動にして、分別せざること鏡の如し、現前すること甚だ微細なり。

若し彼常に觀察し、修習して而も相應すれば、乃至本所尊と、自身との像皆現ず。

(二六)第二正覺句、(二七)鏡曼荼羅の、大蓮華王座に於て、深邃にして三昧に住す。

總持の髮髻冠にして、圍り繞るに無量の光あり。妄執分別を離れて、本寂なること虚空の如し。

彼の中に於て思惟して、攝意の念誦を作せ。(二八)一月に等引を修め、持して一落叉を滿せよ。

【二一】大菩提心を表す。此處宜うして道を修するに第一の上處なり

【二二】寺なり。大悲を表す。菩薩は常に大悲を住處とす

【二三】是れ甚深の禪定なり。菩提心の獅子王其中に住す

【二四】六度四攝の行等を表す。

【二五】本尊の眞言の心、卽阿字を以て自心の上に安くなり。

【二六】前には菩提心を觀じ、今は本尊の形を觀す

【二七】幽邃の義を示す。

【二八】一月は初地菩提心爲因の位なり。二月は二地以上大悲爲根なり。他の月(第三月)は方便爲究竟なり。此中には具に三句の行法を説く。

是れを最初の月の、持眞言の法則と爲す。
次に第二月に於て、塗香と華と等を奉つて、而も以て種種の衆生類を饒益することを作せ。
又復他の月に於て、諸の利養を捨棄すべし。時に彼瑜伽に於て、思惟すること自在なり。
一切に障なくして、諸の群生を安樂ならしめんと願へ。
如來の稱讃し給ふ所の、圓果を成ぜんと樂欲し、或は一切有情の衆の希願を滿足す。
理に應じて障蓋無く、而も是の攀緣を生ず。傍生相ひ噉食する、所有の苦み永く除き、
常に諸の鬼界をして、飮食皆充滿せしめ、地獄の中に苦を受くる、種種の諸の楚毒、當に願くは
速に除滅すべし。
我が功德を以ての故に、及び餘の無量の門、數數心に思惟して、廣大の悲愍を發し、
(二九)三種の加持の句を以て、一切を想念して、心に眞言を誦持す。(三〇)我が功德力と、如來の加持力と、
及び法界力とを以て、衆生界に周遍して、諸の念じ求むる義利、悉く皆之れを饒益す。
彼れ一切理に如へば、念ふ所皆成就す。」
(三一)是に於て薄伽梵、卽ち爾の時に於て、虛空等力虛空藏轉の明妃を說いて曰く、

【二九】次の三力加持を云ふ。
【三〇】三力なり
【三一】一切所願を成就せしめん爲に此眞言を說く。

「一南麼薩婆怛他 引 蘖帝弊 反一 微濕嚩 二合 目契弊 反二 薩婆他 三 欠 四 嗢弩蘖帝薩叵 二合 囉係門 五 伽伽娜劍 六 莎訶」

此を持すること〔三一〕三たび轉ずれば、彼の所生に隨て、善願皆な亦た成就す。

〔三二〕「行人滿月に於て、次に作持誦に入るべし。

山峰と牛欄の中と、寒林と或は河灘と、四衢と獨樹下と、忙怛哩天室となり。

一切金剛の色にせよ、嚴淨にして〔三四〕金剛に同じ、彼の中の諸の障者、攝伏せられて心迷亂せん。

〔三五〕四方相ひ周帀せよ、一門及び通道あり、金剛互に連り屬き、金剛結で相應ぜよ。

門門に二つの守護あり、不可越と相向となり。手を擬して而かも指を上げ、朱目にして奮怒の形なり。

慇懃に隅角に、輸羅焰光の印を畫せよ。中に妙なる金剛の座あり、方位正しく相ひ直つべし。

其の上に大蓮花あり、八葉にして鬚蘂敷けたり、當に金剛手の〔三六〕金剛の慧印を結ぶべし。

〔三一〕此の眞言を誦すること三遍すれば所願皆成就す。

〔三二〕先承事供養已て白月十五日に於て作成就法の念誦をなすことを明す。

〔三四〕其色と其體と其名との三金剛に同じ。

〔三五〕壇は正しく四方に作り、金剛印も亦壇の四方面に當て作るなり、金剛印とは三股金剛なり。

〔三六〕五股金剛の印を云ふ。

一切の佛を稽首し、數數堅く誓願して、應に是の處を護持し、及び諸の藥物を淨むべし。此の夜に於て持誦すれば、清淨にして障礙なし。

或は中夜分に於て、或は日出の時に於て、彼の藥物當に轉じて、(三七)圓光普く暉焰すべし。

眞言者自ら取て、大空に遊歩し、壽に住して大威德あり、生死に於て自在あり。

世界の頂に行いて、種種の色身を現ず。具德吉祥者、展轉して而も供養す。

眞言の所成物、是を名けて悉地と爲す。以て藥物を分別して、無分別を成就す。」

(三八)祕密主、一切世界の、諸の現在等の如來應正等覺は、方便波羅蜜に通達し給へり。彼の如來は、一切の分別は本性空なりと知れども、方便波羅蜜の力を以ての故に、無爲に於て、有爲を以て表と爲す、展轉相應して、而も衆生の爲に示し現して法界に遍ず。法を見て安樂に住し、歡喜の心を發すことを得しめ、或は長壽を得、五欲嬉戲して而も自ら娛樂し、佛世尊の爲に供養を作す、是の如きの句を證すること、一切世人は信ずること能はざる所なり。如來此の義利を見給

【三七】成就の相なり。自ら上中下成の別あり、上成は初夜に煖氣生じ、中夜に烟起り、五更に炎出づ、中成は炎の出づることなし、下成は唯煖氣の生ずるのみなり。

【三八】此の下は、道場を建立すると藥物等との深旨を說く。法爾本性の無爲の性は有爲に異らざるを以て、能く此有爲緣起の法を以て、無爲常住の果を成ずるなり。無爲より有爲を生じ、有爲を以て無爲の果を成ずるなり。

ふが故に、歡喜の心を以て、此の菩薩の眞言行道の次第法則を說き給ふ。何を以ての故に、無量劫に於て、勤め求めて諸の苦行を修すれども得る能はざる所なり。而るに眞言門に道を行ずる、諸の菩薩は、卽ち此の生に於て、而も之れを獲得す。復次に祕密主、眞言門に、菩薩の行を修する菩薩は、是の如く（三九）計都と、揭伽と、傘蓋と、履屣と、眞陀摩尼と、安膳那藥と、盧遮那等とを以て、三落叉を持して而も成就を作し、亦悉地を得。（四〇）祕密主、若し方便を具する、善男子と善女人とは、樂ひ求むる所に隨つて、而も所作あれば、彼れ唯心自在にして而も成就を得。祕密主、諸の因果を樂欲するものは、祕密主、彼の愚夫の能く眞言と諸の眞言の相とを知るに非ず。何を以ての故に、

「因は作者に非ず、彼の果も則ち不生なりと說く。此の因は因すら尙空なり。云何んが果あらん。

當に知るべし眞言の果は、悉く因業を離れたり、乃至身に無相三摩地を證觸するとき、眞言者は當に知るべし、悉地は心より生ずることを。」

爾の時に金剛手、佛に白して言さく、『世尊、唯願くは、復此の（四一）正等覺の句、悉地成就の句を說き給へ。諸の此の法を見る善男子と、善女人等とは、心に歡喜を得、安樂を受けて住し、法界を害せ

【三九】計都は幢、揭伽は刀、眞陀摩尼は如意寶、安膳那藥は龍腦の上品なり。

【四〇】此より上は藥力の成就を明し、以下は藥力の成就因緣を離れて法爾自然なる義を說く。

【四一】上に說く所の阿の一字より四字を生ずるを正等覺の句と云ふ、此正等覺の句に於て悉地成就する法を問ふなり。四字は卽四智にして佛心の句なり、故に正等覺句と云ふ。

ず。何を以ての故に、世尊、法界とは、一切如來應正等覺なり、說いて卽ち不思議界と名く。是の故に世尊、眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、是の法界に通達することを得、分析し破壞すべからず。』是の如く說き已て、世尊、執金剛祕密主に告げ言はく、『善哉善哉、祕密主、汝復た善哉、能く如來に是の如きの義を問ひたてまつる。汝當に諦に聽き善く之れを思ひ念ずべし、吾今演說せん』と。祕密主の言さく、『是の如し、世尊、願くは聞かんと欲す。』佛、祕密主に告げ言はく、(四一)『阿字門を以て而も成就を作すべし。若は僧の所住の處にあり、若は山窟の中にし、或は淨室に於てすべし。阿字を以て遍く一切の支分に布して、(四二)三落叉を持すべし。次に滿月に於て、其所有を盡して以て供養すべし。乃至(四四)普賢菩薩と、文殊師利と、執金剛等と、或は餘の聖天現前し、頂を摩でて唱へて言く、「善哉行者」と。當に稽首して禮を作すべし。閼伽水を奉れ。卽時に菩提心を忘れざる三昧を得。又是の如く身心輕安なるを以て、而も之れを誦習すれば、當に隨生と心淸淨と身淸淨とを得べし。(四五)耳の上に於て之れを持すれば、當に耳根淸淨なることを得べし。阿字門を以て(四六)出入の息と作し、三時に思惟せよ。行者爾の時に能く持すれば、壽命長劫にして世に住す。(四七)囉闍等に愛敬せられんと願は

【四一】阿は大日の種子なる故正等覺の句なり。

【四二】本尊と種子の字と圓明とを觀ずるを三落叉と云ふ。落叉は見の義なり。

【四四】見る時に於て上中下成の相の別あり、若し親く見ること分明にして目前に對すると異ることなきを上成とす、若し但し覺法等の聲のみを聞くを中成とす、夢に見る等は下成なり

【四五】阿字を耳根に想ひ布して眞言を念誦すれば、卽ち耳根淸淨を得るなり。餘は准じて知るべし。

ば、即ち（四八）訶字門を以て、度すべき所の者を作て、（四九）鉢頭摩華を授け與へ、自ら（五〇）商佉を持して、而も互に相觀て即ち歡喜を生ずべし。』

（五一）爾の時に毘盧遮那世尊、復一切の大會を觀て、執金剛祕密主に告げ言はく、『金剛手、諸の如來の意より生じて業戲行舞をなすことあり。廣く品類を演べ、四界を攝持して、心王に安住し、虚空に等同なり。廣大の（五二）見と非見との果を成就し、一切の聲聞と及び辟支佛と諸の菩薩との位を出生し、眞言門に修行する諸の菩薩をして一切の希願皆な悉く滿足して、種種の業を具して無量の衆生を利益せしむ。汝當に諦に聽き善く之れを思念すべし。吾今、演說せん。祕密主、云何んが行舞して、一切の廣大の成壞の果を作し、持眞言者一切を親しく證するや。』爾の時に世尊、偈を說いて曰はく。

『行者次第の如く、先づ自の眞實を作せ。前の如く法に依て住し、正しく（五三）如來を思念すべし。

阿字を自體と爲し、幷に大空點を置け。端嚴にして遍く金色なり。四角に（五四）金剛の標をなせ。

彼の中に於て、（五五）一切處尊佛を思念すべし。是れ諸の正等覺、自の眞實相を說く。

修行して疑慮せざれば、自の眞實の相生ず。

【四六】祕密の數息觀なり。

【四七】王なり。

【四八】訶字は因不可得の故に法身法爾の德、商佉は權智說法の德、蓮花は大悲憐愍の德なり

【四九】蓮花なり。

【五〇】螺貝なり。

【五一】復た普現色身三昧類に隨て種種の應現を爲し衆生を度することを明す。

【五二】見は世間の果、非見は出世間の果なり。

【五三】阿字を如來と云ふ。

【五四】三股金剛杵なり。

【五五】大日如來の形。

當に世間の一切衆の爲に、利樂を得しめ、廣大の希有を具し、如幻の句に住すべし。
無始の時より蓄積の、無智諸有の垢は、行者等引を成ずるを以て、一切皆な消除す。
若し彼の心の、無上菩提心を觀ずれば、眞言の業を持するが故に、淨と非淨との果に於て。理に
應じて常に染無し、蓮の淤泥を出るが如し。
何に況んや自體に於て、人中尊と成ることを得るをや。』

(五六) 爾の時に毗盧遮那世尊、又復降伏四魔金剛戲三昧に住して、四魔を降伏し、六趣を解脫して、一切智智を滿足する、金剛の字句を說き給ふ。

(五七)『南麼三曼多勃馱喃一阿(去急呼) 味囉吽欠(帶欠字畢呼之)』

時に金剛手祕密主等の諸の執金剛と、普賢等の諸の菩薩と、及び一切の大衆と、未だ曾て有らざる開敷眼を得、一切の薩婆若を稽首して、而も偈を說いて言く、

『此は諸佛と菩薩、救世との諸の庫藏なり。
是に由て一切の佛と、菩薩救世者と、及び因緣覺と、聲聞害煩惱と、
能く行く所の地に遍じて、種種の神通を起し、彼無上智と、正覺無上智とを得。
是の故に願くは、廣く此の教の諸の方便と、及び布想等との、種種の衆の事業を說き給へ。

【五六】以下五字の祕密眞言を說く。
【五七】本經に三千五百頌あり、唯此の五字の義を說く、一切の教法皆五字の功德なり。

諸の大乘無上の眞言行を志し求むるもの、法を見て安住するもの、當に歡喜住を得べし。

是の如きの偈を說き已つて、大日世尊の言はく、「普く皆諦に聽き、一心にして等引に住すべし。

(五八)大金剛地際を以て、時に下身を加持す、此の法を說かんが爲の故に、而も菩提座を現ず。

最勝の阿字の句、大因陀羅輪なり、當に知るべし內外等しく、金剛曼荼羅なり。

中に一切を思惟す、(五九)說いて瑜伽の座と名く。(六〇)阿字は第一命なり、是を引攝の句と爲す。

(六一)常に大空點を安ずべし、能く攝して諸の果を授く、行者一月に於て、金剛慧印を結で、三時に持誦を作せ。

無智の城を摧き毀ち、不動堅固なることを得て、天、修羅を壞ること莫し、乃至自の意に隨つて、增益の事成就す。

行者一切常に、曼荼羅の中に、金色光明の身を作れ、上に髮髻冠を持す。

正覺三昧に住せり、大金剛句と名く、金剛と蓮花と刀と、素鵝と及び金と地と、

眞陀末尼寶と、是等の衆の器物を、大因陀羅に觀じて、而も諸の悉地を作すべし。

(六二)今攝持の法を說かん、一切一心に聽くべし。行者一緣に、八峯の彌盧山を想へ、上に妙なる

【五八】阿字を說く、下身とは卽菩提心なり。

【五九】以上は初に無點の阿字を座とすることを明し竟る。

【六〇】次に長聲の阿を說く、卽ち行なり、攝召の義なり。

【六一】次に暗字を說く、卽ち菩薩の果なり、能破の義なり。

蓮花を觀ずべし。
金剛智印を立てたり、瑜伽者上に於て、字門と威焔の光あり、而も用つて其の頂に置け。
安住して傾き動ぜず、百轉する所持の藥を、行者之れを服すべし、先世の業より生ずる疾、(六三)是等悉く除き癒す。
佛子復た聽くべし、(六四)第一の嚩字門は、雪と乳と商佉との色なり。
而も霧の中より、鮮かなる白蓮花の臺を起して、而も彼の中に於て住す。甚深寂然の定なり、秋の夕の素き月の光あり。
是の如きの曼荼羅は、諸佛希有なりと說き給ふ。思惟するに純白を以てし、輪圓九重を成ず。
霏霧の中に住して、一切の熱惱を除く。淨乳は珠曼と、水精と月の光との如くにして、普遍して而も流れ注ぎ、一切の處に充ち滿てり。
行者心に思惟すれば、諸の障毒を出離す。是の如く圓き壇に於て、等引して成就を作せ。
乳と酪と生と熟との酥と、頗胝迦と珠曼と、藕と水と等の衆の物、次第に悉地を成ず。
當に無量壽を得べし、殊特の身を應現し、一切の患を除息し、天と人と咸く恭ひ敬ふ。
多聞にして總持を成じ、善慧にして淨無垢なり。斯に由て成就を作せ、速に悉地の果に登る。

【六二】 次に嚩字を說く、嚩は等觀の義、即ち涅槃なり。上に說く所の四阿は皆黃金色方形に觀ずべし。

【六三】 以上の四阿は一阿を以て惣體とする故に金剛曼荼羅なり。增益なり。

【六四】 水輪曼荼羅を明す。純白色圓形にして息災なり。

是を寂災者の、吉祥曼荼羅と名く、第一攝持の相は、安ずるに大(六五)空點を以てす。

(六六)囉字は勝眞實なり、佛火中の上と說き給ふ、所有の衆の罪業、應に無擇の報を受くべし。瑜祇善修のもの、等引して皆消除す、住する所の三角の形、悅意にして遍く彤赤なり。

寂然にして焰鬘を周らし、三角を其の心に在け、相應して彼の中に囉字大空點を觀ずべし。

智者瑜伽に如ひぬれば、此を以て衆の事を成ず。日曜の諸の眷屬と、及び一切の火を作すと、攝取と怨對を發すと、衆の支分を消枯すると、是等作すべき所は、皆智火輪を於てす。

(六七)訶字は第一實なり、風輪の生ずる所なり、及與因業と果との、諸の種子增長す。彼の一切を摧き壞するには、幷に大空點を以てす、今彼の色像を說かん。深く玄くして大威德あり、暴く怒れる形を示し現はし、焰鬘普く周遍して、曼荼羅位に住す。

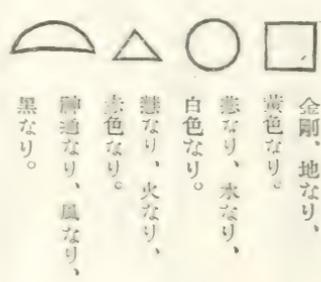
智者眉の間に深く靑き半月輪を觀ぜよ、吹て幢幡を動すの相あり、而も彼の中に於て、最勝の訶字門を想へ。

【六五】點を安ずれば病患等の內外の諸毒を除て速に成就す。

【六六】火輪の曼荼羅を明す。赤色三角形。調伏なり、能く煩惱業苦の三道を燒き滅する故に卽ち不動明王なり。

【六七】風輪曼荼羅を說く、黑色半月形。亦調伏相應の尊なりと云ふ。

彼の曼荼羅に住して、應しき所の事を成就するとき、一切の義利を作し、諸の衆生に應現す。
此の身を捨てずして、神境通を逮得し、大空位に遊歩して、而も身秘密を成ず。
天耳と眼との根淨なり、能く深密處を開く、此の一心の壇に住して、而も衆の事業を成ず。
菩薩大名稱、初て菩提場に坐して、魔軍衆を降伏し給ふ。
（六八）諸の因得べからず、因に性無ければ果も無し、是の如きの業も不生なり、
彼の三に性無きが故に、而も空の智慧を得。
大德正遍知、彼の色を宣說し給ふ。
佉字及び空點は、尊勝にして虛空の空なり。
兼て慧刀印を持ちぬれば、作す所速に成就す。
法輪と及び羂索と、蝎伽と（六九）那刺遮と、并に（七〇）日端嵐等と、久しからずして斯の句を成ず。」と』
（七一）爾の時に毘盧遮那世尊、大衆會を觀じて、執金剛秘密主に告げて、而も偈を說いて言はく、

【六八】空輪曼荼羅を明す。其曼荼羅は虛空は無相なる故に方圓三角等の相なし、無相卽相の故に種種色をなすなり。以上の五輪を圖示すれば、

□ 金剛、地なり、黃色なり。
○ 悲なり、水なり、白色なり。
△ 慧なり、火なり、赤色なり。
◠ 神通なり、風なり、黑なり。
空は定る形なし、空の故に。

【六九】那刺遮とは左の如し。

【七〇】日端嵐とは左の如し。

【七一】上來は五字を單說す。以下は更に種々五字の義を說く、卽ち五字相應なり。

『「若し眞言門に於て、修行する諸の菩薩は、(七二)阿字を自身と爲して、内外悉く同く等しうす。諸の義利皆捨てて、礫石と金寶とを等しうす、衆の罪業及び貪瞋等を遠け離れて、當に倶に清淨なることを得べし。諸佛牟尼に同じく、能く諸の利益を作し、一切の諸の過を離る。

復次に(七三)嚩字に於て、行者瑜伽に依るときは、作業儀式を解す。衆生を利益するが故に、内身救世者なり。一切皆是の如し、心水湛へて盈滿す、潔白なること雪と乳との猶し、當に決定の意を生ずべし。一切の身より出て、悉く諸の毛孔に遍じ、流れ注いで極て清淨なり、此の內より充ち溢れて、遍く大地に滿つ。是の悲愍の水を以て、世の苦の衆生を觀ずべし、諸の有らゆる飲み用ふるもの、或は復身に觸れらるるもの、一切皆決定して、菩提を成就することを得。

思惟して等引に在れば、(七四)一切囉字門なり、周輪にして焔光を生じ、寂然として而も普く照す。瑜祇の光外に轉じ、而も一切處に遍じて、世を利し樂欲に隨ひ、行者神通を起す、身上に囉字門あり、嚩字齋輪の中にあり、火を出し而も雨を降らし、倶時に而も應現して、地獄

【七二】阿字を觀ずることを明す。

【七三】嚩字門の觀を明す。大悲水なり、八熱地獄の苦を息滅す。

【七四】囉字門の觀を明す。大智火なり、八寒地獄の苦を滅よ、

の極寒の苦をば、囉字能く消除し、嚩字熾然を蠲く。
眞言法に住するが故に、囉字を下身と爲し、訶字を標幟と爲す。
作業速に成就すれば、重罪の衆生を救く。大因陀羅に住して、水龍の事業を作すべし。
一切を攝除する等、眞言者疑ふこと勿れ。(七五)風は一切處に遍じて、一切悉く開き壞す。
此の種種の雜類、各各の衆の事業、色曼荼羅の中にして、法に依て而も之れを作せ。
心に觸れて而も念持すれば、意根淨を逮得す、輕く擧ることを習ひ、經行の中に誦して、神足を獲べし。
宴坐して阿字を觀じ、耳根に在りと想へ、念持して一月を滿れば、當に耳清淨を得べし。」

祕密主、是の如き等は、(七六)意生悉地の句なり。祕密主、此れを觀ずるに形色有ること無けれども、種種の雜類の衆行生ず。思念の頃に於て、纔に之れを轉誦するときは、是の如きの一切の善業の種子を作す。復次に祕密主、如來は作さざる所無し。眞言門に於て修行する諸の菩薩は、影像に同じく、一切處に隨順し、一切衆生の心に隨順して、悉く其前に住して、諸の有情をして、咸く歡喜を得しむ。如來は分別の意無く、諸の境界を離るるに由るが故なり。」

而も偈を說いて言く、

【七五】訶字門の觀を明す、大龍の風なり。
【七六】意の欲する所に隨て皆成就するを云ふ。
【七七】時には三世生滅の時間、方には四方四隅の方所、造作は三業の所作なり。

（七七）『時と方と造作と無く、法と非法とを離るれども、能く悉地の句を授くることは、眞言行より發生す。

是の故に一切智の、如來悉地の果は、最も尊勝の句と爲す。常に成就を作すべし。』

成就悉地品第七

『(一)時に(二)吉祥金剛、(三)奇特開敷眼あり。(四)手に金剛印を轉す、流れ散じて火の光の如し。

其の明普遍く、一切の諸の佛刹を照す。微妙の音を以て、(五)法自在牟尼を稱歎す。

諸の眞言の行を說き給へ、彼の行は得べからず、眞言は何れより來る、去る所は何れの所にか至る。

諸佛是の如きの、更に(六)過上無き句を(七)說き給へ、一切の法の歸趣すること、衆の流れの海に趣くが如し。』

是の如く說き已て、世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、

(八)『摩訶薩の意處を、說て曼荼羅と名く。諸の眞言の心位を、了知するときは果を成ずることを得べし。

諸の分別する所あるは、悉く皆意より生ず。白黃赤を分辨する、是等は心より起るなり。

【一】此品は金剛薩埵の三摩地內證祕密の法なる故に、先づ成德を現じて問を發すなり。

【二】金剛手菩薩の德を歎じて呼ぶ、金剛は智德を歎じ、吉祥は福德を歎ず。

【三】妙法蓮花の眞實の智眼なり。

【四】五智の金剛杵なり。

【五】大日如來を云ふ。

【六】曼荼羅を云ふ。

【七】二の意あり、一は我爲に說き給ひ、二は一切衆生の爲に說き給ふなり。

【八】一切衆生の自心の處を指して云ふ、卽大悲胎藏曼荼羅なり。この偈意は、若し眞言の行と果とを知らんと欲せば、當に自心の處に於て之れを求むべしとなり。

（九）決定の心を以て歡喜するを、說いて內心處と名く。眞言斯の位に住して、能く廣大の果を授く。

（一〇）彼の蓮花處を念ずべし、（一一）八葉にして鬚蘂敷けたり、華臺に（一二）阿字門あり、焰鬘皆な妙好なり。

光暉普く周遍して、衆生を照明するが故に、千電を合會するが如くして、佛の巧色の形を持せり。

深く圓き鏡の中に居して、諸の方所に應現すること、猶し淨水の月の如くして、普く衆生の前に現ず。

心性は是の如しと知りぬれば、眞言行に住することを得。

（一三）次に其の首の上の、頂會の交際せる中に於て、標するに大空點を以てして、而も闇字を思惟せよ。

妙好にして淨無垢なること、水精と月と電との如し。寂靜法身なりと說く、一切の依持する所なり。

諸の眞言の悉地、能く殊類の形を現し、天の樂と解脫とを得、如來の句を逮見す。

【九】理智不二阿字不生の三昧なり。此阿字門に入るに由て眞言の果を得るなり。

【一〇】以下正しく三昧を修する初門を明す。

【一一】心處を觀じて八葉の蓮花となして開敷せしむる也。何故に八葉を現じて多ならず少ならざるかと云ふに凡夫の心は合蓮花の如し。此心を現じて開敷せしむる也。八葉は四方四隅なり、四方は四智なり、四隅は四攝の法なり。又蓮花を現じて餘の花を現ぜざることは、世間の蓮の淤泥中より生じて本性清淨なるが如く、衆生の心も亦然り、此故に唯蓮花のみを所現となすなり。

【一二】此一品に又四品ありて第一阿字品を說く、卽ち眞言の果なり。

【一三】以下第二暗字品を說く、卽ち眞言の因なり。

(一四)囉字を眼界と爲せ、輝燭明燈の猶し。
(一五)頸を俛ぶせ小しく頭を低れ、舌を齶の間に近づけて、而も以て心處を觀ずべし。當に心に等引を現ずべし。
無垢にして妙に淸淨なること、圓鏡の如くして常に現前す。是の如く眞實の心は、古佛の宣說し給ふ所なり。
心明道を照了するときは、諸色皆光を發す。眞言者當に、正覺兩足尊を見るべし。
若し見るときは悉地の第一の常恒の體を成ず。(一六)此れ從り次に思惟して、此の囉字門を轉ずべし。
邏字の大空點なり。之れを眼位に置け。一切空の句を見、(一七)不死の句を成ずることを得。
若し廣大智と、或は五神通を起すと、長壽の童子の身と、成就持明等とを欲ふに、眞言者未だ得ざるは、之れに隨順せざるに由てなり。
眞言の智を發起するは、是れ最勝の實知なり。一切の佛菩薩、救世の庫藏なり。
是れに由て諸の正覺と、菩薩救世者と、及び諸の聲聞等と、他の方所

【一四】以下第三囉字品を說く。囉字は淨知見なり、之れを以て兩眼に布する故に能く心性を見る、卽ち成菩提なり。
【一五】觀の坐法を明す。
【一六】以下第四邏字品を說く。
【一七】邏字は入涅槃を表す、故に不死の句と云ふ。邏は相を以て字相とす、然るに大空點を冠する故に相卽無相なり。無相は涅槃寂滅の故に。
【一八】一切種智にして權方便の智なり。
【一九】一切智智にして實智なり。

に遊涉し、

一切の佛刹の中にして、皆是の如きの說を作す。故に(一八)無上智と、佛の(一九)無過上智とを得るなり。』

轉字輪曼荼羅行品第八

爾の時に毗盧遮那世尊、一切大會を觀察し給ひ、大なる慈と悲とを修め習ひ給ふ眼を以て、衆生界を觀察して、(一)甘露生三昧に住し給ふ。時に佛是の定に由るが故に、復一切(二)三世無礙力明妃を說いて曰く、

『怛姪他一 伽伽娜三迷二 阿鉢囉二合底丁以反三迷三 薩婆怛他引蘗多三 三曼哆努蘗帝四 伽伽那三摩五 囀囉落乞灑二合涅帝平六 莎訶』

善男子、此の明妃と如來の身と無二の境界なるを以て、偈を說いて言く、

『是の佛加持に由て、菩薩大名稱、法に於て罣礙すること無く、能く衆の苦を滅し除く。』

時に毗盧遮那世尊、尋で諸佛の本初不生を念じ、自身と及與持金剛者とを加持して、金剛手等の上首の執金剛に告げて言く、『善男子、諦に聽け、轉字輪曼荼羅行品の、眞言門修行の諸の菩薩は、能く佛事を作し、普く其の身を現す。』爾の時に執金剛、(三)金剛蓮華座より旋り轉じて而も下て、頂を以て世尊を禮して而も讚歎して言さく、

【一】此三昧を修する者は、世間の甘露を服すれば諸の疾病を除て不老不死なるが如く、出世間第一の果を得て、常住不變なる故に、甘露生三昧と云ふ。卽阿字不生の三昧なり。

【二】三世に於て能く此の明の力を破壞する者あることなき故に三世無礙力と云ふ。而して此明は能く一切の無明煩惱の闇を破す、故に名けて明と云ふ。此の明か能く菩提心を修養して增長ならしむる故に妃と云ふ。又心口より出すを眞言と云ひ、一身の支分より任運に生ずる者を明と云ふ。差別知るべし。

【三】此菩薩は五股金剛杵の上に蓮花臺あるを以て座とす。所表更に問へ。

『菩提心を歸命し、菩提を發す者を歸命し、行體の地波羅蜜等を稽首し、（四）先きに造作する者を敬禮し、空を證する者を歸命す。』祕密主、是の如く歎じ已て、而も佛に白して言く、『唯、願くは法王、我れ等を哀愍し、護念して、而も（五）此れを演說し給へ、衆生を利益せんが爲の故に、說く所の如く、眞言を修せん者をして圓滿せしむるが故に。』是の如く說き已て、毗盧遮那世尊、執金剛祕密主に告げて言く、

（六）『我は一切の本初なり、號して世の所依と名く。說法に等比無し、本寂にして上あることなし。』

時に佛、此の伽陀を說て是の如く而も加持を作し給ふ。加持を以ての故に、執金剛者と及び諸の菩薩と、能く（七）勝願の佛菩提座を見るに、世尊は猶し虛空の戲論無きが如し。無二の行にして瑜伽の相を以て是の業を成熟し給ふ。卽時に世尊の身の諸の支分より皆悉く（八）是の字を出現して、一切の世間出世間の聲聞緣覺の（九）靜慮と思惟とに於て、悉地を成就することを勤修せしめ給ふ。皆（一〇）壽命に同じく、種子に同じく、依處に同じく、救世者に同じ。

【四】一切衆生は菩提心ありと雖も、自ら知ること能はざる故に、古昔に發心成果して轉じて衆生に示す者を歸命す、大恩を念ずるが故なり。

【五】阿字輪の法を云ふ。

【六】此の一偈は大日如來は萬有諸法の能造能生にして、又本地極位の說法を明す。眞に密教骨目の伽陀なり。

【七】一切衆生界に於て廣く佛事を作す故に勝願と云ふ。又阿字本不生の座を佛菩提座と云ふ

【八】阿字の眞言なり。

【九】靜慮は止なり、思惟は觀なり。

【一〇】壽命と種子と依處と救世者とは皆阿字なり。世出世の一切所作の妙業は皆阿字を以て命とし、一切の字阿字を以て種子とす、阿の聲無ければ

「南麼三曼多勃馱喃一阿」

『善男子、此の阿字は一切如來の加持し給ふ所なり。眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、能く佛事を作し、普く色身を現じて、阿字門に於て一切の法を轉ず。是の故に祕密主、眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩、若し佛を見んと欲ひ、若し供養せんと欲ひ、發菩提心を證せんと欲ひ、諸の菩薩と同會せんと欲ひ、衆生を利益せんと欲ひ、悉地を求めんと欲ひ、一切智智を求めんと欲はば、(一一)此の一切佛心に於て當に勤めて修習すべし。』

(一二)爾の時に毘盧遮那世尊、復決定して大悲藏より生ずる曼荼羅王に、聖天の位を敷き置き、三昧神通の眞言行不思議の法を說き給ふ。『彼の阿闍梨、先づ(一三)阿字の一切智門に住して、修多羅を持して一切諸佛を稽首したてまつる。東方より之れを申べて。旋り轉じて而も南より以て西方に及ぼし、北方に周らし、(一四)次に金剛薩埵と作つて、執金剛を以て、自身を加持し、或は彼の印を以てし、或は嚩字を以てして、(一五)內心に入りて曼荼羅を置け、是の如く(一六)第二曼荼羅も亦、本寂を以て自身を加持するが故に、無二瑜伽の形、如來の形、空性の形なり。次に所行の道と二分の聖天處とを

口を開くこと能はず、口を開かざれば一切の字なき故に阿字は本有菩提心なり。故に一切法の所依なり。阿字は人天の大救護者なり、阿字を觀ずる者は生死を解脫するが故に。

【一一】阿字の眞言なり。如上に列する所の事を求めんと欲する者は更に他の術なし、但だ阿字觀を修すべきなり。

【一二】上來は轉字輪の相を說き、以下は曼荼羅行を說くなり。

【一三】阿字を觀じて自身大日如來と成るなり。

【一四】阿闍梨の自身金剛薩埵と成るなり。

【一五】中胎を內心と云ふ。

【一六】外三重の中の第一重を云ふ。

經の中に分位を定むる文未だ明了ならず、更に具緣品に准

捨て、遠く(一七)三分を離れて、如來の位に住して、東方より修多羅を申べて周币し旋り轉ず。(一八)餘す所の二曼荼羅も、亦當に是の方便を以て諸の事業を作すべし。(一九)復大日を以て自身を加持し、廣く(二〇)法界を念じて衆色を布くべし。眞言行者、(二一)潔白を以て先と爲すべし。』伽陀を說いて曰く、

(二二)『此の淨法界を以て、諸の衆生を淨除すること、自體如來の如し、
遠く一切の過を離る。
是の如く而も觀想して、囉字門を思惟せよ。寂然にして光焰鬘あり、
淨月と商佉との色なり。

(二三)第二に赤色を布すべし、行者當に憶持して、字を思惟すべし。明照にして、本無の大空點あり。
煥炳にして初日の輝あり　最勝にして能く壞するもの無し。第三に眞言者、次に黃色を運布すべし。意を迦字門に定め、當に法敎に隨ふべし。
身相猶し眞金のごとし。正受にして諸毒を害し、光明一切に遍ず、金色にして牟尼に同じ。
次に當に青色を布すべし、生死を超え渡らんには、麼字門を思惟せよ。大寂の菩提座あり、身色

じて解すべし。疏に云はく由レ未ニ明了一未レ記更問之也と。

【一七】第一行道の處、第二供養物を置く處、第三諸尊の坐處なり。

【一八】外三重の中の第二重第三重を云ふ。更に第四の外緣を置くなり。

【一九】以下は衆色を布する法を明す、卽彩色を下す法なり。

【二〇】口祕に云く法界生の印なり、法界緣起の故に無相の中に於て衆色を下すなり。

【二一】白色は法界の體なり、諸過を離れたり。

【二二】囉字門なり。

【二三】邏字門なり。

虹霓の如し、一切の怖れ畏るることを除く。
最後に黒色を布せよ。其の彩甚だ玄妙なり、訶字門を思惟せよ。周遍して圓き光りを生ず、劫災の猛き焔の如し。
(二四)寶冠にして手印を擧ぐ、能く一切の惡を怖れしめ、諸の魔軍を降伏す。』
(二五)爾の時に世尊毗盧遮那、三昧より起つて、無量勝三昧に住し給ふ。佛定中に於て、遍一切無能害力明妃を顯はし示し給ふ。一切如來の境界の中より生ず。其の明に曰く、
『「南麼薩婆怛他引蘗帝弊毘也反一薩婆目契弊二同上阿娑迷三鉢囉迷四阿者麗五伽伽泥薩麼二合囉娜六薩婆怛囉引二合努蘖帝七莎訶」
次に彩色を調るには、頂を以て世尊及び般若波羅蜜を禮して、此の明妃八遍を持せよ。座より而も起つて曼荼羅を旋り繞りて、内心に入て、大慈大悲の力を以て諸の弟子を念じ、(二六)阿闍梨復羯磨金剛薩埵を以て自身を加持す。嚩字門と及び(二七)施願金剛とを以てすること已つて、當に大悲藏より生ずる大曼荼羅を畫くべし、彼安詳として(二八)内心に在て、而も大日世尊を造るべし。白蓮華に坐して

【二四】阿閦如來の忿怒身にして梵號は鉢囉底毘荼と云ふ。
【二五】前には甘露生三昧に住して上の法門を說き給ふ。今は修眞言行者をして諸の方便を滿足せしめんが爲に、更に無量勝三昧に入て此明妃を說き給ふなり。無量勝とは無能害の義なり。
【二六】大日如來自ら所作の事を成ずは應ぜざる所なるを以てなり。
【二七】文殊菩薩なり。金剛薩埵と共に智門の尊なるを以てなり。
【二八】中胎なり。

首に（二九）髮髻を戴き、（三〇）鉢吒を裙と爲し、上に綃縠を被たり。身相金色にして身を周りて焔鬘あり。或は如來頂印を以てし、或は字句を以てす。謂く阿字門なり。東方の一切諸佛には、阿字門及び大空點を以てす。伊舍尼の方の一切如來母虛空眼には、伽字を書くべし。火天の方の一切諸菩薩には、眞陀摩尼寶を畫け、或は迦字を置け。夜叉の方の觀世自在には、蓮華印なり。幷に一生補處の菩薩眷屬を畫け、或は娑字を作せ。焔摩の方には三分の位を越えて、（三一）金剛慧印と持金剛祕密主と幷に眷屬とを置け。或は嚩字を書け。彼れ復三分の位を棄てて一切の諸執金剛の印を畫け。或は字句を書け、所謂鉡字なり。次に涅哩底の方には、大日如來の下に於て不動尊を作せ。石の上に坐して羂索と慧刀とを持せり、周帀して焔鬘あり、障を作す者を擬ぎる。或は（三二）彼の印を置け、或は字句を書け所謂唅字なり。風天の方には降三世尊をなせ、大障を摧くものなり。上に光焔あり。大勢威怒にして猶し焔摩の如し、其形黑色にして、怖るべき者の中に於て極めて怖れ畏れしめん。手に（三三）金剛を轉ず。或は（三四）彼の印を作せ。或は字句を書け、所謂訶字なり（長聲）。（三五）次に四方に於て、四大護を畫くべし。帝釋の方をば無畏結護者と名く、金色にして白衣なり。面に少しく忿怒の相を現じ、手に檀荼を持せり。或は（三六）彼の印を作せ、或は字句を置け、所謂

【二九】髮髻を以て冠となす。綵布を加へず。
【三〇】極細綃なり。
【三一】三股金剛なり。
【三二】劍及び索なり。
【三三】三股金剛なり。
【三四】五股金剛杵なり。
【三五】以下四方四大護を明す。
【三六】檀荼棒の印也、左の如し。

嚩字を作せ。夜叉の方をば壊諸怖結護者と名く、白色にして素き衣なり。手に揭伽を持し、幷に光焔あり。能く諸の怖れを壞る。或は（三七）彼の印を畫け、或は字句を置け、所謂博字なり。龍方をば難降伏結護者と名く、赤きこと無優華の色の如し。朱き衣を被たり、面像微笑にして光焔の中に在り、而も一切の衆會を觀ず。或は（三八）彼の印を置け、或は字句を置け、所謂索字なり。焔摩の方をば金剛無勝結護者と名く、黑色にして玄き衣なり。毗倶胝形にして眉の間に浪の文あり、上に髮冠を戴き、自身に威光ありて衆生界を照す。手に檀茶を持し、能く大に障を爲す者を壞る。或は（三九）彼の印を作せ、或は字句を置け、所謂吃識二字なり。及び一切の眷屬使者は、皆白き蓮華の上に坐せしむべし。眞言者是の如く敷き置き已て、次に當に外に出て、第二分に於て釋迦種牟尼王を畫くべし。袈裟衣を被て三十二導師の相あり、最も勝れたる敎を說いて、一切衆生に無畏を施さんが爲の故なり。或は袈裟と鉢との印なり、或は字句を以てす所謂婆字なり。次に外の曼荼羅に於て、（四〇）法界性を以て自身を加持して菩提心を發すべし。彼れ三分の位を捨てて、當に三たび禮を作して、心に大日世尊を念ずべし。前の調色の如く、第三分に於て、帝釋の方には、（四一）施願金剛童子の形を作れ。三昧の手には青き蓮華を持し、上に（四二）金剛慧杵を置く、諸の瓔珞を以て而も自ら莊嚴せり。上妙の絹縠を以

【三七】刀形なり。
【三八】刀印なり。
【三九】檀茶の印なり。
【四〇】法界自性の觀をなすなり、法界性とは卽ち阿字なり。之れを以て加持して菩提心を發すなり。
【四一】文殊菩薩なり。
【四二】三股金剛杵なり。

て裙と爲し、極めて輕細の者を用つて上服と爲す。身鬱金色にして、頂上に五髻あり、或は〔四三〕密印を置き、〔四四〕或は字句を置け。

「南麼三曼多勃馱喃一鑁」

其の右の邊りに於て、光網童子あり、一切の身分皆悉く圓滿せり。三昧の手には寶冠を執持し、慧の手には鉤を持す。〔四五〕或は彼の印を置き、或は字句を書け、所謂染字なり。焰摩の方に依て、除一切蓋障菩薩あり、金色にして髮冠あり、如意寶を持す。或は〔四六〕彼の印を畫き、或は字句を置く所謂噁長聲字なり。夜叉の方には、地藏菩薩をつくれ、色は鉢孕遇華の如し、手に蓮華を持し、諸の瓔珞を以て莊嚴す。或は〔四七〕彼の印を置き、或は字句を置く、所謂伊字なり。龍方の虛空藏は、白き色にして白き衣なり、身に光焰あり、諸の瓔珞を以て莊嚴し、手に羯伽を持てり。或は〔四八〕彼の印を置き或は字句を置く、所謂伊長聲字なり。」

『眞言者宴坐して、法界に安住すべし。我れ即法界性たり、而も〔四九〕菩提心に住すべし。帝釋の方に向ひて、〔五〇〕金剛慧印を結べ。次に金剛の事を作し、慇懃に供養を修すべし。諸の佛救世の、三昧耶の印等を現ずべし。一切の方所を念じて、三たび轉じて眞言を持し、法に依て弟子を召して、壇に向つて而も〔五一〕淨を作せ。

〔四三〕三股杵なり。
〔四四〕鑁字なり。
〔四五〕金剛鉤なり。
〔四六〕如意寶珠なり。
〔四七〕蓮花なり。
〔四八〕寶劍なり。
〔四九〕菩提心は即法界の性也。
〔五〇〕三股金剛の印なり。
〔五一〕不動降三世二明王の加持を用ふべし。

彼に(五二)三自歸を授けて、勝菩提心に住せしめよ、當に諸の弟子の爲に、法界性の印を結べ。
次に法輪の印を結んで、一心にして彼の體に同じうし、繒帛を以て面門を覆ひ、而も悲愍の心を起すべし。
(五三)不空の手を作して、菩提を圓滿せしめんが故に、耳語して而も彼に、(五四)無上正等戒を告げよ。
次に當に彼が爲に、(五五)正等三昧の印を結ばしめ、彼に開き敷ける華を授けて、菩提の意を發さしむべし。
(五六)其の所至の處に隨て、而も學人を教へ、是の如く要誓を作して、一切應に傳授すべし。』
具德持金剛、又請うて世尊に白さく、『唯願くは人中の勝、灌頂の法を演說し給へ。』
爾の時に薄伽梵、法界に安住して、而も金剛手に告げ給ふ、『一心に諦に聽くべし、我諸の法教を說かん。
(五七)攝自在の攝持なり。師(五八)如來の性を以て、自體を加持し、或は

【五二】三自歸とは入佛三昧耶と法界生と轉法輪との三印明なり。入佛三昧耶は佛寶なり、法界生は法寶なり、轉法輪は僧寶なり。此三印の加持に由て三寶に歸依し、菩提心に住するなり。又入佛三昧耶は融の故に略して說かざるなり。

【五三】手中に花ありて空しからざる故に不空手と云ふ、即ち供養の花なり。

【五四】三摩耶戒なり。

【五五】入佛三昧耶の印なり。圓珍和尚の傳には普賢三昧耶印なり。

【五六】投花の墮つる處に依て其印を授くるなり。

【五七】心に願ひ求むることあれば悉く能く攝取して、自在に願を滿するを攝自在攝持と云ふなり。

【五八】阿字門なり。

復(五九)密印を以てす。
次に應に弟子を召して、(六〇)法界性の大蓮花王の中に住せしむべし。
(六一)四大菩薩の、加持する所の寶瓶を以て、(六二)支分生の印を結んで、
而も用て其の頂に灌げ。
髻の中に、應に大空の闇字門を授與し、(六三)心に無生の句を置き、
胷に無垢の字を表すべし。
或は一切阿字なり、髮と髻とに金色の光あり、白蓮華臺に住して、(六四)
仁者に等同なり。』

【五九】外五股印或は塔印なり。
【六〇】小壇即ち正覺壇なり。
【六一】普賢と慈氏と除蓋障と滅惡趣尊との四菩薩なり。
【六二】普賢の印なり。
【六三】阿字本不生の故に。又文中の無垢の字とは羅字なり、清淨無垢染を義とする故に。
【六四】大日如來なり。

卷の第四

密印品第九

爾の時に薄伽梵毘盧遮那、諸の大衆會を觀察して、執金剛祕密主に告げて言はく、「祕密主、〔一〕如來莊嚴の具に同じく〔二〕法界趣に同じき〔三〕標幟あり。菩薩是れに由て身を嚴るが故に、生死の中に處し、諸趣に巡り歷れども、一切如來の大會に於て、此の大菩提の幢を以て而も之れを標幟すれば、諸の天と、龍と、夜叉と、犍達婆と、阿蘇囉と、揭嚕荼と、緊那囉と摩睺羅伽と、人と、非人と等、敬て而も之れに遶ざかり、敎を受けて而も行ず。汝今諦に聽き極て善く思念せよ、吾當さに演說すべし。」是の如く說き給ひ已つて、金剛手白して言さく、「世尊、今正しく是れ時なり、世尊、今正しく是れ時なり。」爾の時薄伽梵、卽便ち〔四〕身無害力三昧に住し給ふ。斯の定に住し給ふが故に、一切如來の三昧耶に入り、一切に遍じて能く障礙する無き力ある無等の三昧力の明妃を說いて曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一阿三迷二咀囉二合三迷三三麼曳四莎訶」

【一】一切如來は此密印を以て莊嚴したまふ。

【二】法界趣とは法界身なり、此密印を以て加持する故に如來の法界身に同じ

【三】密印は六大法界を標幟す卽ち大菩提幢なり

【四】如來無量の身自在力の故に能く害する者なし、卽ち一身法界に周遍して平等の義なり。

祕密主、是の如きの明妃は、一切如來の地を示現す。㊄三法道の界を越えざれば地波羅蜜を圓滿す。是の密印の相は、㊅當さに定と慧との手を用て空心合掌を作し、定と慧との二の虚空輪を以て並べ合せて、而も之れを建て立つ。頌に曰く、

「此れ一切の諸佛の、救世の大印、正覺の三昧耶なり。此の印に於て而も住す。」

㊆又定と慧との手を以て拳になして、虚空輪を掌の中に入れて、而も風輪を舒ぶべし、是れを淨法界の印となす、眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一　達摩馱睹二薩嚩二合婆嚩句痕三」

㊇復定と慧との手を以て、五輪皆等しく迭に翻へし相ひ鈎し、二の虚空輪の首倶に相ひ向くべし。頌に曰く、

「是れを名けて勝願の、吉祥法輪の印となす。世の依たる救世者は、悉く皆な此の輪を轉じ給ふ。」

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一　伐折囉二合呾麼二合句痕」

【五】行者の觀ずる所の本尊の身と眞言の印となり、即ち三密なり。

【六】入佛三昧耶の印相を明す、密印の相は合蓮花にして即ち凡夫の心を表す、二空を立つるは大空の果德を表す、即ち凡夫より直に佛果に入るの義なり。

【七】左右の拳は色と心とにして即ち六大法界を表す、二風を立て合せたるは緣起の諸法を表す。

【八】地水火風の四指翻へして鈎するは輪の八輪を表し、二空相向へて首を合するは輪臍を表す、即ち輪の形なり。

〔九〕復定と慧との二手を舒べて、〔一〇〕歸命合掌に作し、風輪を相ひ捻して、二空輪を以て上に加ふべし、形〔一一〕羯伽の如し。頌に曰く、

「此の大悲刀の印は、一切の佛の說き給ふ所なり。能く諸の見を斷ず、謂く俱生の身見なり。」

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一摩訶朅伽微囉闍二達摩珊捺囉奢二合迦婆訶闍三薩迦耶捺嚟二合悉致二合吒曳反諾八迦四怛他引蘖多地日吒底丁以反二合儞一社多五微囉引伽達摩儞入社多件」

〔一二〕復定と慧との二手を以て、虛心合掌に作し、二の風輪を屈して二の空輪を以て之れを絞ふべし、形〔一三〕商佉の如し。頌に曰く、

「此を名けて勝願の、吉祥法螺の印と爲す。諸佛世の師、菩薩救世者、皆な無垢の法を說いて、寂靜の涅槃に至る。」

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一暗」

〔一四〕復定と慧との手を以て、相ひ合せて普く之れを舒べ散ず、猶し〔一五〕鍵吒の如し。二の地輪と二の空輪と相ひ持して、火と風との輪をして和合せしむべし。頌に曰く、

〔九〕左右の地水火立てゝ合せたるは刀なり。二風二空相捻したるは鞘なり、卽ち大刀の形なり。

〔一〇〕金剛合掌なり。圖の如し。

〔一一〕刀の梵號なり。

〔一二〕印相法螺の形を表す。

〔一三〕螺貝の梵號なり

〔一四〕八葉蓮花の印なり、八葉は卽八獅子を表す。

〔一五〕鈴の梵號なり。

「吉祥顯の蓮華は、諸佛救世者の、不壞金剛の座なり。覺悟するを名て佛となす。菩提と佛子と、悉く皆是れより生ず。」

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一阿去急呼」

(一六)復定と慧との手を以て、五輪を外に向けて拳になし、火輪を建立て、二の風輪を舒べ屈して鉤の形になし、傍に在て之れを持すべし。虚空と地との輪を並べて而も直く上げ、水輪を交へ合せて跋折囉の如くすべし。頌に曰く、

「金剛大慧の印は、能く無智の城を壞り、睡眠の者を曉寤す、天人も壞ること能はず。」

眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折羅赧一吽」

(一七)復定と慧との手を以て、五輪を内に向けて拳になして、火輪を建立て二の風輪を以て傍に置き、二の虚空を屈して相ひ並ぶべし。頌に曰く、

「此の印は摩訶の印なり、所謂如來頂なり。適に纔に之れを結び作せば、即ち世尊に同じ。」

眞言に曰く、

【一六】外縛五股の印なり、即ち母の外縛は月輪を表し、五股は五智を表す。

【一七】佛頂の形を表す。

「南麼三曼多勃駄喃一𤙖𤙖」

(一八)復次に智慧の手を以て拳になして、眉の間に置け。頌に曰く、

「此を毫相藏佛常滿願の印と名く、纔に此を作すを以ての故に、卽ち人中の勝に同じ。」

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一阿去急呼痕惹急呼下同」

(一九)瑜伽の座に住して、鉢を持するに相應して、定と慧との手を以て倶に臍の間に在く、是を釋迦牟尼の大鉢の印と名く。

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一婆上急呼」

(二〇)復次に智慧の手を以て上に向けて、而も施無畏の形に作すべし。頌に曰く、

「能く一切の衆生類に、無畏を施し與ふ。若し此の大印を結ぶを、施無畏者と名く。」

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一薩婆他二爾娜爾娜三佩也那舍那四莎縛訶」

(二一)復次に智慧の手を以て、下し垂れて施願の形を作すべし。頌に曰く、

【一八】蓮花拳を眉間に置くは佛の白毫を表す。

【一九】印相は法界定印の如く鉢の形を表す、左手には袈裟の兩角を持すべし。更に問へ。

【二〇】其相衆生界に向て無畏を施すの相なり。

【二一】下衆生界に向て一切の願を與ふるの相なり。

「是の如き與願の印は、世依の所說なり。適に纔に此を結ぶものは、諸佛其の願を滿し給ふ。」

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一嚩囉娜伐折羅二合引怛麼二合迦二莎縛二合訶」

(二二)復次に智慧の手を以て拳となして、而も風輪を舒べ、(二三)毗俱胝の形を以て等引に住すべし。頌に曰く、

「是の如くの大印を以て、諸佛救世の尊(二四)諸の障者を恐れ怖れしめ、意に隨て悉地を成じ給ふ。

是の印を結ぶに由るが故に、大惡の魔軍衆と、及び餘の諸の障者は、馳せ散じて礙る所なし。」

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一摩訶引沫羅嚩底丁以反二捺奢嚩路嗢婆二合吠三摩訶引昧怛嚟也二合毗庾二合嗢蘗二合底丁以反四莎嚩二合訶」

(二五)復次に智慧の手を以て拳となして、而も火輪と水輪とを舒べて、虛空輪を以て而も其の下に在け。

頌に曰く、

「此を一切の佛の、世依の(二六)悲生眼と名く。眼界に置くと想へば、智者佛眼を成ず。」

【二二】額上の水波文を表す、如來の大悲衆生の輪廻を憫念して多思なることを示す。
【二三】皺の梵語なり。
【二四】何に依て諸の障者、怖畏せしむるやと云ふに如來大慈の力用なり。
【二五】印相は眼疾を療治する器械の金篦の形を表す。
【二六】此眼は如來の大悲より生じて亦能く大悲を生す。

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一伽伽那噉羅落吃灑二合儞上迦嚕儞麼那三怛他引蘖多斫吃芻二合四莎嚩二合訶」

(二七)復次に定慧の手を以て、五輪を內に向けて拳と爲して、而も風輪を舒べ圓らかに屈して相ひ合すべし。頌に曰く、

「此の勝願の索の印は、諸の惡を造るものを壞る。眞言者之れを結べば、能く諸の不善を縛す。」

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一係係摩訶引播奢二鉢羅二合娑嚕那履也三二合薩埵馱睹四微摸訶迦五怛他引蘖他引地目吃底下以入二反儞社多六莎訶」

(二八)復次に定慧の手を以て、一に合して拳と爲し、智慧の手の風輪を舒べて、第三の節を屈すること、猶し環の相の如くすべし。頌に曰く、

「是の如くなるを鉤印と名く、諸佛救世者、一切の十地の位に住する、菩薩大心者と、及び惡慧の衆生とを招き集む。」

眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一阿去急呼薩婆怛囉引二合鉢囉二合底丁以反訶諦二怛他引蘖黨矩奢三菩提浙哩耶二鉢履布

【二七】二風を舒べて圓らかに屈して相ひ合するは羂索の形を表す。此印能く一切の惡をなす者を縛す、即ち無量の衆生を折伏し、攝受して、如來の妙果を得せしむ。

【二八】一に合して拳と爲しとは内縛を云ふ。風輪を舒べて第三の節を屈するは鉤の相を表す。即ち一切衆生を召いて如來の功德を滿ぜしむ。

曪迦四 莎訶」

(二九) 卽ち此の鉤印其の火輪を舒べて、而も少し之れを屈すべし。是れを如來心印と謂ふ。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃馱喃一壞怒嚧婆二合嚩二莎嚩二合訶」

(三〇) 復此の印を以て其の水輪を舒べて、而も之れを竪て立つべし。如來臍印と名く。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃馱喃一阿沒㗚二合覩嚧婆二合嚩二莎嚩二合訶」

(三一) 卽ち此の印を以て直く水輪を舒べ、餘亦之れを竪つべし。如來腰の印と名く。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃馱喃一怛他引蘖多三婆嚩二莎嚩二合訶」

(三二) 復定慧の手を以て、空心合掌に作し、二の風輪を以て內に屈して入るべし、二の水輪亦然なり。其の二の地輪少し屈せしめて。而も火輪を伸ぶべし。此は是れ如來藏の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麽薩婆怛他引蘖帝弊毗也反一嚂嚂嘮嘮二莎嚩二合訶」

(三三) 卽ち此の印を以て、其の水輪を散じて上に向けて之れを置け。大界の

【二九】 印相右の風と火とを直べ舒べて第三節を屈するなり。火指は實智を表し、風指は權智を表す。又內縛は佛心を表す、此二智は佛心より生ずるを以てなり。

【三〇】 前の印に更に水指を舒べ加ふるなり。

【三一】 前の印の如くして風と火と水との三指を直く立つるなり。

【三二】 是卽ち如來の陰藏の印なり、此印に就て空心合掌は本有菩提心を表し、二地は衆生と佛との本不生相對の形、二水と二風を掌中に入るは分別散動を止むるの義、二火立合は一切智心、二空を並べ立つるは本地の大空法界を表するなり。

【三三】 四大護の惣印なり、二火と二地とを合せたると二水散じ立つるを以て四大護を表

印と名く。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一麗魯補履微矩麗二莎訶」

(二四)卽ち此の印を以て、其の二の火輪を鈎屈して相ひ合せて、風輪を散じ舒ぶべし。無堪忍大護の印と名く。彼の眞言に曰く、

「南麼薩婆怛他引蘗帝弊下合一薩婆佩也微蘗帝弊二微濕嚩目契弊三薩婆他引四唅欠五羅吃灑二合摩訶引沫麗六薩婆怛他引蘗多本抳也二合儞入社帝七吽吽八怛囉引二合吒囉吒同上九阿鉢囉二合底丁以反訶諦十莎訶」

(二五)復風輪を以て、而も之れを散じ舒べ、空輪を並べて其の中に入るべし。普光の印と名く。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一入嚩二合羅引摩履儞平二怛他引蘗哆喋旨二合三莎訶」

(二六)又定慧の手を以て、空心合掌を作して、二の風輪を以て火輪の側に持すべし。如來甲の印と名く。

(二七)二の水輪を屈し、二の空輪を合せて掌の中に入れて、二の水輪の甲の上を押せ。是を如來舌相の印と名く。眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一怛他引蘗多爾訶嚩二合薩底也二合達摩鉢囉二合底瑟恥二合多二莎訶」

(二八)此の印を以て、風と水との輪をして、屈して而も相ひ捻せしめ、空輪を上に向けて而も少しく之を

す。

【二四】二水と二風と散じ立つるは四佛の智なり。

【二五】印相は普く法界を照す光明を表す。

【二六】經に眞言を說かず、師傳に具緣品の所說を用ひよと。

【二七】印相如來の舌を表す、空心合掌を母とす。更に間へ。

【二八】語門とは卽口なり。空輪を上に向けて而も少しく之れを屈するは其口を表す、馬頭の印の如し。

屈し、火輪を正しく直くして相會すべし。地輪も亦是の如し。如來語門の印と名く。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一怛他引蘖多能去瑟吒羅二三合囉婆囉婆引吃囉二合三參鉢囉引二四博迦四薩婆怛他引蘖多五微灑也參婆上嚩六莎訶」

(三九)前の印の如く、二の風輪を以て屈して掌の中に入れて(四〇)上に向くべし、如來牙の印と名く。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一怛他引蘖多能去瑟吒羅二三合囉婆囉婆引訖囉二合三參鉢囉引二合博迦四薩婆怛他引蘖多五微灑也參婆上嚩六莎訶」

又(四一)前の印相の如くして、二の風輪を以て上に向けて之れを置き、第三の節を屈すべし。如來辯說の印と名く。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一阿振底夜二合那部二合多三路波嚩引增三麼哆引鉢囉引二合鉢多二合三微輸上駄婆嚩二合囉四莎嚩二合訶」

(四二)復次に定慧の手を以て和合して、一相に空心合掌を作し、二の地輪空輪を屈し入れて相ひ合すべし。此は是れ如來の持十力の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一捺奢麼浪伽輕達囉二件參髯去莎訶」

(四三)又前の印の如くして、二空輪と風輪とを以て、上節を屈して相ひ合すべし。是れ如來念處の印な

【三九】空心合掌を印母とす。

【四〇】上向の上に脫字あるか、其印は二空を以て並べ立て上に向くるなり。師傳に二風を掌內に屈し入るは口を表し・二空は牙を表すと。

【四一】空心合掌して二風指を以て勾曲して、二火指の背の上に當て、頭を相ひ著くること勿れ。

【四二】空心合掌して二地と二空とを掌中にあつめて頭相合して拄へるなり。

【四三】無所不至の印の如し。

り。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃馱喃一怛他引蘖多婆麽喋合三底二薩埵係哆弊反毘庾嚧伽多三伽那穆忙引穆麽四莎訶」

(四四)又前の印の如くして、二の空輪を以て水輪の上に在くべし。(四五)一切法平等開悟の印と名く。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃馱喃一薩婆達麽三麽哆鉢囉引二合鉢多二合怛他引蘖哆弩蘖多三莎訶」

(四六)復定慧の手を以て合して一となして、二の風輪を以て火輪の上に加ふべし、餘は前の如し。是れ普賢如意珠の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃馱喃一參麽哆弩蘖多二微囉惹達摩儞入社多三摩訶引摩訶四莎訶」

(四七)卽ち此の虛心合掌、二の風輪を以て、屈して二の火輪の下に在け、餘は前の如し。是れ慈氏の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃馱喃一阿爾單惹也二薩婆薩埵引奢夜弩蘖多三莎訶」

(四八)又前の印の如くして、二の虛空輪を以て中に入るべし。虛空藏の印と名く。眞言に曰く、

【四四】空心合掌を以て印母とす。

【四五】平等開悟以上の印明を以て如來身會と云ふ。

【四六】以下は諸尊の密印を說く、中に於て初に四大菩薩なり、普賢の印相は寶珠の形なり、卽菩薩心を表す。

【四七】寶瓶の印なり、瓶卽塔の義に依て慈氏菩薩の持する所の法身の塔とも傳ふ。

【四八】寶珠の印なり、二空を掌中に入るるは虛空藏の義を表す。

【四九】二地二水屈して掌に入るは凡夫と聲聞と緣覺と菩薩との四垢の業障を表す、二空指を以て之れを押すは斷除の義

「南麼三曼多勃駄喃一阿去迦引奢參麼哆弩蘖多二微質怛嚂二合嚩囉達囉三莎訶」

（四九）又前の印の如くして、二の水輪と二の地輪とを以て、屈して掌の中に入れて、二の風輪と火輪と相ひ合すべし。是れ除一切蓋障の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一阿去急呼薩埵係哆弊毘庚反嗢蘖多二怛嚂怛嚂三怛嚂四莎訶」

（五〇）前の如くして、定慧の手を以て相ひ合して、五輪を散じ舒べて猶し鈴と鐸との如くし、虚空と地輪との如きは、和合して相ひ持して蓮花の形に作れ。是れ觀自在の印なり。眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一薩婆怛他引蘖哆嚩路吉多二羯嚕儜麼也三囉囉囉吽若四莎訶」

（五一）前の如くして定慧の手を以て、空心合掌に作して、猶し未開敷蓮の如くすべし。是れ得大勢の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一髯髯娑急呼二莎訶」

（五二）前の如くして定慧の手を以て、五輪を内に向けて拳と爲して、二の風輪を擧げて猶し針の鋒の如

を表す、二火二風を合せ立つるは大智大悲の寶珠を表す。

【五〇】八葉蓮花の印にして即ち心蓮開敷の相なり、即ち觀音の大悲衆生界の心蓮を開くなり。又以下は第二に觀音院の諸尊の印明を説く、地藏を合して七尊あり。

【五一】未敷蓮の印なり、開き已て却て合するものなり。

【五二】內縛して二風を立て合せ二空並べ立つる印なり、二風は日の形を表す。

くし、二の虚空輪を之に加ふべし。是れ多羅尊の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一哆𠼪哆𡃤抳二羯嚕拏嗢婆上二合吠平三莎訶」

〔五三〕前の印の如くして、二の風輪を擧げて參へ差へて相押せ。是れ毘倶胝の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一薩婆佩也怛囉二合引散儞入二泮娑破二合吒也三莎訶」

〔五四〕前の如くして、定慧の手を以て空心合掌になし、水輪と風輪と皆中に入るべし。是れ白處尊の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一怛他引蘖多微灑也二婆上吠平二鉢曇摩二合忙履儞入三莎訶」

〔五五〕前の印の如くして、二の風輪を屈して虚空輪の下に置き、相去ること猶し穬麥の如くすべし。是れ何耶掲唎嚩の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一佉那也畔惹娑破二合吒也二莎訶」

〔五六〕前の印に同じくし、二の水輪と風輪とを伸べて、餘は拳の如くすべし。是れ地藏菩薩の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一訶訶訶二蘇上怛弩三莎訶」

〔五七〕復定慧の手を以て空心合掌に作して、火輪と水輪と交へ結すんで相

【五三】二風指を參へ差へて相押すは皺の形なり、即ち魔障を怖畏せしむるなり。

【五四】二水は大悲を表する故に菩薩の身なり、故に菩薩白處中に住する相の印なり。

【五五】印相は馬頭を表す、二空は耳、二水を屈したるは眼、二火を立て合せたるは立髮、二風と二空との間は口、二空は牙なり。更に開へ。此大馬口を以て一切の煩惱業障を噉食するなり。

【五六】內縛して二水と二風とを立て合す印なり。二水は寶珠を表し、二風は幢旗を表すと傳ふ。

【五七】以下第三文殊院の印契を明す。主伴八尊なり。文殊の印二火二水外縛にするは蓮を表し、二風二空は刀を表す、故に蓮花の上に刀を安くの相なり。

ひ持し、二の風輪を以て二の虚空輪の上に置け、猶し鈎の形の如し、餘は前の如くすべし。是れ聖者文殊師利の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一係係矩忙囉二微日吃底二合鉢他悉體他以反二合多三娑麼二合囉娑麼二合囉四鉢囉二合底然五莎訶」

(五八)三昧の手を以て拳となして、而も風輪を擧ること猶し鈎の形の如くすべし。是れ光網の鈎印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一係係矩忙引羅二忙引耶蘖多娑嚩二合婆去嚩悉體他以反二合多三莎訶」

(五九)卽ち前の印の如くして、一切の輪相皆な少しく之れを屈すべし。是れ無垢光の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一係矩忙囉二微質怛囉二合蘖底矩忙引囉三麼努娑麼二合囉四莎訶」

(六〇)前の如くして、智慧の手を以て拳となして、其の風と火との輪相ひ合して一と爲して之れを舒ぶべし。是れ繼室尼の刀印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一係係矩忙引履計二娜耶壤難娑麼二合囉三鉢囉二合底然四莎訶」

【五八】單に左手に印を作すは、此の尊は文殊の一德なることを表す。又定德の尊なる故に左を用ふるなり。又文殊は遮情の大智、此尊は表德の眞理なり。

【五九】以下の五尊は文殊内證の五智を表す、無垢光の印は五佛慈悲の手を以て衆生を召いて法界に入るの義を表す、五指を鈎の如くするは召く義なり。

【六〇】刀印なり、智を表する故に右の手を用ふるなり。

前の如くして、智慧の手を以て拳と爲して、而も火輪を伸べ猶し戟の形の如くすべし。是れ優波髻室尼の戟の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一頞去娜夜壤難二係矩忙引履計三莎訶」

前の如くして、三昧の手を以て拳となし、而も〔六一〕水輪と地輪とを舒べよ。是れ地輪悲幢の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一係婆麼二合羅壤那計覩二莎嚩二合訶」

〔六二〕慧の手を以て拳になして、而も風輪を舒べて、猶し鈎の形の如くすべし。是れ請召童子の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一阿去羯囉灑二合也二薩鑁引矩魯阿去然三矩忙引囉寫四莎訶」

〔六三〕前の如くして、定と慧との手を以て拳となし、二の風輪を舒べ節を屈して相ひ合すべし、是れ諸の奉教者の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一阿呼去急微婆麼二合也二濘曳平三莎訶」

〔六四〕前の如く定と慧との手を以て拳となし、而も火輪を舒べ第三の節を屈すべし。是れ除疑怪の金剛印なり。彼の眞言に曰く、

【六一】地水輪は禪を表す、慧は大悲の故に左手を用ふ。

【六二】此れ亦鈎の印なり、前の光網の鈎は大悲を以て召く故に左手を用ふ、此鈎は智を以て召く故に右手を用ゐるなり。

【六三】此印は内縛にして二風鈎形なり。

【六四】以下第四除蓋障院八尊あり。除疑怪の印は内縛二火開形なり。又二空は並べて立つべし。

「南麼三曼多勃馱喃一微麼底掣反鷄曳諾迦二莎訶」

(六五)毗鉢舍那の臂を擧げて、施無畏の手を作す。是れ施無畏者の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一阿佩延娜娜二莎訶」

(六六)前の如くして、智の手を舒べ、而も上に之れを擧ぐべし。是れ除惡趣の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一阿毘庾反蹩達囉儜上薩埵馱敦二莎訶」

(六七)前の如くして、慧の手を以て心を掩ふべし。是れ救護慧の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一係摩訶引摩鉢二娑麼合二囉鉢囉合二底然三莎訶」

(六八)前の如く慧の手を以て持華の狀に作すべし。是れ大慈生の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一娑嚩合二制姤嗢蘖合二多二莎訶」

(六九)前の如く慧の手を以て心を覆ひ、稍火輪を屈すべし。是れ悲念者の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一羯嚕儜沒麗合二眤多二莎訶」

【六五】毗鉢舍那は觀と翻す、即右の手を云ふ、五指伸べて掌を外に向け高く立つるを施無畏と云ふ。五指は信進念定慧の五力を表す。

【六六】前印より一層高く上に擧ぐるなり、高く擧ぐるは五力を以て三惡趣の衆生を救ひ上ぐるの意なり。

【六七】右の手の掌を舒べて身に向けて心を掩ふなり、五智を以て心蓮花を加持するの義なり。

【六八】施無畏の印の如くにして風と空と相捻して人の花を持するが如くすべし。

【六九】掌を伸べて心を覆ひ、火指を屈して心に當てて之れを拄ふるなり。

前の如くして、慧の手を以て〔七〇〕施願の相と作すべし。是れ除一切熱惱の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼駄勃駄喃一係嚩囉娜二嚩囉鉢囉二合鉢多三二合莎訶」

〔七一〕前の如くして智慧の手を以て眞多摩尼寶を執持する形の如くすべし。是れ不思議慧の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃駄喃一薩磨舍鉢履布囉二莎訶」

〔七二〕前の如くして定と慧との手を以て拳となして、二の火輪をして開敷せしむ。是れ地藏旗の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃駄喃一訶訶訶微娑嚩二合曳二平莎訶」

慧の手を拳となして而も〔七三〕三輪を舒ぶべし、是れ寶處の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃駄喃一係摩訶引摩訶二莎訶」

〔七四〕此の慧の手を以て其の水輪を舒ぶべし。是れ寶手菩薩の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃駄喃一囉怛怒二合嗢婆上嚩二莎訶」

〔七五〕定と慧との手を以て反相叉合掌に作り、定の手の空輪と慧の手の地輪

【七〇】右手を舒べて掌を仰けて之れを垂れ下すを施願の相と云ふ。

【七一】右手空と風と相合して珠を執るが如くし、中指稍内に向け、地水二指を立つる印なり。

【七二】以下第五地藏院の印契を明す。六尊あり、世間に六地藏と稱する本據なり。地藏旗の印は内縛して二火を立て散ずるなり、二火は卽黑白の二幢なり、二火は並べ立つべし。

【七三】三輪は地水火なり、卽三股の印なり。

【七四】右手を蓮花拳にして、水指を舒べ立て、空指を以て餘の四指を押すべし、是れ獨股の印なり。

【七五】金剛部三昧耶の印なり。又般若は右手にして、三昧は

と相交へよ。般若を三昧に於てすることも亦復是の如し。餘は跋折羅の狀の如くすべし。是れ持地の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一薩囉尼仁反薩囉二莎訶」

(七六)前の如くして、五股金剛の戟の形に作れ。是れ寶印手の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一羅怛娜二合儞入喇儞二合多三莎嚩二合訶」

(七七)即ち此の印を以て一切の輪をして相ひ合せしむべし。是れ發堅固意の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一伐折羅二合三婆嚩二莎訶」

(七八)前の如くして定と慧との二手を以て刀に作れ。是れ虛空無垢菩薩の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一伽伽娜引阿難多揭者囉莎訶」

(七九)前の輪印の如し。是れ虛空慧の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一斫吃囉二合嚩入喇底丁以反二合二莎嚩訶」

前の商佉の印の如し。是れ淸淨慧の印なり。彼の眞言に曰く、

左手なり。次圖の如し

【七六】外五股金剛杵の印なり。

【七七】前の五股の印の狀の如くにして諸指の頭を作せ相著るなり。都て五股の印なり、五智都て一月輪に歸する故に堅固意と云ふなり。

【七八】前の大慧刀の印に同じ。

【七九】前の轉法輪の印に同じ。」

「南麼三曼多勃駄喃一達磨三婆嚩二莎嚩二合訶」

前の蓮花の印の如し、是れ行慧の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一鉢曇摩二合阿羅上耶二莎嚩二合訶」

(八〇)前の青蓮華の印に同くして、而も稍しく開敷するは、是れ安住慧の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一壤砮嘔婆二合嚩二莎嚩二合訶」

(八一)前の如くして、二手を以て相ひ合して而も水輪を屈して、相ひ交へて掌中に入れ、二の火輪と地輪と上に向け相ひ持して而も風輪を舒べ、第三の節を屈して(八二)相著けざらしむること猶し積麥の如くすべし。是れ執金剛の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折囉赧一戰拏摩訶引路灑拏𤙖二」

(八三)前の印の如くして、二の空輪と地輪とを以て屈して掌の中に入るべし。是れ(八四)忙莽雞の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折囉赧一怛喋二合吒輕怛喋吒同上若衍底丁以反三莎嚩二合訶」

(八五)前の如くして定と慧との手を以て、諸輪反し叉へて相ひ糺うて、自體

【八〇】内縛して二風指を開き立て散じ、二大並べ立つるなり、即ち前の多羅菩薩の印に相似たり。

【八一】以下第七金剛手院の印契を説く、主伴六尊なり。中に於て執金剛の印は内縛五股の印なり。

【八二】二風指をなして火指の上節を去ること一麥許りにす。

【八三】内縛三股金剛杵の印なり。二地輪と二空輪とを掌中に入れて、右の指を以て左の指に押すべし。

【八四】此れは母と翻す、即ち金剛部の母なり。

【八五】轉法輪の印を身に向けて反へして外に向け、右の空指を以て左の空指をなして諸輪の如くならしむ。

に向へて而も之れを旋轉し、般若の空輪を三昧の虚空輪に加ふべし。是れ金剛鎖の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折囉赧一吽滿馱滿馱二慕吒耶慕吒耶三伐折路嗢婆二合吠平四薩婆怛囉引鉢囉二合底丁以反訶帝五莎訶」

(八六)此の金剛慧印を以て、少し虚空輪を屈して、以て風輪を持して而も相ひ至らざらしむ。是れ忿怒月黶の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折囉赧一曷唎二合急呼吽發吒輕二莎嚩二合訶」

(八七)前の如く定と慧との手を以て拳と爲し、二の風輪を建立て而も以て相ひ持すべし。是れ金剛針の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折囉赧一薩婆達磨儞入吠達儞二伐折囉二合素旨嚩囉泥三莎嚩二合訶」

(八八)前の如く定慧の手を以て拳に爲して、而も心に置け。是れ金剛拳の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折囉赧一薩破二合吒也伐折囉二合三婆吠平二莎訶」

(八九)三昧の手を以て拳に爲て翼を擧げて開敷し、智慧の手亦拳に作し、而も風輪を舒べて、猶し忿怒

【八六】内縛五股の印の如くして二風を屈して、勾の如くにし、二空を捻するが如くして、相著けざらしむるなり。

【八七】内縛にして二風を立て合せて針の狀の如くし、二空を並べ屈して掌中に入るるなり。

【八八】内縛の印を心に置くなり。

【八九】以下第八四大護院の印明を説く、二尊なり。無能勝の印。右の風指は諸佛の敎勅を表し、左の手は打つ勢の如くして衆生の長眠を驚かす。

して相擬する形の如くすべし。是れ無能勝の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折囉赧一訥達哩沙合二摩訶盧灑拏二佉引捺耶薩鑁引薩他引蘖單然矩嚕三莎訶」

(九〇)慧の手を以て拳に爲して、相ひ擊つ勢に作して之れを持すべし。是れ(九一)阿毗目佉の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折囉赧一係阿毗目佉摩訶鉢囉合二戰拏二佉引那也緊旨囉引也徙三三麼耶麼弩薩麼合二囉四莎訶」

(九二)前の鉢を持する相の如くなるは、是れ釋迦鉢の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一薩嚩吃麗合二奢儞入素捺耶二薩婆達摩嚩始多引鉢囉合二鉢多三伽伽那三迷四婆嚩合二訶」

釋迦毫相の印は上の如し。又慧の手の指の峯を以て聚めて頂上に置け。是れ一切佛頂の印なり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一鑁鑁二鈝鈝鈝三發吒四莎訶」

三昧の手を以て拳に爲して、火と風との輪を舒べ、而も虛空を以て地と水との輪の上に加へ、其の智慧の手は、風と火との輪を伸べて三昧の掌の中に入るべし、亦虛空を以て地と水との輪の上に加へ

【九〇】印は無能勝と相反するなり。

【九一】無能勝と相對する故に、對面護とも、相向金剛とも云ふ。阿毗目佉は此れを相向と翻す。

【九二】以下第九釋迦院主伴十七尊なり。

て、刀の鞘に在るが如くすべし、是れ不動尊の印なり。前の金剛慧の印の如くなるは、是れ降三世の印なり。

(九三) 前の如く定慧の手を以て合して一相と爲して、其の地と水との輪皆下に向け、而も火輪を伸べ二の峯相連ね、二の風輪を屈して第三の節の上に置き、虚空輪を並べて三目の形の如くすべし、是れ如來頂の印、佛菩薩の母なり。復三昧の手を以て覆せて而も之れを舒べ、慧の手を拳に爲して而も風輪を擧ること、猶し蓋の形の如くせよ、是れ白傘佛頂の印なり。

(九四) 前の刀印の如くなるは、是れ勝佛頂の印なり。

(九五) 前の輪印の如くなるは、是れ最勝佛頂の印なり。

前の鈎印の如く慧手を拳に爲して、其の風輪を擧げ而も少しく之れを屈すべし、是れ除業佛頂の印なり。

前の佛頂の印の如くするは、是れ火聚佛頂の印なり。

(九六) 前の蓮華印の如くするは、此れ發生佛頂の印なり。

前の商佉の印の如きは、是れ無量音聲佛頂の印なり。

智慧の手を以て拳と爲して、眉間に置在するは、是れ眞多摩尼毫相の印なり。

【九三】內縛を印母とす、地と水との輪皆下に向ふは內縛なり、卽三眼の印又佛頂形なり。

【九四】大慧刀の印を云ふ。

【九五】轉法輪の印を云ふ。

【九六】八葉の印なり。

前の佛頂の印の如くするは、是れ佛眼の印なり。復(九七)少し異あるは、所謂金剛の標相なり。智慧の手を心に在き、(九八)蓮華を執る像の如くし、直く奢摩他の臂を伸べ、(九九)五輪上げ舒べて而も外に向けて之を距ぐは、是れ無能勝の印なり。

定と慧との手を(一〇〇)内に向けて拳と爲し、二の虚空輪上に向けて之れを屈すること口の如くすべし、是れ無能勝明妃の印なり。

(一〇一)智慧の手を以て頰を承るは、是れ自在天の印なり。

(一〇二)卽ち此の印を以て風と火との輪をして差に戻て之れを伸ぶるは、是れ普華天子の印なり。

(一〇三)前の印に同じく虚空輪を以て掌中に在くべし、是れ光鬘天子の印なり。

前の印に同じく虚空と風との輪を以て、華を持ちたる相に作れ、是れ滿意天子の印なり。

智慧の手を以て虚空と水との輪相加へ、其の風と火との輪と地輪と、皆之れを散し舒べて以て其の耳に掩ふ、是れ遍音聲天の印なり。

(一〇四)定慧の手相ひ合して、二虚空輪圓かに屈し、其の餘四輪も亦是の如

【九七】少し異とは、二風指を開きて火指の背を去らしむること一麥計りにして粘著けず、五股杵の如くする故に金剛の標相と云ふなり。

【九八】虚空指の頭相捻じて火指垂れ屈して中に當て、地水指正く竪つるなり。

【九九】其手頭より高からしむるなり。

【一〇〇】内縛なり。

【一〇一】以下第十世天の印契を說く、四十章有り。

【一〇二】右手を拳と作し火指稍屈し風を伸べて立つ。

【一〇三】右の空指を以て掌に安き四指開散す。

【一〇四】寶瓶の印なり。

くす、是れを地神の印と名く。
前の如く智慧の手を以て施無畏の相に作し、空輪を以て掌中に在け、是れ請召火天の印なり。
即ち施無畏の形を以て、虚空輪を以て、水輪の第二の節を持す、是れ一切諸仙の印なり、(一〇四)其の次第に隨て相應して之れを用ふべし。
前の如く定と慧との手を以て相ひ合して、風輪と地輪と掌の中に入れ、餘は皆上に向くべし、是れ焔摩但茶の印なり。
慧の手下に向くること、猶し健吒の如し、是れ焔摩妃の鐸の印なり。
三昧の手を以て拳に爲して、風と火との輪を舒ぶべし、是れ暗夜天の印なり。即ち此の印を以て又風輪を屈すべし、是れ(一〇六)嚕達羅の戟の印なり。
前の印の如くして蓮華を持する形に作れ、是れ梵天明妃の印なり。
(一〇七)前の印の如く其の風輪を屈して、火輪の背の第三の節に加ふ、是れ嬌末離(一〇八)爍底の印なり。
即ち此の印を以て、(一〇九)風輪をして虚空の上に加へしむ、是れ那羅延后の輪印なり。
三昧の手は拳に爲し、虚空輪をして直く上げしむ、是れ焔魔七母の鎚の印なり。
其の定の手を仰けたること、(一一〇)劫鉢羅を持する相の如くす、是れ遮文茶の印なり。

【一〇五】明法の阿闍梨に問ふべし。
【一〇六】嚕達羅は此れを暴惡と翻す。
【一〇七】左の地水を屈して掌に入れ、空指稍屈す。
【一〇八】三戟なり。
【一〇九】餘の三指開き散ずべし。
【一一〇】髑髏なり。

前の偈伽の印の如くなるは、是れ涅哩底の刀印なり。
前の輪印の如くなるを、三昧の手を以て之れをなす、是れ那羅延の輪印なり。
（二一）以て定と慧との手を轉じて、左右に相加ふ、是れ難陀跋難陀の二雲の印なり。
（二二）前の如く三昧の手を伸べ、虚空と地との輪相ひ加ふべし、是れ商羯羅の三戟の印なり。
前の如く三昧の手を伸べ、虚空と地との輪相ひ持すべし、是れ商羯羅の三后の印なり。
（二三）卽ち此の印を以て直く三輪を舒ぶべし、是れ商羯羅妃の印なり。
（二四）三昧の手を以て蓮華の相に作れ、是れ梵天の印なり。因んで潔白の觀を作す、是れ（二五）月天の印なり。
定と慧との手を以て（二六）顯現合掌して、虚空輪を屈して水輪の側に置く、是れ日天輦輅の印なり。
般若三昧の手を合せ、地輪と風輪とを內に向け、其の水火輪相ひ持すること弓の如くすべし、是れ（二七）社耶毗社耶の印なり。

【二一】先右手の五指を以て覆うて左膝に加ふ、是れ難陀なり。又左の五指を覆ふに右膝を加ふ、是れ跋難陀なり。
【二二】頭指少し屈すべし。
【二三】直く風火水の三指を散す。
【二四】左の五指半蓮花の印なり。
【二五】月天の印は梵天の印と異ることなし、但し蓮花上に白色の月輪ありと觀するを異とす。
【二六】左右の手開き仰いで並ぶるを云ふ。
【二七】社耶は此れを勝と翻し、毗社耶は此れを無勝と翻す、日天后なり。

前の幢印の如くなる、是れ風天の印なり。

三昧の手を仰け齊輪に在て、智慧の手の空と風と相ひ持して身に向けて、運動すること音樂を奏するが如くすべし、是れ妙音天の費拏の印なり。

前の羂索印の如くするは、是れ諸龍の印なり。

前の妙音天の印の如くし、而も（二八）風輪を屈して空輪の上に交ふ、是れ一切の阿修羅の印なり。眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一蘖囉邏延二莎訶」

（二九）內に向けて拳と爲して、而も水輪を舒るは、是れ乾闥婆の印なり。眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一微輸駄薩縛二合囉嚩引係儞平二莎訶」

（三〇）卽ち此の印を以て、而も風輪を屈する、是れ一切藥叉の印なり。眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一藥乞叉濕嚩二合囉莎訶」

（三一）又此の印を以て、虛空輪と地輪と相ひ持して、火と風とを伸ぶべし、是れ藥叉女の印なり。眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一藥乞叉二合尾儞耶二合達履二莎訶」

【二八】風指を空指の甲に加ふるなり。

【二九】內縛二水を開き散ず。

【三〇】內縛二風を屈す。

【三一】內縛して空を以て地の甲を捻じ、餘の三指竪てて間を開くべし。

內に向けて拳と爲して、而も火輪を舒ぶべし、是れ諸毘舍遮の印なり。眞言に曰く、

「南麽三曼多勃駄喃一比舍引遮曩底丁以反莎訶」

(二二二)改めて火輪を屈すべし、是れ諸毘舍支の印なり。眞言に曰く、

「南麽三曼多勃駄喃一比旨比旨二莎訶」

前の如くして定と慧との手を以て相合し、虚空輪を並べ之れを建立す、是れ一切執曜の印なり。眞言に曰く、

「南麽三曼多勃駄喃一蘖囉二合醯濕嚩二合哩耶二合鉢囉二合鉢多二合孺底丁以反麽耶三莎訶」

(二二三)復此の印を以て、虚空と火との輪相交ふ、是れ一切宿の印なり。眞言に曰く、

「南麽三曼多勃駄喃一怛吃灑二合娜囉二合儞入曩捺儞平曳三莎訶」

(二二四)卽ち此の印を以て、二の水輪を屈して掌中に入るべし、是れ諸の羅刹娑の印なり。眞言に曰く、

「南麽三曼多勃駄喃一囉吃灑二合娑引地鉢多曳二莎訶」

三昧の手を伸べて、以て面門に覆ひ、(二二五)爾賀嚩を以て之れを觸るべし、是れ諸の荼吉尼の印なり。眞言に曰く、

「南麽三曼多勃駄喃一頡履二合訶二急呼」

【二二二】前印の二中指を稍屈す。

【二二三】合掌して右を以て左を押して二火を交へ二空を交へるなり。

【二二四】合掌して二水を屈して掌に入る。

【二二五】舌の梵語なり。

【二二六】上の諸尊皆大日如來の示現なる故諸の如來と云ふ。

祕密主、是の如くの上首の（二二六）諸の如來の印は、（二二七）如來の信解より生ぜり。即ち同じく菩薩の標幟にして其の數無量なり。（二二八）又祕密主、乃至身分の擧動住止は、應に知るべし皆是れ密印なり。舌相の轉ずる所の衆多の言說は、應に知るべし皆是れ眞言なり。是の故に祕密主、眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、已に菩提心を發し、當に如來地に住して曼荼羅を畫くべし。若し此に異るものは諸佛菩薩を謗するに同じ、（二二九）三昧耶を越ゆ、決定して惡趣に墮せん。』

【二二七】大日如來因位の信解願力を以ての故に此身密印を現して一切衆生を救ひ給ふ故に如來の信解より生ずと云ふ、

【二二八】上に明す所の印は有相の身密なり、以下は無相の三密を明す。

【二二九】一切如來の本所立誓願を三昧耶と云ふなり。

卷の第五

字輪品第十

爾の時に薄伽梵毘盧遮那、持金剛祕密主に告げて言はく、『諦に聽け祕密主、遍一切處の法門有り。祕密主、若し菩薩此の字門に住すれば、一切の事業皆成就することを得べし。

(一)「南麼三曼多勃馱喃阿

南麼三曼多勃馱喃娑

南麼三曼多伐折囉赧嚩

迦佉哦迦遮車惹社吒吒拏荼多他娜馱波頗麼

婆野囉邏嚩奢沙娑訶吃灑 二合右此一轉皆上聲短に之れを呼べ

(二)南麼三曼多勃馱喃阿

南麼三曼多勃馱喃娑

南麼三曼多伐折囉赧嚩

迦佉哦伽遮車惹社吒吒拏荼多他娜馱波頗麼婆野囉邏嚩奢沙娑訶吃灑 二合右此の一轉は皆去聲なり長に之れを呼べ

【一】阿娑嚩の三字は三部の義を顯す、阿は佛部、娑は蓮花部、嚩は金剛部なり。三部倶に發心修行菩提涅槃の四轉を轉ず。第一の阿は發菩提心の體なり、娑と嚩とは此れが眷屬なり、伽佉等の四五の字、及び野等の九字悉く阿字輪に入る、娑と嚩も准じて知るべし。是れ則ち一字より多字を轉生する故に、名けて字輪と云ふなり。此の佉迦等の字は發菩提心の功德を標するものなり。

【二】行者已に菩提心を發す、故に當に進んで菩提の行を修すべし、故に次に娑嚩の字輪を明す、是れ行なり。

(三)南麼三曼多勃馱喃暗

南麼三曼多勃馱喃糝

南麼三曼多伐折囉赧鍐

劒欠儼儉占襜染贍䛼𠴨喃湛擔探喃淡唵呸㘞嚩闍嚂監鍐睒衫參甜吃衫二合

其の口邊字は皆第一轉を帶す本音に之れを呼べ

(四)南麼三曼多勃馱喃噁

南麼三曼多勃馱喃索

南麼三曼多伐折囉𠼝嘆

屩却虐噱灼綽弱杓礫坼搦擇咃託諾鐸

髆泊漠髆　藥嚹落嘆鑠　嗦索矐吃索　二合皆第一轉の音を帶す入聲に之れを呼べ

伊縊塢烏哩嚦里狸翳藹汙奧

仰壤嶚蠰莽　喁穰儜囊忙　噞髯喃南鍐　嚯弱搦諾莫」

秘密主、是の如くの字門の道は善巧法門なり、次第に眞言の道に住すべし、(五)一切如來の神力の加持し給ふ所なり。善く正遍知の道を解するは、菩薩の(六)行舞なり。(七)過去と未來と現在との諸佛世尊已に說き、當に說き、

【三】已に菩提の行を具足すれば則菩提を成ずべし、故に次に大空點を冠したる字輪を明す、大空智は卽菩提の故に。

【四】已に菩提を成ずれば當に何れの所にか至るべき、謂く大涅槃なり、故に次に涅槃の點を附けたる字輪を明す、傍の二の圓點は卽ち涅槃の點なり、又三部門輪の觀念の作法は大意の段の如し。

【五】斯の如くの悉曇の字母等は世間の文字に同じと雖、然も此の諸字は皆是れ如來の加持神力を以て法界體性より流出し給ふ。故に是の不思議の業用あり、若し人此中の意を了解すれば、卽菩提に通達す。

【六】衆生に隨順して種種の威儀を現するを云ふ。

【七】十方三世の諸佛同道を示す。皆此字門に由て普く色身

今說き給ふ。祕密主、我れ今普く諸佛の刹土を觀ずるに、此の遍一切處の法門を見ざることなし。彼の諸の如來宣說し給はざるものあることなし。是の故に祕密主、若し眞言門に菩薩の行を修せんことを了知せんと欲はば、諸の菩薩は此の遍一切處の法門に於て、應に勤て修學すべし。(八)阿遮吒多波に於て、初中後相ひ加し、等持の品類を以て相入すれば、自然に菩提心と行と成等正覺と及び般涅槃とを獲得す。此等の說く所の字門、相ともに眞言法敎に和合して初中後俱なることあり。眞言者若し是の如く知るときは、其の自心に隨て而も自在を得べし。此の一一の句に於て決定の意を以て之れを用ふべし。慧を以て覺知するときは當に無上殊勝の句を授けらるべし。是の如く一輪より字輪を輪轉す、眞言者此れを了知するが故に、常に世間を照すこと(九)大日世尊の如くして而も法輪を轉ず。」

を現じて種種の門を以て佛道を開示するなり。

【八】 阿遮吒多波は前の迦等の眞言の初の二十字の中の各四字の最初の字を擧げて餘を顯す、又初中後とは阿阿引の暗惡噁引の五字を初とし、迦等の二十字を中とし、野羅等の字は佉等の字を助成する涅槃點の字なる故に後と云ふ、更に問へ。

【九】 此字輪の法門は阿闍梨弟子の爲に曼荼羅を建立せんと欲する時に、自身大日如來と成りて之れを建立すべし。此字門を以て身に布して身を成すれば、是身卽大日如來也。

祕密曼荼羅品第十一

爾の時に薄伽梵毗盧遮那、如來眼を以て一切法界を觀察して、(一)法界俱舍に入り給ふ。(二)如來平等莊嚴藏三昧を奮迅し給ひ、(三)法界無盡莊嚴を現じ給ふを以ての故に、是の眞言行門を以て、無餘の衆生界を度し、本願を滿足し給ふ。故に時に佛三昧の中に在まして、是の如くの無盡の衆生界に於て、衆の聲門より隨類の音聲を出し給ふこと、其の本性の如く、業生成熟して、果報を受用する顯と形との諸色の。種種の語言と、心の思念する所において、而も爲に法を說き、一切衆生をして、皆歡喜を得しめ給ふ。復た一一の毛孔より法界の(四)增身を出現し給ひ、出し已て虛空に等同なり。無量世界の中に於て、(五)一一の音聲の法界の語表を以て、如來(六)發生の偈を演說し給ふ。

『能く隨類の形、諸法と法相とを生ず。
諸佛と聲聞と、救世の因緣覺と、勤勇の菩薩衆と、及人尊も亦然なり。
衆生と器世界と、次第に而も成立し、生住等の諸法、常に恒に是の如く生ず。

【一】如來自證の三昧なり、此位は微妙絕對にして他に示す可らざる境界なり。
【二】如來の神力加持を以て身口意種種の形相を示現して法界に遍滿するを云ふ。
【三】平等法界を以て法身を莊嚴して衆生を度するなり、即ち自證の位より加持身を現ずるなり。
【四】普現色身卽ち種種の形を增身と云ふ。
【五】阿字門なり。
【六】法界體性の阿字門より能く十法界の一切法を生ずることを明す、故に發生の偈と云ふなり。

智と方便とを具するに由て、慧の無き疑を離る。而も此の道を觀じ給へるが故に、諸の正遍知を說き給ふ。』

爾の時に法界より生じたる如來身、一切法界に於て、自の身表を化して雲の如く遍滿せり。毘盧遮那世尊纔に心を生じ給ふ頃に、諸の毛孔中より無量の佛を出して、展轉して加持し已つて、還つて法界宮の中に入ぬ。是に於て大日世尊、復持金剛秘密主に告げて言はく、『秘密主、曼荼羅の聖尊の分位と種子と標幟とを造ることあり、汝當に諦に聽き善く思ひ之れを念ずべし、吾今演說せん。』持金剛秘密主言さく、『是の如く世尊願樂くは聞かんと欲す。』時に薄伽梵偈頌を以て曰く、

(七)『眞言者は圓壇を、先づ自體に置け、足より而も齊に至ては、大金剛輪を成す。

此れより而も心に至ては、當に水輪を思惟すべし、水輪の上に火輪あり、火輪の上に風輪あり。

(八)次に持地を念じて、而も衆の形像を圖くべし。』

(九)爾の時に金剛手、大日世尊の身と語と意との地に昇て、法において平等觀を以て、彼の未來の衆

【七】 阿闍梨曼荼羅を建立して弟子の爲に灌頂せんとする時に、先づ自身を觀ずる作法を明す、即ち五字嚴身なり、圓壇とは空大なり、此壇の五輪の形は正く身分と相ひ稱はしむべし。

【八】 壇地を加持することを觀念するを云ふ、即ち自の五輪を倒して、壇地に之を觀じて、其上に曼荼羅を畫くなり。曼荼羅を畫く時は自身及び壇地を觀じて五輪と爲し、種子の身を加持して五輪と爲して後に之れを畫くべきなり。

【九】 金剛手即ち大日如來なれども、衆生を度せんが爲に菩薩の身を現ず。

生を念じて、一切の疑を斷せしめんが爲の故に、大眞言王を說て曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一阿三忙引鉢多二合達摩馱覩二曩登反底孕曩哆喃三薩婆他引四（一〇）暗引欠引暗噁五糝索六含鶴七藍嚕八鑁縛九急呼莎訶𤙖十藍嚕訶囉二合鶴十一莎訶藍落十二莎訶』

持金剛祕密主、此の眞言王を說き已ぬ。時に一切如來、十方世界に住して、各右の手を舒べて執金剛の頂を摩でて、「善哉」の聲を以て而も稱歎して言く、『善哉善哉佛子、汝已に毘盧遮那世尊の身と語と意との地に超昇せり。一切の方所の平等の眞言道に住する諸の菩薩を照明せんと欲ふが爲の故に、此の眞言王を說く。何を以ての故に、毘盧遮那世尊應正等覺、菩提の座に坐し給ひしとき、（一一）十二句の法界を觀じて、四魔を降伏し給ふ。此の法界生は、三處より流出して天魔の軍衆を破壞す。次に世尊の身と語と意と平等を得て、身量虛空に等同なり。語と意との量も亦是の如し。無邊の智生ずることを逮得して、一切の法に於て自在に而も法を演說し給ふ。所謂此の十二句は眞言の王なり。佛子、汝今現に毘盧遮那世尊の平等の身と語と意とを證するが故に、衆に知識せらるること正遍知者に同じ。』而も偈を說いて言く、

『汝一切智の、大日正覺世尊に、最勝の眞言の行を問ひたてまつる、當に法敎を演說すべし。
我往昔是れに由て、妙菩提を發覺し、一切の法を開示して、滅度に至らしむ。

【一〇】暗欠暗噁糝索含鶴藍嚕鑁嚩の十二字を十二眞言の王と云ふ。
【一一】卽ち十二眞言王なり、此眞言王は法果の體性なり。

現在十方界の、諸佛咸く證知し給ふ。』
爾の時に具徳金剛手、心に大に歡喜し、諸佛の威神に加持せらるるが故に、而も偈を說いて言さく、
『是の法は盡くること有ることなく、自性も無く住も無し、業と生とに於て解脫して、正遍知に同じ。諸の世を救ふ方便を以て、悲願に隨て轉じて、無生智を開悟し給ふ、諸法は是の如きの相なり。』
時に執金剛祕密主、復(一二)優陀那の偈を說いて、毘盧遮那世尊に請問したてまつりて、此の大悲藏より生ずる大曼荼羅に於て、疑ふ所を決斷す、未來世の諸の衆生の爲の故なり。

『已に一切の疑を斷じ給へる、種智は熱惱を離れたり、我衆生の爲の故に、(一三)導師に請問したてまつる。
曼荼羅は何をか先とする、唯、大牟尼說き給へ。阿闍梨に幾かある、
弟子に復幾種かある、
云何んが(一四)地相を知る、云何にしてか而も擇治せん、云何んが當に作淨すべき、(一五)云何んが彼に堅住せん、
及び諸の弟子を淨むる、唯願くは導師說き給へ。云何なるか已に淨むる相なる、何を以てか而も護ることを作す、

【一二】優陀那は惣じて攝するの義なり。一偈を以て無量の法義を攝するが故に。
【一三】此より以下に四十五問あり。
【一四】地の好惡の相を知て其好地を取るなり。
【一五】魔障の爲に惱まさるるが故に之れを避けて安穩に住することを問ふなり。

云何んが地を加持する、事業には誰をか初とする、修多羅に幾かある、云何にしてか地分を作す、幾種の供養を修する、云何なる華と香と等をかせん、此の華當に誰にか獻るべき、香も亦復是の如し、

云何んが而も奉獻せん、何の華と香とをか以てすべき、諸の食と護摩と、各何の軌儀をか以てせん、

及び諸の聖天の座、願くは此の敎法を說き給へ。身相の顯と形との色、唯次第に開演し給へ。尊ぶ所の密印と、及與自ら敷く座とを說き給へ。何が故にか名て印と爲し、是の印何に從てか生ずる。

灌頂に復幾種かある、三摩耶に幾かある、眞言者は幾時にか、眞言の行を勤修して、當に菩薩の道を具すべき、云何にしてか眞諦を見る、悉地に幾の種かある、及與成就の時を說き給へ。

云何にしてか大空に昇る、云何なるか身祕密、此の身を捨てずして而も天身と成ることを得る、種種の諸の變化、彼れ復何に從てか生ずる、日と月と火と方と等、曜と宿との星の時分の、現ずる所の諸の不祥と、生死の衆の苦を受くるとを、云何にして起らざらしめ、起す所を盡く除滅せしめて、而も常に諸佛兩足尊に、親近することを得ん、

幾種の護摩の火かある、幾の事を以てか而も威を增す、諸佛の差別の性、唯願くは導師說き給へ。
無餘の諸世界と、及與出世間と、彼の果と及び數と量との、殊勝の三摩地と、
成熟すること何の所にか在る、成熟せざること云何ぞ、復幾の時を齊てか、業と生とを解脫することを得る。』

（一六）正覺一切智、熱惱を離れたる世尊、金剛手に告げて言はく、『善哉大勤勇、
祕密曼荼羅の、聖天の位を決定す。大悲を根本として生ずる、無上摩訶衍の、諸佛の最祕密なり。
汝が問ふ所の如く、大力持金剛、我今略して曼荼羅の初業を宣說すべし。
佛子應に諦に聽くべし、（一七）十二支句生の、大力持明王は、最も先きに作すべき所なり。
本三昧に住し、瑜伽の道を解了して、而も衆の事業を作せ。
（一八）阿闍梨に二あり、印と眞言とに通達せり。彼の相も亦是の如し、深祕と顯略との分あり。
能く深廣の義を知て、傳ふべき者には方に授く、正覺の長子なり、遠く世の樂を離す。

【一六】以下は大日如來の答說なり。
【一七】十二支句より生ずる所の大力持明王なり、即大日如來なることを示して王と云ふ。
【一八】深祕と顯略とを二の阿闍梨と云ふ、深祕は出世間の阿闍梨、顯略は世間の阿闍梨なり。

(一九)第二は現法を求め、深く癡の攀縁に著す、世間の曼荼羅なり。一切斯れが爲に作る。

諸佛二足の尊、灌頂傳授の者に、(二〇)四種の弟子を說き給ふ、時と非時と差別なり。

(二一)一には時念誦と、非時と倶と非倶とあり。(二二)具に一切の相あるは、佛親の弟子なりと說き給ふ。

最初に地相を知るべし、即ち所謂(二三)心地なり。我已に作淨を說き、前の如く事業を修すべし。

若し過患を離るれば、心地に畏るる所なし、當に眞淨を成ずることを得て、一切諸の過を離るべし。

堅く是の如きの知に住すれば、自の三菩提を見る。若し此に異なるものは、能く淨地を淸むるにあらず。

若し妄分別に住せば、行者其の地を淨むべし。祕密主淨に非れば、菩提心を離るるを以てなり。

故に應さに分別を捨てて、一切の地を淨除すべし。我廣く法敎にある所の、曼荼羅を說くべし。

【一九】以下第二顯略の阿闍梨の相を明す。

【二〇】時念誦の弟子、非時念誦の弟子、時非時倶念誦の弟子、倶非念誦の弟子を四種の弟子と云ふ。

【二一】若干の期限を以て修行して成就を得るを時念誦と云ふ。期限中に成就を得ざる故に更に加行を加修するを非時と云ふ。又如法に修行せずして成就の時に至らざる故に非時なり。更に依行せざる故に倶なり、未だ具せざる所ありて眞言を與ふることを得ざる弟子を非倶と云ふ。此れ攝受する弟子の相なり。

【二二】諸根相好等の具するは外相なり。一一如法に修行して師命に違せざるは内相なり。

【二三】弟子の菩提心地なり。

是の中に先とする所の事を、愚癡にして知解せざれば、世間の覺と名くるに非ず、亦一切智に非ず、乃至分別諸苦の因を捨ること能はず。應當に弟子の爲に、而も菩提心を淨むべし。

護るに（二四）不動尊を以てす、或は降三世を用ふ。

若し弟子、妄執の爲に動ぜられざれば、當に最正覺を成ずべし。垢なきことを虚空に喩ふ。

初には是の地を加持すること、諸佛の敎に依る。第二は心自在なり、唯此れ餘敎に非るなり。

四種の（二五）蘇多羅あり、謂く白と黄と赤と黒となり、第五に念ずべき所は、所謂虚空の色なり、

空の中に而も等しく持して、曼荼羅を印定す。第二に紐經を持して、道場の地に置け。

（二六）一切如來の座と、及び諸佛智子とには、悅意の妙蓮華なり、世間に吉祥と稱す。

縁覺と諸の聲聞とは、所謂邊智の者なれば、當に知るべし敷く所の座は、芰荷青蓮の葉なり。

世界の諸天神は、梵衆を以て初と爲す。赤色の鉢曇華なり、彼を稱して座の王となす。

此を降ては應き所の如く、念じて其地分に居らしめよ。供養に四種あり、謂く作禮と合掌と、

【二四】淨菩提心堅固不動の體なる故に而も其心を護りて傾動せざらしむ、又三世は卽ち三毒なり。

【二五】此れは綖と翻す、德衆を連持して散逸せざらしむるの義なり。

【二六】如來の座は八葉蓮の全く開けたるもの、菩薩の座は半開なるを以てすべし。

并及に慈と悲と等と、世間の華と香とを與ふると、手より發生する華とを、諸の救世者に奉る。支分生の印を結んで、而も菩提心を觀ぜよ。各各の諸の如來と、彼の所生の子と等に、是の無過の華の、芬妙あり復光顯にして、法界を樹王と爲るを以て、人中の尊に供養す。眞語を以て加持し、三昧自在に轉ず、勝妙にして廣きこと大なる雲の如くして、法界の中より出生す。

彼れより衆華を雨らして、常に諸佛の前に遍ず、其の餘の世天等に、亦此の華を散ずべし。奉獻せんときには、隨て本眞言と性類とに相應せよ。是の如く塗香等も、亦其の興き所に隨ふべし。

(二七)空と水との輪を相持する、是れを吉祥の印と謂ふ。彼の奉る所の華等は、自心に當てて之れを獻むべし。若し諸の世天神ならば、齊の位に在りと知るべし。(二八)或は金剛拳の印、若くは復蓮華鬘を以て、而も空中に在て、導師救世者に獻むべし、乃至諸の世天、各其の次第の如くすべし。

(二九)護摩に二種あり、所謂内と及び外となり。業と生とに解脫を得て、

【二七】右手に空水の二指相捻じて餘の三指皆之れを舒べ散ずる小三股の印なり。此印を以て一切の供養物を加持するなり。

【二八】普通吉祥の印を作さずして金剛拳或は蓮花鬘の印を以て加持することを明す。何れも右手を以て作すべし。

【二九】護摩の義を明す。護摩は是れ燒の字義なり。

【三〇】菩提心の芽は菩提心の種子より生起するなり。

(三〇)復芽は種より生ずることあり、
能く業を燒くを以ての故に、説いて內護摩と爲す。外用に(三一)三位あり、
三位は三の中に住して、三業道を成就す、世間の勝れたる護摩なり。
若し此れに異て作すものは、護摩の業を解せざるなり。彼癡にして
果を得ず、眞言の智を捨離す。

(三二)如來部の眞言と、及び諸の正覺の説とは、當さに知るべし白と黃
となり、金剛には衆色を具す。
觀自在の眞言は、純素にして事に隨て遷す、

(三三)四方相ひ重て普し、輪圓なること次第の如し。
三隅と半月輪と、而も形を説くこと亦然なり。

(三四)初に應さに色像を知るべし、所謂男女の身なり、
或は復一切處に、其の類の形色に隨て、不思議の智生ず。
是の故に不思議にして、物に應じて殊異あれども、智と智證と常に一なり。乃至心の廣博なるこ
と、當さに知るべし是れ其の量なり。
座と印とも亦是の如し、以て諸の天神に及ぼす、(三五)諸佛の生ずる所の如く、印も彼れに等同にし

【三一】本尊と眞言と印となり、本尊は所奉の尊なり、卽火中に此曼荼羅あるべし。眞言は卽體なり。印は行爲なり。又外護摩に由て能く內護摩に引入せしむ。其實は內外の理本より差別なし、然れども世間の成就を求むる者の爲めに此外護摩作法をなすなり

【三二】色及び形類を釋す。

【三三】曼荼羅の形を説く、四方は増益、輪圓は息災、三隅は降伏、半月は攝召なり。息災前きにあるべしと雖音便に隨て増益を前に置くなり。

【三四】諸の形像を明す。

【三五】此印は何れより生ずると云ふを釋す。

て生ず。
此法より生ずる印を以て、諸の弟子を印持す、故に略して法界を說いて、是を用ひて標幟と爲す。
(三六)灌頂に三種あり、佛子至心にして聽くべし。若し祕印の方便は、則ち作業を離る、是れを初の勝法と名く。如來の灌頂し給ふ所なり。所謂第二とは、衆事を起作せしむ。第三には心を以て授く。悉く時と方とを離る。尊をして歡喜せしむる故に、所說の如く作すべし。現前に佛灌頂し給ふ、是れ則ち最も殊勝なり。(三七)正等覺略して、五種の三昧耶を說き給ふ。
初は曼荼羅の具足せるを見る三昧耶なり、未だ眞實の語を傳へず、彼の密印を受けず。
第二の三昧耶は、入て聖天の會を觀るなり。第三は壇と印とを具し、敎に隨て妙業を修す。
復次に傳敎を許すには、三昧耶を具することを說く。印壇の位を具して、敎の所說の如くすと雖、未だ心灌頂に逮ばざれば、祕密の慧生ぜず。
是の故に眞言者、祕密道場の中に於て。第五の要誓を具して、法に隨て灌頂すべし。
當さに知るべし、此に異なるものは、三昧耶と名くるに非ず。

【三六】灌頂の種類を明す印法灌頂（現の許可）、事業灌頂（現の傳法）、以心灌頂（現の瑜祇）
【三七】五種三昧道を明す、第一現の曼荼羅供作法、第二結緣灌頂、第三受明灌頂、第四傳法灌頂、第五瑜祇灌頂と傳ふ。

善く住して若し意を觀ずれば、眞言者心を覺て、（三八）三處を得ざれば、彼れを說いて菩薩と爲す。
無緣の觀行を得て、方便を以て衆生を利す、衆の善本を植ゑしめんが爲めなり、故に人中の勝と
號す。
諸法の本寂にして、常に自性無き中に於て、安住すること須彌の如し。是れを名て見諦と爲す。
此れ空にして即ち實際なり、虛妄の言說に非ず、見る所猶し佛の如し、
先佛も是の如く見給へり。
菩提心を逮得する、悉地は最も無上なり。（三九）此れより五種の、諸の悉
地に差別あり。
所謂修行に入ると、及び諸地に勝進すると、世間の五神通と、諸佛と
緣覺と等なり。
修業に間息無くして、乃至心續淨に至り、未だ熟せざるを成熟せしむ。
爾の時に悉地成ず。
彼の一時の頃に於て、淨業と心と倶に等し、眞言者當さに、悉地意に隨て生ずることを得べし。
悉地は空界に昇ること、幻の見るる者無きが如し。咒術の網に惑はさるること、帝釋の網に同じ。
乾闥婆城の所有の、諸の人民の如し。身の祕密も是の如し。身に非ず亦識に非ず。

【三八】自身と所觀の法と悉地の時とを三處といふ。

【三九】最無上の悉地以前に五種の悉地あり、一、祕密藏を信じて疑はず。二、初地歡喜地に入る。三、世間五通仙人の地を度す。四、二乘地を度して第八地に入る。五、第九地より菩薩の行道を修して勝進して如來地に入る、此位は佛果の入心也。

又睡夢に於て、諸天の宮に遊べども、此の身をも捨てず、亦彼にも至らざるが如し。
是の如く瑜伽の夢の、眞言行に住する者の、功德の業より生ずるところの、身相は猶し虹霓のごとし。
眞言の如意珠は、意と語と身とより出生し、念に隨て衆の物を雨らせども、而も分別の想なし。
十方の虛空の、諸の有爲の行を離れたるが猶く、眞言者も、一切の分別の行に染せられず。
唯想のみありと解了して、是の如く遍く觀察すべし。爾の時に眞言者を、諸佛同じく隨喜し給ふ。

〔四〇〕正覺兩足の尊、二種の護摩を說き給ふ、所謂內と及び外となり。
威を增すことも亦是の如し。

〔四一〕諸尊の殊類と性とを、觀察して當さに證知すべし。〔四二〕世間の諸の
眞言には、今彼の限量を說く。
福德自在等ある、衆の知識する天神と、彼の所說の明呪と、及與大力
の印とは、
彼は皆現世の果なり、故に分量ありと說く。成ずと雖も堅く住せず、悉く是れ生滅の法なり。
出世間の眞言は、無作にして本不生なり。業と生と悉く已に斷じ、戰勝して三過を離れたり。
麟角の無師者と、及び佛の聲聞衆と、菩薩との諸の眞言は、彼の量我れ當さに說くべし。

〔四〇〕前に略して護摩の相を說くと雖、今更に內外の護摩を分別す、外護摩は內護摩の爲めの方便なり。
〔四一〕諸尊の別相と本性とを明す。
〔四二〕世間と出世間との眞言の量を說く。

三時を超越して、衆緣より生起する所なり。可見と非見との果、意と語と身とより生ず。
世間の所傳の、果と數とは一劫を經。等正覺の所說の、眞言は劫數を過ぐ。
大仙正等覺と、佛子衆との三昧は、淸淨にして想を離れたり。有想をば世間と爲す。
業に從つて而も果を獲るものは、成熟と熟時とあり。若し悉地を成ずることを得れば、自在に諸の業を轉ず。
心自性無きが故に、遠く因と果とを離る。業と生とを解脫して、〔四三〕生虛空に等同なり。』

〔四四〕『復次に祕密主諦に聽け。彼の密印と形相と、聖天の位を敷き置くと、威驗現前すると、三昧の趣く所と、是の如きの五つの者は、往昔の諸佛の菩提を成じ給ふ法界虛空の行なり。本誓願し給ふ所は、無餘の衆生界を度脫し、彼の眞言門に菩薩の行を修する、諸の菩薩を利益し安樂ならしめんと欲ふが爲の故なり。』金剛手の言さく、『是の如く世尊、願樂くは聞かんと欲す。』時に薄伽梵、偈頌を以て曰はく、

『最初の正等覺、敷置の曼荼羅は、密中の祕密なり、大悲胎藏より生ず。
及び無量の世間と、出世との曼荼羅の、彼の所有圖像、次第に說かん當さに聽くべし。

【四三】以上は略說偈を以て金剛手の問に答へ了りぬ。次の段より更に長行を以て之れを說き給ふなり。

【四四】此中略して五事を說く、手印と、本尊の形相差別と、曼荼羅の所住の方位即方圓三角半月等、本尊本座に來至して住すると、三昧となり。此の五緣を具するに由て、世間出世間の一切の曼荼羅成就する也。

四方にして普く周帀せよ。一門と及び通道とあらしめよ。(四五)金剛印を以て遍く嚴る、中に(四六)羯磨金剛あり。其の上に妙なる蓮華あり、開き敷て果實を含めり。彼の大蓮の印に於て、(四七)大空點莊嚴せり。

(四八)八葉悉く圓整なり、善好にして鬚蘂を具す。

十二支生の句、普く華臺の中に遍くして、其の上に兩足尊の、導師正覺を成じ給ふ。八曼荼羅の、眷屬を以て自ら圍繞せり。當に知るべし此れ(四九)最初の、悲生曼荼羅なり。(五〇)此れより諸の壇を流す、各其の本教の如し。(五一)事業と形と悉地と、諸佛子を安置するとなり。

(五二)復次に祕密主、如來の曼荼羅は、猶し淨圓月の如く、內に商佉の色を現ず。

【四五】三股金剛を金剛智印と云ふ、之れを周匝に相ひ連ねて四方の界をなすなり。

【四六】十字羯磨杵を云ふ。

【四七】中臺八葉に各一點の故に九點を想ふなり。

●　●　●
●　●　●
●　●　●

【四八】此八葉と中臺との中に方と圓とを作して尊像を畫くべし。佛は方壇菩薩は圓壇なり。

【四九】中臺八葉なり。

【五〇】緣境の所應作の事業と本尊の顯形色と本尊の方位と所成の果の悉地との四法を了解する者は流出の法に通ず。

【五一】以上は大日曼荼羅を明し了る、以下は次に佛部の曼荼羅を明す。左圖を見よ。

【五二】以下蓮花部の曼荼羅を明す。前の具緣品は都べて會境也。今此中は三部各別の境なり、蓮花部は觀音を以て主として中臺に置き、次に外三重の第一重には十方諸佛、第二重には觀音部の諸尊、第三重には八部衆等なり。

一切の佛三角にして、白き蓮華に在す。空點を標幟と爲し、金剛印をもて圍繞し、彼の眞言主により、周帀して光明を放つ。疑慮無き心を以て、普遍して而も流出す。

(五三)復次に祕密主、觀世自在者の、祕密曼荼羅は、佛子一心に聽け。普通四方の相にして、中に吉祥の(五四)商佉あり。鉢曇華を出生す、開き敷て果實を含めり、上に金剛の慧を表し、承くるに大蓮の印を以てせり。

一切の種子を布して、善巧に以て種となすべし。多羅と毗倶知と、及與白處尊と、

明妃資財主と、及與大勢至と、諸の吉祥の受教と、皆曼荼羅に在り。得自在者の印は、殊妙にして標相を作せ。何耶掲唎婆は、法の如く三角に住して、

曼荼羅圍繞せり、嚴好にして初日の暉あり、當に(五五)明王の邊に在くべし、巧慧のもの安立すべし。

(五六)復次に祕密主、今まさに第二壇を説かん。正等四方の相なり。(五七)金剛の印を以て圍繞し、

【五三】馬頭の壇は中臺三角の故に外に重ねて之に隨ふべし、此時は中臺の觀音を以て勢至の處に移して、馬頭を中臺に安く、餘の眷屬は之れを圍繞す。

【五四】螺貝なり、大勢至の標

【五五】以下金剛部曼荼羅を明す、金剛手を以て中臺として、餘の部類を第二院とし、八部を第三院となすなり。

一切妙にして金色なり、內心に蓮華を敷け、臺に迦羅奢を現す、光の色淨月の如し。
亦大空點を以て、周帀して自ら莊嚴せよ。上に大風の印を表す、靉靆
として猶し玄き雲のごとし、
鼓動せる幢と幡との相なり、空點を標幟となすべし。其の上に猛き焰
を生ず、劫災の火に同じくして、
而も三角の形を作せ、三角を以て之れを圍らせ、光鬘相周普くして、
晨朝の日の暉の色なり。
是の中に鉢頭摩あり、朱顆なること猶し劫火のごとし。彼の上へに〔五八〕
金剛印あり、流れ散て焰暉を發す。
持するに吽字の聲を以てすべし、勝妙種子の字あり、先佛も是れ汝
が勤勇の曼荼囉なりと說き給へり。
部母と商羯囉と、及び金剛部生と、金剛鉤と素支と、大德持明王と、一切皆な此の大曼荼羅の中
に於て、印と壇と諸の佛子との、形と色とあり、各次の如く、類に隨て而も相應すべし、諸業善
く成就す。
復次に我が說く所の、金剛自在者は、謂く虛空無垢と、金剛輪と及び牙と、

〔五六〕三股金剛を以て界線として之れを繞らすなり。

〔五七〕五股金剛杵なり

〔五八〕中臺大日の下持明院の不動と降三世との中間に置くべき諸金剛を擧ぐ

妙住と名稱と、大忿と及び迅利と、寂然と大金剛と、幷に及び青金剛と、
蓮華と及び廣眼と、妙金剛と金剛と、及び住無戲論と、無量虛空步となり。
是れ等の曼荼羅に、說く所の白と黃と赤と、乃至黑色等と、印と形と及び所餘となり。
三戟と一股印と、二首皆五峯なると、或は執金剛の鑁と、色類に隨て區ちに別なり、
一切種子を作せ、大福德當に知るべし、(五九)不動の曼荼羅は、風輪と火と倶なり。
涅哩底の方に依て、大日如來の下にあり、及び種子圍繞し、微妙の大慧刀と、
或は復羂索印と、具慧の者安布せよ。
降三世は殊異なり、謂く風輪の中に在て、繞すに金剛印を以てすべし。
而も三處に住せり。

(六〇)復次に祕密主、先曼荼羅の、諸佛菩薩の母を說かん。
壇の形像を安置せば、方正にして眞金色なり、金剛印を以て圍繞すべし、最勝の曼荼羅なり。
今當さに尊相を示すべし、彼の中に大蓮華あり、暉焰遍くして黃色なり。中に(六一)如來頂を置け、

(五九) 不動の曼荼羅を明す、半月の壇中に三角形を畫き、其中に不動尊を安ず。若し別に此曼荼羅を造らば、大日を中院の東方に移して、不動を中に置くなり。

(六〇) 以下佛母曼荼羅を說く。

(六一) 卽佛頂の印なり。左圖の如し。

〔六二〕中分を超越して、而も三分の位に至て、應さに如來眼を作すべし。自ら光焰の中に住す、遍く彼の種子を布すべし。

〔六三〕次に一切菩薩の、大如意寶尊あり、謂く彼の曼荼羅は、圓白にして而も四に出でたり。遍く寂にして極て淸淨なり。一切の希願を滿す。

〔六四〕復次に應さに諦に聽くべし、釋迦師子の壇は、謂く大〔六五〕因陀羅なり。

妙善眞金色にして、四方の相均等なること、前の如くにして金剛印あり。上に波頭摩を現せよ、周遍して皆な黄の暉あり、〔六六〕大鉢に光焰を具せり、金剛印圍繞せり。袈裟と錫杖等と、之れを置くこと次第の如し。五種の如來頂は、諦に聽け今當に説くべし、白傘は傘印を以てす、具慧者勝頂は、圍すに大慧刀を以てす。普遍く皆流光あり、最勝頂は輪印なり、除障頂は鉤印なり、大士頂は髻の相なり、是れを火聚の印と名く。

【六二】若し佛頂を以て中臺とせば、佛眼等を以て眷屬となすべし、中分とは中臺なり、三分の位とは外三重なり。

【六三】次に諸菩薩の曼荼羅を説く、圓明の中央に十字羯磨を置き、其上に如意珠を安く、即ち本尊を十字金剛の上に安き、諸餘の菩薩を第二院に安き、外金剛部を第三院に置くなり。

【六四】以下釋迦曼荼羅を明す。

【六五】四方正等の壇なり。

【六六】三股金剛の上に紅蓮花ありて、其上に大鉢を安く、若し佛形を作らば、釋迦佛を畫くべし、鉢を持せり、又右は袈裟、左は錫杖なり、大鉢は釋迦の三昧耶身なり。

廣生は跛折羅なり。發生は蓮華を以てす、無量聲は商佉なり。觀察して像類を知るべし。
毫相は摩尼珠なり。佛眼は次に當に聽くべし。
頂髻にして遍く黃色なり、圍すに跛折羅を以てす、無能勝妃の印は、手を以て蓮華を持す、
無能勝は、(六七)大口にして、而も黑蓮の上に在り、(六八)淨境界の行は、所謂淨居天なり、彼の諸の
印相を置くべし。
佛子應に諦かに聽くべし。所謂思惟手と、善手と及び笑手と、華手と
虚空手となり、
之れを畫くこと法則の如し、地神には迦羅奢なり、圓白にして金剛を
圍らせ。
請召火天の印には、當に大仙の手を以てすべし。
迦攝と驕答摩と、末建拏と竭伽と、婆私と儞剌婆とに、各其の次第の
如く、
應さに韋陀の手を畫くべし、而も火壇の内に居く。
閻摩には但荼の印なり、當に風輪の中に處くべし、沒栗底は鈴の印なり、黑夜は計都の印なり、
澇達羅には輸羅なり、大梵妃には蓮華なり、倶摩利には鑠底なり、毗瑟女には輪の印なり、

【六七】忿怒の口に雙牙を出せる者を云ふ。
上来明す所の諸位若しは釋迦を以て中とせば、則ち佛頂等を次の院に列居し、若し一一の本尊に隨て一尊を取て曼荼羅を作らば、釋迦を移して外に置くべし、餘はこれに準ぜよ。
【六八】以下は淨居天を始めとして、外金剛部の印を説く。

當に知るべし焔摩后には、沒揭羅の印を以てし、嬌吠離耶后には、劫跋羅の印を用ひよ。
是の如き等は皆な、風曼荼羅の中に在り、烏鷲と及び婆栖と、野干と等圍繞せり。
若し悉地を成せんと欲はば、法に依て之れを圖すべし。涅哩底には大刀なり、毘紐には勝妙の輪なり、
鳩摩羅には爍底なり、難陀跋難陀には、密雲と電と倶なり、皆な淸潭の色を具す。門の廂衞を夾輔して、釋師子の壇に在り。
商羯羅には三戟なり、妃には鉢胝の印を作す、月天には迦羅奢なり、淨白にして蓮華を敷けり。
日天には金剛輪なり、表するに輿輅の像を以てす、社耶毘社耶は當に知るべし大力の者なり、倶に大弓の印を以てす、因陀羅輪に在り。
風の方には風幢の印なり、妙音には樂器の印なり、縛嚕拏には羂索なり、而も圓壇の中に在り。
汝大我應さに知るべし、種子の字環繞せり。是の如き等の標誌は、次の如く曼荼羅の、釋師子の眷屬なり。
今已に略して宣說す、(六九)佛子次に諦に聽くべし。(七〇)施願金剛の壇は、四方相均しうして、普く衞らすに金剛の印を以てす。

【六九】以下曼荼羅第二重の菩薩の壇を明す、中に於て先東方文殊の曼荼羅なり。

【七〇】文殊師利の金剛名號なり。

【七一】三角を云ふ、即三角の中に青蓮花の印を作すなり。

當に彼の中に於て、(七一)火生曼荼羅を作して、内心に復妙善の青蓮の印を安置すべし。智者曼殊音の、本眞言をもて之れを圍らすべし。法の如く種子を布して、而も以て種子と爲すべし。

復其の四傍に於て、嚴飾するに青蓮を以てす。勤勇の衆を圖作すること、各其の次第の如し。

光網は鉤印を以てす、寶冠は寶印を持す。無垢光童子は、青蓮にして而も未だ敷かず。

妙音具大慧の、說く所の諸の使者は、當に知るべし彼の密印は、各其の所應の如し。

髻設尼には刀印なり、優波には輪羅印なり、質怛羅には杖印なり、地慧は幢印を以てす。

彼の招召使者には、鶖倶尸の印を以てすべし、一切是の如く作せ。圍らすに青蓮華を以てせよ。(七二)所有諸の奉教には、皆光揭棃の印なり。

(七三)復次に南方の印、除一切蓋障は、大精進の種子、謂く眞陀摩尼なり。

(七四)火輪の中に住して、翼從して端嚴の衆あり、當に知るべし彼の眷屬の、祕密の標志、次第に應に圖畫すべし。

【七二】以上は是れ東方文殊の部類眷屬なり、若し文殊を中臺とせば、餘の菩薩を第二重とし、八部を以て第三重とす、他は之に准じて知るべし。

【七三】以下南方除蓋障の曼荼羅を明す。

【七四】三角の曼荼羅なり、即三角の中に如意珠を畫き、又は寶形を畫くなり。

我今廣く宣說せん。（七五）除疑は寶瓶を以て、一股金剛を置く。聖者施無畏は施無畏の手に作せ、除一切惡趣は（七六）發起手を相と爲す、救意慧菩薩は、（七七）悲手常に心に在く、大慈生菩薩は、應さに華を執る手を以てすべし。

（七八）悲念は心上に在て、火輪手を垂れ屈す、除一切熱惱は、諸願を施す手を作せ、甘露の水流れ注いで、遍く諸指の端に在り、具不思議慧は、如意珠を持する手なり。

皆な蓮華の上に住して、曼荼羅の中に在り（七九）。（八〇）北方の地藏尊の密印は次に當に說くべし。

先づ莊嚴の座を作りて、因陀羅壇に在け、（八一）大蓮光焰を發して、間錯して衆色を備へたり、彼こに於て大幢を建てて、（八二）大寶を其の端に在く。

是れを名て最勝密印の形像と爲す。復當に殷勤に、上首の諸の眷屬を作るべし、無量無數の衆あり。

彼の諸の（八三）慕達羅は、寶作には寶の上に於て、三股金剛の印あり。

【七五】寶瓶の中に獨股杵を插で半ば瓶中に在り。
【七六】手を舒べて掌を仰げ下より上に向けて之れを擧ぐ。
【七七】空水指相捻じて心に當て餘は伸べ散す。
【七八】火指を屈して心前に向け餘指は皆伸べ散す。
【七九】以上は除蓋障の眷屬なり。
【八〇】以下北方地藏の曼荼羅を明す、本院の六尊は卽世間に傳ふる六地藏の本據なり。
【八一】雜色の蓮花座なり。
【八二】幢上に寶珠を安す。
【八三】慕達羅は印と翻す。

寶掌には寶の上に於て、一股金剛の印あり、持地には寶の上に於て、（八四）二首金剛の印あり、寶印手には寶の上に、五股金剛の印あり、堅意には寶の上に於て、羯磨金剛の印あり、

一切皆な應さに彼の曼荼羅の中に住すべし。（八五）西方の虚空藏は、圓く白き悦意の壇にして、大白蓮華の座あり、大慧刀の印を置け。是の如きの堅利の刃は、鋒鋭なること猶し氷と霜との如し、自の種子を種と爲す、智者當に安布すべし。及び諸眷屬の印形を畫くこと法教の如くすべし。虚空無垢尊は、應さに（八六）輪の印を以てすべし。輪像自ら圍繞す、具足して風壇に在り。虚空慧は商佉を風曼荼羅に在け、清淨慧は白蓮を風曼荼羅に在く、行慧の印相は、當に硨磲寶を以てすべし、上に青蓮華を挿む、風曼荼羅に在り、安慧は金剛蓮を風曼荼羅に在く。略して佛の祕藏の諸尊の密印を説き竟ぬ。』

【八四】五股の首を開かざるもの卽ち都五股の印なり。

【八五】以下西方虚空藏の曼荼羅を説く。

【八六】四股の刀輪の印なり。此の胎藏曼荼羅の中の文殊の一會に於て、凡て文殊と除蓋障と地藏と虚空藏との四菩薩あり、隨て一菩薩を具して上首として中境に安けに、餘の菩薩は各第二院に於て方を案じて之れを列ね、第三院には八部を置くべし。

入祕密曼荼羅法品第十二

爾の時に世尊、又復入祕密曼荼羅の法を宣說し給ふ。優陀那に曰く、

『眞言遍學者。祕密壇に通達して、法の如く弟子の爲に、一切の罪を燒き盡す。

壽命悉く焚滅して、彼をして復生ぜざらしむ、灰燼に同じ已つて、彼の壽命還つて復す。

謂く ㈠字を以て字を燒き、㈡字に因て而も更に生ず。一切の壽と及び生と、淸淨にして遍く無垢なり。

㈢十二支句を以て、而も彼の器に作せ。是の如きの三昧耶は、一切の諸如來と、

菩薩救世者と、及佛の聲聞衆と、乃至諸の世間と、平等にして違逆せず。

此の平等誓の、祕密曼荼羅を解せば、一切の法敎に入るに、諸壇に自在なることを得べし。

我身彼に等同なり、眞言者も亦然なり、相ひ異らざるを以ての故に、說て三昧耶と名く。』

【一】阿字を以て弟子の身と爲し、囕字を以て之れを燒きて無明の垢穢をして餘りなからしむ。

【二】嚩字の水を以て已に燒きたる心地に灑ぎて、阿字菩提心の芽を生ぜしむ。

【三】十二眞言王を以て身分に布するなり。初の四字は身の上分に布す、卽頂より額に至る、中の四字は身の中分に布す、兩肩と咽と心となり、後の四字は身の下分に布す、臍と腰と腿と足となり。又之れに就きて一は師自身に布し、二は以て曼荼羅を作り、三は弟子の身を加持す。

入祕密曼荼羅位品第十三

爾の時に大日世尊、等至三昧に入つて、㈠未來世の諸の衆生を觀じ給ふが故に、㈡定中に住し給ふ。即時に諸佛の國土地平なること掌の如し。㈢五寶間錯し、大寶の蓋を懸けて門標を莊嚴す。衆色流蘇して其の相長廣なり。寶鈴と白拂と名衣と幡珮とを、綺へ絢りて垂れ布いて而も之を校飾す。八方の隅に於て、摩尼幢を建て、八功德水芬馥し盈滿せり。無量の衆鳥鴛鴦と鵝鵠とありて、和雅の音を出す。種種の浴池に、時華と雜樹と敷き榮え間り列りて、芳茂嚴好なり。八方に五寶の瓔珞を合せ繫けたり。其の地の柔軟なること、猶し綿纊の如し。之に觸れ践む者は皆な快樂を受く。無量の樂器、自然に韻を諧ぶ、其の聲微妙にして人の聞かんと樂ふ所なり。㈣無量の菩薩の福に隨つて感ずる所の、宮室殿堂意生の座あり。如來の信解願力より生ずる所の、㈤法界標幟の大蓮華王を出現して、如來の法界性身、其の中に安住し、諸衆生の種種の性欲に隨つて、歡喜を得しめ給ふ。時に彼の如來の、一切の支分に、無障礙力あり。十智力信解より生ずる所なり。無量の形と色との莊嚴の相あり、無數百千俱胝那由他劫の、布施持戒忍辱精進禪定智慧の、諸度の

【一】此經は遠く未來機の爲に說き給ふこと分明なり。

【二】定中に住し給ふ意趣は、佛は無相寂滅相の法に住し給へども、大悲の故に此三昧に入つて衆生の爲に大悲胎藏曼荼羅を見しめ給ふ、卽是れ無相の中に於て而も有相を現ずるなり。

【三】金銀瑠璃眞珠琥珀なり。

【四】隨樂顯現の淨土を明す。

【五】法爾自然の淨土を明す。

功德に資長せらるる身、卽時に出現す。彼出現し已つて、諸の世界大衆會の中に於いて、大音聲を發して、而も偈を說いて言はく、

『諸佛は甚だ奇特にして、權智不思議なり、阿賴耶無き慧を以て、含藏して諸法を說き給ふ。
若し無所得を解すれば、諸法の法相において、彼無得にして而も得し、諸佛の導師を得べし。』

是の如きの音聲を說き已て、還て如來の不思議法身に入る。

爾の時に世尊、復執金剛祕密主に告げて言はく、『善男子、諦に內心の曼荼羅を聽け。祕密主、彼の身地は卽是れ法界の自性なり、眞言密印の加持を以て而も之れを加持す。本性清淨なるを以ての故に、(六)羯磨金剛を以て護持する所なるが故に、一切の塵垢の我と人と衆生と壽者と意生と儒童と造立者と等の株杌の過患を淨除す。(七)方なる壇にして四門あり、西に向て通達せり。周く界道を旋すべし。內に意生の八葉の大蓮華王を現ず、蕋を抽き藥を敷きて綵り絢りて端妙なり。(八)其の中に如來ゐます、一切世間に最も尊特の身なり。身と語と意との地を超越して心地に至り、殊勝悅意の果を逮得す。彼に於て東方に寶幢如來、南方に開敷華王如來、北方に鼓音如來、西方に無量壽如來あり。東南方に普賢菩薩、

【六】羯磨金剛を以て弟子の心地を加持して、諸惡見煩惱を淨め除きて祕密曼荼羅を建立す。

【七】方は弟子の菩提心地を表す。四角の壇にして四門あり、卽常樂我淨の佛身の四德を表す。西に向ふ門は常に開きて出入の門なり、此段に明す所は一一皆內心の法門なり、故に內心に觀作すべし。

【八】大日如來なり、行者の自性無師智の大日、外より來るに非ず。

東北方に、觀自在菩薩、西南方に妙吉祥童子、西北方に慈氏菩薩あり。一切藥の中には、佛菩薩の母あり、六波羅蜜三昧の眷屬を以て、而も自ら莊嚴す。下には持明の諸忿怒衆を列ぬ。(九)持金剛主菩薩を以て其の莖と爲して、無盡の大海に處せり。一切の地居天等、其の數無量にして、而も之を環の如く繞る。

爾の時に行者、三昧耶を成ぜんが爲の故に、應さに(一〇)意生の香と華と燈明と塗香と、種種の肴膳とを以て、一切皆な以て之れを獻むべし。優陀那に曰く、

(一一)「眞言者誠諦に、曼荼羅を圖畫せよ。自身を(一二)大我と爲し、囉字を以て諸垢を淨む、
瑜伽の座に安住して、諸の如來を尋念し、頂に諸弟子に、阿字の大空點を授くべし。
智者妙なる華を傳へて、(一三)自身に散せしめ、爲に內に見る所の行人宗奉の處を說くべし。
此れ最上の壇なるが故に、應さに三昧耶を與ふべし」と。」

【九】其花の臺は卽執金剛を以て之れを持たしめて以て其莖となすなり。

【一〇】香花等觀心より生ずる故に意生と云ふ。

【一一】眞言者は卽ち大阿闍梨なり。

【一二】此內心の曼荼羅の上に佛ありて中に住す、故に大我と云ふ、卽大日如來なり。

【一三】阿闍梨の身上に投花せしむるなり，師は之れに依て其本緣の尊を知るべし，弟子は但其身上にあるを見るのみなり。

祕密八印品第十四

爾の時に毘盧遮那世尊、復、諸の大衆會を觀じて、執金剛祕密主に告げて言はく、「佛子、祕密の八印あり、最も祕密と爲す。聖天の位、威神の同ずる所なり、自ら眞言道を以て標幟と爲す。其曼荼羅を圖すること、本尊の如く相應すべし。若し法教に依て、眞言門に於て、菩薩の行を修する諸の菩薩は、應さに是の如く知るべし。自身、本尊の形に住して、堅固にして不動なり。本尊を知り已つて、本尊の如く住すれば、而も悉地を得べし。云何んが八印なる。㈠謂く智慧三昧手を以て、空心合掌に作して、而も風輪と地輪とを散じて、光焰を放つが如くす、是れ世尊の大威德生の印なり。其の曼荼羅は三角にして、而も光明を具せり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一藍嗒二莎訶」

㈡即此の印を以て、而も風輪を屈して、虛空輪の上に在て、㈢嚩字の形の如くす、是れ世尊の金剛不壞の印なり。其の曼荼羅は嚩字の相の如くして、金剛光あり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一鑁嚩二急呼莎訶」

【一】東方寶幢佛の印なり、此印の中より無量の威德生ずる故に大威德生と云ふ。
【二】南方開敷華王佛の印なり。如來の智は金剛の如くにして破壞す可らざる故に金剛不壞と云ふ。
【三】嚩字の形とは圓形なり。

㈣復初の印を以て、而も水輪と火輪とを散ず、是れを蓮華藏の印と名く。其の曼荼羅は月輪の相の如くして、波頭摩華を以て、而も之れを圍繞す。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一摻索二莎訶」

㈤即此の印を以て、二地輪を屈して掌の中に入る、是れ如來の萬德莊嚴の印なり。其の曼荼羅は猶し半月形の如し、大空點を以て之れを圍すべし。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一含鶴二莎訶」

㈥復定慧の手を以て、未開敷華合掌に作して、二虛空輪を建立て、而も稍之れを屈す。是れ如來の一切支分生の印なり。其の曼荼羅は迦羅奢月の形の如し、金剛を以て之れを圍らすべし。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一暗噁二莎訶」

㈦即此の印を以て、其の火輪を屈す。餘の相は前の如し。是れ世尊の陀羅尼の印なり。其曼荼羅は猶し彩虹の如くにして、而も遍く之れを圍らして金剛の幡を垂る。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一勃駄陀羅尼二娑沒嘌三底沫羅駄那羯囉三駄囉也薩鑁四薄伽嚩底五阿去迦引囉嚩底六三麼曳七莎訶」

【四】西方阿彌陀佛の印なり、自性清淨の心蓮花を表する故に蓮華藏と云ふ、即如來藏の印なり、波頭摩は紅蓮花なり。

【五】北方天鼓雷音佛の印なり、若は内、若は外、如來の萬德莊嚴皆此印に具する故に萬德莊嚴と云ふ。

【六】東南方普賢の印なり、此印如來の一切の支分より生ずる故に一切支分生と云ふ、印相は瓶の形なり。

【七】東北方觀自在の印なり、眞言の始めに勃駄陀羅尼とある故に世尊の陀羅尼と名く

(八)復虛心合掌を以て、火輪を開き散し、其の地輪と空輪とを和合して相ひ持す、是れを如來の法住の印と謂ふ。其の曼荼羅は猶し(九)虛空の如くして、雜色を以て之れを圍らすべし、二の空點あり。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一阿去吠娜尾泥二莎訶」

(一〇)前に同じく虛心合掌にして、智慧三昧の手を以て、互に相ひ加へ持して、而も自ら旋らし轉ず。是れを世尊の迅疾持の印と謂ふ。其の曼荼羅は亦虛空の如くして、而も青き點を用て之れを嚴るべし。彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一摩訶引瑜伽輕瑜擬寧宜以上及二瑜詣詵嚩㘑三欠若喇計四莎訶」(一一)

祕密主、是れを如來祕密の印と名く。最勝にして祕密なり、輙く人に授け與ふべからず。已に灌頂せる其の性調柔にして、精勤堅固にして、殊勝の願を發して師長を恭敬し・恩德を念ずる者の、內外清淨にして、自の身命を捨て、而も法を求むる者を除く。』

【八】西南方文殊師利の印なり、具する所の智慧を以て正法を住持して他人に惠む故に法住と云ふ。
【九】方形にして其左右に各一點ありて之れを挾む
【一〇】西北方彌勒の印なり、法輪を左右に轉じて加持迅疾にして速に成就す、故に迅疾持と云ふ。印相は輪の形なり
【一一】如上の八印は皆大日如來の印なり、東方の印の如きは即ち寶幢佛の印、亦是れ大日如來の印なり、餘は准じて知るべし。

持明禁戒品第十五

爾の時金剛手、復偈頌を以て、大日世尊に持明禁戒を請問したてまつる。眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩の爲の故なり。

『云何んが禁戒を成ずる。云何んが尸羅に住する。云何んが所住に隨つて、修行して諸の著を離るる。

修行に幾の時と月とありてか、禁戒終竟することを得る。何の法教に住して、而も彼の威德を知る。

時と方と作業と、及び法と非法と等を離る。云何んが而も速に成ずる。

願くは佛其の量を說き給へ。

先佛の宣說し給ふ所なり、悉地を得しめ給へ。我れ一切智の、正覺兩足の尊に問ひたてまつる、

未來の衆生の爲なり、人中の尊、證知し給へり。』

是の時に薄伽梵毘盧遮那、衆生を哀愍し給ふが故に、而も偈を說いて言はく、

『善哉勤勇士。大德持金剛、說く所の殊勝の戒、古佛の開演し給ふ所なり。

(一)明に緣つて起す所の戒は、戒に住すること正覺の如くにして、悉地を成ずることを得しむ、世

【一】明即ち眞言を持するを因緣として起す所の制限の戒なり、卽次に說く所の行者持誦の時、或は一月或一年等を以て此制限の了る時に、此の禁戒亦能む等なり。

間を利せんが爲の故なり。
等しく自の眞實を起して、疑慮の心を生ぜず、常に等引に住して、戒を修行して當さに覚はるべし。
(二)菩提心と及び法と、及び修學の業と果と、和合して一相と爲す。
遠く諸の造作を離れて、具戒は佛智の如し、此に異るは具戒に非ず。
諸法に自在なることを得て、通達して衆生を利す。常に無著の行を修すれば、礫石と衆寶とを等しうす。
(三)乃至落叉を滿すに至つて、説く所の眞言教、時と月と等を畢へて、禁戒の量終竟す。
(四)最初には金輪の觀なり、(五)大因陀羅に住して、當に(六)金剛の印を結び、乳を飲んで以て身を資くべし。
行者一月滿して、能く出入の息を調ふ。
次に第二の月に於ては、(七)水輪の中に嚴整して、應さに(八)蓮華印を以て、醇淨の水を服すべし。
次に第三の月に於ては、勝妙の(九)火輪の觀なり、不求の食を噉へよ、

【二】菩提心は佛果の正因なり。法は心法にして十地に修する所の六波羅蜜等、即菩提心を助くる眷屬なり。業は佛の業なり。果は如來の果なり。此等の法は差別の相を離れて一切一味なり、是れ此の戒に住する所以なり。然らざれば佛戒を持するにあらず。
【三】持戒の量を明す。即六月持誦の法を説くなり。落叉とは淺略には十萬遍なり。今は然らず、落叉とは見なり、即ち自心の實相を見るなり。
【四】心佛自心衆生三平等の觀を明す。
【五】四方の壇、黄色なり。
【六】内五股の印、即ち金剛手の印なり。

印は大慧刀を以てす、
一切の罪を燒き滅して、而も身と意と語とを生ず。
第四の月には(一〇)風輪なり、行者常に(一一)風を服して、轉法輪の印を結んで、心を攝して以て持誦すべし。
(一二)金剛水輪の觀は、瑜伽に住するに依り、是を第五の月と爲す。
得と非得とを遠離して、行者著する所なくして、三菩提に等同なり。
(一三)風と火との輪を和合して、衆の過患を出過す。復一月持誦して、亦利と非利とを捨てよ。
(一四)梵と釋と等の天衆と、摩睺と毗舍遮と、遠く住して而も敬禮し、一切守護を爲して、皆な悉く敎命を奉く。
彼れ常に是の如くなることを得て、人天の藥草神と、持明の諸の靈仙と、其の左右に翊侍して、
命ずる所に隨て當さに作すべし。不善爲障者の、羅刹七母等、持眞言者を見て、
恭敬して而も之れを遠ざくべし。是の處の光明を見て、馳せ散する

【七】圓形白色の壇なり。
【八】八葉の印卽ち觀音の印なり。
【九】三角の壇、赤色なり、其出入の息も亦赤色なり。
【一〇】半月形の壇、黒色なり。
【一一】出入の息を云ふ。
【一二】外に黃色の方形の壇を作り、中に白色圓形の壇を作る。此中に住する行者臍より以下は黃なり、臍より以上は白なり。空輪は無相の故に此觀に印を用ひざるなり云云。一切食することを得ず。
【一三】第六月の觀を明す。曼荼羅は風輪の中に火輪あり。臍以上は火、以下は風なり。一切食することを得ず。
【一四】以下は六月持誦の功德を說く。六月は六大法界を表す、行者此の持明戒に由て、六大法界大日如來を證するの意なり。

こと猛火の如し。

所住の法教に隨て、皆明禁に依るが故に、等正覺の眞子、一切に自在を得て、難降の者を調伏すること、大執金剛の如し。諸の群生を饒益すること、觀世音に同じ。六月を經逾し已つて、願ふ所に隨て果を成ずべし。常に當に自他に於て、悲愍して而も救護すし。』

阿闍梨眞實智品第十六

爾の時に持金剛者、次に復大日世尊に、諸の曼荼羅の眞言の心を請問したてまつりて、而も偈を說いて言さく、

(一)『云何んが一切の、眞言實語の心と爲す。云何んが而も(二)解了するを、說いて阿闍梨と名くる。』

爾の時に、薄伽梵大毗盧遮那、金剛手を慰喩し給ふ。

『善哉 摩訶薩、彼の心をして歡喜せしめ、復是の如きの言を告げ給ふ。

祕中の最祕、眞言智の大心を解る、今汝が爲に宣說せん、一心に應さに諦に聽くべし。

所謂阿字とは、一切の眞言の心なり。此れより遍く無量の、諸の眞言を流出し、一切の戲論息んで、能く巧智慧を生ず。

祕密主、何等か一切の眞言心なる。佛兩足尊、阿字を說いて種子と名く、故に一切是の如し。

諸の(三)支分に安住し、(四)相應の如く布し已つて、法に依て皆な遍く授

【一】阿闍梨の持する所の眞言を云ふ。何等の眞言の心を持するを阿闍梨と名くるやとなり。

【二】方便を解了するなり。

【三】一身の支分に諸字を加ふと雖、亦阿字其中に遍するなり。人の心の所有支分に遍するが如し。

【四】師自ら前の如く布し了つて、次に行者に授けて布字せしむるなり。

【五】阿字の最初の阿阿引の二音を本初の字と云ふ。根本なり、男聲なり。次に伊伊引より烏奧に至るは從生增加の字なり、女聲なり。阿字は根本と從生との字に通ずるなり。

くべし。

彼の(五)本初の字、增加の字に遍在するに由て、衆字以て音を成じ、支體是れに由つて生ず。

故に此れ一切の身に遍じて、種種の德を生ず。今分布する所を說かん、佛子一心に聽け。

(六)心を以て而も心に作せ、(七)餘は以て支分に布すべし。一切是の如く作せば、(八)即ち我が體に同じ。

(九)瑜伽の座に安住して、尋で諸の如來を念ずべし。若し此の敎法に於て、斯の廣大智を解るは、正覺大功德なり。

說いて阿闍梨と爲す、是れ即ち如來と爲し、亦即ち名て佛と爲す。

菩薩と及び梵天と、毗紐と摩醯羅と、日と月との天と水天と、帝釋と世間主と、黑夜と焰摩等と、地神と妙音と、梵志と及び常浴となり。亦梵行者とも名く。

漏盡と比丘衆と、吉祥と持祕密と、一切智見者と、法自在と財富となり。

若は菩提心と、及與(一〇)聲智の性とに住して、一切の法に著せざるを、

【六】上の心は阿字なり、一切法の心なる故に。下の心は行者の自心なり。

【七】十二の摩多字を餘と云ふなり。

【八】我は大日如來なり、大日に同き故に阿闍梨と成ることを得るなり。

【九】瑜伽の座は金剛輪座にして阿字なり。

【一〇】字に從て聲の出づることあり、智を以て之れを分別するは即ち智なり。阿字の法體常に一切處に遍ずるを以ての故に即ち是くなら

說いて遍一切と名く。即是れ眞語者と、持吉祥眞言と、眞實語の王と、持執金剛印となり。(一一)所有諸の字輪は、若は支分に在らんには、當に知るべし、(一二)眉間に𤙖字金剛の句を住せしめ、娑字を(一三)胷の下に在け、是れを蓮華句と謂ふ。我即ち(一四)心位に同じ、一切處に自在なり、普く種種の有情と、及び非情とに遍ず。

(一五)阿字は第一の命なり、嚩字を名て水と爲し、囉字を名て火と爲し、𤙖字を忿怒と名く。佉字は虛空に同じ。所謂極空の點なり。此の最眞實を知るを、說いて阿闍梨と名くべし。故に應さに方便を具して、佛の所說を了知すべし。常に精勤に修することを作して、當さに(一六)不死の句を得べし。』

ざるなきなり。

【一一】上來、心を說くこと了つて、次に文字を身の支分に布する法を說く。

【一二】眉間は一切執金剛所持の處なり。

【一三】心上四寸は蓮花所の所住處なり。

【一四】阿字菩薩心の位なり。

【一五】一切の有情非情の法に通ず、諸法は阿字を以て命とす。

【一六】阿字を以て一身の支分に布するを云ふ。

布字品第十七

爾の時に世尊、復金剛手に告げて言はく、

『復次に祕密主、諸佛の宣說し給ふ所の、諸の字門を安布すること、佛子一心に聽くべし。
迦字は咽の下に在り。佉字は腭の上に在り。哦字を以て頸と爲す。伽字は喉の中に在り。
遮字を舌根と爲す。車字は舌中に在り。若字を舌端と爲し。闍字は舌の生處なり。
吒字を以て脛と爲し。咤字は知るべし髀なり。拏字を說いて腰と爲し。荼字を以て坐に安ず。
多字は最後分なり。他字は知るべし腹なり。娜字は二手と爲す。馱字を名て脇と爲す。
波字を以て背と爲す。頗字は知るべし胸なり。麼字を二肘と爲す。婆字は次に臂の下なり。
莽字は心に住す。耶字は陰藏相なり。囉字を名て眼と爲す。邏字を廣き額と爲す。
縊伊は二の眥に在り。塢烏は二の唇と爲し。翳藹を二耳と爲す。汙奧を二の頰と爲す。
暗字は菩提句なり。噁字は般涅槃なり。是の一切の法を知る、行者正覺を成ずべし。
一切智の資財、常に其の心に在り、世に一切智と號す。是れを薩婆若と謂ふ。』

卷の第六

受方便學處品第十八

爾の時に執金剛祕密主、佛に白して言さく、『世尊願くは諸の菩薩摩訶薩等の、(二)智慧方便を具して、二意修學する所の句を說いて、歸依の者をして、諸の菩薩摩訶薩に於て、二意あること無く、疑惑の心を離れて、生死流轉の中に於て、常に不可壞ならしめ給へ』と。是の如く說き已て、毗盧遮那世尊、如來眼を以て一切法界を觀じて、執金剛祕密主に告げて言はく、『諦に聽くべし金剛手、今善巧修行の道を說かん。若し菩薩摩訶薩、此に住する者は、當さに大乘に於て而も通達することを得べし。祕密主、菩薩は、(三)生命を奪はざる戒を持て。爲す應らざる所なり。不與取と及び欲邪行と虛誑語と麁惡語と兩舌語と無義語との戒を持て。貪欲と瞋恚と邪見と等皆作すべからず。祕密主、是の如く修學する所の句は、菩薩修學する所に隨つて、則ち正覺世尊及び諸の菩薩と同行なり、應さに是の如く學すべし。」(一)

【一】眞言行者先づ此戒を受け已て後に入壇灌頂の行を聞くべし、此戒は未だ曼荼羅を造らざる以前に說くべきなり。

【二】智慧方便とは般若の方便なり。

【三】一念の殺心を生ぜず、殺心なきを以て故に不殺生戒と名く。餘は之れに准じて知るべし。此經の十萬頌の廣本に具に此戒を授くる作法等を明せり、未だ此土に傳らず。

爾の時に執金剛祕密主、佛に白して言さく、『世尊薄伽梵、聲聞乘に於て、亦是の如きの十善業道を說き給ふ。世間の人民及び諸の外道も、亦十善業道に於て常に願つて修行す。世尊、彼と何の差別かある、云何んが種種に殊異なる。』是の如く說き已つて、佛執金剛祕密主に告げて言はく、『善哉、善哉、祕密主、汝復善哉、能く如來に是の如きの義を問ひたてまつる。祕密主、應當に諦に聽くべし。吾れ今差別の道と、一道の法門とを演說せん。祕密主、若し聲聞乘の學處は、我れ慧の方便を離れて、教令を以て成就し、邊智を開發す。等しく十善業道を行ずるに非ずと說く。彼の諸の世間は、復我に執著するが故に、他因に轉ぜらるるを離る。菩薩は大乘を修業して、一切法平等に入つて、智慧方便を攝受して、自他俱なるが故に、諸の所作轉ず。是の故に祕密主、菩薩は此に於て、智の方便を攝し、一切法平等に入つて、當に勤て修學すべし。』

爾の時に世尊、復大慈悲の眼を以て、諸の衆生界を觀察して、金剛手菩薩に告げて言はく、『祕密主、彼の諸の菩薩は、(四)形壽を盡すまで、生命を奪はざる戒を持して、應さに刀杖を捨て、殺害の意を離れ、他の壽命を護ること、猶し己身の如くなるべし。餘の方便あつて、諸の衆生類の中に於て、其の事業に隨つて、彼の惡業の報を解脫せしめんが爲の故に、施作する所あるは、怨害の心に非ず。

【四】疏に云く、盡形壽者非ズ二但シ一期ノミニ一、菩薩從リ二初發心一及ブ二成菩提ニ一と。

復次に祕密主、菩薩は與へざるを取る戒を持して、若し他の所攝の諸の受用の物には、觸取の心を

起さず、況んや復餘物の與へざるを而も取らんをや。餘の方便あり、諸の衆生の慳悋積聚して、施福を修せざるを見ては、其の像類に隨つて、彼の慳を害するが故に、自他を離れしめ、彼が爲に施を行ず。因て讃ずる時に施せば、妙色等を獲と云ふべし。祕密主、若し菩薩、貪心を發起して、而も觸れて之を取れば、是の菩薩は菩提分を退して、無爲の毗奈耶の法を越ゆ。

復次に祕密主、菩薩は邪婬せざる戒を持し、若は他の攝する所と、自らの妻と、自種族と、標相の護る所とに、貪心を發さざれ。況んや復非道に二りの身を交へ會せんをや。餘の方便あらば、度すべき所に隨つて衆生を攝護せよ。

復次に祕密主、菩薩は形壽を盡すまで妄語せざる戒を持し、設ひ活命の因緣の爲にも、妄語すべからず。即諸佛の菩提を欺むき誑らかすなかれ。祕密主、是れを菩薩の最上の大乘に住すと名く。若し妄語する者は、佛菩提の法を越失す。是の故に祕密主、此の法門を應に是の如く知て、眞實ならざる語を捨て離るべし。

復次に祕密主、菩薩は麁く惡しく罵らざる戒を受持して、當に柔軟の心語と、隨類の言辭とを以て、諸の衆生等を攝受すべし。何を以ての故に。祕密主、菩提薩埵の初行は、衆生を利樂す。或は餘の菩薩惡趣の因に住する者を見ては、之れを折伏せんが爲に、而も麁語を現ず。

復次に祕密主、菩薩は兩舌語せざる戒を受持して、間隙語を離れ、惱害語を離るべし。犯せば菩薩

と名くるに非ず。衆生に於て離拆の心を起さざれ。異の方便有て、若し彼の衆生所見の處に隨つて著を生せば、其の像類の如く、離間の言語を說いて、一道に住せしめよ、所謂一切智智の道なり。

復次に祕密主、菩薩は綺語せざる戒を持し、隨類の言辭を以て、時と方と和合して、義利を出生し、一切衆生をして歡喜の心を發して、耳根の道を淨めしむべし。何を以ての故に。菩薩は差別の語あるが故に。或は餘の菩薩戲笑を以て先と爲して、衆生の欲樂を發起して佛法に住せしむ。具に義利無き語を出すと雖、是の如きの菩薩は、生死の流轉に著せず。

復次に祕密主、菩薩は當に貪らざる戒を持つべし。彼の他の物を受用する中に於て、染思を起さざれ。何を以ての故に、菩薩は著心を生ずることあること無きが故に。若し菩薩心に染思あれば、彼れ一切智門に於て力無くして、而も一邊に墮す。又祕密主、菩薩は應さに歡喜を發起して是の如きの心を生ずべし。我が作すべき所を彼をして自然に而も生ぜしむ。極めて善哉と爲す、數自ら慶慰す。彼の諸の衆生をして、資財を損失せしむることなきが故に。

復次に祕密主、菩薩は應當に瞋らざる戒を持つて、一切の處に遍く常に安忍を修すべし。瞋と喜とに著せず、怨及び親に於て、其心平等にして而も轉ずべし。何を以ての故に。菩提薩埵は而も惡意を懷くに非ず。所以は何となれば、菩薩は本性淸淨なるを以ての故に。是の故に祕密主、菩薩は瞋恚せざる戒を持つべし。

復次に祕密主、菩薩は應當に邪なる見を捨て離れて正しき見を行じ、他世を怖畏し、害無く曲無く諂無く、其の心端直にして、佛と法と僧とに於て心に決定を得べし。是の故に祕密主、邪なる見は最も極めて大なる過失たり、能く菩薩の一切善根を斷ず。是れ一切の諸の不善法の母たり。是の故に祕密主、下、戲笑に至るまで、亦當に邪見の因緣を起さざるべし。』(五)

爾の時に執金剛祕密主、佛に白して言さく、『世尊、願くは十善道戒の極根を斷ずる斷を說き給へ。云何んが菩薩、王位自在にして宮殿に處し、父と母と妻と子と眷屬と圍繞し、天の妙樂を受けて而も過を生ぜざる。』是の如く說き已つて、佛、執金剛に告げて言はく、『善哉、善哉、祕密主、汝當に諦に聽き、善く思うて之れを念ずべし。吾れ今菩薩の毗尼の決定善巧を演說せん。祕密主、當に知るべし、菩薩に二種あり。云何んが二と爲す。所謂在家と出家となり。祕密主、彼の在家の菩薩は、五戒の句を受持す、勢位自在にして、種種の方便道を以て、時方に隨順し自在に攝受して、一切智を求む。所謂方便を具足して、舞伎天祠主等の種種の藝處を示現し、彼彼の方便に隨つて、四攝の法を以て衆生を攝取して、皆阿耨多羅三藐三菩提を志求せしむ。謂く生ける命を奪はざる戒と、及び與へ

【五】 上來明す所の十善戒は、眞言行者にありて偸蘭遮にして斷頭罪にあらず、故に此品所明の十戒の外に更に十重禁戒あり。一不捨佛、二不捨法、三不捨僧、四不捨菩提心、五不謗一切三乘教、六不應一切法生慳悋、七不得邪見、八發菩提心人に於て不令退息、九小乘人の前に大乘を說かず大乘人の前に小乘を說かず、十常に當さに施を行ずべし。此れを祕密の十重禁と云ふ、たとひ不殺生等の十戒を犯すとも後十事を持つ者は犯戒とせざるなり。

ざるを取ると、虛妄語と、欲邪行と、邪見等とを持つを、是れを在家の五戒の句と名く。菩薩は說く所の如き善戒を受持して、應さに具に諦に信じ、當に勤て修學すべし。往昔の諸の如來の學處に隨順し、(六)有無の戒に住し、智慧の方便を具足して、如來の無上吉祥の無爲戒蘊に至ることを得べし。四種の根本罪あり、乃至活命の因緣にも亦犯すべからず。云何んが四とする、謂く諸法を謗ずると、菩提心を捨離すると、慳悋すると、衆生を惱害するとなり。所以は何となれば、此の性は是れ染なり、菩薩戒を持つに非ず。何を以ての故に。「過去の諸正覺と、及與未來世、現在の人中の尊と、智と方便とを具足して、無上覺を修行して、無漏の悉地を得給へり。亦餘の學處の、方便智を離れたるを說くは、當に知るべし、大勤勇、諸の聲聞を誘進するなり」と。」

【六】無爲戒は卽是れ本性戒なり、是れ修成にあらず、此れに對して所行の方便ある故に有爲と云ふ。然れども深く觀ずれば卽無爲戒に同じ、阿字門を離れざるを以ての故に。

說百字生品第十九

爾の時に毘盧遮那世尊、諸の大會の衆を觀察して、(一)不空教の、樂欲に隨て一切を成就する、(二)眞言の自在と、(三)眞言の王と、(四)眞言の導師との、大威德者を說き給ふ。(五)三三昧耶に安住して、(六)三法圓滿するが故に、妙なる音聲を以て、大力の金剛手に告げて言はく、『勤勇士、一心に諦に諸の眞言と眞言の導師とを聽け』と。卽時に智生三昧に住して、而も種種の巧智を出生する、百光遍照の眞言を說て曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一暗』

佛金剛手に告げたまはく、『此れは一切眞言、眞言救世者なり。大なる威德を成就し給へり。

卽是れ正等覺法自在牟尼なり、諸の無智の暗を破すること、日輪の普く現ずるが如し。

是れ我が自體なり、大牟尼加持を以て、衆生を利益するが故に、應化して神變を作し、

【一】一切衆生の見聞觸知するに隨って皆無上菩提を必定して、空く過ぐるものあるとなき故に不空教と云ふ。不空教の精神は卽暗字の眞言なり。

【二】一切の眞言に於て自在を得る故に。

【三】一切の眞言に於て自在なるが故に眞言の王と云ふ、王は自在の義なり。

【四】一切の眞言を導いて大會を得る所に通達する故に眞言の導師と云ふ。又導師とは佛也。此眞言は佛に同じき也。

【五】身口意を云ふ。

【六】理行果を三法と云ふ。

乃至一切をして、思願に隨て生起せしむ。悉く能く爲に神變を施作する無上の句なり。故に當さに一切種において、淨身にして諸の垢を離れ、理に應じて常に勤修して、佛菩提を志願すべし。

百字果相應品第二十

爾の時に毘盧遮那世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、『祕密主、若し大覺世尊の、(一)大智灌頂地に入りぬれば、自ら見るに三三昧耶の句に住す。祕密主、薄伽梵の大智灌頂に入りぬれば、(二)即ち陀羅尼の形を以て佛事を示現す。』爾の時に大覺世尊、隨つて一切の諸の衆生の前に住して、佛事を施作し、三三昧耶の句を演說し給ふ。佛の言はく、『祕密主、我が語輪の境界の廣長にして、遍く無量世界に至る清淨門を觀ずべし。其の本性の如く、類に隨ふ法界門を表示して、一切衆生をして皆歡喜を得しむること、亦た今の釋迦牟尼世尊の、無盡虛空界に流遍して、諸の刹土に於て佛事を勤作し給ふが如し。祕密主、諸の有情の能く世尊の是の語輪相より、正覺の妙音莊嚴の瓔珞を流出し、胎藏より佛の影像を生じて、衆生の性欲に隨つて、歡喜を起さしむることを知るに非ず。』爾の時に世尊、無量の世界海の門に於て、法界に遍く慇懃に勸發して、菩提を成就し、普賢菩薩の行願を出生し給ふ。此の妙華布地、胎藏莊嚴世界の、種性海の中に於て生を受けて、種種の性の清淨の門を以て、佛の刹を淨め除き、菩提場を現して、而も佛事を作す。次に復三藐三菩提の句を志求す、『心の無量を知るを以ての故に、身の無量を知る。身の無量を知るが故に、智の無量を知る。智の無量を知るが故に即ち

【一】第十一地佛果の位を云ふ。

【二】一切の眞言輪を惣束して佛身を成す、即ち普門の身を成ずるなり。

衆生の無量を知る。衆生の無量を知るが故に、卽虛空界の無量を知る。秘密主、心の無量に由るが故に、四種の無量を得、得已つて最正覺を成じて、十智力を具し、四魔を降伏し、無所提を以て、而も師子吼す。』佛偈を說て言はく、

『勤勇、此の一切の、㈢無上覺者の句は、百門の學處に於て、諸佛の說き給ふ心なり。』

【三】成佛することは此百字の心、卽暗字を修するに由てなり。

百字位成品第二十一

爾の時に執金剛祕密主、未曾有なることを得て、而も偈を說いて言さく、

『佛眞言救世者の、能く一切の諸の眞言を生ずることを說き給へ。摩訶牟尼(一)云何が知る、誰か能く此を知る、何れの處よりする、誰か是の如きの諸の眞言を生ずる。

生ずる者を誰とかする、唯だ演說し給へ。大勤勇士は說の中の上なり、此の如く一切を願くは開示し給へ。』

爾の時に薄伽梵、法自在牟尼、圓滿し普く周遍して、悉く諸の世界に遍じ給ふ。

一切智慧者の、大日尊告げて言はく、『善哉、摩訶薩、大德金剛手、吾れ當に一切を說くべし。微密にして最も希有なり。諸佛の祕密は、

(二)外道は知ること能はず。

若し悲生曼荼に、大乘の灌頂を得れば、調柔にして善行を具し、常に悲ありて他を利するものなり。

緣あつて菩提を觀ずるに、常に見ること能はざる所なり。彼れ能く此の內心の、大我を知ること

【一】四問あり、一云何が知る、二知る者は誰れぞ、三何れの處よりする、四生ずる者は誰れぞなり。

【二】外道に二あり、一は世間の外道、二は佛法內の外道なり、佛法內の外道とは二乘なり。

あれば、

其の自心の位に隨つて、導師所住の處あり、八葉の意より生ず。蓮花は極めて嚴麗なり。

圓滿の月輪の中に、無垢にして猶淨き鏡のごとし。彼に於て常に安住せる、眞言救世の尊は、金色にして光焔を具せり。

三昧に住して毒を害すること、日の觀る可きこと難きが如し、諸の衆生も亦然なり。

常恆に內外に於て、普く周遍して加持す。是の如く慧眼を以て、意の明鏡を了知す。

眞言者の慧眼を以て、是の圓鏡を觀ずるが故に、當に自の形色の、寂然として正覺の相なるを見るべし。

身は身より生ずる影像にして、意は意より生ずる所なり。常に清淨の種種の、自の作業を出生す。

次に彼の光現ずるに於て、圓照なること電焰の如し。眞言者能く、一切の諸の佛事を作す。

若し見に清淨を成せば、聞等も亦復然なり。意の思念する所の如く、能く諸の事業を作す。」

「復次に祕密主、眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、是の如く自身の影像生起す。殊勝なること三菩提に過ぎたることあることなし。眼耳鼻舌身意等の、四大種の攝持し集聚するが如く、彼れ是の如く自性空にして、唯名字の所執のみあり。猶し虛空の如くにして、執著する所無きこと影像に等し。彼の如來正覺を成じて、互に相ひ緣起し給ふこと間絕あることなし。若し緣に從つて生ずること、彼れ

卽影像を生ずるが如し。是の故に諸の本尊は卽我なり。我は卽本尊なり、互に相ひ發起す。身より生ずる所の身は、尊の形像生ずるなり。祕密主觀ずべし、是の法は通達慧により、通達慧は法に緣り、彼等遞ひに作業を爲し、無住にして性空なりと。祕密主、云何んが意より意を生じ、能く影像を生ずる。祕密主、譬へば若は白、若は黃、若は赤、作意する者の作す時に、染著の意生ずるが如く、彼れと同類にして是の如く身轉ず。祕密主、又內に意の中の曼荼羅を觀ずるが如きは、熱病を療治するに、彼の衆生の熱病卽時に除愈して疑惑あることなし。曼荼羅は意に異なるに非ず、意は曼荼羅に異なるに非ず。何を以ての故に、彼の曼荼羅と一相なるが故に。祕密主、又幻者の男子を幻作して、而も彼の男子又復化を作すが如きは、祕密主、意に於て云何ん、彼何なる者をか勝れたりとする。」時に金剛手、佛に白して言さく、「世尊、此の二人は、相異なること無きなり。何を以ての故に。世尊、實に生ずるに非るが故に。是の二の男子は本性空なるが故に、幻に等同なり。」「是の如し祕密主、意より生ずる衆の事と、及び意の生ずる所のものと、是の如く俱に空にして無二無別なり。」

百字成就持誦品第二十二

爾の時に世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、『諦に聽け祕密主、(一)眞言救世者は、(二)身と身と異分あること無し。(三)意は意より生じて善く淨除せしむれば、普く皆光ありて(四)彼の處より流出す、相應して而も起つて諸の支分に遍ず。彼の愚夫の類は常に知らざる所なり。(五)此の道に達せず、乃至身の所生の分無量種なるが故に、是の如く眞言救世者の、分說も亦無量なり。譬へば吉祥の眞陀摩尼の、諸の樂欲に隨つて而も饒益を作すが如し。是の如く世間に世を照す者の身は、一切の義利成ぜずと云ふ所なし。祕密主、云何んが無分別の法界に、一切の作業隨轉する。祕密主、亦虛空界の衆生に非ず、壽者に非ず、摩奴闍に非ず、摩納婆に非ず、作者に非ず、吠陀に非ず、能執に非ず、所執に非ず、一切の分別及び無分別を離れて、而も彼の無盡の衆生界の一切の去來の、諸有所作に疑心を生ぜざるが如く、是の如く無分別の一切智智も、虛空に等同にして、一切衆生に於て、內外に而も轉じ給ふ。』

爾の時に世尊、又復(六)無盡衆生界を淨除する句、三昧を流出する句、不思議の句、他門を轉ずる句

【一】下に明す三部及び通佉等の字輪を云ふ。

【二】前の身は垢身なり、後の身は淨身なり。

【三】前の意は染汚の意なり、後の意は淸淨の意なり。

【四】淨心の處より光明を流出す。

【五】卽ち眞言の行なり。

【六】淨除の句卽流出の句、不思議の句卽他門を轉ずる句なり。他は衆生なり、無明なり。他の無明を轉じて如來の明と爲し、他の衆生を轉じて佛となす。

を宣說し給ふ。

『若し本より所有無しとも、世間に隨順して生せば、云何んか空の、此の瑜伽者を生ずることを了知せん。

若し自性是の如く、名不可得なりと覺るとき、當に等空の心生ずべし、所謂菩提心なり。

應に慈悲を發起して、諸の世間に隨順すべし、唯(七)想の行に住する、是を即ち諸佛と名く。

當に知るべし想より造立す、此を觀じて空空と爲す。數を下す法の轉じて、一を增して而も分異なるが如く、勤勇の空も亦然なり。增長すること次第に隨ふ、即此の阿字等の、自然智の加持なり。』

『阿娑嚩　迦佉哦伽　遮車若社　吒咤拏荼　多他娜馱　波頗麼婆　野
囉邏嚩舍　沙娑訶乞灑　仰壤拏曩莽』

『祕密主、此を觀ずれば空の中より流散し假立す。阿字に加持せられて、三昧道を成就す』祕密主、是の如く阿字は、種種の莊嚴に住して、圖位を布列せり。一切の法本不生なるを以ての故に。(八)自然形を顯示す。(九)或は不可得の義を以て、嚩字の形を現はし。或は諸法造作を遠離するが故に、迦字の

【七】唯阿字本不生の眞理を觀想するに由て、還て隨類身を生じて廣く衆生界を利するを云ふ。

【八】本不生を云ふ。阿字門は即自身なり、故に自身不生不滅なり。不生不滅は如來の身なり。

【九】以下は諸字を以て阿字を轉釋す。阿字に無量の功德を具するを、或は直に本不生を以て顯し、或は異門に從て顯はす。嚩字門等は異門なり。

形を現し。或は一切の法等虚空の故に、迦字の形を現し。或は行不可得の故に、哦字の形を現し。或は諸法一合相不可得の故に、伽字の形を現し。或は一切の法生滅を離れたるが故に、遮字の形を現し。或は一切法影像無きが故に、車字の形を現し。或は一切の法生不可得の故に、若字の形を現し。或は一切の法離戰敵の故に、社（上聲呼）字の形を現し。或は一切の法離我慢の故に、吒字の形を現し。或は一切の法離養育の故に、咤字の形を現し。或は一切の法離怨對の故に、拏字の形を現し。或は一切の法離災變の故に、荼字の形を現し。或は一切の法離如如の故に、多字の形を現し。或は一切の法離住處の故に、他字の形を現し。或は一切の法離施の故に、那字の形を現し。或は一切法界不可得の故に、陀字の形を現し。或は一切法勝義諦不可得の故に、波字の形を現し。或は諸法不堅如聚沫の故に、頗字の形を現し。或は一切法離繫縛の故に、麼字の形を現し。或は一切の法諸觀不可得の故に、婆字の形を現し。或は一切の法諸乘不可得の故に、野字の形を現し。或は一切の法離一切塵の故に、囉字の形を現し。或は一切の法無相の故に、邏字の形を現し。或は一切の法離言說の故に、嚩字の形を現し。或は一切の法離寂の故に、奢字の形を現し。或は一切の法本性鈍の故に、沙字の形を現し。或は一切の法諦不可得の故に、娑字の形を現し。或は一切の法離因の故に、訶字の形を現す。祕密主、隨つて此等の一一の三昧門に入るべし。祕密主、是

【一〇】、、、あさばの三字と、迦等の二十字、遍口聲の九字合して三十二相なり。又た十二の摩多と、迦等の二十字と、遍口聲の野等の八字と合して四十字なり。此れに各定と慧とある故に、八十隨好なり。

を観ずれば、乃至(10)三十二大人相等、皆な此の中より出づ。仰壤停曩莽、等しく一切の法に於て、自在にして而も轉ず。此れ等隨つて現れて、三藐三佛陀の隨形好を成就す。」

(一)百字眞言法品第二十三

『復次に祕密主、(二)此の三昧門に於て、空を以て加持すれば、一切の法に於て自在に、最正覺を成就す。是の故に此の字を卽本尊となす。』而も偈を說いて言はく、

『祕密主、當に知るべし、(三)阿字は第一の句なり、明法普く周遍し、字輪を以て圍繞せり。
彼の尊は相あることなし、遠く諸の見の相を離れたり。無相なれども
衆の聖尊、而も相を現じて中より來り給ふ。
聲は字より出で、字は眞言を生じ、眞言は果を成立す、諸の救世尊の
說なり。
當に知るべし、聲の性は空なり、卽空の造作する所なり、一切衆生の
類は、言の如く而も妄りに執す。
空に非ず亦聲に非れども、修行者の爲に說く、聲の解脫に入つて、卽ち
三摩地を證す。
法に依て布して相應すべし、字を以て照明を爲せ、故に阿字等の類の、無量の眞言を想へ。』

【一】此中には唯だ阿の一字を明す。然れども百字の法門准じて知るべし、一字を擧げて餘を顯はすなり。

【二】百光遍照王の三昧なり。阿字を以て加持するを空を加持すと云ふ。又百字は阿字を以て本尊とす。

【三】阿の一字より迦等の多字を生ずるの一義なり。

說菩提性品第二十四

『譬へば十方の虛空の相の、常に遍くして一切に所依無きが如く、是の如く眞言救世者も、一切の法に於て所依なし。

又空中の諸の色像の、現に見るべしと雖も依る處なきが如く、眞言救世者も亦然なり、彼の諸法の所依の處に非ず。

世間成立の虛空の量は、遠く去と來と現在との世を離れたり、若し眞言救世者を見ば、亦復三世の法を出過せり。

唯だ名趣のみに住して、遠く作者等を離れたり。虛空の衆の假名は、導師の宣說し給ふ所なり。

名字は所依なきこと亦復虛空の如し。眞言自在にして然なり。現見すれども言說を離れたり。

火と水と風と等に非ず、地に非ず日光に非ず、月等の衆曜に非ず、晝に非ず亦夜に非ず。

生に非ず老病に非ず、死に非ず損傷に非ず、刹那の時分に非ず、亦年歲等に非ず。

亦成壞あるに非ず、劫數も不可得なり、淨染の受生に非ず、或は果亦不生なり。

若し是の如き等の、種種の世の分別無くば、彼れに於て常に勤修して、

(一)一切智の句を求むべし。』

【一】菩提性は即阿字門なり、阿字門は即一切智の句なり。

三三昧耶品第二十五

爾の時に執金剛祕密主、佛に白して言さく、『世尊の說き給ふ所の、三三昧耶は、云何んが此の法を說いて、三三昧耶とするか。』是の如く言ひ已つて、世尊、執金剛祕密主に告げて言はく、『善哉、善哉、祕密主、汝吾に是の如きの義を問ふ。祕密主汝當に諦に聽き善く之れを思念すべし、吾今演說せん。』金剛手の言さく、『是の如し、世尊、願樂くは聞んと欲す。』佛の言はく、『三種の法相續すること有りて、除障と相應して生ずるを、三三昧耶と名く。云何んが彼の法相續して生ずる。所謂(一)初心には自性を觀せず、此れより慧を發し如實の智生じて、無盡の分別の網を離る、是を第二の心と名く。菩提の相は無分別の、正等覺の句なり。祕密主、彼實の如く見已つて、無盡の衆生界を觀察して、悲自在に轉ず。無緣の觀をもて、菩提心生ず。所謂一切の戲論を離れて、衆生を安置し、皆無相菩提に住せしむ、是を三三昧耶の句と名く。』

『復次に祕密主、(二)三三昧耶あり、最初は正覺の心なり、第二を名て法と爲す。

彼より心相續して生ず、所謂和合僧なり。此の三三昧耶は、諸佛の導

【一】初心は生死の中に於て發心して佛果を求むれども、自己の心性に何の功德ありと觀することも能はず、故に自性を觀せずと云ふ。第二心は如實智生じて分別妄想を斷す、自利の心なり。第三心は利他大悲の心なり。

【二】此は佛法僧を以て三三昧とす、此の三寶即一體なり、故に三三昧耶ありと云ふ

師なりと說き給ふ。
若し此の三等に住して、菩提の行を修行すれば、諸の導門の上首として、諸の衆生を利すること
を爲す。
當に菩提を生じ、三身自在に轉ずることを得べし。』

（三）祕密主、三藐三佛陀、敎を安立し給ふが故に、一身を以て加持し給ふ。所謂初變化の身なり。復次に祕密主、次に一身に於て三種を示現し給ふ。所謂佛と法と僧となり。復次に祕密主、此れより成立して、三種の乘を說き、廣く佛事を作し、般涅槃を現じ、衆生を成熟し給ふ。祕密主、彼の諸の眞言門に、菩提の行を修する諸の菩薩を觀ずべし。若し三等を解り、眞言の法則に於て、而も成就を作して、彼れ一切の妄執に著せざれば、能く障礙を爲す者なし。不樂欲と懈怠と、無利の談話と、信心を生ぜざると、資財を積集する者とを除く復二事を作さざるべし。謂く諸の酒を飲むと、及び牀の上に寢ぬるとなり。』

【三】三身を具するを亦三三昧耶と名くるを明す。

說如來品第二十六

爾の時に執金剛祕密主、世尊に白して言さく、

『云何んが如來と爲る、云何んが人中の尊、云何んが菩薩と名け、云何んが正覺と爲す。

導師大牟尼、願くは我が疑ふ所を斷じ給へ。

菩薩大名稱、疑慮の心を棄捨して、當に摩訶衍を修すべし。行の王として上ある無ことけん。』

爾の時に薄伽梵毗盧遮那、諸の大會の衆を觀察して、執金剛祕密主に告げて言はく、『善哉、善哉、金剛手、能く吾に是の如きの義を問ふ。祕密主、汝當に諦に聽き、善く之を思念すべし、吾今摩訶衍の道を演說せん。』頌に曰く、

『菩提は虛空の相なり、一切の分別を離れたり。彼の菩提を樂求するを、菩提薩埵と名く。

十地等を成就して、自在に善く。諸法は空にして幻の如しと通達す。此れ一切同なりと知り、諸の世間の趣を解す。

故に名けて正覺と爲す。法は虛空の相の如く、無二にして唯一相なり、佛の十智力を成ず、故に三菩提と號す。

唯し慧を以て無明を害し、自性言說を離れたる、自證の智慧あり、故に說いて如來と名く。』

世出世護摩法品第二十七

「復次に祕密主、往昔に一時、我菩薩と爲て、菩薩の行を行じて、梵世に住せし時に、梵天有り來つて我に問うて言はく、「大梵我等火に幾の種か有るを知らんと欲す」と。時に我是の如く答て言はく、

【一】「所謂大梵天を、我慢自然と名く。次に大梵天の子、彼れを鉢嚩句と名く。世間の火の初めなり、其の子を梵飮と名け、子を畢怛囉と、吠濕婆捺羅と名く。復訶嚩奴と、合毗嚩訶那と、鉢說三鼻覩と及び阿闥末拏とを生ず。彼の子は鉢體多と、補色迦踏陶となり。是の如きの諸の火天、次第にして以て相ひ生ず。

【一】初は外道の邪火を說くに四十四種あり。

復次に胎藏を置くに、忙路多火を用ひ、後に身を澡盥せんと欲するときは、嚩訶忙囊火なり。妻に滔せしむるに用る所は、霽葉廬火を以てす。若し子を生じての後には、鉢伽浦火を用ふ。子の爲に初めて名を立るには、鉢體無火を用ひ、飮食の時に用る所は、當に知るべし戌脂火なり。子の爲に髻を作る時は、殺毗火を用ふべし、次に禁戒を受る時は、三讀婆嚩火なり。禁滿して牛を施す時は、素嚩那火を用ひ、童子の婚媾の時は、瑜曩迦火を以てす。業の事業を造作するには、數那易迦火なり、諸の天神を供養するには、鉢嚩句火を以てす。

房を造るには梵火を以てす、惠施には扇都火なり。羊を縛に用る所は、阿縛賀寧火なり。觸穢の用る所は、微吠脂火を以てし、熟食するに用る所は、娑訶娑火を以てす。日天を拜する時の用には、合微誓邪火なり。月天を拜する時の用には、所謂儞地火なり。滿燒に用る所は、阿密栗多火なり、彼の息災の時に於ては、那嚕拏火を用ふ。增益の法を作す時には、訖栗旦多火なり。怨對を降伏する時には、當に忿怒の火を以てすべし。諸の資財を召攝するには、迦摩奴火を用ひ、若し林木を焚燒するには、使者火を用ふべし。食する所を消化せしむるには、社吒路火を用ひ、若し諸火を授くる時には、所謂薄叉火なり。海中に火あり、縛拏婆目佉と名く。劫の燒盡の時の火をば、名けて瑜乾多と曰ふ。汝諸の行者の爲に、已に略して諸火を說きつ。韋陀を修習する者、梵行の傳へ讀む所なり。此の四十四種は、爾の時に我宣說しき。復次に祕密主、我往昔の時に於て、諸火の性を知らずして、諸の護摩の事を作す。

彼護摩の行に非ず、能く業果を成ずるに非ず。(三)我復菩提を成じて、十二火を演說す。

智火を最も初めと爲し、大因陀羅と名く、端嚴にして淨金の相なり、增益して威力を施す。

【三】以下第二に出世間正法の外護摩の十二の火天を說く、此十二の火天は正法の內護摩にも通ず。

焰鬘あて三昧に住す、當に知るべし智圓滿せり。第二を行滿と名く、普光ありて秋の月の華の如し。吉祥圓の輪中にして、珠鬘鮮白の衣あり、第三の摩嚕多は、黑色にして風燥の形なり。第四の盧醯多は、色朝日の暉の如し。第五の沒嘌拏は、髭多くして淺黃の色なり。頭髻くして大威光あり、遍く一切を哀愍す。第六をば忿怒と名く、眇目にして霏煙色なり。髮聳くして而も震吼す　大力にして四牙を現ず、第七の闍吒羅は、迅疾にして衆綵を備ふ。第八は迄灑耶なり、雜電光の聚るが如し。第九を意生と名く、大勢あつて巧色の身なり。第十の羯羅微は、赤黑にして唵字の印なり。第十一の火神は、―梵本に名を闕く―第十二の蘊賀那は、衆生の迷惑する所なり。

祕密主、此等の火色の所持は、其れ自の形色に隨つて、藥物等も彼に同じうして、而も外護摩を作せ。意に隨つて悉地を成ず。【三】復次に内心に於て、【四】一性にして而も三を具す。三處を合して一と爲す。嚩底の内護摩なり、大慈大悲の心、是を息災の法と謂ふ。彼食て害を具す。是を增益の法と爲す。忿怒は胎藏に從て、而も衆の事業を造す。

【三】以下第三に内護摩觀を說く。

【四】菩提心の性に本尊の三密と爐壇の三密と、行者の三密とを具するを一性にして而も三を具すと云ふ。此三平等不二なるを三處を合して一と爲すと云ふなり。

又彼祕密主、其の所說の處の如く、相應の事業に隨ひ、信解に隨つて焚燒すべし。』
爾の時に金剛手、佛に白して言さく、「世尊、云何なるか火爐の三摩地、云何なるか而も用て散灑し、云何んが順に吉祥草を敷く、云何んが緣の衆物を具する。』是の如く說き已ぬ。
『爾の時に金剛手、佛に白して言さく、「世尊、云何が火爐の定、云何が散灑を用ふる。順に吉祥草を敷く、云何が衆物を具す」佛、祕密主、持金剛者に告げて言はく、
「火爐は肘量の如くして、四方の相均等なり。四節を緣の量と爲し、金剛の印を周帀すべし。之れを藉くに生茅を以てし、爐を繞りて而も右に旋らす。末を以て本に加へざれ、本を以て末に加ふべし。
次に吉祥草を持して、法に依て而も右に灑げ、塗香と華と燈とを以て、次に火天に獻ぜよ。行人一華を以て、沒栗茶に供養して、坐位に安置す。復當に灌灑を用ふべし。當に滿施を作すべし。持するに本眞言を以てし。次に息災の護摩、或は增益の法を以てす。是の如きの世の護摩を、說て名て外事と爲す。復次に內護摩は、業生を滅除す。自の末那を了知して、遠く色聲等を離る。眼と耳と鼻と舌と身と、及與語と意との業は、皆悉く心より起つて、心王に依止す。眼等の分別生じて、及び色等の境界あり。智慧未生の障は、風燥火能く滅す、妄分別を燒除して、淨菩提心を成ず。」と』

此を内護摩と名く。諸の菩薩の爲に說く。

說本尊三昧品第二十八

爾の時に執金剛祕密主、佛に白して言さく、『世尊、願くは諸尊の色像、威驗の現前することを說き給へ。眞言門に菩薩の行を修する、諸の菩薩をして、(一)本尊の形を觀緣せしむるが故に、卽本尊の身を以て自身と爲す。疑惑あること無くして、而も悉地を得べし。』是の如く說き已て、佛、執金剛祕密主に告げて言はく、『善哉、善哉、祕密主、汝能く吾に是の如きの義を問ふ。善哉、諦に聽き極て善く作意すべし、吾今演說せん。』金剛手の言さく、『是の如し、世尊、願樂くは聞かんと欲す。』佛の言はく、『祕密主、諸尊に三種の身あり、所謂字と印と形像となり。彼の字に二種あり、謂く(二)聲と及び菩提心となり。印に二種あり、所謂(三)有形と無形となり。本尊の身に亦二種あり、所謂(四)淸淨と非淸淨となり。彼れ淨身を證すれば、一切の相を離る。非淨有想の身は、則ち顯と形との衆色あり。彼の二種の尊形、二種の事を成就す。有想の故に、有相の悉地を成就し、無想の故に、隨つて無相の悉地を生ず。』而も偈を說いて言はく、

【一】卽ち自の所持の尊なり、故に亦た自尊とも云ふ。

【二】聲を觀ずるは其字義を觀ずるなり、卽ち字の實相に由て菩提心を觀ずるなり、菩提心とは但觀菩提心なり。

【三】初心の間は其本尊の形と色と住處と坐立と所持の印等を觀ず、卽ち有相の故に有形と云ふ。後には宛然として直に見て、鏡像の想はざれども見ゆるが如くなる故に無形と云ふ。

【四】有相を非淸淨と云ひ無相を淸淨と云ふ。行者初心の間は畫像等に由て緣觀するは有相なり、此觀漸く熟して閉目開目に常に見る位を無相と云ふ。有相に由て無相に入るな

「佛有想を說き給ふ。故に樂欲して有相を成ず。無想に住するを以ての故に、無相の悉地を獲。是の故に一切の種、當に非想に住すべし。」

り。即ち無常の因に由て常住の果に至るなり。

說無相三昧品第二十九

復次に薄伽梵毘盧遮那、執金剛祕密主に告げて言はく、「祕密主、彼の眞言門に、菩薩の行を修する諸の菩薩、（一）無相三昧を成就せんと樂欲せば、當に是の如く思惟すべし。想は何れより生ずる、自身とせんや、自の心意とせんや。若し身より生ぜば、身は草木瓦石の如し。自性是の如く造作を離れたり、識知する所無し、因業の生ずる所なり、當に等しく觀じて外事に同ずべし。又建立せる形像の如く、火に非ず、水に非ず、刃に非ず、毒に非ず、金剛等に傷つけ壞られ、或は忿恚麤語すれども、而も能く少分も其をして動作せしむるに非ず。若し飲食と衣服と塗香と華鬘とを以て、或は塗香と旃檀と龍腦と、是の如き等の類の、種種の殊に勝れたる受用の具を以て、諸天と世人と、奉事し供給すれども、亦喜を生ぜず。何を以ての故に、愚童凡夫は、自性空の形像に於て、自ら我分を生じて、顚倒不實にして、諸の分別を起して、或は復供養し、或は毀害を加ふ。祕密主、當に是の如く循身の念に住して、性空を觀察すべし。

復次に、祕密主、心は自性無し、一切の想を離れたるが故に、當に性空を思惟すべし。祕密主、心

【一】身口意三平等の法門を修觀して、成熟するを無相三昧と云ふ。身口意の三事は因緣より生じたる法なり、故に有なれども都て自性なし、不生不滅なり、卽ち是れ阿字門の法界性なり、是を無相三昧と云ふ。凡夫は此理を知らざる故に身口意の事法に由て、修せしめて三平等の性に引入するなり。

は三時に於て求むるに得可らず、三世を過たるを以ての故に。是の如きの自性は、遠く諸相を離れたり。祕密主、心想ありとは、即是れ愚童凡夫の分別する所なり。了知せざるに由りて、是の如き等の虚妄の横計あり。彼の不實不生の如く、當に是の如く思念すべし。祕密主、此の眞言門に、菩薩の行を修する諸の菩薩は、無相の三昧を證得す。無相三昧に住するに由るが故に、如來の說き給ふ所の眞語親たり其の人に對して常に現在前す。』

世出世持誦品第三十

「復次に祕密主、今祕密眞言を持する法を說くべし。

一一の諸の眞言に、(一)心意の念誦を作せ、出入の息を二となす。常に第一と相應するなり。

(二)我四種ありと說く。

此に異つて而も受持すれば、眞言支分を闕く。內と外と相應するに、彼の世間の念誦は、(三)所緣あつて相續して、種子の字と句とに住し、

(四)或は心本尊に隨ふ、故に攀緣ありと說く。(五)出入の息を上と爲す、

(六)當に知るべし出世の心は、遠く諸字を離れたり。自と尊と一相と爲す、二無く取著無し。

意と色像とは壞らず、法則に異すること勿れ。說く所の(七)三落叉に、多種の持眞言あり。

乃至衆の罪を除いて、眞言者淸淨なり。念誦の數量の如くして、是の如きの敎に異すること勿れ。』

【一】心意念誦を第一とし、出入息念誦を第二とす。此二を第一と相應すと云ふ、第一とは阿字第一命なり。

【二】先きに已に說けども今更に說くなり。

【三】聲念誦。

【四】作意念誦。

【五】出入息念誦。

【六】三摩地念誦なり。

【七】三落叉は相の義なり。卽ち字の眞言の相と、身の印相と、本尊の心相との平等の觀をなすなり。然らざれば徒に口に遍數を誦すれども、益なきなり。

囑累品第三十一

(一)爾の時に世尊、一切の衆會に告げて言はく、『汝今當に(二)不放逸に住すべし。此の法門に於て、若し根性を知らざれば、他人に授與すべからず。我が弟子の標相を具する者を除く。我今演說せん、汝等當に一心に聽くべし。若し吉祥の執宿の時に於て生れて、勝事を志求し、微細の慧あつて、常に恩德を念じ、渴仰の心を生じ、法を聞きて歡喜して而も住せん。其相靑白なり、或は白色なり。廣き首、長き頸、額廣く平正にして、其の鼻脩く直く、面輪圓滿にして端嚴相稱はん。是の如くならば、佛子應當に慇懃に而も之れを敎授すべし。』爾の時に一切具威德者、咸く慶悅を懷いて、聞き已つて頂受し、一心に奉持す。是の諸の衆會、種種の莊嚴を以て、廣大に供養し已つて、佛の足を稽首し、恭敬合掌して、而も是の言を說く、『惟願くは此の法敎に於いて、救世の加持の句を演說して、法眼道をして、一切處に遍じて、久く世間に住せしめ給へ』と。爾の時に世尊、此の法門に於て、加持句の眞言を說て曰く、

『南麼三曼多勃馱喃一 薩婆他引勝 勝二 怛𡁠二合 怛𡁠二合三 顒 顒四 達𠺕達𠺕五 婆他二合引 跋也 婆他二合引 跋也六 勃馱薩底也二合嚩引七 𤙖達摩薩底也二合嚩引八 僧伽薩底也二合嚩引九 𤙖𤙖十 吠那尼吠十一 莎訶』

【一】 流通分なり。
【二】 前品の末の是の如きの敎に異すること勿れと云ふを承け繼いで不放逸と云ふ。師資相承の法則を越えざるを云ふなり。

時に佛此の經を說き已り給ひて、一切の持金剛者、及び普賢等の上首の諸の菩薩、佛の說き給ふ所を聞いて、皆な大に歡喜し、信受し奉行しき。

巻の第七

供養念誦三昧耶法門眞言行學處品第一

(一)『毘盧遮那佛の、淨眼を開敷し給へること青蓮の如くなるを稽首したてまつる。
(二)我大日經王に依て、供養を資くる所の衆の儀軌を説かん。
次第の眞言の法を成せん爲に、彼の如くせば當に速に成就することを得べし。
又本心をして垢を離れしめんが故に、我今要に隨ひ略して宣説せん。
(三)然も初に自他の利成就することは、無上智願の方便なり。
彼を成ずる方便無量なりと雖、悉地を發起することは信解に由る。
(四)悉地の諸の勝願を滿し給へる、一切如來と勝生子と、
彼等の佛身の眞言形と、住する所の種種の印威儀と、
殊勝の眞言を行ずる所の道と、及び(五)方廣乘とに於て皆諦かに信ずべし。

【一】序分の中に於て二段あり初に歸敬勸信序。
【二】我とは無畏三藏、又龍猛菩薩、又一説には文殊。
【三】精勤行序。此經に序正流通の三分あり、第一品は序分なり、第二品以下の三品は正宗分なり、第五品は流通分なり。
【四】初の歸敬三寶は說主の自敬なり、此段は行者の讃信三寶を明す。
【五】大日經なり。

有情の信解に（六）上と中と下とあり、世尊彼の證修の法を說き給ふ。
六趣に輪廻する衆を哀愍して、隨順し饒益するが故に開演し給ふ。
當に恭敬して決定の意を以てすべし。亦勤誠深信の心を起すべし。
若し最勝の方廣乘に於て、妙眞言の調伏の行を知り、
善逝子の修習する所の、無上持明の別律儀に隨ひ、
具緣の衆の支分を解了し、傳敎の印可等を受くることを得たる、
是の如きの師を見ては恭敬し禮し、利他の爲の故に一心に住すべし。
瞻仰すること猶世の導師の如く、亦善友及び所親の如くすべし。
慇懃殊勝の意を發起して、供養し給侍して所作に隨ひ、善く師の意に順じて歡喜せしめよ。
慈悲攝受して相對はん時には、稽首して勝れたる善逝の行を請ふべし。
願くは尊應の如く我を教授したまへ、彼の師自在に、而も大悲藏等の妙圓壇を建立し、
法に依て曼荼羅に召入し、器に隨つて三昧耶を授與すべし。
（七）道場と敎本と眞言印と、親く尊の所に於て口に傳授すべし。
（八）勝三昧耶及び護を獲て、爾して乃ち應當に說の如く行ずべし。
然も此の（九）契經の說く所は、正眞言の平等の行を攝す、

【六】次の如く頓と超と漸との三類の機なり。
【七】道場とは曼荼羅なり、敎本とは大日經なり。
【八】一說に云く、傳法灌頂と。又一說に云く學法灌頂と。
【九】大日經なり。

劣慧の弟子を哀愍するが故に、漸次の儀式を分別す。
勝利に造れる天中の天、正覺の心より生ずる所の子に於て、
下世天の身語印に至るまで、此の眞言の最上乘に入る。
諸の密行に導く軌範の者をば、皆當に敬ひ重じて、輕じ毀らざるべし。
能く諸の世間を饒益するを以て、是の故に捨離の心を生ずること勿れ。
常に應に無間に而も彼等の廣大の諸の功德を繫念すべし。
其の力分相應の事に隨つて、悉く皆承け奉りて而も供養すべし。
佛と聲聞衆と及び緣覺との、彼の教門の苦を盡すの道を說くと、
學處を授たる〔一〇〕師と同梵行とに、一切毀り慢る心を懷くこと勿れ。
善く時宜の當に作すべき所を觀じて、〔一一〕和敬と相應して而も給侍すべし。
愚童の心行の法を造らざれ、諸尊に於て嫌恨を起さざれ。
世の導師の契經に說き給ふが如く、能く大利を損ずるは瞋に過ぎたるは莫し。
一念の因緣悉く、倶胝曠劫に修する所の善を焚き滅す。
是の故に慇懃に常に、此の義利無きの根本を捨離すべし。

〔一〇〕卽ち阿闍梨なり。
〔一一〕身口意戒見利の六和敬なり。
〔一二〕淨菩提心の如意寶とは卽眞言なり。

(三)淨菩提心の如意寶は、世と出世との勝稀有を滿す。
疑を除けば究竟じて三昧を獲、自利利他是に因つて生ず。
故に應に守護せんこと身命より倍すべし。觀ずれば廣大の功德藏を具す。
若し身口意に衆生を嬈すことは、下少分に至るまで皆遠く離るべし。
異の方便の濟ふ所多きをば除く、內に悲心に住して而も瞋を現ずべし。
恩德に背く有情の類に於て、常に忍辱を行じて過を觀ぜざれ。
又常に大慈悲と、及び喜捨無量の心とを具足して、
力の能へたる所に隨つて法食を施し、慈の利行を以て群生を化すべし。
或は大利と相應する心に由つて、時を俟つが爲の故に而も棄捨すべし。
若し勢力の廣く饒益すること無くば、法に住して但だ菩提心を觀ずべし。
佛此の中に萬行を具し、淸白醇淨の法を滿足すと說きたまふ。
布施等の諸の度門を以て、衆生を攝受して大乘に於てす。
受持と讀誦と等と、及與思惟と正修習とに住せしむべし。
智者は六情の根を制止して、常に當に意を寂めて等引を修すべし。
事業を毀ち壞るは諸の酒に由る、一切の不善法の根なり。

毒と火と刀と霜雹と等の如し、故に當に遠く離るべし、親しみ近づくこと勿れ。
又佛我慢を增すと說きたまふに由つて、高妙の床に坐臥すべからず。
要を取て之れを言はば、具慧者は悉く自損損他の事を捨つべし。
我れ正三昧耶の道に依つて、今已に次第に畧して宣說す。
佛の說き給ふ修多羅を顯明して、廣く知解して決定を生ぜしむ。
此れに依て正しく平等戒に住して、復當に毀犯の因を離るべし。
謂く惡心を習ひ及び懈惰し、妄念し恐怖し談話する等なり。
妙眞言門の覺心者は、是の如く正しく三昧耶に住して、當に障蓋をして漸く消え盡さしむべし。
諸の福德增益するを以ての故に。此の生に於て悉地に入らんと欲はば、其の應き所に隨つて之れを思念すべし。
親たり尊の所に於て明法を受けて、觀察し相應すれば成就を作す。
當に自ら眞言行に安住せんことを說く所の、明の次第儀の如くすべし。
先づ灌頂傳敎の尊を禮して。眞言に修する所の業を請白せよ。
智者師の許可を蒙り已つて、地分の所宜の處に依れ。
妙山と【一三】補峯と【一四】平巖との間、種種の【一五】龕【一六】窟と兩山の中と、一

【一三】大山の懷の裏の峰を云ふ。
【一四】石壁の中に穴ありて居るべし。
【一五】岩窟土窟石龕の類あり、龕に窟に似たり。
【一六】石室なり。

切の時に於て安穩を得べし。
（一七）菱と（一八）荷と青蓮との遍く嚴る池と、
大河と（一九）涇川と洲岸との側と、遠く人物衆の憒閙を離ると。
篠葉扶疎にして意を悦ばしむる樹あり、多く乳木と及び祥草と饒ならん。
蚊虻と苦と寒と熱と、惡獸と毒蟲との衆の妨難有ることなく、
或は諸の如來聖弟子の、嘗て往昔に於て遊居したまふ所、
寺塔と（二〇）練若と古仙の堂と、當に自心意樂の處に依るべし。
在家を捨て離れ諠務を絕して、勤めて（二一）五欲の諸（二二）蓋纏を轉ずべし。
一向に深く法味を樂み、其の心を長養して悉地を求むべし。
又常に堪忍の慧を具足して、能く飢渴の諸の疲苦を安ずべし。
淨命の善作或は作無くば、常に妙法經卷と俱にすべし。
若は諸佛と菩薩との行に順じて、正眞言に於て堅く信解し、
淨慧力を具して能く堪忍し、精進にして諸の世間を求めず、常に樂て堅固にて怯弱無し。
自他の現法に成就を作し、餘の天の無畏依に隨はず、此を具するを名けて良き助伴と爲す。』

【一七】菱角。
【一八】蓮花葉。
【一九】常に流れて水絕えざるなり
【二〇】練若に菩提道場と無礙草處と無喧動處との三あり。
【二一】色聲香味觸。
【二二】慳貪と瞋と惛沈と睡眠と掉舉と散亂と疑となり。

增益守護淸淨行品第二

『彼成就の處所を作り已つて、毎日に先づ念慧に住すべし。
法に依て寢息して初て起くる時に、諸の無盡の障を爲す者を除け。
是の夜に放逸より生ずる所の罪を、懇懃に還つて淨く皆悔除すべし。
根を寂にし悲を具し利益の心を以て、無盡の衆生界を度せんと誓ふべし。
法の如く澡浴し或は浴せずとも、應に身口意をして淸淨ならしむべし。
次に齋室空靜の處に於て、妙花等を散じて以て莊嚴せよ。
隨て形像と勝妙典とを置き、誠心に十方の佛を思念すべし。
心目に現觀して諦かに明了なるべし。
當に本尊の在す所の方に依て、誠を至し恭敬して一心に住し、五輪を地に投げて而も禮を作すべし。
〔一〕十方の正等覺の、三世一切に三身を具し給へるを歸命し、一切の大乘法を歸命し、
不退の菩提衆を歸命し、諸明眞實の言を歸命し、一切の諸の密印を歸命して、

〔一〕以下を胎藏の九方便と云ふ、中臺と八葉とを標準とする故に九なり、九方便各各の印は兩部の軌に出でたり。第一作禮の方便眞言門。

身口意の淸淨の業を以て、慇懃に無量に恭敬し禮したてまつる。』

(二)作禮方便の眞言に曰く、

「唵一南麼薩婆怛他引蘖多二迦引耶嚩引吃質二合多三播娜鑁無范反娜難迦嚕弭四」

此の作禮の眞實の言に由て、卽ち能く遍く十方の佛を禮したてまつる。

(三)右の膝を地に著け爪掌を合せて、思惟して先の罪業を悔ることを說くべし。

我無明に由て積集する所、身口意業に衆罪を造れり。

貪欲と恚と癡と心を覆ふが故に、佛と正法と賢聖僧と、父母と二師と善知識と、

以及無量の衆生との所に於て、無始生死流轉の中に、具に造れる極重の無盡の罪を、

親たり十方現在の佛に對し奉りて、悉く皆な懺悔して復作らじ。

(四)出罪方便の眞言に曰く、

「唵一薩婆播波薩怖二合吒二娜訶曩伐折囉二合引二也三莎嚩訶」

(五)十方三世の佛の、三種の常身と正法の藏と、勝願菩提の大心衆とを南無したてまつる。

我れ今皆悉く正しく歸依せん。

(六)歸依方便の眞言に曰く、

【二】普賢三昧耶の印なり。
【三】第二出罪方便眞言門。
【四】大慧刀の印なり。
【五】第三歸依方便眞言門。
【六】金剛合掌の印なり。

「唵一 薩婆勃駄菩提薩怛鑁引二合二 設囉禰平 藥車弭三 伐折囉二合 達磨四 頡唎二合五」

（七）我此身を淨めて諸垢を離れたると、及與三世の身口意との、大海と刹塵との數に過ぎたるを、一切の諸の如來に奉獻したてまつる。

（八）施身方便の眞言に曰く、

「唵一 薩婆怛他引 蘗多二 布闍鉢囉二合 跛無湯反 嘌多二合 曩夜怛忙去三 難三 涅嘌夜二合 哆夜弭四 薩婆怛他引 蘗多室栢二合 地底瑟咤勅駕反二合 哆五引 薩婆怛他引 蘗多若難謎阿引 味設覩六」

（九）淨菩提心の勝願の寶を、我今起發して群生を濟ふ。生苦等の集に纏ひ繞され、及與無知に害せらるる身を救攝し、歸依して解脫せしむ。常に當に諸の含識を利益すべし。

（一〇）發菩提心方便の眞言に曰く、

「唵一 菩提質多二 母多播引二合 娜夜弭三」

是の中の增加の句に言く、「菩提心は一切の物を離れたり、謂く蘊と界と處と能執と所執とを捨てたるが故に、法は我あることなし、自心平等にして本來不生なること大空の自性の如し。諸世尊及び諸の菩薩の菩提心を發し、乃し菩提道場に至り給へるが如く、我も亦是の如く菩提心を發す。」（一一）

【七】第四施身方便眞言門。
【八】獨股杵の印なり二風を立て合するは寶なり即施身の故に佛に承事する意を表す
【九】第五發菩提心方便眞言門
【一〇】弘法大師の傳には法界定印なり、法界定印は生佛不二の三昧耶を表す、菩提心は生佛不二の故に此印を用ゐる也
【一一】高麗本〻〻〻とあれども宋本元本に依り[illegible]す。

此の增加の句は亦眞言に同きなり當に梵本を誦すべし

（一二）十方無量の世界の中の、諸の正遍知の大海衆の、種種の善巧方便力と、及び諸の佛子の群生の爲に、

諸のあらゆる修する所の福業等とを、我今一切盡く隨喜す。

（一三）隨喜方便の眞言に曰く、

「唵一　薩婆怛他引　蘖多二　本夫喏反　尼也　若囊三　努莽捺那布闍迷伽參莽捺囉二合四　薩叵二合囉拏三嚩曳五　吽」

（一四）我今ま諸の如來と、菩提大心の救世者とを勸請す。

唯願くは普く十方界に於て、恒に大雲を以て法雨を降し給へ。

（一五）勸請方便の眞言に曰く、

「唵一　薩婆怛他引　蘖多引　睇瀝儜布闍迷伽娑慕捺囉二合三　薩叵二合囉儜三嚩曳四　吽」

（一六）願くは凡夫所住の處をして、速に衆苦の集むる所の身を捨てしめ、

當に無垢處に至ることを得て、淸淨の法界身に安住すべし。

（一七）奉請法身方便の眞言に曰く、

【一二】第六隨喜方便眞言門。

【一三】金剛合掌の印なり、指端を交るは自ら他の善根を隨喜するの義を表すなり。

【一四】第七勸請方便眞言門。

【一五】亦金剛合掌の印なり、卽ち如意寶珠の印なり、寶珠より諸の法供養を雨らすなり。

【一六】第八奉請法身方便眞言門

【一七】金剛合掌の印なり、一切衆生をして法界身に安住せしめんと奉請す、法界身は生佛不二なる故に此印を用ふ。

「唵一 薩婆怛他引 蘖多二 係睹鉢邏夜弭三 薩婆薩怛嚩 二合 係多 引 嚟他 二合 去三 耶 四 達麼駄覩薩嚩 二合 他 上 反 哌嚟婆 二合 上二 蘇覩 五

(一八) 修する所の一切の衆の善業、一切の衆生を利益せんが故に、我今盡く皆正しく廻向して、生死の苦を除いて菩提に至らん。

(一九) 廻向方便の眞言に曰く、

「唵一 薩婆怛他引 蘖多二 涅哩也 二合 怛囊布闍迷伽參慕捺囉三 二合 薩叵 二合 囉停三 麼曳 四 吽」

(二〇) 復餘す所の諸の福事の、讀誦と經行と宴坐と等を造すことは、身心をして遍く清淨ならしめんが爲なり。哀愍して自他を救攝すべし。心性は是の如く諸の垢を離る。身應き所に隨つて以て安坐すべし。次に復三昧耶印を結ぶべし。所謂三業の道を淨除するなり。應に知るべし密印の相は、諸の正遍知の說なり。當に定慧の手を合せて、二空輪を並べ建つべし。遍く諸の支分に觸れて、眞實の語を誦持すべし。

(二一) 入佛三昧耶の明に曰く、

【一八】 第九廻向方便眞言門。
【一九】 亦金剛合掌を用ふ、自他平等に廻向する故に。
【二〇】 第十入佛三昧耶眞言門。
【二一】 以下五箇の印明は自身を守護するなり、行者此印の加持に由て佛の三昧耶即眞淨の菩薩心に入住することを得る故に入佛三昧耶と云ふ、行者此の三昧耶を持せざれば一切眞言の法事を作すことを得ざるなり。

「南麼薩婆怛他引蘖帝驃一微濕嚩二合目契弊二唵阿三迷三呾嚟二合三迷四三麼曳平五莎訶」

纔に此の密印を結べば、能く如來の地を淨む、地波羅蜜滿じて、〔二二〕三法道界を成ず。餘す所の諸の印等は、次第に經に說くが如し。眞言者當に知るべし、所作成就することを得。

〔二三〕次に法界生の密慧の標幟を結べ、身口意を淨むるが故に、遍く其の身に轉ずべし。

般若と三昧との手、倶に金剛拳に作して、二空を其の掌に在き、風輪を皆な正しく直くすべし。

是の如きを法界淸淨の祕印と名く。

法界生の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一達摩駄睹二薩嚩二合婆嚩句痕三」

法界の自性の如く、而も自身を觀ぜよ。或は眞實の言を以て、三たび轉じて而も宣說すべし。

當に法體に住して、無垢なること虛空の如しと見るべし。

眞言印の威力、行人を加持するが故に、〔二四〕彼をして堅固ならしめんが

【二二】印と眞言と意密とを三法と云ふ、道界とは果なり、故に三法の果なり。入佛三昧耶は佛菩提心戒に入ることを得て聖胎藏に託するなり。

【二三】第十一法界生眞言門。前に聖胎藏に託する者胎藏圓滿して此法界生の加持に由つて佛家に生存す、故に法界生と云ふ。

【二四】第十二金剛薩埵眞言門。既に佛家に生在す、次に此加持に由つて佛家の事業滿足するなり。又入道三昧耶に由て胎藏に於て退失せしめず法界生に由て初て胎を出づる時に諸の障碍を離る、金剛薩埵に由つて能

為に、自ら（二五）金剛の身なりと觀ずべし。

金剛智の印を結べ、止觀の手を相ひ背けて、地と水と火と風との輪、左右に互に相ひ持すべし、二空各の旋轉して、慧の掌の中に合す。是を名けて法輪と為す、最勝吉祥の印なり、是の人當に久しからずして、救世者に同ずべし。

眞言印の威力、成就者當に見るべし、常に寶輪を轉ずるが如く、而も大法輪を轉ずべし。

金剛薩埵の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折羅赧一伐折羅引二怛麼二合句痕」

此眞言を誦し已つて、當に等引に住して、諦かに我が此身は、即ち是れ執金剛なりと觀ずべし。無量の天魔等、諸の之れを見ることあるもの、金剛薩埵の如くす。疑惑の心を生ずること勿れ。

（二六）次に眞言印を以て、而も金剛甲を擐る。當に所被の服、體に遍くして焰光を生ずと觀ずべし。是を用ひて身を護るが故に、諸の魔障を為す者、及び餘の惡心の類、之を觀て咸く四に散ず。是の中の密印の相は、先ず（二七）二補吒に作して、止觀の二風輪、火輪の上に糾ひて持す。二空自ら相ひ並べて、而も掌の中に住け、彼の眞言を誦し已つて、當に無垢の字を觀ずべし。

く佛の家業を持するなり。又入佛三昧はつぼめる蓮花の如し、法界生は敷きたる蓮花の如し、金剛薩埵は菓實成就して還て種と成るが如し。又入佛三昧を以て中胎藏を加持し、法界生を以て內第二重の眷屬を加持し、金剛薩埵を以て第三重隨類の身を加持す。

【二五】金剛薩埵の身なり。

【二六】第十三金剛甲冑眞言門。

【二七】虛心合掌なり。

〔二八〕金剛甲冑の眞言に曰く、

「南麽三曼多伐折囉赦一 唵二 伐折囉二合迦嚩遮三 絆」

〔二九〕囉字の色は鮮白なり、空點を以て之れを嚴れ、彼の髻の明珠の如し、之を頂の上に置け。設ひ百劫の中に於て、積れる所の衆の罪垢も、是に由て悉く除滅して、福慧皆な圓滿す。

彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃駄喃一 囕」

眞言は法界に同じ、無量の衆罪を除く、久しからずして當に成就して、不退地に住すべし。一切の觸穢の處に、當に此の字門を加すべし、赤色にして威光を具せり、焰鬘遍く圍遶せり。

〔三〇〕次に魔を降伏して、諸の大障を制せんが爲の故に、當に大護者、無能堪忍の明を念ずべし。

無堪忍大護の明に曰く、

「南麽薩婆怛他引 蘖帝弊一 薩婆佩也微蘖帝弊二 微濕嚩目契弊薩婆他三引 唅欠四 囉吃灑二合 摩訶引 沫隷

【二八】 金剛薩埵の身を莊嚴せんが爲に金剛甲冑を說く、又無垢字とは下に說く嚂字なり、金剛甲冑を被て光り猛炎の如くなるを見て一切の作障者皆近迫すること能はざるなり、又金剛甲を被るを以て六道に輪轉し生を出て死に入れども、一切の煩惱業苦の、傷ること能はざる所なり。

【二九】 第十四嚂字眞言門。

【三〇】 第十五無堪忍大護眞言門。諸の魔鬼等此の眞言を持誦する人を見ては眼を開いて見んとすれども見ること能はざる故に無堪忍と云ふなり。

五 薩婆怛他引糵多奔捉也二合涅社帝六(三一) 吽吽怛囉二合引七 吒怛囉吒八引上 阿鉢囉二合底訶諦九 莎嚩訶」

纔に憶念するに由るが故に、諸の毗那也迦、惡形の羅刹等、彼れ一切馳散す。』

【三一】此の中の眞實語は吽字なり。重て云ふ意は、一は外障を摧き二は内障を摧く。又外障は煩惱障、内障は所知障。

供養儀式品第三

「是の如く正業をもて其の身を淨め、定に住して本眞言の主を觀ずべし、眞言と印とを以て而も召請せよ、先づ當さに三昧耶を示現すべし。
眞言と相應して障者を除き、兼て不動の慧刀の印を以てし、稽首して閼伽水を獻め奉り、行者復眞言の座を獻れ。
次に花と香と等とを供養すべし。去垢するに亦無動尊を以てす。辟除と作淨とも皆是の如し、(一)加持するに本眞言主を以てし、
或は諸佛勝生の子、無量無數の衆圍繞せりと觀ずべし。」
右は攝頌竟ぬ。下に當に次第に分別して說くべし。
「現前に囉字を觀ぜよ、點を具して廣く嚴飾せり、謂く淨光焰鬘ありて、赫くと朝日の暉りの如し。
聲の眞實の義を念ずれば、能く一切の障を除いて、三毒の垢を解脫す、諸法も亦復然なり。
先づ自ら心地を淨め、復道場の地を淨めて、悉く衆の過患を除くべし、其の相虛空の如し。
金剛の所持の如く、此の地も亦是の如し。
(二)最初に下位に於て、彼の風輪を思惟すべし。訶字の安住する所なり、黑光焰流布せり。」

(一) 本尊加持なり。
(二) 以下風水金の三輪器界觀を明かす。下位とは世界の最下虛空の中を云ふ。卽胎藏三部の觀なり。
第一世界成就門。

彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃唅」

次の上に水輪を安け、其の色猶雪乳のごとし、嚩字の安住する所、頗胝月電の光なり。

彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃鑁」

復水輪の上に於て、金剛輪を觀作すべし、想うて本初の字を置け、四方にして遍く黄色なり。

彼の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃阿」

(三)是の輪は金剛の如く、大因陀羅と名く、光焔淨金色にして、普く皆な遍く流出す。

彼の中に於て導師、諸佛子を思惟すべし、水中に白蓮を觀ずべし、妙色にして金剛の莖あり。八葉にして鬚蘂を具せり、衆寶自ら莊嚴して、常に無量光を出す、百千の衆の蓮繞れり。

(四)其の上に復、大覺師子座を觀想すべし、寶玉を以て挍飾して、大宮殿の中に在り。寶樹皆な行列して、遍く諸の幢と蓋と有り、珠鬘等交絡して、妙なる寶の衣を垂れ懸けたり。周く香華雲と、及與衆の寶雲とを布け、普く雜華等を雨らして、繽紛として以て地を嚴れり。

【三】以下第二莊嚴道場門。「百千の衆の蓮繞れり」迄は、阿字の徳を現はす。

【四】以下道場の莊嚴を明す。

韻に諧ひ愛すべき所の聲、而も諸の音樂を奏す、宮中に淨妙の、賢瓶と閼伽とを想へ。
寶樹王開き敷いて、照すに摩尼燈を以てす、三昧と惣持との地に、自在の婇女あり。
佛波羅蜜等と、菩提妙嚴との華あり、方便をもて衆伎を作し、歌は妙法音を詠ふ。
(五)我が功德力と、如來の加持力と、及以法界力とを以て、普く供養して而も住す。
(六)虛空藏轉明妃に曰く、
「南麼薩婆怛他引蘖帝驃一微濕縛二合目契弊二薩婆他三欠四嗢娜蘖帝薩叵二合囉係門五伽伽娜劒六莎訶」〔七は法なり多く誦すべし〕
此に由て一切を持するに、眞實にして異りあることなし、金剛合掌をなせ、是れ則加持の印なり。
一切の法は不生なり、自性本寂なるが故に、此の眞實を想念して、阿字を其の中に置け。
(七)次に當に阿字を轉じて、大日牟尼と成すべし、盡ること無き刹塵の衆、普く圓光の內に現はる。
(八)千界を增數と爲して、光焰の輪を流出す、普く衆生界に至つて、性に隨つて開悟せしむ。
身と語と一切に遍ず、佛心も亦復然なり、閻浮淨金の色なり、世間に應ずるが爲の故なり。

【五】密教不共の三力を明す。以上深祕の道場莊嚴を說く。
【六】虛空藏とは自心淨菩提心を云ふ、即如意寶珠の名なり。轉とは能生の義、即如上の道場莊嚴の功德を生じ一切の佛事を生ずるなり。明とは眞言なり。此眞言は能く諸の功德を生ずる故に妃と云ふ。
【七】第三成畫大日門。
【八】大千を一數として乃至不可說不可說の光焰を云ふ。

(九)跏趺して蓮の上に坐し、正受にして諸の毒を離る。身に綃縠の衣を被て、自然の髮髻の冠あり。

(一〇)若し釋迦牟尼ならば、彼の中に婆字を想へ、復是の如き字を轉じて、而も能仁尊と成せ。

勤勇は袈裟衣にして、(一一)四八の大人相あり。

釋迦種子心に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃婆」

字門轉じて佛と成つて、亦諸の衆生を利すること、猶大日尊の如し、瑜伽者觀察すべし。

一身と二身と、乃至無量の身と、同じく(一二)本體に入り、流出すること亦是の如し。

佛の右の蓮の上に於て、當に本所尊を觀ずべし。左に執金剛と、勤勇の諸の眷屬とを置く。

前と後との華臺の中に、廣大の菩薩衆あり、一生補處等の、衆生を饒益する者なり。

右邊の華座の下は、眞言者の居る所なり、(一三)若し妙吉祥を持せば、(一四)中に(一五)無我字を置くべし。

【九】左の足を先づ右の腿の上に著け、右の足を左の腿の上に著くるを蓮花坐と云ふ。又右の足を左の腿の上に著くるを吉祥坐と云ふ。

【一〇】第四成菩提釋迦門。

【一一】三十二相なり。

【一二】本體とは大日如來なり。

【一三】第五成菩提文殊門。

【一四】中とは八葉蓮臺なり。

【一五】梵の𨷈字なり、即文殊の種子なり、文殊の本體は即空なり、𨷈の上の點は是れ空なり、即大空なり、十八空を越ゆるを大空と云ふ、又文殊は諸佛菩薩の智門なる故に佛部に攝することも得、蓮花部に攝することも得、故に佛の次、觀音の前に之れを說く。

是の字轉じて身と成る、前に觀ずる所の如し。

文殊の種子心に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃瞞」

若は觀世自在、或は金剛薩埵、慈氏と及び普賢と、地藏と除蓋障と、佛眼と并に白處と、多利と毗俱知と、忙莽と商羯羅と、金輪と馬頭と、持明の男と女との使と、忿怒の諸の奉敎と、其の樂欲する所に隨つて、前の法に依て而も轉ずべし。

心をして喜ばしめんが爲の故に、外の香と華と、燈明と閼伽水とを獻め奉れ、皆な本敎に說くが如し。

不動を以て去垢し、辟除して光顯ならしむべし。本法を以て自ら相加し、及び我が身を護持し、諸の方界等を結するに、或は降三世を以てす、召請すること本敎に、用ふる所の印と眞言との如し。

及び此の普通印と、眞言王と相應すべし。

聖者不動尊の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折羅赧 一 戰拏摩訶路灑停 上 二 薩破 二合 吒也 三 絆怛羅 二合 迦 四 悍 引 曼 引」當さに三遍を誦すべし。

當に定と慧との手を以て、皆な金剛拳に作して、正しく直く火と風とを舒べて、虚空は地と水とを持すべし。

三昧の手を鞘と爲し、般若を以て刀と爲して、慧刀を入住出して、皆な三昧の鞘に在くべし。

是れ則ち無動尊の、密印の威儀なり。定の手を其の心に住して、慧の手を普く旋轉す。

知るべし觸る所の物を、卽ち名て去垢と爲す、此を以て而も左に旋らす、是に因て辟除と成す。

若し方界隅を結せば、皆隨つて右に轉せしめよ。餘す所の衆の事業の、惡を滅し諸の障りを淨むること、亦當に是の如く作すべし。

類に隨つて而も相應すべし、次に眞言印を以て、而も衆聖を請召す、諸佛菩薩の說なり。本誓に依て而も來りたまふ。

召請方便の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃 一 阿 去急呼 薩婆怛羅 引二合 鉢囉 二合 底訶諦 二 怛他引蘖黨矩奢 三 菩提浙曬耶 二合 鉢曬布囉迦 四 莎訶」應に七遍を誦すべし。

歸命合掌を以て、固く金剛縛を結んで、當に智慧の手をして、直く彼の風輪を舒べ、俛て其の上節を屈すべし。

故に號て鉤印と爲す。諸佛救世者、玆を以て一切の、十地に安住する等の、大力の諸の菩薩と、

及び餘の難調伏の、不善心の衆生とを召き給ふ。

次に三昧耶を奉るには、具に眞言と印とを以てす。印相は前に說く、諸の三昧耶の敎の如し。

三昧耶の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一 阿三迷二 怛囇三迷三 三麼曳四 莎訶」應さに三遍を誦すべし。

是の如く方便を以て。正しく三昧耶を示せば、則ち能く普く一切の衆生類を增益す。

當に悉地を成ずることを得て、速に無上の願を滿すべし、本眞言主、(二六)諸明をして歡喜せしむるが故に、獻る所の閼伽水は、先づ已に具に嚴かに備へよ。

(二七)本眞言と印とを用て、如法に以て加持して、諸の善逝者に奉り、用て無垢の身を浴すべし。

次に當に一切の、佛口所生の子を淨むべし。

閼伽の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一 伽伽娜三摩引 三摩二 莎訶」當さに二十五遍を誦すべし不動尊の印を以て之れを示す。

次に敷く所の座を奉れ、密印と眞言とを具せり、蓮華臺を結び作して、遍く一切處に置くべし。

覺者の安坐する所なり、最勝の菩提を證したまふ。是の如き處を得んが爲の故に、持して以て奉獻す。

【二六】諸明とは本尊なり。

【二七】不動の印と眞言となり。

如來座の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃(一八)阿引聲急呼」

其の中の密印の相は、定と慧との手相合せて、而も普く之れを舒べ散ず。猶鈴と鐸との形の如し。二空と地輪と、聚め合せて以て臺と爲し、水輪は稍相ひ遠けよ。是れ卽ち蓮花の印なり。復次に當に、自身より生ずる所の障を辟除するには、大慧刀の印と、聖不動の眞言とを以てすべし。

當に見るべし彼に同じく、最勝の金剛の焔ありて、一切の障を焚き燒いて、盡く餘有ること無からしむと。

智者當に轉じて、金剛薩埵の身と作るべし。眞言と印と相應して、遍く諸の支分に布すべし。

金剛種子心に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃(一九)鑁」

此の眞實の義を念ずれば、諸法は言說を離る、印等を具するを以ての故に、卽ち執金剛に同じ。當に知るべし彼の印相は、先づ三補吒を以て、火輪を中鋒と爲して、端銳りて自ら相合す。風輪を以て鉤と爲すべし、舒べ屈して其の傍らに置け、水輪は互に相ひ交へて、而も掌の內に

【一八】阿は是れ障なり、本有在纏の故に。傍の二點は除遣なり、卽除蓋障三昧なり。

【一九】此字自性清淨心の故に金剛薩埵の種子と成る。

在け。

金剛薩埵の眞言に曰く、

「南麼三曼多伐折囉赧一戰拏摩訶引路灑赧平二𤙖」

(三〇)或は三昧の手を用て、半金剛の印を作し、或は餘の契經に、說く所の軌儀を以てすべし。

次に當に身に周遍して、金剛の鎧を被服すべし。身と語との密印は、前に已に法に依て說く。

【三〇】右の手暇なき時半に作るも亦た得。

佉字と及び點とを以て、而も頂上に置て、此の眞言を思惟すべし。諸法は虛空の如しと。

「南麼三曼多勃馱喃欠」

應に先づ此の字門に住して、然る後に金剛薩埵の身と作るべし。

次に應に一心に、諸魔を摧伏する印を作すべし。智者應に普く轉じて、眞語と共に相應すべし。

能く極めて猛利の、諸の惡心ある者を除いて、當に此の地に遍じて、金剛の熾なる焰光ありと見るべし。

降伏魔の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃馱喃一摩訶引沫羅嚩底二捺奢嚩路嗢婆二合吠平三摩訶引昧怛囉二合也三毗庾二合嗢蘖二合底四莎訶」

當に智慧の手を以て、而も金剛拳を作し、正しく直く風輪を舒べて、白毫の際に加ふべし。

毗倶知の形の如し、是れ則ち彼の標幟なり、此印を大印と名く、之を念すれば衆魔を除く。纔に是の法を結ぶが故に、無量の天魔の軍、及び餘の障を爲す者、必定して皆な退き散ず。次に難堪忍の、密印と及び眞言とを用て、而も用て周界を結すれば、威猛にして能く覩るもの無し。

無能堪忍の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一 三莽多努蘖帝二 滿駄也徙瞞引三 摩訶三摩耶昵闍去帝四 娑麼二合囉嬭五 阿鉢囉二合底訶諦六 駄迦駄迦七 捨囉捨囉八 滿駄滿駄九 捺奢儞贍十 薩婆怛他引蘖多引努壤帝十一 鉢囉二合嚩囉達摩臘駄微若曳十二 薄伽嚩底十三 微矩嚟微矩麗十四 麗魯補嚟微矩麗十五 莎訶」當さに三遍を誦すべし。

或は第二の略說を以てす。眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一 麗魯補履微矩麗二 莎訶」當さに七遍を誦すべし。

先づ三補吒を以て、風輪を掌に在き、二空と及び地輪と、內に屈すること猶鉤の如し。火輪を合して峯となし、其の水輪を開き散ず、旋轉して十方を指す、是を結大界と名く。用て十方の國を持して、能く悉く堅住せしむ、是の故に三世の事、悉く能く普く之れを護る。或は不動尊を以て、一切の事を成辦す、身處を護して淨からしめ、諸の方界等を結すべし。

不動尊の種子心に曰く、

「南麼三曼多伐折囉赧悍」

次に先づ恭敬し禮し、復閼伽を獻つれ、經に說くが如く香等を以て、法に依て供養を修すべし。
復聖不動を以て、此の衆物を加持し、彼の慧刀の印を結んで、普く皆遍く之れに灑げ。
是の諸の香と華と等の、辦ずる所の供養の具、數密印を以て灑ぎ、復頻りに眞言を誦すべし。
各(二一)本眞言と、及び(二二)自ら持する所の明を說け、應に是の如く作し已つて、(二三)名を稱して而も獻め奉るべし。
一切に先づ遍く、清淨の法界心を置け、所謂囕字門なり、前に開示する所の如し。
稱する所の名の中の(二四)塗香の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一微輸上駄健杜引嗢婆二合嚩二莎訶」當さに三遍を誦すべし。

次に(二五)華の眞言を說いて曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一摩訶引妹呾哩也三合二毗庾二合嗢蘖二合帝三莎訶」當さに三遍を誦すべし。

次に(二六)焚香の眞言を說いて曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一達摩駄睹弩蘖帝二莎訶」當さに三遍を誦すべし。

(二一)香等の眞言なり。
(二二)念誦者本尊の眞言なり。
(二三)香等の名なり。
(二四)此三世無障礙智の戒香を以て法身に塗る故に普く一切衆生を薫するなり。
(二五)心蓮華妄我の爲に纏はれて增長すること能はず、今自心の實相を證知する故に慈悲藏の中より八葉次第に開敷す。

次に（二七）然燈の眞言を說いて曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一怛他引揭多引唎旨二合二薩叵二合囉㗚嚩婆去娑娜三伽伽猱那哩耶二合四莎訶」當さに三遍誦すべし。

次に（二八）諸食の眞言を說いて曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一阿囉囉迦囉囉二沫隣捺泥三摩訶引沫㗚四莎訶當さに三遍誦すべし。

及び餘の供養の具の、獻め奉るべき所の者は、此の法則に依隨して、
淨むるに無動尊を以てすべし。
當に定と慧との掌を合して、五輪互に相叉ふべし、是れ則衆物を持する、普通供養の印なり。
眞言具慧者、衆の聖尊を敬養し、復心の儀式を作すこと、淸淨にして極めて嚴麗なるべし。
獻る所皆な充滿して、平等なること法界の如し。此の方及び餘刹、
普く諸趣の中に入り、
諸佛菩薩の、福德に依て而も生起する、幢と幡と諸の瓔と蓋と、廣大の妙樓閣と、
及び天の寶樹王と、遍く有ゆる諸の資具、衆の香と華との雲等、際無きこと猶虛空のごとし。

【二六】瑜伽行人恒に勝進して休息せざるは塗香の義なり、下一花を供養する時に至る迄法界に遍ずるは燒香の義なり。

【二七】毗盧遮那大智の光明を以て無明の諸暗を照す、是れ燈の義なり。

【二八】甘露の門を開いて不老不死の無上味を成す。

各の諸の供物を雨らし、供養して佛事を成じ、思惟して一切の、諸佛と及び菩薩とに奉る。
虛空藏の明、普通供養の印を以て、三たび轉じて加持を作せば、願ふ所皆成就す。

持(二九)虛空藏の明の增加の句に云く、

我が功德力と、及び法界力とに依て、一切の時に獲易く、廣多にして復淸淨なり。
大供莊嚴の雲、一切如來と、及び諸の菩薩衆との、海會に依て而も流出す。
一切の諸佛と、菩薩との加持を以ての故に、法の如く修する所の事に、諸の功德を積集し、
廻向して悉地を成ず。諸の衆生を利せんが爲に、以て是の如きの心を說いて、明行淸淨なることを願ふべし。

諸障銷除することを得、功德を自ら圓滿す。時に隨つて正行を修すべし、是は則ち定れる期無し。
若し諸の眞言の人、此の生に悉地を求めば、先づ法に依て持誦して、
但(三〇)心の供養を作せ。爲す所既に終り竟て、次に一月を經て、具に
(三一)外の儀軌を以て、而も眞言を受持すべし。
又持金剛、殊勝の諷詠を以て、佛と菩薩とを供養して、當に速に成就することを得べし。

執金剛の(三二)阿利沙の偈に曰く、

(二九)虛空とは本不生の理也。藏とは能出能藏なり。增加の句は能の義を顯はす。

(三〇)運心理供養なり。

(三一)事相の供養なり。

(三二)阿利沙は聖主と翻す、即ち大日如來の功德を讚歎するなり。

【三三】無等にして動ずる所なく、平等にして堅固なる法なり。流轉の者を悲愍して、衆の苦患を撲ひ奪ふ。

普く能く悉地の、一切の諸の功德を授けたまふ、垢を離れて遷變せざる、無比勝願の法なり。

【三四】虚空に等同なり、彼喩と爲すべからず、隙塵の千萬分も、尚ほ其の一に及ばず。

恒に衆生界に於て。果を成就する願の中に、悉地に於て盡ることなし。故に譬喩を離れたり。

【三五】常に垢翳無き悲は、精進に依て生じ、願に隨つて悉地を成ず。法爾にして能く蔽するもの無し。

衆生の義利を作すこと、及ぶ所に普く周遍す、照明にして恒に斷えず、哀愍廣大の身なり。

【三六】障を離れて罣礙無し、悲を行ずる行者なり。周く三世の中に流れて、施し與へて願を成就す。

無量の量に於て、究竟の處に至らしむ、奇哉此の妙法、善逝の到りたまふ所なり。

【三七】唯本誓を越えず、我に無上の果を授けたまふ、若し斯の願を施す者は、恒に殊勝の處に至る。

廣く世間に及して、能く勝希願を滿す、一切の趣に染せず、三界に依る所無し。

【三八】右此の偈は、即眞言に同じ、當に梵本を誦すべし。

【三三】以下東方發心門を明す。
【三四】以下南方修行門を明す。
【三五】以下西方菩提門を明す。
【三六】以下北方涅槃門を明す。
【三七】以下中央方便門を明す。此偈は大日如來の五轉即五智の功德を讚歎するなり。
【三八】梵文は胎藏玄法寺の軌に出でたり、亦大日大讚と云ふ。

是の如きの偈讚を誦持し已つて、至誠にして世の導師を歸命したてまつる。唯願くは衆生、我に有情を慈み濟ふの悉地を授け與へたまへ。

復次に他を利せんと欲ふが爲の故に、佛化の雲も一切に遍ずと觀ずべし。

我が修する所の福と佛の加持と、普賢の自體法界力とを以て、蓮華臺に坐し十方に往いて、性欲に隨順して衆生を導かん。

諸の如來の本誓願に依て、一切の内外の障を淨め除き、出世の諸の資具を開き現はして、其の信解の如くに之れを充滿せん。

我が功德の莊嚴する所と、及び淨法界の中より出生すると、如來の神力の加持とを以ての故に、衆生の諸の義利を成就し、

諸佛の庫藏を備足し、無盡の寶を出すこと不思議ならん、三たび虛空藏の轉明を誦すべし。及び密印の相は前に說くが如し。

此の眞言乘の諸の學者、是の故に當に諦信の心を生ずべし、一切の導師の宣說し給ふ所なり、誹謗して疑悔を生ずべからず。」

持誦法則品第四

「是の如く法を具して供養し已つて、盡ること無き衆生を利する心を起して、諸佛と聖天と等を稽首し、相應の座に住して三昧に入れ。

(一)四種の靜慮の軌儀を以て、能く內心をして喜樂を生ぜしむ、眞實の義を以て加持するが故に、當に眞言を以て、等引を成ずることを得べし。

(二)若し眞言の念誦を作さん時には、今當に次に彼の方便を說くべし、智者先に開示する所の如く、現前に而も本所尊を觀ずべし。其の心月の圓明の中に於て、悉く皆な眞言の字を照見し、卽ち次第に而も援持すべし、乃至心をして淨め垢無からしむべし。數と及び時分の相現すると等は、經敎に依隨し已つて滿足すべし、有相の義利を志求すれば、眞言の悉地意に隨つて成ず。

是を世間の具相の行と名く、(三)四支の禪門は復殊異なり、行者決定の意を生じ、先づ當に一緣にして本尊を觀ずべし。

【一】先づ本尊を觀じ、次に本尊の心中に圓明の月輪を現じ、次に其月輪の中に尊の眞言の字を現じ、次に次第に念誦す、此れを四種と云ふ。靜慮は定なり。又初は有相念誦を帶して現ずる故に、外相の門なり、行者自身有相と云ふなり。

【二】第一有相念誦門。

【三】以下第二無相念誦門也。自身の外に本尊を現ぜざる故に無相と云ふ。又四支とは前の四種なり。

彼の眞言と祕密印とを持して、自ら瑜伽の本尊の像と作り、其の色相威儀等の如くして、我が身無二にして行亦同なり。

本地と相應する身に住するに由て、少福の者なりと雖も亦成就す、瑜伽の勝義品の中に說けり。

【四】次に明の字門を轉變すべし、

而も觀じて本尊の形と作るを以て、身祕の標幟を逮見す。契經に略說するに二の相あり、正遍知の觀を最も先と爲す、

次に菩薩と聖天との觀に及びては、妙吉祥尊を上首と爲す、亦彼の乘の位に依て而も轉ず、相應の印と及び眞言とを以てすべし。

文殊の種子は、所謂滿字門なり、已に前の品の中に於て說く。

【五】本尊の三昧と相應する者は、【六】心を以て心に置て【七】種子と爲すべし、

彼れ是の如く自ら觀察して、清淨の【八】菩提心に安住すべし。衆の知識する所の形像にして、彼の行に隨順して異なること勿れ。當に知るべし聖者妙音尊は、身相猶し鬱金色の如し。頂に童眞の五髻の相を現せり、左には伐折羅を靑蓮に在き、智慧の手を以て施無畏とし、或は金剛與願の印を作せ。

文殊師利の眞言に曰く、

【四】第三轉字成身門なり。

【五】第四本尊三昧隨息門なり。

【六】上の心は本尊の種子なり下の心は行者の肉心なり。

【七】眞言を念誦するに由て果を得る故に種子と云ふ。

【八】即眞言なり。

「南麼三曼多勃駄喃一係係具摩嚕迦二微日吃哌二合鉢他悉體二合多三薩麼二合囉薩麼二合囉四鉢囉二合哌然五

莎訶」

定と慧との手を合せて虚心掌にして、火輪を交へ結で水輪を持し、二風を環の如く屈して大空に加ふ、其の相鉤の如くして密印を成ず。

而も用て遍く自の支分に置け、爾して乃ち衆の事業を修行す。當に知るべし、諸佛と菩薩と等の字を、轉ずる瑜伽も亦復然なり。

或は餘の經に說ける眞言と印と、是の如く之れを用ふるも違背せざるなり、或は彼の說の異の儀軌に依り、或は普通の三密門を以てす。

若能く解了して旋轉する者は、諸有の所作皆成就す。

普通種子心に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃迦」

契經の所說の迦字門は、一切諸法造作無し、當に是の如きの理の光明を以て、而も此の聲の眞實の義を觀ずべし。

眞陀摩尼寶王の印を以てすべし、定と慧との五輪互に相ひ交ふ、金剛合掌の標式なり、普く一切の菩薩の法に通ず。

一切諸菩薩の眞言に曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一薩婆他二微沫底三微枳羅停四上達摩馱睹涅闍多五參參訶六莎訶」

佉字は衆の色を含む、大空點を增加せり、前に宣說する所の如し、之れを頂上に置け。

當に虛空に等しきことを得べし、諸法を說くことも亦然なり、復其の首の內に於て、(九)本初の字を想念すべし。

純白にして點を以て嚴飾せり、最勝の百明の心なり、眼界は猶し明燈の如し、(一〇)大空無垢の字なり。

本尊の位に住せば、正覺當に現前すべし、乃至諦かに明了にして、應當に意の如く見るべし。

又彼の心處に、圓滿の淨月輪を觀ずべし、阿字門を炳現して、遍く金剛の色を作せ。

聲の眞實の義を說かば、諸法本より無生なり。中に於て正しく觀察すべし、皆此の心より起る。

聲字は花鬘の如し、煇焰自ら圍遶せり、其の光り普く明淨にして、能く無明の害を破す。

迦字を以て首と爲し、或は復餘の字門も、皆當に是の法を修すべし、念ずるに聲の眞實を以てす。

或は持する所の眞言、環の如く列て圓明に在り、(一一)單字と句因と、息に隨つて而も出入すべし。

【九】阿字なり、點とは大空點なり。
【一〇】覽字を眼界に置くなり。
【一一】單字は種子なり、句因は三字以上なり。

〔二二〕或は意支の法を修め、理に應じて等引の如くし、緣念して悉地を成ずるには、普く衆生を利するの心を以てす。

方に迺ち持誦を作して、懈極せば然して後に已むべし。或は眞言の字を以て、心月の中に運布し、其の深密の意に隨つて、聲の眞實を思念すべし、是の如く受持する者を、復一の方便と爲す。

〔二三〕諸の福聚を修することあるもの、諸の善根を成就す、當に意支の法を習ふべし、定れる時分あること無し、

〔二四〕若し現法の〔二五〕上中下の悉地を樂求せば、應に斯の方便を以て、〔二六〕先づ心の受持を作すべし。正覺の諸の世尊の、説き給ふ所の法是の如し。或は香と華と等を奉つて、力に隨つて供養を修すべし。

是の中の先持誦の法に、略して二種あり。一には時に依るが故に、二には相に依るが故なり。時は謂く、期する所の數滿ち、及び定る時の日月を限る等なり。相は謂く佛塔圖像より、光と焰と音聲と等を出生するなり。當に知るべし、是れは眞言行者の罪障淨除の相なり。彼の經に説く所の如し。先づ作意し念誦し已て、復持して一落叉に滿ち、此れより第二月を經て、迺ち具支の方便を修すべし。然して後に其の本願に隨つて成就の法を作せ。若し障あらば、先づ

【二二】第五に意支念誦眞言門なり。
【二三】第六に念誦無定時門なり。
【二四】第七に樂求現法成就門なり。
【二五】上は諸佛、中は菩薩、下は辟聞等なり。
【二六】外事を備ふ。

現相門に依て心意を以て持誦して、然して後に第二の月に於て、其支を以て供養すべし。應に是の如く知るべし。

(一七) 復樂つて如來の三密門を修習して、一月を經る者の爲に、次に彼の方便を説く。

行者、若し大毗盧遮那の、正覺の眞言と印とを持誦せば、當に是の如きの法に依るべし。

大日如來の種子心に曰く、

「南麽三曼多勃馱喃阿」

阿字門は所謂一切法本不生の故なり、已に前に説くが如し。

是の中の身密印は、正覺の白毫の相なり。慧の手を金剛拳にして、而も眉間に在け。

如來毫相の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃馱喃一 阿去聲急呼 痕若急呼」

前の如くに阿字を轉じて、而も大日尊と成せ。法力に持せらるるが故に、自身と異なること無し。

本尊の瑜伽に住して、加するに五支の字を以つてす。(一八) 下體と及び齊の上と、心と頂と眉間となり。

三摩呬多に於て、運想して而も安立すべし。是の法に依て住するを以て、即ち牟尼尊に同じ。

【一七】 第八大日三密速得門なり。

【一八】 腰の中なり。

阿字は遍く金色なり、用て金剛輪と作して、下體を加持す、說て瑜伽の座と名く。
鑁字は素月の光の如くにして、霧聚の中に在り、白の臍の上を加持す、是を大悲の水と名く。
囕字は初日の暉の如くにして、形赤にして三角に在り、本心の位を加持す、是を智火光と名く。
唅字は劫災の焰の如くにして、黑色にして風輪に在り、白毫の際を加持す、說て自在力と名く。
佉字と空點とは、一切の色を成ずと想ひ、加持して頂の上に在く、故に名て大空と爲す。

此の五種の眞言心は（一九）第二品の中に已に說けり、又此の（二〇）五の偈は傳度者の顧る經意を以て足して文句をなして周備せしむるなり

五字を以て身を嚴れば、威德具さに成就す、熾然たる大慧の炬、衆の罪業を滅し除く。
天魔軍衆等と、及び餘の障を爲す者、當に是の如きの人を見るべし、赫奕たること金剛に同うす。
又首の中に於て、百光遍照王を置くべし、無垢眼を安立して、猶燈明の顯照するが如し。
前の如く瑜伽に住して、加持すること亦是の如し、智者自體を觀ずること、如來の身に等同なり。
心月の圓明の處に、（二一）聲鬘ともに相應し、字字間斷すること無くして、猶鈴と鐸とを顫ぶるが如し。

【一九】第二品とあれども實は第三供養儀式品中に散說せり。
【二〇】阿字は遍く金色なり、以下の五偈なり
【二一】種子の字を中間に置き餘の字は之れを周匝し圍繞せしむるを云ふ。

正等覺の眞言、取に隨つて而も受持して、當に此の方便を以て、速に悉地を成ずることを得べし。

(三)復次に若し釋迦牟尼尊を觀念せば、用ふる所の明の字門を、我今次に宣說せん。

釋迦の種子は所謂婆字門なり、已に前の品の中に於て說けり。

是の中の聲の實義は、所謂諸の觀を離れたり、彼の佛身の密印は、

如來の鉢等を以てす。

當に智慧の手を用て、三昧の掌に加ふべし、正受の儀式なり、而も臍輪に住け。

釋迦牟尼佛の眞言に曰く、

「南麽三曼多勃馱喃一 薩婆吃麗二合奢㗚素捺那二 薩婆達摩嚩始多引 鉢囉二合鉢多三 伽伽娜三摩引三摩四 莎訶」

是の如く或は餘の等正覺の密印と眞言とは、各本經の用る所に依て、亦當に前の方便の如く、字門を以て觀じて、轉じて本尊の身と作し、瑜伽の法に住して種子を運布し、然して後に受る所の眞言を持誦すべし。若し此の如來の行に依る者は、當に大悲胎藏生曼荼羅王に於て、阿闍梨灌頂を得て、乃ち具足して修行すべし。但し持明灌頂を得る者の堪ふる所に非ざるなり。其の四支の禪門の方便次第は、設ひ餘經の中に說く所の儀軌なりとも、虧き缺くる所あらば、若し此法を加へて之を修せば、諸過を離るることを得べし。本尊歡喜し給ふを以ての故に、其威勢を增し功德隨つて生ず。又持誦す

【三】第九章　觀眞言成就門なり。

ることを畢り已つて、輙ち（二三）本法を用て而も之を護持すべし。餘經に說かざる者ありと雖、亦當に此の意を通用して、修行人をして、速に成就を得せしむべし。

（二四）復次に本尊の住し給ふ所の、曼荼羅位の儀式、彼の形色の如く壇も亦然なり、此の瑜伽に依て疾く成就す。

當に知るべし（二五）悉地に三種あり。寂災と增益と降伏との心なり。事業を分別するに凡そ四分あり、其の物類に隨つて用ふべき所なり。

純素と黃と赤と深玄との色なり、圓と方と三角と蓮花との壇なり、

面を北にするは勝方なり蓮坐に住す、惔怕の心を以てすべし、寂災の事なり。

面を東にするは初方なり吉祥の坐にすべし、悅樂の容は增益の事なり。

面を西にするは（二六）後方なり（二七）賢坐に在り。喜と怒と與に倶に攝召の事なり。

面を南にするは下方なり（二八）蹲踞等にす、忿怒の像は降伏の事なり、若は祕密の（二九）標幟と、性と位と形と色と及び威儀とを知るべし。

【二三】入佛三昧耶法界生轉法輪等なり。

【二四】第十祕密事業可知門なり。

【二五】因より果に至る迄三義あり、寂災とは三毒の煩惱等畢竟不生なりと悟る、增益とは煩惱の本不生なり卽佛果なりと悟て佛果を得るを云ふ、降伏とは一に佛果を得て後に煩悩起らざる故に、二に煩惱不起を以て能く萬德を攝す、故に、亦攝召の義あるなり、四念誦に由て之れを得るなり。

【二六】東の初方たるに對して西を後方と云ふ、又北の勝方に對して南を下方と云ふ。

【二七】踞り坐して雙の脚跟を身に著けて後分を地に至らしむるを云ふ。

【二八】後分地に至らず右の脚跟を以て左の[illegible]を支へて地に至

華と香と等を奉つることは應き所に隨ふべし。皆な當さに是の如く廣く分別すべし。障を淨め福を增し圓滿する等、處を捨てて遠く遊び摧害する等なり。

眞言の初に唵字を以てし、後に莎訶を加するは寂災の〔三〇〕用なり。若し眞言の初に唵字を以てし、後に吽發を加するは召攝の用なり。初後に納麼あるは增益の用なり。初後に吽發あるは降伏の用なり。吽の字發の字は〔三一〕三處に通ず。其の名號を增すことは中間に在り。是の如く眞言の相を分別して、智者當に悉く知解すべし。』

らす膝稍つけて前に向ふるを云ふ

【二九】標幟は印なり、性は本尊の自體なり、形色は本尊の外相なり、威儀は所持の蓮等也。

【三〇】其眞言の力用なり。

【三一】寂災と增益と降伏とを三處と云ふ。

眞言事業品第五

(一)爾の時に眞言行者、其の應き所に隨つて法の如く持誦し已つて、復當に(二)前の事業の如く而も自ら加持して金剛薩埵の身と作り、佛と菩薩衆との無量の功德を思惟し、無盡の衆生界に於て大悲心を與し、其所有の資具に隨つて而も供養を修すべし。供養し已つて又當に一心に合掌して、金剛の諷誦及び餘の微妙の言辭を以て、如來の眞實の功德を稱歎し奉るべし。(三)次に造る所の衆の善を持て廻向し發願して、是の如きの言を作すべし。大覺世尊の(四)證知し解了し積集し給へる所の功德を以て、無上菩提に廻向し給ふが如く、我れも今亦復是の如く所有の福聚を法界の衆生に與へ、之れを共にして咸く生死の海を度つて遍知の道を成じ、自利利他の法皆滿足し、如來の(五)大住に依て而も住せしめん。獨り己が身の爲の故に菩提を求むるに非ざるなり、乃至生死に往返して、諸の衆生の同く一切種智を得んを剤りしより以來、常に當に福德と智慧とを修し集めて餘業を造らざるべし。願くは我等第一安樂に到ることを得ん、求むる所の悉地諸の障礙を離れて、一切を圓滿せんが故にと。復更に思惟すべし。我をして速に當に若は內若は外の種種の淸淨の妙寶を具足して、而も自ら莊嚴し相續して、無間に普く皆流出せしむべし。是の因緣

【一】第一上求下化修供門。
【二】不動の印明を以て加持し又心中に鑁字を觀じて金剛薩埵と成るなり。
【三】第二如佛我修回向門。
【四】諸佛自內所證の法を云ふ。
【五】阿字本不生際なり。

を以ての故に、能く一切衆生の所有の希願を滿す。

右略して說くこと是の如し。若し廣く修行せん者は、當に普賢行願及び餘の大乘修多羅に說く所の如くすべし。決定の意を以て而も之れを稱述すべし。或は云ふべし諸佛と菩薩との自ら證知して（六）大悲願を興し給ふ所の如く、我も亦是の如く願を發すなりと。

（七）次に當に閼伽を獻め奉るべし。歸命合掌を作して之を頂の上に置いて、諸佛と菩薩との眞實の功德を思惟し、誠を至して禮を作し、而も偈を說て言へ。

諸有の永く一切の過を離れ、無量の功德身を莊嚴し、一向に衆生を饒益することある者を、我今ま悉く皆歸命して禮したてまつる。

次に當に衆聖に啓白して是の偈を說いて言ふべし。

現前の諸の如來と、救世の諸の菩薩と、大乘の敎を斷せずして、殊勝の位に到る者、

唯し願くは聖天衆、決定して我を證知し給へ、（八）各當に所安に隨つて、（九）後に復哀みを垂れて赴むき給ふべしと。

次に當に三昧耶の眞言と密印とを以て頂の上に於て、之れを解いて而も是の念を生ずべし。諸の有ゆる結護加持皆解脫せしむ。此の方便を以ての故に、先に請じ奉る所の諸尊を、各所住に還した

【六】自ら得る所の理を一切衆生に與へんと欲するなり
【七】第三奉送本尊門。
【八】本不生より來て本不生に歸る。
【九】祕釋には自ら本尊と成れり、何れの時か佛の海會を離れん。

てまつる、無等の大誓の爲に留め止むる所にあらざるなりと。復（一〇）法界の本性を用て自體を加持し、淨菩提心を思惟して而も金剛薩埵の身に住す。是の中の明と印とは、第二品の中に已に說きつ。若し念誦し竟らば此の（一一）三印を以て身を持すべし。所有の眞言行門終り畢ぬれば法則皆悉く圓滿す。

（一二）又應さに前方便の如く法界の字を觀じて、以て頂相と爲し金剛甲冑を被服すべし。斯の祕密の莊嚴に由るが故に、即ち金剛の如き自性を得、能く之れを沮壞する者無し。諸そ其の音聲を聞き、或は見、或は觸ること有らば、皆必定して阿耨多羅三藐三菩提に於て、一切の功德皆悉く成就し、大日世尊と等うして、異ることあることなきなり。

（一三）次に復增上心を起して殊勝の事業を修行し、淸淨の處に於て嚴るに香華を以てし、先づ自身をして觀世音菩薩と作さしめて、或は如來の自性に住して、前の方便に依て眞言と密印とを以て加持し、然して後に法施の心を以て、大乘方廣經典を讀誦し、或は心を以て誦して、而も諸天神等を請じて之れを聽受せしむべし。說く所の偈に言ふが如し。

金剛頂經に說く、觀世蓮華眼は、即ち一切の佛に同じ、無盡莊嚴の身なり。

或は世の導師の、諸法に自在なる者を以て、（一四）隨つて一の名號を取て、（一五）本性の加持を作せ。

觀自在の種子心に曰く、

【一〇】覽字なり。
【一一】入佛三昧と法界生と轉法輪となり
【一二】第四被甲觀修如佛門。
【一三】第五自住佛身讀經門也。以下は道場を出て後の事業を明す。
【一四】諸尊の中に於て行者の意に隨て其一尊を取るを云ふ。
【一五】本尊の三密加持なり。

「南麼三曼多勃駄喃（一六）娑急呼」

字門の眞實の義は、諸法に染著無し、音聲の流出する所なり、當に是の如きの觀を作すべし。

此の身中の密相は、所謂蓮華の印なり、前の敷座を奉るが如し、我れ已に分別して說きつ。

次に觀自在の眞言を說いて曰く、

「南麼三曼多勃駄喃一薩縛怛他引蘖多縛路吉多二羯魯拏麼也三囉囉囉吽若四短聲莎訶」

前の法界心の字を以て之れを置いて頂に在らしむべし。又此の眞言と密印とを用て相加して力の堪ふる所に隨つて經法を讀誦すべし。或は制底曼荼羅等を造り、爲す所已に畢つて、次に座より起つて、和敬の相を以て應に諸の人事を接すべし。又身輪を支持することを得んが爲の故に、次に乞食を行ず。或は檀越の請、或は僧中に得る所なり。當に魚肉と薫菜と、及び本尊と諸佛とを供養せるの餘り、乃至種種の殘宿の不淨なるを離るべし。諸酒と木果等との漿の以て人を醉はすべきもの、皆飲み噉ふべからず。（一七）次に搏食を奉げて用て本尊に獻る。又隨喜の食法を作せ。若し故らに餘りあらば更に少分を出すべし、飢乏乞求を濟けんが爲の故なり。當に是の心を生ずべし、我れ身器を任持して、安穩に道を行ぜんが爲に、是の段食を受く、車の鎋に膏し敗傷せずして所至に到ることあらしむるが如し。滋き味を以ての故に其の心を（一八）增減し、及び悅澤嚴身の想を生

【一六】娑は諸漏なり、傍の●●の點は除遣の義なり、諸の煩惱の漏を除遣する故に觀自在なり。

【一七】第六搏食奉獻門。

【一八】其心を動かすを云ふ。

すべからず。然して後に（一九）法界心の字を觀じて、遍く諸食を淨め、（二〇）事業金剛を以て自身を加持すべし。是の中の種子は鑁字の眞言に說く所の如し。（二一）復施十力明八遍を誦して、方に乃ち之れを食すべし。此の明を說いて曰く、

「南麽薩嚩勃駄菩提薩埵喃一唵麽蘭捺泥去帝孺忘栗甯二莎訶」

是の如く先成就の本尊瑜伽に住して、飯食し訖已つて、餘す所の觸食は、成辦諸事の眞言心を以て、當に食ふべき所の者に供養す。當に不空威怒增加聖不動の眞言を用ふべし、當に一遍を誦すれば受者歡喜して、常に行人に隨つて而も之を護念すべし。

彼の眞言に曰く、

「南麽三曼多伐折羅赧一怛羅合二吒半阿謨伽二戰拏摩訶路灑停上三娑破合二吒野吽四怛羅合二迦野五怛羅合二迦野六吽七怛羅合二吒八悍曼九」

彼れ食し竟つて休息すること少時にして、（二二）復當に諸佛を禮拜し衆罪を懺悔すべし。淨心の爲の故に是の如く常の業を修すべし。乃至前に依て經典を讀誦し、恒に是に依て住すべし。後日の分に於ても、亦復是の如し。初夜後夜には大乘を思惟して間絕を得ることなかれ。中夜の分に至つて、事業金剛を以て前の如く金剛の甲を被て、一切の諸佛と大菩薩と等を敬禮し、次に當に運心して如法に供養して、而も是の念を作すべし。我れ一切衆生の爲に大事の因緣を志求するが故に、應當に是の身を愛

（一九）覽字を以て不淨を燒き淨む。
（二〇）金剛薩埵なり。
（二一）第七誦十力明瑜伽門。
（二二）第八修業無間得益門。

護して少時安み寢べし。睡眠の樂に貪著せんが爲には非ず。先づ當に身の威儀を正しくして、二足を重累ねて、右脅にて而も臥すべし。若し支體疲懈せば意に隨つて轉側するに咎なし。速に寤めしめんが爲に、常に當に意を係けて(二三)明に在くべし。又復(二四)床の上に偃に臥すべからず。次に餘の日に於て亦是の如く之れを行ずべし。持眞言者、法則を虧ずして、無間に勤修するを以ての故に、眞言門に菩薩の行を修するの名號を得るなり。若し(二五)數と時と相現と等の、持誦の法の中に前の方便を作し、乃至具に勝業を修せんに、猶成就せずんば、應に自ら警悟して倍精進を加ふべし。下劣の想を生じて、而も是の法は我が堪ふる所に非ずと言ふことを得ること勿れ。是の如く其の志力を(二六)展して自ら利し他を利すべし。常に空しく過さざれ。行者勤誠にして、(二七)休息せざるを以ての故に、衆聖玄かに其の心を照らして、則ち威神の建立を蒙つて諸の障を離るることを得。是の中に二事あり捨離すべからず、謂く諸佛と菩薩とを捨てざると、及び無盡の衆生を饒益する心となり。恒に一切智の願に於て心傾動せざれば、此の因緣を以て必定して隨類の悉地を成ずることを得るなり。

(二八)常に內法に依て而も澡浴すべし、外淨の法に執著すべからず。觸食等に於て疑悔を懷かば、

【二三】明とは本尊の種子の字を云ふ、睡眠せんとする時出入の息に本來の種子の字を和するなり。之に依て睡眠も亦本尊の三昧なり、睡も覺も佛實を離れざるなり

【二四】本尊の境より高かる可からざるを云ふ、行者若し自ら本尊と成らば何の高下の論す可きあらん。

【二五】數は念誦の遍數。時は持誦の月、相現は煥と煙と火焰との三品悉地の相なり。

【二六】展は策なり。

【二七】睡眠せざるなり。

【二八】第十澡浴攝障門。

是の如きは皆爲すべからざる所なり。
若し是の身を任持せんが爲の故に、時に隨つて盥沐して諸の垢を除け。河流等に於て法敎の如くして、眞言と印と共に相應すべし。
法界心を以て諸の水を淨め、隨つて不動と降三世とを用ふ。眞言と密印とを以て（二九）方等を護り、本尊の自性觀に住すべし。
復當に三轉して淨土を持し、恒に一心を以て正しく思惟すべし。聖不動の眞言等を念じて、智者（三〇）默然として應に澡浴すべし。
淨法界心と、及び不動尊の種子と、刀印とは皆前に說くが如し。
降三世の種子心に曰く、
「南麼三曼多伐折囉赧訶」
此の中の訶字門は、聲と理と前の說の如し。少分の差別なることは、所謂淨除の相なり。
降伏三界尊の、身密の儀式は、當に事業を成ずる、五智金剛の印を用ふべし。
次に降三世の眞言を說いて曰く。
「南麼三曼多伐折囉赧一訶訶訶二微薩麼(二合)曳三平薩婆怛他引揭多微灑也三婆嚩四怛囉(二合)路枳也(二合)微若也五吽若六娑訶」

【二九】方隅の障礙結界なり。
【三〇】食時の大小便時と洗浴時となり。

是の如く澡浴し灑淨し已つて、三昧耶を具し支分を護る、盡くることなき〔三一〕聖天衆を思惟し、三たび水を掬り奉て而も之れを獻れ。
身と心とを淨めて他を利せんが爲の故に、如來勝生子を敬禮す。
三毒分別等を遠く離れ、諸根を寂調して精室に詣で、或は水室の異の方便に依る、心住すること前に制する所の儀の如くすべし。
自身の〔三二〕三等を限量と爲す、上と中と下との法を求めんが爲の故なり。行者是の如く持誦を作さば、所有の罪流當に永く息むべし。
必定成就して諸の障を摧き、一切智の句其の身に集まる。彼の世間成就品と、或は復餘經に說く所とに依るべし。
供養の支分と衆の方便と、其の次第の如く修行する所なり。未だ有爲の諸相を離れざるが故に、是を世間の悉地と謂ふ。
〔三三〕次に無相の最も殊勝なるを說かん、信解を具する者の觀察する所なり。
若し眞言乘の深慧の人、此の生に無上の果を志求せば、信解する所に隨つて觀照を修すべし。
前の心供養の儀の如し、及び悉地流出品と、〔三四〕出世間品との瑜伽の法に依るべし。
彼れ眞實の緣生の句に於て、內心の支分に攀緣を離れよ。此の方便に依て而も證修して、常に出

【三一】本尊海會なり。
【三二】自身の三密平等なり、限量と爲すは本尊に同じき也。
【三三】第十出世間成就無相寂勝門。
【三四】經の第三成就悉地品第七なり。

世間の成就を得べし。

（三五）説く所の優陀那の偈に言ふが如し。

甚深無相の法は、劣慧の堪へざる所なり。彼等に應ぜんが爲の故に、兼て有相の説を存すと。

右は阿闍梨の集むる所の、大毗盧遮那成佛神變加持經の中の、供養儀式具足し竟んぬ。傳度の者頗る會意を存すべし。又文を省かんと欲するが故に、其の重複を删れり。眞言は旋轉して之れを用ふべし。修行者當に上下の文義を綜べ括るべきのみ。

【三五】末後の一偈は流通の中の流通なり。

嚩（毗痩反）嘝（毗也反）底（丁以反）𠿒（儞入反）體（他次反）凡そ眞言中平聲の字皆稍上聲に之れを呼ぶ、若し諸語下字と相連らば亦便な遂うて入聲を以て之れを呼ぶべし、婆伽梵の如き呼んで薄伽梵と爲すの類是なり。

大毗盧遮那成佛神變加持經　終

唐三藏法師玄奘奉詔譯

解深密經解題

【概觀】甚深にして澎大なる佛法の教理は、其の末葉を論せば、參差萬端、殆んど歸趣する處を知らざるが如きも、若し其の根本に就て之を云はば、何れの時代に於ても、恒に二大思想の對立を待つて發達進化の情勢を繰り返へし來れり。謂く第一には大衆部、上座部の對立にして、所謂小乘教發達の時代（佛滅後一百年より四百年に至る 西暦前二世紀より後二世紀に至る）なり。第二には大乘教勃興の時代（佛滅後六七百年 西暦三四世紀）にして、乃ち大小乘教の對立なり。尋で第三（佛滅後八九百年 西暦五六世紀）には大乘教中、更に空教中道教相ひ對峙し、茲に印度文化の最高潮時代を現出せると共に、印度の佛教史、漸く其の幕を蔽へり。而して、そが支那に流傳せらるるや、更に大乘教中に於て、眞如緣起說、賴耶緣起說の對立を見、又た一乘教三乘教等の對峙を見たり。

今此の『解深密經』は、印度大乘佛教中に於ける、中道教の權威として、顯はれたるものなれば、印度佛教の三大時期中、前二期間には直接交涉なしと雖も、其の一たび顯はるるや、爾來常に各期間に於ける、一方の代表的經典として重要視されたり、卽ち眞如緣起說に對する賴耶緣起說、一乘佛教に

對する三乘佛教の根本經典たりき。而して此の二大對峙の教理は、殆んど大乘佛教の基礎的教理とも目さるる重大問題なれば、蓋し學佛の徒の豫め知悉し置く可き要義たりとす。今乃ち本經の見地よりして、此の二箇の大問題を解決せん。

先づ一佛乘の教義は、本經成立以前、已に業に教界の權威たりし『無量義經』、『法華經』、『涅槃經』『華嚴經』等の大乘經典に於て、盛に唱道せられたる教權なれば、三乘各別說を主張する本經の立場よりするも、絕對に之れを否定す可くもあらず、卽ち本經無自性相品に、理佛性、行佛性の意味を以て、巧みに兩說の相違を和會せり、謂く一佛乘性說に於ては三乘の人が煩惱を斷じて解脫の眞理を證する邊は、是れ平等平等なりとし、此の絕大眞理界、卽ち理佛性に約して一乘と說くなり、更に此意を推論すれば、五性各別の中、無性有情の如きは、毫も眞理を見證するの義無しと雖も、所具の理性に約すれば、亦た平等平等なり、隨つて一大佛乘なりてふ歸結を得。但し經文は一乘三乘の和會のみにして、一乘五性の和會には言及せず、是れ、元來、無性有情は、本經所聞の機に非ざればなり。兎も角、本經の立脚地よりして之を云はば、三乘各別てふ事は、現在に具有せる人格の事實論にして、隨つて佛陀圓鏡智上の現量觀なり、一佛乘性てふ事は、所證若くは所具の眞理界に約する祕密意趣なり。されば三乘五性各別論のままにして、亦た卽ち一佛乘性說なりと見るを、經文の正意とするなり。

次に眞如緣起說に就ては、本經を中心とせる、並に之れに朋へる諸大乘經論及び本經以前に流行せる諸大乘經論等に於て、更に具體的なる眞如緣起の說文を見ざること、又た其の眞如緣起の學說が、本經並に彌勒の『瑜伽師地論』の系統を引いて、賴耶緣起論を大成したる世親の『十地論』、『攝大乘論』（無論舊譯のもの）を本據とせること、是等の事實よりして古往今來異論百出、殆んど適從する所を知らざるが如くなるも、苟くも本經並に之れに附隨せる諸大乘論を讀むものより見る時は、其の眞如緣起說の餘りに矛盾の事實たるに驚かざるを得ざるものあり、即ち法相宗家よりせば眞如緣起說は如何にしても、是れ飜譯者の加增、或は誤謬と斷ぜざる可からず、從つて眞如緣起說は、賴耶緣起說以外に、印度に在來せる學說にあらずてふ結論に到達するなり。

但し馬鳴の『起信論』龍樹の『釋摩訶衍論』は、眞如緣起說の一方の本據なるも、一には支那流行の眞如緣起說の唱道宗派たりし地論宗、攝論宗の所依の經典に非ざるが故に、二には兩論とも、余は僞論なりと信ずるが故に、今是等兩論をば除いて論せざるなり。

要するに、支那に入りて旗幟鮮明に對峙し、相違の學說を把持したる三乘一乘の兩敎、賴耶眞如の兩說も、其始源に溯りて之れを見れば、畢竟同一學說たりしことを知るべし。

本經は僅僅五卷八品の經なりと雖も、大乘經典中、優に一方の代表的經典にして、而も又た經典具備の條件即ち說主、說處、對揚、法門等都べてが、他の大乘經に對して、莊嚴崇高なることは、特に

本經の誇りとする所なり。乃ち逐條之れを解說すべし。

【題目】解深密經は梵に珊地涅幕折那素呾攬（Saṃdhinirmocana-Sūtra）と云ふ。珊地（Saṃdhi）とは深密の義、涅幕折那（nirmocana）とは解の義なり、卽ち解深密と云ひ、素呾攬（Sūtra）とは經と譯し、常、法、攝、貫等の義あり。深密の二字は經中所說の義理、解經の二字は能詮の言敎なり。卽ち諸佛の自內證たる甚深祕密の義理を解釋する經なれば『解深密經』と云ふ。

又た求那跋陀羅三藏の所譯には『相續解脫經』と題し、菩提流支の譯には『深密解脫經』と題し、眞諦三藏の本には『佛說解節經』と題す。然かも是れ同一梵語中に含蓄せられたる其の一義を各各譯出せるものにして、必ずしも相違せず、此の事圓測の『深密經疏』に委釋せり、往見すべし。（圓測疏の釋は續藏第卅四套第四冊二百九十九張に見ゆ）

【說主】本經の說主は無論印度出現の釋迦牟尼なる可きも、大乘敎に談ずる所の三重佛身の中、對他說法主として最高位の佛陀卽ち他受用身の所說となすなり。是れ普通示現の儘の佛身には非ず、特に崇高なる理想實現の佛身にして、之れを名けて報身と云ふ。而して本經說主の報身には、經文に依るに二十一殊勝の功德を具せり、その功德の一一は經說を見る可し。本經說主を報身となすことは、當時說主の所居の土の莊嚴に因つて知らるべく、又本經の結末に於て、普通經典の如く「作禮而去」の文を安かざるは、此れ亦た他受用報土の不退轉の德を表せるものにして、此の如きは皆な此れ本經が

大乘經典中の最高位に安かれしものなる事を知る可き左券なり。

但し眞諦譯の『解節經』には

一時佛婆伽婆、住王舍城耆闍崛山中

とあり、是れ普通の土たる穢土の佛陀即ち化身佛の說とする意なり。一見相違の如く見ゆるも、實は兩譯を對比して、此に始めて三身說に對する理解を得るものあるなり。謂く三身各別の見解は、聽法者領解の程度に隨ふ、其說主は常常の時、恒恒の間、必ず三身具足の佛身たりと雖も、その同一會座に集會せる各階級の所化の機根の程度に依つて、此の同一說主を感見する所同じからず、或は報身佛を見、或は化身佛を見るなり、故に本經の說主は對揚衆の正機に對しては、實には報身佛なれども、若し吾人の智識に映ずる範圍內に於て論せんか、耆闍崛山上の化身の佛陀なりと云ひ得らるるなり。

【說處】本經の說處は上の說主と關聯せる問題にして、說主が化身佛なれば、說處は化土即ち穢土なり、又た說主が報身佛なれば、說處は必ず報土即ち淨土なり。玄奘翻譯の經に依るに、その報土をば十八圓滿の蓮華藏世界となせり。十八圓滿の名は、親光論師の「佛地論」に始まる。但し此の報身報土普通智識の範圍內に非ざるが故に、三身不離の邊に約し、且らく化身化土の說とし、更に現實に其說處を求むれば、前述せるが如く、眞諦三藏の譯經の

王舍城耆闍崛山

卽ち法華經等の說處たる靈鷲山なりとす。然るに同眞諦疏（圓測疏第五に引）には、

毘舍離國鬼王法堂。爲眞尙菩薩。說解節經等

と云ふ、卽ち彼の所譯の經に違せり。是れ亦た傳說の一なる可きも、別に證劵の存せざる限りは、經に依るを以て妥當とす可し。

【說時】本經を旣に報身佛の說とすれば、說時の如何は論ずべからざるも、是れ化身佛に卽する報身佛なれば、且らく化身に約して之れを論せんに、古來凡そ三說ありしが如し。

第一說、經文に但だ「一時」と云へるのみにして、某年月時と云はざるを以て、その何時なるやを定むべからずとす。西明疏に出づる西方三說皆之れに同じ。但し西方三說は「時」なるものの意義を解するに過ぎざるなり。

第二說、眞諦疏に

佛未涅槃七年、成道後三十八年說云云

と云へるもの是れなり。

第三說、覺愛三藏（梵名菩提流支）が

無量義經法華經四十餘年說。卽始四十二年。合八年說。解節經去涅槃五年說。卽深密經云云（安然

『教時問答』に出づ）と云へるもの是れなり。此の説に依れば、『解深密經』は佛入涅槃前五年の説なりとす。卽ち第二説より後るる二年なり。

要するに後の二説は、何れも本經を以て『法華』の後『涅槃』の前の所説なりとするや、其軌一たり。別に事實の證明せられざる迄は、何れの傳説に從ふも可なるべき歟。

【梵本】圓測の疏（續藏第三十四套第四册二百九十九張）に依れば

此經一部。自有二種。一者廣本。有十萬頌。二者略本。千五百頌。然此略經。梵本唯一云々

卽ち廣略二本の事は、彼の『華嚴經』に廣中略の三本ありと傳ふるに同じく、偶ゝ本經が當時に於いて、神祕的に尊重されし事實を物語れるものと思惟せらるるなり。

【漢譯】四代の異譯あり、四譯何れも同一の梵本なることは、圓測疏にも云へるが如し。又各本文を比較對照する時は、其旨克く領せらるべし。但し四譯は品に具略あり、魏菩提流支の譯並に唐玄奘譯は全譯にして、他は抄譯なり。今四譯を對比すれば左の如し。

	第一譯	第三譯	第二譯	第四譯
譯時	宋元嘉年中	陳保定年中	後魏延昌二年	唐貞觀年中
譯者	中印度 求那跋陀羅 宋云功德賢	西印度優禪尼國 眞諦 梵云波羅末陀	北印度 菩提流支 魏云道希	唐 玄奘

經題卷數	解深密經　五卷八品	深密解脫經　五卷十一品	佛說解節經　一卷四品	相續解脫經　一卷或二卷
品名	序品第一	序品第一	(通序の文あり)	
	勝義諦相品第二　第一對ニ如理請問菩薩	聖者善問菩薩問品第二	不可言無二品第一	
	第二對ニ法涌菩薩	聖者曇無竭菩薩問品第三	過覺觀境品第二	
	第三對ニ善清淨慧菩薩	聖者善清淨慧菩薩問品第四	過一異品第三	
	第四對ニ善現菩薩	慧命須菩提問品第五	一味品第四	
	心意識相品第三	聖者廣慧菩薩問品第六		
	一切法相品第四	聖者功德林菩薩問品第七		
	無自性相品第五	聖者成就第一義菩薩問品第八		
	分別瑜伽品第六	聖者彌勒菩薩問品第九		
	地波羅蜜多品第七	聖者觀自在菩薩問品第十	(依教奉持の文あり)	相續解脫地波羅蜜了義經
	如來成所作事品第八	聖者文殊師利法王子菩薩問品第十一		相續解脫如來所作隨順處了義經

以上四譯の中、玄奘譯最も出藍の譽れ高く、行文濟濟、理義明白なり。圓測疏にも

然解深密、文義淨明

と云へり。

而して、玄奘の飜譯が、果して何年に成りしや、諸記不同なり。

圓測疏……………………貞觀二十一年

開元錄、貞元錄並に守護國界章……〔自貞觀廿一年五月十八日至同年七月十三日〕

箋註解深密經……………〔自貞觀廿年三月譯始瑜伽論至同廿二年五月譯終同時譯出此經〕

Catalogue of the Tripitaka………貞觀十九年

『大慈恩寺三藏法師傳』を檢するに、玄奘は貞觀十九年正月、印度より支那に歸り、同年五月以後始めて飜譯に從事せり　而して同二十年七月上表して、譯し了れる五部五十八卷を奉進せり、曰く

一『大菩薩藏經』二十卷『佛地經』一卷『六門陀羅尼經』一卷『顯揚聖教論』二十卷『大乘阿毘達磨雜集論』十六卷

是れなり。

而して『瑜伽論』攝決擇分第七十五卷乃至第七十八卷に『解深密經』正宗七品の文を列擧せるを以て、若し『瑜伽』第七十五卷乃至第七十八卷の文に本經の序品を添加し別行せば、卽ち本經たるべきが故に、貞觀二十年『瑜伽論』飜譯著手せし以前卽ち貞觀十九年に、本經を若し果して譯出し別行したりとせば、必ずや貞觀二十年七月五部經論と俱に進獻せざるべからざる筈なるに、而かも是れ無きに想倒すれば、恐らくは貞觀十九年說は誤謬なるべし。

然り而して『慈恩傳』に

二十年春正月甲子又譯大乘阿毘達磨雜集論至二月訖又譯瑜伽師地論。

とあるに依れば、『瑜伽師地論』の飜譯は、或は貞觀二十年三月（基辨の說）或は同五月（開元錄の說）頃より始まりしなるべく、而して同二十二年五月に訖れり。此れと同時に本經の譯亦た成れりとするもの、蓋し說の穩雅なるを覺ゆ。

漢譯者三藏法師諱は褘、字は玄奘、俗姓は陳、陳留に生る。夙とに溫嶷を標し聰敏絕異風骨甚奇なり、十一にして落飾を聽され、東都淨土寺に止まり、毘曇、攝論、維摩、法華、涅槃等の諸宗を學び太宗貞觀三年長安を發し入竺の途に上ぼる。在天十有七年、周遊百三十國、徧ねく衆師に謁し問道求法至らざるなく、就中那蘭陀寺（Nalanda 此に施無厭と云ふ）の尸羅跋陀羅（Silabhadra 此に戒賢と云ふ）に就きて、瑜伽唯識の蘊奧を究め、遂に貞觀十九年長安に歸り、帝に洛陽宮に謁す。齎す所の梵本凡そ五百二十夾六百五十七部と稱せられ、譯する所の經論七十四部一千三百三十五卷、本經亦其の一なり。高宗麟德元年二月五日（皇紀一三二四年 西紀六六四年）玉華宮に上遷す、時に年六十三（或は六十五、或は六十九、異說不同）乃ち中宗皇帝謚して大遍覺と賜ふ。三千の門徒七十の達者あり、秀出するもの四人、辨、圓測、普光、法寶是なり。一代の神異行蹟、具さに載せて『大唐西域記』、『大慈恩寺三藏法師傳』、『法師行狀記』、『法師塔銘幷序』等に在り。

【組織】一部五卷八品、分つて二分とす。初の一品を序分、即ち本經の興る由緒を說けり。次の七品は正宗分、即ち本經正旨の在る所なり。正宗一一の組織に付ては、如理請問菩薩等の一一と世尊との問答往復により遺憾なく大乘宗教の深義を顯はせり。但し初品の首めには菩薩と菩薩との問答あり、又其終りに尊者善現に告ぐるある等は、少分の特例とす。

又其組織中、初品の首め如理請問菩薩の問に對し、解甚深義密意菩薩之を答へ（三番の問答並に重頌ありて其一段を結ぶ）能說の敎主還つて無言たり。而して此問答が當品中頗る重要なる地位を占め、而して又た其狀態をして、世尊佛陀の所說と全然同一資格を具有せしめたり、故に古來之を深密菩薩の加被說法なりとして景仰せり。又た經の終に、普通ある可き作禮而去の儀式を缺けるが如き、是れ報土不退轉の意味を顯はすものにして、良遍僧都『傳通要錄』に「事絕二常途一旨在二言外一」と讚歎するは即ち是れなり。

或は云ふ、本經具さに三分あり、序正の二分は前の如し、第三流通分とは經末の「爾の時曼殊室利菩薩摩訶薩」已下は、依敎奉行を說くが故に是れ第三流通分なりと。若し二分說に依らば、彼の經末の依敎奉行の文は唯第八一品のみの流通にして、一經に亙れる流通には非らず。例せば第五六七品にも、同じく奉行の文あれども、但だ當品に屬して、一經に通せざるが如し。（以上圓測疏二意。）

或は云ふ三分あり、初分は前に同じ、第二分は勝義諦相品より無自性相品の末の重頌の終りに至る

三品半を取り、第三分は無自性相品頌後の長行の初より、第八品の終に至る三品半を取る。その第二分は本經の正旨なるが故に、眞俗諦の相、甚深細甚深、難達極難達、超過一切行相、徧一切一味相を說く。第三分に於ける三品の文は正宗分に似たりと雖も、實には唯だ上說の眞俗諦の相のみを更に行と果とに約して之を示し、與名、奉持、得益を說く、後の四品皆此の文あり。是れ第三分の相なればなり。例せば慈恩『法華玄贊』に、神力品以下の八品を惣じて流通分と名け、「示相付屬、稟命行故」と云ふが如しと。基辨の說

已上の諸說皆一理あり、學者取捨任意なり。

【內容】　八品の內容左の如し。

序品第一　一時盧舍那報身の佛陀が十八圓滿の蓮華藏世界即ち他受用の報土に居して、最淸淨の大覺智を證し、二十一殊勝の功德を具し給ふ。而して聽聞衆として十三德具足の無量の大聲聞衆、幷に十種功德具備の無量の大菩薩衆等、他方佛土より倶來し、會座に滿てりき。蓋し說聽二者究竟稱可の時なり、乃ち何等か甚深なる祕奧の開宣せらるべきの時なりとす。實に是れ一經の序論なり。

勝義諦相品第二　先づ如理請問菩薩の問に應じて、解甚深義密意菩薩が佛陀の加被力に依て、一切法は無二なり、法性は離言なる旨を開演し、餘經に類例なき化儀を以て、其第一段を終る。次第二段に佛陀世尊が法涌菩薩の爲めに勝義諦相の義を明かして、眞如は內自の所證尋思分別を超越するものなる

ことを説く。次第三段に善清淨慧菩薩に對し、勝義諦は諸法一異の性相を超過することを説き、須らく唯識止觀を修して一異の定執を解脱すべきことを教勅す。次第四段に尊者善現に對して勝義諦は徧一切一味平等の妙理なることを説きて增上慢分別差別の執を離るべき所以を示す。要するに此の品は勝義諦眞如は諸法の本體にして廢詮一實の妙理なることを説けり、是れ即ち唯識宗の元意なりとす。

心意識相品第三　廣慧菩薩に對し、心とは阿賴耶識なり、意とは末那識なり、識とは眼識乃至意識の六種識なりとし、即ち八識の性相を説き唯識轉變の由來を示して迷悟の分齊を明かにす、是れ即ち唯識の事相なり。前品の勝義諦本體界なるに對し、此は世俗諦現象界なり。現象界の萬法は阿賴耶識の種子より開展生起すてふ賴耶緣起の説は、實に當品の所説に淵源す。

一切法相品第四　德本菩薩に對し萬有諸法の相を説くなり。前品には諸法を發現せしむべき心識の事相を説き了れり、當品にては其の心識の諸法を發現するや、理あり事あり、眞あり妄あり、有なるあり無なるありとし、即ち宇宙の萬象を洞觀し、一には遍計所執性、二には依他起性、三には圓成實性の三性となし、遍計所執の實我實法は妄執なり無體なり、依他起性圓成實性は眞實なり有體なり、而も依他は有爲緣生の事相なり染淨の法なり、圓成は無爲の理性なり清淨法なり、須らく遍計の無體法を除遣し、依他の雜染法を斷滅し、而して圓成の清淨法を證得すべきことを説くなり。

無自性相品第五　勝義生菩薩に對し諸法無自性の義を説くなり。前品所説の三性は遍計は情有、依他

は理有にして是れ有の觀なり、然るに萬有の有なる是れ偏有に非ず亦自ら空なるなり、故に當品に三性の有に依りて三無性の空を立てて、有空相卽不離の旨を示す。既に諸法本來無自性なるが故に亦本來涅槃寂靜なり、故に諸法皆空とも說き一乘とも說くを得べし。一代三時の設敎有空中の別あり了義不了義の差あるも更に設敎矛盾する所あることなきの旨を明かして、空有の二說を和し一乘五姓の兩門を會し、三時法門の淺深を判ずる等、前品所明の三性觀と倶もに實に是れ唯識宗の妙解なりとす。

○○○○○○○分別瑜伽品第六　彌勒菩薩に對して唯識止觀の妙行を說くなり。上來の各品には本體界の眞如勝義の妙諦、現象界の三性三無性の諸法を明しき。當品は其の本體界の眞如も現象界の諸法も唯是れ識の相、識の性にして心外無別法なることを說き、相分、見分は末なり自體分は本なることを觀じて唯識轉變の道理を悟らしむるなり、是れ實に唯識の觀法なりとす。

○○○○○○○地波羅蜜多品第七　觀自在菩薩に對して菩薩十地の修行を明かすなり、前品所明の唯識の止觀行をば十地の階位を歷て修することを示し其行法を分ちて十波羅蜜多となす、實に是れ唯識宗の行位なり。卽ち前品の瑜伽止觀の法とともに向上的實踐躬行の道程方法なり。

○○○○○○○○如來成所作事品第八　文殊師利菩薩に對し三身萬德の佛果を說くなり。前品所說の觀心修行の功に依りて證得したる大悟徹底の風光を示し、說法利生の妙用、因明立破の權衡等廣く佛陀攝化の善巧を明かす、是卽ち唯識宗の佛果なりとす。

之れを要するに勝義諦相品は宇宙の本體界たる離言法性の眞如を說き、心意識相品、一切法相品、無自性相品は宇宙の現象界たる八識、三性及び三無性の性相を明かし、以て佛陀の眞俗二智所證の境界を開演す。次に佛陀善巧の力、衆生をして內證境界の好風光に接觸せしめんと欲し、分別瑜伽品、地波羅蜜多品に於て、之れが實踐躬行の道程と方法とを授くるなり。然り而して修養工夫の結果として到達したるもの、即ち如來成所作事品の三身究竟の大果なりとす。玆に於て乎、大智圓明にして、高く萬有の事理を照らし、大悲深廣にして、永く群生を利樂するに到る。然れば則ち萬法唯識の祕訣を示し、斷障得果の妙義を說くを以て一經の宗體となす。之れを圖示すれば左の如し。

- 理論
  - 勝義諦相品 ― 宇宙の本體を明す
  - 心意識相品・一切法相品・無自性相品 ― 宇宙の現象を明す
- 實行
  - 分別瑜伽品・地波羅蜜多品 ― 實踐の方法及び階位を明す
  - 如來成所作事品 ― 實行の結果を示す

【註疏】　終に斯經の註疏を列記すれば、

解深密經疏　十一卷　令因撰

同　疏十卷　圓測撰
同　疏十卷　玄範撰
同　疏三卷　元曉撰
同　疏（失卷）璟興撰

なり。此の外遁倫法師の『瑜伽論記』の第二十上より第二十一上に至るは、是れ即ち『瑜伽』第七十五乃至第七十八の本經列記の下を釋せるもの、又た基辨和上の『箋註解深密經』二卷あり、第一卷は本經料簡玄談にして、第二卷は本經初三品に、冠導傍註を施せるものなり、多く圓測法師の疏に依れり。

是等の中『論記』並に『箋註』の現存するは勿論なるが、其の前五部の疏の中、現存するものは但圓測疏十卷（缺第十）のみにして、現に『大日本續藏經』第一輯第三十四套第四、第五冊、同第三十五套第一冊に收められたり、斯經研覈上唯一の註書と云ふ可し。

譯者　佐伯定胤識

國譯解深密經

卷の第一

序品第一

是の如く我れ聞きき、(一)一時、(二)薄伽梵、(三)最勝の光曜ある七寶の莊嚴より、大光明を放ちて、普ねく一切無邊の世界を照し、(三)無量の方所妙飾間列して、(三)周圓際り無く、其の量測り難く、(四)三界所行の處を超過し、(九)勝れたる出世間の善根の起す所にして、(六)(五)最極自在の淨識を相と爲し、(七)如來の都する所、(八)諸の(六)大菩薩衆の雲集する所、(九)無量の(七)天、龍、(八)夜叉、(九)健達縛、(一〇)阿素洛、(一一)掲路荼、(一二)緊捺

【一】一時。說聽兩者和會感應し事緒究竟せる時を云ふ。

【二】薄伽梵(Bhagavān)。自在、熾盛、端嚴、名稱、吉祥、尊貴の六義を有する梵語にして佛陀の尊稱なり。

【三】最勝の光曜云云。斯經の說處たる淨土莊嚴の相なり、十八種の勝德圓滿なる處なれば、十八圓滿の華藏世界と云ふ。

【四】三界所行の處。欲、色、無色の三界は惑業所感の有漏の果報なり、淨土は斯かる境界を超越する所なり。

【五】最極自在の淨識。此の淨土は佛の無漏純淨なる大圓鏡智の識上に現はれたる體相なり。

【六】大菩薩。菩薩とは菩提薩埵(Bodhisattva)の略語にして覺有情と譯す。向上的自利にしては覺智を求め、向下的利他にしては有情を救ふの意なり。

【七】天。天上界の有情なり。

洛、(一三)牟呼洛伽、人非人等の常に翼從する所なり、(十)廣大の法味喜樂「食」に持たれ、(十一)現に衆生の「爲に」一切の義利を作し、(十二)一切の煩惱纏垢を蠲除し、(十三)衆魔を遠離し、(十四)諸の莊嚴に過ぎたる如來莊嚴の所依處にして、(十五)(一四)大念慧行を以て遊路と爲し、(十六)(一五)大止妙觀を以て所乘と爲し、(十七)(一六)大空、無相、無願の解脫を所入の門と爲し、(十八)無量の功德衆の莊嚴する所、(一七)大寶「紅蓮」華王衆の建立する所の「十八圓滿の」大宮殿の中に住したまひき。(一八)是の薄伽梵は最清淨の覺あり、(一)(一九)二現行せず、(二)(二〇)無相の法に趣き、(三)(二一)佛の住「する所」に住し、(四)一切佛平等性を逮得し、(五)無障處に到り、(六)(二二)「退」轉すべからざる法にして、(七)行ずる所無礙なり。(八)其の(二三)安立する所思議すべからず、(九)

【八】夜叉(Yakṣa)。此に暴惡、勇健、輕捷等と譯す、鬼の類なり。

【九】健達縛(Gandharva)。此に尋香行と譯す。樂師は食の香氣を尋ね行き、歌舞音樂を作して食を乞ひ求む、故に樂師を尋香と云ふ。今健達縛とは天の樂神なり。

【一〇】阿素洛(Asura)。此に非天と譯す。天の一類なり、而も諂詐多くして天の行なければ名けて非天と云ふ。

【一一】揭路茶(Garuḍa)。此に妙翅鳥と云ふなり。

【一二】緊奈洛(Kiṃnara)。此に歌神と云ふ、能く歌詠を唱ふ。

【一三】牟呼洛伽(Mahoraga)、此に大腹行と云ふ大蟒神なり。

【一四】大念慧行。大念、大慧、大行の三、ともに智慧の區別なり。大乘を緣ずるが故に大と云ふ。即ち、

三慧
- 聞いて起る智慧—大念
- 思うて起る智慧—大慧
- 修して成る智慧—大行

【一五】大止妙觀　止とは梵に奢摩他(Śamatha)と云ひ、煩惱不善を伏滅し三業寂靜なる禪定を止と云ふ、觀とは梵に毘婆舍那(Vipaśyanā)と云ひ、定境を觀察する正慧を觀と云ふ。

【一六】空、無相、無願、是れを三解脫門と云ひ、空無相無願を緣ずる定は解脫涅槃に入るの門なり。實我實法は空無なるを以て空と云ひ、此の空を緣ずる定を空解脫門と云ふ。眞如は色、聲、香、味、觸、男、女、生、老、死の小相を離るるを以て無相と云ひ、此の無相を緣ずる定を無相解脫門と云ふ。三界はすべて苦なり、願求すべき所なし、故に無願と云ふ、此の三界皆苦を緣ずる定を無願解脫門と云ふ。此

三世平等の法性に遊び、（十三）其の身一切世界に流布［示現］し、（十二）一切法に於て智［慧］疑滯する無く、（十一）一切［有情］の［性］行に於て大覺を成就す（十）諸法に於て智疑惑あること無く、（十四）凡そ所現の身は［思慮］分別すべからず。（十五）一切の菩薩のみ正しく求むる所の智にして、（十六）（二四）佛の無二住の勝れたる彼岸を得、（十七）相ひ間雜せざる如來の解脫妙智究竟し、（十八）中邊無き佛地の平等を證し、（十九）［清淨］法界［の眞如］を極め、（二十）虛空性［の如き無邊の功德］を盡し、（二十一）未來際を窮めたまへり。［爾の時］無量の大聲聞衆と俱なりき、（一）（二五）一切調順にして、（二）皆是れ佛子なり。（三）心善く解脫し、慧善く解脫し、（四）戒善く清淨にして、（五）法樂を趣求し、（六）多聞聞持して其聞積集し、（七）善く所思を思ひ、善く所說を

三の定は涅槃淨土の都に入るの門なり。

【一七】大寶華王。大寶紅蓮華は一切の華中最勝なれば王と云ふ、花葉數多ければ衆と云ふ。

【一八】是の薄伽梵云云已下。佛陀の德を嘆ず。先づ「是の薄伽梵は最清淨の覺あり」とは總德を擧ぐ。次の「二現行せず」と云ふ已下二十一の別德を表す。

【一九】二現行せず。異生凡夫は生死に執著し、二乘の聖者は涅槃に執著す、佛世尊は此の二ともに現起せず。

【二〇】無相の法。眞如を云ふ、眞如は有無等の相を離るるが故に無相と云ふ。

【二一】佛の住。佛の住する所、即ち大悲なり、佛は盡未來不斷に大悲心に住して世間の衆生を救ふ。

【二二】退轉すべからざる法。佛は惡魔外道を降伏するを以て外道等縱ひ佛法を退轉せんと欲するも能はざるなり。

【二三】安立。契經等の正法を施設するを云ふ。

【二四】佛の無二住。法身眞如を云ふ、法身は平等一味の理なるが故に無二と云ひ、是れ所住の境なるが故に住と云ふ。

【二五】一切調順云云已下。聲聞衆の十三德を擧ぐ。

【二六】出離。生死苦海を出離する妙慧を云ふ。

【二七】無等慧。與に等しきものなき勝れたる智なり。

【二八】三明。一宿命明、宿世の住處種姓等を知る智。二天眼明、未來世の死生の狀態を知る智。三漏盡明、有漏煩惱を斷盡して證知する智なり。

【二九】現法樂住。色界根本靜慮（四禪）を修すれば現前法樂に安住し、初禪身中に充つるを得

說き、善く所作を作し、(八)捷慧、速慧、利慧、(二六)出慧、勝決擇慧、大慧、廣慧及び(二七)無等慧の慧寶成就し、(九)(二八)三明を具足し、(十)一切の(二九)現法樂住を逮得せる、(十一)(三〇)大淨福田なり、(十二)威儀寂靜にして圓滿せずといふこと無し、(十三)大忍柔和、成就し減ること無くして、已に善く如來の聖敎を奉行せり。復た無量の菩薩摩訶薩衆あり、種種の佛土よりして來つて集會す。皆大乘に住し、大乘の法に遊び、諸の衆生に於て其心「自他」平等なり。諸の分別及び不分別の種種の分別を離れ、一切の衆魔怨敵を摧伏し、一切の(三一)聲聞獨覺所有の作意を遠離し、廣大の法味喜樂「食」に持たれ、(三二)五怖畏を超え、(三三)一向不退轉地に趣入し、一切衆生の(三四)一切災橫地を「止」息して、「而して」現在前す。其名を解甚深義密意菩薩摩訶薩、如理請問菩薩摩訶薩、法涌菩薩摩訶薩、善清淨慧菩薩摩訶薩、廣慧菩薩摩訶薩、德本菩薩摩訶薩、勝義生菩薩摩訶薩、觀自在菩薩摩訶薩、慈氏菩薩摩訶薩、曼殊室利菩薩摩訶薩等と曰ふ、而も上首たりき。

【三〇】大淨福田。永く煩惱の垢を盡し能く廣大の果を生長することを福利ある世の良田の如し。

【三一】聲聞、獨覺。佛の出世に遇ひ四諦說法の聲を聞き阿羅漢果を證得する者を聲聞と云ひ、佛の出世に遇はず獨り山林に靜坐し十二因緣を覺悟し阿羅漢果を證する者を獨覺と云ふ。

【三二】五怖畏。(一)不活畏。(二)惡名畏。(三)死畏。(四)惡趣畏。(五)怯衆畏。

【三三】一向不退轉地。菩薩十地の修行中、七地以前は猶ほ退歩することあるも、第八地以上は一切の煩惱已に現起せず退歩することなし、故に第八地以上を一向不退轉の地と云ふ。

【三四】一切災橫地。內病外貧等一切の苦惱を云ふ。

勝義諦相品第二

爾の時如理請問菩薩摩訶薩卽ち佛前に於て、解甚深義密意菩薩摩訶薩に問うて言はく、

(一)『最勝子よ、一切法無二と言ふ、一切法無二とは、何等か一切法なる、云何んが無二と爲すや。』

解甚深密意菩薩、如理請問菩薩に謂つて曰く、

『善男子よ、一切法とは略して二種あり、所謂(二)有爲と無爲となり、是の中有爲は有爲に非ず無爲に非ず、無爲も亦た無爲に非ず有爲に非ず。』

如理請問菩薩復た解甚深義密意菩薩に問うて言はく、

『最勝子よ、如何んが有爲は有爲に非ず無爲に非ざるや、無爲も亦た無爲に非ず有爲に非ざるや。』

解甚深義密意菩薩、如理請問菩薩に謂つて曰く、

『善男子よ、有爲と言ふは乃ち是れ(三)本師假施設の句なり。若し是れ本師假施設の句なれば、卽ち是れ遍計して集むる所の言辭の所說なり。若し是れ遍計して集むる所の言辭の所說なれば、卽ち是れ究竟して種種遍計言辭の所說は、成實ならざるが故

【一】最勝子。最勝なる佛の弟子、佛子と云ふに同じ。

【二】有爲と無爲。爲とは爲作、因緣に依つて造られたる現象界を有爲法、又は依他起性と名づく。是れ生滅無常如幻虛假の法、反之眞如、本體界は因緣に造作せられず、永く生滅を超絕せる常住不變の理にして無爲法又は圓成實性と名づく。

【三】本師假施設。釋迦本師大慈悲力の故に無名字の法體の上に强ひて言說を與して假說す。

に、是れ有爲に非ず。善男子よ、無爲と言ふは亦た言辭に墮す、設ひ有爲無爲を離るるも、少かも所説あれば其相亦た爾り。然れども〔體〕事無くして而かも所説あるに非ず。何等をか事と爲す、謂はく諸の聖者聖智聖見を以て名言を離るるが故に、現に正等覺し、卽ち是の如き離言の法性に於て、他をして現に等覺せしめんと欲するが爲めの故に、名相を假立して之れを有爲と謂ふ。善男子よ、無爲と言ふは亦た是れ本師假施設の句なり、若し是れ本師假施設の句なれば、卽ち是れ遍計して集むる所の言辭の所説なり。若し是れ遍計して集むる所の言辭の所説なれば、卽ち是れ究竟して種種遍計の言辭の所説は成實ならざるが故に是れ無爲に非ず。善男子よ、無爲と言ふは亦た言辭に墮す、設ひ無爲有爲を離るるも少かも所説あれば其相亦た爾り。然れども〔體〕事無くして而かも所説あるに非ず。何等をか事と爲す、謂はく諸の聖者聖智聖見を以て、名言を離るるが故に現に正等覺し、卽ち是の如き離言の法性に於て他をして現に等覺せしめんと欲するが爲めの故に、名相を假立して之れを無爲と謂ふ。』

爾の時如理請問菩薩摩訶薩復た解甚深義密意菩薩摩訶薩に問うて言はく、

『最勝子よ、如何が此の事に於て、彼の諸の聖者聖智聖見を以て名言を離るるが故に現に正等覺し、卽ち是の如き離言の法性に於て他をして現に等覺せしめんと欲するが爲めの故に、名相を假立して或は有爲と謂ひ或は無爲と謂ふや。』

解甚深義密意菩薩、如理請問菩薩に謂つて曰く、

「善男子よ、【四】善幻師或は彼の弟子【五】四衢道に住して、草葉、木、瓦礫等を積集して、種種の幻化の事業を現作す。所謂【六】象身、馬身、車身、歩身、【七】末尼、眞珠、瑠璃、螺貝、璧玉、珊瑚、種種の財穀庫藏等の身なり。若し諸の衆生愚癡頑鈍惡慧の種類にして、知曉する所無く、草葉、木、瓦礫等の上の諸の幻化の事に於て、見已り聞き已つて是の如きの念を作す、此所見の者は實に象身あり、實に馬身、車身、歩身、末尼、眞珠、瑠璃、螺貝、璧玉、珊瑚、種種の財穀庫藏等の身ありと。其の所見の如く、其の所聞の如く堅固に執著して、隨つて言說を起し、唯だ此のみ諦實にして餘は皆な愚妄なりとし、彼れ、後時に於て應に更に觀察すべし。若し衆生あつて愚に非ず、鈍に非ず、善慧の種類にして、知曉する所あつて、草葉、木、瓦礫等の上の諸の幻化の事に於て見已り聞き已つて、是の如きの念を作す、此の所見の者は實の象身無く、實の馬身、車身、歩身、末尼、眞珠、瑠璃、螺貝、璧玉、珊瑚、種種の財穀庫藏等の身無し、然るに幻狀の眼を迷惑する事あつて、中に於て大象身の想或は大象身差別の想を發起し、乃至種種の財穀庫藏等の想或は彼の種種差別の想を發起すと。所見の如く、所聞の如く堅固に執著し、

【四】善幻師或は彼の弟子、巧妙なる魔術師及び其の弟子なり。阿賴耶識を其の師に、前七識を其の弟子に喩ふ。

【五】四衢道、四識住に喩ふ。四識住とは五蘊の中の色受想行の四は識蘊の喜んで住著する所なれば識住と云ふ。

【六】象身等、印度古時の軍隊組織なる象、馬、車、歩の四兵となす、其象等の身相を象身等と云ふ。

【七】末尼 maṇi 寶と譯す、寶玉の總稱なり。

隨つて言説を起して、唯だ此れのみ諦實なり、餘は皆癡妄なりとせん。是の如きの義を表知せんと欲するが爲の故に、亦た此の中に於て隨つて言説を起し、彼れ、後時に於て觀察を須ゐざるが如く、是の如く若し衆生あつて是れ愚夫の類、是れ（八）異生性の類にして、未だ諸聖の出世間の慧を得ず、一切法の離言〔不可説の〕法性に於て了知すること能はず、彼れ一切の有爲無爲に於て、見已り聞き已つて、是の如きの念を作す、此の得る所の者は決定して實に有爲無爲ありと。其所見の如く、其所聞の如く堅固に執著して、隨つて言説を起し、唯だ此れのみ諦實にして餘は皆癡妄なりとし、彼れ後時に於て應に更に觀察すべし。若し衆生あつて愚夫の類に非ず、已に（九）聖諦を見、已に諸聖の（一〇）出世間の慧を得、一切法の離言の法性に於て如實に了知し、彼れ一切の有爲無爲に於て見已り聞き已つて、是の如きの念ひを作す、此の得る所の者は決定して實の有爲無爲無し、然るに分別して起す所の（一一）行相あつて、猶し幻事の覺慧を迷惑するが如く、中に於て〔有〕爲無爲の想、或は（有）爲無爲の差別の想を發起すと。所見の如く、所聞の如く堅固に執著して、隨つて言説を起し、唯だ此れのみ諦實にして

【八】異生性。[illegible]獄餓鬼畜生の惡趣に生れ、其生處種種別異なればなり。

【九】聖諦。四聖諦の異名なり。聖智證見の諦理を四聖諦と云ふ。（一）苦諦とは吾人現前に受けつつある憂悲苦惱の境界を云ふ。是れ過去の惑業力に因り招感せし結果にて、此苦果の實性を苦諦眞如となす。（二）集諦とは現在の苦果を招集せし原因たる過去の惑業力を云ふ。是が實性を集諦眞如となす。（三）滅諦とは苦諦の惑業及び苦諦の苦果を斷盡して證得したる寂滅涅槃を云ふ。此滅諦の眞如を滅諦眞如となす。（四）道諦とは滅諦涅槃を證得すべき清淨無漏の智を云ふ。此の實性を道諦眞如となす。

餘は皆癡妄なりとせず。是の如きの義を表知せんと欲するが爲めの故に、亦た此中に於て隨つて言說を起し、彼れ、後時に於て觀察を須ゐず。是の如く善男子よ、彼の諸の聖者は此の事の中に於て、聖智聖見を以て名言を離るるが故に、現に正等覺し、卽ち是の如き離言の法性に於て、他をして現に等覺せしめんと欲するが爲めの故に、名相を假立して、之れを有爲と謂ひ、之れを無爲と謂ふ。』

爾の時解甚深義密意菩薩摩訶薩重ねて此義を宣べんと欲して頌を說いて曰く、

『佛離言無二の義を說きたまふ、甚深にして愚〔夫〕の所行に非ず、愚夫此れに於て癡に惑はされ、〔一二〕二に樂著して言に依て戲論す。

彼れ或は　〔一三〕不定或は邪定、流轉して極めて長く生死に苦む、復た是の如き正智の論に違せば、當に牛羊等の類の中に生ずべし。』

爾の時法涌菩薩摩訶薩佛に白して言く、

『世尊よ、此れより東方七十二〔一四〕殑伽沙に等しき世界を過ぎて世界あり、其大名稱と名づけ、是の中の如來を廣大名稱と號す。我れ先きの日に於て、彼の佛土より發して此に來至す。我れ彼の土

【一〇】出世間の慧。世界の迷界を超越したる大悟徹底の聖慧なり。

【一一】行相。心識が對境を慮知する行解の相貌卽分別心が境界を了解する作用の狀態也。

【一二】二に樂著して。二とは有爲無爲なり。

【一三】不定或は邪定。三定聚とて衆生の種類を三となす。(一)正定聚。定んで正善にして善趣の生を招くもの。(二)邪定聚。定んで邪惡にして惡趣の生を招くもの。(三)不定聚。正邪善惡不定にして其結果亦た不定なるもの。

【一四】殑伽沙は恒河沙なり。印度恒河の沙の數量を以て世界の無數なるに譬ふ。

に於て、曾て一處を見しに、七萬七千の外道并に其師首あり、同じく一會に坐して諸法の〔一五〕勝義諦の相を思はんが爲めに、彼れ共に思議し、稱量し、觀察し、徧く尋求する時、一切法の勝義諦の相に於て竟に得ること能はず。唯だ種種の意解、別異の意解、變異の意解を除くのみにして、互に相ひ違背し、共に諍論を興し、口に〔一六〕矛穳を出し、更に相ひ穳し、刺し、惱し、壞り、旣に已つて各各離散せり。世尊よ、我れ爾の時に於て竊かに是の念ひを作せり、如來の出世は甚奇希有なり、出世に由るが故に、乃ち是の如く一切尋思「分別」の所行を超過せる勝義諦の相に於て、亦た通達作證の得べきありと。』

是の語を說き已るや、爾の時世尊、法涌菩薩摩訶薩に告げて曰はく、

『善男子よ、是の如し、是の如し、汝が所說の如し。我れ一切の尋思「分別」を超過せる勝義諦の相に於て、現に正等覺し、現に等覺し已つて、他の爲めに宣說し、顯現し、開解し、施說し、照了す。何以ば、我が說く勝義は是れ諸の聖者內「心」に自ら證する所なり、尋思の所行は是れ諸の異生「凡夫」展轉して證る所なるが故なり。是の故に法涌よ、此道理に由つて當に知るべし、勝義は一切の尋思「分別」の境相を超過すと。法涌よ、我が說く勝義は〔一七〕無相の所行なり、尋思は但だ〔一八〕有相の境界にのみ行ず。是の

〔一五〕勝義諦。諸法の本體たる眞如第一義諦を勝義諦と云ふ。虛妄分別を超越せる一眞法界の諦理なり。是れ勝れたる無分別智の對境なれば勝義と云ふ。虛妄分別の對境なる現象界たる世俗諦と稱するに對す。

〔一六〕矛穳。ともに「ホコ」なり。

〔一七〕無相。勝義諦の眞如は固より色、聲、香、味、觸、男、女、生、異、滅の十相を絕して無し、故に無相とす、此の無相界に體會する根本正體智亦差別の衆相を泯亡して分別ある無し、此無分別の智を無相と云ふ。

〔一八〕有相。有爲の諸法は種種

故に法涌よ、此道理に由つて當に知るべし、勝義は一切の尋思「分別」の境相を超過すと。法涌よ、我が說く勝義は言說すべからず、尋思「分別」は但だ言說「表示」の境界にのみ行ず。是の故に法涌よ、此道理に由つて當に知るべし勝義は一切の尋思「分別」の境相を超過すと。法涌よ、我が說く勝義は諸の「言說」の表示を絕す、尋思「分別」は但だ「言說」表示の境界にのみ行ず。是の故に法涌よ、此道理に由つて當に知るべし、勝義は一切尋思「分別」の境相を超過すと。法涌よ、我が說く勝義は諸の諍論を絕す、尋思は但だ諍論の境界にのみ行ず。是の故に法涌よ、此道理に由つて當に知るべし。勝義は一切の尋思の境相を超過すと。法涌よ、當に知るべし、譬へば人ありて其の壽量を盡くすまで辛苦の味を習ふも、〔一九〕蜜石蜜の上妙なる美味に於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はず、或は長夜に於て欲貪の勝解に由つて、諸欲の熾火に燒然せらるるが故に、內に一切の色聲香味觸の相を除滅せる〔二〇〕妙遠離樂に於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はず。或は長夜に於て言說の勝解に由つて、世間の綺言說に樂著するが故に、內の〔二一〕寂靜聖默然の樂に於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はず、或は長夜に於て見聞覺知の表示の勝解に由つて世間の諸の表示に樂著するが故に、永へに一切の表示を斷除せる〔二二〕薩迦耶滅の究竟「無際」涅槃に

差別の相狀あるを以て有相と云ふ、是れ有分別尋思戲論の對境なり。

【一九】蜜石蜜。飴なり。

【二〇】妙遠離樂。五欲惡不善を離れたる境界の樂。

【二一】寂靜聖默然の樂。尋思分別を絕したる境界の樂。

於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はざるが如しと。法涌よ當に知るべし、譬へば人あつて其長夜に於て、種種の【二三】我所攝受・諍論の勝解あるに由つて、世間の諸の諍論に樂著するが故に、【二四】北拘盧洲の無我所、無攝受、離諍論に於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はざるが如しと。是の如く法涌よ、諸の尋思する者は一切の尋思の所行を超えたる勝義諦の相に於て尋思すること能はず、比度すること能はず、信解すること能はずと。』

爾の時世尊重て此義を宣べんと欲して、頌を說いて曰はく、

『內證と無相の所行と、不可言說と表示を絕すると、
諸の諍論を息するとの勝義諦は、一切尋思の相を超過す。』

【二二】薩迦耶滅の究竟涅槃。薩迦耶（Satkāya）とは移轉身と譯す、吾人の身體は他の因緣和合に依り假りに我相に似たるのみにして、定んで堅實の法なるに非ず。然れども又因緣所生の假有のものなれば全く虛僞の無體にも非ず、乃ち實有にも非ず亦虛僞にも非ず、此の移轉身を餘す所無く滅盡したる無餘涅槃を薩迦耶滅の究竟涅槃と云ふ。

【二三】我所攝受。我所とは具には我所有見と云ふ、凡夫はみな迷謬して自我の實在を認むる之を我見となす、我見先づ我の實在を認め、而して後ち我所見起りて父母、妻子、兄弟、朋友及び庫藏等を以て自我の所有なりとするを我所見と云ふ、之れに執著し自己に繫屬するを攝受と云ふ。

【二四】北拘盧洲。此に勝處或は勝生と譯す、印度古代の世界說に須彌山を立つ、須彌山の四方に四洲あり北方にあるを北拘盧洲と云ふ、此洲の人は身量長大、壽量千年にして果報最も勝れ樂多く苦少く、且つ我所見なく、妻子等に於ても自己の所有に於ても樂著攝受すること無し。

爾の時善清淨慧菩薩摩訶薩、佛に白して言く、

「世尊よ、甚だ奇たり、乃至世尊よ、善説なり。世尊の言ふが如く勝義諦の相は微細甚深にして、諸法一異の［體］性相［狀］を超過して、通達すべきこと難し。世尊よ、我れ即ち此に於て曾て一處を見しに、衆の菩薩あつて等しく正しく（二五）勝解行地を修行し、同じく一會に坐し、皆共に勝義諦の相と（二六）諸行の相との一異の性相を思議せり。此會中に於て一類の菩薩は是の如きの言を作さく、勝義諦の相は諸行の相と都て異ること有ること無しと。一類の菩薩は復是の言を作さく、勝義諦の相は諸行の相と都て異ること有ること無きに非ず、然るに勝義諦の相は諸行の相に異れりと。有餘の菩薩は疑惑猶豫して復是の言を作さく、是の諸の菩薩の誰の言か諦實にして誰の言か虚妄たるや、誰か（二七）如理に行

【二五】勝解行地。菩薩修行の階位を法相宗に於ては四十一位と立つ。瑜伽論には大別して七地の階位とす。今七地と四十一位との相配左の如し

即ち四十一位中の前三十位は恰も瑜伽論七地中の第二勝解行地に相當す。此位に於ける菩薩は解脫涅槃を證得すべき資糧を貯へ、清淨無垢の見道無分別智を得べき前方便行を修し、勝れたる信解を起す位なれば勝解行地と名く。

【二六】諸行。行とは遷り流るるの義、生滅變化ある有爲法を諸行と云ふ。

【二七】如理に行。行は意識の行解分別を行と云ふ以下「行」を此義に用ゐる多し、諸行の行の遷流の義なるに同からず。

「解」して、誰か不如理なるやと。或は是の言を唱ふ、勝義諦の相は諸行の相と都て異ること無しと。或は是の言を唱ふ、勝義諦の相は諸行の相に異りと。世尊よ、我れ彼れを見已つて、竊かに是の念ひを作せり、此の諸の善男子は愚癡、頑鈍、不明不善にして、如理に行せず、勝義諦の微細甚深にして諸行一異の性相を超過せるに於て解了すること能はずと。』

是の語を說き已るや、爾の時世尊、善清淨慧菩薩摩訶薩に告げて曰はく、

『善男子よ、是の如し、是の如し、汝が所說の如し 此の諸の善男子は愚癡、頑鈍、不明、不善にして如理に行せず、勝義諦の微細甚深にして、諸行一異の性相を超過せるに於て解了すること能はず。何以ば、善清淨慧よ、諸行に於て是の如く行「解」する時を能く勝義諦の相に通達し、或は勝義諦に於て作證を得ると名くべきに非ざるが故なり。「更に」何以ば、善清淨慧よ、若し勝義諦の相と諸行の相と都て異ること無しといはば、應に今時に於て一切の異生皆已に見諦、「悟道」すべく、又た諸の異生皆應に已に(二八)無上

【二八】無上方便安穩涅槃　涅槃(Nirvāṇa)は寂滅、滅度と譯す、煩惱を滅し、生死の苦海を度り越え、寂靜なる安樂地に到れる消息なり。この涅槃義を以て四種の別を立つ、一に本來自性清淨涅槃とは一切諸法の實相たる眞如なり、是れ一切有情等しく有する所にして客染煩惱ありと雖も毫も汙染せらるゝなく本來自性清淨なる不可言の眞理を云ふ。二に有餘依涅槃とは、煩惱を斷じ盡して證得せし滅理なり、既に煩惱を斷盡せるが故に新たに業因を造り更に生死海に流轉すること無きも、過去業所感の餘殘たる現在生死の苦果尙ほ有りて未だ亡びざるを有餘依涅槃と云ふ。三に無餘依涅槃とは、啻に煩惱を斷滅し去るのみならず亦過去業因に招かれたる現在苦果の依身をも餘す無く滅し盡したるを云ふ。四に無住處涅槃とは、所知障を斷盡し大悲大智の證す

方便安穩涅槃を得べく、或は應に已に〔二九〕阿耨多羅三藐三菩提を證すべし、若し勝義諦の相と諸行の相と一向異りと云はば、已に見諦の者諸行の相に於て應に除遣せざるべく、若し諸行の相を除遣せずんば應に〔三〇〕相縛に於て解脱を得ざるべく、此の見諦の者、諸の相縛に於て解脱せざるが故に〔三一〕麁重縛に於ても亦た應に脱せざるべく、二縛に於て解脱せざるに由るが故に、已に見諦の者應に無上方便安穩涅槃を得ること能はざるべく、或は應に阿耨多羅三藐三菩提を證せざるべし。善清淨慧よ、今時に於て諸の異生皆已に見諦するに非ず、諸の異生已に能く無上方便安穩涅槃を獲得するに非ず、亦已に阿耨多羅三藐三菩提を證するに非ず、是に由ての故に勝義諦の相と諸行の相と都て異相無しといふ

る眞如なり、大悲の故に涅槃に住せず般若の故に生死に住せざる位の眞理を云ふ。今無上方便安穩涅槃とは此四涅槃の中第二の有餘涅槃と第四の無住處涅槃の二種を云ふ、是れ方便道所證得の涅槃なれば無上方便安穩涅槃と云ふ。

〔二九〕阿耨多羅三藐三菩提 アヌツタラ サンミヤク サムボーディ (Anuttara-samyak-sambodhi)。略して菩提と云ひ、無上正等覺と譯す、佛の平等圓滿に正しく覺知せる智を云ふ。

〔三〇〕相縛 相とは相分、縛とは結縛なり、相分は見分に對する語、見分は主觀的心識の作用なり、相分は客觀的對境の相狀なり、この客觀たる萬境は是れ因緣和合生の有爲法にして實は如幻虛假なるものなり、然るに凡夫は本と實我實法を妄執するが爲め如幻虛假の客觀相分を妄りに堅實なるものの如くに觀じ、而して主觀見分の作用をして硬澁不自在にして圓轉自在に主觀する能はざらしむ、爰に於て主觀見分は客觀相分に因はれ客觀の本性其物のありの儘に如幻虛假なりと大悟徹底する能はず、故に今の客觀相分より主觀見分の作用をして拘束結縛し圓轉自在ならざらしむるを相縛と云ふ。

〔三一〕麁重縛 麁重とは麁強沈重の義、佛智の細輭なるに反す、佛は清淨無垢その心智微細輭利にして能く眞諦の無相なるに契證し有爲の如幻なるに了達し境界その物の如くに體會するに堪へ得べきも、菩薩等佛に非るものは煩惱障及び所知障の熏習せし種子即ち麁重なるもの未だ離れざるを以て若は貪著瞋恚あり其の性麁強沈重にして無相の眞如に

は道理に應せず。若し此の中に於て是の如きの言を作し、勝義諦の相と諸行の相と都て異ること無しといはば、此道理に由つて當に知るべし、一切[皆]如理に行ずるに非ず、正理の如くならずと。善清淨慧よ、今時に於て見諦の者諸行の相に於て、除遣すること能はざるに非ず、然かも能く除遣し、見諦の者諸の相縛に於て解脱すること能はざるに非ず、然かも能く解脱し、見諦の者麤重縛に於て解脱すること能はざるに非ず、然も能く解脱す。二[縛]障に於て能く解脱するを以ての故に、亦た能く無上方便安穩涅槃を獲得し、或は能く阿耨多羅三藐三菩提を證すること有り、是に由つての故に、勝義諦の相と諸行の相と一向異相なりといふは道理に應ぜず。若し此の中に於て是の如きの言を作し、勝義諦の相と諸行の相と一向異りといふは、此道理に由つて當に知るべし、一切[皆]如理に行ずるに非ず、正理の如くにあらざることをと。善清淨慧よ、若し勝義諦の相と諸行の相と都て異ること無しといはば、諸行の相の(三二)雜染の相に墮するが如く、此勝義諦の相も亦た應に是の如く雜染の相に墮すべし。善清淨慧よ、若し勝義諦の相と諸行の相と一向異りといはば、應に一切行の相の(三三)共相を勝義諦の相と名くるに非ざるべし。善清淨慧よ、今時に於て勝義諦の相は、雜染の相に墮するに非ず、諸行の共相を勝義諦の相と

對するも其無相の理を見る能はず即ち境界のありの儘に了知するに堪ふる能はざる無堪忍の性を麁重と云ふ。

【三二】 雜染。煩惱の自ら染汚なるは勿論、善若しくは無記も他の煩惱の爲めに雜り染めらる、即ちすべて有漏の諸法を雜染と云ふ。

【三三】 共相。勝義諦の眞如は有爲諸行の眞實性にして、一切法に貫通普徧するものなれば共相と云ふ。

名く。是に由つての故に、勝義諦の相と諸行の相と都て異相無しといふも道理に應せず。勝義諦の相と諸行の相と一向異相なりといふも道理に應せず。若し此中に於て是の如くの言を作さく、勝義諦の相と諸行の相と都て異ること有ること無しといふも或は勝義諦の相と諸行の相と一向異りといふも、此道理に由つて當に知るべし一切[皆]如理に行ずるに非ず、正理の如くならざることを」と。善清淨慧よ、若し勝義諦の相と諸行の相と都て異ること無しといはば、勝義諦の相の諸行の相に於て差別あること無きが如く、一切行の相亦た應に是の如く差別あること無かるべし。觀行を修する者諸行の中に於て、其所見の如く、其所聞の如く、其所覺の如く、其所知の如く應に後時に更に勝義を求むべからず。若し勝義諦の相と諸行の相と一向異りといはば、應に諸行の　(三四)唯無我性、唯無自性に顯現せらるるもの是れ勝義の相なるに非ざるべし。又た應に俱時に別相成立すべし、謂く雜染の相及び清淨の相なり。善清淨慧よ、今時に於て一切行の相皆差別あり、差別無きに非ず、觀行を修する者諸行の中に於て其所見の如く、其所聞の如く、其所覺の如く、其所知の如く復た後時に於て更に勝義を求め、又た即ち諸行の唯無我性、唯無自性に顯現せらるるを勝義の相と名づけ、又た

【三四】唯無我性、唯無自性に顯現せらるるもの　無我とは我執を否定除遣する觀門也。我執に二種あり、一に人我執とは吾人の身心中別に常住一實の我體のあるあり、是れ能く事物を主宰判斷すと執す、二に法我執とは吾人を形ち作れる内界の身心にまれ若くは外界に於ける山川屋宅等にまれ其法の體實に有なりと執す、是れ[illegible]見の如く[illegible]に[illegible]するが故に法の實體なる[illegible]を認識し會見する能はず、若し[illegible]に在ては[illegible]に[illegible]する所あり二無我の觀門を修し人法一として[illegible]假立[illegible]する[illegible]決して[illegible]する

俱時に染淨の二相別相成立するに非ず、是に由つての故に、勝義諦の相と諸行の相と都て異ること有ること無しといふも、或は一向異りといふも道理に應せず。若し此中に於て是の如きの言を作して、勝義諦の相と諸行の相と都て異ること有ること無しといふも、或は一向異りといふも、此道理に由つて當に知るべし、一切〔皆〕如理に行ずるに非ず、正理の如くならざることをと。善淸淨慧よ、螺貝上の鮮白色性の彼の螺貝と一相異相を施設し易からざるが如く、螺貝の上の鮮白色性の如く、金の上の黄色も亦た復た是の如し、箜篌聲の上の美妙の曲性の箜篌の聲と一相異相を施設し易からざるが如く、(三五)黒沈の上に妙香の性あり、彼の黒沈と一相異相を施設し易からざるが如く、胡椒の上の辛猛利の性の彼の胡椒と一相異相を施設し易からざるが如く、胡椒の上の辛猛利の性の如く(三六)訶黎の澁の性も亦た復た是の如し。(三七)蠹羅綿の上に柔輭の性あり、蠹羅綿と一相異相を施設し易からざるが如く、熟酥の上に有る所の醍醐〔味〕の彼の熟酥と一相異相を施設し易からざるが如く、又た一切行の上の無常性、一切有漏法の上の苦性、一切法の上の(三八)補特伽羅無我性の彼の行等と一相異相を

如き實有なるものに非ずと悟了し所執の二我を空じより以て眞如の實性を顯現せしむ、即ち眞如は無我觀に由り顯はされたる眞實性なれば無我性と云ふ、既に無我なるが故に法とし定れる自性有る無ければ名けて無自性と云ふなり。

【三五】黒沈。沈水香なり。

【三六】訶黎。即ち訶黎羅(Kharila)なり、樹の名、紫檀木或は佉羅木なりと云ふ。

【三七】蠹羅綿。(Tūla)樹の花絮より製せる綿。或は云く野蠶繭なりと。

【三八】補特伽羅(Pudgala)。譯して數取趣と云ふ。諸の有情はその善惡の業に引かれ數々五趣(地獄、餓鬼、畜生、人間、天上)の果を取る、故に有情を數取趣と云ふ。補特伽羅無我性とは人無我性を云ふ。

施設し易からざるが如く、又た貪の上の不寂靜の相及び雜染の相の此れ彼の貪と一相異相を施設し易からざるが如く、貪の上に於けるが如く、瞋癡の上に於けるも當に知るべし亦た爾りと。是の如く善清淨慧よ、勝義諦の相は諸行の相と一相異相を施設すべからず。善清淨慧よ、我れ是の如き微細中の極めて微細なる、甚深中の極めて甚深なる、難通達中の極めて難通達にして、諸法一異の性相を超過せる勝義諦の相に於て、現に正等覺し、現に等覺し已つて、他の爲めに宣説し、顯示し、開解し、施設し、照了す。』

爾の時世尊重ねて此義を宣べんと欲して、頌を説いて曰く、

〔三九〕『行界勝義の相は、一異の性相を離れたり。若し一異を分別せば、
彼れ如理に行ずるに非ず。
衆生、相の爲めに縛せられ、及び麤重の爲めに縛せらる、要ず勤めて
止觀を修せよ、爾せば乃ち解脱を得ん。』

爾の時世尊、尊者善現に告げて曰く、

『善現よ、汝、有情界の中に於て、幾ばくの有情か「ありて」、〔四〇〕增上慢を懷き、「その」增上慢の爲に執持せらるるが故に所解を記「述分」別すと知るや。汝、有情界の中に於て、幾ばくの有情か「ありて」、增上慢を離れて所解を記別すと知るや。』

【三九】行界勝義。行は遷流無常の義、界とは種種差別の義にして種種差別界の有爲法を行界と云ひ、勝義諦の眞如無爲は有爲界の實體なれば行界勝義と云ふ。

【四〇】增上慢。未だ得ざるを得たりと云ひ、未だ證らざるを證れりとする高慢心を云ふ。

爾の時尊者善現、佛に白して言さく、

『世尊よ、我れ、有情界の中に、少分の有情〔のみ〕增上慢を離れて所解を記別すと知る。世尊よ我れ有情界の中に〔於て〕、無量無數不可說の有情あつて、增上慢を懷き、增上慢の爲めに執持せらるるが故に、所解を記別すと知る。世尊よ、我れ一時に於て、（四一）阿練若大樹林の中に住せり。時に衆多の（四二）苾芻あつて、亦た此の林に於て、我れに依近して住せり。我れ彼の諸の苾芻を見るに、日の後分に於て展轉聚集して、（四三）有所得の現觀に依つて、各々種種なる相法を說いて所解を記別せり。中に於て一類〔の者は〕（四四）蘊を〔了〕得するに由るが故に、蘊の相を〔了〕得するが故に、蘊の起るを〔了〕得するが故に、蘊の盡くるを〔了〕得するが故に、蘊の滅〔理〕を〔了〕得するが故に蘊の滅〔理を〕作證〔する道〕を〔了〕得するが故に〔爲めにその〕所解を記別す。此の一類〔の者〕蘊を得するに由るが故に（所解を記別す）といへるが如く、復た一類あり、（四五）處を得するに由るが故に、復た一類有り、（四六）緣起を得するが故にと〔云ふ〕

【四一】阿練若（Araṇya）。空閑靜處と譯す、國邑の音聲至らず伐木採薪の者至らず、煩惱、動亂、鬪諍等至らざる處にして、正に出家求道者の住所なり。

【四二】苾芻（Bhikṣu）。譯して乞士と云ふ、食を乞ひ清淨に活命するが故なり。

【四三】有所得の現觀。無所得法空の勝義諦を了せざる有分別の相待觀を云ふ。

【四四】蘊。因緣和合生の有爲法を分類し五蘊となす、色受想行識是れなり、蘊とは積聚の義にして色法に過去、現在、未來、內界、外界、若くは麁細遠近等の別あり、之れを聚めて色蘊となす、受想行識亦各種に差別あり、各之れを一聚として受蘊等となす。

【四五】處。汎く有爲無爲の萬有を分類して十二處となす、六根六境是なり、處とは生長の義なり、六根は所依となり、六境は所緣となりて應の如く

も當に知るべし亦た爾りと。復た一類あり、〔四七〕食を得するに由るが故に、食の相を得するが故に、食の起るを得するが故に、食の盡くるを得するが故に、食の滅を得するが故に、食の滅を作證(する道)を得するが故に、〔爲めにその〕所解を記別す。復た一類あり、〔四八〕〔四〕諦を得するに由るが故に、〔四〕諦の相を得するが故に、〔苦〕諦の徧知を得するが故に、〔集〕諦の永斷を得するが故に、〔滅〕諦の作證を得するが故に、〔道〕諦の修習を得するが故に、〔爲めにその〕所解を記別す。復た一類あり、〔四九〕界を得するに由るが故に、界の相を得するが故に、界の種種なる性を得するが故に、界の非一性を得するが故に、界の滅を得するが故に、界の滅を作證する〔道〕を得するが故に、〔爲めにその〕所解を記別す。復

六識の心王心所の作用を生長すれば處と云ふ。

六根　六境　六識

- 眼根―色根―眼識を生す
- 耳根―聲根―耳識を生す
- 鼻根―香根―鼻識を生す
- 舌根―味根―舌識を生す
- 身根―觸根―身識を生す
- 意根―法根―意識を生す

なり。

【四六】縁起。十二縁起なり。亦は十二因縁と云ふ。即ち(一)無明、(二)行、(三)識、(四)名色、(五)六處、(六)觸、(七)受、(八)愛(九)取、(十)有、(十一)生、(十二)老死の十二支を以て、有情の生死流轉因果相續の狀態を說きて無我觀に悟入せしむる也。

【四七】食。四食なり、段、觸、思、識の四食あり、食とは長養の義にして有情有漏の果を生存長養するの法なり。

【四八】諦。四諦なり、有漏迷界の果なるを苦諦となし、因なるを集諦となし、無漏悟界の果なるを滅諦となし、因なるを道諦となす、諦とは眞實の義にしてその理の如く審見し得、眞實不虛妄なればなり。

【四九】界。六根六境の十二處に更に六識を加へて十八界となす、界とは能持の義なり、能く自己の體性を持ちて失はざればなり、此の自體を持てる宇宙の法體を觀察分類して十八界となす。

【五〇】念住。四念住なり、念と慧との力能く定の心所をして境界の上に不忘の念に住せしむれば念住と云ふ。

四念住

- 身念住―身は不淨なりと觀ず
- 受念住―受は苦なりと觀ず
- 心念住―心は無常なりと觀ず
- 法念住―法は無我なりと觀ず

其の如く觀じて常、樂、我、淨、

た一類あり、(五〇)念住を得するに由るが故に、念住の相を得するが故に、念住の能治所治を得するが故に、念住の修を得するが故に、念住の未だ生ぜざるは生ぜしむることを得するが故に、念住の生じ已れるは堅住し忘れずして倍修し增廣「大」なることを得するが故に、「爲めにその」所解を記別す。一類あつて念住を得するが故にといふが如く、復た一類あつて(五一)正斷を得するが故に、(五二)神足を得するが故に、(五三)諸根を得するが故に、(五四)諸力を得するが故に、(五五)覺支を得するが故にといふも當に知る亦た爾りと。復た一類あり、(五六)八支聖道を得するが故に、八支聖道の相を得するが故に、八支聖道の能治所治を得するが故に、八支聖道の修を得するが故に、八支聖道の未だ生ぜざるは生ぜ

の四顚倒を對治す、不淨苦等は能治なり、常樂等は所治なり。

【五一】正斷。四正斷なり。

四正斷
- 律儀斷—已生の惡を若は伏し若は斷ず
- 斷斷—未生の惡の種子を斷ず
- 修斷—未生の善の種子を生起せしむ
- 防護斷—已生の善を彌ら相續し未定の惡を防ぎて生ぜざらしむ

【五二】神足。四神足なり、神とは神通なり、慧の妙用測り難きを云ふ、足とは所依止の義にして即ち禪定を云ふ、禪定は神通を發する立脚地なれば神足と云ふ、而して此の定の因に欲、勤、心、觀の四種あり、之れを四神足となす。

【五三】諸根。信、精進、念、定、慧の五根を云ふ、根とは增上の義なり、此の五能く諸淨法を增上するが故に根と云ふ。

【五四】諸力。信、精進、念、定、慧の五力を云ふ。其名五根に同じ。五根增長して煩惱を斷ずる作用あるを力と云ふ。

【五五】覺支。念、擇法、精進、喜、輕安、定、行捨の七覺支なり。此の七は覺智の支分なれば覺支と云ふ。

【五六】八支聖道。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定なり。理に會し神に通ずるを聖と云ひ運載遊履するを道と云ふ。此の八は無漏淸淨にして能く理に會し聖に稱ひて終に佛果に運載し遊履するを以て聖道と云ふ。上來の四念住、四正斷、四神足、五根、五力、七覺支、八聖道支を、七科の道品とも三十七菩提分法とも云ふなり。

しむることを得するが故に、八支聖道の生じ已れるは堅住し、忘れずして倍修し增すます廣「大」なることを得するが故に、「爲めにその」所解を記別す。世尊よ、我れ彼れを見已つて是の念を作さく、此の諸の長老有所得の現觀に依つて、各種種なる相法を說いて、「その」所解を記別す、當に知るべし、彼の諸の長老一切皆增上慢を懷き、增上慢のために執持せらるるが故に、勝義諦の一切「處」に「周」遍したる「平等」一味の相に於て、解了する能はざることをと。是の故に、世尊よ、甚だ奇なり、乃至世尊よ、善說なり、世尊の言ふが如く、勝義諦の相は、微細「中」の最も微細なる、甚深「中」の最も甚深なる、難通達「中」の最も難通達なる、一切に徧ねき一味の相なり。世尊よ、此聖敎の中に修行する苾芻すら、勝義諦の徧一切一味の相に於て、尙ほ通達し難し、況んや諸の外道をや。」

爾の時世尊、尊者善現に告げて曰はく、

「是の如し、是の如し、善現よ、我れ微細「中」の最も微細なる、甚深「中」の最も甚深なる、難通達「中」の最も難通達なる、一切に徧ねき一味の相なる勝義諦に於て、現に正等覺し、現に等覺し已つて、他の爲めに宣說し、顯示し、開解し、施設し、照了す。何以ば、善現よ、我れ已に一切蘊の中に於て清淨の所緣是れ勝義諦なりと顯示し、我れ已に一切の處、緣起、食、諦、界、念住、正斷、神足、根、力、覺支、「及び」道支の中に於て、清淨の所緣是れ勝義諦なりと顯示せるが故なり。此の清淨の所緣は、一切蘊の中に於て是れ一味の相にして、別の異れる相なし。蘊の中に於けるが如く、是の

如く、一切處の中乃至一切道支の中に於けるも、（亦た）是れ一味の相にして別の異れる相無し。是の故に善現よ、此道理に由つて當に知るべし、勝義諦は是れ一切に徧ねき一味の相なりと。善現よ、觀行を修する苾芻は、一蘊の眞如勝義法無我の性に通達し已れば、更に各別の餘の蘊と諸の處、緣起、食、諦、界、念住、正斷、神足、根、力、覺支〔及び〕道支の眞如勝義法無我の性を尋求せざれども、唯だ卽ち此の〔一蘊の〕眞如勝義に隨つて無二の智を依止と爲るが故に、一切に徧ねき一味の相なる勝義諦に於て、審察し趣證す。是の故に善現よ、此道理に由つて當に知るべし、勝義諦は是れ一切に徧ねき一味の相なりと。善現よ、彼の諸蘊の展轉して異れる相あるが如く、彼の諸の處、緣起、食、諦、界、念住、正斷、神足、根、力、覺支〔及び〕道支の展轉して異れる相あるが如く、若し一切法の眞如勝義法無我の性も亦た異れる相あらば、是れ則ち眞如勝義法無我の性も亦た應に因あつて因より生ずる所なるべし。若し因より生せば、應に是れ有爲なるべし。若し是れ有爲ならば應に勝義に非ざるべし。「此れ若し勝義に非ずんば、應に更に餘の勝義諦を尋求すべし。善現よ、此れに由つて眞如勝義法無我性は因ありと名けず、因の所生にあらず、亦た有爲に非ず、是れ勝義諦なり。此勝義を得て更に餘の勝義諦を尋求せざれ。唯だ常常の時、恒恒の時、如來の出世〔時〕にも、若しは不出世〔時〕にも、諸法の法性安立し、法界安住すること有り。是の故に善現よ、此道理に由つて當に知るべし、勝義諦は一切に徧ねき一味の相なるを。善現よ、譬へば種種非一の品類異相の色〔法〕の中に〔於て〕、虛空は相無く、分別

「すべき」無く、變異無く、一切に徧ねき一味の相なるが如く、是の如く異性異相の一切法の中に「於ける」勝義諦の徧一切一味の相も、當に知るべし亦た爾りと。」

爾の時世尊、重て此の義を宣べんと欲して、而かも頌を說いて曰はく、

「此の一切に徧ねき一味の相たる勝義は、諸佛の說異ること無し。

若し中に於て異なる分別するあらば、彼れ定んで愚癡にして「增」上慢なるに依る。」

心意識相品第三

爾の時廣慧菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、

『世尊よ、世尊の、(一)心意識の秘密〔の法門〕に於て、善巧なる菩薩と説きたまふが如き、〔その〕善巧なる菩薩とは、何に齊つて名けて心意識の秘密〔の法門〕に於て善巧なる菩薩と爲し、如來は、何に齊つて施設して、彼れを心意識の祕密〔の法門〕に於て善巧なる菩薩と爲したまふや。』

是の語を説き已るや、爾の時世尊、廣慧菩薩摩訶薩に告げて曰く、

『善い哉善い哉廣慧よ、汝今乃ち能く如來に是の如きの深義を請問す。汝今無量の衆生を利益し、安樂ならしめんと欲するが爲めに、世間及び諸の天人阿素洛等を哀愍して、義利安樂を獲得せしめんが爲めに斯の問ひを發せり。汝應に諦に聽くべし、吾れ當に汝が爲めに心意識の祕密の義を説くべし。廣慧よ當に知るべし、(二)六趣の生死に於て、彼彼の有情、彼彼の有情衆の中に墮し、或は卵生に在り、或は胎生に在り、或は濕生に在り、或は化生に在つて身分生起す。中に於て最初に(三)一切種子の心識成熟し、展轉

【一】心意識。心とは梵に質多(Citta)と云ひ集起の義なり、意とは梵に末那(Manas)と云ひ思量の義なり、識とは梵に毘若底(Vijñana)と云ひ了別の義なり。通じて言はば眼識等の八識各皆心とも意とも識とも名くれども別して言はば心とは第八阿頼耶識なり。諸法の種子を集起するが故に、本文に「一切種子の心識」と云へる是なり。意とは第七末那識なり、恒に審に思量して實我實法を執するが故に、本文終の頌に「分別し執して我と爲す」と云へる是なり。識とは眼識乃至意識の前六識なり麁境を了別するが故に、本文に「六識身」と云へる是なり。

和合し、増上廣大して二つの（四）執受に依る。一には有色の（五）諸根及び（六）所依「扶根」を執受し、二には（七）相、名、分別の言説戲論の（八）習氣「種子」を執受す。（九）有色界の中には「この」二つの執受を具す、（一〇）無色界の中には「この」二種を具せず。廣慧よ、此の識を亦た（一一）阿陀那識と名づく、何以ば此の識、身に於て隨逐「相續」し、「五根及扶根幷に諸法の種子を」執持するが故なり。亦た（一二）阿賴耶識と名づく。何以ば此識は身に於て、「諸法の種子を」攝受し、藏隱して、「身と」（一三）安危の義を同うするが故なり。（一四）亦た名けて心と爲す、何以ば、此識「ある」に由つて色聲香味觸等「の種子」積集し滋長す「ることを得」るが故なり。廣慧よ、阿陀那識を依止と爲し、建立と爲るが故に（一五）六識身轉「起」す「ることを

即ち八識を分ちて心、意、識の三となす。

【二】 六趣。即ち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道なり。趣とは業因に報い趣きし所の果なればなり。

【三】 一切種子の心識。八識の中、第八の阿賴耶識を云ふ。阿賴耶とは譯して藏と云ふ。諸法を現象せしむべき原因たる種子を攝藏すればなり。此の識體中に一切法の種子を集め藏むるが故に一切種子心識とも云ふなり、心とは集起の義なり。

【四】 執受。阿賴耶識の執受する境界なり、執とは執持なり受とは二種あり、一には覺受、二には領受なり、五の正根及び根の所依たる扶根は此を執り持ちて苦樂の覺知を受けしめ以て所緣の境となす、此を執り持ちて領受して失はず以て所緣の境となす。

【五】 諸根。阿賴耶識の對境たる五根即ち眼、耳、鼻、舌、身等の感覺機關及び神經中樞なり、此れ能く眼識、耳識、鼻識、舌識、身識の五識の緣慮作用を發せしむ。

【六】 所依。五根の所依たる扶根なり、即ち色、聲、香、味、觸の五境に組織せられたる血肉團なり、是れ能く五根を扶けて知覺あらしむ、是れ亦た阿賴耶識の所緣の對境なり。

【七】 相、名、分別。有漏無漏の諸法を分ちて五法となす。相、名、分別、正智、如如是れなり、前三は有漏なり、後二は無漏なり、有漏色心の境界を相となす、境相を詮表する語を言名とす、慮知の心心所を分別と云ふなり、無漏の心心所を正智と云ひ、之れが所證の眞如を如如となす。

得」、「六識身とは」謂く眼耳鼻舌身「の五」識と意識となり。此中識あり眼「根」及び色「境」を「若は所依若は所緣の」緣と爲して眼識を生ず、「その」眼識と倶に隨行し、同時同境に分別「明了」の意識ありて轉「起」す。識あり耳鼻舌身「の根」及び聲香味觸「の境」を「若は所依若は所緣の」緣と爲して耳鼻舌身の識を生ず、耳鼻舌身の識と倶に隨行して同時同境に分別の意識ありて轉「起」す。廣慧よ、若し爾の時に於て一の眼識轉ずれば、卽ち此時に於て唯だ一の分別意識のみあつて眼識と所行「の境」を同うして轉ず。若し爾の時に於て、二三四五の諸識身轉ずれば、卽ち此の時に於て唯だ一の分別意識のみあつて、「次第の如く二三四」五識身と所行を同うして轉ず。廣慧よ、譬へば大瀑水の流の、若し一浪の生ず

【八】 習氣。數習氣分の義なり卽ち八識中前七識の現象界より或は言說の事物を詮表する時(之を表義名言熏習と云ふ)或は心智の境界を緣慮する時(之を顯境名言熏習と云ふ)隨應に根本阿頼耶識の中に熏習したる色心の氣分なり、此の氣分復た能く後時に色心諸法の果を開展現象すべき原因なるが故に之れを名けて種子と云ふ。

【九】 有色界。三界の中欲界及び色界を總稱して有色界と云ふ、欲界とは啻に色形あるのみならず婬と食との貪欲未だ離るる能はざる世界なり、色界とは婬欲、食欲は已に解脫し起さざれども猶ほ身體及住所の色形の在る有るを以て色界と云ふ。

【一〇】 無色界。欲色界の如き總て色形を出離し唯無形の心法のみ殘存せる有情界を言ふ。

【一一】 阿陀那識(Ādāna)第八識の一名にして譯して執持識と云ふ、此識は(一)五色根を執持して壞せざらしめ、(二)諸法の種子を執持して失はず、(三)能く自身を執持して結生相續せしむるが故に執持識と云ふ。

【一二】 阿頼耶識(Ālaya)第八識の一名にして、藏と譯す、藏に三義あり、(一)能藏、能く諸法の種子を攝藏するが故に。(二)所藏、前七識の現行に種子を薰藏せらるゝが故に。(三)執藏、第七末那識のために自我なりと執著せらるゝが故に、この三義に由り藏識と云ふ。

【一三】 安危の義を同うす。死生苦樂を共にす。常に相離れざるの意。

【一四】 亦名けて心。第八識の一名なり、梵に質多(Citta)と云ひ譯して心と云ふ、集起の義

る縁現前することあれば唯だ一浪のみ轉じ、若しは二〔浪〕若しは多浪の生ずる縁現前すれば、〔若しは二浪若しは〕多浪轉ずることあり、然かも此瀑水の自類は恒に流れて、斷ずること無く、盡くること無きが如く、又た善淨の鏡面の、若し一影の生ずる縁現前することあれば、唯だ一影のみ起り、若しは二若しは多くの影の生ずる縁現前すれば〔若しは二若しは〕多くの影起ることあり、〔然も〕此の鏡面轉變して影と爲るに非ず、亦た受用滅盡すること得べき無きが如し。是の如く、廣慧よ、瀑流に似たる阿陀那識を依止と爲し、建立と爲るに由るが故に、若し爾の時に於て、一の眼識の生ずる縁現前することあれば、卽ち此時に於て一の眼識轉じ、若し爾の時に於て、乃至五識身の生ずる縁現前することあれば、卽ち此時に於て五識身轉ず。廣慧よ、是の如く菩薩は、（一六）法住智を依止と爲し建立と爲るに由るが故に、心意識の祕密に於て善巧なりと雖も、然かも諸の如來は此に齊りて施設して、彼れを心意識の一切の祕密に於て善巧なる菩薩と爲さず。廣慧よ、若し諸の菩薩、內に於て各別に、如實に、阿陀那〔の用〕を見ず、阿陀那識〔の體〕を見ず、阿賴耶〔の用〕を見ず、阿賴耶識〔の體〕を見ず、積集〔の用〕を見ず、心〔の體〕を見ず、眼〔根〕、色〔境〕及び眼識を見ず、耳〔根〕、聲〔境〕及び耳識を見ず、鼻〔根〕、香〔境〕及び鼻識を見ず、舌〔根〕、味〔境〕及び舌識を見ず、身〔根〕、觸〔境〕及び身

なり、阿賴耶識中に諸法色心の種子集起するを云ふ。

【一五】六識身。八識中の前六なり。（一）眼識、視覺の心なり。（二）耳識、聽覺の心なり。（三）鼻識、嗅覺の心なり。（四）舌識、嘗覺の心なり。（五）身識、觸覺の心なり。（六）意識なり。

【一六】法住智。如來の敎法に依りて法門を安立施設するの智なり。

識を見ず、意〔根〕、法〔境〕及び意識を見ざるを、是れを勝義善巧なる菩薩と名く、如來は施設して彼れを勝義善巧の菩薩と爲す。廣慧よ、此に齊りて名づけて、心意識の一切の祕密に善巧なる菩薩と爲す、如來は此に齊つて施設して、彼れを心意識の一切の祕密に於て善巧なる菩薩と爲す。』

爾の時世尊は、重ねて此義を宣べたまはんと欲して、頌を說いて曰はく、

『阿陀那識は甚だ深細なり、一切の種子は瀑流の如し。
我れ凡と愚とに於ては開演せず、恐らくは彼れ分別し執して（一七）我と爲んことを。』

【一七】我、是第七末那識の行相なり、末那とは此に譯して意と云ふ・意とは恒に審に思量するの義なり。此の第七識計度分別を起し彼の瀑流の如き常恒相續の第八阿賴耶識の見分を常恒に審に思量し是れ實の我なり是れ實の法なりと執謂す。

卷の第二

一切法相品第四

爾の時德本菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、

『世尊よ、世尊の（一）諸法の相に於て善巧なる菩薩と說きたまふが如き、諸法の相に於て善巧なる菩薩とは、何に齊りて名けて諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲し、如來は何に齊つて施設して、彼れを諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲したまふや。』

是の語を說き已るや、爾の時世尊、德本菩薩に告げ曰はく、

『善い哉、德本よ、汝今乃ち能く如來に是の如きの深義を請問す。汝今無量の衆生を利益し、安樂ならしめんと欲するが爲め、世間及び諸の天人、阿素洛等を哀愍して、義利安樂を獲得せしめんが爲めの故に斯の問ひを發す。汝よ應に諦に聽くべし、吾れ當に汝が爲めに諸法の相を說くべし。諸法の相に略して三種あり、何等をか三と爲すや、一には（二）遍計所執相、

【一】諸法の相。萬有諸法の若しくは體相若しくは相狀。

【二】遍計所執相。有漏の第六第七の二識が虛妄に分別して五蘊十二處十八界の我にも法にも非るものに向て周遍計度して實我なり實法なりとする執相を云ふ、是れ唯妄情の前に當りて現はれたる似有の相なるのみ、理として實有なる無し、故に當情現の相とも或は情有理無の法とも云ふ。

【三】依他起相。卽ち是れ因緣に爲作せられたる現象界の有爲法なり、是れ他の衆緣に依りて生起したる法なるが故に

二には、(三)依他起相、三には(四)圓成實相なり。云何んが諸法の遍計所執相なるや、謂く一切法の名「言」假安立の(五)自性と差別となり、乃至言說を隨起せしむるが爲め「に爾か」なり。云何んが諸法の依他起相なるや、謂く一切法の「衆」緣「に依りて」生「起」せる自性なり。則ち此れ有るが故に彼れ有り、此れ生ずるが故に彼れ生ず。謂く(六)無明は(七)行に緣たり、乃至(八)純大苦蘊を招集す。云何んが諸法の圓成實相なるや、謂く一切「差別」法の「所依たる」平等「一味の」眞如なり。此眞如に於て、諸の菩薩衆勇猛精進を因緣と爲るが故に、如理の作意、無「顚」倒の思惟を因緣と爲るが故に乃ち能く通達す。此の通達に於て漸漸に修習し、乃至無上正等菩提を方さに證すること圓滿なり。善男子よ、(九)眩翳の人の眼中に有る所の眩翳の過患の如く、遍計所執相も當に知るべし、亦た爾りと。眩翳の人の眩翳の衆相の、或は(一〇)髮毛、輪、蜂蠅、(一一)苣藤、或は復た靑黃赤白等の相、差別現前するが如く、依他起相も當に知るべし亦た爾りと。淨眼の人の、眼中の眩翳の過患を遠離し、卽ち此の淨眼本性の所行に亂れたる境界無きが如く、圓成實相も當に知るべし亦た爾りと。善男子よ、譬へば淸淨の(一二)頗胝迦寶の

依他起と云ふ、生ずるが故に滅あり、生滅無常なるが故に如幻假有なり。

【四】圓成實相。卽是れ萬有の本體たる眞如なり、萬象一として眞如ならざるなし、卽ち體遍じて圓滿し、永く生滅を絕して常に成就せる、諸法の眞實性なるが故に圓成實と云ふ。

【五】自性と差別。自性とは色聲香等諸法の自體なり、差別とは體の上の無常無我等種種の別義なり。

【六】無明。卽ち癡煩惱なり。暗愚にして眞理を見る智の明なきを以て無明と云ふ。是れ實に生死輪廻の根源たり。十二因緣の第一支なり。

【七】行。業なり、身口意善惡の業なり。無明に依つて起る所、十二因緣の第二支なり。

【八】純大苦蘊。苦蘊とは五蘊

若し青染色と合するときは、則ち〔一三〕帝〔釋天の羅網の〕青〔及〕大青なる末尼寶の像に似たるのみなるに、邪に〔實の〕帝〔釋天の〕青〔及〕大青なる末尼寶なりと執取するに由るが故に有情を惑亂し、若し赤染色と合するときは、則ち琥珀の末尼寶の像に似たるのみなるに、邪に〔實の〕琥珀の末尼寶なりと執取するに由るが故に有情を惑亂し、若し綠染色と合するときは、則ち〔一四〕末羅羯多の末尼寶の像に似たるのみなるに、邪に〔實の〕末羅羯多の末尼寶なりと執取するに由るが故に有情を惑亂し、若し黄染色と合するときは、則ち金の像に似たるのみなるに、邪に〔實の〕眞金の像なりと執取するに由るが故に有情を惑亂するが如く、是の如く德本よ、彼の清淨なる頗胝迦の上の所有染色相應するが如く、依他起相の上の遍計所執相の言説習氣も當に知るべし亦た爾りと。彼の清淨の頗胝迦の上の所有帝青、大青、琥珀、末羅羯多、〔及び〕金等の〔一五〕邪執の如く、依他起相の上の遍計所執相の執〔著〕も當に知るべし亦た爾りと。彼の清淨なる頗胝迦寶の如く、依他起相も當に知るべし亦た爾りと。彼の清淨なる頗胝迦の上の所有帝青大青、琥珀、末羅羯多〔及び〕眞金等の相の、常常の時に於て、恒恒の時に於て眞實あること無く、無自

和合生なる苦果の身なり、即十二因緣中第十一の生支、第十二の老死支なり、我及我所なきが故に純と云ひ、無始無終なるが故に大と云ふ。

【九】眩翳の人。眼病の者。

【一〇】髪毛輪。病眼の前に其物無きに空中に現はるる髪毛の相又は旋火輪の相。

【一一】苣藤。梵に阿提目多伽(Atimuktaka)と云ふ、胡麻なり。

【一二】頗胝迦寶(Sphaṭika)。此に水玉或は白珠と云ふ、赤白等種種色彩の物ありと云ふ。今は白色なるを擧ぐ。

【一三】帝青。帝釋天の寶冠を飾れる羅網の青き寶石なり。

【一四】末羅羯多(Marakata)。綠色の寶玉、能く毒を避く。

【一五】邪執。不正なる妄執なり。

性の性あるが如く。卽ち依他起相の上に遍計所執相「ある」に由つて、常常の時に於て、恆恆の時に於て、眞實あること無き無自性の性なる圓成實相も當に知るべし亦た爾りと。復た次に德本よ、(二六)相と名と相應するを以て緣とするが故に、遍計所執の相を而かも了知すべし。依他起相の上の遍計所執相の執「の妄熏習力」を以て緣とするが故に、依他起の相を而かも了知すべし。依他起相の上に遍計所執相の執の無なるを以て緣とするが故に、圓成實の相を而かも了知すべし。善男子よ、若し諸の菩薩能く諸法の依他起相の上に於て、如實に遍計所執相を了知すれば、卽ち能く如實に一切無「自性」相の法を了知す。若し諸の菩薩如實に依他起相を了知すれば、卽ち能く如實に一切雜染相の法を了知す。若し諸の菩薩如實に圓成實相を了知すれば、卽ち能く如實に一切清淨相の法を了知す。善男子よ、若し諸の菩薩能く依他起相の上に於て、如實に無相の法を了知すれば、卽ち能く雜染相の法を斷滅す。若し能く雜染相の法を斷滅すれば、卽ち能く清淨相の「涅槃の果」法を證得す。是の如く德本よ、諸の菩薩如實に遍計所執相、依他起相、圓成實相を了知するに由るが故に、如實に諸の無相の法、雜染相の法、清淨相の法を了知す。如實に無相の法を了知するが故に、一切雜染相の法を斷滅す。一切雜染相の法を斷滅するが故に、一切清淨相の法を證得す。此に齊て名けて諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲す。如來は此れに齊て施設して、彼れを諸法の相に於て善巧なる菩薩と爲す。』

【二六】相と名と。相とは言說に詮顯せらるる相、名とは相を能く詮する名言なり、此能詮所詮の二互に屬著して實有の執を起すなり。

爾の時世尊は、重ねて此義を宣べんと欲して、頌を説いて曰はく、

『若し無相の法を了知せざれば、雜染相の法を斷ずること能はず。雜染相の法を斷ぜざるが故に、微妙(眞如)淨相の法を證することを壞す。

諸行の衆の過失を觀ぜざれば、放逸の過失は衆生を害ひ、

(一七)懈怠は(一八)住法と(一九)動法との中(二〇)無にし有にして失壞す、憐愍すべし。』

【一七】懈怠。怠惰にして定を修することを爲さす、是れ過失の因、功德の障りなり。

【一八】住法。常住不滅の涅槃を云ふ。

【一九】動法、生死流轉の法を云ふ。

【二〇】無にし有にし云云。涅槃の住法無く、生死の動法有るに由り淨相を失壞す、是の故に憐愍すべし。

無自性相品第五

爾の時勝義生菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、

『世尊よ、我れ曾し獨り靜處に在つて、心に是の如き尋思を生じき。世尊は無量の門を以て(一)曾つて、諸蘊に有る所の(二)自相、生相、滅相、(三)永斷、(四)偏知〔等〕を說きたまふ。諸蘊を說きたまへるが如く、諸の〔十二〕處、〔十二〕緣起〔及び〕諸の〔四〕食も亦た爾か〔說きたまふ〕。無量の門を以て曾つて、諸諦に有る所の自相、偏知、永斷、(五)作證〔及び〕(六)修習を說きたまふ。無量の門を以て曾つて、諸界に有る所の自相、(七)種種界性、(八)非一界性、永斷〔及び〕偏知を說き玉ふ。無量の門を以て(九)曾つて、〔四〕念住に有る所の自相、能治所治、及び修習の未生なるは生ぜしめ、生じ已れるは堅住し忘れずして倍々修し〔愈々〕增長廣大なるを說きたまふ。念住を說きたまへるが如く、〔四〕正斷、〔四〕神足、〔五〕根、〔五〕力、

【一】曾つて云云。阿含部四諦の敎なり。

【二】自相。自己の體相卽ち個性を持ちて失はず、青色は自ら青にして黃等に非ず、黃色は自ら黃にして青等に非ず、是の如く色法は是れ質礙の性にして了別の心法に非ず、心法は是れ了別の性にして質礙の色等に非ず、諸法各自の個性に局ぎり他に貫通せざるを自相と云ふ。

【三】永斷。永く集諦卽ち煩惱業を斷ず。

【四】偏知。偏く苦諦卽ち生死の果を知る。

【五】作證。滅諦卽ち涅槃を證る。

【六】修習。無漏道諦を修習す。

【七】種種界。十八界は互に異相あるを云ふ。

【八】非一界。十八界は無量有情の所依として差別非一なるを云ふ。

【九】曾つて云云。般若部空門の敎なり。

〔七〕覺支も亦た復た是の如く〔說きたまふ〕。無量の門を以て佮つて、八支聖道に有る所の自相、能治所治、及び修習の未生なるは生ぜしめ、生じ已れるは堅住し、忘れずして倍々修し〔愈々〕増長廣大なるを說きたまふ。世尊は復た、一切諸法は皆な無自性なり、無生無滅なり、〔一〇〕本來寂靜なり、自性涅槃なりと說きたまふ。未審、世尊よ、何の密意に依つて是の如く、一切諸法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりと說くことを作したまふや。我れ今如來に斯の義を請問し〔奉る〕。惟だ願はくは如來よ、哀愍して、一切法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりと說きたまふ有らゆる密意を解釋したまへ。」

爾の時世尊は、勝義生菩薩に告げ曰く、

『善い哉、善い哉、勝義生よ、汝が尋思する所甚だ如理と爲す。善い哉、善い哉、善男子よ、汝今乃ち能く如來に是の如きの深義を請問す。汝今、無量の衆生を利益し、安樂ならしめんと欲するが爲め、世間及び諸の天人、阿素洛等を哀愍して、義利安樂を獲得せしめんが爲めの故に斯の問ひを發す。汝應に諦に聽くべし、吾れ當に汝が爲めに、〔佮つて〕說きし所の一切諸法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりといふ有らゆる密意を解釋すべし。勝義生よ、當に知るべし、我れ〔一一〕三種の無自性性に依つて、密

【一〇】本來寂靜。絶對離言の眞如は本來自爾として生滅等の戲論を絶せる寂靜の理體なり、智、惑を斷じ去りて方に寂靜なるに非ず、客塵に覆はるるも染せらるゝなく自性清淨なり、之を本來自性清淨涅槃と云ふ。

【一一】三種の無自性。三性に依

意を以て說いて一切諸法皆無自性なりと言ひしことを。〔三種の無自性性とは〕所謂相無自性性、生無自性性〔及び〕勝義無自性性なり。善男子よ、云何が諸法の相無自性性なるや、謂く諸法の遍計所執相なり。何以ば、此れは假名に由つて安立して相を爲す、自相に由つて安立して相を爲すに非ず、是の故に說いて相無自性性と名づく。云何が諸法の生無自性性なるや、謂く諸法の依他起相なり。何以ば、此れは他の緣力に依るに由るが故に有なり、自然に有なるに非ず、是の故に說いて生無自性性と名づく。云何んが諸法の勝義無自性性なるや、謂く諸〔の依他の〕法は生無自性性に由るが故に說いて無自性性と名づく、卽ち緣生〔依他起性の〕法をも、亦た勝義無自性性と名づく、何以ば、諸〔の依他〕の法の中に於て、若し是れ淸淨〔無漏の後得智〕の所緣の境界なるは、我れ彼れを顯示して以て勝義無自性性と爲す、〔又〕依他起相は是れ淸淨〔無漏の根本智〕の所緣の境界に非ざれば、是の故に亦た說いて名けて勝義無自性性と爲す。復た諸法の圓成實相あり、〔これをも〕亦た勝義無自性性と名づく。何以ば、一切諸法の法無我性を名けて勝義と爲し、亦た名けて無自性性と爲すことを得、是れ一切法の勝義諦なり、無自性性の所顯なればなり。此の因緣に由つて名けて勝義無自性性と爲す。善男子よ、譬へば空華の如く相無自性性も當に

て三無性を立つ。第一の相無性は遍計所執性に依て立つ、所執の實我實法は體相畢竟して有に非るを相無性となす。第二の生無性は依他起性に依りて立つ、依他因緣生の法は因緣、等無間緣、所緣緣、增上緣の四緣に假託して方に生ず、執する如き自然に生ずること無き性なるを生無性となす。第三の勝義無性は圓成實性に依て立つ、勝義の眞如は我法二執の無き所に顯はるるを勝義無性となす。

知るべし亦た爾るを。譬へば幻像の如く生無自性性も當に知るべし亦た爾るを。一分の勝義無自性性も當に知るべし亦た爾るを。譬へば虛空は惟だ是れ衆色の無なる性に顯はされて、一切處に徧ずるが如く、一分の勝義無自性性も當に知るべし亦た爾るを。法無我性に顯はさるるが故に、一切に徧ずるが故なり。善男子よ、我れは是の如き三種の無自性性に依りて密意を以て說いて一切諸法皆無自性と言ひき。勝義生よ、當に知るべし我れは相無自性性に依りて、密意を以て說いて一切諸法は無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりと言ひき。何以ば、若し法の自相都て所有無ければ則ち生あること無し、若し生あること無ければ則ち滅あること無し、若し無生無滅なるときは則ち本來寂靜なり、若し本來寂靜なるときは則ち自性涅槃なり、中に於て都て少分の所有も更に其れをして〔三〕般涅槃せしむべき〔もの〕無ければなり。是の故に我れは相無自性性に依つて、密意〔を以て〕說いて、一切諸法は無生無滅なり、本來寂靜なる自性涅槃なりと言ひき。善男子よ、我れは亦た法無我性に顯はされたる勝義無自性性に依つて、密意〔を以て〕說いて、一切諸法は無生無滅なり、本來寂靜なる自性涅槃なりと言へり。何以ば、法無我性に顯はされたる勝義無自性性は、常常の時に於て、恒恒の時に於て、諸法の法性安住して無爲なり、一切の雜染相應せざるが故に、常常の時に於て、恒恒の時に於て、諸法の法性安住するが故に無爲なり、無爲に由るが故に無生無滅なり、一切の雜染相應せざるが故に本來寂靜なる自性涅槃なればなり。是

【三】般涅槃。涅槃に入ること。

意を以て説いて一切諸法皆無自性なりと言ひしことを。[三種の無自性性とは] 所謂相無自性性、生無自性性[及び]勝義無自性性なり。善男子よ、云何が諸法の相無自性性なるや、謂く諸法の遍計所執相なり。何以ば、此れは假名に由つて安立して相を爲す、自相に由つて安立して相を爲すに非ず、是の故に説いて相無自性性と名づく。云何が諸法の生無自性性なるや、謂く諸法の依他起相なり。何以ば、此れは他の縁力に依るに由るが故に有なり、自然に有なるに非ず、是の故に説いて生無自性性と名づく。云何んが諸法の勝義無自性性なるや、謂く諸[の依他の]法は生無自性性に由るが故に説いて無自性性と名づく、即ち縁生[依他起性の]法をも、亦た勝義無自性性と名づく、何以ば、諸[の依他]の法の中に於て、若し是れ清淨[無漏の後得智]の所縁の境界なるは、我れ彼れを顯示して以て勝義無自性性と爲す、[又]依他起相は是れ清淨[無漏の根本智]の所縁の境界に非れば、是の故に亦た説いて名けて勝義無自性性と爲す。復た諸法の圓成實相あり、[これをも]亦た勝義無自性性と名づく。何以ば、一切諸法の法無我性を名けて勝義と爲し、亦た名けて無自性性と爲すことを得、是れ一切法の勝義諦なり、無自性性の所顯なればなり。此の因縁に由つて名けて勝義無自性性と爲す。善男子よ、譬へば空華の如く相無自性性も當に

て三無性を立つ。第一の相無性は遍計所執性に依て立つ、所執の實我實法は體相畢竟して有に非るを相無性となす。第二の生無性は依他起性に依りて立つ、依他因縁生の法は因縁、等無間縁、所縁縁、増上縁の四縁に假託して方に生す、執する如き自然に生すること無き性なるを生無性となす。第三の勝義無性は圓成實性に依て立つ、勝義の眞如は我法二執の無き所に顯はるるを勝義無性となす。

知るべし亦た爾るを。譬へば幻像の如く生無自性性も當に知るべし亦た爾るを。一分の勝義無自性性も當に知るべし亦た爾るを。譬へば虚空は惟だ是れ衆色の無なる性に顯はされて、一切處に徧ずるが如く、一分の勝義無自性性も當に知るべし亦た爾るを。法無我性に顯はさるるが故に、一切に徧ずるが故なり。善男子よ、我れは是の如き三種の無自性性に依りて密意を以て說いて一切諸法皆無自性と言ひき。勝義生よ、當に知るべし我れは相無自性性に依りて、密意を以て說いて一切諸法は無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりと言ひき。何以ば、若し法の自相都て所有無ければ則ち生あること無し、若し生あること無ければ則ち滅あること無し、若し無生無滅なるときは則ち本來寂靜なり、若し本來寂靜なるときは則ち自性涅槃なり、中に於て都て少分の所有も更に其れをして(三)般涅槃せしむべき「もの」無ければなり。是の故に我れは相無自性性に依つて、密意「を以て」說いて、一切諸法は無生無滅なり、本來寂靜なる自性涅槃なりと言ひき。善男子よ、我れは亦た法無我性に顯はされたる勝義無自性性に依つて、密意「を以て」說いて、一切諸法は無生無滅なり、本來寂靜なる自性涅槃なりと言へり。何以ば、法無我性に顯はされたる勝義無自性性は、常常の時に於て、恒恒の時に於て、諸法の法性安住して無爲なり、一切の雜染相應せざるが故に、常常の時に於て、恒恒の時に於て、諸法の法性安住するが故に無爲なり、無爲に由るが故に無生無滅なり、一切の雜染相應せざるが故に本來寂靜なる自性涅槃なればなり。是

【三】 般涅槃。 涅槃に入ること。

の故に我れ法無我性に顯はされたる勝義無自性性に依つて、密意〔を以て〕說いて、一切諸法は無生無滅なり、本來寂靜なる自性涅槃なりと言へり。

復た次に勝義生よ、有情界の中諸の有情の類、別に遍計所執の自性を觀じて、自性と爲るに由るが故に、亦た彼れ別に依他起の自性及び圓成實の自性を觀じて、自性と爲るに由るが故に我れ三種の無自性性を立つるに非ず。然るに有情は依他起の自性及び圓成實の自性の上に於て、遍計所執の自性を(一三)增益するに由るが故に我れ三種の無自性性を立つ。遍計所執の自性の相に由るが故に、彼の諸の有情は、依他起の自性及び圓成實の自性の中に於て言說を隨起し、〔是の〕如く〔是の〕如くに言說を隨起す。是の如く、是の如く(一四)言說熏習の心に由るが故に、(一五)言說隨覺に由るが故に、(一六)言說隨眠に由るが故に、依他起の自性及び圓成實の自性の中に於て、遍計所執の自性の相に執著す。〔是の〕如く〔是の〕如くに執著して、是の如く、是の如く、依他起の自性及び圓成實の自性の上に於て、遍計所執の自性に執著す。是の因緣に由つて、當來世の依他起の自性を生ず。此の因緣に由つて或は(一七)煩惱雜染の爲めに染〔汚〕せられ、或は(一八)業雜染の爲めに染〔汚〕

【一三】增益。所執の實我實法の種種相は現實には無きに而も妄りに有りとするを云ふ。

【一四】言說熏習とは三熏習の中の名言熏習なり、第六意識が自ら言說を發し、若しくは他の言語を聞き、色心諸法の種子或は是非好惡等の種子を阿賴耶識中に熏習印象するを言說熏習と云ふ。

【一五】言說隨覺とは人天等が言語を媒介として分別覺知するを云ふ

【一六】言說隨眠とは牛羊等が言語を解せず只だ言說の隨眠種子の力に由つて計度するを云ふ。隨眠とは種子なり、阿賴耶識中に眠伏して未だ現象せざるの意。

【一七】煩惱雜染。煩惱はそれ自ら雜染なり。

【一八】業雜染。善惡の業は亦た無明煩惱の發する所なれば雜

せられ、或は（一九）生雜染の爲めに染〔汚〕せられ、生死の中に於て長時に馳騁し、長時に流轉して休息あること無く、或は（二〇）那洛迦に在り、或は（二一）傍生〔趣〕に在り、或は餓鬼〔趣〕に在り、或は天上〔界〕に在り、或は阿素洛〔趣〕に在り、或は人中に在つて諸の苦惱を受くるなり。復た次に勝義生よ、若し諸の有情、本より已來、未だ善根を種ゑず、未だ〔惑〕障を淸淨にせず、未だ相續を成熟せず、未だ多く勝解を修せず、未だ福德智慧二種の資糧を積集すること能はず。我れ彼れが爲めの故に、生無自性性に依つて諸法を〔不生不滅等なりと〕宣說す。彼れ是〔生無自性の說法なる〕を聞き已つて、能く、一切緣生の〔有爲〕行の中に於て、分に隨つて、無常なり、無恒なり、是れ不安穩にして變壞の法なりと解了し已つて、一切の行に於て心に怖畏を生じ、深く厭患を起せり。心に怖畏を生じ、深く厭患し已つて諸惡を遮止し、諸の惡法に於て能く造作せず、諸の善法に於て能く勤めて修習す。善因を〔修〕習するが故に、〔十信以前の位には〕未だ善根を種ゑざるをば能く善根を種ゑ、〔十信の位には〕未だ〔惑〕障を淸淨にせざるをば能く淸淨ならしめ、〔十解の位には〕未だ相續を成熟せざるをば能く成熟せしめたり。此の因緣に由つて〔十行の位には〕多く勝解を修し、〔十回向の位には〕亦た多く福德智慧二種の資糧を積集す。彼れ是の如く諸の善根を種ゑ、乃至福德智慧二種の資糧を積集すと雖も、然かも生無自性性の中に於て、未だ如實に相無自性性及び

染なり。

【一九】生雜染。生の苦果は煩惱に業染せらる、是れ亦た雜染なり。

【二〇】那落迦（Naraka）。不可樂と譯す。地獄なり。

【二一】傍生。畜生のこと。傍生は橫行の意。

(二二)二種の勝義無自性性を了知すること能はず、一切の行に於て未だ能く正しく厭はず、未だ正しく欲を離れず、未だ正しく解脱せず、未だ徧く煩惱雜染を解脱せず、未だ徧く諸の業雜染を解脱せず、未だ徧く諸の生雜染を解脱せず。如來は彼れが爲めに更に法要を説きたまふ、謂はく相無自性性及び勝義無自性性なり。其れをして、一切の行に於て能く正しく厭はしめ、正しく欲を離れしめ、正しく解脱せしめ、一切の煩惱雜染を超過せしめ、一切の業雜染を超過せしめ、一切の生雜染を超過せしめんと欲するが爲めの故なり。彼れ是の如き所説の〔相無性及勝義無性〕法を聞き已つて、生無自性性の中に於て、能く正しく相無自性性及び勝義無自性性を信解し、〔煗頂の位には〕(二三)揀擇し思惟し、〔忍世第一法の位には〕(二四)如實に通達す。〔歡喜地以上には〕依他起の自性の中に於て、能く遍計所執の自性の〔我法實有の〕相に執著せず。(二五)言説不熏習の智に由るが故に、(二六)言説不隨覺の智に由るが故に、(二七)言説離隨眠の智に由るが故に、能く依他起相〔の惑業〕を滅し、現法の中に於て〔三の方便〕智の力に持せられ、〔根本智〕能く永く當來世〔苦果〕の因〔たる惑業の種子〕を斷滅す。此の因緣に由つて一切の行に於て、能く正しく厭患し、能く正しく離欲し、能く正しく解脱し、能く徧ねく煩惱、業、生の三種の雜染を解脱す。復た次に勝義生よ、諸の聲聞乘種性の有

【二二】二種の勝義無性。依他起性の勝義無性と圓成實性の勝義無性となり。

【二三】揀擇し思惟す。四善根位中の煗位頂位の四諦思觀。

【二四】如實に通達す。忍位世第一法位の四如實智觀。

【二五】言説不熏習の智。名言に執著し熏習せざるの智。

【二六】言説不隨覺の智。名言に隨て分別覺を起さざるの智。

【二七】言説離隨眠の智。名言に由て熏ぜし種子を已に斷ぜる

情亦た(二八)此の[三無自性]道、此の行迹に由るが故に、無上安穩の涅槃を證得す。諸の獨覺乘種性の有情[及び]諸の如來乘種性の有情も亦た此の道、此の行迹に由るが故に、無上安穩の涅槃を證得す。一切の聲聞、獨覺[及び]菩薩皆此の(二九)一妙淸淨の[無自性の]道を共にし、皆此の(三〇)一究竟淸淨[の果]を同うし、更に第二[乘]無し。我れ此[道一果一なるもの]に依るが故に、[方便](三一)密意を以て說いて、惟だ一乘ありと言ふ。一切有情界の中に於て、種種なる有情の種性あること無きには非ず。或は鈍根性、或は中根性、或は利根性有情の差別あり。善男子よ、若し(三二)一向趣寂の聲聞種性の補特伽羅は、諸佛の施設したまふ種種なる勇猛の加行方便の化導を蒙ると雖も、終に當に道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を證得せしむること能はず。何以ば、彼れ本來唯だ下劣種性のみあり、一向に慈悲薄弱なり、一向に衆苦を怖畏すればなり。彼れ一向に慈悲薄弱なるに由るが故に、一向に諸の衆生を利益する事を棄背し、彼れ一向に衆苦を怖畏するに由るが故に、一向に諸行を發起する所作を棄背す。我れ終に、一向に衆生を利益する事を棄背する者と、一向に諸行を發起する所作を棄背する者とをば、

が故に更に執著せざるの智。

【二八】此の道此の行迹。無漏淸淨法は、之を行ずれば能く涅槃の果に通ずるが故に道と云ひ、又學者の遊履する所なれば亦行迹と云ふ。

【二九】一妙淸淨の道。聲聞緣覺の二乘も菩薩も涅槃を證得する道は若しは生空若しは生法二空の觀門にして、ともに同一の無自性觀の道なり、故に三乘即一乘の道なり。

【三〇】一究竟淸淨。三乘同く本來自性淸淨涅槃に住し、ともに眞如理佛法身なり、故に三乘即一佛乘の果なり。

【三一】密意を以て說いて。法華等の一乘教を說くなり。

【三二】一向趣寂の聲聞。五種姓とて有情の機根に、(一)聲聞定姓、(二)緣覺定姓、(三)菩薩定姓、(四)不定姓、(五)無性有情の五種ある中菩薩と不定姓と

當に道場に坐して能く阿耨多羅三藐三菩提を得べしとは說かず。是の故に彼を說いて名けて一向趣寂の聲聞と爲す。若し（三三）迴向菩提の聲聞種性の補特伽羅をば、我れ亦異門を以て說いて菩薩とも爲す。何以ば、彼れ既に煩惱障を解脫し已つて、若し諸佛等の覺悟を蒙る時は、所知障に於て其の心亦た當に解脫を得べければなり。〔されど〕彼れ最初に自らの利益の爲めに、加行を修行し、煩惱障を脫するに由て、是の故に如來は彼れを施設して聲聞種性と爲す。復た次に勝義生よ、是の如く、我が（三四）善說、善制法、毗奈耶〔等〕、最極清淨の意樂を以て、說く所の善教法の中に於て、諸の有情類の意解・種種差別の得べきあり。善男子よ、如來は但だ是の如き三種の無自性性に依つて、深き密意に由つて、宣說する所の（三五）不了義經に於て、隱密の相を以て諸の法要を說く。謂く一切法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜の自性涅槃なりと。是の經の中に於て若しは諸の有情已に上品の善根を種ゑ、已に諸障を淸淨にし、已に相續を成熟し、已に多く勝解を修し、已に能く上品の福德智慧の資糧を積集するあり。彼れ若し是の如きの法を聽聞し已れば、我が甚深密意の言說に於て如實に解了

は成佛すれども、餘の三は不成佛なり。就中聲聞緣覺の二乘は志小にして僅かに阿羅漢を以て究竟の果とし寂なる無餘涅槃に趣入するを目的とす。故に趣寂と云ふ。

【三三】迴向菩提の聲聞。五種姓の中不定姓の一類は聲緣菩三乘の種子を具する根機にして初め聲聞たりしもの後に迴心して菩薩と成るもの、或は初め緣覺たりしもの後に迴心して菩薩と成るもの、或は初め聲聞より轉じて緣覺に入り更に一轉して後菩薩と成るもの。何れも皆遂には成佛得道し、涅槃のみならず、菩提をも求むるなり。斯く迴心して菩提をも求むる聲聞を迴向菩提の聲聞と云ふ。定姓趣寂のものの一向涅槃のみ欣求し、更に菩提を希はざるに同からず。

【三四】善說等。三藏教を云ふ。

し、是の如き法に於て深く信解を生じ、是の如き義に於て無倒の慧を以て如實に通達し、此の通達に於て善く修習するが故に、速疾に能く【三六】最極究竟を證し、亦た我が所に於て深く淨信を生じ、是れ如來の應正等覺にして一切法に於て現に正等覺すと知る。若しくは諸の有情已に上品の善根を種ゑ、已に諸障を清淨にし、已に相續を成熟し、已に多く勝解を修するも、未だ上品の福德智慧の資糧を積集すること能はず、其の性質直なり、［或は］是れ質直の類にして思擇廢立するに力能無しと雖も、而かも【三七】自の見取の中に安住せざるあり。彼れ若しくは是の如き法を聽聞し已れば、我が甚深祕密の言說に於て、如實に解了するに力能無しと雖も、然かも此法に於て能く勝解を生じ、清淨の信を發し、「此經典は是れ如來の說なり、是れ其れ甚深なり。［分明に］顯現して甚深なり、空性［の義と］相應し、見難く、悟り難く、尋思すべからず、諸の尋思所行の境界に非ず、微細詳審なる聰明智者の解了する所なり」と信じ、此經典に說く所の義の中に於て自らを輕ろんじ而も住し、是の如きの言を作さく、「諸佛の菩提は最も甚深なりと爲し、諸法の法性も亦た最も甚深なり、惟だ佛如來のみ能く善く了達したまふ、是れ我等が能く解了する所に非ず、諸佛如來は彼の種種なる勝解の有情の爲めに、正法教を轉じたまふ、諸佛如來は無邊の智見あり、我等が智見は牛跡の如し」と。此の經典に於て能く恭敬し、他の爲めに宣說

善說とは素怛纜（Sūtra）經藏、善制法とは、阿毘達磨（Abhidharma）論藏、毘奈耶（Vinaya）律藏なり。

【三五】不了義經　未だ了了顯說せず理を盡さざる方便の經、即ち般若皆空の教なり。

【三六】最極究竟　佛果なり。

【三七】自の見取　自己の劣見を取て勝れたりと執する見惑。

し、書寫し、護持し、披閱し、流布し、慇重に供養し、受誦し、溫習すと雖も、然れども猶ほ未だ其の修相を以て　(三八)加行を發起すること能はず。是の故に我が甚深密意の所說の言辭に於て通達すること能はず。〔然れども〕此因緣に由つて、彼の諸の有情亦た能く福德智慧二種の資糧を增長し、後の相續に於て、未だ成熟せざる者も亦た能く成熟す。若しくは諸の有情、廣說乃至、未だ上品の福德智慧の資糧を積集すること能はず、性質直に非ず、質直の類にも非ず、思擇廢立する力能ありと雖も、而かも復た自の見取の中に安住するあり。彼れ若し是の如きの法を聽聞し已つて、我が甚深密意の言說に於ては、如實に解了すること能はず、是の如き法に於て信解を生ずと雖も、然かも其義に於て言に隨つて執著し、一切法は決定して皆無自性なり、決定して不生不滅なり、決定して本來寂靜なり、決定して自性涅槃なりと謂ふ。此因緣に由つて、一切法に於て、無の見及び無相の見を獲得す。(三九)無の見、無相の見を得るに由るが故に、一切相は皆是れ無相なりと撥〔無〕し、諸法の遍計所執相、依他起相〔及び〕圓成實相を誹撥す。何以ば、依他起相及び圓成實相あるに由るが故に遍計所執相方に施設すべし、若し依他起相及び圓成實相に於て、見て無相なりと爲ば、彼れ亦た遍計所執相をも誹撥すればなり。是の故に彼れ三相を誹撥すと說く。我が〔正〕法に於て〔正〕法の想を起すと雖も、而も非〔正〕義の中に〔正〕義の想を起す。我が〔正〕法に於

【三八】加行。智見を得んが爲に別に行を加へ修するを云ふ。

【三九】無の見無相の見。三性中に於て依他起性、及び圓成實性は有なるに而も撥無する妄見を無の見と云ひ、遍計所執等名言の相を撥無するを無相の見と云ふ。

て〔正〕法の想を起し、及び非〔正〕義の中に〔正〕義の想を起すに由るが故に、是法の中に於て持して是法と爲し、非義の中に於て持して是義と爲す。彼れ〔正〕法に於て信解を起すが故に福德增長すと雖も、然かも非義に於て執著を起すが故に智慧を退失す。智慧退するが故に、廣大無量の善法を退失す。復た有情あり、他に從うて、〔正〕法を謂つて〔正〕法と爲し、非〔正〕義を〔正〕義と爲すを聽聞して、若し其見に隨へば、彼れ卽ち〔正〕法に於て〔正〕法の想を起し、非〔正〕義の中に於て〔正〕義の想を起し、〔正〕法を執して〔正〕法と爲し、非〔正〕義を〔正〕義と爲す。此因緣に由つて當に知るべし、彼れに同じく善法を退失すと。若し有情あつて其見に隨はざれば、彼れより欻ち、一切諸法は皆な無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なりと聞いて、便ち恐怖を生じ、恐怖を生じ已つて是の如きの言を作す、是れ佛說に非ず、是れ魔の所說なりと、此解を作し已つて此の經典に於て誹謗し、毀罵す。此因緣に由つて大衰損を獲、大業障に觸る〔べし〕。是の緣に由るが故に我れ說かく、若し一切相に於て、無相の見を起し、非義の中に於て宣說して義と爲ること有れば、是れ廣大なる業障を起すの方便なりと。何となれば、彼れ無量の衆生を陷墜し、夫れをして大業障を獲得せしむるに由ればなり。善男子よ、若し諸の有情にして未だ善根を種ゑず、未だ〔惑〕障を淸淨にせず、未だ相續を〔成〕熟せず、多くの勝解無く、未だ福德智慧の資糧を集めず、性質直に非ず、質直の類にも非ざれば、思擇廢立する力能ありと雖も、而かも自の見取の中に安住す。彼れ若し是の如きの法を聽聞し已るも、如實に我

が甚深密意の言説を解すること能はず、亦た此法に於て信解を生ぜず。是法の中に於て非法の想を起し、是義の中に於て非義の想を起し、是法の中に於て、執〔著〕して非法と爲し、是義の中に於て、執〔著〕して非義と爲して是の如き言を唱ふ、是れ佛語に非ず、是れ魔の所説なりと。此の解を作し已つて、是の經典に於て誹謗し、毀罵し、撥して虚僞なりと爲し、無量の門を以て是の如き經典を毀滅し、摧伏す。諸の此經典を信解する者に於て、怨家の想を起す。彼れ先に諸の業障の爲めに障へられたり、此因緣に由つて復た是の如きの業障の爲めに障へらる。是の如きの業障は初めには施設し易し、〔然れども〕乃し(四〇)百千倶胝那庾多劫を齊るに至るまでも出期あること無し。善男子よ、是の如く、我が善説、善制法、毗奈耶〔等〕、最極淸淨の意樂を以て説く所の善教法の中に於て、是の如き等の諸の有情類の意解、種種の差別の得べきことあり。』

爾の時世尊は、重ねて此義を宣べんと欲し、而かも頌を説いて曰はく、

『一切諸法は皆無性なり、無生無滅にして本來寂たり。諸法の自性は恒に涅槃なり、誰の有智か密意無しと言はん。

相生勝義の無自性なりと、是の如く我れ皆已に顯示す。若し佛の此の密意を知らざれば、正道を失壞して〔無上菩提に〕往くこと能はず。

〔四〇〕百千倶胝那庾多劫。倶胝(Koṭi)此に百億と譯す。那庾多(Nayuta)此に萬億と譯す。劫は具に劫波(Kalpa)と云ひ、譯して分別時節と云ひ、時間の長きを云ふ。

諸の〔無性觀の〕淨道に依つて淸淨なる者は、惟だ此の一のみに依る第二無し。故に其中に於て一乘を立つ、有情の〔五種〕性差別無きに非ず。

衆生界の中の無量の生、〔二乘は〕惟だ一身を度して寂滅に趣くのみ。〔如來は〕大悲勇猛にして〔佛果〕涅槃を證し、衆生を捨てず〔是れ〕甚だ得難し。

微妙難思の無漏〔涅槃〕界の、中に於て〔三乘〕解脫等うして差ふ無し。一切〔無爲功德の〕義〔利〕を成〔就〕して惑と苦（果の依身）とを離る、二種に異說して〔四一〕常なり樂なりと謂ふ。』

爾の時勝義生菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、諸佛如來の密意の語言は甚奇希有なり、乃至微妙〔中〕最も微妙なり、甚深〔中〕最も甚深なり、難通達〔中〕最も難通達なり。是の如く我れ今領解すらく「世尊所說の義は若し分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、假名安立して以て、色蘊の或は自性相、或は差別相と爲し、假名安立して、色蘊の生と爲し、色蘊の滅と爲し、及び色蘊の永斷、徧知の或は自性の相、或は差別の相と爲す、是れを遍計所執相と名づく。世尊は此〔遍計所執相〕に依つて、諸法の相無自性性を施設したまふ。若しは即ち〔四二〕分別所行の遍計所執相の所依の行相を、是れを依他起相と名づく。世尊は此〔依他起相〕に依つて、諸法の生無自性性及び一分の勝義無自性性を施設したまふと。」是の如く我れ今領解すらく、「世尊所說の義は、

〔四一〕常なり樂なり。惑を離るるが故に常なり、苦を離るるが故に樂なり。
〔四二〕分別所行。分別して行解する所。

若しは即ち此の分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、遍計所執相は成實ならざるに由るが故に、即ち此の自性の無自性性、法無我の眞如の、清淨〔智〕の所緣なる是れを圓成實相と名づく。世尊は此〔圓成實相〕に依つて、一分の勝義無自性性を施設したまふと。」色蘊に於けるが如く、是の如く餘蘊に於ても皆應に廣說すべし、諸蘊に於けるが如く、是の如く十二處の一一の處の中に於ても皆應に廣說すべし、十二有支の一一の支の中に於ても皆應に廣說すべし、四種の食の一一の食の中に於ても皆應に廣說すべし、（四三）六界、十八界の一一の界の中に於ても皆應に廣說すべし。是の如く我れ今領解すらく、「世尊所說の義は、若しは分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、假名安立して以て、苦諦と苦諦徧知の或は自性相、或は差別相と爲す、是れを遍計所執相と名く。世尊は此〔遍計所執相〕に依つて、諸法の相無自性性を施設したまふ。若しは即ち分別所行の遍計所執相の所依の行相を、是れを依他起相と名く。世尊は此〔依他起相〕に依つて、諸法の生無自性性及び一分の勝義無自性性を施設し玉ふと。」是の如く我れ今領解すらく、「世尊所說の義は、若しは即ち此の分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、遍計所執相は成實ならざるに由るが故に、即ち此の自性の無自性性、法無我眞如の、清淨〔智〕の所緣なる、是れを圓成實相と名く。世尊は此〔圓成實相〕に依つて、一分の勝義無自性性を施設したまふと。」苦諦に於けるが如く、是の如く餘〔の集滅道〕諦に於ても皆應に廣說すべし。聖諦に於けるが如

【四三】六界。地・水、火・風、空・識の六大を云ふ、有情を形成組織する本質なり。

く、是の如く諸の念住、正斷、神足、根、力、覺支、道支の中に於ても、一一皆應に廣說すべし。是の如く我れ今領解すらく、「世尊所說の義は、若しは分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、假名安立して以て正定と爲し、及び正定の能治所治、若しくは正修の未生なるは生ぜしめ、生じ已れるは堅住し忘れずして倍修し、增長廣大なるものの或は自性の相、或は差別の相と爲す、是れを遍計所執相と名く。世尊は此〔遍計所執相〕に依つて、諸法の相無自性性を施設し、若しは卽ち分別所行の遍計所執相の所依の行相を、是れを依他起相と名く。世尊は此〔依他起相〕に依つて、諸法の生無自性性及び一分の勝義無自性性を施設したまふと。」是の如く我れ今領解すらく、「世尊所說の義は、若しは卽ち此の分別所行の遍計所執相の所依の行相の中に於て、遍計所執相は成實ならざるに由るが故に、卽ち此の自性の無自性性、法無我眞如の、清淨〔智〕の所緣なる、是れを圓成實相と名く。世尊は此〔圓成實相〕に依つて、諸法の一分の勝義無自性性を施設したまふと。」世尊よ、譬へば〔四四〕毗濕縛藥を一切の散藥、仙藥の方の中に、皆應に安處すべきが如く、是の如く世尊の此の諸法の皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なる無自性性に依る、〔其〕了義の言教は徧く一切の不了義經に於て、皆應に安處すべきなり。世尊よ、彩畫の〔粉〕地の、一切彩畫の事業に遍ねく、皆同一味にして或は靑、或は黃、或は赤、或は白に〔於て〕、復た能く、彩畫の事業を顯發するが如く、是の如く世尊の此の諸法の皆無自性

【四四】 毗濕縛藥（[illegible]）。此に有功能と云ふ、功能多き藥也。諸藥に合するに神驗著るし。

なり、廣説乃至、自性涅槃なる無自性性に依りたまふ了義の言教は、徧く一切不了義經に於て、皆同一味にして、復た能く、彼の諸經の中の不了なる所の義を顯發す。世尊よ、譬へば、一切の成熟せる珍羞なる諸の餅菓の内に、之れに熟酥を投ずれば、更に勝味を生ずるが如く、是の如く世尊の此の諸法の皆無自性なり、廣説乃至、自性涅槃なる無自性性に依りたまふ了義の言教を、一切の不了義經に置けば、勝れたる歡喜を生ず。世尊よ、譬へば、虚空の一切處に徧じて、皆同一味にして、一切所作の事業を障へざるが如く、是の如く世尊の、此の諸法の皆無自性なり、廣説乃至、自性涅槃なる無自性性に依りたまふ了義の言教は、一切の不了義經に徧じて、皆同一味にして、一切の聲聞、獨覺及び諸の大乘〔菩薩〕の修する所の事業を障へざるなり。』

是の語を説き已るや、爾の時世尊、勝義生菩薩を歎じて曰はく、

『善い哉、善い哉、善男子よ、汝今乃ち能く善く、如來所説の甚深密意の言義を解す。復た此義に於て善く譬喩を作す、所謂世間の毗濕縛藥、雜彩畫地、熟酥、〔及び〕虚空なり。勝義生よ、是の如し、是の如し、更に異ることあること無し。是の如く、是の如く。汝應に受持すべし。』

爾の時勝義生菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊(四五)初め〔第〕一時〔の中〕に於て、(四六)婆羅痆斯(四七)仙人墮處施鹿林の

【四五】初め一時。以下佛自分一代所説の教法をば、其義理の淺と深とを判じて有教、空教、中道教の三法輪に分つ、之を三時の判教となす。今ま初め一時とは初時の有教にして阿含部經典の四諦の法門なり、外道凡夫の執する如き實我は無けれども、但し五蘊等の法體は有なりと説く、是れ我空法有の教にして小乘淺近の法門なり。

中に在して、惟だ(四八)聲聞乘に發趣する者の爲めにのみ、四諦の相を以て、(四九)正法輪を轉じたまふ。是れ甚だ奇なり、甚だ希有なりと爲す。一切の世間、諸の天人等〔にして〕先に、能く法の如く轉ずる者あること無しと雖も、而かも彼の時に於て、轉じたまへる法輪は、(五〇)有上なり有容なり、是れ未了義なり、是れ(五一)諸の諍論の安足する處所なりき。世尊在昔(五二)第二時の中に〔於て〕、惟だ發趣して(五三)大乘を修する者の爲めにのみ、一切法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なるに依つて、隱密〔方便〕の相を以て、正法輪を轉じたまふ。〔是れ〕更に甚だ奇なり、甚だ希有なりと爲すと雖も、而も彼の時に於て轉じたまへる法輪も、亦た是れ有上なり、容受する所あり、猶は未了義

【四六】波羅痆斯(Vārāṇasī)。佛陀當時の國名、今日のベナレス地方。

【四七】仙人墮處施鹿林。鹿野苑(Mṛgadāva)のことなり、昔得道五百の飛仙あり、偶々婬女を見、忽ち欲心を起し、通を失ひ、終に此處に墜落せり、故に仙人墮處と云ふ。又國王あり此林地を群鹿に與へ遊止の處となす、故に復た施鹿林と云ふ。

【四八】聲聞乘。阿若憍陳如等の五比丘なり。

【四九】正法輪。輪に運轉、摧破の作用あるが如く、佛所說の正法は、消極的にしては衆生の迷妄を破り、積極的には衆生を涅槃の果に運轉す、故に輪に譬へて正法輪と云ふ。

【五〇】有上なり有容なり。教義未だ盡くさず猶ほ上勝なるあれば有上と云ふ、上勝の義の容るべき餘地あれば有容と云ふ。

【五一】諸の諍論。道理未だ盡さざるが故に是非の諍論紛起し諍論の基未だ離るる能はず、佛滅後に小乘二十部の分派ある所以なり。

【五二】第二時。第二時空教なり、即ち靈鷲山等に於て說く等の般若部の經典なり、啻に我執無きのみならず、五蘊等の法體亦如幻虛假にして實有ならず諸法皆空なりと說く、是漸く深き大乘創行の空無相教なり。

【五三】大乘を修す。須菩提等中根のもの。

【五四】今第三時。第三時中道教なり、即ち佛[illegible]今十八圓滿の[illegible]界に在て大乘大衆の菩薩に對して說く、[illegible]解深密等なり、華嚴法華等の[illegible]中道の[illegible]を說く[illegible]皆此に攝

なり、是れ諸の諍論の安足する處所なりき。世尊(五四)今第三時の中に於て、(五五)普ねく一切〔三〕乘に發趣する者の爲めに、一切法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なる無自性性に依つて、顯了〔眞實〕の相を以て、正法輪を轉じたまふ。〔是れ〕第一の甚奇なり、最も希有なりと爲す。于今世尊の轉じたまふ所の法輪は、無上なり、無容なり。是れ眞の了義なり、諸の諍論の安足する處所には非ざるなり。世尊よ、若しは善男子、若しは善女人にして、此の如來の、一切法は皆無自性なり、無生無滅なり、本來寂靜なり、自性涅槃なるに依つて、說かせられたる甚深了義の言敎に於て、聞き已つて信解し、書寫し、護持し、供養し、流布し、受誦し、溫習し、理の如く思惟し、其修相を以て加行を發起すれば、幾所の福をか生ずるや。』

是の語を說き已るや、爾の時世尊、勝義生菩薩に告げて曰く、

『勝義生よ、是の善男子或は善女人の、其の生ずる所の福は、無量無數にして喩知すべきこと難し。吾れ今汝が爲めに略して少分を說かん。爪上の土を大地の土に比するに、百分にして一に及ばず、千分にして一に及ばず、百千分にして一に及ばず、數、算、計、喩、(五六)鄔波尼殺曇分にしても、亦た一

盡するなり、是卽大乘の至極最も深き了義敎是なり。如上の三時敎は說時年月の前後に約して辨ずるに非ず、唯所說法門の義理の淺深を以て之れを判ずるなり。

【五五】普ねく一切乘　初時の阿含は唯小乘聲聞乘のみに、又第二時の般若は大乘中根のみに被むる所なるに對して、今第三時敎の普く三乘大小の諸根を網羅し漏らすなきをば、普爲一切乘敎と號す。

【五六】鄔波尼殺曇(Upanisad)。近少、微細と譯す。數の極なり。

に及ばざるが如く、或は牛跡の中の水を四大海の水に比するに、百分にして一に及ばず、廣說乃至、鄔波尼殺曇分にしても亦た一に及ばざるが如く、是の如く、諸の不了義經に於て聞き已つて信解し、廣說乃至、其修相を以て加行を發起して獲る所の功德を、此の所說の了義經の敎を聞き已つて信解して集むる所の功德、廣說乃至、其修相を以て加行を發起して集むる所の功德に比するに、百分にして一に及ばず、廣說乃至、鄔波尼殺曇分にしても亦た一に及ばず。』

是の語を說き已りたまふや、爾の時勝義生菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の解深密法門の中に於て、當に何んが此の敎を名づくべきや、我れ當に云何んが奉持すべきや。』

佛、勝義生菩薩に告げて曰く、

『善男子よ、此れを勝義了義の敎と名く。此の勝義了義の敎に於て、汝當に奉持すべし。』

此の勝義了義の敎を說きたまふ時、大會の中に於て、六百千の衆生あつて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三百千の聲聞（五七）遠塵離垢して、諸法の中に於て（五八）法眼淨を得、一百五十千の聲聞諸漏を永盡して、心解脫を得、七十五千の菩薩（五九）無生法忍を得たりき。

【五七】遠塵離垢。惑塵の種子を遠ざけ現行の纏垢を離る。
【五八】法眼淨。慧眼清淨にして實の如く諦理を觀ずるを得。
【五九】無生法忍。無生無滅の眞如を無生法と云ひ、之れを證忍する無漏の智を忍と云ふ、初地以上の菩薩之れを得。

卷の第三

(一)分別瑜伽品第六

爾の時(二)慈氏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、

『世尊よ、菩薩は何をか〔所〕依とし、何にか住して、大乘の中に於て(三)奢摩他毘鉢舍那を修するや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、當に知るべし、菩薩は法假安立と及び阿耨多羅三藐三菩提の願を捨てざることを〔所〕依と爲し〔所〕住となして、大乘の中に於て奢摩他毘鉢舍那を修す。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊の說きたまふが如く、四種の所緣の境事あり。一には(四)有分別影像所緣の境事、二には(五)無分別影像所緣の境事、三には(六)事邊際所緣の境事、四には(七)所作成辨所緣の境事なり。此の四の中に於て、幾くか是れ奢

【一】分別瑜伽。瑜伽(Yoga)此に相應と譯す。三乘止觀の行は方便善巧相應の義ありて正理に合し正行に順じ勝果を得るが故に瑜伽と名く。此品廣く止觀瑜伽(相應)の義を明すが故に分別瑜伽品と號す。

【二】慈氏。彌勒菩薩なり。

【三】奢摩他、毘鉢舍那。奢摩他(Śamatha)は止と譯す、禪定なり。毘鉢舍那(Vipaśyana)は觀と譯す、智慧なり。

【四】有分別影像所緣とは初地以前の菩薩の推求有分別の觀智の上に現はれたる影像の境なり。

摩他の所緣の境事なるや、幾くか是れ毗鉢舍那の所緣の境事なるや、幾くか是れ倶所緣の境事なるや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、一は是れ奢摩他の所緣の境事なり、謂はく無分別の影像なり。一は是れ毗鉢舍那所緣の境事なり、謂く有分別の影像なり。二は是れ倶所緣の境事なり、謂く事邊際と所作成辨となり。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、云何んが菩薩は、是の四種の奢摩他、毗鉢舍那所緣の境事に依つて、能く奢摩他を求め、能く毗鉢舍那を善くするや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、我れ菩薩の爲めに說く所の法假安立の如きは、所謂【八】(一)契經、(二)應頌、(三)記別、(四)諷誦、(五)自說、(六)因緣、(七)譬喩、(八)本事、(九)本生、(十)方廣、(十一)希法、及び(十二)論議なり。菩薩は此れに於て善く聽き、善く受け、言善く通利し、意善く尋思し、見善く通達し、卽ち是の如きの善思惟の法に於て、獨り空閑に處在して作意し、思惟す。復た卽ち此の能く思

【五】無分別影像所緣とは亦地前無分別の定心の上に現はれたる影像なり。

【六】事邊際所緣とは十地の菩薩の止觀所緣の眞如なり、眞如は五蘊、十二處、十八界、四諦の事法に遍滿するが故に事邊際と云ふ。

【七】所作成辨所緣とは所作成辨せる佛地の止觀の所緣たる有爲無爲事理の功德なり。

【八】契經等。以下の十二を十二分敎と云ふ。(一)契經、散文を以て綴られたる聖敎。(二)應頌、頌を以て前說の散文を重說するもの。(三)記別、佛、弟子の未來を豫言し給ふもの。(四)諷誦、句を以て宣說するもの。(五)自說、如來機意を以て他の問ふなきに自ら說く。(六)因緣、生起の本由を說く。(七)譬喩、比喩なり。(八)本事、弟子の前世の事を說く。(九)本生、

惟する心に於て、内心に相續して作意し、思惟す。是の如く正行に多く安住するが故に、(九)身輕安及び心輕安を起す、是れを奢摩他と名づく。是の如く、菩薩は能く奢摩他を求む。彼れ身心の輕安を獲得するを、所依と爲るに由るが故に、卽ち、善く思惟する所の法の如き内の (一〇)三摩地所行の影像に於て觀察し、勝解し、心相を捨離し、卽ち、是の如き三摩地影像の所知の義の中に於て、能く正しく思擇し、最極に思擇し、周徧く尋思し、周徧く伺察するところの若しは忍、若しは樂、若しは慧、若しは見、若しは觀、是れを毗鉢舍那と名づく。是の如く、菩薩は能く毗鉢舍那を善くす。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、若しは諸の菩薩心を緣じて境と爲す內の思惟の心、乃至未だ身心の輕安を得ざる所有る作意を、當に何等と名くべきや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、「そは」奢摩他の作意に非ず、是れ奢摩他に隨順する (一一)勝解相應の作意なり。』

『世尊よ、若し諸の菩薩、乃至未だ身心の輕安を得ず、所思の如き所有る

菩薩前生の本行談なり。(十)方廣、廣大甚深の法を說く。(十一)希法、希有奇特の事を說く。(十二)論議、誤謬なく深隱の諸相を解釋するもの。

【九】身輕安及び心輕安。禪定に入るとき、前五識と相應し、身を輕快安適ならしむるを身輕安と云ひ、第六意識と相應し、心を輕利安適ならしむるを心輕安と云ふ。

【一〇】三摩地(Samādhi)。正定、等持と譯す。心を一境に集注して散亂せしめざるが故に定と云ふ。惛沈と掉擧との二邊を離れ心平靜なるを等と云ひ心を一境に集注保持して散漫ならしめざるを持と云ふ。

【一一】勝解。對境を審決印可する勝れたる行解なり、主觀の行解勝るるが故に、客觀の境を自在に變現するを得、卽ち火を水に、水を火に化し、又は善人を不淨に變するを得。

諸法の内の三摩地所緣の影像に於て、作意し、思惟すれば、是の如き作意を、當に何等と名づくべきや。』

『善男子よ、〔そは〕毗鉢舍那の作意に非ず、是れ毗鉢舍那に隨順する勝解相應の作意なり。』

慈氏菩薩復た佛に白して言さく、

『世尊よ、奢摩他道と毗鉢舍那道とは、當に異りありと言ふべきや、當に異り無しと言ふべきや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、當に異り有るに非ず、異り無きに非ずと言ふべし。何が故に異り有るに非ずとならば、毗鉢舍那所緣の境は、心を所緣と爲るを以ての故なり。何が故に異り無きに非ずとならば、有分別の影像は所緣に非ざるが故なり。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、諸の毗鉢舍那三摩地所行の影像は、彼れ此心と當に異り有りと言ふべきや、當に異り無しと言ふべきや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、當に異り無しと言ふべし。何以ば彼の影像は唯だ是れ識なるに由るが故に。善男子よ、我れ、〔三〕識の所緣は唯識の所現なりと說くが故なり。』

【三】識の所緣云云。識とは能緣の見分、所緣とは境の相分なり、是れ能所緣相對して見分相分を說く。唯識の所現とは識とは能變の自體分、所現とは所變の相見二分にして能所變相對して三分本末の義を說き、唯識轉變の妙理を示す、蓋し此の句は實に賴耶緣起論の根本典據なり。

『世尊よ、若し彼の所行の影像は、卽ち此の心と異り有ること無くんば、云何んが(三)此心還つて此心を見るや。』

『善男子よ、(四)此の中に少法としても能く少法を見ることあること無し。然るに此の心是の如く生ずる時、卽ち是の如き影像あつて顯現す。善男子よ、善く瑩ける淸淨の鏡面に依つて、(五)〔本〕質を以て緣と爲して還つて本質を見るを、而かも我れ今影像を見ると謂ひ、及び〔本〕質を離れて別に所行の影像あつて顯見すと謂ふが如く、是の如く此の心生ずる時、異りあるに相ひ似たる三摩地所行の影像顯現す。』

『世尊よ、若し諸の有情自性にして而も住して、色等を緣ずる〔にその〕心の所行の影像は、彼れ此の心と亦た異ること無きや。』

『善男子よ、亦た異り有ること無し。而るに諸の愚夫、顚倒の覺に由つて、諸の影像に於て、如實に唯だ是れ識なりと知ること能はずして、(六)顚倒の解を作す。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく。

『世尊よ、何に齊りて、當に菩薩は一向に毗鉢舍那を修すと言ふべきや。』

【三】此心還つて此心を見るや。見るも見らるるも唯此の心のみなりとは如何との意。

【四】此中少法として云云。見らるるもの謂ひ微塵ばかりの少法にても心外の少法にあらず、一切悉く皆心内の影像にあらざるなしと唯識唯心の深理を道破せる句なり。

【五】質。卽ち本質なり、鏡中に映じたる影像に對して、その本體なる眞の面貌を本質と云ふ。

【六】顚倒の解。識に離れざる心内の影像なるに、而も識に離れたる心外實有の物なりとする虛妄の執著なり。

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、
『善男子よ、若しは相續作意して、唯だ心相を思惟するのみなり。』
『世尊よ、何に齊りて、當に菩薩は一向に奢摩他を修すと言ふべきや。』
『善男子よ、若しは相續作意して、唯だ〔二七〕無間心を思惟するのみなり。』
『世尊よ、何に齊りて、當に菩薩には奢摩他と毘鉢舍那と和合して倶に轉ずと言ふべきや。』
『善男子よ、若しは正しく思惟する〔二八〕心一境性なり。』
『世尊よ、云何んが心相なるや。』
『善男子よ、謂く三摩地所行の有分別の影像、毘鉢舍那の所緣なり。』
『世尊よ、云何んが無間心なるや。』
『善男子よ、謂はく彼の影像を緣ずるの心、奢摩他の所緣なり。』
『世尊よ、云何んが心一境性なるや。』
『善男子よ、謂はく三摩地所行の影像は唯だ是れ其〔依他の心〕識なりと通達し、或は此れに通達し已つて、復た〔眞〕如性を思惟するなり。』
慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、
『世尊よ、毘鉢舍那に凡そ幾種ありや。』

【二七】無間心。間斷なく相續して法義を緣ずる觀心。
【二八】心一境性。一切諸法は一の依他心に離れざる境なるが故に、又其實性は一の眞如心なるが故に、心一境性と云ふ。

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、略して(一九)三種あり。一には有相毗鉢舍那、二には尋求毗鉢舍那、三には伺察毗鉢舍那なり。云何んが有相毗鉢舍那なるや、謂はく、純ら三摩地所行の有分別影像を思惟する毗鉢舍那なり。云何んが尋求毗鉢舍那なるや、謂はく、慧に由るが故に、徧ねく彼彼の善く解了せざる一切法の中に於て、善く「解」了せんが爲めの故に作意し、思惟する毗鉢舍那なり。云何んが伺察毗鉢舍那なるや、謂はく、慧に由るが故に、徧ねく彼彼の善く解了せる一切法の中に於て、善く極解脱を證得せんが爲めの故に作意し、思惟する毗鉢舍那なり。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の奢摩他に凡そ幾種ありや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

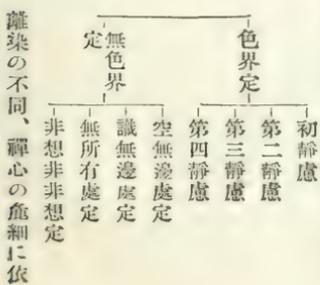
『善男子よ、彼の無間心に隨ふに由るが故に、當に知るべし、此中亦た(二〇)三種ありと。復た(二一)八種あり、謂はく初靜慮乃至非想非非想處に各一種の奢摩他あるが故なり。復た四種あり、謂はく(二二)慈悲喜捨の四無量の

【一九】三種。毗鉢舍那觀の種類なり。(一)有相毗鉢舍那、法義の相を分別する有相有分別の觀なり。(二)尋求毗鉢舍那、尋求觀なり。(三)伺察毗鉢舍那、伺察觀なり。尋求伺察の二は能觀の慧の作用、麁細淺深の別あり。

【二〇】三種。奢摩他の止にも毗鉢舍那の觀の如くに一に有相二に尋求、三に伺察の三類あり。

【二一】八種。八定なり。

- 色界定
  - 初靜慮
  - 第二靜慮
  - 第三靜慮
  - 第四靜慮
- 無色界定
  - 空無邊處定
  - 識無邊處定
  - 無所有處定
  - 非想非非想定

離染の不同、禪心の麁細に依

中に各一種の奢摩他あるが故なり。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、法に依る奢摩他毘鉢舍那と說き、復た法に依らざる奢摩他毘鉢舍那と說きたまへるが如き、云何んが法に依る奢摩他毘鉢舍那と名づけ、云何んが復た法に依らざる奢摩他毘鉢舍那と名くるや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、若し諸の菩薩、先に受けたる所、思へる所の法相に隨つて、而して其義に於て奢摩他毘鉢舍那を得るをば、法に依る奢摩他毘鉢舍那と名づく。若しは諸の菩薩、受けたる所、思へる所の法相を待たずして、但だ他「の禪師等」の教誡教授に依つて、而して其義に於て、奢摩他毘鉢舍那を得るあり。謂はく【二三】青瘀なり及び膿爛等なり、或は一切の行は皆是れ無常なり、或は諸行は苦なり、或は一切法は皆我あること無し、或は復た涅槃は畢竟寂靜なりと觀ずる。是の如き等の類の奢摩他毘鉢舍那を法に依らざる奢摩他毘鉢舍那と名づく。法に依止して、奢摩他毘鉢舍那を得るに由るが故に、我れ【二四】隨法行の菩薩を施設す、是れ利根の性なり。法に依らずして、奢摩他毘鉢舍那を得るに由るが故に、我

り八定の別を立つ。

【二二】慈悲喜捨。衆生に樂を與ふること無量なるを慈無量となす、衆生の苦を救拔すること無量なるを悲無量となす、衆生の樂あるを嫉まざること無量なるを喜無量となす、怨親等の差別の相を捨て平等に利すること無量なるを捨無量となす。

【二三】青瘀云云。不淨觀中の九想觀なり。青瘀とは青き「フルチ」。膿爛とは「ウミ」「タダレ」。

【二四】隨法行の菩薩。根利なるが故に、自ら經法に隨つて修行す。

【二五】隨信行の菩薩。根鈍なるが故に、他の教を信ずるに隨て修行す。

れ　(二五)隨信行の菩薩を施設す、是れ鈍根の性なり。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、別法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と說き、復た總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と說くが如き、云何んが名づけて、別法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と爲し、云何んが復た、總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と名くるや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、若しは諸の菩薩各別の契經等の法を緣じて、受くる所、思惟する所の如き法に於て、奢摩他毗鉢舍那を修する、是れを別法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と名づく。若しは諸の菩薩卽ち一切契經等の法を緣じて、集めて一團、一積、一分、一聚と爲して作意し、思惟す。此一切法は眞如に隨順し、眞如に趣向し、眞如に臨入す。〔又た〕菩提に隨順し、涅槃に隨順し、(二六)轉依に隨順し、及び彼れに趣向し、或は彼れに臨入す。此一切法は無量無數の善法を宣說すと是の如く思惟して、奢摩他毗鉢舍那を修するを、是れを總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と名づく。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、小總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那を說き、復た大總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那を說き、又た

【二六】轉依。煩惱を轉捨して菩提を轉得し、生死を轉捨して涅槃を轉得す。卽ち佛果の菩提と涅槃とを二轉依の妙果と云ふ。

無量の總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那を說きたまふが如き、云何んが小總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と名づけ、云何んが大總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と名づけ、云何んが復た無量の總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と名づくるや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、若しは各別の契經乃至各別の論議を緣じて、一團等と爲して作意し、思惟するを、當に知るべし、是れを小總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と名くることを。若しは乃至受くる所、思ふ所の契經等の法を緣じて、一團等と爲し、作意し、思惟して、各別を緣ずるに非ざるを、當に知るべし、是れを大總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と名づくることを。若しは無量なる如來の法敎、無量なる法句文字、無量なる(二七)後後慧の照了する所を一團等と爲して、作意し、思惟して、乃至受くる所、思ふ所を緣ずるに非ざるを、當に知るべし、是れを無量の總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那と名くることを。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、菩薩は何に齊りて、總法を緣ずる奢摩他毗鉢舍那を得ると名くるや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、五緣に由るが故に、當に知るべし、[其れを]得ると名くと。[謂はく]一には思惟する時

【二七】後後慧。能觀の智一に非ず無量ある中最後の上上智を後後慧と言ふ。

に於て、刹那刹那に一切（二八）麤重の所依を融銷し、二には種種〔法佛等〕の想を離れて（二九）樂法樂を得、三には（三〇）十方〔世界〕無差別の相、無量の法〔を照らす智〕光を解了す、四には〔佛果の〕所作成滿し淨分に相應する〔それに因たる〕無分別の相恒に現在前す、五には（三一）法身をして成滿を得せしめんが爲めの故に、後後の轉た勝妙なる因を攝受するなり。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、此の總法を緣ずる奢摩他毘鉢舍那は、當に何れよりか名けて通達と爲し、何れよりか得と名くと知るべきや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、初の（三二）極喜地より名けて通達と爲し、第三の（三三）發光地より乃ち名けて得と爲す。善男子よ、（三四）初業の菩薩も亦た是の中に於て隨學し、作意す。未だ歎ずべからずと雖も、〔亦た〕應に懈廢すべからず。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の奢摩他毘鉢舍那を、云何んが（三五）有尋有伺三摩地と名づけ、云何んが無尋唯伺三摩地と名づけ、云何んが無尋無伺三摩地と名くるや。』

【二八】麤重の所依。麤重所知二障の種子を麤重と云ふ。種子は現行の所依なれば所依と云ふ。或は種子を持する阿賴耶識を所依と云ふ。

【二九】樂法樂。無分別智の眞如法界を證して喜ぶを法樂と云ひ、其法樂を受け樂むを樂法樂と云ふ。

【三〇】十方無差別の相云云。空間の無限なるを觀ず。

【三一】法身をして成滿云云。正德法の聚れるを法身と云ふ、成は成辨、滿は圓滿なり、菩薩は十地の位に於て圓滿し、佛地に於て成辨す。

【三二】極喜地とは菩薩十地の中の第一地なり、菩薩此の位にて始めて眞理を證會し大歡喜を生ず。

【三三】發光地にては定を得、定に依つて觀智の光を發す。

【三四】初業の菩薩。未登地未通

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、
『善男子よ、若しは心掉擧し或は掉擧を恐るる時の諸の可厭の法の作意、及び彼の無間心の作意を、是れを止の相と名づく。若しは心沈沒し、或は沈沒を恐るる時の諸の可欣の法の作意、及び彼の心相の作意を、是れを擧の相と名づく。若しは一向止道に於て、或は一向觀道に於て、或は（四二）雙運轉道に於て（四三）二の隨煩惱に染汚せらるる時の諸の（四四）無功用の作意、及び心（四五）任運轉の中なるあらゆる作意を、是れを捨の相と名づく。』
慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、
『世尊よ、奢摩他毘鉢舍那を修する諸の菩薩衆の知法知義とは、云何んが知法なる、云何んが知義なるや。』
佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、
『善男子よ、彼の諸の菩薩は、五種の相に由つて、法を了知す。〔五種とは〕（四六）一には名を知り、二には句を知り、三には文を知り、四には別を知り、五には總を知る。云何んが名と爲すや、謂く一切染淨の法の中に於て、所立の自性を（四七）想の假りに施設〔する者〕なり。云何んが句と爲すや、謂

知觀を第三となす。
【三九】止の相とは心を守りて一境に止め、心をして散動を離れ寂靜ならしむる奢摩他の止道なり。
【四〇】擧の相とは心をして、策勵して惛沈ならしめず、推求簡擇する毘鉢舍那の觀道也。
【四一】捨の相とは掉からず沈まず中容なる觀道なり。
【四二】雙運轉道。止と觀を雙べて行ず。
【四三】二の隨煩惱。惛沈は沈鬱の性、掉擧は躁動の性にして、ともに隨煩惱染汚の法なり。
【四四】無功用。無分別の意。
【四五】任運轉。故らに意を用ゐずして運の任に自然に轉起す。
【四六】一には名を知り云云。名、句、文の三は言語が思想を運用する時の聲の上の音韻屈曲の區別なり、紙上墨書の文字

く即ち彼の名の聚集する中に於て、能く隨つて諸の染淨の義を宣說する依持建立なり。云何んが文と爲すや、謂く即ち(四八)彼「名句」の二の依止する所の字なり。云何んが彼の各別に於て了知するや、謂く「名句文一一」各別の所緣を作意するに由る。云何んが彼の總合を了知するや、謂く(四九)總合の所緣を作意するに由る。是の如き一切「の名句文」を、總略して一と爲すを名けて知法と爲し、是の如きを名けて菩薩の知法と爲す。善男子よ、彼の諸の菩薩は、十種の相に由つて義を了知す。「十種とは」一には盡所有性を知り、二には如所有性を知り、三には能取の義を知り、四には所取の義を知り、五には建立の義を知り、六には受用の義を知り、七には顚倒の義を知り、八には無倒の義を知り、九には雜染の義を知り、十には淸淨の義を知る。善男子よ、(五〇)盡所有性とは、謂く諸の雜染「及び」淸淨の法の中の有らゆる一切の品別の邊際、是れを此中の盡所有性と名づく。(五一)五數の蘊、(五二)六數の內處、(五三)六數の外處の如き是の如き一切なり。如所有性とは、謂はく即ち一切染淨の法の中の有らゆる眞如、是れを此中の(五四)如所有性と名づく。此に復た(五五)七種あり。一には(五六)流轉眞如、謂く一切の行

に非ず、意識の上に此の三聚集して終に意義を詮表し得るなり。

名。山なり、川なり等と喚び山川等の自體を詮示する聲の作用

句。名の聚りて成る所にして山は高し低からず等と物の差別を表示する聲の作用。

文。文字なり、ヤ、マ等、未だ意義を有せざる聲の作用。

【四七】想の假りに施設。思想に因りて言辭を假設し法の自性を表示するなり。

【四八】彼の二の依止。文に依りて名を成じ、名に依りて句を成す、即ち文は名句を成ずる第一位にして名句の二の所依なり。

【四九】總合。意識の上に數多の名句文を聚集し合し方に所詮の義を了知するを得。

【五〇】盡所有性。染淨の諸法を

の（五七）先後無きの〔實〕性なり。二には〔實〕（五八）相眞如、謂く一切法の補特伽羅無我の〔實〕性及び法無我の〔實〕性なり。三には（五九）了別眞如、謂く一切の行唯だ是れ識なる〔實〕性なり。四には（六〇）安立眞如、謂く我が說く所の諸の苦聖諦〔の實性〕なり。五には邪行眞如、謂く我が說く所の諸の集聖諦〔の實性〕なり。六には淸淨眞如、謂く我が說く所の滅聖諦〔の實性〕なり。七には正行眞如、謂く我が說く所の諸の道聖諦〔の實性〕なり。當に知るべし、此の中流轉眞如、安立眞如、邪行眞如に由るが故に、一切有情（六一）平等平等なり、相眞如、了別眞如に由るが故に、一切諸法平等平等なり、淸淨眞如に由るが故に、一切の聲聞の菩提と獨覺の菩提と阿耨多羅三藐三菩提と平等平等なり、正行

概括周盡し一切の品數を知ること。

【五一】五數の蘊。色受想行識の五蘊なり。

【五二】六數の內處。眼耳鼻舌身意の六根なり。

【五三】六數の外處。色聲香味觸法の外の六境なり。

【五四】如所有性。染淨法一切の本體たる一味平等の眞如法性なり、盡所有性は現象界の總てを網羅す、之に對して本體界眞如の全體を如所有性と云ふ。

【五五】七種。眞如は實には一味の法性なれども表詮門より義を以て分ちて七眞如となす。

【五六】流轉眞如。流轉とは生滅遷流の有爲法を云ふ、其實性たる眞理を流轉眞如と云ふ。

【五七】先後無き。有爲法の生滅無始無終なるを云ふなり。

【五八】相眞如。卽ち實相眞如なり。人法二空の觀門に依りて顯はされたる實性なり。

【五九】了別眞如。了別とは識心なり、一切諸法の根本なる識の實性なり、卽ち唯識性なり。

【六〇】安立眞如以下の四は四諦の實性眞如なり、四諦はともに觀心の前に一味の眞理を苦集滅道と安立施設するを以て安立と云ふ。

【六一】平等平等。是の故に一切五姓の有情悉く眞如理佛性を具す、卽ち說いて一乘、悉有佛性等と云ふ。

【六二】能取。主觀なり。

【六三】所取。客觀なり。

【六四】能取の義云云。能取の心も若し心に緣取せらるる時は亦所取の對境となる。

【六五】器世界。人畜等を有情世間と云ひ、有情の居住する山河大地を器世間と云ふ、有情を持する器なればなり。

眞如に由るが故に、正法を聽聞し、總境界を緣ずる勝れたる奢摩他毗鉢舍那に攝受せらるる慧平等平等なりと云ふことを。（六二）能取の義とは、謂く內〔界〕の五色〔根〕處、若しくは心意識及び諸の心〔所〕法なり。（六三）所取の義とは諸の外〔界〕の六處なり。又た（六四）能取の義も亦た所取の義なり。建立の義とは、謂く（六五）器世界なり、中に於て一切の諸の有情界を建立することを得べし、謂く一村田、若しくは百村田、若しくは千村田、若しくは百千村田、或は一大地の海の邊際に至る、此の百、此の千、若しくは此の百千〔倍〕。或は（六六）一の贍部洲、此の百、此の千、若しくは此の百千、或は一の四大洲、此の百、此の千、若しくは此の百千、或は一小千世界、此の百、此の千、若しくは此の百千、或は一中千世界、此の百、此の千、若しくは此の百千、或は（六七）一の三千大千世界、此の百、此の千、若しくは此の百千、或は此の拘胝、此の百拘胝、此の千俱胝、此百千拘胝、或は此の無數、此の百無數、此の千無數、此の百千無數、或は三千世界の無數百千の微塵の量等。十方面に於ける無量無數の諸の器世界なり。受用の義とは、謂く我が說く所の諸の有情類は、受用の爲めの故に、（六八）資具を攝受す。顚倒の義とは、謂く卽ち彼の能取等の義に於て、無常を常と計する想倒、心倒、見倒、〔及び〕苦を計して樂と爲し、不淨を淨と計し、

【六六】一の贍部洲。須彌山の四周には各大洲あり、四洲の中この南方を贍部洲と云ふ、今我等の現に住する處なり。

【六七】一の三千大千世界。一箇の日、一箇の月、一箇の須彌山、一箇の四天下乃至一箇の梵世天之れを一須彌世界（一太陽系）となす、此一世界を千箇合したるを一小千世界と云ひ、此一小千世界を千箇合したるを中千世界となし、此一中千世界を千箇合したるを大千世界となし、名けて三千大千世界と云ふ、是の如く無數の世界を立つる是れ印度古代の世界說なり。

【六八】資具。器物なり。

無我を我と計する想倒、心倒、見倒なり。無倒の義とは上と相違し、彼を對治す〔るものなり〕、應に其相を知るべきなり。雜染の義とは、謂く三界の中の三種の雜染なり、一には煩惱雜染、二には業雜染、三には生雜染なり。淸淨の義とは、謂く卽ち是の如き三種の雜染〔に於ける〕有らゆる（六九）離繫の菩提分法なり。善男子よ。是の如きの十種、當に知るべし、普く一切の諸義を攝むることを。復た次に善男子よ、彼の諸の菩薩、能く五種の義を了知するに由るが故に、名けて知義と爲す。何等か五義なるや。一には徧知の事、二には徧知の義、三には徧知の因、四には徧知の果を得る〔こと〕、五には此れに於て覺了せしむる〔こと〕なり。善男子よ、此中徧知の事とは、當に知るべし、卽ち是れ一切の所知なりと。謂く或は諸の〔五〕蘊、或は諸の內の〔六根〕處、或は諸の外の〔六境〕處、是の如きの一切なり。徧知の義とは乃至所有品數差別の應に知るべき所の境なり。謂く（七〇）世俗の故に、或は勝義の故に、或は（七一）功德の故に、或は過失の故に、（七二）緣の故に、（七三）世の故に、（七四）或は生じ或は住し或は壞〔滅〕する相の故に、或は（七五）病等の如くなる故に、或は（七六）苦集等の故に、或は（七七）眞如、實際、法界等の故に、

【六九】離繫の菩提分法。煩惱の繫縛を離る、三十七種の菩提分法なり。

【七〇】世俗の故云云。以下十一門を以て知るべき境界の上の義門差別を說く、世俗勝義とは第一に世俗勝義門也、有漏雜染の所緣を世俗となし、無漏淸淨の所緣を勝義となす。

【七一】功德の故云云。第二に功德過失門なり、四無量等は功德なり、五逆十惡等は過失なり。

【七二】緣の故に。第三に四緣門なり、因緣、等無間緣、所緣緣、增上緣の四緣なり。

【七三】世の故に。第四に三世門なり、過去、未來、現在の三世なり。

【七四】或は生じ云云。第五に三相門なり、有爲法の標相たる生、住、滅の三相なり

【七五】病等云云。第六に病等の

或は（七八）廣略の故に、或は（七九）一向記の故に、或は分別記の故に、或は反問記の故に、或は置記の故に、或は（八〇）隱密の故に、或は顯了の故に、是の如き等の類、當に知るべし。一切を徧知の義と名くることを。徧知の因と言ふは、當に知るべし、卽ち是れ能く前の（八一）二を取る菩提分法なりと。所謂念住、或は正斷等なり。徧知の果を得るとは、謂く貪恚癡を永く斷ずる（八二）毗奈耶、及び貪恚癡の一切を永く斷ずる諸の（八三）沙門果、及び我が說く所の聲聞と如來と若しは（八四）共にし共にせざると世出世間との所有功德を、彼に於て作證するなり。此れに於て覺了せしむ「ること」とは、謂く卽ち此の作證の法の中に於て、諸の解脫智「もて」、廣く他の爲めに說き、宣揚し、開示するなり。善男子よ、

四行門なり、四行とは、（一）病の如し、（二）癰の如し、（三）箭の如し、（四）惱害なり。人生苦痛あり厭ふべきを說く。

【七六】苦集等。第七に四諦門也。

【七七】眞如實際云云。第八に眞如衆名門なり。眞如、法性は眞實如常の理なるが故に。實際、眞實究極の法なるが故に。法界、諸法の本體なるが故なり。等とは空、無我、無相等の名を等す。

【七八】廣略の故に。第九に廣略分別門也。先づ總じて一句を說くを略義となし、後、別して無量の句を以て宣ぶるを廣義と云ふ。

【七九】一向記の故に云云。第十に四記答門也。（一）一向記とは人あり「生ずる者は必ず滅するや」と問はんに一向に「然なり」と答ふるが如し。（二）分別記とは人あり「滅する者は定んで生ずるや」と問はんに、生ずるものと生ぜざる者と二類の別あるを以て、一向に「然り」と答ふべからず、「若しは凡夫は滅して尙ほ生ず、若しは阿羅漢は滅し已りて更に生ぜず」と分別し答ふるが如し。（三）反問記とは人あり「菩薩は勝なりや劣なりや」と問はんに、「汝の問ふ所聲聞に比してや將た佛果に對してや如何ん」と反問し答ふるが如し。（四）置記とは卽ち捨置記なり、亦た默置記とも云ふ、人あり「石女の兒は黑きや白きや」と問はんに畢竟戲論なるを免れざるを以て、解答の限りに非ず、捨てて顧みざるが如し。

【八〇】隱密の故云云。第十一に隱顯門也。佛教の中に於て、聲聞乘の方便不了義教を隱密教、菩薩の眞實了義教を顯了教と云ふ。

是の如きの五義は、當に知るべし、普く一切の諸義を攝むることを。復た次に善男子よ、彼の諸の菩薩は、能く四種の義を了知するに由るが故に、名けて知義と爲す。何等か四義なるや。一には（八五）心執受の義、二には（八六）領納の義、三には（八七）了別の義、四には（八八）雜染清淨の義なり。善男子よ、是の如きの四義は、當に知るべし、一切の諸義を攝むることを。復た次に善男子よ、彼の諸の菩薩は、能く三種の義を了知するに由るが故に、名けて知義と爲す。何等か三義なるや、一には文の義、二には義の義、三には界の義なり。善男子よ、（八九）文の義と言ふは、謂く（九〇）名身等なり。（九一）義の義とは、當に知るべし、復た十種あることを。［謂く］一には（九二）眞實相、二には徧知相、三には永斷相、四には作

【八一】二を取る云云。佛果の無上菩提と二乘の菩提との二なり。

【八二】毘奈耶（Vinaya）。滅と譯す。煩惱を永久調伏する法なり。

【八三】沙門果。沙門（Śramaṇa）、譯して勤息と云ふ、善を勤修し、惡を止息するの意。聲聞の行者三界の煩惱を斷ずる不同に依りて四沙門果の階級あり。第一預流果、三界の見惑を斷じたる位。第二一來果、欲界九品の修惑中前六品を斷じたる位。第三不還果、後三品をも斷じ已り乃ち欲界の修惑悉く離れたる位。第四阿羅漢果、色界無色界の修惑をも斷じ已り乃ち三界一切の煩惱總べて悉く已に斷じたる位なり。

【八四】共にし共にせざる。三乘通有の功德を共の功德、佛果獨特の功德を不共の功德と云ふ。

【八五】心執受。心の感覺ある身なり。

【八六】領納。苦樂等を領納する受の心所なり。

【八七】了別。認識する八識心王なり。

【八八】雜染清淨。染淨の法なり、以上の身受心法は四念處觀の境なり。

【八九】文の義。文の一を擧げて名句の二を影顯す、即ち名句文の三能く義を彰顯す。

【九〇】名身等。句身文身を等す。身とは名句文の各各聚まれるを云ふ。

【九一】義の義。名句文に詮顯されたる義理なり。

【九二】眞實相云云。眞實相は七眞如の中の實相眞如なり、徧知相、永斷相、作證相、修習相の四は次第の如く苦集滅道の四諦の相なり。

證相、五には修習相、六には即ち彼の眞實相等の品類差別の相、七には(九三)所依能依相屬相、八には即ち徧知等の(九四)障礙法の相、九には即ち彼の(九五)隨順法の相、十には不徧知等及び徧知等の(九六)過患功德相なり。界の義と言ふは、謂く五種の界なり。一には器世界、二には有情界、三には(九七)法界、四には(九八)所調伏界、五には(九九)調伏方便界なり。善男子よ、是の如き五義は、當に知るべし、普く一切の義を攝むることを。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、若しは聞所成の慧、其義を了知し、若しは思所成の慧、其義を了知し、若しは奢摩他毘鉢舍那の修所成の慧、其義を了知す、此れ何の差別かある。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、聞所成の慧は、文に依止して、但だ其説の如くにして、未だ意趣を善くせず、未だ現在前せず、解脫に隨順すれども、未だ解脫を成ずる義を領受すること能はず。思所成の慧も亦た文に依る、惟だ說の如くなるのみならず、能く意趣を善くすれども、未だ現在前せず、轉た解脫に順

【九三】所依能作相屬相。能造四大種は所依、所造の色は能依なり、眼等の根は所依、識は能依なり、能詮の名句文は所依、所詮の義は能依なり、是の如き所依と能依との法繫屬して離れざるを云ふ。

【九四】障礙法の相。四諦智に斷ぜらるる煩惱を障礙法の相と云ふ。

【九五】隨順法の相。煩惱を斷ずる四諦智なり、是れ徧知に隨順する法なり。

【九六】過患功德。不徧知は過患なり、徧知は功德なり。

【九七】法界。五蘊十二處十八界等種種の法の差別界なり、即ち所詮の法門なり。

【九八】所調伏界。佛、菩薩に敎化調御せらるる種種なる種姓及機根の差別界を云ふ。

【九九】調伏方便界。佛菩薩の或は祕密に或は顯了に或は攝取

ずれども、未だ解脱を成ずる義を領受すること能はず。若しは諸の菩薩の修所成慧は亦たは文に依り、亦たは文に依らず、亦たは其の說の如く、亦たは其說の如くならず、能く意趣を善くし、所知の事の（一〇〇）同分なる三摩地所行の影像現前す、極めて解脱に順じ、已に能く解脱を成ずる義を領受す。善男子よ、是れを三種の知義の差別と名づく。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、奢摩他毘鉢舍那を修する諸の菩薩衆の知義知法に「於て」、云何んが智と爲し、云何んが見と爲すや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、我れ無量の門「を以て」。（一〇一）智と見との二種の差別を宣說せり。今當に汝が爲めに略して其相を說くべし。若しは總法を緣じて奢摩他毘鉢舍那を修する有らゆる妙慧、是れを名けて智と爲す。若しは別法を緣じて奢摩他毘鉢舍那を修する有らゆる妙慧、是れを名けて見と爲す。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、奢摩他毘鉢舍那を修する諸の菩薩衆は、何の作意に由つて、何等をか、云何にしてか諸相を除遣するや。』

し或は折伏し教化調御する方便を云ふ。

【一〇〇】同分。隨順相似の意。

【一〇一】智と見と。慧の上の決斷の用を智となし、推求の用を見となす。

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ。〔一〇二〕眞如作意に由て、〔一〇三〕法の相及び義の相を除遣す。若くは其名及び名の〔一〇四〕自性に於て、無所得なる時、亦彼の〔一〇五〕所依の相をも觀せず、是の如く除遣するなり。其名に於けるが如く、句に於てし、文に於てし。一切の義に於けるも、當に知るべし、亦爾りと。乃至界及び界の自性に於て、無所得なる時、亦彼の所依の相をも觀せず、是の如く除遣す。』

『世尊よ、〔一〇六〕諸の〔無分別智の〕了知する所の眞如の〔一〇七〕義相〔あり〕、此眞如の〔體〕相も亦た遣るべきや不なや。』

『善男子よ、了知する所の眞如の〔體〕義の中に於て、都て相あること無く、亦た所得無し、當に何の遣る所かあるべき。善男子よ、我れ說かく、眞如の義を了知する時、能く一切の法義の相を伏す。此の了達は餘の能く伏する所に非ず。』

『世尊よ、世尊の說きたまへるが如き濁水器の喩、不淨鏡の喩、〔一〇八〕撓泉池の喩〔に於ては〕、自の面影の相を觀察するに任へず〔とす〕。若し堪任る者〔あれば〕上と相違す。是の如く、若し善く心を修せざること有れば、則ち

【一〇二】眞如作意。眞如無相の理を緣ずる觀なり。

【一〇三】法の相云云。前に說く三種の義の中第一の文の義卽ち能詮の名句文を法の相と云ふ、第二の義の義卽ち名所詮の十種の義を義の相と云ふ、相とは影像相分なり、無分別智の位に眞如の理體に冥會して更に影像の相を變現せざるを相を除遣すと云ひ、又無所得と云ふなり。

【一〇四】自性。自體なり。差別に對する言。

【一〇五】所依の相。名は識に依る識は是れ所依なり、初地見道の位に無分別智に由て眞如觀に入るときは、境智平等にして一切依他の相永く泯亡し去り所取の名も能取の心も都て所得無きを云ふ。

【一〇六】諸の了知する所云云。前文は無分別智の位に依他有爲

如實に所有る眞如を觀察するに堪任ず。若し善く心を修すれば、觀察するに堪任ふと。此れは何等の能觀察の心を說き、何なる眞如に依つて、而かも是の說を作したまふや。』

『善男子よ、此れは三種の能觀察の心を說けるなり。謂く聞所成能觀察の心、若しは思所成能觀察の心、若しは修所成能觀察の心なり。了別眞如に依つて是の如きの說を作せり。』

『世尊よ、是の如く法義を了知する菩薩、諸相を遣んが爲めに加行を勤修す。幾種の相あつてか除遣すべきこと難きや、誰か能く除遣するや。』

『善男子よ、十種の相あり、(一〇九)空［を觀じて］能く除遣す。何等をか十と爲すや。一には法義を了知するが故に、種種なる文字の相あり、此れは(一一〇)一切法空に由つて、能く正しく除遣す。二には(一一一)安立眞如の義を了知するが故に、生滅住異の性、相續隨轉の相あり、此れは(一一二)相空及び無先後空に由つて、能く正しく除遣す。三には(一一三)能取の義を了知するが故に、(一一四)顧戀身の相及び我慢の相あり、此れは(一一五)內空及び無所得空に由つて、能く正しく除遣す。四には(一一六)所取の義を了知するが故に、(一一七)顧

の衆相を遣り捨て、唯眞如の理體にのみ寘會するを云ひ、今此の文は無分別智の寘證する眞如は之れを遣るや否やを說く。

【一〇七】義相。義も相もともに體性の義。

【一〇八】撓泉池。かきみだれたる水。

【一〇九】空。差別の執相を否定泯亡して、眞如の妙理に體達し無相無所得ならしむる觀智を空觀と云ふ。之れに四空、十六空、十八空、二十空の說あり。今文十七空を以て遍計の執相を破りて言亡慮絕の域に至らしむ。

【一一〇】一切法空。執して實有とする五蘊、十二處、十八界等の一切法は皆空なりと觀するを云ふ。

【一一一】安立眞如。安立眞如とは苦諦の眞如のことなれども今

戀財の相あり、此れは(二八)外空に由つて、能く正しく除遣す。五には受用の義、男女の承事と資具の相應とを了知するが故に、內〔の六根處〕の安樂の相、外〔の六境處〕の淨妙の相あり、此れは(二九)內外空及び(三〇)本性空に由つて、能く正しく除遣す。六には(三一)建立の義を了知するが故に、無量の相あり、此れは(三二)大空に由つて、能く正しく除遣す。七には(三三)無色を了知するが故に、內の寂靜解脫の相あり、此れは(三四)有爲空に由つて、能く正しく除遣す。八には相眞如の義を了知するが故に、補特伽羅無我の相、法無我の相、若しは唯識の相及び勝義の相あり。此れは(三五)畢竟空、(三六)無性空、(三七)無性自性空及び(三八)勝義空に由つて、能く正しく除遣す。九には淸淨眞如の義を了知するに由る

は眞如を擧げて安立の苦諦法を取る。

【二二】相空及び云云。相空とは、法の自相共相を空す。無先後空とは、生死は長遠にして無始無終なり、前後際なしと空す。苦果に生住異滅の四相ありと執するは、相空を以て遣り、苦果に三世相續の相ありと執するは、無先後空を以て除く。

【二三】能取。內の眼等の六根なり、能く色等六境を取る。

【二四】顧戀身の相云云。六根の能取を了知するに由つて、內身を顧戀し自我を執著するを顧戀身の相と云ふ、我有りと執するに由つて、我慢を起すを我慢の相と云ふ。

【二五】內空及び云云。內空とは內の六根を空す、無所得空とは實我の得べき無し何んぞ慢を起さんと觀す。內空を以て顧戀身の相を除き、無所得空を以て我慢相を遣る。

【二六】所取。外の色等の六境なり、眼等六根に取らるる對境なり。

【二七】顧戀財の相。財寶を愛著する我所見の執相なり。

【二八】外空。外の六境を空す。

【二九】內外空。內外とは內の六根外の六境卽十二處なり、內外は相對して立つ、外旣に空なり內亦空なり、內旣に空なり外亦空なりと觀ずるを內外空と云ふ。

【三〇】本性空。有爲無爲一切法の空なるは本性として然なり人爲の作す所に非ず、譬へば水の性自ら冷なり、火滅すれば熱湯還た冷の本性に歸するが如く、衆緣を假り來りて空ならざるに似たれども其本性實に空なりと觀ずるを本性空と云ふ、內外空の觀の內空は

が故に、無爲の相、無變異の相あり、此れは(二九)無爲空と、(三〇)無變異空とに由つて、能く正しく除遣す。十には卽ち彼の相の對治の空性に於て、作意し思惟するが故に、空性の相あり、此れは(三一)空空に由つて、能く正しく除遣す。』

『世尊よ、是の如き十種の相を除遣する時、何等を除遣して、何等の相に從つて而かも解脫を得るや。』

『善男子よ、(三二)三摩地所行の影像の相を除遣して、雜染縛の相に從つて、而も解脫を得て、彼「解脫を執する心」をも亦た除遣す。善男子よ當に知るべし、勝れたるに就て、是の如きの空、是の如きの相を治すと說く。一一「の觀」一切の相を治せざるには非ず。譬へば無明は、乃至老死の諸の雜染法を生ずること能はざるに非ざれ

內染、外空は外淨を除き、本性空は通じて內染外淨を遣る。

【二一】建立の義。三千大千世界無量の器世間が事情を建立任持するの義。

【二二】大空。十方無量の世界空なりと觀ず。

【二三】無色。第六は欲界色界の器世間相を說く、今第七は無色界の內の寂靜解脫相を辨ず。修定の行者、四無色定を得て解脫涅槃なりと謂ふ、此を內の寂靜解脫の相と云ふ。

【二四】有爲空。三界有爲の諸法を空す。

【二五】畢竟空。諸法を空じて畢竟不可得なりと觀ず、此の畢竟空に由つて、補特伽羅無我卽ち人無我と法無我との二無我の相を除く。

【二六】無性空。實有の法は少性たりとも得べき無しと空ずる觀なり。

【二七】無性自性空。諸法實有の性無きが故に無性空と云ふ、而も此の無性空は其の自性無きにあらず、無性を以て自性となすと觀ず、此の無性自性空に由つて依他勝義の相を除く。

【二八】勝義空。眞如勝義の理體卽空なるを觀ず、此の勝義空に由て、圓成勝義の相を除く。

【二九】無爲空。生住異滅の四相に爲作せらるる無きを觀ず。

【三〇】無變異空。亦無散空とも言ふ、五蘊皆空なりと觀ずるが故に、衆生濟度の事永く放散し棄捨し變異する無き也、卽ち所修の善窮盡すること無らんが爲に此の觀を作す、佛は大悲の故に無餘涅槃に入るも本願を捨てず機に隨ひ恒に應化を現す、二乘の大悲無きが故に無餘涅槃に至れば散捨灰滅するに同からず。

ども、勝れたるに就て、但だ能く行のみを生ずと說くが如し。是れ諸の行の（一三三）親近の緣なるに由るが故なり。此中の道理も當に知るべし亦た爾なりと。』

爾の時慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、此中何等の空か是れ總空の性相なるや。若し諸の菩薩是れを了知し已らば、失壞あること無く、空の性相に於て、增上慢を離れん。』

爾の時世尊、慈氏菩薩を歎じて曰はく、

『善い哉、善い哉、善男子よ、汝今乃ち能く、如來に是の如きの深義を請問し、諸の菩薩をして、空の性相に於て（一三四）失壞あること無からしむ。何以ば、善男子よ、若し諸の菩薩、空の性相に於て失壞することある者は、便ち（一三五）一切大乘を失壞すと為せばなり。是の故に汝應に諦に聽き諦に聽くべし。當に汝が為めに總空の性相を說くべし。善男子よ、（一三六）若し依他起相及び圓成實相の中の一切品類の雜染清淨に於て、遍計所執相の畢竟じて遠離せる性及び此の中に於て都て無所得なる、是の如きを名けて大乘の中に於ける總空の性相と為す。』

【一三一】空空。能除の空をも空ずるを空空と云ふ。諸法空なりとするは猶有所得に墮す、故に空空の觀に由て空性の相を遣る。

【一三二】三摩地云云　證智起りて空觀の中の空の相分を除くを云ふ。

【一三三】親近の緣。最も親しき緣なり、十二因緣の中無明・行、識等と次第し、無明は行に望めて親近の緣なるが如し。

【一三四】失壞。損減惡取空の人の眞理を得るを云ふ。

【一三五】一切大乘。大般若經に十八空等を說くを指す。

【一三六】若し依他云云　依他圓成の有なるをも一向に空ずる人を惡取空者となす。

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、此の奢摩他毘鉢舍那は、能く幾種の勝三摩地を攝むるや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、我が所説の如く、無量の聲聞、菩薩〔及び〕如來に無量種の勝三摩地あり。當に知るべし、一切皆此れに攝めらると。』

『世尊よ、此の奢摩他毘鉢舍那は何を以て因と爲すや。』

『善男子よ、清淨の（二三七）尸羅、清淨の聞思所成の正見を以て、其の因と爲す。』

『世尊よ、此の奢摩他毘鉢舍那は何を以て果と爲すや。』

『善男子よ、（二三八）善清淨心、（二三九）善清淨慧を以て、其の果と爲す。復た次に善男子よ、一切の聲聞及び如來等の所有の世間及び出世間の一切の善法は、當に知るべし、皆是れ此の奢摩他毘鉢舍那所得の果なりと。』

『世尊よ、此の奢摩他毘鉢舍那は、能く何の業をか作すや。』

『善男子よ、此れは能く二縛を解脱するを業と爲す。所謂相縛及び麤重縛なり。』

『世尊よ、佛の所説の如き、五種の繫の中に〔於て〕、幾ばくか是れ奢摩他の障、幾ばくか是れ毘鉢舍

【二三七】尸羅（Sīla）。清涼又は戒と譯す。戒は能く身口の惡を防ぎ煩惱の熱を去り心地をして清涼ならしむるが故なり、今清淨の尸羅とは止觀中の定共戒なり。

【二三八】善清淨心。心とは定を云ふ、是れ奢摩他の果なり。

【二三九】善清淨慧。是れ毘鉢舍那の果なり。

那の障、幾ばくか是れ倶の障なるや。』

『善男子よ、身と財とを顧戀するは、是れ奢摩他の障なり。諸の聖教に於て、欲するに隨ふことを得ず、〔これに由つて教意を分別すること能はず〕是れ毘鉢舍那の障なり。相ひ雜住することを樂むと、少きに於て喜足するとは、當に知るべし倶の障なりと。第一に由るが故に造修すること能はず。第二に由るが故に、修むる所の加行、究竟に到らざるなり。』

『世尊よ、(一四〇)五蓋の中に於て、幾ばくか是れ奢摩他の障、幾ばくか是れ毘鉢舍那の障、幾ばくか是れ倶の障なるや。』

『善男子よ、掉擧と(一四一)惡作とは是れ奢摩他の障なり、惛沈と(一四二)睡眠と疑とは是れ毘鉢舍那の障なり、貪欲と瞋恚とは、當に知るべし倶の障なりと。』

『世尊よ、何に齊りて奢摩他道の圓滿清淨を得ると名くるや。』

『善男子よ、乃し所有る惛沈と睡眠とに至るまで正しく善く除遣す、是れに齊つて、奢摩他道の圓滿清淨を得ると名づく。』

『世尊よ、何に齊りて毘鉢舍那道の圓滿清淨を得ると名くるや。』

『善男子よ、乃し所有る掉擧と惡作とに至るまで正しく善く除遣す、是れに齊つて毘鉢舍那道の圓

【一四〇】五蓋。貪欲、瞋恚、睡眠、掉悔(掉擧、惡作)及び疑等の五煩惱なり。蓋とは障の義、止觀を障ふるの意なり。

【一四一】惡作。所作を憎惡する追悔の心所なり、善を作りて悔い、惡を作さざりしを悔ゆる煩惱なり。

【一四二】睡眠。心を惛昧ならしむる煩惱なり。

滿清淨を得ると名づく。』

『世尊よ、若しは諸の菩薩は、奢摩他毘鉢舍那現在前する時に於て、應に幾種の心の散動法を知るべきや。』

『善男子よ、應に知るべし、五種あることを。一には作意散動、二には外心散動、三には內心散動、四には相散動、五には麤重散動なり。善男子よ、若しは諸の菩薩は大乘相應の作意を捨て、聲聞獨覺相應の諸の作意の中に墮在す、當に知るべし是れを作意散動と名くることを。若しは其の外の(二四三)五種の妙欲の諸の雜亂相に於ける所有る尋思の隨煩惱の中、及び其の外の所緣の境の中に於て、心を縱にして流散す、當に知るべし、是れを外心散動と名づくと。若しは惛沈及び睡眠に由り、或は沈沒に由り、或は(二四四)愛味の三摩鉢底に由り、或は隨一の三摩鉢底の諸の(二四五)隨煩惱に染汚せらるるに由る[あり]、當に知るべし、是れを內心散動と名くることを。若しは外相に依つて、內の(二四六)等持所行の諸相に於て、作意し、思惟するを相散動と名づく。若しは內の作意を緣として、所有る(二四七)諸受を生起し、(二四八)麤重の身に由つて、我を計し、慢を起す[あり]、當に知るべし、是れ

【二四三】五種の妙欲。色・聲・香・味・觸の五塵の境を妙なりとする貪欲を云ふ。

【二四四】愛味の三摩鉢底。三摩鉢底(Samāpatti)は等至と譯す。定の異名なり。四禪八定隨一の定に入り、定味を愛著するを愛味の三摩鉢底と云ふ、卽ち愛味の定なり。

【二四五】隨煩惱。貪瞋癡慢疑及び惡見の六を根本煩惱と云ふ、此の根本煩惱に隨從して生起する忿覆等の煩惱を隨煩惱と云ふ。

【二四六】等持。梵に三摩地(Samādhi)と云ふ、定の異名なり。

【二四七】諸受。定中に受くる喜樂なり、之れを計して我所となす。

【二四八】麤重の身。煩惱の氣分卽ち種子を麁重と云ふ、此れあるに依り身硬澁にして圓轉自在なる能はず、この不自在なる

を麁重散動と名づくることを。』

『世尊よ、此の奢摩他毗鉢舍那は、初の菩薩地より乃至如來地に〔於て〕、何の(二四九)障をか對治するや。』

『善男子よ、此の奢摩他毗鉢舍那は、初地の中に於て、(二五〇)惡趣の煩惱と業と生との雜染障を對治し、第二地の中にては、(二五一)微細の悞犯現行する障を對治し、第三地の中にては、(二五二)欲貪障を對治し、第四地の中にては、(二五三)定愛及び法愛の障を對治し、第五地の中にては、(二五四)生死涅槃を一向に背趣する障を對治し、第六地の中にては、(二五五)相多く現行する障を對治し、第七地の中にては、(二五六)細相現行する障を對治し、第八地の中にては、(二五七)無相〔觀〕に於て功用を作し、及び〔化身及金銀等の〕有相に於て自在を得ざる

身に於て謬り計して自在の我なりと執す。

【二四九】障。惑障なり。此に二あり。一に煩惱障、我執より起る。二に所知障、法執より起る。此の二に各分別起と俱生起とあり。分別起は邪師邪敎邪思惟の分別力に依りて起る者、即ち實に我の存在を思索し我の斷常一異を計度する如き智的の迷謬也。俱生起は身と俱に起るもの、此身あれば則ち此肉體を愛し貪慾色情自ら起る如き情的の惑障なり。

【二五〇】惡趣の煩惱云云。以下十地の菩薩及如來地に於て煩惱所知の二障を十一障に分ちて地地に分斷することを說く中今文は初地見道位に斷する障なり。惡趣の煩惱とは地獄餓鬼畜生の三惡趣の果報を感ずる業因を發する分別起の不共無明なり。惡趣の業とは不共無明に發せられ、惡趣の果を招く不善の業力なり。惡趣の生とは不善業に由り受生したる惡趣の集報なり。此の惑業苦の三は有漏雜染の法なるが故に雜染障と云ふ。初地見道の位には二空の眞如に體達するが故に迷理の分別起の二障自ら斷ぜらるるなり。

【二五一】微細の悞犯現行する障。微細なる俱生所知障の一分なり、愚にして境を知ると明ならざるが爲め知らず識らず誤て身口意三業に罪を犯すの障也。路を歩むに誤て蟲を履み傷け、不殺生戒を犯すに至る障を謂ふ。第二離垢地の位に清淨の戒波羅蜜を行ずるが故に、破戒の垢を離るるを得。

【二五二】欲貪障。闇鈍障とも云ふ。俱生の所知障の一分なり、五欲を貪り心散亂し、爲めに定と修慧とを障へ、愚闇癡鈍に

障を對治し、第九地の中にては、(一五八)一切種の善巧なる言辭に於て自在を得ざる障を對治し、第十地の中にては、(一五九)圓滿法身を證得するを得ざる障を對治す。善男子よ、此の奢摩他毘鉢舍那は、(一六〇)如來地に於て、極微細、最極微細なる煩惱障及び所知障を對治す。能く是の如き〔二〕障を永害するに由るが故に、究竟して、〔所知障の〕著なき〔法空觀〕と〔煩惱障の〕礙なき〔人空智〕との一切〔二空〕の智見を證得し、所作成滿の所緣に依つて、最極清淨なる法身を建立す。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、云何んが、菩薩は奢摩他毘鉢舍那に依つて、勤めて修行するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を證得するや。』

して法を忘失する障を謂ふ。第三發光地の位には無量の妙慧光を發するが故に、此の障を斷ずるなり。

【一五三】**定愛及び法愛**。微細なる煩惱現行する障を云ふ、俱生所知障の一分なり。定愛法愛とは無漏定及び無漏大乘の教法を愛著するを云ふ、微細の所知障身を離れざるが故に、定愛法愛の煩惱隨つて起り、法無我等の念住の觀を障ふ。今第四焰慧地の位に慧焰彌々増す時、俱生身見を斷じ、定愛法愛亦た永く現行せざるなり。

【一五四】**生死涅槃云云障**。即ち下乘般涅槃障なり、生死の苦を厭背し、涅槃の滅を欣趣する障にして是れ亦た俱生所知障の一分なり、厭苦欣滅は二乘の欲する所、而して是れ菩薩の障とする所なり。今第五極難勝地の位に眞俗不二の悟を開き、生死涅槃無差別の觀に入りぬる時、此の障を斷じ、復た再び二乘下劣の心を起すことなし。

【一五五】**相多く現行する障**。即麁相現行障にして俱生所知障の一分なり、滅道の淨相を取り實に有りと執するが故に有相の觀多く行じて未だ無相なる能はざる障なり。第六現前地の位に無分別最勝の般若を引き起す時此の障を斷ず。

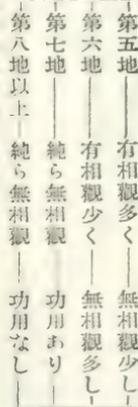
【一五六】**細相現行する障**。流轉の生滅と還滅の無相に於て微細の相ありと執する俱生所知障の一分なり、未だ無相の空觀に即して化他の有の勝行を起す能はざるを障となす。第七遠行地の位には此の偏空の障を遠離し無相に住して而も衆生濟度の勝行を起すなり。

【一五七】**無相に於て云云**。第七地

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、若しは諸の菩薩は、已に奢摩他毗鉢舍那を得て、七眞如に依つて、聞く所思ふ所の如き法の中に於て、勝定の心に由つて、善く審定せる、善く思量せる、善く安立せる眞如性の中に於て、內に正しく思惟す。彼れ眞如に於て正しく思惟するが故に、心は一切の細相の現行に於て、尙ほ能く棄捨す。何況んや麁相をや。善男子よ、細相と言ふは、〔一六一〕謂く心の所執受の相、或は領納の相、或は了別の相、或は雜染淸淨の相、〔一六二〕或は內相、或は外相、或は內外の相、或は我れ當に一切の有情を利することを修行すべしと謂ふの相、〔一六三〕或は正智の相、或は眞如の相、〔一六四〕或は苦集滅道の相、〔一六五〕或は有爲の相、或は無爲の相、〔一六六〕或は有常の相、或は無常の相、

に於ては多くは無相觀に入るを得れども尙加行の功力を要し、未だ任運なる能はず、是れ倶生所知障の然らしむる所なり。又化他の身相或は金銀魚米等の相を任運自在に變現する能はず。今第八不動地に入る時此の障を斷じて功用に動ぜらるゝ無く任運に無相の觀に住するを得、自在に化身の相を變じて說法し金銀等の相を現じて施與することを得是れ觀心自在の妙用なり。因みに十地の行の有相、無相、有功用、無功用の別を示さん。

第五地――有相觀多く――無相觀少し
第六地――有相觀少く――無相觀多し
第七地――純ら無相觀――功用あり
第八地以上――純ら無相觀――功用なし

【一五八】一切種の善巧云云。善巧なる言辭とは善く機宜に適し辯說巧妙なるを云ふ。倶生の所知障に障へられて巧に說く能はず、竟に進んで利生の行を好まざるに至る。今第九善慧地に於て微妙の四無礙智を成就し此の障を斷ず。

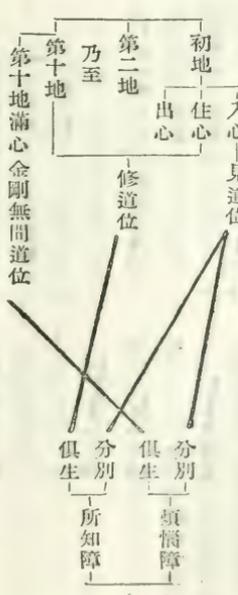
【一五九】圓滿法身云云。大神通の事業を障へて自在なる能はず、微細なり祕密なる眞如の法身を障へて圓滿する能はざらしむる倶生所知障の一分なり。第十法雲地に大法智を得る時此の障を斷じ、陀羅尼三摩地等定慧の功德を生じて法身の果體を圓滿するなり。

【一六〇】如來地に於て云云。極微細最極微細の煩惱障とは十地の間故らに留め未だ斷ぜざりし一切の倶生煩惱障なり、所知障とは十地の間地地に分斷

(一六七)或は苦有變異性の相、或は苦無變異性の相、(一六八)或は有爲異相の相、或は有爲同相の相、(一六九)或は一切は是れ一切なりと知り已つて、一切を有する相。(一七〇)或は補特伽羅無我の相、或は法無我の相なり。彼〔諸の相〕現行するに於て〔眞如觀の〕心能く棄捨す。彼れ既に多く是の如きの行に住するが故に、時時の閒に於て、其一切の(一七一)繫蓋散動に從て、善く心を修治す。是れより已後、七眞如に於て、七各別なる自ら內に證する所の(一七二)通達智生ずることあり、〔是れを〕名けて(一七三)見道と爲す。此れを得るに由るが故に、菩薩の(一七四)正性離生に入り、如來の家に生れ、初地を證得すと名づく。又た能く此の地の勝德を受用す。彼れ先時に於て、奢摩他毘鉢舍那を得たるに由るが故に、已に二種の所

せしものの殘餘の一分なり。是れ佛果の障にして、實には第十地の滿心金剛無間道の位に斷ずるなり、如來地の障なるが故に義を以て如來地に於て對治すと言ふのみ。凡そ十地の斷惑は皆入位斷惑にして當地の智を以て當地の障を斷ず、又佛果の障は斷惑入位にして第十地金剛心の智を以て佛果障を斷じ畢りて方さに佛果に入るなり。因みに十地斷惑を圖示せん。

初地（入心—見道位、住心、出心）
第二地
乃至
第十地
—修道位
第十地滿心金剛無間道位

煩惱障（分別、倶生）
所知障（分別、倶生）

【一六二】謂く心の所執受云云。以下の四相は次第の如く身受心法の四念處觀の境なり。

【一六三】或は內相云云。以下の三相は內外に約す、內相とは六根、外相とは六境なり、根境合して內外相と云ふ。

【一六三】或は正智の相云云。此の二は五法に約して且く無漏の正智と如如の眞如とを說く。

【一六四】或は苦集滅道。此は四諦に約す。

【一六五】或は有爲云云。此の二は有爲無爲に約す。

【一六六】或は有常云云。此の二は常無常に約す。

【一六七】或は苦有變異性云云。此の二は三苦に約し苦苦壞苦を

縁を得たり。謂く有分別影像の所縁及び無分別影像の所縁なり。彼れ今時に於て、見道を得るが故に、更に事邊際〔眞如〕の所縁を證得す。復た後後の一切地の中に於て、修道を進修す。即ち是の如き三種の所縁に於て、作意し、思惟す。譬へば人あつて其の細楔を以て麤楔を出すが如く、是の如く菩薩は、此の楔を以て楔を出す方便に依つて、内相を遣るが故に、一切の雜染分別に隨順する相を皆悉く除遣す。相を除遣するが故に、麤重をも亦た遣る。一切の相と麤重とを永へに害するが故に、漸次に彼の後後の地の中に於て、錬金の法の如く、其心を陶錬し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を證得し、又た所作成滿の所縁を得るなり。善男子よ、是の如く菩薩は内の止觀に於て、正しく修行するが故に、阿耨多羅三藐三菩提心を證得す。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

有變異とし、行苦を無變異となす。

【一六八】或は有爲異相云云。此二は有爲の同異相に約し、色心受想等自相各各異なるが故に有爲異相とし、苦無常等も共に同なるが故に有爲同相となす。

【一六九】或は一切云云。一切は是れ一切とは色心諸法の自相なり、一切を有する相とは可見不可見等一切差別の相なり。

【一七〇】或は補特伽羅云云。此の二は二無我の相なり。

【一七一】繫蓋散動。散動のこと。五繫五蓋六散動あり。

【一七二】通達智。眞如に契會し體達する根本無分別智なり。

【一七三】見道。菩薩二大阿僧祇劫の間住行向三十心の修行を終へて方さに十地の中の初地に入る、初地に入住出三心の別あり、其入心の位を見道となす、此位に於て絶對無分別智を起し、分別起の二障を頓斷し、我法二空の眞理を直覺大悟す。斯く眞理を證見するが故に見道と名く。

【一七四】正性離生。見道の異名なり。正性とは無漏の聖道なり、離生とは分別起の煩惱を斷ずるを謂ふ。生とは未熟の食物なり、之を食すれば病を犯すが如く、分別の障あれば六道の苦を招くに譬ふ。

『世尊よ、云何んが修行して菩薩の廣大なる威徳を引發するや。』

『善男子よ、若し諸の菩薩、善く六處を知れば、便ち能く菩薩所有の廣大なる威徳を引發す。一には善く心生を知り、二には善く心住を知り、三には善く心出を知り、四には善く心增を知り、五には善く心減を知り、六には善く方便を知る。

云何んが善く心生を知るや、謂く如實に十六行の心生起する差別を知る、是れを善く心生を知ると名づく。十六行の心生起する差別とは、一には（一七五）不可覺知堅住器の識生ず、謂く（一七六）阿陀那識なり。二には（一七七）種種行相所緣の識生ず、謂く頓に一切の色等の〔六〕境界を取る分別の意識及び頓に內〔六根〕外〔六境〕の境界を取る覺受なり。（一七八）或は頓に一念、瞬息、須臾に於て、現に多くの定に入り、多くの佛土を見、多くの如來を見る分別の意識なり。（一七九）三には小相所

【一七五】不可覺知堅住器の識。第八識を謂ふ。認識の狀態は微細難知なるが故に不可覺知と云ひ、恒相續の故に堅住と云ひ、器世界即ち山河大地を能く變じ能く緣するが故に器と云ふ。

【一七六】阿陀那識。第八識の一名にして此に執持と譯す、諸根大種及諸法の種子を執持して失はざらしむるが故なり。

【一七七】種種行相所緣の識。第六意識なり。行相とは、能緣の行解の相貌即ち認識の狀態なり。所緣とは客觀の對境即ち色聲等六境なり。第六意識はその對境の種種なるに從つて亦た種種なる認識をなす、故に種種行相所緣の識と云ふ。是れ即ち五俱の意識なり。

【一七八】或は云云。此は無漏定中の意識なり、後得智にして正體智に非ず、故に分別の意識と云ふ。一念とは一刹那なり、瞬息とは梵に臘縛と云ひ、須臾とは梵に牟呼栗多と云ふ、百二十刹那を一怛刹那となし六十怛刹那を一臘縛となし、三十臘縛を一牟呼栗多となす。

【一七九】三には小相所緣云云。以下の五は五相に約して阿賴耶識を說く、欲界有執受の身は下劣狹少なれば小相と云ひ、欲界の第八識はその狹少執受の身を所緣とするが故に小相所緣の識と云ふ。

【一八〇】四には大相云云。色界の身は廣大なれば大相と云ふ、

緣の識生ず、謂く欲界繫の識なり。(一八〇)四には大相所緣の識生ず、謂く色界繫の識なり。(一八一)五には無量相所緣の識生ず、謂く空と識との無邊處繫の識なり。(一八二)六には微細相所緣の識生ず、謂く無所有處繫の識なり。(一八三)七には邊際相所緣の識生ず、謂く非想非非想處繫の識なり。(一八四)八には無相の識生ず、謂く出世の識及び滅を緣ずる識なり。九には苦俱行の識生ず、謂く地獄の識なり。十には(一八五)雜受俱行の識生ず、謂く欲[界]に行ずる識なり。十一には喜俱行の識生ず、謂く初二靜慮の識なり。十二には樂俱行の識生ず、謂く第三靜慮の識なり。十三には(一八六)不苦不樂俱行の識生ず、謂く第四靜慮より乃至非想非非想處の識なり。十四には染汚俱行の識生ず、謂く諸の煩惱及び隨煩惱相應の識な

色界の第八識はその廣大なる執受の身を所緣とするが故に大相所緣の識と云ふ。

【一八一】五には無量云云。無色界有情の定心の麁細勝劣に隨て四階の別あり、中に於て空無邊處と識無邊處との第八識は空無量及び識無量の行解を爲し、熏じたる種子を執受の所緣とするが故に無量相所緣の識と云ふ。

【一八二】六には微細相所緣云云。無色界の中の無所有處は所緣の空既に無なり、能緣の識亦無なり、一切の所有無しと觀じ、主觀客觀ともに超越したる微細の定心なり、第八識は此の微細定心の熏じたる種子を執受の所緣とするが故に微細相所緣の識と云ふ。

【一八三】七には邊際相所緣云云。無色界の中の非想非非想處は麁想に非ず而も細想に非ざるにも非ずと觀ずる定心にして是實に三界中に於て最後邊の處なれば邊際と名く。第八識は此の最後邊際の行解をなして熏じたる種子を執受の所緣とするが故に邊際相所緣と云ふ。

【一八四】八には無相の識云云。出世の識とは無漏の識也、有漏戲論の相を離れたるが故に無相の識と云ふ。滅を緣ずる識とは有漏無漏の滅諦涅槃の理を緣ずる識也、無相の理を緣ずるが故に無相の識と云ふ。

【一八五】雜受俱行の識。苦樂雜り受くる欲界人天の識なり。

【一八六】不苦不樂。捨受なり。

【一八七】信等。十一の善の心所なり。

【一八八】心住。眞如は識心の所依實性なるを云ふ。

【一八九】了別眞如。了別とは識なり。識の實性を了別眞如と云

り。十五には善俱行の識生ず、謂く(一八七)信等相應の識なり。十六には無記俱行の識生ず、謂く彼〔善染〕と俱に相應せざる識なり。云何んが善く(一八八)心住を知るや、謂く如實に(一八九)了別眞如を知るなり。云何んが心出を知るや、謂く如實に二種の縛を出づることを知る、所謂相縛及び麤重縛なり。此れは能く善く其心をして、是の如きより出でしむべきことを知るなり。云何んが善く心增を知るや、謂く如實に、相縛麤重縛を治する心の、彼れ增長する時、彼れ積集する時に亦た增長するを得、亦積集するを得と知るを、能く增を知ると名づく。云何んが善く心減を知るや、謂く如實に、彼の所對治の相及び麤重に雜染せらるる心の、彼れ衰退する時、彼れ損減する時に此れも亦た衰退し、此れも亦た損減すと知るを、善く減を知ると名づく。云何んが善く方便を知るや、謂く如實に(一九〇)解脫、(一九一)勝處及び(一九二)徧處の或は修し、或は遣るを知るなり。善男子よ、是の如く菩薩は、諸の菩薩の廣大なる威德に於て、或は已に引發し、或は當に引發し、或は現に引發するなり。』

慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

ふ。唯識觀の智、無分別智所證の眞如は識の實性なりと知る。

【一九〇】解脫。八解脫なり。(一)內に色想あり外色を觀じて解脫す、(二)內に色想なく外色を觀じて解脫す、(三)淨解脫を身に作證し具足して住す、(四)空無邊處の解脫、(五)識無邊處の解脫、(六)無所有處の解脫、(七)非想非非想處の解脫、(八)滅受想定の解脫を身に作證し具足して住す。

【一九一】勝處。八勝處なり。(一)內に色想あり外色の少を觀ず、(二)內に色想あり外色の多を觀ず、(三)內に色想無く外色の少を觀ず、(四)內に色想なく外色の多を觀ず、(五)內に色想無く外色の靑を觀ず、(六)內に色想無く外色の黃を觀ず、(七)內に色想なく外色の赤を觀ず、(八)內に色想なく外色の白を觀ず。

『世尊よ、世尊の說きたまふが如く、(一九三)無餘依涅槃界の中に於て、一切の諸受、餘り無く永く滅す。何等の諸受か此に於て永く滅するや。』『善男子よ、要を以て之れを言はば、二種の〔有漏の〕受ありて餘り無く永く滅す。何等をか二と爲すや、(一九四)一には〔六根を〕所依とし〔有漏〕麤重〔の隨ふ所〕の受、(一九五)二には彼の〔六根の〕果たる〔六〕境界の受なり。所依麤重の受に當に知るべし(一九六)四種あることを。一には有色所依の受、二には無色所依の受、三には果已成滿麤重の受、四には果未成滿麤重の受なり。果已成滿の受とは、謂く現在の受なり。果未成滿の受とは、謂く未來の因受なり、彼の果たる境界の受にも(一九七)亦た四種あり、一には依持の受、二には資具の受、三には受用の受、四には顧戀の受

【一九二】徧處。十徧處なり。

一 地大徧一切處
二 水大徧一切處
三 火大徧一切處
四 風大徧一切處
五 青色徧一切處
六 黃色徧一切處
七 赤色徧一切處
八 白色徧一切處
九 空無邊處
十 識無邊處

【一九三】無餘依涅槃。有餘依涅槃に對する語。有餘依涅槃とは煩惱障を解脫して顯はれたる眞如なり。煩惱を斷盡すと雖も過去煩惱の殘餘たる現在苦果の依身滅せずして猶有るが故に有餘依と云ふ。無餘依涅槃とは是亦煩惱を斷じ顯はしたる眞如なり、啻に煩惱のみならず餘依の苦果依身をも亦滅し隨て心智等の一切の有爲法自ら皆滅し唯寂滅の眞理のみなるを無餘涅槃と云ふ。但し以上は三乘に通じて大小乘共通の解釋なり、若し大乘の意は有餘依無餘依の餘依とは有漏異熟果の第八阿賴耶識を云ふ、煩惱を斷ずるも有漏の第八識尙有るを有餘涅槃となし有漏第八識も亦滅するを無餘涅槃となす。故に佛世尊は有漏第八識を滅して無餘涅槃を證すれども、無漏第八識大圓鏡智と相應して無漏の色身を變じ、盡未來際攝化利生するなり。

【一九四】一には所依云云。內の六根に依りて生じ、有漏麤重の種子隨逐する所の受なり。

【一九五】二には彼の果云云。六根、所生の果たる六境を緣じて生ずる受なり。

【一九六】四種。(一)有色所依の受、有色の五根を所依とする前五識と相應する受(二)無色所依

なり。有餘依涅槃界の中に於て〔金剛心の位に〕〔一九八〕果未成滿の〔惑業相應有漏の〕受一切已に〔斷〕滅し彼の〔能〕對治の〔無漏〕明の觸より生ぜられたる〔盡無生の智相應〕受を領し、〔一九九〕共有〔の器世界〕〔二〇〇〕或は復た彼の果已成滿の受を領受す。〔二〇一〕又た二種の受一切已に滅して、唯だ現に明の觸より生ぜられたる受を領受す。無餘依涅槃界の中に於て、般涅槃する時、此〔明の觸より生ぜられたる受〕亦た永く滅す。是の故に說いて、無餘依涅槃界の中に於て、一切の諸受餘り無く永く滅すと言ふなり。』

爾の時世尊、是の語を說き已つて、復た慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善い哉、善い哉、善男子よ、汝今善く能く、圓滿最極淸淨の〔二〇二〕妙瑜伽道に依止して、如來に請問す。汝瑜伽に於て已に決定の最極善巧を得、吾れ已に汝が爲めに、圓滿最極淸淨の妙瑜伽道を宣

の受、無色の心法を所依とする第六意識と相應する受。(三)果已成滿麤重の受、過去惑業の果たる現在の受。(四)果未成滿麤重の受、未來の因たる現在の惑業相應の受なり。

【一九七】亦た四種。(一)依持の受、有情を依持する器世界を緣ずる受。(二)資具の受、衣藥等資生の具を緣ずる受。(三)受用の受、前の二受を合說するのみ。(四)顧戀の受。財物を顧戀する受なり。

【一九八】果未成滿云云。以下有餘涅槃無餘涅槃中の滅受の多少を說くに二說あり、此は第一說なり。

【一九九】共有。上に言ふ所の依持の受卽ち共業所感の器世界を受用するを云ふ。資具受用の二受も有れど略して說かず、但し顧戀受は惑業相應なるが故に有餘涅槃界の中に無し。

【二〇〇】或は復た彼の果已成滿の受。果已成滿の受の中に有麁重無麁重の二あり、中に於て無麁重の受ならば或は亦領受す。有色所依受、無色所依受も有れども略して說かず。

【二〇一】又た二種の受。此は第二說なり、二種の受とは所依麁重受と彼果境界受との二也。卽ち有漏の六識八受悉く滅して無しと云ふ。

【二〇二】妙瑜伽道。止觀の妙道なり。

説す。所有る一切の過去未來の正等覺者已説當説すること皆亦た是の如し。諸の善男子若は善女人皆應に此れに依つて、勇猛精進して當に正しく修學すべし。』

爾の時世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、而かも頌を説いて曰はく、

〔二〇三〕『法假立の瑜伽の中に於て、若し放逸を行ずれば　〔二〇四〕大義を失す、
〔二〇五〕此の法及び瑜伽に依止して、若し正しく修行すれば大覺を得。
有所得を見て〔二〇六〕免難を求め、若し此の見を謂つて「所」得法と爲さば、
慈氏よ彼れ瑜伽を去ること遠きこと、譬へば大地と虚空との如し。
〔二〇七〕利生堅固にして而かも　〔二〇八〕作さず、悟り已つて勤修して有情を利す、智者此れを作して劫量を窮はめ、便ち最上離染の喜を得。
若し人　〔二〇九〕欲の爲めに而かも法を説かば、彼れを欲を捨て還つて欲を取ると名づく、愚癡は法の無價寶を得て、反つて更に遊行して而かも乞匃す。
諍諠雜戲論の著に於て、應に捨てて上精進を發起すべし、諸天及び世間を度せんが爲めに、此瑜伽に於て汝當に學すべし。』

爾の時慈氏菩薩、復た佛に白して言さく、

【二〇三】法假立云云。十二分教假安立法所説の瑜伽止觀道の中。
【二〇四】大義。涅槃の果を得る大義利。
【二〇五】此の法。今此の深密經の教法。
【二〇六】免難。生死の難を免る。
【二〇七】利生堅固。諸の菩薩大悲堅固にして衆生を利益す。
【二〇八】作さず。我れ能く彼れを利益す、彼れ我に利せらるる等の分別の念を作さず、三輪無相の觀に住するなり。
【二〇九】欲。名聞利養なり。

『世尊よ、是の解深密法門の中に於て、當に何とか此敎に名づくべきや。我れ當に云何んが奉持すべきや。』

佛、慈氏菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、此れを瑜伽了義の敎と名づく。此瑜伽了義の敎に於て、汝當に奉持すべし。』

此瑜伽了義の敎を說く時、大會の中に於て、六百千の衆生ありて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、三百千の聲聞、遠塵離垢し、諸法の中に於て法眼淨を得、一百五十千の聲聞、諸漏永く盡くして、心に解脫を得、七十五千の菩薩、廣大なる瑜伽作意を獲得せり。

卷の第四

地波羅蜜多品第七

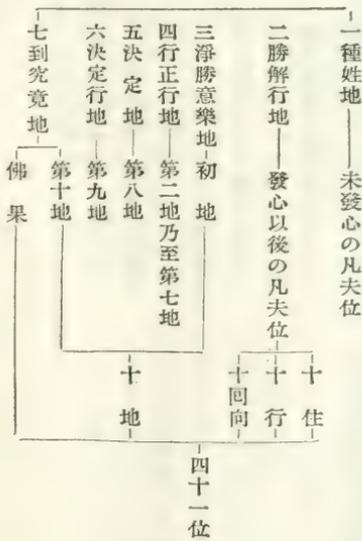
爾の時觀自在菩薩、佛に白して言さく、『世尊よ、佛所說の（一）菩薩の十地の如き、所謂（一）極喜地、（二）離垢地、（三）發光地、（四）焰慧地、（五）極難勝地、（六）現前地、（七）遠行地、（八）不動地、（九）善慧地、（十）法雲地なり、復た佛地を說いて第十一地と爲す。是の如きの諸地幾種の清淨か「あつて」、幾分の所攝なるや。』

爾の時世尊、觀自在菩薩に告げ曰はく、『善男子よ、當に知るべし。諸地には四種の清淨「あつて」、十一分を攝むることを。云何んが名けて（二）四種清淨能く諸地を攝むと爲す

【一】 菩薩の十地。菩薩の將さに佛果に到らんとするや先づ深固の大菩提心を發起し一大僧祇の時間を經て十住十行十回向の三十心の階級を履み、涅槃を證得すべき資糧善根を貯へ見道無漏慧を引起すべき加行を修し、以て二障の現行を伏し終りぬ。玆に於てか無漏の眞智方さに生じ眞如の妙理を見るを得、此の位を名けて見道となす。是より後更に二大僧祇の劫時を經て十地の階級を履み、十勝行を修し、十重障を斷じ十眞如を證し而して方さに妙覺の佛位に到達するなり。地とは有爲（能證智）無爲（所證理）の功德は所修の行の與めに勝れたる所依處となりて生長することを得せしむるが故に地に譬ふ。

【二】 四種清淨。（一）増上意樂清淨。増上とは勝れたる義、清淨とは無漏なればなり、意樂とは定中の作意なり、初歡喜地は初て無漏理智を獲得する位なるが故に増上意樂清淨なり（二）増上戒清淨、戒とは防非止惡の禁戒なり、第二離垢地は持戒清淨の德を具し誤りても犯戒することなく遠く彼彼の垢を離

や。謂く增上意樂淸淨に初地を攝め、增上戒淸淨に第二地を攝め、增上心淸淨に第三地を攝め、增上慧淸淨は、後後の地に於て、轉た勝妙なるが故に、當に知るべし、第四地より乃至佛地を攝むることを。善男子よ、當に知るべし、是の如く四種の淸淨に、普く諸地を攝むることを。云何んが名けて、十一種の分能く諸地を攝むと爲んや。謂く諸の菩薩、先に(三)勝解行地に於て、(四)十法行に依つて、極めて善く(五)勝解の忍を修習せるが故に、彼の「勝解行」地を超過して、菩薩の(六)正性離生に證入す。彼の「初歡喜地」の諸の菩薩、是の因緣に由つて、此の「第一」分圓滿す。而かれども未だ微細の毀犯誤つて現行する中に於て、正知にして而かも行ずること能はず。是の因緣に由つて

る位なるが故に增上戒淸淨なり。(三)增上心淸淨、心とは定なり、第三發光地は勝定を成就し能く妙慧光を發する位なるが故に增上心淸淨なり。(四)增上慧淸淨、第四焰慧地は最も勝れたる菩提分法に安住し慧焰增進する位也、是より後後の地の中に種種の慧門轉た勝妙なるが故に增上慧淸淨なり。

【三】勝解行地。菩薩修因得果の位次を分ちて七地と立つる中の一なり、左に七地と四十一位との相配を圖示せん。

一種姓地——未發心の凡夫位
二勝解行地——發心以後の凡夫位——十住・十行・十回向
三淨勝意樂地——初地
四行正行地——第二地乃至第七地
五決定地——第八地
六決定行地——第九地
七到究竟地——第十地・佛果
（初地乃至第十地——十地）
（十住・十行・十回向・十地・佛果——四十一位）

【四】十法行。一には大乘經法を書持し、二には供養し、三には他に惠施し、四には他の說法を聽聞し、五には自ら披讀し、六には領受し、七には諷誦し、八には他の爲に廣く說き、九には獨處思量し、十には修相に隨入す。

此の〔第二〕分の中に於て、猶ほ未だ圓滿せず。此の分をして圓滿を得せしめんが爲めの故に、精勤修習して便ち能く證得し、彼の〔第二離垢地の〕諸の菩薩、是の因緣に由つて、此の〔第二〕分圓滿す。而かれども未だ、世間の圓滿なる等持、等至及び圓滿なる（七）聞持陀羅尼を得ること能はず。是の因緣に由つて、此の分の中に於て、猶ほ未だ圓滿せず。此の分をして圓滿を得せしめんが爲めの故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の〔第三發光地〕の諸の菩薩、是の因緣に由つて、此の〔第三〕分圓滿す。而れども、未だ獲得する所の菩提分法に隨つて、多く修習して、住せしむること能はず。心未だ諸の（八）等至愛、及び法愛を捨つること能はず。是の因緣に由つて、此分の中に於て、猶ほ未だ圓滿せず。此の分をして圓滿を得せしめんが爲めの故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の〔第四焔慧地の〕諸の菩薩、是の因緣に由つて、此の〔第四〕分圓滿す。而れども、未だ（九）諸諦の道理に於て、如實に觀察すること能はず。又た未だ、生死涅槃に於て、一向（一〇）背趣の作意を棄捨すること能はず。又た未だ、方便所攝の菩提分法を修すること能はず。是の因緣に由つて、此の分の中に於て、猶ほ未だ圓滿せず。此の分を

【五】勝解の忍。勝解とは決定の境を印可するなり、忍とは印忍なり、即ち十法行に依て眞理を印忍し信ずるを云ふ。

【六】正性離生。初歡喜地見道の位なり。

【七】聞持陀羅尼。陀羅尼(Dhāraṇī)は總持と譯す。智慧の力文義を總攝し持して失はざるの意なり。今聞くところの妙義能く持して忘れざるを聞持陀羅尼と云ふ。

【八】等至愛。定愛なり。禪味を愛する貪なり。

【九】諸諦。菩薩諸道の因諦及眞俗の二諦。

【十】背趣。生死涅槃無差別の理を信ぜる能はず一向に生死を厭背し、涅槃を趣求す、是二途の作意なり。

して圓滿を得せしめんが爲めの故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の〔第五極難勝地の〕諸の菩薩是の因緣に由つて、此分圓滿す。而かれども未だ、生死流轉に於て、如實に觀察すること能はず。又た彼れに於て多く厭〔背の心〕を生ずるに由るが故に、未だ多く無相作意に住すること能はず。是の因緣に由つて、此の分の中に於て、猶ほ未だ圓滿せず。此の分をして圓滿を得せしめんが爲めの故に精勤修習して便ち能く證得す。彼の〔第六現前地の〕諸の菩薩、是の因緣に由つて、此の〔第六〕分圓滿す。而かれども未だ、無相作意をして、無缺無間に、多く修習して住せしむること能はず。是の因緣に由つて、此の分の中に於て、猶ほ未だ圓滿せず。此の分をして圓滿を得せしめんが爲めの故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の〔第七遠行地の〕諸の菩薩、此の因緣に由つて此の〔第七〕分圓滿す。而かれども未だ、無相住の中に於て、功用を捨離すること能はず。又た未だ相に於て自在なることを得る能はず。是の因緣に由つて、此の分の中に於て、猶ほ未だ圓滿せず。此の分をして圓滿を得せしめんが爲めの故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の〔第八不動地の〕諸の菩薩、是の因緣に由つて此の〔第八〕分圓滿す。而かれども未だ、異名と衆相と訓詞との差別、一切品類の宣說法の中に於て、大自在を得ること能はず。是の因緣に由つて、此の分の中に於て猶ほ未だ圓滿せず。此の分をして圓滿を得せしめんが爲めの故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の〔第九善慧地の〕諸の菩薩、是の因緣に由つて、此の〔第九〕分圓滿す。而かれども未だ、圓滿法身を現前に證受するを得ること

能はず。是の因縁に由つて、此の分の中に於て猶ほ未だ圓滿せず。此の分をして圓滿を得せしめんが爲めの故に、精勤修習して便ち能く證得す。彼の〔第十法雲地の〕諸の菩薩是の因縁に由つて、此の〔第十〕分圓滿す。而かれども未だ、徧ねく一切所知の境界に於て、無著無礙なる妙智妙見を得ること能はず。是の因縁に由つて、此の分の中に於て猶ほ未だ圓滿せず。此の分をして圓滿を得せしめんが爲めの故に、精勤修習して便ち能く證得す。〔第十一の佛地は〕是の因縁に由つて此の〔第十一〕分圓滿す。此の分圓滿するが故に、一切の〔十一〕分に於て皆圓滿することを得。善男子よ、當に知るべし、是の如きの十一種の分に普く諸の〔十一〕地を攝むることを。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、何の縁ありてか最初を極喜地と名づけ、乃至何の縁ありてか説いて佛地と名くるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、(二)大義利を成就して、未だ曾て得ざる(三)出世間心を得、大歡喜を生ず、是故に最初を極喜地と名づく。一切微細の〔悞〕犯戒を遠離す、是の故に第二を離垢地と名づく。彼の所得の三摩地及び聞持陀羅尼は、能く無量の智光を依止と爲るに由つて、是故に第三を發光地と名づく。彼の所得の菩提分法は、諸の煩惱〔の薪〕を燒く、「其の」智は火焔の如くなるに由つて、是故に第四を焔慧地と名づく。即ち

【二】大義利　自利利他の大利益なり。

【三】出世間心　有情世間を超越したる無漏智なり。

彼の菩提分法に於て、方便修習すること最も極めて艱難なるに、方に自在を得るに由つて、是の故に第五を（一三）極難勝地と名づく。現前に諸行の「生死」流轉を觀察し、又た無相に於て、多く修する作意方に現在前す。是故に第六を現前地と名づく。能く「世間二乘の有相行に」遠かり缺くことなく閒なく無相の作意なるに證入し、（一四）清淨地と共に相ひ隣接す、是故に第七を遠行地と名づく。無相に於て、無功用を得るに由つて、諸相の中に於て現行の煩惱の爲めに動ぜられず、是の故に第八を不動地と名づく。一切種「種」の說法に於て自在にして、無礙廣大の智慧を獲得す、是の故に第九を善慧地と名づく。（一五）麤重身の廣「大」なる虛空の如くなること、法身圓滿して譬へば大雲の如くに皆能く徧く覆ふ、是の故に第十を法雲地と名づく。最極微細の煩惱及び所知障を永斷し、無著無礙にして、一切種所知の境界に於て、現に正等覺するが故に、第十一を說いて佛地と名づく。」

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『此の諸地に於て、幾ばくの（一六）愚癡あり幾ばくの（一七）麤重ありて所對治と爲すや。』

【一三】極難勝地。眞俗二智の互に相違せるを而かも合觀すること極めて難事なり、今第五地の位に於て眞俗不二の觀に入り極めて難きを容易に之れを修し前に勝れぬるに至る。

【一四】清淨地。第八地以上也。前七地は有漏雜はり起りて未だ純無漏なる能はず、第八地以上は第六意識の觀心純全無漏清淨なるが故に清淨地と云ふ。

【一五】麤重身。麤重とは煩惱所知二障の種子なり、身とは體の義なり、種子の體を麤重身と云ふ。

【一六】愚癡。無明なり、然れども今は啻に無明のみならず、無明の品類たる執障及所起の業と果報とをも總じて愚癡と稱す。

【一七】麤重。上の愚癡は二障の

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、此の諸地の中に、二十二種の愚癡と、十一種の麤重とありて所對治と爲す。謂く初地に於て二の愚癡あり、一には補特伽羅及び法に執著するの愚癡〔分別起二障の種子なり〕、二には惡趣雜染の愚癡〔分別起二障所起の業果〕、及び彼の麤重を所對治と爲す。第二地に於て二の愚癡あり、一には微細誤犯の愚癡〔所知障中の倶生一分なり〕、二には種種業趣の愚癡〔所知障所起の誤犯の三業〕及び彼の麤重を所對治と爲す。第三地に於て二の愚癡〔所知障中の倶生一分〕あり、一には欲貪の愚癡、二には圓滿聞持陀羅尼の愚癡及び彼の麤重を所對治と爲す。第四地に於て二の愚癡〔所知障中の倶生一分〕あり、一には等至愛の愚癡、二には法愛の愚癡及び彼の麤重を所對治と爲す。第五地に於て二の愚癡〔所知障中の倶生一分〕あり、一には一向に作意して生死を棄背する愚癡、二には一向に作意して涅槃に趣向する愚癡及び彼の麤重を所對治と爲す。第六地に於て二の愚癡〔所知障中の倶生一分〕あり、一には（一八）現前に諸行の流轉を觀察する愚癡、二には（一九）相多く現行する愚癡及び彼の麤重を所對治と爲す。第七地に於て

種子なるに對し、今の麤重とは習氣即ち無堪忍の性なり、二障の現行が熏習せし移り香の氣分を習氣と云ふ。是れあるに因りて種子は已に斷じ去るも臭氣尚殘存して心をして自在に境を知るに堪へざらしむ、故に亦無堪忍性とも云ふ。菩薩は十一地に於て地地に二種の愚と一種の麤重とを對治斷除するなり、故に合して二十二愚十一麤重と成る。

【一八】　現前に諸行云云。諸行とは四諦の中苦集二諦の有漏染法也、是れ有爲無常の法なるが故に諸行と云ふ。流轉と云ふは生死流轉なり、即ち有漏苦集の染汚法の相ありと執する愚なり。

【一九】　相多く現行云云。相とは滅道二諦の無漏淨相なり、無漏淨道の淨相多分現行して是れありと執する愚なり。此の

二の愚癡「所知障中の倶生一分」あり、一には（二〇）微細の相現行する愚癡、二には（二一）一向に無相を作意し方便する愚癡及び彼の麤重を所對治と爲す。第八地に於て二の愚癡「所知障中の倶生一分」あり、一には無相のうへに功用を作さしむる愚癡、二には（二二）相の自在なるに於ける愚癡及び彼の麤重を所對治と爲す。第九地に於て二の愚癡「所知障中の倶生一分」あり、一には無量の說法と無量の法句文字と後後の慧辯とに、陀羅尼自在なるに於けるの愚癡、二には辯才自在なるに於ける愚癡及び彼の麤重を所對治と爲す。第十地に於て二の愚癡「所知障中の倶生一分」あり、一には、大神通「を得するに於ける」愚癡、二には微細祕密なるに悟入する「に於ける」の愚癡及び彼の麤重を所對治と爲す。如來地に於て二の愚癡あり、一には一切所知の境界のうへに、極めて微細にして著する愚癡「微細なる所知障」なり、二には極めて微細にして礙ふる愚癡「一切倶生起の煩惱障の種子」、及び彼の麤重を所對治と爲す。善男子よ、此の二十二種の愚癡及び十一種の麤重に由るが故に、諸地を安立し、而して阿耨多羅三藐三菩提は彼の繫縛を離る。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

二愚は四諦を觀するに染淨差別の相ありと執して未だ無相なる能はざるなり。

【二〇】微細の相。相とは緣生の相なり、緣生は苦集二諦生滅の法なり。

【二一】一向に無相云云。無相とは還滅の相なり、還滅は滅道二諦なり、純ら無相の上に作意し勤求するを須ひ、未だ空に卽して有の勝行（度生等）を起す能はず。

【二二】相の自在云云。化他の爲めに金銀魚米等の相を自在に變作すべきに而も之れに於て自在なる能はず、猶方便功用を要す。

『世尊よ、阿耨多羅三藐三菩提は甚奇希有なり、乃至大利大果を成就し、諸の菩薩をして、能く是の如き大愚癡の羅網を破り、能く是の如き大麤重の稠林を越え、現前に阿耨多羅三藐三菩提を證得せしむ。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の如き諸地は、幾種の殊勝の安立する所なるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、略して八種あり、一には增上意樂清淨、二には（二三）心清淨、三には（二四）悲清淨、四には（二五）到彼岸清淨、五には見佛供養承事清淨、六には成熟有情清淨、七には（二六）生清淨、八には（二七）威德清淨なり。善男子よ、初地の中に於て、所有の增上意樂清淨乃至威德清淨、後後の諸地乃至佛地所有の增上意樂清淨乃至威德清淨は當に知るべし、彼の諸の清淨展轉して增勝なりと。唯だ佛地に於て、生清淨を除く。又た初地の中の所有る功德は、上の諸地に於て平等に皆あれども、當に知るべし自地の功德は殊勝なり、一切菩薩の十地の功德は皆是れ有上なりと。佛地の功德は當に知るべし無上なりと。』

【二三】心清淨。心とは禪定なり。
【二四】悲清淨。四無量中の悲無量なり。卽ち衆生の苦を拔濟する菩薩化他の行なり。
【二五】到彼岸清淨。到彼岸とは梵に波羅蜜多(Pāramitā)と云ふ、此に六波羅蜜あり。開て十波羅蜜となす。涅槃の彼岸に到る菩薩行なり。
【二六】生清淨。衆生を利せんがために種種の生を受く。
【二七】威德清淨。神通等の威力なり。

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊は何の因緣の故に、菩薩の生は、諸有の生に於て、最も殊勝なりと爲すと說きたまふや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、四の因緣の故に〔爾り〕、一には極淨善根の集起する所なるが故に、二には、故意思擇〔の願〕力の所取なるが故に、三には悲愍して諸の衆生を濟度するが故に、四には自ら能く無染にして他の染を除くが故なり。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊は何の因緣の故に、諸の菩薩は（二八）廣大願、妙願、勝願を行ずと說きたまふや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、四の因緣の故なり、謂く諸の菩薩は〔一には〕能く善く、涅槃の樂住を了知し、（二九）能く速に證するに堪ふ、〔二には〕而かも復た（三〇）樂住を速に證するを棄捨す、〔三には〕（三一）無緣無待に大願心を發し、〔四には〕諸の有情を利益せんと欲するが爲めの故に、多くの種種の長時の大苦に處す。是の故に我れ、彼の諸の菩薩は廣大願、妙願、勝願を

【二八】廣大願等。菩薩の三願なり。（一）廣大願、諸の衆生を緣ず。（二）妙願、妙覺を求む。（三）勝願、上の二願は二乘の願及び地前より勝るを云ふ。

【二九】能く速に證云云。無分別智生死に住せず。

【三〇】樂住を速に證す云云。常に大悲を起すが故に涅槃の樂地に入らず。

【三一】無緣無待。菩薩の大悲を起すや、報恩の事を緣求する無く期待するなし。

行ずと說く。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の諸の菩薩には、凡そ幾種の所應學の事かあるや。』

佛、觀自在菩薩に告げたまはく、

『善男子よ、菩薩の學事に略して〔三〕六種あり。所謂(一)布施、(二)持戒、(三)忍辱、(四)精進、(五)靜慮、(六)智慧の到彼岸なり。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の如き六種所應學の事は、幾ばくか是れ增上戒學の所攝、幾ばくか是れ〔三〕增上心學の所攝、幾ばくか是れ增上慧學の所攝なるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、當に知るべし。初の「布施持戒忍辱の」三は但だ是れ增上戒學の所攝なり。「第五の」靜慮の一種は但だ是れ增上心學の所攝なり、「第六の」慧は是れ增上慧學の所攝なりと。我れ、「第四の」精進は一切「戒定慧」に徧ずと說くなり。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の如き六種の所應學の事は、幾ばくか是れ福德資糧の所攝、幾ばくか是れ智慧資糧の

【三】六種。是れ六波羅蜜行なり。卽ち六度なり。

【三】增上心學。心とは定也。戒と慧とを加へ三學となす。

所攝なるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、若しは增上戒學の所攝なる者は、是れを福德資糧の所攝と名づけ、若しは增上慧學の所攝なる者は、是れを智慧資糧の所攝と名づく、我れ、精進靜慮の二種は一切〔福智〕に徧すと說くなり。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、此の六種の所學の事の中に於て、菩薩は云何んが應さに修學すべきや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、五種の相に於て、應當に修學すべし。一には最初に(二四)菩薩藏の〔諸の〕波羅蜜多と相應する微妙なる正法敎の中に於て、猛利に信解す。二には次に十種の法行に於て、〔一に〕聞き〔二に〕思し〔三に〕修して成ずる所の〔三の〕妙智を以て、精進して修行す。三には(二五)菩提心を隨護す。四には眞の(二六)善知識に親近す。五には(二七)無間に善品を勤修す。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

【二四】菩薩藏。大乘菩薩の敎法なり、義理を藏むるが故に藏と名く。

【二五】菩提心。覺道を求むる大乘心なり。

【二六】善知識。具には善知識者即ち善友なり。

【二七】無間に。間斷なく。

『世尊は何の因緣の故に、是の如きの所應學の事を施設するに、但だ六數のみあるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、〔三八〕二の因緣の故なり、一には諸の有情を饒益するが故に、二には諸の煩惱を對治するが故なり。當に知るべし、前の三は有情を饒益し、後の三は一切の煩惱を對治す。前の三は諸の有情を饒益すとは、謂く諸の菩薩は布施に由るが故に、資具を攝受して、有情を饒益し、持戒に由るが故に、損害、逼迫、惱亂を行ぜずして、有情を饒益し、忍辱に由るが故に、彼の損害、逼迫、惱亂するに於て、堪能忍受して有情を饒益す。後の三は諸の煩惱を對治すとは、謂く諸の菩薩は精進に由るが故に、未だ一切の煩惱を永伏せず、亦た未だ一切の〔三九〕隨眠を永害せずと雖も、而かも能く勇猛に諸の善品を修す、彼の諸の煩惱は善品の加行を傾動すること能はず、靜慮に由るが故に煩惱を永伏し、般若に由るが故に隨眠を永害す。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊は何の因緣の故に、「六波羅蜜多の外に」所餘の波羅蜜多を施設するに、但だ「方便と願と力と智との」〔四〇〕四數のみあるや。』

【三八】二の因緣の故。自利と利他との二。

【三九】隨眠。煩惱の種子なり、種子は阿賴耶識の自體に眠れるが如く、伏在するが故に隨眠と云ふ。

【四〇】四數。第六智慧波羅蜜を開いて方便、願、力、智の四波羅蜜とす。六波羅蜜に加へて十波羅蜜と云ふ。

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、前の六種波羅蜜多の與に助伴と爲るが故なり、謂はく諸の菩薩は、前の三種の波羅蜜多所攝の有情に於て、〔四一〕諸の攝事方便善巧を以て、而かも之れを攝受して、善品に安置す。是の故に我れ、方便善巧波羅蜜多は、前の三種の與に、助伴と爲ると說く。若しは諸の菩薩現法の中に於て煩惱多きが故に、修すること無閒なるに於て、堪能るある無く、羸劣なる意樂の故に、下界の勝解の故に、內の心住に於て、堪能るある無く。菩薩藏に於て聞緣して善く修習すること能はざるが故に、所有る靜慮は、出世閒の慧を引發すること能はず、彼れ便ち少分狹劣の福德資糧を攝受して、未來世の煩惱輕微ならんが爲めに、心に正願を生ず。是の如きを願波羅蜜多と名づく。此願に由るが故に、煩惱微薄にして能く精進を修す。是の故に我れ、願波羅蜜多は、精進波羅蜜多の與めに、而かも助伴と爲ると說く。若しは諸の菩薩、善士に親近し、正法を聽聞し、如理に作意するを因緣と爲るが故に、「下の欲界の」劣意樂を轉じて、「欲界の」勝意樂を成じ、亦た能く上界「靜慮の」勝解を獲得す、是の如きを力波羅蜜多と名づく。此の力に由るが故に、內の心住に於て、堪能る所あり。是の故に我れ、力波羅蜜多は靜慮波羅蜜多の與めに、助伴と爲ると說く。若しは諸の菩薩、菩薩藏に於て、已に能く聞緣して、善く修習するが故に、能く靜慮を發す。是の如きを智波羅蜜多と名づく。此の智に由るが故に、能く出世

〔四一〕諸の攝事方便善巧。布施、利行、愛語、同事を菩薩の四攝事となす。

閒の慧を引發するに堪へたり。是の故に我れ、智波羅蜜多は慧波羅蜜多の與めに、助伴と爲ると說く。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊は何の因緣の故に、六種の波羅蜜多を說きたまふに、是の如く次第するや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、能く（四二）後後の引發依と爲るが故なり、謂く諸の菩薩、若し身財に於て、顧悋する所無く、便ち能く淸淨の禁戒を受持し、禁戒を護らんが爲めに、便ち忍辱を修し、忍辱を修し已つて、能く精進を發し、精進を發し已つて、能く靜慮を辨じ、靜慮を具し已つて、便ち能く出世閒の慧を獲得す。是の故に、我れ波羅蜜多を說くに、是の如く次第す。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の如き六種波羅蜜多に、各幾種の品類差別ありや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、各三種あり。施の三種とは、一には（四三）法施、二には（四四）財施、三には（四五）無畏施なり。（四六）戒の三種とは、一には（四七）轉捨不善戒、二には（四八）轉生善戒、三には（四九）轉生饒益有情戒なり。忍の三種とは、一には（五〇）耐怨害

【四二】後後の引發依。前前のものは次第次第に後後のものを引き起す依り所となる。

【四三】法施。教法を說く。

【四四】財施。財物を惠む。

【四五】無畏施。獅子・虎狼・怨賊、水火等を濟拔して畏るるなからしむ。

【四六】戒の三種。三聚淨戒なり。

【四七】轉捨不善戒。不善を捨て作さず、即ち攝律儀戒なり。

【四八】轉生善戒。善を修す、即ち攝善法戒なり。

【四九】轉生饒益有情戒。衆生を利益す、即ち攝衆生戒なり。

【五〇】耐怨害忍。自己の宿業を觀じて他の怨害を忍ぶ。

忍、二には（五一）安受苦忍、三には（五二）諦察法忍なり。精進の三種とは、一には（五三）被甲精進、二には轉た善法を生ずる加行の精進、三には有情を饒益する加行の精進なり。靜慮の三とは、一には〔虚妄〕分別無くして寂靜なり、〔愛味を遠離して〕極寂靜なり、〔煩惱の〕罪無く〔清淨なる〕が故に、煩惱の衆苦を對治し樂住なる靜慮、二には〔六通の〕功德を引發する靜慮、三には（五四）有情饒益を引發する靜慮なり。慧の三種とは、一には（五五）世俗諦を緣ずる慧、二には（五六）勝義諦を緣ずる慧、三には（五七）有情饒益を緣ずる慧なり。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊は何の因緣の故に、波羅蜜多を說いて波羅蜜多と名くるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、五の因緣の故なり、一には無染著の故に、二には無顧戀の故に、三には無罪過の故に、四には無分別の故に、五には正廻向の故なり。無染著とは、謂く（五八）波羅蜜多と諸の相違せる事に染著せざるなり。無顧戀とは、謂く一切の波羅蜜多の諸の（五九）果異熟及び報恩の中に於て、心繫縛無きなり。無罪過とは、謂く是の如き波羅蜜多に於て、（六〇）間雜染の法

【五一】安受苦忍。成佛の大志を立てて寒熱等の小苦を忍ぶ。

【五二】諦察法忍。忍は智也、智能く諦かに眞如無生の法を觀察し、之を認め證り、之を信ずるに堪ふ。

【五三】被甲精進。意志堅確勇猛なること恰も鎧を著け軍陣に入るに畏るる無きが如し。

【五四】有情饒益を引發する靜慮とは金銀魚米等を變作所辦して飢儉等の苦を救ふ。

【五五】世俗諦を緣ずる慧。因明等五明の學を究め俗を緣ずる自利の慧。

【五六】勝義諦を緣ずる慧。眞如を證る眞を緣ずる慧。

【五七】有情饒益を緣ずる慧。濟度に善巧なる俗を緣ずる慧。

【五八】波羅蜜多と諸の相違せる事。六波羅蜜多と諸の行の反對なる六の障なり、下に說けり。

無く、非なる方便の行を離るるなり。無分別とは、謂く、是の如き波羅蜜多に於て、言詞の如くに自相に執著せざるなり。正廻向とは、謂く是の如き所作所集の波羅蜜多を以て、無上大菩提の果を廻求するなり。』

『世尊よ、何等をか名けて、波羅蜜多と諸の相違せる事と爲すや。』

『善男子よ、當に知るべし。此の事略して六種ありと。（六一）一には喜んで財富自在の諸の欲樂を樂欲する中に於て、深く功德なり及び勝利なりと見、（六二）二には所樂に隨つて身語意を縱にし、而して現行する中に於て、深く功德なり及び勝利なりと見、（六三）三には他の輕懱するに堪忍せざる中に於て、深く功德なり及び勝利なりと見、（六四）四には勤修せずして欲樂に著する中に於て、深く功德なり及び勝利なりと見、（六五）五には憒閙に處する世雜亂の行に於て、深く功德なり及び勝利なりと見、（六六）六には見聞、覺知、言說、戲論に於て、深く功德なり及び勝利なりと見るなり。』

『世尊よ、是の如き一切の波羅蜜多に、何なる（六七）果異熟あるや。』

『善男子よ、當に知るべし此にも亦た略して（六八）六種ありと。一には大財富を得、二には人天善趣に往生し、三には無怨無壞にして諸の喜樂多

【五九】果異熟。善惡の業に依り招くべき果報なり。六波羅蜜善業所感の果なり。

【六〇】開稀遮の法。下に說けり。

【六一】一には。是れ布施波羅蜜と相違する慳悋なり。

【六二】二には。是れ持戒波羅蜜と相違する犯戒なり。

【六三】三には。是れ忍辱波羅蜜と相違する忿恚なり。

【六四】四には。是れ精進波羅蜜と相違する懈怠なり。

【六五】五には。是れ禪定波羅蜜と相違する散亂心なり。

【六六】六には。是れ智慧波羅蜜と相違する惡慧なり。

【六七】果異熟。波羅蜜多の善業所感異熟の果報なり。

【六八】六種。是れ次第の如く六波羅蜜行の所感の果報なり。

【六九】四には。是れ精進波羅蜜の果報なり、精進策勵すれば

く、(六九)四には衆生の主となり、(七〇)五には身に惱害なく、(七一)六には大宗葉あり。』

『世尊よ、何等をか名けて波羅蜜多の(七二)閑雜染の法と爲すや。』

『善男子よ、當に知るべし略して四種の加行に由ることを。一には無悲の加行の故に、二には不如理の加行の故に、三には不常の加行の故に、四には不殷重の加行の故に〔爾かなり〕。不如理の加行とは、謂く餘の波羅蜜多を修行する時、餘の波羅蜜多に於て、遠離し、失壞するなり。』

『世尊よ、何等をか名けて非なる方便の行と爲すや。』

『善男子よ、若しは諸の菩薩、波羅蜜多を以て、衆生を饒益する時、但だ財物を攝して衆生を饒益し、便ち喜足を爲して、而して其れをして不善處を出して善處に安置せしめず、是の如きを名けて非なる方便の行と爲す。何以ば、善男子よ、衆生に於て唯だ此事を作すのみを、實の饒益と名くるに非ざればなり。譬へば(七三)糞穢の若しは多きにまれ、若しは少きにまれ、終に能く(七四)香潔と成らしむること有ること無きが如し。是の如く衆生は行苦に由るが故に、其の性是れ苦なり。方便として但だ財物のみを以て、蹔く相ひ饒益して、樂と成さしむべきこと有ること無し。唯だ妙善法の中に安處せしむるあるのみ、方に

大尊貴なるを得て、衆生の主となる。

【七〇】五には。是れ禪波羅蜜の果報なり、定力能く煩惱の敵を伏す、故に身に惱害なきを得。

【七一】六には。是れ般若波羅蜜の果報なり、智廣く五明の學を解するが故に、宗族門葉大に榮ゆ。

【七二】閑雜染の法。六波羅蜜を行ずる時、閑雜して起る障なり。

【七三】糞穢。行苦に喩ふ。

【七四】香潔。涅槃に喩ふ。

第一の饒益と名くることを得べし。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の如き一切の波羅蜜多に幾ばくの清淨かあるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、我れ終に、波羅蜜多には、上の五相を除いて、餘の清淨ありと說かず。然るに我れ卽ち是の如き諸事に依つて、總と別とに當に波羅蜜多の清淨の相を說くべし。總じて一切波羅蜜多の清淨の相を說かば當に知るべし七種ありと。何等をか七と爲すや。（七五）一には菩薩、此の諸法に於て、他に知られんことを求めず。（七六）二には此の諸法に於て見已つて執著を生ぜず。三には卽ち是の如き諸法に於て、疑惑を生ぜず、謂く能く大菩提を得ると爲んや不やと。四には終に（七七）自讃毀他して輕懱する所あらず。五には終に憍慢放逸ならず。六には終に少しく所得あるに於て、便ち喜足を生ぜず。七には終に此の諸法に由つて、他に於て嫉妬慳悋を發起せず。別して一切波羅蜜多の清淨の相を說かば、亦た七種あり。何等をか七と爲すや。謂く諸の菩薩、我が所說の七種の布施の清淨の相に於て、

【七五】一には。名聞利養を求めず。

【七六】二には。六度みな三輪の執相を離れて無相清淨なり。三輪とは且らく、吾人の布施を行ずるや「我れ（能施の相なり）、此の物を（施物の相なり）、彼れに（所施の相なり）施與す」との執著を脫する能はず、是れ本と諸法實有の執堅く三輪の相に著し如幻の理を了せざるが爲なり、然るに今地上の菩薩は深く唯識如幻の觀に住して、執障を斷ずる時三輪の相永く泯亡して清淨となるをいふ。

【七七】自讃毀他。己れを褒め他を貶す。

隨順し修行す。一には施物清淨に由つて、清淨の施を行ず。二には戒清淨に由つて、清淨の施を行ず。三には(七八)見清淨に由つて、清淨の施を行ず。四には(七九)心清淨に由つて、清淨の施を行ず。五には(八〇)語清淨に由つて、清淨の施を行ず。六には智清淨に由つて、清淨の施を行ず。七には(八一)垢〔離れ〕清淨なるに由つて、清淨の施を行ず。是れを七種の施清淨の相と名づく。又た諸の菩薩は〔一には〕能く善く、制立する律儀の一切學處を了知し、〔二には〕能く善く所犯を出離することを了知し、〔三には〕常尸羅を具し、〔四には〕尸羅を堅固にし、〔五には〕常に尸羅を作し、〔六には〕常に尸羅を轉じ、〔七には〕一切所有る學處を受學す。是れを七種の戒清淨の相と名づく。若し諸の菩薩、〔一には〕自の所有る業と果との異熟に於て、深く依信を生じて一切所有る不饒益の事現在前する時も、憤發を生ぜず、亦た反罵せず、瞋からず、打たず、恐れしめず、弄せず、〔二には〕種種不饒益の事を以て、反つて害を相ひ加へず、〔三には〕怨結を懷かず、〔四には〕若し諫誨する時は恚惱せしめず、〔五には〕亦た復た他の來るを待たずして諫誨し、〔六には〕恐怖と有染愛の心とに由らずして而かも忍辱を行じ、〔七には〕作恩を以て而かも便ち放捨せず、是れを七種の忍清淨の相と名づく。若しは諸の菩薩、〔一には〕精進平等の性に通達し、〔二には〕勇猛に勤めて精進するに由るが

【七八】見清淨。實我を執して我能く惠施を行ずと計する見なり、此見已に離れて清淨となりぬ。

【七九】心清淨。憐愍の心を以て惠施するが故に清淨なり。

【八〇】語清淨。舒顏含笑慰諭問訊して惠施するが故に清淨なり。

【八一】垢清淨。慳悋貪瞋等の煩惱の垢離れて清淨なり。

故に、自擧して他を凌がず、〔三には〕大勢力を具し、〔四には〕大精進を具し、〔五には〕堪能る所あり、〔六には〕堅固勇猛にして、〔七には〕諸の善法に於て終に軛を捨てず、是の如きを名けて七種の精進淸淨の相と爲す。

若しは諸の菩薩、(八二)〔一には〕善通達相三摩地靜慮あり、(八三)〔二には〕圓滿三摩地靜慮あり、(八四)〔三には〕俱分三摩地靜慮あり、(八五)〔四には〕運轉三摩地靜慮あり、(八六)〔五には〕無所依三摩地靜慮あり、(八七)〔六には〕善修治三摩地靜慮あり、〔七には〕菩薩藏に於て聞緣修習する無量の三摩地靜慮あり、是の如きを名けて七種の靜慮淸淨の相と爲す。若しは諸の菩薩、(八八)〔一には〕增益損減の二邊を遠離し、(八九)中道を行ずるを、是れを名けて慧と爲す。〔二には〕此の慧に由るが故に、如實に解脫門の義を了知す、謂く空、無願、無相の三解脫門なり。〔三には〕如實に有自性の義を了知す、謂く徧計所執、若しは依他起、若しは圓成實の三種の自性なり。〔四には〕如實に無自性の義を了知す、謂く相、生、勝義の三種の無自性性なり。〔五には〕如實に世俗諦の義を了知す。謂く、(九〇)五明處に於いてなり。〔六には〕如實に勝義諦の義を了知す、謂く七眞如に於いてなり。又た無分別にして諸の

【八二】善通達相三摩地靜慮。俗諦を觀ずる定。

【八三】圓滿三摩地靜慮。眞諦の圓滿眞如を觀ずる定。

【八四】俱分三摩地靜慮。眞俗二諦を雙べ觀ずる定。

【八五】運轉三摩地靜慮。加行智の定なり、有漏作意運轉の依り所なるが故に名く。

【八六】無所依三摩地靜慮。根本正體智の定なり、正智は無相の眞理に冥會し所依の境相を絕するが故に名く。

【八七】善修治三摩地靜慮。後得智の定なり、差別の境を緣じて種種の諸行を修するが故に名く。

【八八】增益損減の二邊。心外の實我實法は無なり而るを執して有なりとなす、之れを增益の有執と云ふ。因緣生の依他起性及び之れが實性なる圓成

戯論を離れ、純一理趣に多く住する所なるが故に、無量の總法を所緣と爲るが故に、又た毗鉢舍那の故に。〔七には〕能く善く(九一)法と隨法行とを成辨す。是れを七種の慧清淨の相と名づく。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の如きの五相、各何の業あるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、當に知るべし、彼の相に五種の業あることを。謂く〔一には〕諸の菩薩、染著無きが故に、現法の中に於て、修習する所の波羅蜜多に於て、恒に常に慇重に加行を勤修し、放逸あること無し。〔二には〕顧戀無きが故に、當來の不放逸の因を攝受す。〔三には〕罪過無きが故に、能く正しく、極善圓滿、極善清淨、極善鮮白の波羅蜜多を修習す。〔四には〕無分別の故に、方便善巧波羅蜜多、速かに圓滿することを得。〔五には〕正廻向の故に、一切の生處に波羅蜜多及び彼の可愛の諸の果異熟皆無盡なることを得、乃し無上正等菩提に至る。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

實性の眞如は有なり而るを執して無なりとなす、之れを損減の空執と云ふ。有の邊或は無の邊に墮する執見なり。

【八九】中道。非有非空の中道觀なり、實我實法の二執は非有なりと空じて增益の有執を遣り、依他圓成の百法は非空なりと存して損減の空執を遣り高く偏有偏空の二邊を超越する觀智なり。

【九〇】五明處。印度古代學問の科目にして菩薩必須の學科なり。(一)內明。因果佛教の學。(二)因明。論理の學。(三)聲明。文字訓詁の文典。(四)醫方明。醫藥の學。(五)工巧明。工藝美術の學なり。

【九一】法と隨法行。法とは涅槃なり、隨法行とは法に隨ひ教の如く修行する八支聖道也。

『世尊よ、是の如き所説の波羅蜜多〔に於ては〕、何者か最も廣大なるや、何者か無染汚なるや、何者か最も明盛なるや、何者か不可動なるや、何者か最も清淨なるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、無染著の性、無顧戀の性、正廻向の性なるを最も廣大なりと爲し、無罪過の性、無分別の性なるを染汚あること無しと〔爲〕し、所作を思擇するを最も明盛なりと爲し、已に無退轉法の地に入れる者を不可動と名づけ、若しは十地に攝め、佛地に攝めらるる者を最も清淨なりと名づく。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、何の因緣の故に、菩薩所得の波羅蜜多の、諸の可愛の果、及び諸の異熟は常に盡くることあること無く、波羅蜜多も亦た盡くることあること無きや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、（九三）展轉して相ひ依つて生起し、修習すること間斷無きが故なり。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、何の因緣の故にか、是の諸の菩薩は波羅蜜多を深信愛樂して、是の如き波羅蜜多所得の可愛の諸の果異熟に於てするに非ざるや。』

【九三】展轉して。轉た互ひに。

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、五の因緣の故なり、一には波羅蜜多は是れ最增上喜樂の因なるが故に、二には波羅蜜多は是れ、其れ究竟して一切自他を饒益する因なるが故に、三には波羅蜜多は是れ、當來世の彼の可愛果の異熟因なるが故に、四には波羅蜜多は諸の雜染の所依の事に非ざるが故に、五には波羅蜜多は是れ畢竟變壞の法に非ざるが故なり。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、一切の波羅蜜多に、各幾種の最勝なる威德ありや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、當に知るべし、一切の波羅蜜多に、各四種の最勝なる威德ありと。一には此の波羅蜜多に於て、正しく修行する時、能く(九三)慳悋と犯戒と心憤と懈怠と散亂と(九四)見趣との所治を捨つ。二には此れに於て正しく修行する時、能く無上正等菩提の眞實の資糧と爲る。三には此れに於て正しく修行する時、現法の中に於て、能く自ら有情を攝受し饒益す。四には此れに於て正しく修行する時、未來世に於て、能く廣大無盡の可愛の諸の果異熟を得るなり。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

【九三】慳悋云云。以下の六は次第の如く六波羅蜜行に對治せらるる六弊なり。

【九四】見趣。身見邊見邪見等の惡趣なり、般若の智に治せらるるもの。

『世尊よ、是の如き一切の波羅蜜多は、何をか因、何をか果とし、何の義利かあるや。』
佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、
『善男子よ、是の如き一切の波羅蜜多は、大悲を因と爲し、微妙なる可愛の諸の果異熟と、一切有情を饒益するとを果と爲し、無上廣大の菩提を圓滿するを大義利と爲す。』
觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、
『世尊よ、若し諸の菩薩は、一切無盡の財寶を具足し、大悲を成就せば、何に緣つてか、世間に現に衆生の貧窮の得べきありや。』
佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、
『善男子よ、是れ諸の衆生自〔己〕の業〔力〕の過失のみ、若し爾らずんば、菩薩は常に他を饒益する心を懷き、又た常に無盡の財寶を具足せるに、若し諸の衆生に、自〔己〕の惡業の能く障礙を爲すこと無くんば、何んぞ世間の貧窮の得べきあらんや。譬へば餓鬼の大熱渴の爲めに、其身を逼迫せられて、大海の水悉く皆涸竭せりと見るが如きは、大海の過に非ず、是れ餓鬼の自業の過なるのみ。是の如く菩薩の施す所の財寶は、猶し大海の如く、過失あること無し、是れ諸の衆生の自業の過なるのみ。猶し餓鬼の自〔己〕の惡業力をもて、果あること無からしむるが如し。』
觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、菩薩は何等の波羅蜜多を以て、一切法の無自性性を取るや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、般若波羅蜜多を以て、能く諸法の無自性性を取る。』

『世尊よ、若し般若波羅蜜多能く諸法の無自性性を取らば、何が故に、有自性性を取らざるや。』

『善男子よ、我れ終に無自性性を以て、無自性性を取るとは說かず。然るに無自性性は諸の文字を離るる自內の所證なり。言說文字を捨てて而かも能く宣說すべからず。是の故に、我れ、般若波羅蜜多は能く諸法の無自性性を取ると說く。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、佛の所說の波羅蜜多、近波羅蜜多、大波羅蜜多の如き、云何んが波羅蜜多、云何んが近波羅蜜多、云何んが大波羅蜜多なるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、若し諸の菩薩、無量の時を經て、「布」施等を修行し、善法を成就すれども、而かも諸の煩惱猶ほ故らに現行し、未だ制伏すること能はず。然れども彼れが爲めに伏せらる、謂く勝解行地に於て、(九五)輭と中との勝解轉ずる時、是れを波羅蜜多と名づく。復た無量の時に於て、「布」施等を修行し、漸く復た增上して、善法を成就す。而

【九五】輭は柔輭なり、上中下三品中の下品を云ふ。

かるに諸の煩惱猶ほ故らに現行す。然れども能く制伏して、彼の所伏に非ず、謂く初地より已上是れを（九六）近波羅蜜多と名づく。復た無量の時に於て、〔布〕施等を修行し、轉た復た增上して、善法を成就し、一切の煩惱皆現行せず、謂く八地より已上是れを（九七）大波羅蜜多と名づく。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、此の諸地の中の煩惱、隨眠に幾種かあるべきや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、略して三種あり。一には（九八）害伴隨眠、謂く前五地に於けるなり。何以ば、善男子よ、諸の〔身見と〕倶生せざる現行の煩惱は、是れ〔身見と〕倶生する煩惱の現行の助伴なればなり。彼れ爾の〔第五地の〕時に於て永く復た有ること無し、是の故に説いて害伴隨眠と名づく。二には（九九）羸劣隨眠、謂く第六第七地の中に於けるなり。微細の現行、若しは修〔道の力〕に伏せられて現行せざるが故なり。三には（一〇〇）微細隨眠、謂く第八地已上に於けるなり。此れより已去、一切の煩惱復た現行せず、惟だ所知障の依止とのみ爲るが故なり。』

【九六】近波羅蜜多。第八地以上の任運無加行なるに隣近するが故に近と云ふ。

【九七】大波羅蜜多。長時に無相任運なるが故に大と名く。

【九八】害伴。第六識相應の倶生の煩惱所知二障の現行なり、是れ第四地の位に已に害せられし身見の伴類なるが故に害伴と云ふ。

【九九】羸劣。此も亦第六識相應の倶生の煩惱所知二障の現行なり、是れ第五地所斷の害伴に對するに稍微細なるが故に羸劣と云ふ。

【一〇〇】微細。此は第七識相應の所知障の現行なり、是れ一類微細にして知り難き障なるが故に微細と云ふ。

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、此の諸の隨眠は、幾種の麤重斷じて顯示する所なるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、但だ二種に由るのみ。謂く〔一〇一〕皮に在る麤重斷ずるに由るが故に、彼の〔一〇二〕初二を顯はし、復た膚に在る麤重斷ずるに由るが故に、彼の〔一〇三〕第三を顯はし、若しは骨に在る麤重斷ずるは、我れ、永に一切隨眠を離ると說く、位佛地に在り。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、幾ばくの不可數劫を經てか、能く是の如きの麤重を斷ずるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、〔一〇四〕三大不可數劫、或は無量劫を經。所謂年、月、半月、晝夜、一時、半時、須臾、瞬息、刹那の量劫數ふ可らざるが故なり。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の諸の菩薩、諸地の中に於て、生ずる所の煩惱は、當に、何の相、何の失、何の德かあるを知るべきや。』

【一〇一】皮。以下皮膚骨の三麤重を說く、隨眠を斷ずる難易を皮膚骨の病を醫するに喩ふ。

【一〇二】初二。害伴と羸劣との二。

【一〇三】第三。微細隨眠なり。

【一〇四】三大不可數劫。不可數とは梵に阿僧祇（Asaṃkhya）と云ひ、此に無數と譯す、不可數と意同じ、能く算數を知る者と雖も數へ知る能はざる極數なり。劫とは劫波の略、此に大時、長時、又は分別時節と譯す。無數無限の長時間を阿僧祇劫と云ふ。譬へば、此に方四十里の城あり、芥子中に充つ、三年に一たび天人降り來り一粒を取り去り、終ひに盡る時に一大阿僧祇劫となす。之れを芥子劫と云ふ。又譬あり、此に方四十里の石あり、三年に一たび天人下りて摩づ、而して終に磨滅し盡くるを一大阿僧祇劫となす、之

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、無染汚の相なり。何以ば、是の諸の菩薩は、初地の中に於て定んで一切諸法の法界に於て、已に善く通達すればなり。此の因緣に由つて、菩薩は要ず知りて方に煩惱を起す、知らざるが爲めには非ず。是の故に說いて無染汚の相と名づく。自身の中に於て、苦を生ずること能はず、故に過失無し。菩薩は是の如き煩惱を生起して、有情界に於て能く苦の因を斷ぜしむ。是の故に彼れに無量の功德あり。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『甚だ奇なり、世尊よ、無上菩提に乃ち是の如きの大功德利ありて、諸の菩薩の生起せる煩惱すら、尙ほ一切有情、聲聞、〔及〕獨覺の善根に勝れしむ、何に況んや其の餘の無量の功德をや。』

觀自在菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、世尊の、若しは聲聞乘、若しは復た大乘も、唯だ是れ一乘なりと說きたまふが如き、此れ何の密意かあるや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、我れ彼の聲聞乘の中に於て、種種の諸法の自性を宣說するが如きは、所謂、五蘊、或は內の六處、或は外の六處なり。是の如き等の類をば、大乘の中に於ては、卽ち彼の法は〔一〇五〕同一法

れを盤石劫と云ふ。かかる大阿僧祇劫を三たび歷るを三大不可數劫と云ふなり。

【一〇五】同一法界、眞如は一味平等の故に一乘なるを云ふ。

界、〔一〇六〕同一理趣なりと說くが故に、我れ乘の差別性を說かず。中に於て、或は言の如く義に於て、妄に分別を起し、一類は增益し、一類は損減することあり。又た諸乘差別の道理に於て、互ひに相違せりと謂つて、是の如く展轉して遞に諍論を興す。是の如きを、名けて此の中の密意と爲す。』

爾の時に世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、而かも頌を說いて曰はく、

『諸地の攝と〔一〇七〕想と所對治と、殊勝と生と願と及び諸學と、佛の是の
大乘を說くに由つて、此れに於て善く修して大覺を成ず。
諸法の種種の性を宣說し、復た皆同一理趣なりと說くは、謂く下乘〔の
聲聞〕或は上乘〔の如來〕に於てなり、〔同一理趣の〕故に我れ乘に
異性無しと說く。
言の如く義に於て妄りに分別して、或は增益するあり或は損減す、此の二種互に相違せりと謂つ
て、愚癡に意解して乖諍を成ず。』

爾の時觀自在菩薩摩訶薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、是の解深密法門の中に於て、此を何の敎と名づけ、我れ當に云何んが奉持すべきや。』

佛、觀自在菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、此れを諸地波羅蜜多了義の敎と名づけ、此の諸地波羅蜜多了義の敎に於て、汝當に奉持

【一〇六】同一理趣。三乘の道は同一の無自性觀なるが故に一乘なるを云ふ。

【一〇七】想。名言なり、言辭名句は思想を發表するが故に想と云ふ。今は十地の名稱を云ふ。

すべし。

此の諸地波羅蜜多了義の教を説きたまふ時、大會の中に於て、七十五千の菩薩あつて、皆菩薩の（一〇八）大乘光明三摩地を得たりき。

【一〇八】大乘光明三摩地　大乘の教理行果を照見する智光明を放つ禪定なり。

卷の五

如來成所作事品第八

爾の時(一)曼殊室利菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、

『世尊よ、佛所說の如來の(二)法身の如き、如來の法身に何等の相かあるや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ。若しは諸地の波羅蜜多に於て、善く出離を修し、轉依成滿する、是れを如來法身の相と名づく。當に知るべし、此の相は二の因緣の故に、不可思議なり、(三)戲論無きが故に、(四)所爲無きが故なりと。而るに諸の衆生、戲論に計著し、所爲あるが故なり。』

『世尊よ、聲聞、獨覺の所得の轉依を法身と名くるや否や。』

『善男子よ、法身と名けず。』

『世尊よ、當に何の身とか名づくべきや。』

【一】曼殊室利(Mañjuśrī)此に妙吉祥と譯す、卽ち舊稱の文殊師利なり。

【二】法身とは佛果所證の菩提(智)涅槃(理)の二轉の妙果を云ふ。身とは體性、依止、聚集の義なり、理と智とは無邊功德法の依り聚る體性なるが故に法身と云ふ。法報應三身中の法身には非ず、三身を通じて法身と名く。

【三】戲論無き。四句百非言議の域を超ゆ。

【四】所爲無き。生滅を絕して業惑に爲作せらるる無し。

『善男子よ、（五）解脱身と名づく。解脱身に由るが故に、一切の聲聞、獨覺と諸の如來と（六）平等平等なりと說く。法身に由るが故に、（七）差別ありと說く。如來の法身、差別あるが故に、（八）無量の功德、最勝の差別、算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、我れ當に云何んが、應に如來生起の相を知るべきや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、一切如來の（九）化身の作業は、世界の「種種の業に由て起るが如く、一切の種類は、如來功德衆の莊嚴する所にして、「衆生を」住持するを相と爲す。當に知るべし、化身の相は生起することあり、法身の相は生起あること無しと。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、云何んが應に化身を示現する方便善巧を知るべきや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、一切の三千大千佛國土の中に徧ねく、或る衆の推許せる增

【五】解脱身。二乘の煩惱障を斷じて得たる涅槃の果也、生死と縛法とを解脱するが故に解脱身と云ふ、未だ所知障を斷ぜず無量功德法の所依を得ざるが故に、但だ解脱身とのみ名けて、法身と稱するを得ず。

【六】平等。煩惱障を斷じて生死の縛法を解脱することは三乘異ならず、故に平等となす。

【七】差別。如來は所知障を斷ずるが故に、十力四無畏等殊勝法に莊嚴せらるれば法身と名くれども、二乘は但だ煩惱障のみを斷じて所知障を斷ずる能はざるが故に法身なるを得ず、是れ佛と二乘との差別ある所以なり。

【八】無量の功德。十力四無畏等の殊勝法なり。

【九】化身。應化身なり。

上なる王家、或る衆の推許せる大福田家に、同時に入胎し、誕生し、長大し、受欲し、出家し、苦行を行ずることを示し、苦行を捨て已つて、等正覺を成ず、〔是の如く〕次第に示現する、是れを如來化身を示現する方便善巧なりと名づく。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ。凡そ幾種の、一切如來身に住持せらるる言音差別あつて、此の言音に由つて、所化の有情の未だ（一〇）成熟せざる者をば、其れをして成熟せしめ、已に成熟せる者は、此れを縁じて境と爲し、速に解脱を得るや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく

『善男子よ、如來の言音に略して（一一）三種あり、一には契經、二には調伏、三には本母なり。』

『世尊よ、云何んが契經、云何んが調伏、云何んが本母なるや。』

『曼殊室利よ、若しは是の處に於て、我れ攝事に依つて諸法を顯示す、是れを契經と名づく、謂く四事に依り、或は九事に依り、或は復た二十九事に依る。云何んが四事なるや。一には聽聞の事、二に

【一〇】成熟 善根圓熟。

【一一】三種 即ち三藏なり。（一）契經。梵に素呾纜(Sūtra)と云ふ、如來の聖語は道理に契合し、義を貫き機を攝する猶し經の緯を持するが如し、故に契經と名く、即ち定學を詮する經藏なり。（二）調伏。梵に毘奈耶(Vinaya)と云ふ、衆生身口意の行業を調和し諸の惡行を制伏する戒學を詮する律藏なり。（三）本母。梵に摩怛理迦(Mātṛkā)と云ふ、諸法の性相を決擇して種種の道理を出生するが故に本母と名く、即ち慧學を詮する阿毘達磨(Abhidharma)の論藏なり。

は歸趣の事、三には修學の事、四には菩提の事なり。云何んが九事なるや。一には施設有情の事、二には彼の所受用の事、三には彼の生起の事、四には彼の生じ已つて住するの事、五には彼の染淨の事、六には彼の差別の事、七には能宣說の事、八には所宣說の事、九には諸の衆會の事なり。云何んが名けて（三）二十九事と爲すや。謂く［一には］雜染品に依つて、諸行を攝する事、［二］には彼れ次第に隨轉する事、［三には］卽ち是の中に於て補特伽羅の想を作し已つて、當來世に於て流轉する因の事、［一四

【三】二十九事。とは

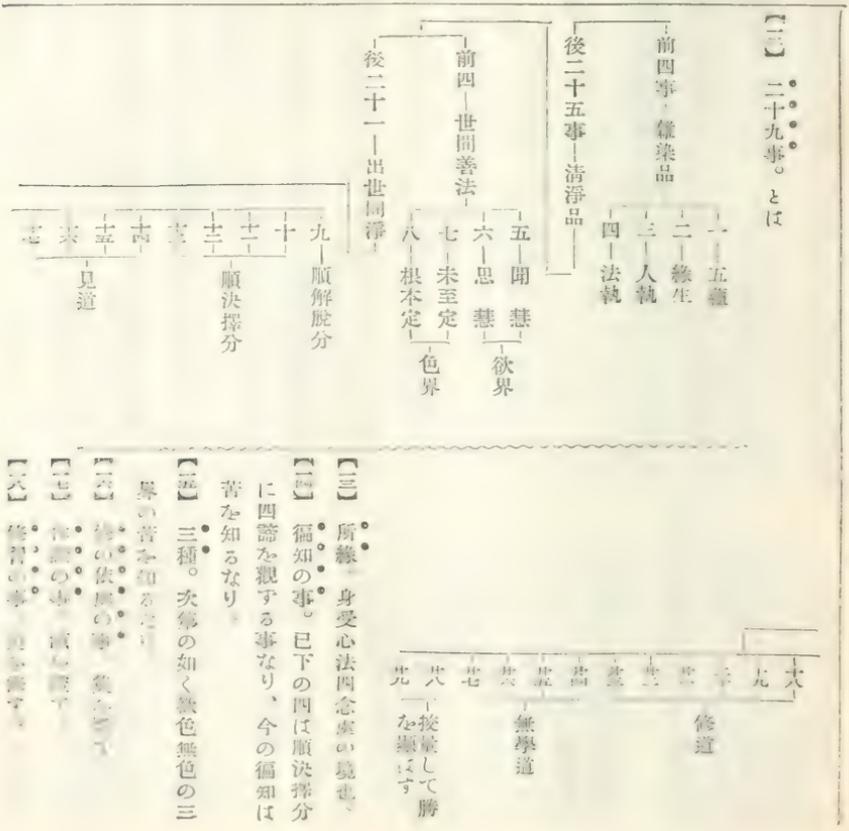
【一三】所緣。身受心法四念處の境也、

【一四】徧知の事。已下の四は順決擇分に四諦を觀ずる事なり、今の徧知は苦を知るなり。

【一五】三種。次第の如く欲色無色の三界の苦を知るなり。

【一六】彼の依處の事。集を云ふ。

【一七】彼證の事。滅を謂ふ。

【一八】修習の事。道を修す。

には〕法の想を作し已つて、當來世に於て流轉する因の事あり。〔五には〕清淨品に依つて、念を（一三）所緣に繫くるの事、〔六には〕卽ち是の中に於て勤めて精進する事、〔七には〕心安住する事、〔八には〕現法樂住の事、〔九には〕一切の苦を超〔越〕せる〔涅槃〕を緣ずる方便の事、〔十には〕彼の（一四）徧知の事あり。此〔徧知の事〕に復た（一五）三種あり、顚倒を徧知する所依處の故に、有情の想、〔及び〕外の有情中に依る邪行を徧知する所依處の故に、內〔心〕に增上慢を離るるを徧知する所依處の故なり。〔十一には〕（一六）修〔行〕の依處の事、〔十二には〕（一七）作證の事、〔十三には〕（一八）修習の事、〔十四には〕（一九）彼をして堅固ならしむるの事、〔十五には〕（二〇）彼の行相の事、〔十六には〕（二一）彼の所緣の事、〔十七には〕（二二）已斷未斷の觀察善巧の事、〔十八には〕（二三）彼の散亂の事、〔十九には〕（二四）彼の不散亂の事、〔二十には〕不散亂所依の事、〔二十一には〕（二五）劬勞加行を修習する事、〔二十二には〕勝利を修習する事、〔二十三には〕（二六）彼の堅牢の事、〔二十四には〕（二七）聖行を攝むる事、〔二十五には〕聖行の眷屬を攝むる事、〔二十六には〕（二八）眞實に通達する事、〔二十七には〕涅槃を證得する事、〔二十八には〕善說法毗奈

【一九】彼をして云云。眞見道なり。

【二〇】彼の行相の事。相見道能緣の形相なり、行相とは認識の狀態を云ふ。

【二一】彼の所緣の事。相見道所緣の境なり。

【二二】已斷未斷。相見道の中に於て見惑已に斷じ修惑未だ斷ぜざる位。

【二三】彼の散亂。見道の定を出でて未だ修道に入らざる中間の散亂心なり。

【二四】彼の不散亂。欲界修惑を斷ずるも方便加行の定を不散亂の事と云ふ。定と同時俱有の法を次の不散亂所依の事と云ふ。

【二五】劬勞加行云云。劬勞加行を修習すとは欲界修惑を斷ずる無間道なり、次の勝利を修習すとは色無色界の修惑を斷する無間道なり。

耶の中に於て、世間の[下品順解脱分善の]正見すら、一切の外道所得の[上品の]正見頂を超昇する事、及び[二十九には]即ち此[順解脱分善]に於て修せずして退する事あり。善說法毗奈耶の中に於て、修習せざるが故に、說いて名けて退と爲す。[邪]見の過失の故に、名けて退と爲すには非ず。曼殊室利よ、若しは是の處に於て、我れ聲聞及び諸の菩薩に依つて、(二九)別解脱及び別解脱相應の法を顯示す、是れを調伏と名づく。」

『世尊よ、菩薩の別解脱は幾相の所攝ぞや。』

『善男子よ、當に知るべし七相ありと。一には受[戒]の軌則の事を宣說するが故に、二には(三〇)他勝に隨順する事を宣說するが故に、三には毀犯に隨順する[緣]事を宣說するが故に、四には[凡夫の]有犯の自性を宣說するが故に、五には[聖者の]無犯の自性を宣說するが故に、六には所犯を(三一)出[離]することを宣說するが故に、七には律儀を(三二)捨することを宣說するが故なり。曼殊室利よ、若しは是

(二六) 彼の堅牢。金剛心なり。

(二七) 聖行を攝む云云。聖行を攝むとは如理智盡無生智。次の聖行の眷屬を攝むとは如量智盡無生智なり。

(二八) 眞實に通達云云。眞實に通達すとは、無餘涅槃に入らんと欲して眞如を觀ずるを云ふ。次の涅槃を證得すとは無餘涅槃に入らんと欲して先づ滅盡定中に入りて轉識を滅し去り僅に微細なる阿賴耶識のみとなりて、終に此をも捨てて般涅槃するを云ふ。

(二九) 別解脱。梵に波羅提木叉(Pratimokṣa)の譯語にして即ち戒律を云ふ、不殺生戒を持ちて殺生の惡を解脱し、不偸盜戒を持ちて偸盜の非を解脱する如く、一一の戒一一の惡を別別に解脱するが故に別解脱と云ふ。

(三〇) 他勝。他勝處の略語也。梵に波羅夷(Pārājika)と云ふ。善は自にして惡は他なり、殺盜婬妄の如き重罪を犯すに由りて惡法に勝たるるが故に他勝と云ふ、戒は持犯の所依なるを以て處と云ふ。

(三一) 出。出離なり、即ち悔過の事なり。

(三二) 捨。捨戒の事なり。

の處に於て、我れ十一種の相を以て、決了し、分別して諸法を顯示す、是れを本母と名づく。何等をか名けて十一種の相と爲すや。一には世俗の相、二には勝義の相、三には菩提分法所緣の相、四には行相、五には自性の相、六には彼の果相、七には彼の領受開示の相、八には彼の障礙法の相、九には彼の隨順法の相、十には彼の過患の相、十一には彼の勝利の相なり。世俗の相とは當に知るべし、三種ありと、一には補特伽羅を宣說するが故に、二には遍計所執の自性を宣說するが故に、三には諸法の作用事業を宣說するが故なり。勝義の相とは當に知るべし、七種の眞如を宣說するが故なりと。菩提分法所緣の相とは當に知るべし、遍一切種所知の事を宣說するが故なりと。行相とは當に知るべし、八行觀を宣說するが故なりと。云何んが名けて八行觀と爲すや。一には諦實の故に、二には安住の故に、三には過失の故に、四には功德の故に、五には理趣の故に、六には流轉の故に、七には道理の故に、八には總別の故なり。諦實とは謂く諸法の眞如なり。安住とは謂く或は補特伽羅を安立し、或は復た諸法の遍計所執の自性を安立し、或は復た一向、分別、反問、置記を安立し、或は復た隱密と顯了との記別の差別を安立するなり。過失とは謂く我れ諸の雜染法に無量の門の差別の過患ありと宣說す。功德とは謂く我れ諸の淸淨法に無量の門の差別の勝利ありと宣說す。理趣とは當に知るべし六種ありと。一には眞義の理趣、二には證得の理趣、三には敎導の理趣、四には〔三〕二邊を遠離する理趣、五には不可思議の理趣、六には意

【三】 二邊を遠離する理趣。二邊とは斷(無)常(有)の二見を云ふ。

趣の理趣なり。流轉とは所謂三世〔二四〕三有爲相及び〔二五〕四種の縁なり。道理とは當に知るべし四種ありと、一には觀待道理、二には作用道理、三には證成道理、四には法爾道理なり。觀待道理とは謂く若しは因、若しは縁〔を待ちて〕能く諸行を生じ及び隨說を起す、是の如きを名けて觀待道理と爲す。作用道理とは謂く若しは因、若しは縁能く諸法を得し、或は能く成辨し、或は復た生じ已って、諸の業用を作す、是の如きを名けて作用道理と爲す。〔二六〕證成道理とは謂く若しは因、若しは縁能く所立、所說、所標の義をして成立するを得せしめ、〔敵論者をして〕正しく覺悟せしむ、是の如きを名けて證成道理と爲す。又た此の道理に略して二種あり、一には清淨、二には不淸淨なり。五種の相に由つ

【二四】三有爲相。有爲法の有爲たるべき標相に三あり、生異滅の三相是なり。

【二五】四種の縁。(一)因縁。色法にまれ心法にまれ一切有爲法の生ずる時、親しく自體を辨成する原因を因縁となす、即ち現行の諸法は阿賴耶識中の種子を因として生じ、種子は現行の諸法を因として生ずるなり。(二)等無間縁。心心所法の生ずる時、前滅の心心所法を開避引導の縁となす、即ち前念の心法は過去世に滅し已り、現在世の位置を開避して後念の心法に與へ、以て引導するを等無間縁となす、譬ふれば橋を渡るに前人の去るは後人橋を渡るの縁なるが如く、前念心法の過去に落謝するは即ち後念心法の現在世に生ずるの縁なり。(三)所緣縁。心心所の生ずる時所慮所托となる境界を所縁縁となす、即ち有體の境界ありて能縁の心の爲めに所慮となりて縁慮せしめ、所託となりて杖托せしむ、是の故に心法は境界を縁慮し境界に杖托して生起するなり、之れを所縁縁と云ふ。(四)增上縁。色法にまれ心法にまれ生ぜんとする時、前三縁以外の一切法は若は與力若は不障の助縁となるを云ふ。以上四縁の中、心法の生ずるは四縁を具して生じ、色法の生ずるは唯因縁增上縁の二縁に由て生ずるなり、是の如く色心の諸法は四縁所生なるが故に依他起性とも縁生法とも有爲法とも名くるなり。

【二六】證成道理。是れ因明論理立破の規則なり、能立の眞能立を淸淨と云ひ、有過の似能

て、名けて淸淨と爲し、七種の相に由つて、不淸淨と名づく。云何んが（三七）五種の相に由つて名づけて淸淨と爲すや。一には現見所得の相、二には依止現見所得の相、三には白類譬喩所引の相、四には圓成實の相、五には善淸淨なる言敎の相なり。現見所得の相とは謂く一切行は皆無常の性なり、一切［有爲］行は皆是れ［行］苦の性なり、一切法は皆無我の性なり、此れを世間現量の所得と爲す。是の如き等の類、是れを現見所得の相と名づく。依止現見所得の相とは、謂く一切の［有爲］行は皆刹那の性なり、他の［未來］世［に苦樂の果］有るべき性なり。淨不淨の業を失壞すること無きの性なり。［その故は］彼の能依の麤なる［死生］無常の性は、現に可得なるに由るが故に、諸の有情の［苦樂］種種なる差別は［善惡］種種の業に依つて現に可得なるに由るが故に、諸の有情の若しは樂、若しは苦は淨不淨の業を以て依止と爲ること現に可得なるに由るが故なり。此の因縁に由つて、不現見に於ても、比度を爲すべし。是の如き等の類、是れを依止現見所得の相と名づく。自類譬喩引所の相とは、謂く內外の諸行聚の中に於て、諸の世間の共に了知する所の所得の［一期］生死［の無常］を引いて、以て［刹那無常の］譬喩と爲し、諸の世間の共に了知する所の所得の生［老病死］等の種種なる苦相を引いて、以て［行苦の］譬喩と爲し、諸の世間の共に了知する所の所得の不自在の相を引いて、以て［無我の］譬喩と爲し、又た復た外に於て、諸の世間の共

立を不淸淨と云ふ。

【三七】五種の相。第一の現見所得相は現量なり、第二の依止現見所得相は比量なり、第五の善淸淨言敎相は聖敎量なり、第三の自類比喩所引相は同喩なり、第四の圓成實相は無過の眞能立なり。

に了知する所の所得の意趣を引いて、以て「無常の」譬喩と爲す。是の如き等の類、當に知るべし、是れを自類譬喩所引の相と名づくと。(三八)圓成實の相とは、謂く卽ち是の如きの現見所得の相、若しは依止現見所得の相、若しは自類譬喩所得の相は、所成立に於て、決定して能く成ず。當に知るべし、是れを圓成實の相と名づくと。善淸淨言教の相とは、謂く一切智者の宣說する所の、涅槃究竟寂靜と言ふが如き、是の如き等の類、當に知るべし、是れを善淸淨言教の相と名づくと。善男子よ、是の故に、此の五種の相に由るが故に、善く淸淨の道理を觀察すと名づく、淸淨に由るが故に、應に修習すべきなり。」

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

「世尊よ、一切智者の相には、當に幾種ありと知るべきや。」

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

「善男子よ、略して五種あり。一には若しは有らゆる世間に出現する「衆生」一切智の「名」聲普ねく聞かざる無し。二には(三九)三十二種の大丈夫の相を成就す。三には(四〇)十力を具足して能く

【三八】圓成實の相。道理圓滿に成立するを云ふ、卽ち因明論の無過の眞能立なり。

【三九】三十二種の大丈夫の相。佛陀殊勝の妙相也。(一)足下平滿相。足蹠は平直柔軟にして地の高下に從ひ等しく觸れて殘る所なし。(二)足下千輻輪相。足蹠に千輻の相を現す。(三)手足柔軟相。手足共に柔軟にして兜羅綿の如し。(四)手足長指相。手足の指は纖長にして圓滿なり、以て長壽を表す。(五)手足指網相。手足共に指間に蹼有て金色の文之に交絡す。(六)足跟廣平相。足の跟は廣長圓滿にして趺と相應す。(七)足趺高滿相。足趺高く充滿し、且つ柔軟なり。(八)伊泥延腨相。足の腨漸次に纖圓にして鹿王の腨の如し。(九)正立手摩膝相。兩臂修直にして象王の鼻の如く、平立して能く膝を摩す。(一〇)馬王陰藏相。陰部は淸淨にして滿月の如く、而も其體悉く隱沒して現ぜざること馬

一切衆生の一切の疑惑を斷ず。四には（四一）四無所畏を具足して、正法を宣說し、一切他論の爲めに伏せられず、而かも能く一切の邪論を摧伏す。五には善說法毗奈耶の中に於て、八支聖道四沙門果等皆現に得べきなり。是の如く、〔衆〕生の故に、〔三十二〕相の故に、疑網を斷ずるが故に、他の所伏に非ずして、他を伏するが故に、聖道沙門〔果〕現に得べきが故に、是の如きの五種を、當に知るべし、名けて一切智の相と爲すことを。善男子よ是の如きの證成道理は、（四二）現量に由るが故に、（四三）比量に由るが故に、（四四）聖教量に由るが故に、〔卽ち〕五種の相に由つて、名けて淸淨と爲す。云何んが七種の相を不淸淨と名づくるや、一には（四五）此餘同類可得の相、二には（四六）此餘異類可得の相、三には（四七）

王の如く象王の如し。（一一）一孔一毛相。毛孔より各一毛のみ生じ、柔潤紺青にして右旋す。（一二）身毛上向相。頭髮並に身毛の端は皆上靡し、右旋す。（一三）細薄身皮相。身皮は細薄潤滑にして塵垢を止めず。（一四）眞妙金色相。身皮は悉く眞金色にして耀けること妙金臺の如し。（一五）七處平滿相。兩足二手の掌中、頸及び雙肩の七處は充滿し、光淨柔軟なり。（一六）肩頂圓滿相。肩頂は圓滿にして殊妙なり。（一七）腋下平滿相。腋下悉く皆充實す。（一八）大人直身相。容儀圓滿にして端直なり。（一九）身相端嚴相。身相修廣にして端嚴なり。胸前の卍字德相等亦た之れに屬す。（二〇）身縱廣長相。體相は左右上下縱橫の量等しくして表裏兩脇亦周匝圓滿なること尼拘律樹の如し。（二一）上身師子相。頷臆並に上半身に廣容廣大にして師子王の如し。（二二）面各丈光相。常に上下八方各一尋の間を照す。（二三）四十齒齊相。四十齒共に齊平淨密にして根深く、且つ白きこと珂雪の如し。（二四）四牙鮮白相。四牙は鮮白にして鋒利なり。（二五）常得上味相。常に味中の上味を得て身中千支の節脈は能く此の上味を引く。（二六）廣長大舌相。舌は薄淨廣長にして能く面輪を覆ひ耳毛際に至る。（二七）弘雅梵聲相。能く梵音を出し詞韻弘雅にして衆の多少に隨ひ等しく之を聞く。（二八）牛王眼睫相。眼睫は牛王の如く紺青齊整にて雜亂せず。（二九）紺青眼睛相。眼睛は紺青鮮白にして紅環間飾し皎潔分明なり。（三〇）師子王頰相。面輪は滿月の如く、眉相皎淨にして天帝の弓の如し。

一切同類可得の相、四には（四八）一切異類可得の相、五には（四九）異類譬喩所得の相、六には（五〇）圓成實に非ざる相、七には（五一）善く清淨に非ざる言敎の相なり。若しは一切法の意識に識らるる性、是れを「第三の」一切同類可得の相と名づく。若しは一切法の相性、業法、因果の異相なる、是の如き一一の異相に隨つて、決定展轉して、各各異相なるに由つて、是れを「第四の」一切異類可得の相と名づく。善男子よ、若しは「第一の」此餘同類可得の相に於てし及び「第四の」譬喩の中の一切異類の相ある者は、此の因緣に由つて、所成立に於て、決定に非ざるが故に、是れを「第六の」圓成實に非ざる相と名づく。又た「第二の」此餘異類可得の相に於てし及び「第三の」譬喩の中の一切同類の相ある者は、此因緣に

(三二)眉間白毫相。眉間に白毫ありて右旋す、柔軟なること兜羅綿の如く、鮮白光淨なること珂雪に踰えたり。(三三)頂上肉髻相。頂骨涌起して自然に髻をなす、周圓にして高く顯はる。

【四〇】十力。佛智の屈伏すべからず能く怨敵を摧くの用を力と名く。(一)處非處智力。處とは道理なり理に契ふを是處と云ひ理に合せざるを非處と云ふ、道理の是非を知る智力。(二)業異熟智力。業と報との關因感果の理を知る智力。(三)靜慮解脫等持等至智力。四靜慮、八解脫、有心無心の諸定を知る智力。(四)根上下智力。衆生機根の上下利鈍を知る智力。(五)種種勝解智力。衆生の樂欲勝解を知る智力。(六)種種界智力。衆生の種種性類界畔を知る智力。(七)遍趣行智力。生死に趣く行、涅槃に趣く行、乃至天趣に趣く行、地獄に趣く行等備く一切の諸行の皆能く果に趣くを知る智力。(八)宿住隨念智力。過去宿住の事を憶知する智力。(九)死生智力。未來の死生、善惡趣等を知る智力。(十)漏盡智力。煩惱を斷盡し得たる道理を知する智力なり。

【四一】四無所畏。佛は智力内に充實するが故に設ひ外道等に難詰せらることあるも毫も怯懼する所無き智力を云ふ。(一)正等覺無畏。佛自ら我は是れ正等覺者なりと宣言し而も他の難詰を畏れず。(二)漏永盡無畏。佛自ら我は是れ諸漏已盡者なりと宣言し而も外難を畏れず。(三)說障法無畏。佛說きて染法は皆是れ道を障ふと宣して憚らず畏れず。(四)說出道無畏。佛、說きて道を修すれば必ず苦を出離すと宣して他

由つて、所成立に於て、決定せざるが故に、是れを〔第六の〕圓成實に非ざる相と名づく。非圓成實の故に、善觀察の清淨道理に非ず。不清淨の故に、修習すべきにあらず。若しは〔第五の〕異類譬喩所引の相、若しは〔第七の〕善清淨に非ざる言教の相は、當に知るべし、體性皆不清淨なりと。〔五一〕法爾道理とは、謂く如來の出世にまれ、若しは不出世にまれ、法性に安住し法法界に住す、是れを法爾道理と名づく。總別とは、謂く先づ總じて一句の法を說き已つて、後後の諸句に〔於て〕差別し、分別し、究竟し、顯了にす。自性の相とは、謂く我が所說の有行〔相〕有〔所〕緣の所有る能取の菩提分法なり。謂く念住等なり。是の如きを名けて彼の自性の相と爲す。彼の果相とは、謂く若しは世間、若しは出世間の

の批難を畏れざるなり。

〔四二〕**現量**　心法が所緣の境を量知するに無分別に誤謬なく對境のありのままに正く知るを云ふ、五種の相の中第一名聲普聞は耳識の現量に由る。

〔四三〕**比量**。甲乙比較して誤謬なく正しく知るを云ふ、五種の中第二の三十二相第三の十力第四の四無所畏の意識の比量の境に由る。

〔四四〕**聖教量**。聖者の言說を權衡として信知するを云ふ、五種の中第五善說法毘那耶は聖教量に由る。

〔四五〕**此餘同類可得の相**。以下の四相は因明論理法六不定過失の中相違決定を除きて餘の五不定なり、今此の此餘同類可得の相とは同品一分轉異品徧轉不定及び俱品一分轉不定の過失なり、同品一分轉異品徧轉不定とは「聲は勤勇無間所發性に非るべし(宗)無常の性なるが故に(因)電と虛空等の如く(同喩、瓶等の如く(異喩)」と立つるに無常性故の因は同喩の中に於て虛空の一分には轉ぜざるを以て同類とするを得ず、此の餘の電の一分のみに轉じ、同類とするを得。又俱品一分轉不定とは「聲は常なるべし(宗)無質礙なるが故に(因)虛空と極微との如く(同喩)瓶と心心所との如く(異喩)」と立つるに、無質礙故の因は、同喩の中に於て極微の上には轉ぜず、此餘の虛空の一分のみを同類とするを得。これを此餘同類可得の相と云ふ。

〔四六〕**此餘異類可得の相**。是れ異品一分轉同品徧轉不定過失なり、「聲は勤勇無間所發なるべし(宗)無常の性なるが故に(因)瓶等の如く(同喩)電と虛

諸の煩惱斷、及び所引發の世出世間の諸果功德なり。是の如きを名けて彼の果相を得すと爲す。彼の領受開示の相とは、謂く卽ち彼れに於て、〔五三〕解脱智を以て而かも之れを領受し、及び廣く他の爲めに宣說し、開示す。是の如きを名けて彼の領受開示の相と爲す。彼の障礙法の相とは、謂く卽ち菩提分法を修するに於て、能く隨つて障礙する諸の染汚法なり、是れを彼の障礙法の相と名づく。彼の隨順法の相とは、謂く卽ち彼に於て、多く作す所の法なり、是れを彼の隨順法の相と名づく。彼の過患の相とは、當に知るべし、卽ち彼の諸の障礙法の所有の過失なり、是れを彼の過患の相と名づくと。彼の勝利の相とは、當に知るべし、卽ち彼の諸の隨順せる法の所有の功德なり、是れを彼の勝利の

空等の如く(異喩)」と立つるに、無常性故の因に、異喩の中に於て、電の一分に轉ずるが故に異類とするを得す。此の餘の空等の一分のみを異類とするを得。

【四七】一切同類可得の相　是れ共不定の過失なり、「聲は常なるべし(宗)所量の性なるが故に(因)瓶等の如く、(同喩)虛空等の如く(異喩)」と立つる時、一切諸法一として心心所の所緣ならざる無きが故に、所量性故の因は同喩の瓶等のみならず、異喩の虛空等の上にも轉じ、卽ち一切皆悉く同類たるを得。

【四八】一切異類可得の相　是れ不共不定の過失なり、「聲は常なるべし(宗)所聞の性なるが故に(因)虛空等の如く(同喩)瓶等の如く(異喩)」と立つるに、聲以外一として所聞なるもの無きが故に、所聞性故の因は、虛空等も瓶等も一切皆悉く異類たるを得。

【四九】異類譬喩同得の相。此れは相違因の過失なり、「聲は常なるべし、(宗)所作性なるが故に(因)虛空の如く(同喩)瓶等の如く(異喩)」と立つるに、所作性故の因は同喩の虛空の上に轉ぜざるが故に、其れの如く「常なるべし」の宗を立するを得ず、却て異喩の瓶等の上に轉ずるが故に、異類譬喩の「瓶等の如く無常なるべし」の宗を立するを得、卽ち「聲は無常なるべし、宗　所作性なるが故に(因)瓶等の如く、(同喩)虛空等の如く」との反對の結果を見るに至る。

【五〇】異成實に非ざる相　前因相の不定の過失あるときは決定して論者に宗義を成立する能はずして似能立に墮するを

相と名づくと。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

『惟だ願はくは世尊よ、諸の菩薩の爲めに、略して契經、調伏、本母の外道に共せざる陀羅尼の義を說き、此の共せざる陀羅尼の義に由つて、諸の菩薩をして、如來所說の諸法甚深の密意に入ることを得せしめたまへ。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、汝今諦に聽け、吾れ當に汝が爲めに、共せざる陀羅尼の義を略說して、諸の菩薩をして、我が所說の密意の言辭に於て、能く善く悟入せしむべし。善男子よ、若しは雜染の法にまれ、若しは淸淨の法にまれ、我れ、一切皆作用無し、亦た都て補特伽羅あることなしと說く。一切種［みな］所爲を離るるを以ての故に、雜染の法、先に染にして後に淨なるに非ず、淸淨の法、後に淨にして先に染なるに非ず。凡夫異生、麤重の身に於て、諸法と、補特伽羅との自性と、差別とに執著し。隨眠と妄見とを以て、緣と爲すが故に、我、我所を計す。此の妄見に由つて我見、我聞、我嗅、我嘗、我觸、我知、我食、我作、我染、我淨と謂ふ。是の如き等の類、邪なる加行に轉ず。若し如實に知ること有らば、是の如き者は、便ち能く麤重の身を永斷し、一切煩惱の住せざる、最極淸淨にして諸の戲論を離れたる無爲の［所］依止［の身］を獲得し、加行あること無けん。

云ふ。

【五一】善淸淨に非る言教の相。聖者所說の言教に相違することを云ふ、自教相違の過失なり。

【五二】法爾道理。水の冷、火の煖、地の堅なるが如きは其道理、法として然るのみ。

【五三】解脫智。煩惱を解脫する智德を云ふ。

善男子よ、當に知るべし、是れを略して共せざる陀羅尼の義を說くと名づくることを。』

爾の時世尊、重ねて此義を宣べんと欲して、復た頌を說き曰はく、

『一切雜染淸淨の法は、皆作用も數取趣もなし、由つて我れ宣說す所爲を離れ、染汚も淸淨も先後に非ずと。

麤重の身に於て隨眠と見とを、緣と爲て我及び我所を計す。此れに由つて妄りに我見等、我食我爲我染淨と謂ふ。

若し如實に知ること是の如き者は、乃ち能く麤重の身を永斷し、無染淨無戲論の、無爲の依止を得て加行無からん。』

爾の時曼殊室利菩薩摩訶薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、云何んが、應に諸の如來の心生起の相を知るべきや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、夫れ如來は、心意識生起の所顯に非ず。然るに諸の如來は、無加行の心法生起することあり。當に知るべし、此の事猶ほし變化の如しと。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、若し諸の如來の法身は、一切の加行を遠離せり。旣に加行無くんば云何んが而かも心法

生起することあるや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、先に修習する所の方便般若の加行力の故に、心生起することあり。善男子よ、譬へば正しく無心睡眠に入るが如き、覺悟するに於て、而かも加行を作すに非ず。先きに作す所の加行の勢力に由つて、而かも復た覺悟す。又た正しく（五四）滅盡定中に在るが如き、定を起つに於て、而かも加行を作すに非ず。先きに作す所の加行の勢力に由つて、還た定より起つ。睡眠及び滅盡定より、心更に生起するが如く、是の如く如來は、先に修習せる方便般若の加行力に由るが故に、當に知るべし、復た心法生起すること有ることを。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、如來の化身は、當に有心と言はんや、無心と爲んや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、是れ有心にも非ず、亦た無心にも非ず、何以ば、（五五）自依心無く、（五六）依他心有ればなり。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

【五四】滅盡定。聖者心心所の勞慮を厭ひ暫らく之を止息せんと欲し無色界無所有處以下の貪を伏して、非想非非想處の定に在りて、前七識の心心所を滅盡して入定す。

【五五】自依心。緣慮の實用ある心の自體なり。

【五六】依他心。變化身の心は非緣慮の相分心にして他の自受用報身佛の緣慮心を本質とし之れに依りて現はれたる影像なるが故に依他心と云ふ。

『世尊よ、如來の所行と如來の境界との此の二種は、何の差別かあるや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

「善男子よ、如來の所行とは、謂く一切種の如來の共に有する、不可思議の無量の功德衆に、莊嚴せらるる清淨の佛土なり。如來の境界とは、謂く一切種に五界の差別あり。何等をか五と爲すや。一には有情界、二には世界、三には法界、四には調伏界、五には調伏方便界なり。是の如きを名けて二種の差別と爲す。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、如來の成等正覺、轉正法輪、入大涅槃、是の如きの三種、當に何の相なりと知るべきや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、當に知るべし、此の三皆二の相無しと。謂く等正覺を成ずるに非ず。等正覺を成ぜざるに非ず。正法輪を轉ずるに非ず。正法輪を轉ぜざるに非ず。大涅槃に入るに非ず。大涅槃に入らざるに非ず。何を以ての故に、如來の法身は究竟して淨なるが故に、如來の化身は常に示現するが故なり。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、諸の有情類は、但だ化身に於てのみ見聞奉事して、諸の功德を生ず、如來の法身及自受用身」は彼「有情」に於て、何の因緣かあるや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

「善男子よ、如來は是れ彼の增上と、所緣との因緣なるが故に、又た彼の化身は是れ如來の力に住持せらるるが故なり。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

「世尊よ、等しく加行無くんば、何の因緣の故に、如來の法身は、諸の有情の爲めに大智光を放ち、及び無量の化身の影像を出したまひ、聲聞、獨覺の解脫身には、是の如きの事無きや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、譬へば、等しく加行無けれども、日月輪の水火二種の頗胝迦寶よりは大光明を放ち、餘の水火の頗胝迦寶に非ざるが如し。謂く（五七）大威德の有情に住持せらるるが故に、（五八）諸の有情の業增上力の故に「爾なり」。又た彼の善き工業者の雕飾する所の末尼寶珠よりは、印文の像を出し、所餘の雕飾せざる者よりは「出ださ」ざるが如し。是の如く、無量の法界を緣ずる方便般若の、極めて善く修習し、磨瑩し、集成せる如來の法身は、是れより能く大智光明

【五七】大威德の有情。日天子月天子なり。
【五八】諸の有情の業增上力。修行者の光明業を修する業力なり。

を放ち、及び種種なる化身の影像を出し、惟だ彼の「聲聞緣覺の」解脫身よりは、斯くの如き事あるに非ず。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、世尊の說きたまふが如く、如來と菩薩との威德住持「の力」、諸の衆生をして、欲界の中に於て、(五九)刹帝利、(六〇)波羅門等の大富貴の家に生れ、人身、財寶圓滿せずといふこと無く、或は欲界の天、色無色界「等」の一切身財、圓滿し得べからしむと「あり」、世尊よ、此の中に何の密意かあるや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、如來と菩薩との威德住持、若しは「十善の」道にまれ、若しは「身語意の」行にまれ、一切の「生」處に於て、能く衆生をして、身財皆圓滿することを獲得せしむるとは、卽ち所應に隨つて、彼れが爲めに、此の道、此の行を宣說するに、若し能く此の道、此の行に於て、正しく修行することある者には、一切處に於て、所獲の身財圓滿せずといふこと無く、若し衆生あつて、此の道と行とに於て違背し、輕毀し、又た我が所に於て、損惱の心及び瞋恚の心を起さば、命終し已つて後、一切處に於て、所得の身財下劣ならずといふこと無し。曼殊室利よ、是の因緣に由つて、當に知るべし、如來及び諸の菩薩の威德住持は、但能く身財を

【五九】刹帝利 Kṣatriya。此に土田主と譯す、印度四姓階級の一、國を治むる王種なり。

【六〇】波羅門(Brāhmaṇa)。此に淨行と譯す、四姓の最高級を占めて祭祀を司る僧族なり。

して圓滿ならしむるのみに非ず、如來と菩薩との住持威德は、亦た衆生の身財をして下劣にもならしむることを。』

曼殊室利菩薩、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、諸の穢土の中に「於て」、何の事か得易く、何の事か得難きや。諸の淨土の中に「於て」、何の事か得易く、何の事か得難きや。』

佛、曼殊室利菩薩に告げ曰はく、

『善男子よ、諸の穢土の中に「於て」は、八事得易く、二事得難きなり。何等をか名けて、八事得易しと爲すや。一には外道、二には有苦の衆生、三には種姓家世興衰の差別、四には諸の惡行を行ず、五には數尸羅を犯す、六には惡趣。七には下乘。八には下劣意樂の加行の菩薩なり。何等をか名けて、二事得難しと爲すや。一には增上意樂の加行の菩薩の遊集する所、二には如來世に出現することなり。曼殊室利よ、諸の淨土の中に「於て」は、上と相違す。當に知るべし、八事は甚だ得難しと爲し、二事は得易きことを。』

爾の時、曼殊室利菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、

『世尊よ、是の解深密法門の中に於て、此れをば何の敎とか名くるや、我れ當に云何んが奉持すべきや。』

佛、曼殊室利菩薩摩訶薩に告げ曰はく。

『善男子よ。此れを如來成所作事了義の教と名づく。此の如來成所作事了義の教に於て、汝當に奉持すべし。』

是の如來成所作事了義教を說きたまへる時、大會の中に於て、七十五千の菩薩摩訶薩あつて、皆圓滿法身の證覺を得たりき。

國譯解深密經終

大唐罽賓國般若三藏奉詔譯

大乘本生心地觀經報恩品解題

心地觀經は全部八卷より成り、序品・報恩品・厭離品・無垢性品・阿蘭若品・離世間品・厭身品・波羅蜜多品・功德莊嚴品・觀心品・發菩提心品・成佛品、及び囑累品の十三品に分れて居る。此等は皆大切なる聖訓であるが、就中第二の報恩品は八卷中の二卷を占め、人類の社會生活の運營上、極めて實際的なる教勅で、身分の貴賤を問はず、遵守し奉行せねばならぬ報恩の端的を說けるものである。即ち之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して戾らざる底の實證的要諦を親切に說破せるものである。

世に報恩の要諦を說ける聖人君子は幾人もあらう、が、此の報恩品の如く、人類社會の實際を摑んで、而かも普遍的に說き盡せるものは、唯我が如來一人であらう。世に報恩の端的を釋する典籍は汗牛充棟も啻ならぬほどであらう、が、人類生活の根底を捉へて、而かも平易簡明に解說せるものは、唯此の心地觀經報恩品のみであらう。

報恩の種類は幾つもあらうが、我が佛敎では、父母の恩、國王の恩、衆生の恩及び三寶の恩の四類に分つて天下一切の報恩の端的を說き盡してある。然らば報恩の究竟の目的は如何と云ふに、それは人類すべてが成佛することである。成佛と云へば世の中には、死ぬことのやうに速了する人があるかも

知れんが、成佛とは決して死ぬことではない、阿耨多羅三藐三菩提を證することである。阿耨多羅三藐三菩提を證すとは、自覺覺他の行を圓滿することである。自覺覺他の行を圓滿すとは、人間最高の理想を實現することである。世に何がお芽出度いと言つても、人が其の最高の理想を實現するほどお芽出度いことはあるまい。されば我が國でも、孝明天皇までは、卽位式とは成佛の儀式であつた。

人類を中心として、世の中に有りと有らゆるもの都てに法益を施し、一切衆生を成佛せしめて、完全にして健全なる社會を打ち建てるのが佛教の使命であり理想である。だから此の經の序品には、菩薩・緣覺・聲聞・天・龍・夜叉・乾達婆・阿修羅・伽留羅・緊那羅・摩睺羅伽・轉輪王・十六大國王・諸大夫人・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・婆羅門・刹帝利・薛舍・戍達羅・長者・居士・諸外道・人非人・禽獸・閻魔羅・神通外道・餓鬼衆等、十方法界の衆生が列席して說法を拜聽し敎益にあづかることになつて居る。

此經を初めて漢文に譯したのは、唐の代に印度から支那に來つた、般若三藏である。彼は罽賓國の人で、時の天子德宗皇帝の詔を奉じて此經の飜譯に從事したとある。爾來此經殊に第二の報恩品は、弘く世に行はれて今日に到つたのである。で、心地觀經全部八卷を和譯したいが、今は最も弘く行はるる第二の報恩品だけを譯して、佛教徒も非佛教徒も諸共に法味に飽滿せしめたいと思ふ。

譯者　山上曹源　識

國譯大乘本生心地觀經報恩品〔一〕

上

爾の時に世尊、安詳として三昧より起ち、彌勒菩薩摩訶薩に告げ言はく、

「善い哉、善い哉、汝等大士（及び）諸の善男子は、世間の父に親近せんと欲するが爲の故に、出世の法を聽聞せんと欲するが爲の故に、〔二〕如如の理を思惟せんと欲するが爲の故に、如如の智を修習せんと欲するが爲の故に、佛の所に來詣して供養し恭敬す。

我いま心地の妙法を演說し衆生を引導して佛智に入らしめん。是の如きの妙法は、諸佛如來、無量〔三〕劫を過て、時に乃ち之を說き給ふ。如來世尊の世に出興し給ふに遇ふこと甚だ難きこと〔四〕優曇華の如し。假使如來の世に出現し給ふとも、此の妙法を說き給ふこと亦た復た難しと爲す。所以は何となれば、一切の衆生は、大乘の菩薩の行願を遠離して〔五〕聲聞・緣覺の菩提に趣向し、生死を厭離して永へに涅槃に入り、大乘常樂の妙果を樂はざればなり。

【一】普通には略して「心地觀經報恩品」と云ふ。

【二】如如の理とは眞實の道理又は眞如の理と云ふほどの意味なり。

【三】劫とは梵語 Kalpa の音譯。一劫は四億三千二百萬年なり。

【四】優曇華は梵語 Udumbara の音譯なり。

【五】聲聞・緣覺とて、また大乘の妙理を味はざる小乘の教徒なり。

然るに諸の如來は法輪を轉ずるに四失を遠離して相應の法を說き給ふ。(四失を遠離すとは)一に非處なく、二に非時なく、三に非器なく、四に非法なし。(此を以て)病に應じて藥を與へ、復除することを得しめ給ふ。卽ち是れ如來(六)不共の德なり。聲聞緣覺は未だ自在を得ず、諸の菩薩衆の不共の境なり。是の因緣を以て、菩提の正道、心地の法門を見聞すること難し。若し善男子善女人ありて是の妙法を聞き、一たび耳に經て須臾の頃も念を攝し心を觀じて、無上菩提の種を熏成せば、久からずして當に菩提樹王金剛寶座に坐して、(七)阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。』

爾の時に(八)王舍大城に五百の長者ありき。その名を妙德長者・勇猛長者・善法長者・念佛長者・妙智長者・菩提長者・妙辯長者・法眼長者・光明長者・滿願長者と曰ふ。是等の大富長者は、正見を成就し、如來及び諸の聖衆を供養したてまつる。是の諸の長者、世尊の大乘心地の法門を讚歎し給ふを聞いて、是の念をなせり。

『如來の金色の光を放つて菩薩の難行苦行を影現し給ふを見るに、我、苦行を行ふ心を愛樂せず。誰か能く永劫(の間)生死に住して、衆生の爲に諸の苦惱を受(るを好ま)んや』と。

是の念を作し已つて、卽ち座より起ち、偏へに右の肩を袒き右の膝を地に著け、合掌恭敬して、異

【六】不共の德とは如來のみ有し給ふ德にして他に共通せざる德の義なり。

【七】阿耨多羅三藐三菩提は、梵語にして無上正等覺と譯す。

【八】王舍城は原名ラージャグリハと云ひ、現今は訛りてラージギルと云ふ。印度のビハール州にあり。

口同音に前んで佛に白して言さく、

「世尊よ、我等は大乘の諸菩薩の行を樂はず、亦た苦行の音聲を聽くことを喜ばず。所以は何となれば、一切の菩薩の修し給ふ所の行願は、皆悉くこれ恩を知り恩を報ずるにあらず。そは父母を遠離して出家に趣き、自らの妻子を以て欲する所に施し、頭目髓腦も其の願ひ求むる(者ある)に隨つて悉く皆布施し、諸の苦惱を受て、三(九)(阿)僧祇劫(の間)、具さに八萬四千の（一〇）波羅蜜(多)の行を修して生死の流を越え、方めて菩提大安樂の處に至る。(是れ)（一一）二乘の道果に趣向して、三生百劫に資糧を修集し、生死の因を斷じ、涅槃の果を證して、速に安樂(の處)に至り、方めて報恩と名くるに如かざればなり」と。

爾の時に佛、五百の長者に告げたまはく、

「善い哉、善い哉、汝等は（一二）大乘を讃歎するを聞いて、心に（一三）渴仰を生せり。(我今大乘の)妙義を發起して(汝等のみならず)未來世に於ける一切衆生の恩德を知らざるものを利益し安樂ならしめん。（一四）諦聽せよ、諦聽せよ。(而して)善く之を思念せよ。我今、汝等の爲に分別して、世間

【九】阿僧祇劫とは梵語にて無量數の時間と云ふ意味なり。

【一〇】波羅蜜多は到彼岸または度と譯す。現實の此岸より理想の彼岸に到り、或は度すことなり。

【一一】二乘とは聲聞と緣覺のことなり

【一二】大乘とは小乘に對する言葉にて佛法中高尙深遠の敎を說く法門を云ふ。其の學究的區別は此に述べ難し。

【一三】渴仰。高尙なる大乘の法門に、修するは困難なれば、寧ろ淺き小乘の法門に止まらんと引返し思案するを渴仰と云ふ。

【一四】諦聽。アキラカに聽き分けるの意。

【一五】世間。世間の社會を尙世間と云ふ。

(一五)出世間に於ける有恩の處を演說せん。

善男子(等)よ、汝等の言ふ所は未だ正理に可はず。何となれば世間出世間の恩に四種あり、一には父母の恩、二には(一六)衆生の恩、三には國王の恩、四には(一七)三寶の恩なり、是の如きの四恩は、一切衆生平等に荷負すればなり。

善男子等よ、父母の恩とは、父に慈恩あり、母に悲恩あり。母の悲恩とは、若しわれ世に住して一劫の中に於て說けども(說き)盡すこと能はず。我いま汝(等)の爲に(其の)少分を宣說せん。たとひ人あり、一百の淨行の大婆羅門と、一百の(一八)五通(を得たる)諸大神仙と、一百の善友とを恭敬し供養するに、(一九)七寶(を以て作れる)上妙の堂內に安置し、百千種の上妙の珍膳を以てし、諸の瓔珞と衆の寶(玉をもて飾れる)衣服を垂れ、栴檀・沈香(の樹)を以て諸の房舍を立て、百寶もて牀臥敷具を莊嚴し、衆病を治療するに百種の湯藥(をそなへ)、一心に供養して百千劫に滿つるも、一念、孝順心に住して、微少の物を以て悲母を色養し、隨所に供侍するに如かず。前の功德を(此の功德に)比するに(二〇)百千萬分にして校量す可らず。世の悲母の其の子を念ふことには比(すべきもの)なく、(其の)恩は實に(二一)未形

【一六】衆生の恩とは社會共同生活の恩なり。

【一七】三寶の恩とは佛と法と僧とより啓發せられ向上せしめらるるを云ふ。

【一八】五通とは天眼通と天耳通と他心通と宿命通と神足通との五の神通力を云ふ。

【一九】七寶とは金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・珊瑚・琥珀なり。

【二〇】百千萬分。淨行の大婆羅門、諸大神仙等に對する供養の功德と、悲母を色養する功德とを比較するに、前者は後者の千萬分の一にも當らず、全く兩者は比較校量すべからざるものなりとの義。

【二一】未形とは未だ其の子の形骸が生れ出でない前、懷姙中のことなり。

に及ぶ。始め受胎より、十ケ月の終まで、行住坐臥に諸の苦惱を受くること口の(能く)宣ぶる所にあらず。(己が)欲樂する飲食衣服を得と雖も、而かも(其等に對して)愛(する心)を生ぜず、(其の子を)憂念する心は、恒に息むときなく、但(ひたすらに)自ら(の胎内にある子のことを)思惟するのみなり。將に生産せんとするや、漸く諸の苦(痛)を受け、晝夜愁惱す。若し懷産の時は、百千の刃の競ひ來りて屠り割くが如し。或は(之が爲に)(二)無常を致すことあり。若し苦惱なければ諸親眷屬の喜樂盡ることなく、猶ほ貧女の如意(寶)珠を得たるが如し。(また)其の子の聲を發するや、(母の耳には恰も)音樂を聞くが如し。(子は)母の胸臆を以て寢處と爲し、左右の膝の上に常に遊履を爲す。(加之)胸臆の中より甘露の泉を出し、(以て其の子を育くむ)。長養の恩は普天に彌り、憐愍の德は廣大にして比すべきものなし。

世閒の高しとするところ、山岳に過ぎたるは莫し。(されど)悲母の恩は(三)須彌に逾ゆ。世閒の重しとするところ、大地を尤となす、(されど)悲母の恩はまた彼に過ぐ。

若し男女あり、恩に背いて順はず、其の父母をして怨念の心を生じ、母に惡言を發せしめば、子は卽ち墜墮して、或は地獄餓鬼畜生(の閒)に在らん。世閒の疾しとするところ、猛風に過ぎたるはなし。(されど)怨念の徵は、また彼よりも速なり。一切の如來、金剛天等及び五通仙も(これを)救護するこ

【二】無常とは活動變遷等の義なるが此所には人閒の大變化卽ち死を意味す。

【三】須彌。印度古代の地文學によれば世界の中心をなせる山岳を須彌山と云ひ、世界の最高峰なり。

と能はず。

若し善男子善女人あり、悲母の教に承順して違ふこと無くんば、諸天護念して福樂盡ること無けん。是の如き男女を卽ち尊貴天人の種類と名く。或は是れ菩薩の衆生を度せんが爲に、現に男女と爲つて父母を饒益す（とも見る）。

若し善男子善女人あり、母恩を報せんが爲に、一劫を經て、毎日三時に自身の肉を割き、以て父母を養ふとも、未だ一日の恩にだも報ゆること能はず。何となれば、一切の男女は（母の）胎中に處して、口に乳根を吮ひ、母血を飲噉す。（又その）出胎し已るに及びて、幼稚の前に飲む所の母乳は、（實に）百八十斛なり。（加之）母は上味を得れば先づ（之を）其の子に與へ、珍妙の衣服も亦た復た是の如くす。愚癡なるも鄙陋なるも情愛に二つなければなり。

昔、女人あり、遠く他國に遊び、所生の子を抱いて殑伽河を渡る。（時に）其の水暴漲して、力前むこと能はず、（又その子を）愛念して捨てず、母子倶に沒（死）せり。是の慈心善根の力を以ての故に、卽ち〔二四〕色究竟天に上生して大梵王と作ることを得たり。

是の因緣を以て母に十德あり。一に大地と名く、（子は）母の胎中を所依と爲せばなり。二に能生と名く、（母は）衆苦を經歷して能く生ずるを以てなり。三に能正と名く、（母は）恒に其の手を以て（嬰

【二四】色究竟天とは三界の中の最上の天なり。

兒の)〔一五〕五根を理るを以てなり。四に養育と名く、四時の宜に隨つて能く長養するを以てなり。五に智者と名く、能く方便を以て(其の子の)智慧を生ずればなり。六に莊嚴と名く、妙なる瓔珞を以て(其の子を)嚴飾するを以てなり。七に安穩と名く、(子は)母の懷抱を以て止息と爲せばなり。八に敎授と名く、善巧方便して(其の)子を導引するを以てなり。九に敎誡と名く、善き言辭を以て、(子をして)衆惡を離れしむるを以てなり。十に與業と名く、能く家業を以て子に付囑するを以てなり。

善男子よ、諸の世間に於て何者か最も富み、何者か最も貧なる。悲母、堂に在すを名けて富と爲し、悲母、在さざるを名けて貧と爲す。悲母、在す時を名けて日中と爲し、悲母、死する時を名けて日沒と爲す。悲母、在す時を名けて月明と爲し、悲母、亡ずる時を名けて闇夜となす。是故に汝等、勤加修習して父母に孝養せよ。若し人(父母に孝養せば)、佛に供(養)すると(其の)福等うして異なることなし。應に是の如く父母の恩に報ゆべし。

善男子よ、衆生の恩とは卽ち無始より以來、一切の衆生〔一六〕五道に輪轉し、百千劫を經て、多生の中に於いて、互に父母と爲る。互に父母となるが故に、一切の男子は卽ち是れ慈父にして、一切の女人は卽ち是れ悲母なり。昔、生生の中に於いて大恩あるが故に、猶ほ現在の父母の恩の如く、等うして差別あるなし。是の如きの昔の恩なほ未だ報ずる能はず。或は妄業に因て諸の違順を生じ、執著を

【一五】五根。眼根・耳根・鼻根・舌根及び身根を五根と云ふ。
【一六】五道とは人間道・阿修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道を云ふ。

以ての故に反つて其の怨を爲す。何となれば（二七）無明のために（二八）宿住智明を覆障せられ、前生に曾て父母たりしことを了せざるを以てなり。（是故に）恩を報じ互に饒益すべし。（互に）饒益するところ無きものを名けて不孝と爲す。この因緣を以て、諸の衆生の類は、（二九）都ての時に於いて、また（互に）大恩あり、實に報い難しと爲す。是の如き事を衆生の恩と名く。

善男子よ、國王の恩とは福德最勝なり。（何となれば）人間に生ずと雖も自在を得るを以てなり。三十三天の諸天子等恆に其の力を與へて（王を）護持するを以てなり、其の國界に於ける山川大地盡大海際、國王に屬し、一人の福德は一切衆生の福に勝るを以てなり、是の大聖王は正法を以て（民を）化し、衆生をして皆悉く安樂ならしむ。譬へば世間の一切の堂殿は柱を根本と爲すが如く、人民の豐樂は王を根本と爲す、王に依て有るを以てなり。亦た梵王の能く萬物を生ずるが如く、聖王は能く治國の法を生じて、衆生を利するを以てなり。日天子の能く世間を照すが如く、聖王も亦た天下を觀察して、人をして安樂ならしむるを以てなり。

王（もし）正治を失へば、人は依る所なし、若し正を以て化せば、八大恐怖その國に入らず。（八大恐怖とは）所謂他國の侵逼・自界の叛逆・惡鬼の疾病・國土の飢饉・非時の風雨・過時の風雨・日月の薄蝕・星宿の變怪（卽ち之なり）。人に王たるもの化を正うして人民を利益すれば、是の如きの八難も侵す

【二七】無明とは一切の煩惱の根源を云ふ。
【二八】宿住智明とは前世のことを知り得る智慧を云ふ。
【二九】都ての時とは過去・現在及び未來を云ふ。

こと能はざるなり。譬へば長者の唯一子を有ち、愛念無比にして憐愍饒益し、常に安樂を與へて、晝夜を捨てざるが如し。國の大聖王も亦た復た是の如く、等しく群生を示ること同一子の如くし、擁護の心晝夜を捨つることなし。是の如く人に王たるもの、(若し)十善を修せしめば、福德の主と名け、若し修せしめざれば非福の主と名く。所以は何となれば、若し王の國内に一人の善を修するものあれば、其の作す所の福は皆七分となり、造善の人は其の五分を得、彼の國王は常に其の二分を獲るを以てなり、善く王に因つて修するが故に福利を同うするなり。

十惡業を造るも亦た復た是の如し。(蓋し)其の事を同うするを以てなり。一切の國内の田地園林の生ずる所の物、皆な七分となることも亦た復た是の如し。若し人に王たるものあり、正見を成就して、如法に世を化せば、名けて天王となす。何となれば天の善法を以て世間を化し、諸天善神及び護世の王、常に來つて王宮を加護し、人間に處すと雖も、天業を修行し、賞罰の心偏黨なきを以てなり。一切の聖王の法みな是の如し。是の如きの聖王を正法王と名く。是の因緣を以て十德を成就す。

一に能照と名く、智慧の眼を以て世間を照すを以てなり。二に莊嚴と名く、大福智を以て國を莊嚴するを以てなり。三に與樂と名く、大安樂を以て人民に與ふるを以てなり。四に伏怨と名く、一切の怨敵自然に伏するを以てなり。五には離怖と名く、能く八難を却け、恐怖を離るるを以てなり。六には任賢と名く、諸の賢人を集めて國事を評するを以てなり。七に法本と名く、萬姓の安住は國王に依

るを以てなり。八に持世と名く、天王の法を以て世間を持つを以てなり。九に業主と名く、善惡の諸業(みな)國王に屬するを以てなり。十に人主と名く、一切の人民は王を主と爲すを以てなり。一切の國王は先世の福を以て、是の如き十種の勝德を成就す。大梵天王及び忉利天は、常に人王を助けて勝妙の樂を受けしめ、諸の羅刹王及び諸神等は、身を現ぜずと雖も潛み來りて王及び眷屬を衛護す。王(もし)人民の諸の不善を造るを見て制止する能はずんば、諸天神等は皆悉く遠離せん。若し善を修するを見ば、歡喜讃歎して皆盡く唱へて我が聖王と言ひ、龍・天は喜悅して甘露の雨を澍ぎ、五穀成熟して人民豐樂ならん。(王)若し惡人等に親近せずして普く世間を利し、咸く正化に從へば、如意寶珠、必ず王の國に現はれ、王の隣國に於けるもの、咸く來て歸服し、人と非人と稱歎せざるなけん。若し惡人あり、王の國內に於て逆心を生ぜば、是の如き人の福は、須臾の頃にして自ら衰滅せん。死すれば當に地獄の中に墮し、畜生を經歷して、備さに諸の苦惱を受けん。所以は何となれば聖王に對して恩を知らざるに由るが故に、諸の惡逆を起し、是の如きの報を得るなり。若し人民あり、能く善心を行じて仁王を敬輔し尊重すること佛の如くならば、是の人は現世に安穩豐樂にして、願求する所のもの、心に稱はざるなけん。何となれば、一切の國王は過去時に於いて、曾つて如來の淸淨禁戒を受け、常に人王となつて安穩快樂なりしを以てなり。是の因緣を以て違順の果報は皆な響の(聲に)應ずるが如し。聖王の恩德廣大なること是の如し。

善男子よ、三寶の恩とは不思議と名く。(三寶は)衆生を利益して休息することあることなし。それ諸佛の身は眞善無漏にして、無數の大劫に因を修して證する所なり。三有の業果永へに盡きて餘すことなく、功德の寶山巍巍として比すべきものなし、一切の有情の知る能はざる所なり。(その)福德の甚深なること猶ほ大海の如く、(その)智慧の無礙なること虛空に等し。(是の故に)神通變化して世間に充滿し、光明偏く十方三世を照す。一切の衆生は煩惱業障(の爲に)都て(之を)覺知せず、苦海に沈淪して生死窮り無し。(然るに)三寶出世して大船師と作り、能く〔三〇〕愛流を截て彼岸に超昇せしむ。(此の故に)諸の有智の者は皆悉く瞻仰す。

善男子よ、唯一の佛寶に三種の身を具す。一には自性身、二には受用身、三に變化身(卽ち之れ)なり。第一の佛身に〔三一〕大斷德あり。(そは)〔三二〕二空の顯はす所にして一切の諸佛は悉く平等なり。第二の佛身に大智慧あり。(そは)眞常無漏にして一切の諸佛は悉く皆な同意なり。第三の佛身に大恩德あり。(そは)定通變現にして一切の諸佛皆悉く同事なり。

善男子よ、其の自性身とは無始無終なり。一切の相を離れて諸の戲論を絕す。周圓無際にして凝然常住なり。其の受用身には二種の相あり。一に自受用、二に他受用(卽ちこれ)なり。

【三〇】愛流とは煩惱の異名なり。

【三一】大斷德　斷とは萬象の差別相の絕えて無くなれるを云ふ。卽ち眞如法性の上には譬へば土器の衆相の、土に於ては其認むべき無きが如く、善惡邪正等の相對の相を滅する本體上の大德を云ふなり

【三二】二空とは人空と法空となり人空は卽ち人無我にして、法空は卽ち法無我なり。

自受用身とは三(阿)僧祇劫に修する所の萬行(を以て)諸の衆生を利益し安樂ならしめ已つて、十地の滿心に(到り)身を運んで直に色究竟天に往き、三界を出過して淨妙國土に(入り)、無數量の大寶蓮華(の上)に坐す。(時に)(三三)不可說海會の菩薩によりて前後を圍繞せられ、無垢の繒を以て頂上に繫けられ、供養恭敬し、尊重讃歎せらる。是の如きを名けて後報の利益となす。

爾の時に、菩薩は金剛定に入りて一切の微細の(三四)所知(障)と諸の煩惱障とを斷除して阿耨多羅三藐三菩提を證得す。是の如きの妙果を現報利益と名く。此の眞報身は有始無終にして壽命・劫數限量あること無し。初め正覺を成じてより未來際を窮む。(其の)諸根相好(の功德利益)は法界に徧周し四智(ともに)圓滿す。是れ眞報身の受用法樂なり。(四智)とは一には大圓鏡智なり。(三五)異熟識を轉じて此の智慧を得。(恰も)大圓鏡の諸の色像を現ずるが如し。是の如く如來の鏡智の中に能く衆生の諸の善惡業を現ず。是の因緣を以て此の智を名けて大圓鏡智と爲す。大悲に依るが故に恒に衆生を緣じ、大智に依るが故に常に法性に如す。眞俗を雙觀して間斷あることなく、常に能く無漏の根身を執持して、一切功德の依止する所となる。二には平等性智なり。(三六)我見識を轉じて此の智慧を得。是を以て能

【三三】不可說海會とは廣博なる所に多數集合せることは、言語を以て言ひ盡されざるをいふ。

【三四】所知障とは粗大なる迷の斷ぜられたる後に尙ほ殘存せる微少にして高尙なる惑あるを云ふ。

【三五】異熟識　唯識論に依れば識は萬物の根源なり、其識を八識に分ち、其第八を阿賴耶識と名け八識の根本となす、是の第八阿賴耶識は佛に到つて大圓鏡智と轉化するが故に凡夫位に在るの間之を稱して異熟識と名く。

く自他平等二無我の性を證す。是の如きを名けて平等性智と爲す。三には妙觀察智なり。(三七)分別識を轉じて此の智慧を得。能く諸法の自相と共相とを觀じ、衆會の前に於いて諸の妙法を說き、能く衆生をして不退轉を得しむ。是を以て名けて妙觀察智と爲す。四には成所作智なり。(三八)五種の識を轉じて此の智慧を得。能く一切種種の化身を現じて、諸の衆生をして諸の善根を成熟せしむ。是の因緣を以て名けて成所作智と爲す。是の如きの四智を上首として、八萬四千の智門を具足す。是の如く一切諸の功德の法を名けて如來の自受用身となす。

諸の善男子よ、二に如來の他受用身とは、八萬四千の相好を具足し、眞淨土に居り、(三九)一乘の法を說き、諸の菩薩をして大乘微妙の法樂を受用せしむ。(而して)一切の如來は十地の諸菩薩衆を化せんが爲に、十種の他受用身を現ず。(卽ち)第一の佛身は百葉の蓮華に坐して、初地の菩薩の爲に百法明門を說き給ふ。菩薩は悟り已つて大神通を起し、變化して百佛の世界に滿ち、無數の衆生を利益し安樂ならしむ。第二の佛身は千葉の蓮華に坐し、二地の菩薩の爲に千法明門を說き給ふ。菩薩は悟り已つて大神通を起し、變化して千佛の世界に

【三六】我見識とは八識の中其第七の末那識を云ふ。之を我見識と名くるは、第八識の諸法の種子を貯へ、且つ此身を執持して相續せしむる姿を認め、之を我が身の主宰の如く考ふる識なるが故なり。

【三七】分別識とは八識の中其第六の意識を云ふ。之を分別識と名くるは、愛憎等の一切の分別を爲す識なるが故なり。

【三八】五種の識とは一に前五識とも呼び、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識の五種の識をいふ。

【三九】一乘の法とは衆生を濟度するの方便として三乘を說くに對して一乘を說くを云ふ。所謂一乘の法とは諸の衆生は悉く直ちに佛と成ることを得るの法を云ふ也。

滿ち、無數の衆生を利益し安樂ならしむ。第三の佛身は萬葉の蓮華に坐して、三地の菩薩の爲に萬法明門を說き給ふ。菩薩は悟り已つて大神通を起し、變化して萬佛の國土に滿ち、無數の衆生を利益し安樂ならしむ。是の如く如來は漸漸に增長し、乃至十地の他受用身は、不可說の妙寶蓮華に坐して、十地の菩薩の爲に不可說の諸法妙門を說き給ふ。菩薩は悟り已つて大神通を起し、變化して不可說佛の微妙の國土に滿ち、不可宣說なる無量無邊の種類の衆生を利益し安樂ならしむ。是の如きの十地(の菩薩)は皆七寶の菩提樹下に坐して阿耨多羅三藐三菩提を證得す。

諸の善男子よ、一一の葉葉を各各一の三千世界となし、各(世界)に百億の妙高山王・四大洲・日月星辰及び三界の諸天ありて具足せざるなし。一一の葉上の諸の贍部洲に金剛座菩提樹王あり、其の(數)百千萬より不可說に至る。(而して)大小の化佛、各樹下に於て魔軍を破り已つて、一時に阿耨多羅三藐三菩提を證得し給ふ。是の如き大小の諸の化佛身は各三十二相八十種好を具足し、諸の資糧、四善根、諸の菩薩等、二乘及び凡夫の爲に、宜きに隨つて(四〇)三乘の妙法を說き給ふ。諸の菩薩の爲には、(菩薩に相)應する六波羅蜜多を說きて、阿耨多羅三藐三菩提を得しめ、(以て)佛慧を究竟せしめ給ふ。(四一)辟支佛を求むる者の爲には、(それに相)應する十二因緣の法を說き、聲聞を求む

【四〇】三乘とは、一に聲聞乘即ち四諦、二に緣覺乘即ち十二因緣、三に菩薩乘即ち六度なり。乘とは、迷ひの此岸より悟りの彼岸へ運載するの義なり。

【四一】辟支佛とは緣覺のことなり。緣覺は無師にして獨悟す。此の緣覺と聲聞とは共に小乘劣機の人なり。

る者の爲には、(それに相)應する四諦の法を說き。生老病死を度して涅槃を究竟せしめ給ふ。(また)餘の衆生の爲には、人天敎を說き、人天の安樂妙果を得しめ給ふ。是の如き諸の大小の化佛を皆悉く名けて佛の變化身となす。

善男子よ、是の如き二種の應化身佛は滅度を現ずと雖も、而も此の佛身は相續して常住なり。諸の善男子よ、(三寶の)一なる佛寶に、是の如く無量・無邊・不可思議の衆生を利樂する廣大の恩德あり。是の因緣を以て名けて如來・應(供)正徧知・明行圓滿・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と爲す。善男子よ、一の佛寶の中に六種の微妙なる功德を具足す。一には無上の大功德なり。二には無上の大恩德なり。三には無足二足及び多足の衆生中の尊なり。四には極めて値遇し難きこと優曇華の如し。五には三千大千世界に獨一出現す。六には世(間)・出世間の功德、一切の義を圓滿す。是の如き等の六種の功德を具して、常に能く一切衆生を利樂す。是を佛寶不思議の恩と名く。』

爾の時に五百の長者、佛に白して言さく、

『佛の所說の如くんば、一の佛寶中に無量の化佛あり、世界に充滿して衆生を利益すと(云ふ)。何の因緣を以てか、世間の衆生は多く佛に見えずして、諸の苦惱を受くるや。』

佛、五百の長者に告げて言く、

『譬へば日光天子の百千の光を放ちて、世間を照明すれども、而も盲者ありて、光明を見ざるが如し。

汝善男子よ、日光天子に過ありと意ふや否や。』
時に長者、言さく、
『不な、世尊。』
佛の言く、
『善男子よ、諸佛如來は常に正法を演て有情を利樂すれども、是の諸の衆生は常に惡業を造つて都て覺知せず、慙愧の心なく、佛法僧に於いて親近するを樂はず、是の如きの衆生は罪根深重にして、無量劫を經れども、三寶の名字すら見聞することを得ず。(恰も)彼の盲者の日光を視ざるが如し。若し衆生あつて如來を恭敬し、大乘を愛樂し、三寶を尊重せば、當に知るべし、是の人は業障を消除し、福智を增長し、善根を成就し、速かに佛を見ることを得て、永く生死を離れ、當に菩提を證すべけんを。諸の善男子よ、一の佛寶に無量の佛あるが如く、如來所說の法寶も亦た然り。一の法寶中に無量の義あり。善男子よ、法寶中に四種あり。一には敎法、二には理法、三には行法、四には果法(卽ち之れ)なり。一切の無漏の能く無明と煩惱と業障とを破する聲名、句文を敎法と爲し、有無の諸法を名けて理法となす。戒定慧の行法を名けて行法となし、無爲の妙果を名けて果法となす。是の如き四種を名けて法寶となす。衆生を引導して生死の海を出で(涅槃の)彼岸に到らしむ。善男子よ、諸佛の師とする所は卽ち是れ法寶なり。何となれば三世の諸佛は法に依て修行し、一切の障を斷じ菩提を成ずる

ことを得て、盡未來際、衆生を利益するを以てなり。是の因緣を以て三世の如來は常に能く諸の波羅蜜多微妙の法寶を供養し給ふ。何に況んや三界の衆生未だ解脱を得ざるもの微妙の法寶を敬せざる可けんや。

善男子よ、我昔曾て求法の人王となり、大火坑に入りて正法を求め、永へに生死を斷じて大菩提を得たり。是の故に法寶は能く一切生死の牢獄を破ること、猶ほ金剛の能く萬物を壞るが如し。法寶は能く癡闇の衆生を照すこと、日天子の能く世界を照すが如し。法寶は能く貧乏の衆生を救ふこと、摩尼珠の衆寶を雨らすが如し。法寶は能く衆生に喜樂を與ふること、猶ほ天鼓の諸天を樂ましむるが如し。法寶は能く諸天の寶階たり、そは正法を聽聞して天に生ずることを得ればなり。法寶は能く堅牢の大船たり、そは(衆生をして)生死の海を渡つて彼岸に到らしむるを以てなり。法寶は猶ほ轉輪聖王の如し、そは能く三毒の煩惱を除けばなり。法寶は能く珍妙の衣服たり、そは無慚の諸衆生を覆蔽すればなり。法寶は猶ほ金剛の甲冑の如し、(そは)能く(人をして)四魔を破し菩提を證せしむればなり。法寶は猶ほ智慧の利劍の如し、(そは能く人をして)生死を割斷し繫縛を離れしむればなり。法寶は正に是れ三乘の寶車なり、そは(能く)衆生を運載して(三界の)火宅を出でしむればなり。法寶は猶ほ一切の明燈の如し、そは能く三途の黑闇なる處を照せばなり。法寶は猶ほ弓箭矛矟の如し、そは能く國界を鎭して怨敵を摧けばなり。法寶は猶ほ險路の導師の如し、そは善く衆生を誘うて寶所に達せしむ

ればなり。善男子よ、三世の如來の說き給へる妙法には、是の如き難思議の事あり。是を法寶不思議の恩と名く。

善男子よ、世(間)出世間に三種の僧あり。一に菩薩僧、二に聲聞僧、三に凡夫僧(これ)なり。文殊師利及び彌勒等は是れ菩薩僧、舍利弗・目犍連等の如きは是れ聲聞僧、若し〔四三〕別解脫戒を成就せる眞善の凡夫乃至一切の正見を具足して、能く廣く他の爲に衆の聖道の法を演說し開示し衆生を利樂するあらば凡夫僧と名く。未だ無漏の戒定及び慧の解脫を得る能はずと雖も、而も(彼を)供養する者は無量の福を獲るなり。是の如き三種を眞の福田僧と名く。

復た一類あり福田僧と名く。(卽ち)佛の舍利及び佛の形像幷に諸の法と僧と聖の制する所の戒とに於いて深く敬信を生じ、自ら邪見なく他も亦た然らしめ、能く正法を宣べて一乘を讃歎し、深く因果を信じて常に善願を發し、其の過犯あるに隨て業障を悔除す。當に知るべし、是の人は三寶を信ずるの力、諸の外道に勝ること百千萬倍、亦た四種の轉輪聖王にも勝れり、何に況んや餘類の一切衆生をや。鬱金華の萎悴すと雖も、猶ほ一切の諸雜類の華に勝るが如し。正見の比丘も亦た復た是の如く、餘の衆生に勝ること百千萬倍、禁戒を毀つと雖も正見を壞らず、是の因緣を以て福田僧と名く。若し善男子善女人等にして、是の如きの福田僧を供養する者は、得る所の福德窮盡あることなけん。前の

〔四三〕別解脫戒とは、大乘の戒法は一戒毎に各別に皆解脫を得るの功德あるより是の名あり。

三の眞實の僧寶を供養して獲る所の功德と正に等うして異るなし。是の如く四類の聖凡の僧寶は有情を利益して恒に暫くも捨ることなし。是を僧寶不思議の恩と名く。」

爾の時に五百の長者、佛に白して言さく、

『世尊、我等は今日佛の法音を聞きて、三寶の世間を利益することを悟ることを得たり。然も今何の義を以ての故に佛法僧を說て、名けて寶と爲すことを得るやを知らず。願はくは佛よ、(其の理を)解說し顯示して、衆會及び未來世に於いて三寶を敬信する一切の有情をして、永へに疑網を斷ちて信を壞せざらしめ、三寶の不思議海に入らしめ給へ。」

爾の時、佛諸の長者に告げ言はく、

『善い哉、善い哉、汝善男子よ、能く如來に甚深の妙法を問うて、未來世に於ける一切の衆生を利益し安樂ならしめんとす。譬へば世間第一の珍寶の十義を具足して、國界を莊嚴し有情を饒益するが如く、佛法僧寶も亦た是の如し。(十義とは)一には堅牢、摩尼寶は人の能く破ることなきが如く、佛法僧寶も亦た外道天魔の破る能はざるものなり。二には無垢、世間の珍寶の淸淨光潔にして塵穢を雜へざるが如く、佛法僧寶も亦た能く悉く煩惱の塵垢を遠離す。三には與樂、天の〔四三〕德瓶の能く安樂を與ふるが如く、佛法僧寶も亦た能く衆生に世間出世間の樂を與ふ。四

【四三】 德瓶。大智度論によれば貧窮人が一心に天に祈りて富貴を求むれば、天其の人を愍んで一の器具を授く、其を德瓶と云ふ。思ふ通りの寶が其の中より出ると云ふ寶器なり。

には難遇、吉祥寶の希有にして得難きが如く、業障の有情は萬劫にも佛法僧寶に遇ひ難し。五には能破、如意珠の能く貧窮を破るが如く、佛法僧寶も亦た能く世間の諸の貧苦を破す。六には威德、轉輪王の所有せる輪寶の能く諸怨を伏するが如く、佛法僧寶も亦た能く六神通を具して四魔を降伏す。七には滿願、摩尼珠の念に隨つて能く所求の衆寶を雨らすが如く、佛法僧寶も亦た能く衆生の所修の善願を滿(足)せしむ。八には莊嚴、世の珍寶の王宮を莊嚴するが如く、佛法僧寶も亦た能く法王の菩提寶宮を莊嚴す。九には最妙、天の妙寶の最も微妙なるが如く、佛法僧寶も亦た能く諸の世間の最勝妙寶に超ゆ。十には不變、眞金の火に入れども變せざるが如く、佛法僧寶も亦た能く世間の八風も傾動すること能はざる所なり。佛法僧寶は、無量の神通變化を具足して、有情を利樂し暫くも休息なし。是の義を以ての故に、諸の佛法僧を名けて寶と爲す。善男子よ、我、汝等の爲に略して世出世間に於ける四種の有恩の處を說けり。汝等、當に知るべし、菩薩の行を修して是の如き四種の恩を報せんことを。』

爾の時に五百の長者、佛に白して言さく、

『世尊よ、是の如きの四恩は甚だ報じ難しと爲す。當に何の行を修してか是の恩を報ずべき。』

佛、諸の長者に告げたまはく、

『善男子よ、菩提を求むる者の爲に三種の十波羅蜜多あり。(卽ち)一には十種の布施波羅蜜多、二に

は十種の親近波羅蜜多、三には十種の眞實波羅蜜多これなり。

若し善男子善女人あり、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、能く七寶を以て三千大千世界に滿てて、無量の貧窮の衆生に布施せんに、是の如き布施は、但だ布施波羅蜜多と名くれども、(未だ)眞實の波羅蜜多と名けず。若し善男子善女人あり、大悲を發し、無上正等菩提を求めんが爲に、自らの妻子を以て他人に施與して心に悋惜なく、身肉手足頭目髓腦乃至身命をも、來つて求むる者に施さば、是の如き布施は、但だ親近波羅蜜多と名くれども、未だ眞實の波羅蜜多と名けず。

若し善男子善女人(あり)、無上菩提心を發して無所得に住し、諸の衆生を勸めて同じく此の心を發し、眞實の法を以て、一の四句の偈を一衆生に施し、無上正等菩提に向はしめば、是を眞實波羅蜜多と名く。前の二の布施は未だ報恩と名けず。若し善男子善女人(あり)、能く是の如き第三の眞實波羅蜜多を修せば、乃ち眞實に能く四恩を報ずと名く。何となれば前の二つの布施は有所得の心にして、第三の(布)施は無所得の心なればなり。眞實の法を以て一有情に施して、無上菩提の心を發さしめば、是の人は菩提を證得する時に當つて、廣く衆生を度して窮盡あることなく、三寶の種を紹いで、斷絶せざらしむ。是の因緣を以て名けて報恩を爲す。』

爾の時に五百の長者は、(今)佛より未だ曾て聞かざる所の報恩の法を聞き、心に踊躍を懷き、未曾有なることを得て無上菩提に趣き、忍辱三昧を得て不思議智に入り、不退轉なることを得たり。爾の

時に會中に八萬四千の衆生あり、菩提心を發して堅固の信及び三昧を得ぬ。(また)海會の大衆は悉く金剛忍辱三昧を得て、無生忍及び柔順忍を悟り、或は初地を證して不起忍を得、無量の衆生は菩提心を發して不退位に住しぬ。

爾の時に佛、五百の長者に告げたまはく、

『未來世中の一切の衆生、若し此の心地觀報四恩品を聞くことを得て、受持し讀習し解說し書寫して、廣く流布せしむるものあらば、是の如き人は福智增長し、諸天衞護して、現身に疾なく、壽命延長ならん。若し命終る時は卽ち彌勒の內宮に往生することを得、白毫相を觀て生死を超越し、龍華の三會に當に解脫することを得べく、十方の淨土に隨意に往生して、佛を見、法を聞き、正定聚に入つて、速に阿耨多羅三藐三菩提、如來の智慧を成せん。』

下

爾の時に王舍城の東北八十(一)由旬(の處)に增長福と名くる一小國ありき。其の國に一長者あり、名を智光と言ふ。年老い衰邁して唯一子ありしが、其の子惡性にして父母に順はず、有らゆる教誨にも皆な從はざりき。

然るに釋迦牟尼如來、王舍城の(二)耆闍崛山に在して、濁惡世の無量の衆生の爲に、大乘報恩の法を宣說し給ふと遙聞して、父母及び子幷に諸の眷屬、法を聽かんが爲に、供具を齎持して佛所に來詣し、供養恭敬して佛に白して言さく、

『我に一子あり、其の性弊惡にして父母の有らゆる教誨を受けず。今、佛の「四種の恩を報ぜよ」と說かせ給ふと聞き、法を聽かんが爲に、佛所に來詣しぬ。唯願くは世尊よ、我等の類及び諸の眷屬の爲に、四恩の甚深なる妙義を宣說し、彼の惡子をして孝順心を生ぜしめ、此の世(のみならず)(三)當生(までも)安樂を得せしめ給へ。』

爾の時に佛、智光に告げたまはく、『善哉、善哉、汝は法の爲に此所に來至し、供養恭敬して是の法を聞かんことを樂ふ。汝等諦聽し善く之れを思念せよ。

【一】由旬は梵語 Yojana の音譯なり。一ヨージヤナは四哩乃至五哩に等しと云ひ或は八哩乃至九哩に等しと云ひ、又は二哩半なりとも云ふ、要するに未だ確定せず。

【二】耆闍崛山(Gridhrakūṭa)は梵名なり。譯して靈鷲山と云ふ。

【三】當生とは未來世のことなり。

若し善男子善女人あり、菩提心を發して、法要を聞かんが爲に、擧足下足の地は、遠きも近きも、其の踐む所の無數の微塵までも、彼等に踐まるる因緣を以て、金輪の轉輪聖王(たるべき果報)を感得せん。(而して)聖王の(果)報盡くれば欲天の王と作り、欲天の(果)報盡くれば梵天王と作り、佛を見上り法を聞きて、速に妙果を證することを得ん。

汝、大長者及び餘の衆(人)等よ、(汝等は)法の爲に、八十由旬の大地を經過して、我が所に來至せり。(今汝等が踐む所の)一一の微塵までも能く人天輪王の果報を感(得)し、既に法を聞き已らば、【四】當來には阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。我、先に甚深なる四恩の微妙の義趣を說けども、今また汝が爲に、重ねて此の義を宣ぶるに偈を以てせん。

『(佛は)最勝の法王にして大聖の主なり、(是の故に)一切の人(間)天(上)中に等倫無く、諸の相好を以て身を嚴りたまひ、智(慧)の海は空の如く量有ること無し。
(佛は)自他の利行みな圓滿し、名稱普く諸の國土に聞え、永へに煩惱と餘の習氣とを斷じ、善く(綿)密の行を持ちて【五】諸根を護りたまふ。
(佛は)百四十種の不共の德と、廣大なる福海とを悉く圓滿し、三昧も神通も皆な具足し、常に八自在の宮に遊樂したまふ。
十方の人天も及び外道も、能く調御師を難ずるもの有ることなし。(佛は)金口もて能く無礙の辯

【四】當來とは未來又は將來のことなり。
【五】諸根とは眼耳鼻舌身等の根なり。

を宣べ、能く問ふもの無しと雖も而も自ら說きたまふ。

大海の潮の時を失せざるが如く、また天鼓の天心に稱ふが如く、是の如き自在は唯佛のみ有したまひ、五通の僊・魔・梵等の有する所にあらず。

（諸佛は）難思の劫海に行願を修し、是の如きの大神通を證獲したまふ。

我、三昧の大寂室に入つて、（六）諸根及び藥病を觀察し、自ら禪定を出でて、三世の（諸）佛の心地の法門を讃歎す。【以上釋尊が諸佛の功德を讃歎し給ふ偈文なり】

時に諸の長者、（七）大心を退きて、（八）二乘自利の行に住せんと樂ふ。（是の故に）我、大智方便の敎を開いて、（九）三空脫解の門に引入す。

如來の意趣は能く量り（得る）もの莫し、唯佛のみ能く眞の祕密を知りたまふ。利根の聲聞及び獨覺、（又は）不退を勤求する諸の菩薩が、十二劫數共に度量すとも、其の少分すら能く之を知ること有る無し。假使十方の凡聖の智を、一人に授與して智者たらしめ、是の如き智者を竹林の如く（多く集めて思考せしむ）とも、能く其の少分をも測量すること能はざらん。

世間の凡夫は（智）慧の眼なく、恩ある處に迷うて（報恩より生ずる）妙果を失ふ。五濁惡世の諸の衆生は、深恩を悟らずして恒に德に背く。我爲に四恩を開示し、正見菩提の道に入らしめん。

【六】諸根とは種種樣樣の機根のことなり。前に云へる五根のことにあらず。

【七】大心とは大乘の高尙なる道を行ずる心と云ふ意味なり。

【八】二乘自利とは利他の行を缺ける小乘淺近の行のことなり。

【九】三空解脫とは空三昧と無作三昧と無作三昧を云ふ。

慈父と悲母との長養の恩によりて、一切の男女は皆な安樂なり。慈父の恩の高きことは山王の如く、悲母の恩の深きことは大海の如し。若し我一劫(の間)世に住して、悲母の恩を說くとも盡すこと能はざらん。

我今略して(其の)少分を說かんに、猶蚊虻の大海を飮むが如けん。

假使人あり福德の爲に、淨行の婆羅門と、五通神仙の自在なる者と、大智の師長と及び善友とを供養するに、七珍を安置して堂殿と爲し、牛頭(山)の栴檀(香木)を以て房となし、百寶の臥具各敷陳し、世間の美味甘露の如くし、萬病を療治する諸の湯藥は、金銀の器物中に盛り滿てて、是の如く供養すること日に三時づつ、乃至數百劫に盈つとも、一念(の間)少分を申べて、悲母の大恩田を供養するものの、福德無邊にして量る可らざるに如かず、(其の相違の程度は)算分喩分皆比無し。

世間の悲母の其の子を孕むや、十ケ月懷胎して長く苦を受け、(一〇)五欲の樂に於いても情(これに)著せず、隨時の飮食も亦た同じく然り。晝夜常に悲愍の心を懷き、行住坐臥に諸の苦を受く。若し正に其の胎藏の子誕るるや、鋒刃を攢めて肢節を解かるるが如く、迷惑して東西をも辯ずる能はず、徧身の疼痛堪ふる所なし。或は此の難に因つて命終れば、六親眷屬咸く悲惱す。是の如き衆苦は皆な子に由つて起る、憂悲痛切(よく)口の宣ぶる所にあらず。

【一〇】五欲とは色聲香味觸を云ふ。

若し平復を得て身安樂なれば、貧(人)の寶を獲たるが如く喜び量り難し。

(悲母は其の子の)容顔を顧視して[一]厭足なく、憐念の心暫くも捨てず、母子の恩情は常に是の如く、(其の子は)出入にも(悲母の)胸臆の前を離れざるなり。

(加之)甘露の泉の如き母乳を以て、長養し未だ曾て暫くも竭きず。慈念の恩は實に比するにものなく、鞠育の德も量り難きものあり。

世間は大地を稱して重しとなす、(されど)悲母の恩の重きことは彼に過ぐ。世間は須彌を稱して高しとなす、(されど)悲母の恩の高きことは彼に過ぐ。世間は猛風を以て速疾なりとなす、(されど)母の(子を)心ふの一念は彼にも過ぐ。

[一] 厭足とは飽き足ることなり。

若し衆生ありて不孝を行ひ、母をして暫時も恨心を起さしめ、少分と雖も怨念の辭を生ぜしめば、子は乃ち言に隨つて苦難に遭ひ、一切の佛も金剛天も、神仙の秘法も救ふこと能はざらん。

若し男女ありて母の教に依り、顏色を承順して違はずんば、一切の災難盡く消除し、諸天擁護して常に安樂ならん。

若し能く悲母に承順せば、是の如き男女は悉く凡夫にあらず、大悲の菩薩人間と化して、恩を報ゆる諸の方便を示現したまふ(ものと見るべし)。

若し男子又は女人あり、母恩を報ぜんが爲に孝養を行ひ、肉を割き血を刺して常に供給し、是の

如くすること數一劫に盈ち、種種に孝道を勤修すとも、猶ほ未だ(悲母の子を思ふ)暫時の恩にも報ゆること能はざらん。

十ケ月胎藏中に處り、常に乳根を銜み脂血を飲み、嬰孩たりしより童子たるに及ぶまで、飲む所の母乳は(實に)百斛餘なり。

飲食湯藥妙なる衣服、子を先にし母(自らは)後にするを常則とす。子もし愚痴にして人に惡まるとも、母は亦恩憐して棄遣せざるなり。

昔女人あり其の子を抱いて、恒河の水瀑流するを渡りけるに、汎水を以ての故に力前み難し、子と倶に沒するも(尙ほ其の子を)捨つる能はざりき。

この慈念の善根力によりて、命終りて梵天に上り、長く梵天の三昧の樂を受け、如來に遇ひたてまつりて授記を受くることを得ぬ。

是の故に悲母に十德あり、義と利とに隨應して其の名を立つ。

一には大地と名け二には能生、三には能正者四には養育、五には與智者六には莊嚴、七には安穩と名け八には教授、九には教誡者十には與業、餘の恩は母の恩に過ぎざるなり。

何の法か世間に最も富有なる、何の法か世間に最も貧無なる。母堂に在す時を最富となし、母在さざる時を最貧となす。

母在す時を日中と爲し、悲母亡き時を日沒と爲す。母在す時は皆圓滿、悲母亡き時は悉く空虛。
世間一切の善男(善)女よ、父母の恩の重きことは丘山の如し、應に孝敬して恆に心に在くべし。
恩を知りて恩に報ゆる是れ聖道なり。
身命を惜まずして甘旨を奉じ、未だ曾て一念(の間)も色養を虧がざれ、如し其の父母奄喪する時は、將に恩を報せんと欲するも誠に及ばざるなり。
佛昔し慈母の爲に修行して、相好金色の身を感得し、名聞廣大にして十方に徧く、一切の人天咸稽首し、人も非人も皆恭敬するは、自ら往昔慈恩に報い給ひしに緣りてなり。
我三十三天の宮に昇り、三箇月(の間)母の爲に眞の法を說き、母をして聽聞して正道に歸し、無生忍を悟りて常に不退(轉)ならしめたり。
是の如きは皆な悲恩に報ぜんが爲なり、報ずと雖も恩深うして猶ほ未だ(報ずるに)足らず。
神通第一の目犍連は、已に三界の諸の煩惱を斷じ、神通力を以て慈母を觀けるに、現に苦を受くる餓鬼(道)の中に在りき。
(此に於いて)目犍連自ら往いて母恩に報じ、慈親の受くる所の苦を救免して他化(天)に上生せしめ、諸の天衆と共に遊樂すべく天宮に處らしめたり。
當に知るべし父母の恩は最も深く、諸佛も聖賢も咸く德に報じ給ふことを。

若し人あり至心に佛を供養すると、復精勤して（父母に）孝養を修すると、是の如き二人の福は異なることなく、（勝果の）受報また三世に（亙りて）窮り無けん。

世人は子の爲に諸の罪を造り、三途に墮在して長く苦を受く。（然るに其の子たる）男女は聖（者）にあらざれば神通なく、（父母の）輪廻（の處）を見ざるによつて（恩を）報ず可きこと難し。

哀い哉世人聖力なく、慈母を拔濟すること能はざるや。

是因縁を以て汝當に知べし、福利諸の功德を勤修し、其男女の勝福を追ふを以て、大金光有りて地獄を照し、光中に深妙（の法）を演說する音あり、父母を開悟して（菩提の）意を發さしむ。（此に於いて其の父母は）昔の所生に常に造れる罪を憶ひ、一念悔心して（罪障）悉く除滅し、（思はず）口に南無三世佛と稱へ、暇なく（受けし所の）苦難の身を脫し得て、人天に往生して長へに樂を受け、佛を見法を聞いて當に成佛すべし。

或は十方淨土の中に生じて、七寶の蓮華を父母となし、華開けば佛を見て無生（忍）を悟り、不退（位）の菩薩を同學となし、六神通自在の力を獲て、菩提の微妙宮に入ることを得ん。

皆これ菩薩の男女と爲り、大願力に乘じて人閒と化し給ふなり、是を眞に父母の恩に報ずと名く。

汝等衆生ともに修學せよ。【以上父母の恩】

有情の輪廻して六道に生ずることは、猶ほ（回轉する）車輪の始終なきが如し。（衆生は）或は父母

となり(或は)男女となる、生生世世互に恩あり。(現在の)父母を見るが如く(一切の男女は)等うして差(別)なし、(而かも)聖智を證せざれば識るに由なし。一切の男子は皆これ(我が)父、一切の女人は皆これ(我が)母、如何ぞ未だ前世の恩を報せずして、却て異念を生じて怨嫉を成すべき、常に須らく恩を報じて互に饒益すべし、(決して)打罵し(又は)怨嫌を致すべからず。

若し福智の門を增修せんと欲せば、晝夜六時に當に發願すべし、「願くは我生生無量劫に(於いて)、〔三〕宿住智の大神通を得て、能く過去の百千生(の事)を知り、更に六趣四生の中に循環して、(互に)父母たりしことを憶識せん」と。(また願くは)「我が一念をして常に彼の(一切衆生)に至らしめ、爲に妙法を說いて苦の因を離れしめ、長へに人天の樂を得しめ、堅固なる菩提の願を勸發して、菩薩六度の門を修行せしめ、永く二種の生死の因を斷じて、疾く涅槃の無上道を證せしめん」と。【以上衆生の恩】

【三】宿住智とは或は宿命通とも云ひ、過去の事を知り得る智慧を云ふ。

十方一切諸國の王は、正法をもて人を化す「るが故に」聖主と爲す。國王の福德は最勝なり、所作自在なるを以て名けて天となす。三十三天もまた餘の天も、恒に福力を將て王の化を助く。諸天の(王を)擁護すること一子の如し、是を以て天子の名を稱し得るなり。

世閒は王を以て根本となす、(王は)一切人民の所依と爲ること。猶ほ世閒の諸の舍宅は、柱を根本と爲して成立するがごとし。

王の正法を以て人民を化するは、(猶ほ)大梵王の萬物を生ずるが如く、王の非法を行じて政理を撫するは、猶ほ琰魔王の世閒を滅ぼすが如し。

王(もし)姦邪の人を容れなば、(狂)象の華地を蹋むに等し。謂ふこと勿れ時濁惡の世に逢ふと、當に知るべし(時世の)善惡は是れ王の修なることを。

日天子の世閒を照らすが如く、國王の世を化するも亦た是の如し。日光は夜分を照さずと雖も、能く有情をして安樂を得しむ。

王(もし)非法を以て世を化せば、一切の人民依る所なし。世閒の有ゆる恐怖は、王の福力に依りて生ずる能はざらしむ。

人民の成ずる所の安穩の樂は、當に知るべし是れ王の福(力)の及ぶ所なることを。(そは)世閒の有らゆる勝妙の華は、王の福力に依りて開敷するを以てなり。

世閒の有らゆる妙園林も、王の福力に依りて皆滋茂り、世閒の有らゆる諸藥草も、王の福力に依りて諸の疾(病)を差す。

世閒の百穀も及び苗稼も、王の福力に依りて皆な成實り、世の人民の豐樂を受くるも、常に王の

福力に依りて自ら然るなり。

譬へば長者の智慧端嚴にして、世に比ひなき一子を有ち、父母の(其の子を)恩愛すること眼目の如く、晝夜に護念の心を生ずるが如し。

國の大聖王も亦た是の如く、衆生を愛念すること(己が)一子の如し。耆年を養育し孤獨を拯ひ、賞罰の心常に(平等)不二なり。

是の如き仁王を聖主と爲す、群生の(彼を)敬仰すること如來に等し。仁王化治すれば國に災なく、萬姓恭勤して常に安穩なり。

國王無法(を以て)世を化すれば、疾疫流行して有情に災ひす。一切の人非人(に於いても亦た)是の如く、罪福昭然として覆ふ所なし。

善惡の法を七(等)分し、造者(その)五を獲て王は二を得。園林田宅悉く皆然り、所税等を分つことも亦た是の如し。

轉輪聖王出現する時は、分ちて六分と作して王その一を得、時の人民はその五分を得。善惡の業報も亦みな然り。

若し人王ありて正見を修し、如法に世を化せば天主と名く。天法に依りて世間を化するが故に、毘沙門(天)王常に(彼を)擁護し、餘の(三)三天及び羅刹衆も、皆當に聖王の宮を守護すべし。

【三】三天とは東西南北の四天王中南方の毘沙門天王を茲に擧げたるが故に東方持國天王と西方廣目天王と北方增長天王とを指せるなり。

聖王出世して國を理むる時は、衆生を饒益して十德を成ず。
(十德とは)一には能く國界を照すと名け、二には國土を莊嚴すと名け。三には能く諸の安樂を與ふと名け、四には能く諸の怨敵を(降)伏すと名け、
五には能く諸の恐怖を遮ぎると名け、六には諸の聖賢を修集すると名け、七には諸法に根本となると名け、八には世間を護持すと名け、
九には能く造化の功を作すと名け、十には國界人民の主と名く。
若し王(この)十勝德を成就せば、梵王帝釋及び諸天、夜叉羅刹鬼神王(等)、身を隱して常に來つて國界を護り、龍王歡喜して甘露を降らし、五穀成熟して萬姓安からん。
(加之)國中處處に珍寶を生じ、人馬力を疆めて怨敵なく、如意寶珠王前に現じ、境外の諸王自ら賓伏せん。
若し(人かかる聖)王の國に於いて不善を行ひ、一念も心を起して衆惡を成さば、是の人は命終つて地獄に墮し、苦を受くること永劫にして出期なからん。
若し(人)誠を勸めて國王を助けなば、諸天護念して榮祿を增さん。
智光長者よ、汝まさに知るべし、都べて人王たる果報は(皆過去の)業の感ずる所にして、諸法は因緣によりて成せざるはなく、若し因緣なければ諸法なきことを。

(世には動もすれば)生天及び惡趣なしと說くものあれども、是の如き人は因を了らざるなり。無因無果は大邪見にして、罪福(の由來)を知らずして　(一四)妄計を生ずるなり。

王いま受くる所の諸の福樂は、往昔かつて三(聚)淨戒を持ち、戒德の熏修により招感する所にして、人天の妙果たる王の身を獲たるなり。

若し人、菩提の心を發し、願力を以て　(一五)無上果を資成し、堅く上品の清淨戒を持たば、起居自在にして法王となり、神通變化して(其の身を)十方に(徧)滿せしめ、緣に隨つて普く諸の　(一六)群品を濟はん。

中品に菩薩戒を受持するものは、福に自在を得て轉輪聖王となり、心に隨つて作す所みな盡く成(就)し、無量の人天悉く(彼を)遵奉せん。

下の上品に(戒を)持たば大鬼王となり、一切の非人咸く率伏せん。戒品を受持するに缺犯(する所)ありと雖も、戒勝れるが故に王となることを得るなり。

下の中品に(戒を)持たば禽獸の王となり、一切の飛走するもの皆歸伏せん。清淨戒に於いて缺犯ありと雖も、戒勝れるが故に王となることを得るなり。

下の下品に(戒を)持たば琰摩王となり、地獄の中に處して常に自在ならん。

【一四】妄計とは道理にかなはぬ考のことなり。

【一五】無上果とは成佛したることなり。昔は我國に於いても、天皇の卽位式は成佛式なりき。成佛すれば決して死することあらざるなり。

【一六】群品とは群生とも云ふ。一切衆生のことなり。

是の義を以ての故に、諸の衆生よ、應に菩薩の清淨戒を受くべし。(若し)善く護持して缺犯なくんば、所生の處に隨つて人王と作らん。
若し如來の戒を受けずんば、終に野干の身をも得ること能はざらん。何に況んや能く人天中の最勝の快樂を感じて、王位に居らんをや。
是の故に王者(たる)には因なきにあらず、戒業を精勤して妙果を成じたるなり。
國王は自ら是れ人民の主たり、(人民を)慈恤すること母の嬰兒を養ふが如し。是の如く人王には大恩あり、撫育の心報ずべきこと難し。
是の因緣を以て諸の有情よ、若し能く大菩提を修證せんには、諸の衆生に對して大悲心を起し、應に如來の三聚(淨)戒を受くべし。
若し如法に戒を受けんと欲せば、應に(前)罪を懺(悔)して消滅せしむべし。
起罪の因に十緣あり、身に三と口に四と意に三となり。
生死も無始なれば罪(障)も(亦)窮りなし。煩惱の大海は深うして底なく、業障(の峰)は峻極にして須彌の如し。
造業の因由は二種より起る、所謂現行と種子となり。(一七)藏識の一切の種(子)を持し、緣じて身を離れざること影の形に隨ふが如し。(而して其の種子は)一切時中に聖道を障へ、近くは人天妙樂

【一七】藏識とは前に註釋せる第八阿賴耶識のことなり。

の果を障へ、遠くは無上菩提の果を障ふ。
在家は能く煩惱の因を招き、出家も亦淸淨の戒を破る。(而かも)若し能く如法に懺悔せば、有らゆる煩惱は悉く除かれん。
懺悔の能く煩惱の薪を燒くことは、猶ほ劫火の世間を壞り、須彌幷に巨海をも燒き盡すが如し。
懺悔は能く天に往くの路なり。
懺悔は能く〔八〕四禪の樂を得、懺悔は摩尼寶珠を雨ふらす。懺悔は能く金剛の壽を延ばし、懺悔は能く常樂の宮に入らしむ。
懺悔は能く三界の獄を出でしめ、懺悔は能く菩提の華を開く、懺悔は佛の大圓鏡を見しめ、懺悔は能く寶所に至らしむ。
若し能く如法に懺悔せんとするものは、當に二種の觀門に依りて修すべし。一には觀事滅罪門、二には觀理滅罪門なり。
觀事の滅罪にその三(種)あり。上中下根を三品となす。
若し上根の淨戒を求むるものあらば、(彼は)大精進を發して心に退(屈)なく、悲淚して血に泣き、常に精懇に哀感して徧身に皆血を現はし、念を十方三寶の所と、幷に餘の六道の衆生とに繫け、長跪し合掌して心を亂さず、發露洗心して(下の如く)懺悔を求めよ。

【八】四禪とは四禪天なり。

唯願くは十方三世の（諸）佛、大慈悲を以て我を哀愍し給へ。
われ輪廻に處して依る所なく、生死長夜（の夢）常に覺めず。われ凡夫に在りて諸縛を具し、狂心顚倒して偏く（迷に）攀縁す。
われ三界火宅の中に處して、妄に〔一九〕六塵に染れども救護するものなし。われ貧窮下賤の家に生れ、自在を得ずして常に苦を受く。
われ邪見なる父母の家に生れ、（諸の）惡眷屬に誘はれて惡を造りぬ。
唯願くは諸佛大慈尊、哀愍護念して一子の如くし給へ。
（われ今）一たび懺悔して復び諸罪を造らざらん（と期す）。三世の如來（願くは）證明し給へ。
若し中根に戒を求むる者あらば、一心勇猛に諸罪を懺悔し、涕涙交横るも覺知せず、偏身汗を流して佛に哀求し、無始（劫來の）生死の業を發露せよ。
願くは大悲の水に塵勞を洗ひ、罪障を滌除して六根を淨めん。
われに菩薩の三聚（淨）戒を施し給へ、われ願くは堅く（戒を）持つて退轉せず、精修して苦（界）の衆生を度脱せしめ、（縱令）自ら未だ度（脱）を得ずとも先づ他を（濟）度し、盡未來際常に（この願を）斷つこと無けん。
是の如く精勤勇猛なる者にして、身命を惜まず菩提を求めば、能く三寶靈異の相を感ぜん、

〔一九〕六塵とは色・聲・香・味・觸・法の六を云ふ。

是を中品の大懺悔と名く。
若し下根に淨戒を求むるものは、是の無上菩提の心を發し、涕淚悲泣して身毛を竪てて、所造の罪に於いて深く慚愧し、十方の三寶及び六道の衆生の前に對して、至誠に、無始(劫)來、諸の衆生を惱亂せる(罪)を發露し、無礙の大悲心を起して、身命を惜まず三業を悔い、已作の罪は皆懺悔し、未作の惡は更に造らざらん(と期せよ)。
是の如く三品に諸罪を懺悔するを、皆第一淸淨戒と名く。慚愧の水を以て(無始劫來の)塵勞を洗ひ、身心倶に淸淨の器となればなり
諸の善男子よ、汝(等)當に知るべし、(われ)已に(淸)淨なる觀(事)の懺悔を說きぬ。〔一〇〕事と理とは差別なけれども、但根と緣と應ずると然らざるとによりて(二)樣に敎ふる)なり。
若し正理を修習し觀(察)せんと欲せば、一切の散亂を遠離し、新らしき淨衣を著て(結)跏趺坐し、心を攝め念を正うして諸緣を離れ、常に諸佛の妙法身は、體性(虛)空の如くにして不可得なるを觀ぜよ。
一切の罪性は皆〔一一〕如なり、顚倒の因緣は妄心より起る。是の如きの罪相は本來空にして、三世の中に所得なく、內に非ず外に非ず中間に非ず、〔一二〕性相如如にして倶に不動なり。

〔一〇〕事と理と、これ觀事の懺悔と觀理の懺悔との二つを指せるなり。
〔一一〕如とは不動不變の義にして、前節に云へる不可得の意を含む。
〔一二〕性は事物の性質にして、相は事物のすがたなり。

眞如の妙理は名言に絶す、(故に)唯聖智のみありて能く通達す。有にも非ず無にも非ず有無(の閒)にも非ず、有無にあらざるにも非ず、(畢竟)名相を離れて法界に周徧し、生ずることなく(亦)滅することとなし。諸佛は本來同一體なり。

〔三〕唯だ願くは諸佛加護を垂れ、能く(我が)一切の顚倒心を滅したまへ、願くは我をして早く眞性の源を悟り、速に如來の無上道を證せしめたまへ。

若し清信の善男子ありて、日夜に能く妙理の空を觀ぜば、一切の罪障自ら消除せん、是を最上に淨戒を持つと名く。

若し人あり實相の空を觀知せば、能く諸の重罪を滅すること、猶ほ大風の猛火を吹いて、能く無量の諸の草木を燒くが如くならん。

諸の善男子よ、眞實の觀を名けて諸佛の祕要門となす。

若し他の爲に廣く分別(し解釋)せんと欲せば、無智の人の中にて宣說すること勿れ。(そは)都べて凡愚の衆生は、聞いて必らず疑を生じ心に信ぜざるべければなり。

若し有智の者は信解を生じ、念念に觀察して眞如を悟り、十方の諸佛も皆現前して、菩提の妙果を自然に證せん。

善男子等よ、我が滅後に(於いて)未來世の中の淨信の者は、一二の觀門に於いて常に懺悔し、當に

【三】此の偈は將來の悟道を願ふに就ての願文なり。

菩薩の三聚(淨)戒を受くべし。

若し上品の戒を受持せんと欲せば、應に戒師と佛と菩薩とを請せよ。わが釋迦牟尼佛を請じて、菩薩戒の和上となし、龍種淨智尊王佛を、淨戒の阿闍梨となし、未來の導師彌勒佛を、清淨の教授師となし、現在十方の(二四)兩足尊を、清淨の證戒師となし、十方の一切諸菩薩を、戒を修學する伴侶となし、帝釋梵天四天王及び金剛天を、學戒の外護衆となし、是の如きの佛菩薩と、及び現前の傳戒師とを請じ奉るべし。

善く四恩に報ぜんが爲の故に、清淨の菩提心を起して、應に菩薩の三聚淨戒を受くべし。(三聚淨戒とは)(二五)饒益一切有情戒と、修攝一切善法戒と、修攝一切律儀戒となり。

是の如きの三聚淨戒は、三世の如來の護念し給ふ所なれども、無間非法の諸の有情は、無量劫中にも未だ見聞せざるなり。

唯過去十方の佛のみありて、已に淨戒を受けて常に護持し、永へに二障の煩惱を斷除して、無上菩提の(妙)果を證することを獲たまふ。

未來の一切の諸の世尊も、三聚淨戒の法を守護し、(二六)三障并に習氣を斷除して、當に正等大菩

【二四】兩足尊とは都べて佛果を得たる人は智慧と慈悲と兩つながら滿足するを云ふ。

【二五】饒益一切有情戒は利他の行にして、修攝一切善法戒は一切の善事を修すること、修攝一切律儀戒は一切の惡をなさざることなり。

【二六】三障とは煩惱と業障と報障となり。

提を證し給はん。

現在十方の諸の善逝は、具さに三聚淨戒の因を修し、永へに生死輪廻の苦を斷じて、三身菩提の果を證することを得たまへり。

生死の深大海を超越するには、菩薩の淨戒を船筏と爲し、永く貪瞋痴の繫縛を斷ずるには、菩薩の淨戒を利劍と爲す。

生死の嶮道に於ける諸の怖畏には、菩薩の淨戒を舍宅と爲し、貧賤の諸苦の因を息除するには、淨戒能く如意の寶と爲る、鬼魅に著かれし諸の疾病には、菩薩淨戒を良藥と爲す。

人天に王と爲りて自在を得るには、三聚淨戒を良緣と爲す、餘の四趣諸王の身は、淨戒を緣と爲して勝果を獲るなり。

是故に能く自在の因を修し、王と爲りて尊貴を受くることを得んには、應に先づ十方の佛を禮敬し、日夜に淸淨戒を增修すべし。

諸佛は護念して常に受持せしめ給ふ。戒は金剛に等しく破壞すること無し。三界の諸天・諸善神は、王身及び眷屬を衞護したまふ。一切の怨敵は皆歸伏し、萬姓は歡娛して王化に感ず。

是故に菩薩戒を受持せば、世・出世の無爲の果を感ぜん。【以上國王の恩】

三寶は常住にして世を化し、恩德は廣大にして不思議なり、過・未及び現在の劫海の中、功德利

生・休息すること無し。

佛日は千光の如く恒に世を照し、群生を利益して有緣を度す。緣無ければ佛の慈光を視ず、猶ほ盲者の見る所無きが如し。

法寶は一味にして變易あること無く、前佛後佛の說皆同じ。雨の一味にして普く能く霑すも、草木の滋榮大小に別るるが如し。衆生は根に隨て各解を得、草木の潤を稟ること亦差殊なるが如し。

菩薩聲聞は衆生を化す、大河水の流の竭きざるが如し。衆生は信無ければ化を被らず、幽冥に處して日の照し無きが如し。

如來の月光は甚だ清涼なり、能く衆暗を除くも亦是の如し、猶ほ覆盆を月の照さざるが如く、迷惑の衆生も亦是の如し。

法寶は甘露の妙良藥なり、能く一切煩惱の病を治す、信有るものは藥を服し菩提を證し、信無きものは緣に隨て惡道に墮す。

菩薩聲聞は常に世に在りて、無數の方便もて衆生を度す。若し衆生にして信樂の心有らば、各三乘安樂の位に入らん。

如來世間に出でずんば、一切の衆生は邪道に入り、永く甘露を離れ三毒藥を飲み、長へに苦海に溺れて出期無けん。

佛日は三千界に出現し、大光明を放つて長夜を照す。衆生は睡るが如くにして覺知せざれども、光を蒙りて無爲の室に入ることを得ん。

如來の未だ一乘の法を說きたまはざるとき、十方の國土は悉く空虛なりしが、發心修行して正覺を成じ、一切の佛土皆嚴淨せり。

一乘の法寶は諸佛の母なり、三世の諸佛は此より生じたまふ。般若と方便とを無間に修せば、解脫の道成じて妙覺に登らん。

若し佛・菩薩出現したまはざれば、世間の衆生は導師無く、生死の嶮難過ぐるに由無し。如何ぞ寶所に至ることを得ん。

大願力を以て善友と爲し、常に妙法を說きて修行せしめ、十地に趣向して菩提を證せしめ、善く涅槃安樂の處に入らしむ。

大悲の菩薩は世間を化し、方便もて衆生を引導するが故に、內に一乘眞實の行を祕し、外に緣覺及び聲聞を現ず。

鈍根の小智は一乘を聞き、怖畏心に發して多劫を經、身に如來藏の有ることを知らず、唯寂滅を欣んで塵勞を厭ふ。衆生は本より菩提の種有り、悉く阿賴耶識の中に在り。

若し善友に遇て大心を發し、三種の鍊磨もて妙行を修せば、永く煩惱・所知の障を斷じ、如來常

住の身を證得せん。
菩提の妙果は成じ難からず、眞の善知識は實に遇ひ難し。
一切の菩薩、勝道を修せんに、當に四種の法要を知るべし。善友に親近するを第一となし、正法を聽聞するを第二となし、理の如く思量するを第三となし、法の如く修證するを第四となす。
十方一切の大聖主は、是の四法を修して菩提を證したまへり、汝諸の長者大會衆、及び未來世の清信士よ、菩薩地に於いて、當に是の如き四法を修習せば要ず佛道を成ぜん。
善男子よ應に諦聽すべし、如來所說の四恩は、佛寶の恩を最上と爲す、衆生を度せんが爲に大心を發し、三阿僧祇大劫の中に、具さに百千の苦行を修し、功德圓滿して法界に徧く、十地究竟して三身を證したまふ。
法身の體は諸の衆生に徧く、萬德凝然として性常住なり、不生・不滅にして去來なく、不一・不異にして常斷に非ず。
法界に徧滿すること虛空の如く、一切の如來共に修證す。有爲無爲の諸の功德、法身に依止して常に清淨なり。
法身の本性は虛空の如し、六塵を遠離して所染無し。法身は無形にして諸相を離れ、能相・所相悉く皆空なり。

是の如き諸佛の妙法身は、戲論言辭の相を寂滅す。一切諸の分別を遠離して、心行處滅して體皆如なり

如來の身を證得せんと欲するが爲に、菩薩は善く萬行を修す。智體は無爲にして眞法性なり、色心は一切の諸佛に同じ。

譬へば飛鳥の金山に至り、能く鳥身をして彼の色に同せしむるが如く、一切の菩薩は飛鳥の如く、法身の佛體は金山に類す。

自受用身の諸の相好は、一一、十方刹に徧滿す、四智圓明にして法樂を受け、前佛後佛の體皆同じ。法界に徧しと雖も障礙無し、是の如きの妙境は不思議なり、是の身常に報佛の土に住し、自受の法樂は間斷あること無し。

他受用身の諸の相好は、機に隨つて應現するに增減無し、地上の諸菩薩を化せんが爲に、一佛にして十種の身を現す。

所に隨つて應現するに各同じからず、展轉して倍增して無極に至る。根に隨つて爲に諸の法要を說き、法樂を受けて一乘に入らしむ。

彼の神通を獲ること漸く增長し、悟る所の法門も亦是の如し。

下地の菩薩は智慧を起すとも、上地に了達すること能はず、能化・所化、地に隨つて增し、各本緣

に隨つて所屬と爲る。
或は一菩薩の多佛に化せられ、或は多菩薩の一佛に化せられ、是の如く十佛正覺を成じ、各七寶の菩提樹に坐す、前佛入滅して後佛成ず、化佛の劫を經て現ずるに同じからず。
十佛の坐する所の蓮華臺は、周徧各百千葉有り、一一の葉中に一佛土あり、即ち是れ三千大千界なり、一一の界中に、百億の日月星辰・四大洲、六欲諸天及び四禪、空處・識處・非想等あり。
其四洲中の南贍部に、一一各金剛座、及び菩提の大樹王あり、爾の變化する所の諸の佛身は、一時に菩提道を證得し、妙法輪を大千に轉じ給ふ。
菩薩・緣覺・及び聲聞は、所根の宜きに隨つて聖果を成ず、是の如く說く所の三身佛は、最上無比なれば名けて寶と爲す。
應化二身の所說の法は、教理行果を法寶と爲す。諸佛は法を以て大師と爲し、心を修めて證する所は菩提道なり。
法寶は三世に變易すること無し、一切の諸佛皆歸學す。
我今(三七)薩婆若を頂禮す、故に法寶を說きて佛師と爲す、或は猛火に入るとも燒く能はず、時に應じて即ち眞解脫を得ん。
法寶は能く生死の獄を摧く、猶ほ金剛の萬物を碎くが如し。

【三七】薩婆若とは譯して一切智と云ふ。

法寶は能く衆生の心を照す、日天子の空界に臨むが如し。
法寶は能く衆生に樂を與ふ、譬へば天鼓の天心に應ずるが如し。
法寶は能く衆生の貧を救ふ、摩尼珠の衆寶を雨すが如し。
法寶は能く三寶の階と爲る、法を聞き因を修して上界に生ず。
法寶は金輪大聖王なり、大法力を以て四魔を破す。
法寶は能く大寶車と爲る、能く衆生を運んで火宅を出づ。
法寶は能く大導師と爲る、能く衆生を引いて寶所に至る。
法寶は能く大法螺を吹く、衆生を覺悟して佛道を成ぜしむ。
法寶は能く大法燈と爲る、能く生死の諸の黑闇を照す。
法寶は能く金剛の箭と爲る、能く國家を鎭めて諸怨を伏す。

三世如來の所說の法は、能く衆生を利して苦縛を脫せしめ、引いて涅槃の安樂城に入らしむ。是を名けて法寶の恩報じ難しとなす。

智光長者よ汝諦かに聽け、世出世の僧に三種あり、菩薩と聲聞との聖と凡衆となり。能く衆生を益して福田となる。

文殊師利大聖尊は、三世諸佛以て母と爲す。十方如來の初て發心するは、皆是れ文殊敎化の力な

り、一切世界の諸の有情は、名を聞き身及び光相を見、幷に類に隨へる諸の化現を見て、皆佛道を成ずること難思議なり。

彌勒菩薩法王子は、初發心より肉食せず、是の因緣を以て慈氏と名く、諸の衆生を成熟せしめんと欲するが爲に、第四の兜率天、四十九重の如意殿に處して、晝夜恒に不退の行を說く、無數の方便もて人天を度し、八功德水の妙華池に、諸の緣有る者をして悉く同生せしむ。我今弟子を彌勒に付す、龍華會中に解脫を得ん。末法中に於ける善男子、一摶の食を衆生に施さば、是の善根を以て彌勒を見、當に菩提究竟の道を得べし。

舍利弗等の大聲聞は、智慧と神通とをもて群生を化す。若し能く解脫戒を成就せば、眞に是れ正見を修行するの人なり。他の爲に法を說き大乘を傳ふ。是の如き福田を第一と爲す。

或は一類の凡夫僧あり、戒品は全からざれども正見を生じ、一乘微妙の法を讃詠し、犯に隨ひ悔に隨ひて障銷除し、諸の衆生の爲に佛因を成ず。是の如きの凡夫も亦僧寶なり。鬱金華の萎悴すと雖も、猶ほ一切諸妙華に勝れるが如し。正見の比丘も亦是の如く、四種の輪王も及ばざる所なり。

是の如き四類の聖と凡僧とは、有情を利樂して暫も竭むこと無し、稱して世間の良福田と爲す、是を僧寶の大恩德と名く。**【以上三寶の恩】**

我が所說の如き四恩の義、是を能く世閒の因を造ると名く、一切の萬物是より生ず。若し四恩を離るれば得可らず。譬へば世閒の諸の色塵の、能く四大を造りて生を得るが如し。有情の世閒も亦復然り、彼の四恩に由て安立を得るなり。』

爾の時に智光長者、及び諸子等は、佛の說き給ひし所の四種の大恩を聞きて、未曾有なることを得、歡喜合掌して佛に白して言さく、

『善い哉、善い哉、大慈世尊、濁惡の因果を信ぜず、父母に孝ならざる、邪見の衆生の爲に、眞の妙法を說きて世閒を利樂し給ふ。惟だ願くは世尊、報恩の義を說き給へ。我等既に甚深の四恩を悟り、而も未だ何の善業を修して是の恩に報いんかを知らず。』

佛、長者に告げ給はく、

『善男子等、我五百長者の爲に、先に已に廣說せり、而して今汝が爲に略して少分を說かん。若し善男子・善女人、阿耨多羅三藐三菩提を得んが爲め、精勤して十波羅蜜を修行せんに、若し有所得なれば未だ報恩と名けず。若し人須臾も能く一善を行ひ、心無所得なれば乃ち報恩と名くべし。所以は何となれば、一切の如來は無所得に觸れて乃ち佛道を成じ、諸生の衆を化し給へばなり。若し淨信の善男子等、是の經を聞くことを得、信解し、受持し、解說し、書寫し、無所得を以て、三輪空寂、竊かに一人の爲に四句の法を說き邪見の心を除かしめ、菩提に趣向せしめば、是を卽ち名けて四恩を報

すと爲す。是の人は當に無上菩提を得、展轉して無量の衆生を教化し、佛道に入らしめ、三寶の種子をして永く斷絶せしめざらん。」と。

爾の時に智光長者、是の偈を聞き已りて忍辱三昧を得、世間を厭離して不退轉を得たり。時に諸子等八千人も俱に此三昧を得、皆無等等阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、四萬八千人も亦三昧を證り、遠塵離垢し、法眼淨を得たり。

國譯大乘本生心地觀經報恩品　終

經題下三本俱有卷上二字夾註一明作亦脫下無卷上二字兩明有經字〇譯号藏下三本俱有法師二字〇什下元明俱有奉詔二字下同

修宋作脩

維摩詰所說經 （一名不可思議解脫） 卷上

〔麗在〕〔宋樹〕〔元白〕〔明方〕

姚秦三藏鳩摩羅什譯

佛國品第一

如是我聞。一時佛在毘耶離菴羅樹園。與大比丘衆八千人俱。菩薩三萬二千。衆所知識。大智本行皆悉成就。諸佛威神之所建立。爲護法城受持正法。能師子吼名聞十方。衆人不請友而安之。紹隆三寶能使不絕。降伏魔怨制諸外道。悉已淸淨永離蓋纏。心常安住無礙解脫。念定總持辯才不斷。布施持戒忍辱精進禪定智慧及方便力無不具足。逮無所得不起法忍。已能隨順轉不退輪。善解法相知衆生根。蓋諸大衆得無所畏。功德智慧以修其心。相好嚴身色像第一。捨諸世間所有飾好。名稱高遠踰於須彌。深信堅固猶若金剛。法寶普照而雨甘露。於衆言音微妙第一。深入緣起斷諸邪見。有無二邊無復餘習。演法無畏猶師子吼。其所講說乃如雷震。無有量已過量。集衆法寶如海導師。了達諸法深妙之義。善知衆生往來所趣及心所行。近無等等佛自在慧十力無畏十八不共。關閉一切諸惡趣門。而生五道以現其身。爲大醫王善療衆病。應病與藥令得服行。無量功德皆成就。無量佛土皆嚴淨。其見聞者無不蒙益。諸有所作亦不唐捐。如是一切功德皆悉具足。其名曰等觀菩薩。不等觀菩薩。等不等觀菩薩。定自在王菩薩。法自在王菩薩。法相菩薩。光相菩薩。光嚴菩薩。大嚴菩薩。寶積菩薩。辯積菩薩。寶手菩薩。寶印手菩薩。常擧手菩薩。常下手菩薩。常慘菩薩。喜根菩薩。喜王菩薩。辯音菩薩。虛空藏菩薩。執寶炬菩薩。寶勇菩薩。寶見菩薩。帝網菩薩。明網菩薩。無緣觀菩薩。慧積菩薩。寶勝菩薩。天王菩薩。壞魔菩薩。電德菩薩。自在王菩薩。功德相嚴菩薩。師子吼菩薩。雷音菩薩。山相擊音菩薩。香象菩薩。白香象菩薩。常精進菩薩。不休息菩薩。妙生菩薩。華嚴菩薩。觀世音菩薩。得大勢菩薩。梵網菩薩。寶杖菩薩。無勝菩薩。嚴土菩薩。金髻菩薩。珠髻菩

薩、彌勒菩薩、文殊師利法王子菩薩、如是等三萬二千人、復有萬梵天王尸棄等、從餘四天下來詣佛所而爲聽法、復有萬二千天帝、亦從餘四天下來在會坐、幷餘大威力諸天龍神夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽等悉來會坐、諸比丘比丘尼優婆塞優婆夷俱來會坐、彼時佛與無量百千之衆、恭敬圍繞而爲說法、譬如須彌山王顯于大海、安處衆寶師子之座、蔽於一切諸來大衆、爾時毘耶離城有長者子、名曰寶積、與五百長者子俱持七寶蓋來詣佛所、頭面禮足、各以其蓋共供養佛、佛之威神令諸寶蓋合成一蓋、遍覆三千大千世界、而此世界廣長之相悉於中現、又此三千大千世界、諸須彌山雪山目眞鄰陀山摩訶目眞鄰陀山香山寶山金山黑山鐵圍山大鐵圍山、大海江河川流泉源、及日月星辰天宮龍宮諸尊神宮、悉現於寶蓋中、又十方諸佛諸佛說法亦現於寶蓋中、爾時一切大衆覩佛神力歎未曾有、合掌禮佛瞻仰尊顏目不暫捨、於是長者子寶積即於佛前以偈頌曰

目淨脩廣如青蓮　心淨已度諸禪定　久積淨業稱無量　導衆以寂故稽首　旣見大聖以神變
普現十方無量土　其中諸佛演說法　於是一切悉見聞　法王法力超群生　常以法財施一切
能善分別諸法相　於第一義而不動　已於諸法得自在　是故稽首此法王　說法不有亦不無
以因緣故諸法生　無我無造無受者　善惡之業亦不亡　始在佛樹力降魔　得甘露滅覺道成
已無心意無受行　而悉摧伏諸外道　三轉法輪於大千　其輪本來常清淨　天人得道此爲證
三寶於是現世間　以斯妙法濟群生　一受不退常寂然　度老病死大醫王　當禮法海德無邊
毀譽不動如須彌　於善不善等以慈　心行平等如虛空　孰聞人寶不敬承　今奉世尊此微蓋
於中現我三千界　諸天龍神所居宮　乾闥婆等及夜叉　悉見世間諸所有　十力哀現是化變
衆覩希有皆歎佛　今我稽首三界尊　大聖法王衆所歸　淨心觀佛靡不欣　各見世尊在其前
斯則神力不共法　佛以一音演說法　衆生隨類各得解　皆謂世尊同其語　斯則神力不共法
佛以一音演說法　衆生各各隨所解　普得受行獲其利　斯則神力不共法　佛以一音演說法

而下元明俱有爲字〇脩明作修
坐宋作座
香山下明無寶山金山四字
捨下三本俱無於是二字
生元作至

力明作方

罣同作圭

礙宋元俱作閡

或有恐畏或歡喜　或生厭離或斷疑　斯則神力不共法　稽首十力大精進　稽首已得無所畏
稽首住於不共法　稽首一切大導師　稽首能斷衆結縛　稽首已到於彼岸　稽首能度諸世間
稽首永離生死道　悉知衆生來去相　善於諸法得解脫　不著世間如蓮華　常善入於空寂行
達諸法相無罣礙　稽首如空無所依

爾時長者子寶積.說此偈已白佛言.世尊.是五百長者子.皆已發阿耨多羅三藐三菩提心.願聞得佛國土清淨.唯願世尊.說諸菩薩淨土之行.佛言.善哉寶積.乃能爲諸菩薩問於如來淨土之行.諦聽諦聽善思念之.當爲汝說.於是寶積及五百長者子.受教而聽.佛言.寶積.衆生之類是菩薩佛土.所以者何.菩薩隨所化衆生而取佛土.隨所調伏衆生而取佛土.隨諸衆生應以何國入佛智慧而取佛土.隨諸衆生應以何國起菩薩根而取佛土.所以者何.菩薩取於淨國.皆爲饒益諸衆生故.譬如有人欲於空地造立宮室隨意無礙.若於虛空終不能成.菩薩如是.爲成就衆生故願取佛國.願取佛國者非於空也.寶積.當知直心是菩薩淨土.菩薩成佛時不諂衆生來生其國.深心是菩薩淨土.菩薩成佛時具足功德衆生來生其國.菩提心是菩薩淨土.菩薩成佛時大乘衆生來生其國.布施是菩薩淨土.菩薩成佛時一切能捨衆生來生其國.持戒是菩薩淨土.菩薩成佛時行十善道滿願衆生來生其國.忍辱是菩薩淨土.菩薩成佛時三十二相莊嚴衆生來生其國.精進是菩薩淨土.菩薩成佛時勤修一切功德衆生來生其國.禪定是菩薩淨土.菩薩成佛時攝心不亂衆生來生其國.智慧是菩薩淨土.菩薩成佛時正定衆生來生其國.四無量心是菩薩淨土.菩薩成佛時成就慈悲喜捨衆生來生其國.四攝法是菩薩淨土.菩薩成佛時解脫所攝衆生來生其國.方便是菩薩淨土.菩薩成佛時於一切法方便無礙衆生來生其國.三十七道品是菩薩淨土.菩薩成佛時念處正勤神足根力覺道衆生來生其國.迴向心是菩薩淨土.菩薩成佛時得一切具足功德國土.說除八難是菩薩淨土.菩薩成佛時國土無有三惡八難.自守戒行不譏彼闕是菩薩淨土.菩薩成佛時國土無有犯禁之名.十善是菩薩淨土.菩薩成佛時命不中夭.大富梵行所言誠諦.常以軟語眷屬不離.善和諍訟.言必饒益.不嫉不恚正見衆生來生其國.如是寶積.菩薩隨其直心則能發行.隨其發行則得深

意三本俱作其

佛同作國

意元明俱作念

蕀明作棘○梵下元明俱有王字○按宋作案

語元明俱作告

乘下宋明俱有者字○天上元明俱有諸字○品目宋無所說二字明無維摩詰所說經六字下同○植三本俱作殖

心。隨其深心則意調伏。隨意調伏則如說行。隨如說行則能迴向。隨其迴向則有方便。隨其方便則成就衆生。隨成就衆生則佛土淨。隨佛土淨則說法淨。隨說法淨則智慧淨。隨智慧淨則其心淨。隨其心淨則一切功德淨。是故寶積。若菩薩欲得淨土當淨其心。隨其心淨則佛土淨。爾時舍利弗承佛威神作是念。若菩薩心淨則佛土淨者。我世尊本爲菩薩時意豈不淨。而是佛土不淨若此。佛知其念卽告之言。於意云何。日月豈不淨耶。而盲者不見。對曰不也。世尊。是盲者過非日月咎。舍利弗。衆生罪故不見如來佛土嚴淨。非如來咎。舍利弗。我此土淨而汝不見。爾時螺髻梵王語舍利弗。勿作是意。謂此佛土以爲不淨。所以者何。我見釋迦牟尼佛土清淨。譬如自在天宮。舍利弗言。我見此土。丘陵坑坎荊蕀沙礫。土石諸山穢惡充滿。螺髻梵言。仁者心有高下。不依佛慧故。見此土爲不淨耳。舍利弗。菩薩於一切衆生。悉皆平等深心清淨。依佛智慧則能見此佛土清淨。於是佛以足指按地。卽時三千大千世界若干百千珍寶嚴飾。譬如寶莊嚴佛無量功德寶莊嚴土。一切大衆歎未曾有。而皆自見坐寶蓮華。佛告舍利弗。汝且觀是佛土嚴淨。舍利弗言。唯然世尊。本所不見本所不聞。今佛國土嚴淨悉現。佛語舍利弗。我佛國土常淨若此。爲欲度斯下劣人故。示是衆惡不淨土耳。譬如諸天共寶器食隨其福德飯色有異。如是舍利弗。若人心淨便見此土功德莊嚴。當佛現此國土嚴淨之時。寶積所將五百長者子皆得無生法忍。八萬四千人皆發阿耨多羅三藐三菩提心。佛攝神足。於是世界還復如故。求聲聞乘三萬二千天及人。知有爲法皆悉無常。遠塵離垢得法眼淨。八千比丘不受諸法漏盡意解

維摩詰所說經方便品第二

爾時毘耶離大城中有長者名維摩詰。已曾供養無量諸佛深植善本。得無生忍辯才無礙。遊戲神通逮諸總持。獲無所畏降魔勞怨。入深法門善於智度。通達方便大願成就。明了衆生心之所趣。又能分別諸根利鈍。久於佛道心已純淑決定大乘。諸有所作能善思量。住佛威儀心大如海。諸佛咨嗟弟子釋梵世主所敬。欲度人故以善方便居毘耶離。資財無量攝諸貧民。奉戒清淨攝諸毀禁。以忍調行攝諸恚怒。以大精進攝諸懈怠。一心禪寂攝

幼明作幻

政元明俱作正下同

炎同作焰

諸亂意。以決定慧攝諸無智。雖爲白衣奉持沙門清淨律行。雖處居家不著三界。示有妻子常修梵行。現有眷屬常樂遠離。雖服寶飾而以相好嚴身。雖復飲食而以禪悅爲味。若至博奕戲處輒以度人。受諸異道不毀正信。雖明世典常樂佛法。一切見敬爲供養中最。執持正法攝諸長幼。一切治生諧遇。雖獲俗利不以喜悅。遊諸四衢饒益衆生。入治政法救護一切。入講論處導以大乘。入諸學堂誘開童蒙。入諸婬舍示欲之過。入諸酒肆能立其志。若在長者長者中尊爲說勝法。若在居士居士中尊斷其貪著。若在刹利刹利中尊教以忍辱。若在婆羅門婆羅門中尊除其我慢。若在大臣大臣中尊教以正法。若在王子王子中尊示以忠孝。若在內官內官中尊化政宮女。若在庶民庶民中尊令興福力。若在梵天梵天中尊誨以勝慧。若在帝釋帝釋中尊示現無常。若在護世護世中尊護諸衆生。長者維摩詰。以如是等無量方便饒益衆生。其以方便現身有疾。以其疾故國王大臣長者居士婆羅門等。及諸王子幷餘官屬。無數千人皆往問疾。其往者。維摩詰因以身疾廣爲說法。諸仁者。是身無常無強無力無堅。速朽之法不可信也。爲苦爲惱衆病所集。諸仁者。如此身明智者所不怙。是身如聚沫不可撮摩。是身如泡不得久立。是身如炎從渴愛生。是身如芭蕉中無有堅。是身如幻從顚倒起。是身如夢爲虛妄見。是身如影從業緣現。是身如響屬諸因緣。是身如浮雲須臾變滅。是身如電念念不住。是身無主爲如地。是身無我爲如火。是身無壽爲如風。是身無人爲如水。是身不實四大爲家。是身爲空離我我所。是身無知如草木瓦礫。是身無作風力所轉。是身不淨穢惡充滿。是身爲虛僞。雖假以澡浴衣食必歸磨滅。是身爲災百一病惱。是身如丘井爲老所逼。是身無定爲要當死。是身如毒蛇如怨賊如空聚。陰界諸入所共合成。諸仁者。此可患厭當樂佛身。所以者何。佛身者卽法身也。從無量功德智慧生。從戒定慧解脫解脫知見生。從慈悲喜捨生。從布施持戒忍辱柔和勤行精進禪定解脫三昧多聞智慧諸波羅蜜生。從方便生。從六通生。從三明生。從三十七道品生。從止觀生。從十力四無所畏十八不共法生。從斷一切不善法集一切善法生。從眞實生。從不放逸生。從如是無量清淨法生如來身。諸仁者。欲得佛身斷一切衆生病者。當發阿耨多羅三藐三菩提心。如是長者維摩詰。爲諸問疾者如應說法。令無數千人皆發阿耨多羅三藐三菩提心

揣明作摶

維摩詰所說經弟子品第三

爾時長者維摩詰自念．寢疾于床世尊大慈寧不垂愍．佛知其意．即告舍利弗．汝行詣維摩詰問疾．舍利弗白佛言．世尊．我不堪任詣彼問疾．所以者何．憶念我昔曾於林中宴坐樹下．時維摩詰來謂我言．唯舍利弗．不必是坐爲宴坐也．夫宴坐者．不於三界現身意．是爲宴坐．不起滅定而現諸威儀．是爲宴坐．不捨道法而現凡夫事．是爲宴坐．心不住內亦不在外．是爲宴坐．於諸見不動而修行三十七道品．是爲宴坐．不斷煩惱而入涅槃．是爲宴坐．若能如是坐者．佛所印可．時我世尊．聞說是語．默然而止．不能加報．故我不任詣彼問疾．佛告大目犍連．汝行詣維摩詰問疾．目連白佛言．世尊．我不堪任詣彼問疾．所以者何．憶念我昔入毗耶離大城．於里巷中爲諸居士說法．時維摩詰來謂我言．唯大目連．爲白衣居士說法．不當如仁者所說．夫說法者當如法說．法無衆生．離衆生垢故．法無有我．離我垢故．法無壽命．離生死故．法無有人．前後際斷故．法常寂然．滅諸相故．法離於相．無所緣故．法無名字．言語斷故．法無有說．離覺觀故．法無形相．如虛空故．法無戲論．畢竟空故．法無我所．離我所故．法無分別離諸識故．法無有比．無相待故．法不屬因．不在緣故．法同法性．入諸法故．法隨於如．無所隨故．法住實際．諸邊不動故．法無動搖．不依六塵故．法無去來．常不住故．法順空．隨無相．應無作．法離好醜．法無增損．法無生滅．法無所歸．法過眼耳鼻舌身心．法無高下．法常住不動．法離一切觀行．唯大目連．法相如是．豈可說乎．夫說法者．無說無示．其聽法者．無聞無得．譬如幻士爲幻人說法．當建是意而爲說法．當了衆生根有利鈍．善於知見無所罣礙．以大悲心．讚于大乘．念報佛恩．不斷三寶．然後說法．維摩詰說是法時．八百居士發阿耨多羅三藐三菩提心．我無此辯．是故不任詣彼問疾．佛告大迦葉．汝行詣維摩詰問疾．迦葉白佛言．世尊．我不堪任詣彼問疾．所以者何．憶念我昔於貧里而行乞．時維摩詰來謂我言．唯大迦葉．有慈悲心而不能普．捨豪富從貧乞．迦葉．住平等法．應次行乞食．爲不食故應行乞食．爲壞和合相故應取揣食．爲不受故應受彼食．以空聚想入於聚落．所見色與盲等．所聞聲與響等．所齅香與風等．所食味不分別．受諸觸如智證．知諸法如幻相．無自性．無他性．本自不然．今則無

誰下三本俱無聞此二字

明 明作闇

非不得果四字元本闕

此下三本俱無語字

琉 明作瑠

滅。迦葉。若能不捨八邪入八解脫。以邪相入正法。以一食施一切。供養諸佛及衆賢聖。然後可食。如是食者非有煩惱非離煩惱。非入定意非起定意。非住世間非住涅槃。其有施者無大福無小福。不爲益不爲損。是爲正入佛道不依聲聞。迦葉。若如是食爲不空食人之施也。時我世尊。聞說是語得未曾有。即於一切菩薩深起敬心。復作是念。斯有家名辯才智慧乃能如是。其誰聞此不發阿耨多羅三藐三菩提心。我從是來不復勸人以聲聞辟支佛行。是故不任詣彼問疾。佛告須菩提。汝行詣維摩詰問疾。須菩提白佛言。世尊。我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念我昔入其舍從乞食。時維摩詰取我鉢盛滿飯。謂我言。唯須菩提。若能於食等者諸法亦等。諸法等者於食亦等。如是行乞乃可取食。若須菩提。不斷婬怒癡亦不與俱。不壞於身而隨一相。不滅癡愛起於明脫。以五逆相而得解脫。亦不解不縛。不見四諦非不見諦。非得果非不得果。非凡夫非離凡夫法。非聖人非不聖人。雖成就一切法而離諸法相。乃可取食。若須菩提。不見佛不聞法。彼外道六師。富蘭那迦葉。末伽梨拘賒梨子。刪闍夜毘羅胝子。阿耆多翅舍欽婆羅。迦羅鳩馱迦旃延。尼犍陀若提子等。是汝之師。因其出家。彼師所墮汝亦隨墮。乃可取食。若須菩提。入諸邪見不到彼岸。住於八難不得無難。同於煩惱離清淨法。汝得無諍三昧。一切衆生亦得是定。其施汝者不名福田。供養汝者墮三惡道。爲與衆魔共一手作諸勞侶。汝與衆魔及諸塵勞等無有異。於一切衆生而有怨心。謗諸佛毀於法不入衆數。終不得滅度。汝若如是乃可取食。時我世尊。聞此茫然不識是何言。不知以何答。便置鉢欲出其舍。維摩詰言。唯須菩提取鉢勿懼。於意云何。如來所作化人。若以是事詰。寧有懼不。我言不也。維摩詰言。一切諸法如幻化相。汝今不應有所懼也。所以者何。一切言說不離是相。至於智者不著文字故無所懼。何以故。文字性離無有文字。是則解脫。解脫相者則諸法也。維摩詰說是法時。二百天子得法眼淨。故我不任詣彼問疾。佛告富樓那彌多羅尼子。汝行詣維摩詰問疾。富樓那白佛言。世尊。我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念我昔於大林中在一樹下。爲諸新學比丘說法。時維摩詰來謂我言。唯富樓那。先當入定觀此人心。然後說法。無以穢食置於寶器。當知是比丘心之所念。無以琉璃同彼水精。汝不能知衆生根源。無得發起以小乘法。彼自無瘡勿傷之也。欲行大道莫示小徑。無以大海內於牛跡。無以日光等彼螢火。富樓那。此比丘久發大乘

植三本俱作殖
果宋作菓
悔宋元明俱作懺

心中忘此意。如何以小乘法而教導之。我觀小乘智慧微淺猶如盲人。不能分別一切衆生根之利鈍。時維摩詰即入三昧。令此比丘自識宿命。曾於五百佛所植衆德本。廻向阿耨多羅三藐三菩提。即時豁然還得本心。於是諸比丘稽首禮維摩詰足。時維摩詰因爲說法。於阿耨多羅三藐三菩提不復退轉。我念聲聞不觀人根不應說法。是故不任詣彼問疾。佛告摩訶迦旃延。汝行詣維摩詰問疾。迦旃延白佛言。世尊。我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念昔者佛爲諸比丘略說法要。我即於後敷演其義。謂無常義苦義空義無我義寂滅義。時維摩詰來謂我言。唯迦旃延。無以生滅心行說實相法。迦旃延。諸法畢竟不生不滅是無常義。五受陰洞達空無所起是苦義。諸法究竟無所有是空義。於我無我而不二是無我義。法本不然今則無滅是寂滅義。說是法時彼諸比丘心得解脫。故我不任詣彼問疾。佛告阿那律。汝行詣維摩詰問疾。阿那律白佛言。世尊。我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念我昔於一處經行。時有梵王名曰嚴淨。與萬梵俱放淨光明來詣我所。稽首作禮問我言。幾何阿那律天眼所見。我即答言。仁者。吾見此釋迦牟尼佛土三千大千世界。如觀掌中菴摩勒果。時維摩詰來謂我言。唯阿那律。天眼所見爲作相耶。無作相耶。假使作相則與外道五通等。若無作相即是無爲不應有見。世尊。我時嘿然。彼諸梵聞其言得未曾有。即爲作禮而問曰。世孰有眞天眼者。維摩詰言。有佛世尊得眞天眼。常在三昧悉見諸佛國不以二相。於是嚴淨梵王及其眷屬五百梵天。皆發阿耨多羅三藐三菩提心。禮維摩詰足已忽然不現。故我不任詣彼問疾。佛告優波離。汝行詣維摩詰問疾。優波離白佛言。世尊。我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念昔者有二比丘犯律行以爲恥。不敢問佛來問我言。唯優波離。我等犯律誠以爲恥。不敢問佛。願解疑悔得免斯咎。我即爲其如法解說。時維摩詰來謂我言。唯優波離。無重增此二比丘罪。當直除滅勿擾其心。所以者何。彼罪性不在內不在外不在中間。如佛所說。心垢故衆生垢。心淨故衆生淨。心亦不在內不在外不在中間。如其心然。罪垢亦然。諸法亦然。不出於如。如優波離。以心相得解脫時。寧有垢不。我言不也。維摩詰言。一切衆生心相無垢亦復如是。唯優波離。妄想是垢。無妄想是淨。顚倒是垢。無顚倒是淨。取我是垢。不取我是淨。優波離。一切法生滅不住。如幻如電。諸法不相待。乃至一念不住。諸法皆妄見。如夢如炎如水中月如鏡中像以妄想生。其知此者是名奉律。其

我下三本俱無卽字

出上三本俱有夫字

仁同作人

其下同無當有何惱四字慚明作漸

知此者是名善解。於是二比丘言。上智哉。是優波離所不能及。持律之上而不能說。我卽答言。自捨如來未有聲聞及菩薩能制其樂說之辯。其智慧明達爲若此也。時二比丘疑悔卽除。發阿耨多羅三藐三菩提心。作是願言。令一切衆生皆得是辯。故我不任詣彼問疾。佛告羅睺羅。汝行詣維摩詰問疾。羅睺羅白佛言。世尊。我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念昔時毗耶離諸長者子。來詣我所稽首作禮問我言。唯羅睺羅。汝佛之子。捨轉輪王位出家爲道。其出家者有何等利。我卽如法爲說出家功德之利。時維摩詰來謂我言。唯羅睺羅。不應說出家功德之利。所以者何。無利無功德是爲出家。有爲法者可說有利有功德。夫出家者爲無爲法。無爲法中無利無功德。羅睺羅。出家者無彼無此亦無中間。離六十二見處於涅槃。智者所受聖所行處。降伏衆魔度五道。淨五眼得五力立五根。不惱於彼。離衆雜惡摧諸外道。超越假名出淤泥。無繫著無我所。無所受無擾亂。內懷喜護彼意。隨禪定離衆過。若能如是是眞出家。於是維摩詰語諸長者子。汝等於正法中宜共出家。所以者何。佛世難値。諸長者子言。居士。我聞佛言。父母不聽不得出家。維摩詰言。然。汝等便發阿耨多羅三藐三菩提心。是卽出家。是卽具足。爾時三十二長者子。皆發阿耨多羅三藐三菩提心。故我不任詣彼問疾。佛告阿難。汝行詣維摩詰問疾。阿難白佛言。世尊。我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念昔時世尊身小有疾當用牛乳。我卽持鉢詣大婆羅門家門下立。時維摩詰來謂我言。唯阿難。何爲晨朝持鉢住此。我言。居士。世尊身小有疾當用牛乳。故來至此。維摩詰言。止止阿難。莫作是語。如來身者金剛之體。諸惡已斷衆善普會。當有何疾當有何惱。默往阿難。勿謗如來。莫使異人聞此麤言。無令大威德諸天及他方淨土諸來菩薩得聞斯語。阿難。轉輪聖王以少福故尙得無病。豈況如來無量福會普勝者哉。行矣阿難。勿使我等受斯恥也。外道梵志若聞此語當作是念。何名爲師。自疾不能救而能救諸疾。仁可密速去勿使人聞。當知阿難。諸如來身卽是法身非思欲身。佛爲世尊過於三界。佛身無漏諸漏已盡。佛身無爲不墮諸數。如此之身當有何疾當有何惱。時我世尊實懷慚愧。得無近佛而謬聽耶。卽聞空中聲曰。阿難。如居士言。但爲佛出五濁惡世。現行斯法度脫衆生。行矣阿難。取乳勿慚。世尊。維摩詰智慧辯才爲若此也。是故不任詣彼問疾。如是五百大弟子。各各向佛說其本緣。稱述維摩詰所言。皆曰不任詣彼問疾

應三本俱作當

維摩詰所說經菩薩品第四

於是佛告彌勒菩薩。汝行詣維摩詰問疾。彌勒白佛言。世尊。我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念我昔爲兜率天王及其眷屬。說不退轉地之行。時維摩詰來謂我言。彌勒。世尊授仁者記一生當得阿耨多羅三藐三菩提。爲用何生得受記乎。過去耶未來耶現在耶。若過去生過去生已滅。若未來生未來生未至。若現在生現在生無住。如佛所說。比丘汝今卽時亦生亦老亦滅。若以無生得受記者。無生卽是正位。於正位中亦無受記。亦無得阿耨多羅三藐三菩提。云何彌勒受一生記乎。爲從如生得受記耶。爲從如滅得受記耶。若以如生得受記者如無有生。若以如滅得受記者如無有滅。一切衆生皆如也。一切法亦如也。衆聖賢亦如也。至於彌勒亦如也。若彌勒得受記者。一切衆生亦應受記。所以者何。夫如者不二不異。若彌勒得阿耨多羅三藐三菩提者。一切衆生皆亦應得。所以者何。一切衆生卽菩提相。若彌勒得滅度者。一切衆生亦應滅度。所以者何。諸佛知一切衆生畢竟寂滅卽涅槃相不復更滅。是故彌勒。無以此法誘諸天子。實無發阿耨多羅三藐三菩提心者。亦無退者。彌勒當令此諸天子捨於分別菩提之見。所以者何。菩提者。不可以身得。不可以心得。寂滅是菩提滅諸相故。不觀是菩提離諸緣故。不行是菩提無憶念故。斷是菩提捨諸見故。離是菩提離諸妄想故。障是菩提障諸願故。不入是菩提無貪著故。順是菩提順於如故。住是菩提住法性故。至是菩提至實際故。不二是菩提離意法故。等是菩提等虛空故。無爲是菩提無生住滅故。知是菩提了衆生心行故。不會是菩提諸入不會故。不合是菩提離煩惱習故。無處是菩提無形色故。假名是菩提名字空故。如化是菩提無取捨故。無亂是菩提常自靜故。禪寂是菩提性清淨故。無取是菩提離攀緣故。無異是菩提諸法等故。無比是菩提無可喩故。微妙是菩提諸法難知故。世尊。維摩詰說是法時。二百天子得無生法忍。故我不任詣彼問疾。佛告光嚴童子。汝行詣維摩詰問疾。光嚴白佛言。世尊。我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念我昔出毘耶離大城。時維摩詰方入城。我卽爲作禮而問言。居士從何所來。答我言。吾從道場來。我問道場者何所是。答曰。直心是道場無虛假故。發行是道場能辦事故。深心是道場增益功德故。

退同作怠

諦上同有四字

人宋作天

養同作仰

嚴上宋明並有莊字同元本同字

菩提心是道場無錯謬故。布施是道場不望報故。持戒是道場得願具故。忍辱是道場於諸衆生心無礙故。精進是道場不懈退故。禪定是道場心調柔故。智慧是道場現見諸法故。慈是道場等衆生故。悲是道場忍疲苦故。喜是道場悅樂法故。捨是道場憎愛斷故。神通是道場成就六通故。解脫是道場能背捨故。方便是道場教化衆生故。四攝是道場攝衆生故。多聞是道場如聞行故。伏心是道場正觀諸法故。三十七品是道場捨有爲法故。諦是道場不誑世間故。緣起是道場無明乃至老死皆無盡故。諸煩惱是道場知如實故。衆生是道場知無我故。一切法是道場知諸法空故。降魔是道場不傾動故。三界是道場無所趣故。師子吼是道場無所畏故。力無畏不共法是道場無諸過故。三明是道場無餘礙故。一念知一切法是道場成就一切智故。如是善男子。菩薩若應諸波羅蜜教化衆生。諸有所作舉足下足。當知皆從道場來住於佛法矣。說是法時五百天人皆發阿耨多羅三藐三菩提心。故我不任詣彼問疾。佛告持世菩薩。汝行詣維摩詰問疾。持世白佛言。世尊。我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念我昔住於靜室。時魔波旬從萬二千天女。狀如帝釋。鼓樂絃歌來詣我所。與其眷屬稽首我足。合掌恭敬於一面立。我意謂是帝釋。而語之言。善來憍尸迦。雖福應有不當自恣。當觀五欲無常以求善本。於身命財而修堅法。即語我言。正士受是萬二千天女可備掃灑。我言。憍尸迦。無以此非法之物要我沙門釋子。此非我宜。所言未訖時維摩詰來謂我言。非帝釋也。是爲魔來嬈固汝耳。即語魔言。是諸女等可以與我。如我應受。魔即驚懼念。維摩詰將無惱我。欲隱形去而不能隱。盡其神力亦不得去。即聞空中聲曰。波旬。以女與之乃可得去。魔以畏故俛仰而與。爾時維摩詰語諸女言。魔以汝等與我。今汝皆當發阿耨多羅三藐三菩提心。即隨所應而爲說法令發道意。復言。汝等已發道意。有法樂可以自娛。不應復樂五欲樂也。天女即問。何謂法樂。答言。樂常信佛。樂欲聽法。樂供養衆。樂離五欲。樂觀五陰如怨賊。樂觀四大如毒蛇。樂觀內入如空聚。樂隨護道意。樂饒益衆生。樂敬養師。樂廣行施。樂堅持戒。樂忍辱柔和。樂勤集善根。樂禪定不亂。樂離垢明慧。樂廣菩提心。樂降伏衆魔。樂斷諸煩惱。樂淨佛國土。樂成就相好故修諸功德。樂嚴道場。樂聞深法不畏。樂三脫門不樂非時。樂近同學。樂於非同學中心無恚礙。樂將護惡知識。樂親近善知識。樂心喜清淨。樂修無量道品之法。是爲菩薩法樂。於是波旬告諸女言。

我欲與汝俱還天宮。諸女言。以我等與此居士。有法樂我等甚樂。不復樂五欲樂也。魔言。居士可捨此女。一切所有施於彼者。是為菩薩。維摩詰言。我已捨矣。汝便將去。令一切衆生得法願具足。於是諸女問維摩詰。我等云何止於魔宮。維摩詰言。諸姊。有法門名無盡燈。汝等當學。無盡燈者。譬如一燈然百千燈。冥者皆明明終不盡。如是諸姊。夫一菩薩開導百千衆生。令發阿耨多羅三藐三菩提心。於其道意亦不滅盡。隨所說法而自增益一切善法。是名無盡燈也。汝等雖住魔宮。以是無盡燈。令無數天子天女發阿耨多羅三藐三菩提心者。為報佛恩。亦大饒益一切衆生。爾時天女。頭面禮維摩詰足。隨魔還宮。忽然不現。世尊。維摩詰有如是自在神力智慧辯才。故我不任詣彼問疾。佛告長者子善德。汝行詣維摩詰問疾。善德白佛言。世尊我不堪任詣彼問疾。所以者何。憶念我昔自於父舍設大施會。供養一切沙門婆羅門及諸外道貧窮下賤孤獨乞人。期滿七日。時維摩詰來入會中。謂我言。長者子。夫大施會不當如汝所設。當為法施之會。何用是財施會為。我言。居士。何謂法施之會。答曰。法施會者。無前無後一時供養一切衆生。是名法施之會。曰何謂也。謂以菩提起於慈心。以救衆生起大悲心。以持正法起於喜心。以攝智慧行於捨心。以攝慳貪起檀波羅蜜。以化犯戒起尸羅波羅蜜。以無我法起羼提波羅蜜。以離身心相起毘梨耶波羅蜜。以菩提相起禪波羅蜜。以一切智起般若波羅蜜。教化衆生而起於空。不捨有為法而起無相。示現受生而起無作。護持正法起方便力。以度衆生起四攝法。以敬事一切起除慢法。於身命財起三堅法。於六念中起思念法。於六和敬起質直心。正行善法起於淨命。心淨歡喜起近賢聖。不憎惡人起調伏心。以出家法起於深心。以如說行起於多聞。以無諍法起空閑處。趣向佛慧起於宴坐。解衆生縛起修行地。以具相好及淨佛土起福德業。知一切衆生心念如應說法起於智業。知一切法不取不捨入一相門起於慧業。斷一切煩惱一切障礙一切不善法起一切善業。以得一切智慧一切善法起於一切助佛道法。如是善男子。是為法施之會。若菩薩住是法施會者。為大施主。亦為一切世間福田。世尊。維摩詰說是法時。婆羅門衆中二百人皆發阿耨多羅三藐三菩提心。我時心得清淨歎未曾有。稽首禮維摩詰足。即解瓔珞價直百千以上之。不肯取。我言。居士。願必納受隨意所與。維摩詰乃受瓔珞分作二分。持一分施此會中一最下乞人。持一分奉彼難勝如來。一切衆會

會下三本俱無答曰二字

憎同作增

已下同有又字

皆見光明國土難勝如來。又見珠瓔在彼佛上變成四柱寶臺四面嚴飾不相障蔽。時維摩詰。現神變已作是言。若施主等心施一最下乞人。猶如如來福田之相。無所分別。等于大悲不求果報。是則名曰具足法施。城中一最下乞人。見是神力聞其所說。皆發阿耨多羅三藐三菩提心。故我不任詣彼問疾。如是諸菩薩各各向佛說其本緣。稱述維摩詰所言。皆曰不任詣彼問疾

經題詰下同有所說二字

維摩詰經卷上

菩薩品第四

維摩詰所説經卷中

〔麗在〈宋樹〉〈元白〉〈明方〉〕

姚秦三藏鳩摩羅什譯

文殊師利問疾品第五

爾時佛告文殊師利。汝行詣維摩詰問疾。文殊師利白佛言。世尊。彼上人者難爲詶對。深達實相善説法要。辯才無滯智慧無礙。一切菩薩法式悉知。諸佛祕藏無不得入。降伏衆魔遊戲神通。其慧方便皆已得度。雖然當承佛聖旨詣彼問疾。於是衆中諸菩薩大弟子釋梵四天王等咸作是念。今二大士文殊師利維摩詰共談。必説妙法。即時八千菩薩五百聲聞百千天人皆欲隨從。於是文殊師利與諸菩薩大弟子衆及諸天人恭敬圍遶入毘耶離大城。爾時長者維摩詰心念。今文殊師利與大衆俱來。即以神力空其室內。除去所有及諸侍者。唯置一牀以疾而臥。文殊師利既入其舍。見其室空無諸所有獨寢一牀。時維摩詰言。善來文殊師利。不來相而來。不見相而見。文殊師利言。如是居士。若來已更不來。若去已更不去。所以者何。來者無所從來。去者無所至。所可見者更不可見。且置是事。居士。是疾寧可忍不。療治有損不至增乎。世尊慇懃致問無量。居士。是疾何所因起。其生久如。當云何滅。維摩詰言。從癡有愛則我病生。以一切衆生病是故我病。若一切衆生病滅則我病滅。所以者何。菩薩爲衆生故入生死。有生死則有病。若衆生得離病者則菩薩無復病。譬如長者唯有一子。其子得病父母亦病。若子病愈父母亦愈。菩薩如是。於諸衆生愛之若子。衆生病則菩薩病。衆生病愈菩薩亦愈。又言。是疾何所因起。菩薩病者以大悲起。文殊師利言。居士。此室何以空無侍者。維摩詰言。諸佛國土亦復皆空。又問。以何爲空。答曰。以空空。又問。空何用空。答曰。以無分別空故空。又問。空可分別耶。答曰。分別亦空。又問。空當於何求。答曰。當於六十二見中求。又問。六十二見當於何求。答曰。當於諸佛解脱中求。又問。諸佛解脱當於何求。答曰。當於一切衆生心行

經題中下宋元俱有一名不可思議解脱八字其中脱元作説次卷亦同

王下三本俱無等字

寢宋作寑

生下三本俱有得不二字〇滅明作者

〇病三本俱作疾

是卽元明俱作卽是

謂下宋[illegible][illegible]字

中求。又仁所問何無侍者。一切衆魔及諸外道皆吾侍也。所以者何。衆魔者樂生死。菩薩於生死而不捨。外道者樂諸見。菩薩於諸見而不動。文殊師利言。居士。所疾爲何等相。維摩詰言。我病無形不可見。又問。此病身合耶心合耶。答曰。非身合身相離故。亦非心合心如幻故。又問。地大水大火大風大。於此四大何大之病。答曰。是病非地大亦不離地大。水火風大亦復如是。而衆生病從四大起。以其有病是故我病。爾時文殊師利問維摩詰言。菩薩應云何慰喩有疾菩薩。維摩詰言。說身無常不說厭離於身。說身有苦不說樂於涅槃。說身無我而說教導衆生。說身空寂不說畢竟寂滅。說悔先罪而不說入於過去。以己之疾愍於彼疾。當識宿世無數劫苦。當念饒益一切衆生。憶所修福念於淨命。勿生憂惱常起精進。當作醫王療治衆病。菩薩應如是慰喩有疾菩薩令其歡喜。文殊師利言。居士。有疾菩薩云何調伏其心。維摩詰言。有疾菩薩應作是念。今我此病皆從前世妄想顚倒諸煩惱生。無有實法。誰受病者。所以者何。四大合故假名爲身。四大無主身亦無我。又此病起皆由著我。是故於我不應生著。旣知病本卽除我想及衆生想。當起法想。應作是念。但以衆法合成此身。起唯法起滅唯法滅。又此法者各不相知。起時不言我起。滅時不言我滅。彼有疾菩薩爲滅法想。當作是念。此法想者亦是顚倒。顚倒者是卽大患。我應離之。云何爲離。離我我所。云何離我我所。謂離二法。云何離二法。謂不念內外諸法行於平等。云何平等。謂我等涅槃等。所以者何。我及涅槃此二皆空。以何爲空。但以名字故空。如此二法無決定性。得是平等無有餘病。唯有空病空病亦空。是有疾菩薩以無所受而受諸受。未具佛法亦不滅受而取證也。設身有苦念惡趣衆生起大悲心。我旣調伏亦當調伏一切衆生。但除其病而不除法。爲斷病本而教導之。何謂病本。謂有攀緣。從有攀緣則爲病本。何所攀緣。謂之三界。云何斷攀緣。以無所得。若無所得則無攀緣。何謂無所得。謂離二見。何謂二見。謂內見外見是無所得。文殊師利。是爲有疾菩薩調伏其心。爲斷老病死苦是菩薩菩提。若不如是已所修治爲無慧利。譬如勝怨乃可爲勇。如是兼除老病死者菩薩之謂也。彼有疾菩薩應復作是念。如我此病非眞非有。衆生病亦非眞非有。作是觀時。於諸衆生若起愛見大悲卽應捨離。所以者何。菩薩斷除客塵煩惱而起大悲。愛見悲者則於生死有疲厭心。若能離此無有疲厭。在在所生不爲愛見之所覆也。所生無縛能爲衆生說法解縛。如佛所

植三本俱作殖下同

降下三本俱有伏字

而不元明俱作不畢竟三字

聖同作正

說。若自有縛能解彼縛無有是處。若自無縛能解彼縛斯有是處。是故菩薩不應起縛。何謂縛何謂解。貪著禪味是菩薩縛。以方便生是菩薩解。又無方便慧縛。有方便慧解。無慧方便縛。有慧方便解。何謂無方便慧縛。謂菩薩以愛見心。莊嚴佛土成就衆生。於空無相無作法中而自調伏。是名無方便慧縛。何謂有方便慧解。謂不以愛見心莊嚴佛土成就衆生。於空無相無作法中。以自調伏而不疲厭。是名有方便慧解。何謂無慧方便縛。謂菩薩住貪欲瞋恚邪見等諸煩惱。而植衆德本。是名無慧方便縛。何謂有慧方便解。謂離諸貪欲瞋恚邪見等諸煩惱。而植衆德本。迴向阿耨多羅三藐三菩提。是名有慧方便解。文殊師利。彼有疾菩薩應如是觀諸法。又復觀身無常苦空非我。是名爲慧。雖身有疾常在生死。饒益一切世不厭倦。是名方便。又復觀身身不離病病不離身。是病是身非新非故。是名爲慧。設身有疾而不永滅。是名方便。文殊師利。有疾菩薩應如是調伏其心。不住其中。亦復不住不調伏心。所以者何。若住不調伏心是愚人法。若住調伏心是聲聞法。是故菩薩不當住於調伏不調伏心。離此二法是菩薩行。在於生死不爲汙行。住於涅槃不永滅度。是菩薩行。非凡夫行非賢聖行。是菩薩行。非垢行非淨行。是菩薩行。雖過魔行而現降衆魔。是菩薩行。求一切智無非時求。是菩薩行。雖觀諸法不生而不入正位。是菩薩行。雖觀十二緣起而入諸邪見。是菩薩行。雖攝一切衆生而不愛著。是菩薩行。雖樂遠離而不依身心盡。是菩薩行。雖行三界而不壞法性。是菩薩行。雖行於空而植衆德本。是菩薩行。雖行無相而度衆生。是菩薩行。雖行無作而現受身。是菩薩行。雖行無起而起一切善行。是菩薩行。雖行六波羅蜜而遍知衆生心心數法。是菩薩行。雖行六通而不盡漏。是菩薩行。雖行四無量心而不貪著生於梵世。是菩薩行。雖行禪定解脫三昧而不隨禪生。是菩薩行。雖行四念處而不永離身受心法。是菩薩行。雖行四正勤而不捨身心精進。是菩薩行。雖行四如意足而得自在神通。是菩薩行。雖行五根而分別衆生諸根利鈍。是菩薩行。雖行五力而樂求佛十力。是菩薩行。雖行七覺分而分別佛之智慧。是菩薩行。雖行八聖道而樂行無量佛道。是菩薩行。雖行止觀助道之法而不畢竟隨於寂滅。是菩薩行。雖行諸法不生不滅而以相好莊嚴其身。是菩薩行。雖現聲聞辟支佛威儀而不捨佛法。是菩薩行。雖隨諸法究竟淨相而隨所應爲現其身。是菩薩行。雖觀諸佛國土永寂如空而現種種清淨佛土。是菩薩

行。雖得佛道轉于法輪入於涅槃而不捨於菩薩之道。是菩薩行。說是語時文殊師利所將大衆。其中八千天子皆發阿耨多羅三藐三菩提心

維摩詰所說經不思議品第六

爾時舍利弗。見此室中無有牀座。作是念。斯諸菩薩大弟子衆當於何坐。長者維摩詰知其意。語舍利弗言。云何仁者。爲法來耶。求牀座耶。舍利弗言。我爲法來非爲牀座。維摩詰言。唯舍利弗。夫求法者不貪軀命。何況牀座。夫求法者。非有色受想行識之求。非有界入之求。非有欲色無色之求。唯舍利弗。夫求法者。不著佛求不著法求不著衆求。夫求法者。無見苦求無斷集求。無造盡證修道之求。所以者何。法無戲論。若言我當見苦斷集證滅修道。是則戲論非求法也。唯舍利弗。法名寂滅。若行生滅是求生滅非求法也。法名無染。若染於法乃至涅槃。是則染著非求法也。法無行處。若行於法是則行處非求法也。法無取捨。若取捨法是則取捨非求法也。法無處所。若著處所是則著處非求法也。法名無相。若隨相識是則求相非求法也。法不可住。若住於法是則住法非求法也。法不可見聞覺知。若行見聞覺知。是則見聞覺知非求法也。法名無爲。若行有爲是求有爲非求法也。是故舍利弗。若求法者。於一切法應無所求。說是語時五百天子。於諸法中得法眼淨。爾時長者維摩詰問文殊師利。仁者遊於無量千萬億阿僧祇國。何等佛土有好上妙功德成就師子之座。文殊師利言。居士。東方度三十六恒河沙國有世界。名須彌相。其佛號須彌燈王。今現在。彼佛身長八萬四千由旬。其師子座高八萬四千由旬嚴飾第一。於是長者維摩詰現神通力。卽時彼佛遣三萬二千師子座高廣嚴淨。來入維摩詰室。諸菩薩大弟子釋梵四天王等昔所未見。其室廣博悉皆包容三萬二千師子座。無所妨礙。於毘耶離城及閻浮提四天下。亦不迫迮悉見如故。爾時維摩詰語文殊師利。就師子座。與諸菩薩上人俱坐。當自立身如彼座像。其得神通菩薩卽自變形爲四萬二千由旬坐師子座。諸新發意菩薩及大弟子皆不能昇。爾時維摩詰語舍利弗。就師子座。舍利弗言。居士。此座高廣吾不能昇。維摩詰言。唯舍利弗。爲須彌燈王如來作禮乃可得坐。於是新發意菩薩及大弟子。卽爲須彌

求明作爲

仁上元有古字

子下元明俱有之字

住不三本俱作不可○相元明俱作性○修宋作脩○恒下三本俱無河字○延同作演

一下元明俱有切字

王上三本俱有聖字

是同作此

燈王如來作禮。便得坐師子座。舍利弗言。居士。未曾有也。如是小室乃容受此高廣之座。於毘耶離城無所妨礙。又於閻浮提聚落城邑及四天下諸天龍王鬼神宮殿。亦不迫迮。維摩詰言。唯舍利弗。諸佛菩薩有解脫名不可思議。若菩薩住是解脫者。以須彌之高廣內芥子中無所增減。須彌山王本相如故。而四天王忉利諸天。不覺不知己之所入。唯應度者乃見須彌入芥子中。是名住不思議解脫法門。又以四大海水入一毛孔。不嬈魚鼈黿鼉水性之屬。而彼大海本相如故。諸龍鬼神阿修羅等。不覺不知己之所入。於此衆生亦無所嬈。又舍利弗。住不可思議解脫菩薩。斷取三千大千世界。如陶家輪著右掌中。擲過恒河沙世界之外。其中衆生不覺不知己之所往。又復還置本處。都不使人有往來想。而此世界本相如故。又舍利弗。或有衆生樂久住世而可度者。菩薩即延七日以爲一劫。令彼衆生謂之一劫。或有衆生不樂久住而可度者。菩薩即促一劫以爲七日。令彼衆生謂之七日。又舍利弗。住不可思議解脫菩薩。以一切佛土嚴飾之事。集在一國示於衆生。又菩薩以一佛土衆生置之右掌。飛到十方遍示一切。而不動本處。又舍利弗。十方衆生供養諸佛之具。菩薩於一毛孔皆令得見。又十方國土所有日月星宿。於一毛孔普使見之。又舍利弗。十方世界所有諸風。菩薩悉能吸著口中而身無損。外諸樹木亦不摧折。又十方世界劫盡燒時。以一切火內於腹中。火事如故而不爲害。又於下方過恒河沙等諸佛世界。取一佛土擧著上方。過恒河沙無數世界。如持針鋒擧一棗葉而無所嬈。又舍利弗。住不可思議解脫菩薩。能以神通現作佛身。或現辟支佛身。或現聲聞身。或現帝釋身。或現梵王身。或現世主身。或現轉輪王身。又十方世界所有衆聲。上中下音皆能變之令作佛聲。演出無常苦空無我之音。及十方諸佛所說種種之法。皆於其中普令得聞。舍利弗。我今略說菩薩不可思議解脫之力。若廣說者窮劫不盡。是時大迦葉。聞說菩薩不可思議解脫法門。歎未曾有。謂舍利弗。譬如有人於盲者前現衆色像非彼所見。一切聲聞聞是不可思議解脫法門。不能解了爲若此也。智者聞是。其誰不發阿耨多羅三藐三菩提心。我等何爲永絕其根。於此大乘已如敗種。一切聲聞聞是不可思議解脫法門。皆應號泣聲震三千大千世界。一切菩薩應大欣慶頂受此法。若有菩薩信解不可思議解脫法門者。一切魔衆無如之何。大迦葉說是語時。三萬二千天子皆發阿耨多羅三藐三菩提心。爾時維摩詰語大迦

業。仁者。十方無量阿僧祇世界中作魔王者。多是住不可思議解脫菩薩。以方便力敎化衆生現作魔王。又迦葉。十方無量菩薩。或有人從乞手足耳鼻頭目髓腦血肉皮骨聚落城邑妻子奴婢象馬車乘金銀琉璃硨磲碼碯珊瑚琥珀眞珠珂貝衣服飮食。如此乞者多是住不可思議解脫菩薩。以方便力而往試之令其堅固。所以者何。住不可思議解脫菩薩。有威德力故現行逼迫。示諸衆生如是難事。凡夫下劣無有力勢。不能如是逼迫菩薩。譬如龍象蹴踏非驢所堪。是名住不可思議解脫菩薩智慧方便之門

維摩詰所說經觀衆生品第七

爾時文殊師利問維摩詰言。菩薩云何觀於衆生。維摩詰言。譬如幻師見所幻人。菩薩觀衆生爲若此。如智者見水中月。如鏡中見其面像。如熱時燄。如呼聲響。如空中雲。如水聚沫。如水上泡。如芭蕉堅。如電久住。如第五大。如第六陰。如第七情。如十三入。如十九界。菩薩觀衆生爲若此。如無色界色。如燋穀牙。如須陀洹身見。如阿那含入胎。如阿羅漢三毒。如得忍菩薩貪恚毀禁。如佛煩惱習。如盲者見色。如入滅盡定出入息。如空中鳥跡。如石女兒。如化人起煩惱。如夢所見已寤。如滅度者受身。如無烟之火。菩薩觀衆生爲若此。文殊師利言。若菩薩作是觀者。云何行慈。維摩詰言。菩薩作是觀已自念。我當爲衆生說如斯法。是卽眞實慈也。行寂滅慈無所生故。行不熱慈無煩惱故。行等之慈等三世故。行無諍慈無所起故。行不二慈內外不合故。行不壞慈畢竟盡故。行堅固慈心無毀故。行淸淨慈諸法性淨故。行無邊慈如虛空故。行阿羅漢慈破結賊故。行菩薩慈安衆生故。行如來慈得如相故。行佛之慈覺衆生故。行自然慈無因得故。行菩提慈等一味故。行無等慈斷諸愛故。行大悲慈導以大乘故。行無厭慈觀空無我故。行法施慈無遺惜故。行持戒慈化毀禁故。行忍辱慈護彼我故。行精進慈荷負衆生故。行禪定慈不受味故。行智慧慈無不知時故。行方便慈一切示現故。行無隱慈直心淸淨故。行深心慈無雜行故。行無誑慈不虛假故。行安樂慈令得佛樂故。菩薩之慈爲若此也。文殊師利又問。何謂爲悲。答曰。菩薩所作功德。皆與一切衆生共之。何謂爲喜。答曰。有所饒益歡喜無悔。何謂爲捨。答曰。所作福祐無所悕望。文殊師利又問。生死有

力下元明俱有敎字○琉三本俱作瑠○力下宋無敎字○行上元明俱無現字○迫三本俱作踏

燄宋作焰

牙三本俱作芽

煩上三本俱無起字

大明作天
天下三本俱無女字
已宋作以
卽三本俱作則

畏菩薩當何所依。維摩詰言。菩薩於生死畏中。當依如來功德之力。文殊師利又問。菩薩欲依如來功德之力。當於何住。答曰。菩薩欲依如來功德力者。當住度脫一切衆生。又問。欲度衆生當何所除。答曰。欲度衆生除其煩惱。又問。欲除煩惱當何所行。答曰。當行正念。又問。云何行於正念。答曰。當行不生不滅。又問。何法不生何法不滅。答曰。不善不生善法不滅。又問。善不善孰爲本。答曰身爲本。又問。身孰爲本。答曰。欲貪爲本。又問。欲貪孰爲本。答曰。虛妄分別爲本。又問。虛妄分別孰爲本。答曰顚倒想爲本。又問。顚倒想孰爲本。答曰。無住爲本。又問。無住孰爲本。答曰。無住則無本。文殊師利。從無住本立一切法。時維摩詰室有一天女。見諸大人聞所說法便現其身。卽以天華散諸菩薩大弟子上。華至諸菩薩卽皆墮落。至大弟子便著不墮。一切弟子神力去華不能令去。爾時天女問舍利弗。何故去華。答曰。此華不如法是以去之。天曰。勿謂此華爲不如法。所以者何。是華無所分別。仁者自生分別想耳。若於佛法出家有所分別爲不如法。若無所分別是則如法。觀諸菩薩華不著者。已斷一切分別想故。譬如人畏時非人得其便。如是弟子畏生死故。色聲香味觸得其便也。已離畏者一切五欲無能爲也。結習未盡華著身耳。結習盡者華不著也。舍利弗言。天止此室其已久如。答曰。我止此室如耆年解脫。舍利弗言。止此久耶。天曰。耆年解脫亦何如久。舍利弗默然不答。天曰。如何耆舊大智而默。答曰。解脫者無所言說。故吾於是不知所云。天曰。言說文字皆解脫相。所以者何。解脫者不內不外不在兩間。文字亦不內不外不在兩間。是故舍利弗。無離文字說解脫也。所以者何。一切諸法是解脫相。舍利弗言。不復以離婬怒癡爲解脫乎。天曰。佛爲增上慢人。說離婬怒癡爲解脫耳。若無增上慢者。佛說婬怒癡性卽是解脫。舍利弗言。善哉善哉。天女。汝何所得以何爲證辯乃如是。天曰。我無得無證故辯如是。所以者何。若有得有證者。卽於佛法爲增上慢。舍利弗問天。汝於三乘爲何志求。天曰。以聲聞法化衆生故我爲聲聞。以因緣法化衆生故我爲辟支佛。以大悲法化衆生故我爲大乘。舍利弗。如人入瞻蔔林唯嗅瞻蔔不嗅餘香。如是若入此室。但聞佛功德之香。不樂聞聲聞辟支佛功德香也。舍利弗。其有釋梵四天王諸天龍鬼神等入此室者。聞斯上人講說正法。皆樂佛功德之香發心而出。舍利弗。吾止此室十有二年。初不聞說聲聞辟支佛法。但聞菩薩大慈大悲不可思議諸佛之法。舍利弗。此室常現八未曾有難得之

法．何等爲八．此室常以金色光照晝夜無異．不以日月所照爲明．是爲一未曾有難得之法．此室入者不爲諸垢之所惱也．是爲二未曾有難得之法．此室常有釋梵四天王他方菩薩來會不絶．是爲三未曾有難得之法．此室常說六波羅蜜不退轉法．是爲四未曾有難得之法．此室常作天人第一之樂．絃出無量法化之聲．是爲五未曾有難得之法．此室有四大藏衆寶積滿．賙窮濟乏求得無盡．是爲六未曾有難得之法．此室釋迦牟尼佛．阿彌陀佛．阿閦佛．寶德．寶炎．寶月．寶嚴．難勝．師子響．一切利成．如是等十方無量諸佛．是上人念時．卽皆爲來廣說諸佛祕要法藏．說已還去．是爲七未曾有難得之法．此室一切諸天嚴飾宮殿諸佛淨土皆於中現．是爲八未曾有難得之法．舍利弗．此室常現八未曾有難得之法．誰有見斯不思議事．而復樂於聲聞法乎．舍利弗言．汝何以不轉女身．天曰．我從十二年來．求女人相了不可得．當何所轉．譬如幻師化作幻女．若有人問何以不轉女身．是人爲正問不．舍利弗言不也．幻無定相當何所轉．天曰．一切諸法亦復如是無有定相．云何乃問不轉女身．卽時天女以神通力．變舍利弗令如天女．天自化身如舍利弗．而問言．何以不轉女身．舍利弗以天女像而答言．我今不知何轉而變爲女身．天曰．舍利弗．若能轉此女身．則一切女人亦當能轉．如舍利弗非女而現女身．一切女人亦復如是．雖現女身而非女也．是故佛說一切諸法非男非女．卽時天女還攝神力．舍利弗身還復如故．天問舍利弗．女身色相今何所在．舍利弗言．女身色相無在無不在．天曰．一切諸法亦復如是．無在無不在．夫無在無不在者佛所說也．舍利弗問天．汝於此沒當生何所．天曰．佛化所生吾如彼生．曰佛化所生非沒生也．天曰．衆生猶然無沒生也．舍利弗問天．汝久如當得阿耨多羅三藐三菩提．天曰．如舍利弗還爲凡夫．我乃當成阿耨多羅三藐三菩提．舍利弗言．我作凡夫無有是處．天曰．我得阿耨多羅三藐三菩提亦無是處．所以者何．菩提無住處．是故無有得者．舍利弗言．今諸佛得阿耨多羅三藐三菩提．已得當得如恒河沙．皆謂何乎．天曰．皆以世俗文字數故說有三世．非謂菩提有去來今．天曰．舍利弗．汝得阿羅漢道耶．曰無所得故而得．天曰．諸佛菩薩亦復如是．無所得故而得．爾時維摩詰．語舍利弗．是天女已曾供養九十二億佛已．能遊戲菩薩神通．所願具足得無生忍住不退轉．以本願故隨意能現教化衆生

賙同作周

誰元明俱作唯

佛上三本俱有諸字

維摩詰所說經佛道品第八

爾時文殊師利。問維摩詰言。菩薩云何通達佛道。維摩詰言。若菩薩行於非道。是爲通達佛道。又問。云何菩薩行於非道。答曰。若菩薩行五無間而無惱恚。至于地獄無諸罪垢。至于畜生無有無明憍慢等過。至于餓鬼而具足功德。行色無色界道不以爲勝。示行貪欲離諸染著。示行瞋恚於諸衆生無有恚閡。示行愚癡而以智慧調伏其心。示行慳貪而捨內外所有不惜身命。示行毀禁而安住淨戒。乃至小罪猶懷大懼。示行瞋恚而常慈忍。示行懈怠而懃修功德。示行亂意而常念定。示行愚癡而通達世間出世間慧。示行諂僞而善方便隨諸經義。示行憍慢而於衆生猶如橋梁。示行諸煩惱而心常清淨。示入於魔而順佛智慧不隨他教。示入聲聞而爲衆生說未聞法。示入辟支佛而成就大悲教化衆生。示入貧窮而有寶手功德無盡。示入形殘而具諸相好以自莊嚴。示入下賤而生佛種姓中具諸功德。示入羸劣醜陋而得那羅延身。一切衆生之所樂見。示入老病而永斷病根超越死畏。示有資生而恒觀無常實無所貪。示有妻妾婇女而常遠離五欲淤泥。現於訥鈍而成就辯才總持無失。示入邪濟而以正濟度諸衆生。現遍入諸道而斷其因緣。現於涅槃而不斷生死。文殊師利。菩薩能如是行於非道。是爲通達佛道。於是維摩詰問文殊師利。何等爲如來種。文殊師利言。有身爲種。無明有愛爲種。貪恚癡爲種。四顚倒爲種。五蓋爲種。六入爲種。七識處爲種。八邪法爲種。九惱處爲種。十不善道爲種。以要言之。六十二見及一切煩惱皆是佛種。曰何謂也。答曰。若見無爲入正位者。不能復發阿耨多羅三藐三菩提心。譬如高原陸地不生蓮華。卑濕淤泥乃生此華。如是見無爲法入正位者。終不復能生於佛法。煩惱泥中乃有衆生起佛法耳。又如殖種於空終不得生。糞壤之地乃能滋茂。如是入無爲正位者不生佛法。起於我見如須彌山。猶能發于阿耨多羅三藐三菩提心生佛法矣。是故當知一切煩惱爲如來種。譬如不下巨海不能得無價寶珠。如是不入煩惱大海。則不能得一切智寶。爾時大迦葉歎言。善哉善哉文殊師利。快說此語誠如所言。塵勞之儔爲如來種。我等今者不復堪任發阿耨多羅三藐三菩提心。乃至五無間罪。猶能發意生於佛法。而今我等永不能發。譬如根敗之士。其於

閡同作礙
懃同作勤
梁宋元俱作樑
姓三本俱作性
妾元作妄　婇三本俱作綵
殖三本俱作植
今明作令

五欲不能復利。如是聲聞諸結斷者。於佛法中無所復益。永不志願。是故文殊師利。凡夫於佛法有反復。而聲聞無也。所以者何。凡夫聞佛法能起無上道心不斷三寶。正使聲聞終身聞佛法力無畏等。永不能發無上道意。爾時會中有菩薩名普現色身。問維摩詰言。居士。父母妻子親戚眷屬吏民知識悉爲是誰。奴婢僮僕象馬車乘皆何所在。於是維摩詰以偈答曰

智度菩薩母　方便以爲父　一切衆導師　無不由是生　法喜以爲妻　慈悲心爲女　善心誠實男
畢竟空寂舍　弟子衆塵勞　隨意之所轉　道品善知識　由是成正覺　諸度法等侶　四攝爲伎女
歌詠誦法言　以此爲音樂　總持之園苑　無漏法林樹　覺意淨妙華　解脫智慧果　八解之浴池
定水湛然滿　布以七淨華　浴此無垢人　象馬五通馳　大乘以爲車　調御以一心　遊於八正路
相具以嚴容　衆好飾其姿　慚愧之上服　深心爲華鬘　富有七財寶　教授以滋息　如所說修行
迴向爲大利　四禪爲牀座　從於淨命生　多聞增智慧　以爲自覺音　甘露法之食　解脫味爲漿
淨心以澡浴　戒品爲塗香　摧滅煩惱賊　勇健無能踰　降伏四種魔　勝幡建道場　雖知無起滅
示彼故有生　悉現諸國土　如日無不見　供養於十方　無量億如來　諸佛及己身　無有分別想
雖知諸佛國　及與衆生空　而常修淨土　教化於群生　諸有衆生類　形聲及威儀　無畏力菩薩
一時能盡現　覺知衆魔事　而示隨其行　以善方便智　隨意皆能現　或示老病死　成就諸群生
了知如幻化　通達無有礙　或現劫盡燒　天地皆洞然　衆人有常想　照令知無常　無數億衆生
俱來請菩薩　一時到其舍　化令向佛道　經書禁呪術　工巧諸伎藝　盡現行此事　饒益諸群生
世間衆道法　悉於中出家　因以解人惑　而不墮邪見　或作日月天　梵王世界主　或時作地水
或復作風火　劫中有疾疫　現作諸藥草　若有服之者　除病消衆毒　劫中有飢饉　現身作飲食
先救彼飢渴　却以法語人　劫中有刀兵　爲之起慈心　化彼諸衆生　令住無諍地　若有大戰陣
立之以等力　菩薩現威勢　降伏使和安　一切國土中　諸有地獄處　輒往到于彼　勉濟其苦惱

伎元明俱作技
心三本俱作悲

一切國土中　畜生相食噉　皆現生於彼　爲之作利益　示受於五欲　亦復現行禪　令魔心憒亂
不能得其便　火中生蓮華　是可謂希有　在欲而行禪　希有亦如是　或現作婬女　引諸好色者
先以欲鉤牽　後令入佛道　或爲邑中主　或作商人導　國師及大臣　以祐利衆生　諸有貧窮者
現作無盡藏　因以勸導之　令發菩提心　我心憍慢者　爲現大力士　消伏諸貢高　令住無上道
其有恐懼衆　居前而慰安　先施以無畏　後令發道心　或現離婬欲　爲五通仙人　開導諸群生
令住戒忍慈　見須供事者　現爲作僮僕　既悅可其意　乃發以道心　隨彼中所須　得入於佛道
以善方便力　皆能給足之　如是道無量　所行無有涯　智慧無邊際　度脫無數衆　假令一切佛
於無量億劫　讃歎其功德　猶尚不能盡　誰聞如是法　不發菩提心　除彼不肖人　癡冥無智者

維摩詰所說經入不二法門品第九

爾時維摩詰謂衆菩薩言。諸仁者。云何菩薩入不二法門。各隨所樂說之。會中有菩薩名法自在。說言諸仁者生滅爲二。法本不生今則無滅。得此無生法忍。是爲入不二法門。德守菩薩曰。我我所爲二。因有我故便有我所。若無有我則無我所。是爲入不二法門。不眴菩薩曰。受不受爲二。若法不受則不可得。以不可得故無取無捨無作無行。是爲入不二法門。德頂菩薩曰。垢淨爲二。見垢實性則無淨相。順於滅相。是爲入不二法門。善宿菩薩曰。是動是念爲二。不動則無念。無念則無分別。通達此者。是爲入不二法門。善眼菩薩曰。一相無相爲二。若知一相卽是無相。亦不取無相入於平等。是爲入不二法門。妙臂菩薩曰。菩薩心聲聞心爲二。觀心相空如幻化者。無菩薩心無聲聞心。是爲入不二法門。弗沙菩薩曰。善不善爲二。若不起善不善。入無相際而通達者。是爲入不二法門。師子菩薩曰。罪福爲二。若達罪性則與福無異。以金剛慧決了此相無縛無解者。是爲入不二法門。師子意菩薩曰。有漏無漏爲二。若得諸法等則不起漏不漏想。不著於相亦不住無相。是爲入不二法門。淨解菩薩曰。有爲無爲爲二。若離一切數則心如虛空。以淸淨慧無所礙者。是爲入不二法門。那羅延菩薩曰。世間出世間爲二。世間

道同作智

量同作數

會宋作舍

則元明俱作卽

意宋作惠
生同作燃明作然

性空即是出世間。於其中不入不出不溢不散。是爲入不二法門。善意菩薩曰。生死涅槃爲二。若見生死性則無生死、無縛無解、不生不滅、如是解者、是爲入不二法門、現見菩薩曰、盡不盡爲二、法若究竟盡若不盡皆是無盡相、無盡相即是空、空則無有盡不盡相、如是入者、是爲入不二法門、普守菩薩曰、我無我爲二、我尚不可得非我何可得、見我實性者不復起二、是爲入不二法門、電天菩薩曰、明無明爲二、無明實性即是明、明亦不可取離一切數、於其中平等無二者、是爲入不二法門、喜見菩薩曰、色色空爲二、色即是空非色滅空色性自空、如是受想行識識空爲二、識即是空非識滅空識性自空、於其中而通達者、是爲入不二法門、明相菩薩曰四種異空種異爲二、四種性即是空種性、如前際後際空故中際亦空、若能如是知諸種性者、是爲入不二法門、妙意菩薩曰、眼色爲二、若知眼性於色不貪不恚不癡、是名寂滅、如是耳聲鼻香舌味身觸意法爲二、若知意性於法不貪不恚不癡、是名寂滅、安住其中、是爲入不二法門、無盡意菩薩曰、布施迴向一切智爲二、布施性即是迴向一切智性、如是持戒忍辱精進禪定智慧迴向一切智爲二、智慧性即是迴向一切智性、於其中入一相者、是爲入不二法門、深慧菩薩曰、是空是無相是無作爲二、空即無相無相即無作、若空無相無作則無心意識、於一解脫門即是三解脫門者、是爲入不二法門、寂根菩薩曰、佛法衆爲二、佛即是法法即是衆、是三寶皆無爲相與虛空等、一切法亦爾、能隨此行者、是爲入不二法門、心無礙菩薩曰、身身滅爲二、身即是身滅、所以者何、見身實相者不起見身及見滅身、身與滅身無二無分別、於其中不驚不懼者、是爲入不二法門、上善菩薩曰、身口意業爲二、是三業皆無作相、身無作相即口無作相、口無作相即意無作相、是三業無作相即一切法無作相、能如是隨無作慧者、是爲入不二法門、福田菩薩曰、福行罪行不動行爲二、三行實性即是空、空則無福行無罪行無不動行、於此三行而不起者、是爲入不二法門、華嚴菩薩曰、從我起二爲二、見我實相者不起二法、若不住二法則無有識、無所識者、是爲入不二法門、德藏菩薩曰、有所得相爲二、若無所得則無取捨、無取捨者、是爲入不二法門、月上菩薩曰、闇與明爲二、無闇無明則無有二、所以者何、如入滅受想定無闇無明、一切法相亦復如是、於其中平等入者、是爲入不二法門、寶印手菩薩曰、樂涅槃不樂世間爲二、若不樂涅槃不厭世間則無有二、所以者何、若有縛則

門下宋無品字
千元作十

有解。若本無縛其誰求解。無縛無解則無樂厭。是爲入不二法門。珠頂王菩薩曰。正道邪道爲二。住正道者則不分別是邪是正。離此二者。是爲入不二法門。樂實菩薩曰。實不實爲二。實見者尚不見實何況非實。所以者何。非肉眼所見慧眼乃能見。而此慧眼無見無不見。是爲入不二法門。如是諸菩薩各各說已。問文殊師利。何等是菩薩入不二法門。文殊師利曰。如我意者。於一切法。無言無說。無示無識。離諸問答。是爲入不二法門。於是文殊師利。問維摩詰。我等各自說已。仁者當說。何等是菩薩入不二法門。時維摩詰默然無言。文殊師利歎曰。善哉善哉。乃至無有文字語言。是眞入不二法門。說是入不二法門品時。於此衆中五千菩薩。皆入不二法門。得無生法忍

維摩詰所說經卷中

譯号什下同有本品二字餘如首卷

薩下三本俱無言字

辭三本俱作詞

維摩詰所說經卷下

麗在(宋樹)(元白)(明方)

姚秦三藏鳩摩羅什譯

香積佛品第十

於是舍利弗心念。日時欲至。此諸菩薩當於何食。時維摩詰。知其意而語言。佛說八解脫。仁者受行。豈雜欲食而聞法乎。若欲食者且待須臾。當令汝得未曾有食。時維摩詰即入三昧。以神通力示諸大衆。上方界分過四十二恒河沙佛土。有國名衆香。佛号香積。今現在。其國香氣比於十方諸佛世界人天之香。最爲第一。彼土無有聲聞辟支佛名。唯有淸淨大菩薩衆。佛爲說法。其界一切皆以香作樓閣。經行香地苑園皆香。其食香氣周流十方無量世界。時彼佛與諸菩薩方共坐食。有諸天子皆号香嚴。悉發阿耨多羅三藐三菩提心。供養彼佛及諸菩薩。此諸大衆莫不目見。時維摩詰問衆菩薩。諸仁者。誰能致彼佛飯。以文殊師利威神力故咸皆默然。維摩詰言。仁此大衆無乃可恥。文殊師利曰。如佛所言勿輕未學。於是維摩詰不起于座。居衆會前化作菩薩。相好光明威德殊勝蔽於衆會。而告之曰。汝往上方界分度如四十二恒河沙佛土。有國名衆香。佛号香積。與諸菩薩方共坐食。汝往到彼如我辭曰。維摩詰稽首世尊足下。致敬無量問訊起居。少病少惱氣力安不。願得世尊所食之餘。當於娑婆世界施作佛事。令此樂小法者得弘大道。亦使如來名聲普聞。時化菩薩卽於會前昇于上方。擧衆皆見其去到衆香界禮彼佛足。又聞其言。維摩詰稽首世尊足下。致敬無量問訊起居。少病少惱氣力安不。願得世尊所食之餘。欲於娑婆世界施作佛事。使此樂小法者得弘大道。亦使如來名聲普聞。彼諸大士見化菩薩歎未曾有。今此上人從何所來。娑婆世界爲在何許。云何名爲樂小法者。卽以問佛。佛告之曰。下方度如四十二恒河沙佛土。有世界名娑婆。佛号釋迦牟尼。今現在於五濁惡世。爲樂小法衆生敷演道敎。彼有菩薩名維摩詰。住不可思

議解脫。爲諸菩薩說法。故遣化來稱揚我名幷讚此土。令彼菩薩增益功德。彼菩薩言。其人何如乃作是化。德力無畏神足若斯。佛言甚大。一切十方皆遣化往施作佛事饒益衆生。於是香積如來。以衆香鉢盛滿香飯與化菩薩。時彼九百萬菩薩俱發聲言。我欲詣娑婆世界供養釋迦牟尼佛。幷欲見維摩詰等諸菩薩衆。佛言可往。攝汝身香。無令彼諸衆生起惑著心。又當捨汝本形。勿使彼國求菩薩者而自鄙恥。又汝於彼莫懷輕賤而作礙想。所以者何。十方國土皆如虛空。又諸佛爲欲化諸樂小法者。不盡現其清淨土耳。時化菩薩既受鉢飯。與彼九百萬菩薩俱。承佛威神及維摩詰力。於彼世界忽然不現。須臾之間至維摩詰舍。時維摩詰卽化作九百萬師子之座嚴好如前。諸菩薩皆坐其上。是化菩薩以滿鉢香飯與維摩詰。飯香普薰毘耶離城及三千大千世界。時毘耶離婆羅門居士等。聞是香氣身意快然歎未曾有。於是長者主月蓋。從八萬四千人來入維摩詰舍。見其室中菩薩甚多諸師子座高廣嚴好。皆大歡喜禮衆菩薩及大弟子。却住一面。諸地神虛空神及欲色界諸天。聞此香氣亦皆來入維摩詰舍。時維摩詰。語舍利弗等諸大聲聞。仁者可食如來甘露味飯。大悲所熏無以限意食之使不消也。有異聲聞念。是飯少而此大衆人人當食。化菩薩曰。勿以聲聞小德小智稱量如來無量福慧。四海有竭此飯無盡。使一切人食揣若須彌乃至一劫猶不能盡。所以者何。無盡戒定智慧解脫解脫知見功德具足者。所食之餘。終不可盡。於是鉢飯悉飽衆會猶故不澌。其諸菩薩聲聞天人食此飯者身安快樂。譬如一切樂莊嚴國諸菩薩也。又諸毛孔皆出妙香。亦如衆香國土諸樹之香。爾時維摩詰問衆香菩薩。香積如來以何說法。彼菩薩曰。我土如來無文字說。但以衆香令諸天人得入律行。菩薩各各坐香樹下聞斯妙香。卽獲一切德藏三昧。得是三昧者。菩薩所有功德皆悉具足。彼諸菩薩問維摩詰。今世尊釋迦牟尼以何說法。維摩詰言。此土衆生剛强難化。故佛爲說剛强之語以調伏之。言是地獄是畜生是餓鬼。是諸難處。是愚人生處。是身邪行是身邪行報。是口邪行是口邪行報。是意邪行是意邪行報。是殺生是殺生報。是不與取是不與取報。是邪婬是邪婬報。是妄語是妄語報。是兩舌是兩舌報。是惡口是惡口報。是無義語是無義語報。是貪嫉是貪嫉報。是瞋惱是瞋惱報。是邪見是邪見報。是慳悋是慳悋報。是毀戒是毀戒報。是瞋恚是瞋恚報。是懈怠是懈怠報。是亂意是亂意報。是愚癡是愚癡

是宋元倶作時
熏元明倶作勳
揣同作摶
澌宋元倶作賜
明作儩

報。是結戒是持戒是犯戒。是應作是不應作。是障礙是不障礙。是得罪是離罪。是淨是垢是有漏是無漏。是邪道是正道。是有爲是無爲。是世間是涅槃。以難化之人心如猨猴故。以若干種法制御其心乃可調伏。譬如象馬憹悷不調加諸楚毒乃至徹骨然後調伏。如是剛強難化衆生故。以一切苦切之言乃可入律。彼諸菩薩聞說是已。皆曰未曾有也。如世尊釋迦牟尼佛。隱其無量自在之力。乃以貧所樂法度脫衆生。斯諸菩薩亦能勞謙。以無量大悲生是佛土。維摩詰言。此土菩薩於諸衆生大悲堅固。誠如所言。然其一世饒益衆生。多於彼國百千劫行。所以者何。此娑婆世界有十事善法。諸餘淨土之所無有。何等爲十。以布施攝貧窮。以淨戒攝毀禁。以忍辱攝瞋恚。以精進攝懈怠。以禪定攝亂意。以智慧攝愚癡。說除難法度八難者。以大乘法度樂小乘者。以諸善根濟無德者。常以四攝成就衆生。是爲十。彼菩薩曰。菩薩成就幾法。於此世界行無瘡疣生于淨土。維摩詰言。菩薩成就八法。於此世界行無瘡疣生于淨土。何等爲八。饒益衆生而不望報。代一切衆生受諸苦惱。所作功德盡以施之。等心衆生謙下無礙。於諸菩薩視之如佛。所未聞經聞之不疑。不與聲聞而相違背。不嫉彼供不高己利。而於其中調伏其心。常省己過不訟彼短。恒以一心求諸功德。是爲八法。維摩詰文殊師利。於大衆中說是法時。百千天人皆發阿耨多羅三藐三菩提心。十千菩薩得無生法忍

維摩詰所說經菩薩行品第十一

爾時佛說法於菴羅樹園。其地忽然廣博嚴事。一切衆會皆作金色。阿難白佛言。世尊。以何因緣有此瑞應。是處忽然廣博嚴事。一切衆會皆作金色。佛告阿難。是維摩詰文殊師利。與諸大衆恭敬圍遶。發意欲來。故先爲此瑞應。於是維摩詰語文殊師利。可共見佛與諸菩薩禮事供養。文殊師利言。善哉行矣。今正是時。維摩詰即以神力。持諸大衆幷師子座置於右掌。往詣佛所。到已著地。稽首佛足右遶七帀。一心合掌在一面立。其諸菩薩即皆避座稽首佛足。亦遶七帀於一面立。諸大弟子釋梵四天王等。亦皆避座稽首佛足在一面立。於是世尊如法慰問諸菩薩已各令復座。卽皆受教衆座已定。佛語舍利弗。汝見菩薩大士自在神力之所爲乎。唯然已見。於汝意云

三上明有三字

見下三字俱無悷字

爲下同有教字○見元作具

何。世尊。我覩其爲不可思議。非意所圖非度所測。爾時阿難白佛言。世尊。今所聞香自昔未有。是爲何香。佛告阿難。是彼菩薩毛孔之香。於是舍利弗語阿難言。我等毛孔亦出是香。阿難言。此所從來。曰是長者維摩詰。從衆香國取佛餘飯於舍食者。一切毛孔皆香若此。阿難問維摩詰。是香氣住當久如。維摩詰言。至此飯消。曰此飯久如當消。曰此飯勢力至于七日然後乃消。又阿難。若聲聞人未入正位食此飯者。得入正位然後乃消。已入正位食此飯者。得心解脫然後乃消。若未發大乘意食此飯者。至發意乃消。已發意食此飯者。得無生忍然後乃消。已得無生忍食此飯者。至一生補處然後乃消。譬如有藥名曰上味。其有服者身諸毒滅然後乃消。此飯如是。滅除一切諸煩惱毒然後乃消。阿難白佛言。未曾有也。世尊。如此香飯能作佛事。佛言。如是如是。阿難。或有佛土以佛光明而作佛事。有以諸菩薩而作佛事。有以佛所化人而作佛事。有以菩提樹而作佛事。有以佛衣服臥具而作佛事。有以飯食而作佛事。有以園林臺觀而作佛事。有以三十二相八十隨形好而作佛事。有以佛身而作佛事。有以虛空而作佛事。衆生應以此緣得入律行。有以夢幻影響鏡中像水中月熱時焰如是等喩而作佛事。有以音聲語言文字而作佛事。或有清淨佛土寂寞無言無說無示無識無作無爲而作佛事。如是阿難。諸佛威儀進止。諸所施爲無非佛事。阿難。有此四魔八萬四千諸煩惱門。而諸衆生爲之疲勞。諸佛卽以此法而作佛事。是名入一切諸佛法門。菩薩入此門者。若見一切淨好佛土。不以爲喜不貪不高。若見一切不淨佛土。不以爲憂不礙不沒。但於諸佛生清淨心。歡喜恭敬未曾有也。諸佛如來功德平等。爲化衆生故。而現佛土不同。阿難。汝見諸佛國土地有若干。而虛空無若干也。如是見諸佛色身有若干耳。其無礙慧無若干也。阿難。諸佛色身威相種性。戒定智慧解脫解脫知見。力無所畏不共之法。大慈大悲威儀所行。及其壽命說法教化。成就衆生淨佛國土。具諸佛法悉皆同等。是故名爲三藐三佛陀。名爲多陀阿伽度。名爲佛陀。阿難。若我廣說此三句義。汝以劫壽不能盡受。正使三千大千世界滿中衆生。皆如阿難多聞第一得念總持。此諸人等以劫之壽亦不能受。如是阿難。諸佛阿耨多羅三藐三菩提無有限量。智慧辯才不可思議。阿難白佛言。我從今已往不敢自謂以爲多聞。佛告阿難。勿起退意。所以者何。我說汝於聲聞中爲最多聞。非謂菩薩。且止阿難。其有智者不應限度諸菩薩也。一切海淵尙

軀宋元明俱作身

令宋作今

行下三本俱無於世間法四字

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

下同無法字

永下同有盡字

具三本俱作已

可測量。菩薩禪定智慧總持辯才。一切功德不可量也。阿難。汝等捨置菩薩所行。是維摩詰一時所現神通之力。一切聲聞辟支佛。於百千劫盡力變化所不能作。爾時衆香世界菩薩來者。合掌白佛言。世尊。我等初見此土生下劣想。今自悔責捨離是心。所以者何。諸佛方便不可思議。爲度衆生故。隨其所應現佛國異。唯然世尊。願賜少法。還於彼土當念如來。佛告諸菩薩。有盡無盡解脱法門。汝等當學。何謂爲盡。謂有爲法。何謂無盡。謂無爲法。如菩薩者。不盡有爲不住無爲。何謂不盡有爲。謂不離大慈不捨大悲。深發一切智心而不忽忘。教化衆生終不厭惓。於四攝法常念順行。護持正法不惜軀命。種諸善根無有疲厭。志常安住方便迴向。求法不懈説法無悋。勤供諸佛故入生死而無所畏。於諸榮辱心無憂喜。不輕未學敬學如佛。墮煩惱者令發正念。於遠離樂不以爲貴。不著己樂慶於彼樂。在諸禪定如地獄想。於生死中如園觀想。見來求者爲善師想。捨諸所有具一切智想。見毀戒人起救護想。諸波羅蜜爲父母想。道品之法爲眷屬想。發行善根無有齊限。以諸淨國嚴飾之事成己佛土。行無限施具足相好。除一切惡淨身口意。生死無數劫意而有勇。聞佛無量德志而不倦。以智慧劍破煩惱賊。出陰界入荷負衆生永使解脱。以大精進摧伏魔軍。常求無念實相智慧行。於世間法少欲知足。於出世間求之無厭。而不捨世間法。不壞威儀法而能隨俗。起神通慧引導衆生。得念總持所聞不忘。善別諸根斷衆生疑。以樂説辯演法無礙。淨十善道受人天福。修四無量開梵天道。勸請説法隨喜讃善。得佛音聲身口意善。得佛威儀深修善法所行轉勝。以大乘教成菩薩僧。心無放逸不失衆善。行如此法是名菩薩不盡有爲。何謂菩薩不住無爲。謂修學空不以空爲證。修學無相無作。不以無相無作爲證。修學無起不以無起爲證。觀於無常而不厭善本。觀世間苦而不惡生死。觀於無我而誨人不倦。觀於寂滅而不永滅。觀於遠離而身心修善。觀無所歸而歸趣善法。觀於無生而以生法荷負一切。觀於無漏而不斷諸漏。觀無所行而以行法教化衆生。觀於空無而不捨大悲。觀正法位而不隨小乘。觀諸法虚妄無牢無人無主無相。本願未滿而不虚福德禪定智慧。修如此法是名菩薩不住無爲。又具福德故不住無爲。具智慧故不盡有爲。大慈悲故不住無爲。滿本願故不盡有爲。集法藥故不住無爲。隨授藥故不盡有爲。知衆生病故不住無爲。滅衆生病故不盡有爲。諸正士菩薩以修此法。不盡有爲不住無爲。是名

盡無盡解脫法門。汝等當學。爾時彼諸菩薩聞說是法皆大歡喜。以衆妙華若干種色若干種香。散遍三千大千世界。供養於佛及此經法幷諸菩薩已。稽首佛足歎未曾有言。釋迦牟尼佛。乃能於此善巧方便。言已忽然不現還到彼國

維摩詰所說經見阿閦佛品第十二

爾時世尊問維摩詰。汝欲見如來。爲以何等觀如來乎。維摩詰言。如自觀身實相。觀佛亦然。我觀如來。前際不來後際不去今則不住。不觀色不觀色如。不觀色性。不觀受想行識。不觀識如。不觀識性。非四大起。同於虛空。六入無積。眼耳鼻舌身心已過不在三界。三垢已離順三脫門。具足三明與無明等。不一相不異相。不自相不他相。非無相非取相。不此岸不彼岸不中流。而化衆生。觀於寂滅亦不永滅。不此不彼。不以此不以彼。不可以智知。不可以識識。無晦無明無名無相。無強無弱非淨非穢。不在方不離方。非有爲非無爲。無示無說。不施不慳。不戒不犯。不忍不恚。不進不怠。不定不亂。不智不愚。不誠不欺。不來不去。不出不入。一切言語道斷。非福田非不福田。非應供養非不應供養。非取非捨。非有相非無相。同眞際等法性。不可稱不可量。過諸稱量。非大非小。非見非聞非覺非知。離衆結縛。等諸智同衆生。於諸法無分別。一切無得無失。無濁無惱。無作無起無生無滅。無畏無憂無喜無厭無著。無已有無當有無今有。不可以一切言說分別顯示。世尊。如來身爲若此。作如是觀。以斯觀者名爲正觀。若他觀者名爲邪觀。爾時舍利弗問維摩詰。汝於何沒而來生此。維摩詰言。汝所得法。有沒生乎。舍利弗言。無沒生也。若諸法無沒生相。云何問言汝於何沒而來生此。於意云何。譬如幻師幻作男女。寧沒生耶。舍利弗言。無沒生也。汝豈不聞佛說諸法如幻相乎。答曰如是。若一切法如幻相者。云何問言汝於何沒而來生此。舍利弗。沒者爲虛誑法壞敗之相。生者爲虛誑法相續之相。菩薩雖沒不盡善本。雖生不長諸惡。是時佛告舍利弗。有國名妙喜。佛號無動。是維摩詰於彼國沒而來生此。舍利弗言。未曾有也。世尊。是人乃能捨淸淨土。而來樂此多怒害處。維摩詰語舍利弗。於意云何。日光出時與冥合乎。答曰不也。日光出時卽無衆冥。維摩詰言。夫日何故行閻浮提。

三上宋無具足二字

厭下元明俱無無著二字

卽三本俱作則下同

生下三本俱無故字
此宋作大
堦三本俱作階下同○膩同作尼
持元明俱作得
取三本俱作趣

答曰欲以明照爲之除冥。維摩詰言。菩薩如是。雖生不淨佛土爲化衆生故不與愚闇而共合也。但滅衆生煩惱闇耳。是時大衆渴仰。欲見妙喜世界無動如來及其菩薩聲聞之衆。佛知一切衆會所念。告維摩詰言。善男子。爲此衆會。現妙喜國無動如來及諸菩薩聲聞之衆。衆皆欲見。於是維摩詰心念。吾當不起于座接妙喜國。鐵圍山川溪谷江河。大海泉源須彌諸山。及日月星宿。天龍鬼神梵天等宮。幷諸菩薩聲聞之衆。城邑聚落男女大小。乃至無動如來及菩提樹諸妙蓮華。能於十方作佛事者。三道寶階從閻浮提至忉利天。以此寶階諸天來下。悉爲禮敬無動如來聽受經法。閻浮提人。亦登其階。上昇忉利見彼諸天。妙喜世界成就如是無量功德。上至阿迦膩吒天。下至水際。以右手斷取如陶家輪。入此世界猶持華鬘示一切衆。作是念已入於三昧現神通力。以其右手斷取妙喜世界置於此土。彼得神通菩薩及聲聞衆幷餘天人。俱發聲言。唯然世尊。誰取我去。願見救護。無動佛言。非我所爲。是維摩詰神力所作。其餘未得神通者。不覺不知已之所往。妙喜世界雖入此土而不增減。於是世界亦不迫隘如本無異。爾時釋迦牟尼佛告諸大衆。汝等且觀妙喜世界無動如來其國嚴飾。菩薩行淨弟子清白。皆曰。唯然已見。佛言。若菩薩欲得如是清淨佛土。當學無動如來所行之道。現此妙喜世界時。娑婆世界十四那由他人發阿耨多羅三藐三菩提心。皆願生於妙喜佛土。釋迦牟尼佛即記之曰。當生彼國。時妙喜世界於此國土所應饒益其事訖已。還復本處擧衆皆見。佛告舍利弗。汝見此妙喜世界及無動佛不。唯然已見。世尊。願使一切衆生得清淨土如無動佛。獲神通力如維摩詰。世尊。我等快得善利。得見是人親近供養。其諸衆生若今現在若佛滅後。聞此經者亦得善利。況復聞已信解受持讀誦解說如法修行。若有手得是經典者。便爲已得法寶之藏。若有讀誦解釋其義如說修行。即爲諸佛之所護念。其有供養如是人者。當知即爲供養於佛。其有書持此經卷者。當知其室即有如來。若聞是經能隨喜者。斯人即爲取一切智。若能信解此經。乃至一四句偈爲他說者。當知此人即是受阿耨多羅三藐三菩提記

維摩詰所說經法供養品第十三

是同作此下同

或下三本俱有以字

於天帝元明俱作天帝於○言下明有甚字○多下元明俱無矣字

名宋作日

何下三本俱有名字○法下同有之字

爾時釋提桓因於大衆中白佛言.世尊.我雖從佛及文殊師利聞百千經.未曾聞此不可思議自在神通決定實相經典.如我解佛所說義趣.若有衆生聞是經法.信解受持讀誦之者.必得是法不疑.何況如說修行.斯人即爲閉衆惡趣.開諸善門.常爲諸佛之所護念.降伏外學.摧滅魔怨.修治菩提安處道場.履踐如來所行之跡.世尊.若有受持讀誦如說修行者.我當與諸眷屬供養給事.所在聚落城邑山林曠野有是經處.我亦與諸眷屬.聽受法故共到其所.其未信者當令生信.其已信者當爲作護.佛言.善哉善哉.天帝.如汝所說.吾助爾喜.此經廣說過去未來現在諸佛不可思議阿耨多羅三藐三菩提.是故天帝.若善男子善女人.受持讀誦供養是經者.即爲供養去來今佛.天帝.正使三千大千世界如來滿中.譬如甘蔗竹葦稻麻叢林.若有善男子善女人.或一劫或減一劫.恭敬尊重讚歎供養奉諸所安.至諸佛滅後.以一一全身舍利起七寶塔.縱廣一四天下高至梵天表刹莊嚴.以一切華香瓔珞幢幡伎樂微妙第一.若一劫若減一劫而供養之.於天帝意云何.其人植福寧爲多不.釋提桓因言.多矣世尊.彼之福德若以百千億劫說不能盡.佛告天帝.當知是善男子善女人.聞是不可思議解說經典.信解受持讀誦修行福多於彼.所以者何.諸佛菩提皆從是生.菩提之相不可限量.以是因緣福不可量.佛告天帝.過去無量阿僧祇劫時.此有佛號曰藥王如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊.世界名大莊嚴.劫曰莊嚴.佛壽二十小劫.其聲聞僧三十六億那由他.菩薩僧有十二億.天帝.是時有轉輪聖王名曰寶蓋.七寶具足主四天下.王有千子.端正勇健.能伏怨敵.爾時寶蓋與其眷屬供養藥王如來.施諸所安至滿五劫.過五劫已告其千子.汝等亦當如我以深心供養於佛.於是千子受父王命.供養藥王如來.復滿五劫一切施安.其王一子名曰月蓋.獨坐思惟.寧有供養殊過此者.以佛神力空中有天曰.善男子.法之供養勝諸供養.即問何謂法之供養.天曰.汝可往問藥王如來.當廣爲汝說法之供養.即時月蓋王子行詣藥王如來稽首佛足.却住一面白佛言.世尊.諸供養中法供養勝.云何爲法供養.佛言.善男子.法供養者.諸佛所說深經.一切世間難信難受.微妙難見.清淨無染.非但分別思惟之所能得.菩薩法藏所攝.陀羅尼印印之.至不退轉.成就六度.善分別義.順菩提法.衆經之上.入大慈悲.離衆魔事及諸邪見.順因緣法.無我無人無衆生無壽命.空無相無作無

起。能令衆生坐於道場而轉法輪。諸天龍神乾闥婆等所共歎譽。能令衆生入佛法藏。攝諸賢聖一切智慧。說衆菩薩所行之道。依於諸法實相之義。明宣無常苦空無我寂滅之法。能救一切毀禁衆生。諸魔外道及貪著者能使怖畏。諸佛賢聖所共稱歎。背生死苦示涅槃樂。十方三世諸佛所說。若聞如是等經。信解受持讀誦。以方便力爲諸衆生分別解說顯示分明。守護法故。是名法之供養。又於諸法如說修行。隨順十二因緣。離諸邪見得無生忍。決定無我無有衆生。而於因緣果報。無違無諍離諸我所。依於義不依語。依於智不依識。依了義經不依不了義經。依於法不依人。隨順法相無所入無所歸。無明畢竟滅故。諸行亦畢竟滅。乃至生畢竟滅故。老死亦畢竟滅。作如是觀。十二因緣無有盡相。不復起見。是名最上法之供養。佛告天帝。王子月蓋從藥王佛聞如是法得柔順忍。卽解寶衣嚴身之具。以供養佛白佛言。世尊。如來滅後我當行法供養守護正法。願以威神加哀建立。令我得降魔怨修菩薩行。佛知其深心所念。而記之曰。汝於末後守護法城。天帝。時王子月蓋見法淸淨。聞佛授記以信出家。修集善法精進不久。得五神通逮菩薩道。得陀羅尼無斷辯才。於佛滅後以其所得神通總持辯才之力。滿十小劫。藥王如來所轉法輪隨而分布。月蓋比丘。以守護法勤行精進。卽於此身化百萬億人。於阿耨多羅三藐三菩提立不退轉。十四那由他人深發聲聞辟支佛心。無量衆生得生天上。天帝。時王寶蓋豈異人乎。今現得佛號寶炎如來。其王千子卽賢劫中千佛是也。從迦羅鳩孫馱爲始得佛。最後如來號曰樓至。月蓋比丘卽我身是。如是天帝。當知此要。以法供養於諸供養爲上。爲最第一無比。是故天帝。當以法之供養供養於佛

讚下同無之法二字

降下三本俱有伏字○集同作習○[illegible]之[illegible]同俱作具

維摩詰所說經囑累品第十四

於是佛告彌勒菩薩言。彌勒。我今以是無量億阿僧祇劫所集阿耨多羅三藐三菩提法。付囑於汝。如是輩經於佛滅後末世之中。汝等當以神力廣宣流布。於閻浮提無令斷絕。所以者何。未來世中當有善男子善女人。及天龍鬼神乾闥婆羅刹等。發阿耨多羅三藐三菩提心。樂于大法。若使不聞如是等經則失善利。如此輩人聞是等經。必多信樂發希有心。當以頂受。隨諸衆生所應得利而爲廣說。彌勒當知。菩薩有二相。何謂爲二。一者好於雜

句文飾之事。二者不畏深義如實能入。若好雜句文飾事者。當知是爲新學菩薩。若於如是無染無著甚深經典。無有恐畏能入其中。聞已心淨受持讀誦如說修行。當知是爲久修道行。彌勒。復有二法名新學者。不能決定於甚深法。何等爲二。一者所未聞深經。聞之驚怖生疑不能隨順。毀謗不信而作是言。我初不聞從何所來。二者若有護持解說如是深經者。不肯親近供養恭敬。或時於中說其過惡。有此二法。當知是爲新學菩薩。爲自毀傷。不能於深法中調伏其心。彌勒。復有二法。菩薩雖信解深法。猶自毀傷而不能得無生法忍。何等爲二。一者輕慢新學菩薩而不教誨。二者雖解深法而取相分別。是爲二法。彌勒菩薩聞說是已白佛言。世尊。未曾有也。如佛所說。我當遠離如斯之惡。奉持如來無數阿僧祇劫所集阿耨多羅三藐三菩提法。若未來世善男子善女人求大乘者。當令手得如是等經。與其念力。使受持讀誦爲他廣說。世尊。若後末世有能受持讀誦爲他說者。當知皆是彌勒神力之所建立。佛言。善哉善哉彌勒。如汝所說。佛助爾喜。於是一切菩薩合掌白佛。我等亦於如來滅後。十方國土廣宣流布阿耨多羅三藐三菩提法。復當開導諸說法者令得是經。爾時四天王白佛言。世尊。在在處處城邑聚落山林曠野。有是經卷讀誦解說者。我當率諸官屬爲聽法故往詣其所擁護其人。面百由旬令無伺求得其便者。是時佛告阿難。受持是經廣宣流布。阿難言唯然。我已受持要者。世尊。當何名斯經。佛言阿難。是經名爲維摩詰所說。亦名不可思議解脫法門。如是受持。佛說是經已。長者維摩詰文殊師利舍利弗阿難等。及諸天人阿修羅一切大衆。聞佛所說皆大歡喜

維摩詰經卷下

是下同無爲字

雖下元明俱有信字

他下宋有人字〇同元本闕字〇如下三本俱無皆字〇提下宋無法字〇唯下三本俱無然字〇喜下宋有作禮而去四字元明俱有信受奉行四字

末題詰下三本俱有所說二字

請來本八家共請來但海錄不載

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第一 〔麗染〕〔宋詩〕〔元詩〕〔明賢〕

入眞言門住心品第一

如是我聞。一時薄伽梵。住如來加持廣大金剛法界宮。一切持金剛者皆悉集會。如來信解遊戲神變生大樓閣寶王。高無中邊。諸大妙寶王種種間飾。菩薩之身爲師子座。其金剛名曰虛空無垢執金剛。虛空遊步執金剛。虛空生執金剛。被雜色衣執金剛。善行步執金剛。住一切法平等執金剛。哀愍無量衆生界執金剛。那羅延力執金剛。大那羅延力執金剛。妙執金剛。勝迅執金剛。無垢執金剛。刃迅執金剛。如來甲執金剛。如來句生執金剛。住無戲論執金剛。如來十力生執金剛。無垢眼執金剛。金剛手祕密主。如是上首。十佛刹微塵數等持金剛衆俱。及普賢菩薩。慈氏菩薩。妙吉祥菩薩。除一切蓋障菩薩等諸大菩薩。前後圍繞而演說法。所謂越三時如來之日加持故。身語意平等句法門。時彼菩薩普賢爲上首。諸執金剛祕密主爲上首。毗盧遮那如來加持故。奮迅示現身。無盡莊嚴藏。如是奮迅示現語意平等無盡莊嚴藏。非從毗盧遮那佛身或語或意生。一切處起滅邊際不可得。而毗盧遮那。一切身業一切語業一切意業。一切處一切時。於有情界宣說眞言道句法。又現執金剛普賢蓮華手菩薩等像貌。普於十方宣說眞言道淸淨句法。所謂初發心乃至十地次第此生滿足。緣業生增長有情類業壽種除。復有芽種生起

爾時執金剛祕密主。於彼衆會中坐白佛言。世尊云何如來應供正遍知。得一切智智。彼得一切智智。爲無量衆生。廣演分布。隨種種趣種種性欲。種種方便道。宣說一切智智。或聲聞乘道。或緣覺乘道。或大乘道。或五通智道。或願生天。或生人中及龍夜叉乾闥婆。乃至說生摩睺羅伽法。若有衆生應佛度者。卽現佛身。或現聲聞身。或現緣覺身。或菩薩身。或梵天身。或那羅延毗沙門身。乃至摩睺羅伽人非人等身。各各同彼言音。住種種威儀。而此一切智智道一味。所謂如來解脫味。世尊譬如虛空界離一切分別。無分別無無分別。如是一切智智離一切分

別。無分別無無分別。世尊譬如大地一切衆生依。如是一切智智。天人阿脩羅依。世尊譬如火界燒一切薪無厭足。如是一切智智燒一切無智薪無厭足。世尊譬如風界除一切塵。如是一切智智。除去一切諸煩惱塵。世尊喩如水界一切衆生依之歡樂。如是一切智智。爲諸天世人利樂。世尊如是智慧。以何爲因。云何爲根。云何究竟。如是說已。毘盧遮那佛。告持金剛祕密主言。善哉善哉執金剛。善哉金剛手。汝問吾如是義。汝當諦聽。極善作意。吾今說之。金剛手言。如是世尊願樂欲聞。佛言菩提心爲因。大悲爲根本。方便爲究竟。祕密主云何菩提。謂如實知自心。祕密主是阿耨多羅三藐三菩提。乃至彼法。少分無有可得。何以故。虛空相是菩提。無知解者。亦無開曉。何以故。菩提無相故。祕密主諸法無相。謂虛空相。爾時金剛手復白佛言。世尊誰尋求一切智。誰爲菩提。成正覺者。誰發起彼一切智智。佛言祕密主。自心尋求菩提及一切智。何以故本性淸淨故。心不在內不在外。及兩中間心不可得。祕密主。如來應正等覺。非靑非黃。非赤非白。非紅紫非水精色。非長非短。非圓非方。非明非暗。非男非女非不男女。祕密主。心非欲界同性。非色界同性。非無色界同性。非天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人趣同性。祕密主。心不住眼界。不住耳鼻舌身意界。非見非顯現。何以故。虛空相心。離諸分別無分別。所以者何。性同虛空卽同於心。性同於心卽同菩提。如是祕密主。心虛空界菩提。三種無二。此等悲爲根本。方便波羅蜜滿足。是故祕密主。我說諸法如是。令彼諸菩薩衆。菩提心淸淨識知其心。祕密主。若族姓男族姓女。欲識知菩提。當如是識知自心。祕密主。云何自知心。謂若分段。或顯色或形色。或境界。若色若受想行識。若我若我所。若能執若所執。若淸淨若界若處。乃至一切分段中求不可得。祕密主。此菩薩淨菩提心門。名初法明道。菩薩住此修學。不久勤苦便得除一切蓋障三昧。若得此者則與諸佛菩薩同等住。當發五神通。獲無量語言音陀羅尼。知衆生心行。諸佛護持。雖處生死而無染著。爲法界衆生不辭勞倦。成就住無爲戒。離於邪見通達正見。復次祕密主。住此除一切蓋障菩薩。信解力故。不久勤修。滿足一切佛法。祕密主以要言之。是善男子善女人。無量功德皆得成就。爾時執金剛祕密主。復以偈問佛

云何世尊說　此心菩提生　復以云何相　知發菩提心　願識心心勝　自然智生說　大勤勇幾何

次第心續生　心諸相與時　願佛廣開演　功德聚亦然　及彼行修行　心心有殊異　唯大牟尼說

如是說已。摩訶毘盧遮那世尊。告金剛手言

善哉佛眞子　廣大心利益　勝上大乘句　心續生之相　諸佛大祕密　外道不能識　我今悉開示
一心應諦聽　越百六十心　生廣大功德　其性常堅固　知彼菩提生　無量如虛空　不染汙常住
諸法不能動　本來寂無相　無量智成就　正等覺顯現　供養行修行　從是初發心

祕密主。無始生死愚童凡夫。執著我名我有。分別無量我分。祕密主。若彼不觀我之自性。則我我所生。餘復計有時。地等變化。瑜伽我。建立淨。不建立無淨。若自在天。若流出及時。若尊貴若自然。若內我若人量。若遍嚴。若壽者。若補特伽羅。若識。若阿賴耶。知者。見者。能執所執。內知。外知。社怛梵。意生。儒童。常定生。聲非聲。祕密主。如是等我分。自昔以來分別相應。希求順理解脫。祕密主。愚童凡夫類猶如羝羊。或時有一法想生。所謂持齋。彼思惟此少分。發起歡喜。數數修習。祕密主。是初種子善業發生。復以此爲因。於六齋日。施與父母男女親戚。是第二芽種。復以此施。授與非親識者。是第三疱種。復以此施。與器量高德者。是第四葉種。復以此施歡喜授與伎樂人等及獻尊宿。是第五敷華。復以此施。發親愛心而供養之。是第六成果。復次祕密主。彼護戒生天。是第七受用種子。復次祕密主。以此心生死流轉。於善友所聞如是言。此是天大天。與一切樂者。若虔誠供養一切所願皆滿。所謂自在天。梵天那羅延天。商羯羅天。黑天自在天子。日天月天龍尊等。及倶吠濫毘沙門。釋迦毘樓博叉。毘首羯磨天。閻魔閻魔后。梵天后。世所宗奉火天。迦樓羅子天。自在天后。波頭摩。德叉迦龍。和脩吉。商佉。羯句吒劍。大蓮。倶里劍。摩訶泮尼。阿地提婆。薩陀難陀等龍。或天仙大圍陀論師。各各應善供養。彼聞如是。心懷慶悅。殷重恭敬隨順修行。祕密主。是名愚童異生生死流轉無畏依。第八嬰童心。祕密主。復次殊勝行。隨彼所說中殊勝住。求解脫慧生。所謂常無常空。隨順如是說。祕密主。非彼知解空非空常斷。非有非無倶彼分別。無分別云何分別空。不知諸空非彼能知涅槃。是故應了知空離於斷常

爾時金剛手復請佛言。唯願世尊說彼心。如是說已。佛告金剛手祕密主言。祕密主諦聽心相。謂貪心。無貪心。瞋

心.慈心.癡心.智心.決定心.疑心.暗心.明心.積聚心.鬪心.諍心.無諍心.天心.阿脩羅心.龍心.人心.女心.自在心.商人心.農夫心.河心.陂池心.井心.守護心.慳心.狗心.狸心.迦樓羅心.鼠心.歌詠心.舞心.擊鼓心.室宅心.師子心.鵂鶹心.烏心.羅刹心.刺心.窟心.風心.水心.火心.泥心.顯色心.板心.迷心.毒藥心.羂索心.械心.雲心.田心.鹽心.剃刀心.須彌等心.海等心.穴等心.受生心.祕密主.彼云何貪心.謂隨順染法.云何無貪心.謂隨順無染法.云何瞋心.謂隨順怒法.云何慈心.謂隨順修行慈法.云何癡心.謂隨順修行.不觀法.云何智心.謂順修殊勝增上法.云何決定心.謂尊教命如說奉行.云何疑心.謂常收持不定等事.云何闇心.謂於無疑慮法生疑慮解.云何明心.謂於不疑慮法無疑慮修行.云何積聚心.謂無量爲一爲性.云何鬪心.謂互相是非爲性.云何諍心.謂於自己而生是非.云何無諍心.謂是非俱捨.云何天心.謂心思隨念成就.云何阿脩羅心.謂樂處生死.云何龍心.謂思念廣大資財.云何人心謂思念利他.云何女心.謂隨順欲法.云何自在心.謂思惟欲我一切如意.云何商人心.謂順修初收聚後分析法.云何農夫心.謂隨順初廣聞而後求法.云何河心.謂順修依因二邊法.云何陂池心.謂隨順渴無厭足法.云何井心.謂如是思惟深復甚深.云何守護心.謂唯此心實餘心不實.云何慳心.謂隨順爲己不與他法.云何狸心.謂順修徐進法.云何狗心.謂得少分以爲喜足.云何迦樓羅心.謂隨順朋黨羽翼法.云何鼠心.謂思惟斷諸繫縛.云何歌詠心.云何舞心.謂修行如是法.我當上昇種種神變.云何擊鼓心.謂修順是法.我當擊法鼓.云何室宅心.謂順修自護身法.云何師子心.謂修行一切無怯弱法.云何鵂鶹心.謂常暗夜思念.云何烏心.謂一切處驚怖思念.云何羅刹心.謂於善中發起不善.云何刺心.謂一切處發起惡作爲性.云何窟心.謂順修爲入窟法.云何風心.謂遍一切處發起爲性.云何水心.謂順修洗濯一切不善法.云何火心.謂熾盛炎熱爲性.云何泥心.云何顯色心.謂類彼爲性.云何板心.謂順修隨量法.捨棄餘善故.云何迷心.謂所執異所思異.云何毒藥心.謂順修無生分法.云何羂索心.謂一切處住於我縛爲性.云何械心.謂二足止住爲性.云何雲心.謂常作降雨思念.云何田心.謂常如是修事自身.云何鹽心.謂所思念彼復增加思念.云何剃刀心.謂唯如是依止剃除法.云何彌盧等心.謂常思惟心高舉爲性.云何海等心.謂常如是受用自身而住.云何穴等心.謂先決定彼後復變改爲性.云何受生心.謂諸有

修習行業彼生。心如是同性。祕密主。一二三四五再。數凡百六十。心越世間三妄執。出世間心生。謂如是解唯蘊無我。根境界淹留修行。拔業煩惱株杌。無明種子生十二因緣。離建立宗等。如是湛寂。一切外道所不能知。先佛宣說。離一切過。祕密主。彼出世間心住蘊中。有如是慧隨生。若於蘊等發起離著。當觀察聚沫浮泡芭蕉陽焰幻等。而得解脫。謂蘊處界。能執所執。皆離法性。如是證寂然界。是名出世間心。祕密主。彼離違順八心相續。業煩惱網。是超越一劫瑜祇行。復次祕密主。大乘行。發無緣乘心。法無我性。何以故。如彼往昔如是修行者。觀察蘊阿賴耶。知自性如幻陽焰影響旋火輪乾闥婆城。祕密主。彼如是捨無我。心主自在覺自心本不生。何以故。祕密主。心前後際不可得故。如是知自心性。是超越二劫瑜祇行。復次祕密主。眞言門修行菩薩行諸菩薩。無量無數百千俱胝那庾多劫。積集無量功德智慧。具修諸行無量智慧方便。皆悉成就。天人世間之所歸依。出過一切聲聞辟支佛地。釋提桓因等。親近敬禮。所謂空性。離於根境。無相無境界。越諸戲論。等虛空無邊。一切佛法。依此相續生。離有爲無爲界。離諸造作。離眼耳鼻舌身意。極無自性心生。祕密主。如是初心。佛說成佛因故。於業煩惱解脫。而業煩惱具依。世間宗奉常應供養。復次祕密主。信解行地。觀察三心無量波羅蜜多慧觀四攝法。信解地。無對。無量不思議。建立十心無邊智生。我一切諸有所說。皆依此而得。是故智者。當思惟此一切智信解地。復越一劫昇住此地。此四分之一度於信解

爾時執金剛祕密主。白佛言。世尊。願救世者演說心相。菩薩有幾種得無畏處。如是說已。摩訶毘盧遮那世尊。告金剛手言。諦聽極善思念。祕密主。彼愚童凡夫。修諸善業害不善業。當得善無畏。若如實知我。當得身無畏。若於取蘊所集我身。捨自色像觀。當得無我無畏。若害蘊住法攀緣。當得法無畏。若害法住無緣。當得法無我無畏。若復一切蘊界處。能執所執。我壽命等。及法無緣空。自性無性。此空智生。當得一切法自性平等無畏。祕密主。若眞言門修菩薩行諸菩薩。深修觀察十緣生句。當於眞言行通達作證。云何爲十。謂如幻。陽焰。夢。影。乾闥婆城。響。水月。浮泡。虛空華。旋火輪。祕密主。彼眞言門修菩薩行諸菩薩。當如是觀察。云何爲幻。謂如呪術藥力能造所造種種色像。惑自眼故。見希有事。展轉相生往來十方。然彼非去非不去。何以故本性淨故。如是眞言幻。持誦成就能

生一切。復次祕密主。陽焰性空。彼依世人妄想。成立有所談議。如是眞言相唯是假名。復次祕密主。如夢中所見。晝日牟呼栗多。刹那歲時等住。種種異類受諸苦樂。覺已都無所見。如是夢眞言行應知亦爾。復次祕密主。以影喩解了眞言能發悉地。如面緣於鏡而現面像。彼眞言悉地當如是知。復次祕密主。以乾闥婆城譬。解了成就悉地宮。復次祕密主。以響喩解了眞言聲。如緣聲有響。彼眞言者當如是解。復次祕密主。如因月出故。照於淨水而現月影像。如是眞言水月喩。彼持明者當如是說。復次祕密主。如天降雨生泡。彼眞言悉地種種變化。當知亦爾。復次祕密主。如空中無衆生無壽命。彼作者不可得。以心迷亂故。而生如是種種妄見。復次祕密主。譬如火燼。若人執持在手。而以旋轉空中。有輪像生。祕密主。應如是了知大乘句心句。無等等句必定句。正等覺句漸次大乘生句。當得具足法財。出生種種工巧大智。如實遍知一切心想

大毘盧遮那經入漫荼羅具緣眞言品第二

爾時執金剛祕密主白佛言。希有世尊。說此諸佛自證三菩提。不思議法界超越心地。以種種方便道。爲衆生類。如本性信解而演說法。惟願世尊次說修眞言行。大悲胎藏生大曼荼羅王。爲滿足彼諸未來世無量衆生。爲救護安樂故。爾時薄伽梵毘盧遮那。於大衆會中遍觀察已。告執金剛祕密主言。諦聽金剛手。今說修行漫荼羅行。滿足一切智智法門。爾時毘盧遮那世尊。本昔誓願成就無盡法界。度脫無餘衆生界故。一切如來。同共集會。漸次證入大悲藏發生三摩地。世尊一切支分皆悉出現如來之身。爲彼從初發心。乃至十地諸衆生故。遍至十方還來佛身本位。本位中住而復還入。時薄伽梵復告執金剛祕密主言。諦聽金剛手。漫荼羅位初阿闍梨。應發菩提心。妙慧慈悲兼綜衆藝。善巧修行般若波羅蜜。通達三乘。善解眞言實義。知衆生心。信諸佛菩薩。得傳教灌頂等。妙解漫荼羅畫。其性調柔離於我執。於眞言行善得決定。究習瑜伽。住勇健菩提心。祕密主。如是法則阿闍梨。諸佛菩薩之所稱讚。復次祕密主。彼阿闍梨。若見衆生堪爲法器遠離諸垢。有大信解勤勇深信。常念利他。若弟子具如是相貌者。阿闍梨應自往勸發如是告言

佛子此大乘　眞言行道法　我今正開演　爲彼大乘器　過去等正覺　及與未來世　現在諸世尊
住饒益衆生　如是諸賢者　解眞言妙法　勤勇獲種智　坐無相菩提　眞言勢無比　能摧彼大力
極忿怒魔軍　釋師子救世　是故汝佛子　應以如是慧　方便作成就　當獲薩婆若　行者悲念心
發起令增廣　彼堅住受教　當爲擇平地　山林多華果　悅意諸淸泉　諸佛所稱歎　應作圓壇事
或在河流處　鵝鴈等莊嚴　彼處作慧解　悲生漫荼羅　正覺緣導師　聖者聲聞衆　曾遊此地分
佛常所稱譽　及餘諸方所　僧坊阿練若　華房高樓閣　勝妙諸池苑　制底火神祠　牛欄河潭中
諸天廟空室　仙人得道處　如上之所說　或所意樂處　利益弟子故　當畫漫荼羅

祕密主。彼揀擇地。除去礫石碎瓦破器。髑髏毛髮糠糟灰炭。刺骨朽木等。及蟲蟻蜣蜋毒螫之類。離如是諸過。遇良日晨定日時分宿直諸執。皆悉相應。於食前時値吉祥相。先當爲一切如來作禮。以如是偈警發地神

汝天親護者　於諸佛導師　修行殊勝行　淨地波羅蜜　如破魔軍衆　釋師子救世　我亦降伏魔
我畫漫荼羅

彼應長跪舒手按地。頻誦此偈。以塗香華等供養。供養已。眞言者復應歸命一切如來。然後治地。如其次第當具衆德。爾時執金剛祕密主。頭面禮世尊足。而說偈言

佛法離諸相　法住於法位　所說無譬類　無相無爲作　何故大精進　而說此有相　及與眞言行
不順法然道　爾時薄伽梵　毘盧遮那佛　告執金剛手　善聽法之相　法離於分別　及一切妄想
若淨除妄想　心思諸起作　我成最正覺　究竟如虛空　凡愚所不知　邪妄執境界　時方相貌等
樂欲無明覆　度脫彼等故　隨順方便說　而實無時方　無作無造者　彼一切諸法　唯住於實相
復次祕密主　於當來世時　劣慧諸衆生　以癡愛自蔽　唯依於有相　恒樂諸斷常　時方所造業
善不善諸相　盲冥樂求果　不知解此道　爲度彼等故　隨順說是法

祕密主。如是所說處所。隨在一地治令堅固。取未至地瞿摩夷及瞿摸怛羅。和合塗之。次以香水眞言灑淨。卽說

眞言曰　（一）　南麼三曼多勃馱喃一凡眞言中有平聲字皆稍上聲呼之已下准之呼之　阿鉢囉二合底丁以反下同三迷二伽伽那三迷三三麼多奴提帝四鉢囉二合吃㗚二合底微輸上睇五達摩駄睹微戍達儞六莎訶

行者次於中　定意觀大日　處白蓮華座　髮髻以爲冠　放種種色光　通身悉周遍　復當於正受
次想四方佛　東方號寶幢　身色如日暉　南方大勤勇　遍覺華開敷　金色放光明　三昧離諸垢
北方不動佛　離惱清涼定　西方仁勝者　是名無量壽　持誦者思惟　而住於佛室　當受持是地
以不動大名　或用降三世　一切利成就　白檀以塗畫　圓妙漫荼羅　中第一我身　第二諸救世
第三同彼等　佛母虛空眼　第四蓮華手　第五執金剛　第六不動尊　想念置其下　奉塗香華等
思念諸如來　至誠發殷重　演說如是偈
諸佛慈悲者　存念我等故　明日受持地　并佛子當降

如是說已。復當誦此眞言曰　（二）　南麼三曼多勃駄喃一薩婆怛他蘖多二引地瑟姹二合那引地瑟祉二合帝三阿者麗四微麼麗五娑麼二合羅嬭平六鉢囉二合吃㗚二合底丁以反鉢嚩輸上睇七莎訶

持眞言行者　次發悲念心　依於彼西方　繫念以安寢　思惟菩提心　清淨中無我　或於夢中見
菩薩大名稱　諸佛無有量　現作衆事業　或以安慰心　勸囑於行者　汝念衆生故　造作漫荼羅
善哉摩訶薩　所畫甚微妙　復次於餘日　攝受應度人　若弟子信心　生種姓清淨　恭敬於三寶
深慧以嚴身　堪忍無懈倦　尸羅淨無缺　忍辱不慳悋　勇健堅行願　如是應攝取　餘則無所觀
或十或八七　或五二一四　當作於灌頂　若復數過此

爾時金剛手祕密主復白佛言。世尊。當云何名此漫荼羅。漫荼羅者其義云何。佛言此名發生諸佛漫荼羅。極無比味無過上味。是故說爲漫荼羅。又祕密主。哀愍無邊衆生界故。是大悲胎藏生漫荼羅廣義。祕密主。如是於無量劫。積集阿耨多羅三藐三菩提之所加持。是故具無量德。當如是知。祕密主。非爲一衆生故如來成正等覺。亦非二非多。爲憐愍無餘記及有餘記諸衆生界故。如來成正等覺。以大悲願力。於無量衆生界。如其本性而演說

法。祕密主。無大乘宿習。未曾思惟眞言乘行。彼不能少分見聞歡喜信受。又金剛薩埵。若彼有情。昔於大乘眞言乘道無量門進趣。已曾修行。爲彼等故。限此造立名數。彼阿闍梨亦當以大悲心立如是誓願。爲度無餘衆生界故。應當攝受彼無量衆生。作菩提種子因緣

持眞言行者　如是攝受已　命彼三自歸　令說悔先罪　奉塗香華等　供養諸聖尊　應授彼三世
無障礙智戒　次當授齒木　若優曇鉢羅　或阿說他等　結護而作淨　香華以莊嚴　端直順本末
東面或北面　嚼已而擲之　當知彼衆生　成器非器相　三結修多羅　次繫等持臂　如是受弟子
遠離諸塵垢　增發信心故　當隨順說法　慰喩堅其意　告如是偈言
汝獲無等利　位同於大我　一切諸如來　此教菩薩衆　皆已攝受汝　成辦於大事　汝等於明日
當得大乘生　如是敎授已　或於夢寐中　覩見僧住處　園林悉嚴好　堂宇相殊特　顯敞諸樓觀
幢蓋摩尼珠　寶刀悅意華　女人鮮白衣　端正色姝麗　密親或善友　男子如天身　群牛豐牸乳
經卷淨無垢　遍知因緣覺　幷佛聲聞衆　大乘諸菩薩　現前授諸果　度大海河池　及聞所樂聲
空中言吉祥　當與意樂果　如是等好相　宜應諦分別　與此相違者　當知非善夢　善住於戒者
晨起白師已　師說此句法　勸發諸行人　此殊勝願道　大心摩訶衍　汝今能志求　當成就如來
自然智大龍　世間敬如塔　有無悉超越　無垢同虛空　諸法甚深奧　雖了無含藏　離一切妄想
戲論本無故　作業妙無比　常依於二諦　是乘殊勝願　汝當住斯道

爾時住無戲論執金剛。白佛言。世尊。願說三世無礙智戒。若菩薩住此者。令諸佛菩薩皆歡喜故。如是說已。佛告住無戲論執金剛等言。佛子諦聽。若族姓子住是戒者。以身語意合爲一。不作一切諸法。云何爲戒。所謂觀察捨於自身。奉獻諸佛菩薩。何以故。若捨自身則爲捨彼三事。云何爲三。謂身語意。是故族姓子。以受身語意戒得名菩薩。所以者何。離彼身語意故。菩薩摩訶薩應如是學。次於明日。以金剛薩埵加持自身。爲世尊毘盧遮那作禮。應取淨瓶盛滿香水。持誦降三世眞言而用加之。置初門外。用灑是諸人等。彼阿闍梨次淨香水授與令飲。彼心

清淨故。爾時執金剛祕密主以偈問佛

稱智說中尊　願說彼時分　大衆於何時　普集現靈瑞　漫荼羅闍梨　慇懃持眞言　爾時薄伽梵
告持金剛慧　當當於此夜　而作漫荼羅　傳法阿闍梨　如是應次取　五色修多羅　稽首一切佛
大毘盧遮那　親自作加持　東方以爲首　對持修多羅　至齊而在空　漸次右旋轉　如是南及西
終竟於北方　第二安立界　亦從初方起　憶念諸如來　所行如上說　右方及後方　復周於勝方
阿闍梨次迴　依於涅哩底　受學對持者　漸次以南行　從此右旋繞　轉依於風方　師位移本處
而居於火方　持眞言行者　復修如是法　弟子在西南　師居伊舍尼　學者復旋繞　轉依於火方
師位移本處　而住於風方　如是眞言者　普作四方相　漸次入其中　三位以分之　已表三分位
地相普周遍　復於一一分　差別以爲三　是中最初分　作業所行道　其餘中後分　聖天之住處
方等有四門　應知其分劑　誠心以殷重　運布諸聖尊　如是造衆相　均調善分別　內心妙白蓮
胎藏正均等　藏中造一切　悲生漫荼羅　十六央具梨　過此是其量　八葉正圓滿　鬚蘂皆嚴好
金剛之智印　遍出諸葉間　從此華臺中　大日勝尊現　金色具暉曜　首持髮髻冠　救世圓滿光
離熱住三昧　彼東應畫作　一切遍知印　三角蓮華上　其色皆鮮白　光焰遍圍遶　皓潔普周遍
次於其北維　導師諸佛母　晃曜眞金色　縞素以爲衣　遍照猶日光　正受住三昧　復於彼南方
救世佛菩薩　大德聖尊印　號名滿衆願　眞陀摩尼珠　住於白蓮上　北方大精進　觀世自在者
光色如皓月　商佉軍那華　微笑坐白蓮　髻現無量壽　彼右大名稱　聖者多羅尊　青白色相雜
中年女人狀　合掌持青蓮　圓光靡不遍　暉發猶淨金　微笑鮮白衣　左邊毘俱胝　手垂數珠鬘
三目持髮髻　尊形猶皓素　圓光色無主　黃赤白相入　次近毘俱胝　畫得大勢尊　彼服商佉色
大悲蓮華手　滋榮而未敷　圍繞以圓光　明妃住其側　號持名稱者　一切妙瓔珞　莊嚴金色身
執鮮妙華枝　左持鉢胤遇　近聖者多羅　住於白處尊　髮冠襲純帛　鉢曇摩華手　於聖者前作

大力持明王　晨朝日暉色　白蓮以嚴身　赫奕成焰鬘　吼怒牙出現　利爪獸王髮　阿耶揭利婆
如是三摩地　觀音諸眷屬　復次華臺表　大日之左方　能滿一切願　持金剛慧者　鉢孕遇華色
或復如綖寶　首戴衆寶冠　瓔珞莊嚴身　間錯互嚴飾　廣多數無量　左執拔折羅　周環起光焰
金剛藏之右　所謂忙莽雞　亦持堅慧杵　嚴身以瓔珞　彼右次應置　大力金剛針　使者衆圍繞
微笑同瞻仰　聖者之左方　金剛商羯羅　執持金剛鎖　自部諸使俱　其身淺黃色　智杵爲幖幟
於執金剛下　忿怒降三世　摧伏大障者　號名月黶尊　三目四牙現　夏時雨雲色　阿吒吒笑聲
金剛寶瓔珞　攝護衆生故　無量衆圍繞　乃至百千手　操持衆器械　如是忿怒等　皆住蓮華中
次往西方畫　無量持金剛　種種金剛印　形色各差別　普放圓滿光　爲諸衆生故　眞言主之下
依涅哩底方　不動如來使　持慧刀羂索　頂髮垂左肩　一目而諦觀　威怒身猛焰　安住在盤石
西門水波相　充滿童子形　如是具慧者　次應往風方　復畫忿怒尊　所謂勝三世　威猛焰圍繞
寶冠持金剛　不顧自身命　專請而受教　已說初界域　諸尊方位等　持眞言行人　次往第二院
東方初門中　畫釋迦牟尼　圍繞紫金色　具三十二相　被服袈裟衣　坐白蓮華臺　爲令教流布
住彼而說法　次於世尊右　顯示遍知眼　熙怡相微笑　遍體圓淨光　喜見無比身　是名能寂母
復於彼尊右　圖寫毫相明　住鉢頭摩華　圓照商佉色　執持如意寶　滿足衆希願　暉光大精進
救世釋師子　聖尊之左方　如來之五頂　最初名白傘　勝頂最勝頂　衆德火光聚　及與捨除頂
是名五大頂　大我之釋種　應當依是處　精進造衆相　次於其北方　布列淨居衆　自在與普華
光鬘及意生　名稱遠聞等　各如其次第　於毫相之右　復畫三佛頂　初名廣大頂　次名極廣大
及無邊音聲　皆應善安立　五種如來頂　白黃眞金色　復次三佛頂　白黃赤兼備　其光普深廣
[illegible][illegible]奇莊嚴　所資弘誓力　一切願皆滿　行者於東隅　而作火仙像　住於熾焰中　三點灰爲標
身色皆深赤　心置三角印　而在圓焰中　持珠及澡瓶　左方閻魔王　手秉壇拏印　水牛以爲座

震電玄雲色　七母幷黑夜　死后等圍繞　涅哩底鬼王　執刀恐怖形　縛嚕拏龍王　羂索以爲印
初方釋天王　安住妙高山　寶冠被瓔珞　持跋折羅印　及餘諸眷屬　慧者善分布　左置日天衆
在於輿輅中　勝無勝妃等　翼從而侍衞　大梵在其右　四面持髮冠　唵字相爲印　執蓮在鵝上
西方諸地神　辯才及毘紐　塞建那風神　商羯羅月天　是等依龍方　畫之勿遺謬　持眞言行者
以不迷惑心　佛子次應作　持明大忿怒　右號無能勝　左無能勝妃　持地神奉甁　虔敬而長跪
及二大龍王　難陀跋難陀　對處廟曲中　通門之大護　所餘釋種尊　眞言與印壇　所說一切法
師應具開示　持眞言行者　次至第三院　先圖妙吉祥　其身鬱金色　五髻冠其頂　猶如童子形
左持靑蓮華　上表金剛印　慈顏遍微笑　坐於白蓮臺　妙相圓普光　周帀互暉映　右邊應次畫
網光童子身　執持衆寶網　種種妙瓔珞　住寶蓮華座　而觀佛長子　左邊畫五種　與願金剛使
所謂髻設尼　優婆髻設尼　及與質多羅　地慧幷請召　如是五使者　五種奉敎者　二衆共圍繞
侍衞無勝智　行者於右方　次作大名稱　除一切蓋障　執持如意寶　捨於二分位　當畫八菩薩
所謂除疑怪　施一切無畏　除一切惡趣　救意慧菩薩　悲念具慧者　慈起大衆生　除一切熱惱
不可思議慧　次復捨斯位　至於北勝方　行者以一心　憶持布衆彩　而造具善忍　地藏摩訶薩
其座極巧麗　身處於焰胎　雜寶莊嚴地　綺錯互相間　諸寶爲蓮華　聖者所安住　及與大名稱
無量諸菩薩　謂寶掌寶手　及與持地等　寶印手堅意　上首諸聖尊　各與無數衆　前後共圍繞
次復於龍方　當畫虛空藏　勤勇被白衣　持刀生焰光　及與諸眷屬　正覺所生子　各隨其次第
列坐正蓮上　今說彼眷屬　大乘菩薩衆　應善圖藻績　諦誠勿迷忘　謂虛空無垢　次名虛空慧
及淸淨慧等　行慧安慧等　如是諸菩薩　常勤精進者　各如其次第　而畫莊嚴身　略說大悲藏
漫荼羅位竟

爾時執金剛祕密主.於一切衆會中.諦觀大日世尊.目不暫瞬而說偈言

一切智慧者　出現於世間　如彼優曇華　時時乃一現　眞言所行道　倍復甚難遇　無量俱胝劫
所作衆罪業　見此曼荼羅　消滅盡無餘　何況無量稱　住眞言行法　行此無上句　眞言救世者
止斷諸惡趣　一切苦不生　若修如是行　妙慧深不動

時普集會一切大衆。及諸持金剛者。以一音聲讚歎金剛手言

善哉善哉大勤勇　汝已修行眞言行　能問一切眞言義　我等咸有意思惟　一切現爲汝證驗
依住眞言之行力　及餘菩提大心乘　當得通達眞言法

爾時執金剛祕密主。復白世尊。而說偈言

云何彩色義　復當以何色　云何而運布　是色誰爲初　門標旗量等　廂衛亦如是　云何建諸門
願尊說其量　奉食華香等　及與衆寶瓶　云何引弟子　云何令灌頂　云何供養師　願說護摩處
云何眞言相　云何住三昧　如是發問已　牟尼諸法王　告持金剛慧　一心應諦聽　最勝眞言道
出生大乘果　汝今請問我　爲大有情說　染彼衆生界　以法界之味　古佛所宣說　是名爲色義
先安布內色　非安布外色　潔白最爲初　赤色爲第二　如是黃及青　漸次而彰著　一切內深玄
是謂色先後　建立門標幟　量同中胎藏　廂衛亦如是　華臺十六節　應知彼初門　與內壇齊等
智者於外院　漸次而增加　於彼廂衛中　當建大護者　略說三摩地　一心住於緣　廣義復殊異
大衆生諦聽　佛說一切空　正覺之等持　三昧證知心　非從異緣得　彼如是境界　一切如來定
故說爲大空　圓滿薩婆若

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第二

麗染　宋詩　元詩　明豐

入漫荼羅具緣眞言品第二之餘

爾時毗盧遮那世尊.與一切諸佛同共集會.各各宣說一切聲聞緣覺菩薩三昧道.時佛入於一切如來一體速疾力三昧.於是世尊復告執金剛菩薩言

我昔坐道場　降伏於四魔　以大勤勇聲　除衆生怖畏　是時梵天等　心喜共稱說　由此諸世間
號名大勤勇　我覺本不生　出過語言道　諸過得解脫　遠離於因緣　知空等虚空　如實相智生
已離一切暗　第一實無垢　諸趣唯相名　佛相亦復然　此第一實際　以加持力故　爲度於世間
而以文字說

爾時執金剛具德者.得未曾有開敷眼.頂禮一切智而說偈言

諸佛甚希有　權智不思議　離一切戲論　法佛自然智　而爲世間說　滿足衆希願　眞言相如是
常依於二諦　若有諸衆生　知此法教者　世人應供養　猶如敬制底

時執金剛說此偈已.諦觀毗盧遮那.目不暫瞬默然而住.於是世尊.復告執金剛祕密主言.復次祕密主.一生補處菩薩.住佛地三昧道.離於造作知世間相.住於業地堅住佛地.復次祕密主.八地自在菩薩三昧道.不得一切諸法.離於有生.知一切幻化.是故世稱觀自在者.復次祕密主.聲聞衆住有緣地.識生滅除二邊.極觀察智.得不隨順修行因.是名聲聞三昧道.祕密主.緣覺觀察因果.住無言說法.不轉無言說.於一切法證極滅語言三昧.是名緣覺三昧道.祕密主.世間因果及業.若生若滅.繫屬他主.空三昧生.是名世間三昧道.爾時世尊.而說偈言

祕密主當知　此等三昧道　若住佛世尊　菩薩救世者　緣覺聲聞說　摧害於諸過　若諸天世間
眞言法教道　如是勤勇者　爲利衆生故

復次世尊告執金剛祕密主言．祕密主．汝當諦聽諸眞言相．金剛手言．唯然世尊願樂欲聞．爾時世尊復說頌曰

等正覺眞言　言名成立相　如因陀羅宗　諸義利成就　有增加法句　本名行相應　若唵字許字
及與發吒迦　或頡唎鑁等　是佛頂名號　若揭嘌底弩　佉陀耶畔闍　訶那摩㗚也　鉢吒也等類
是奉教使者　諸忿怒眞言　若有納麼字　及莎縛訶等　是修三摩地　寂行者標相　若有扇多字
微戍陀字等　當知能滿足　一切所希願　此正覺佛子　救世者眞言　若聲聞所說　一一句安布
是中辟支佛　復有少差別　謂三昧分異　淨除於業生

復次祕密主．此眞言相非一切諸佛所作．不令他作．亦不隨喜．何以故．以是諸法法如是故．若諸如來出現．若諸如來不出．諸法法爾如是住．謂諸眞言．眞言法爾故．祕密主．成等正覺一切知者．一切見者出興于世．而自此法．說種種道．隨種種樂欲．種種諸衆生心．以種種句種種文．種種隨方語言．種種諸趣音聲．而以加持說眞言道．祕密主．云何如來眞言道．謂加持此書寫文字．祕密主．如來無量百千俱胝那庾多劫．積集修行眞實諦語．四聖諦．四念處．四神足．十如來力．六波羅蜜．七菩提寶．四梵住．十八佛不共法．祕密主．以要言之．諸如來一切智智．一切如來自福智力．自願智力．一切法界加持力．隨順衆生如其種類．開示眞言教法．云何眞言教法．謂阿字門一切諸法本不生故．迦字門一切諸法離作業故．佉字門一切諸法等虛空不可得故．哦字門一切諸法一切行不可得故．伽（重聲）字門一切諸法一合相不可得故．遮字門一切諸法離一切遷變故．車字門一切諸法影像不可得故．若字門一切諸法生不可得故．社字門一切諸法戰敵不可得故．吒字門一切諸法慢不可得故．咤字門一切諸法長養不可得故．拏字門一切諸法怨對不可得故．茶（重聲）字門一切諸法執持不可得故．多字門一切諸法如如不可得故．他字門一切諸法住處不可得故．娜字門一切諸法施不可得故．馱（重聲）字門一切諸法法界不可得故．波字門一切諸法第一義諦不可得故．頗字門一切諸法不堅如聚沫故．麼字門一切諸法縛不可得故．婆字門一切諸法一切有不可得故．野字門一切諸法一切乘不可得故．囉字門一切諸法離一切諸塵染故．邏字門一切諸法一切相不可得故．縛字門一切諸法語言道斷故．奢字門一切諸法本性寂故．沙字門一切諸法性鈍故．

娑字門一切諸法一切諦不可得故。訶字門一切諸法因不可得故。祕密主。仰若拏那麼於一切三昧。自在速能成辦諸事。所爲義利皆悉成就。爾時世尊而說偈言

眞言三昧門　圓滿一切願　所謂諸如來　不可思議果　具足衆勝願　眞言決定義　超越於三世
無垢同虛空　住不思議心　起作諸事業　到修行地者　授不思議果　是第一眞實　諸佛所開示
若知此法教　當得諸悉地　最勝眞實聲　眞言眞言相　行者諦思惟　當得不壞句

爾時執金剛祕密主白佛言。希有世尊。佛說不思議眞言相道法。不共一切聲聞緣覺。亦非普爲一切衆生。若信此眞言道者。諸功德法皆當滿足。唯願世尊。次說漫荼羅所須次第。如是說已。世尊復告金剛手而說偈言

持眞言行者　供養諸聖尊　當奉悅意華　潔白黃朱色　鉢頭摩青蓮　龍華奔那伽　計薩囉末利
得蘗藍瞻蔔　無憂底羅劍　鉢吒羅婆羅　是等鮮妙華　吉祥衆所樂　採集以爲鬘　敬心而供養
栴檀及青木　苜蓿香鬱金　及餘妙塗香　盡持以奉獻　沈水及松香　嚩藍與龍腦　白檀膠香等
失利婆塞迦　及餘焚香類　芬馥世稱美　應當隨法教　而奉於聖尊　復次大衆生　依教獻諸食
奉乳糜酪飯　歡喜漫荼迦　百葉甘美餅　淨妙沙糖餅　布利迦間穴　及末塗失囉　嬔諾迦無憂
播鉢吒食等　如是諸餚饍　種種珍妙果　塞茶與石蜜　糖蜜生熟酥　種種諸漿飲　乳酪淨牛味
又奉諸燈燭　異類新淨器　盛滿妙香油　布列爲照明　四方繒旛蓋　種種色相間　門標異形類
幷懸以鈴鐸　或以心供養　一切皆作之　持眞言行者　存意勿遺忘　次具迦羅奢　或六或十八
備足諸寶藥　盛滿衆香水　枝條上垂布　間挿華果實　塗香等嚴飾　結護而作淨　繫頸以妙衣
瓶數或增廣　上首諸尊等　各各奉衆服　諸餘大有情　一一皆獻之　如是修供養　次引應度者
灑之以淨水　授與塗香華　令發菩提心　憶念諸如來　一切皆當得　生於淨佛家　結法界生印
及與法輪印　金剛有情等　而用作加護　次應當自結　諸佛三昧耶　三轉加淨衣　如眞言法教
而用覆其首　深起悲念心　三誦三昧耶　頂戴以囉字　嚴以大空點　周帀開焰鬘　字門生白光

流出如滿月　現對諸救而　而散於淨華　隨其所至處　行人而尊奉　漫荼羅初門　大龍廂衞處
於二門中間　安立於學人　住彼隨法教　而作衆事業　如是令弟子　遠離於諸過　作寂然護摩
護摩依法住　初自中胎藏　至第二之外　於漫荼羅中　作無疑慮心　如其自肘量　陷作光明壇
四節爲周界　中表金剛印　師位之右方　護摩具支分　學人住其左　蹲踞增敬心　自敷吉祥草
藉地以安坐　或布衆綵色　彤輝極嚴麗　一切續事成　是略護摩處　周帀布祥茅　端末互相加
右旋皆廣厚　遍灑以香水　思惟火光尊　哀愍一切故　應當持滿器　而以供養之　爾時善住者
當說是眞語

（三）　南麼三曼多勃馱喃一惡揭娜二合曳二莎訶

復以三昧手　次持諸弟子　慧手大空指　略奉持護摩　每獻輙誠誦　各別至三七　當住慈愍心
依法眞實言

（四）　南麼三曼多勃馱喃一阿去急呼摩訶三扇底丁以反下同葉多二扇底羯囉三鉢囉二合膝摩達磨儞入聲葸多四阿婆去嚩薩嚩二合婆嚩五達麼二合娑麼多鉢囉二合下同鉢多莎訶

行者護摩竟　應教令儭施　金銀衆珍寶　象馬及車乘　牛羊上衣服　或復餘資財　弟子當至誠
恭敬起殷重　深心自忻慶　而奉於所尊　以修行淨捨　令彼歡喜故　已爲作加護　應召而告言
今此勝福田　一切佛所說　爲欲廣饒益　一切諸有情　奉施一切僧　當獲於大果　無盡大資財
世說常隨生　以供養僧者　施具德之人　是故世尊說　應當發歡喜　隨力辦肴膳　而施現前僧
爾時毗盧遮那世尊。復告執金剛祕密主。而說偈言
汝摩訶薩埵　一心應諦聽　當廣說灌頂　古佛所開示　師作第二壇　對中漫荼羅　圖畫於外界
相距二肘量　四方正均等　內向開一門　安四執金剛　居其四維外　謂住無戲論　及虛空無垢
無垢眼金剛　被雜色衣等　內心大蓮華　八葉及鬚蘂　於四方葉中　四伴侶菩薩　由彼大有情

往昔願力故　云何名爲四　謂總持自在　念持利益心　悲者菩薩等　所除諸四葉　作四奉教者
雜色衣滿願　無礙及解脫　中央示法界　不可思議色　四寶所成瓶　盛滿衆藥寶　普賢慈氏尊
及與除蓋障　除一切惡趣　而以作加持　彼於灌頂時　當置妙蓮上　獻以塗香華　燈明及閼伽
上蔭幢旛蓋　奉攝意音樂　吉慶伽陀等　廣多美妙言　如是而供養　令得歡喜已　親對諸如來
而自灌其頂　復當供養彼　妙善諸香華　次應執金篦　在於彼前住　慰喩令歡喜　說如是伽他
佛子佛爲汝　決除無智瞙　猶如世醫王　善用於金籌　持眞言行者　復當執明鏡　爲顯無相法
說是妙伽他　諸法無形像　清澄無垢濁　無執離言說　但從因業起　如是知此法　自性無染汙
爲世無比利　汝從佛心生　次當授法輪　置於二足間　慧手傳法螺　復說如是偈　汝自於今日
轉於救世輪　其聲普周遍　吹無上法螺　勿生於異慧　當離疑悔心　開示於世間　勝行眞言道
常作如是願　宣唱佛恩德　一切持金剛　皆當護念汝　次當於弟子　而起悲念心　行者應入中
示三昧耶偈　佛子汝從今　不惜身命故　常不應捨法　捨離菩提心　慳悋一切法　不利衆生行
佛說三昧耶　汝善住戒者　如護自身命　護戒亦如是　應至誠恭敬　稽首聖尊足　所作隨敎行
勿生疑慮心

爾時金剛手白佛言。世尊。若有諸善男子善女人。入此大悲藏生大漫荼羅王三昧耶者。彼獲幾所福德聚。如是說已。佛告金剛手言。祕密主。從初發心。乃至成如來。所有福德聚。是善男子善女人福德聚。與彼正等。祕密主。以此法門當如是知。彼善男子善女人。從如來口生佛心之子。若是善男子善女人所在方所。卽爲有佛施作佛事。是故祕密主。若樂欲供養佛者。當供養此善男子善女人。若樂欲見佛。卽當觀彼。時金剛手等上首執金剛。及普賢等上首諸菩薩。同聲說言。世尊。我等從今已後。應當恭敬供養是善男子善女人。何以故。世尊。見彼善男子善女人。同見佛世尊故。

爾時毗盧遮那世尊。復觀一切衆會。告執金剛祕密主等諸持金剛者及大衆言。善男子。有如來出世無量廣長

語輪相。如巧色摩尼。能滿一切願。積集無量福德。住不可害行。三世無比力眞言句。如是言已。金剛手祕密主等
諸執金剛及大會衆。同聲說言。世尊今正是時。善逝今正是時

爾時毗盧遮那世尊。住於滿一切願出廣長舌相遍覆一切佛刹淸淨法幢高峯觀三昧。時佛從定起。爾時發遍
一切如來法界哀愍無餘衆生界聲。說此大力大護明妃曰（五）　南麼薩婆怛他引蘖帝弊毘也反下同一薩婆佩野微
蘖帝弊二微濕嚩二合目契弊三薩婆他引唅四欠羅吃沙二合摩訶引沫麗五薩婆怛他引蘖多六奔昵也二合儞入闍引帝
七吽吽八怛囉二合吒怛囉二合吒九阿鉢囉二合底丁以反十莎訶

時一切如來及佛子衆。說此明已。即時普遍佛刹六種震動。一切菩薩得未曾有開敷眼。於諸佛前。以悅意言音。
而說偈言

諸佛甚奇特　說此大力護　一切佛護持　城池皆固密　由彼護心住　所有爲障者　毗那夜迦等
惡形諸羅刹　一切皆退散　念眞言力故

時薄伽梵廣大法界加持。即於是時。住法界胎藏三昧。從此定起。說入佛三昧耶持明曰（六）　南麼三曼多勃
馱喃一阿三迷二怛㘑二合三迷三三麼曳四莎訶

即於爾時。於一切佛刹一切菩薩衆會之中。說此入三昧耶明已。諸佛子等同聞是者。於一切法而不違越

時薄伽梵。復說法界生眞言曰（七）　南麼三曼多勃馱喃一達摩馱睹二薩嚩二合婆嚩句痕三

金剛薩埵加持眞言曰（八）　南麼三曼多伐折囉二合赧一伐折囉引二合怛麼二合句痕二

金剛鎧眞言曰（九）　南麼三曼多伐折囉二合赧一伐折羅二合迦嚩遮吽二

如來眼又觀眞言曰（十）　南麼三曼多勃馱喃一怛他引揭多斫吃芻二合尾也二合嚩路迦也三莎訶

塗香眞言曰（十一）　南麼三曼多勃馱喃一微輸上馱健杜引納婆二合嚩二莎訶

華眞言曰（十二）　南麼三曼多勃馱喃一摩訶引妹咀囇也二合二毘庾二合嗢蘖帝三莎訶

燒香眞言曰（十三）　南麼三曼多勃馱喃一達摩馱睹弩蘖帝二莎訶

飲食眞言曰（十四）南麼三曼多勃馱喃一阿囉囉二迦羅羅沫隣捺娜弭沫隣捺泥三摩訶引沫履四莎訶

燈眞言曰（十五）南麼三曼多勃馱喃一怛他引揭多喇旨二合二薩叵上合二囉儜嚩婆去娑娜三伽伽猱陀哩耶合二四莎訶

閼伽眞言曰（十六）南麼三曼多勃馱喃一伽伽那三摩引三摩二莎訶

如來頂相眞言曰（十七）南麼三曼多勃馱喃一伽伽那難多薩發合二囉儜上二微輸上馱達摩儞入聲闍引多三莎訶

如來甲眞言曰（十八）南麼三曼多勃馱喃一伐折囉合二入嚩合二羅二微薩普合二囉許三莎訶

如來圓光眞言曰（十九）南麼三曼多勃馱喃一入嚩合二羅引摩履儞二怛他引蘖多引㗚旨二合三莎訶

如來舌相眞言曰（二十）南麼三曼多勃馱喃一摩訶摩訶一怛他蘖多爾訶嚩二合三薩底也合二達磨鉢囉合二底丁以反瑟恥合二多四莎訶

息障品第三

爾時金剛手。又復請問毗盧遮那世尊。而說偈言

云何道場時　淨除諸障者　修眞言行人　無能爲惱害　云何持眞言　云何彼成果　如是發問已
大日尊歎言　善哉摩訶薩　快說如是語　隨汝心所問　今當悉開示　障者自心生　隨順昔慳悋
爲除彼因故　念此菩提心　善除妄分別　從心思所生　憶念菩提心　行者離諸過　常當意思惟
不動摩訶薩　而結彼密印　能除諸障礙　祕密主復聽　繫除散亂風　阿字爲我體　心持訶字門
健陀以塗地　而作大空點　依於嚩臾方　圍以捨囉梵　思念於彼器　大心彌盧山　時時在其上
阿字大空點　先佛所宣說　能縛於大風　大有情諦聽　行者防駛雨　思惟囉字門　大力火光色
威猛熾焰鬘　忿怒持遏伽　隨所起方分　治地與陰雲　斷以慧刀印　昏蔽尋消散　行者無畏心
或作　羅劍　以是金剛橛　一切同金剛　復次今當說　息一切諸障　念眞言大猛　不動大力者

住本漫荼羅　行者或居中　而觀彼形像　頂戴三昧足　彼障當淨除　息滅而不生　或以羅爾迦
微妙共和合　行者造形像　而以塗其身　彼諸執著者　由斯對治故　彼諸根燋然　勿生疑惑心
乃至釋梵尊　不順我教故　尚當爲所焚　況復餘衆生

爾時金剛手白佛言。世尊。如我解佛所說義。我亦如是。知諸聖尊住本漫荼羅位令有威神。由彼如是住故。如來教勅無能障蔽。何以故。世尊。即一切諸眞言三昧耶。所謂住於自種性故。是故眞言門修菩薩行諸菩薩。亦當住於本位作諸事業。又祕密主。若說諸色彼諸聖尊漫荼羅位。諸尊形相。當知亦爾。是則先佛所說。祕密主。於未來世劣慧無信衆生。聞如是說不能信受。以無慧故而增疑惑。彼唯如聞。堅住而不修行。自損損他作如是言。彼諸外道有如是法非佛所說。彼無智人當作如是信解。爾時世尊而說偈言

一切智世尊　諸法得自在　如其所通達　方便度衆生　是諸先佛說　利益求法者　彼愚夫不知
諸佛之法相　我說一切法　所有相皆空　當當住眞言　善決定作業

普通眞言藏品第四

爾時諸執金剛。祕密主爲上首。諸菩薩衆。普賢爲上首。稽首毘盧遮那佛。各各言音請白世尊。樂欲於此大悲藏生大漫荼羅王。如所通達法界清淨門。演說眞言法句

爾時世尊無壞法爾加持。而告諸執金剛及菩薩言。善男子。當說如所通達法界。淨除衆生界眞實語句。時普賢菩薩。即時住於佛境界莊嚴三昧。說無礙力眞言曰　(二一)　南麼三曼多勃馱喃一三麼多引奴揭多二微囉闍達摩涅入闍多三摩訶引摩訶四引莎訶

時慈氏菩薩。住發生普遍大慈三昧。說自心眞言曰　(二二)　南麼三曼多勃馱喃一阿爾單若耶二薩婆薩埵引捨耶弩蘖多三莎訶

爾時虛空藏菩薩。入清淨境界三昧。說自心眞言曰　(二三)　南麼三曼多勃馱喃一阿引迦奢三曼多引弩蘖多

二微質怛𠽾引𠻬羅達羅三莎訶
爾時除一切蓋障菩薩。入悲力三昧。說眞言曰（二四）南麼三曼多勃馱喃去一薩埵係多引毘庾合二弩蘗多二怛藍合二藍藍三莎訶
爾時觀世自在菩薩。入於普觀三昧說自心及眷屬眞言曰（二五）南麼三曼多勃馱喃一薩𡀔怛他引蘗多𡀔盧吉多二羯嚕儜麼也三囉囉囉𤙖若四莎訶
得大勢眞言曰（二六）南麼三曼多勃馱喃一髯髯索二莎合二訶
多羅尊眞言曰（二七）南麼三曼多勃馱喃一羯嚕奴嗢婆合上二吠平二多囇哆𡅏抳三莎訶
大毗倶胝眞言曰（二八）南麼三曼多勃馱喃一薩婆陪也二怛囉合二散儞平𤙖𤙖薩破合二吒也三莎訶
白處尊眞言曰（二九）南麼三曼多勃馱喃一怛他引蘗多微灑也二三婆去吠平三鉢曇摩合二摩履儞平四莎訶
何耶揭㗚嚩眞言曰（三十）南麼三曼多勃馱喃一𤙖佉引陀畔闍二薩破合二吒也三莎訶
時地藏菩薩。住金剛不可壞行境界三昧。說眞言曰（三一）南麼三曼多勃馱喃一訶訶訶二素上怛弩三莎訶
時文殊師利童子。住佛加持神力三昧。說自心眞言曰（三二）南麼三曼多勃馱喃一係係倶摩囉迦二微目吃底二合丁以反鉢他悉體他以反下同多三薩麼合二囉薩麼合二囉四鉢囉合二底丁以反然五莎訶
爾時金剛手住大金剛無勝三昧說自心及眷屬眞言曰（三三）南麼三曼多伐折囉赧一戰拏麼訶路灑赧𤙖平二
忙莽計眞言曰（三四）南麼三曼多伐折囉赧一怛𡅏合二吒輕怛𡅏合二吒輕二若衍底丁以反三莎訶
金剛鎖眞言曰（三五）南麼三曼多伐折囉赧一滿陀滿陀也二慕吒慕吒也伐折路合二嗢婆合去二吠三薩嚩怛囉引鉢囉合二底丁以反訶諦四莎訶
金剛月黶眞言曰（三六）南麼三曼多伐折囉赧一頡喇合二𤙖發吒輕二莎訶
金剛針眞言曰（三七）南麼三曼多伐折囉赧一薩婆達麼儞入喇吠合二達儞平二伐折囉合二素旨嚩入囉泥三莎訶

一切持金剛眞言曰（三八）南麼三曼多伐折囉赧一吽吽吽二發吒發吒發吒髯髯三莎訶
一切諸奉教者眞言曰（三九）南麼三曼多伐折囉赧一係係緊質囉引也徙二訖㗚二合俱儜二合訖㗚二合俱儜二合三
佉那佉那四鉢履布囉也五薩嚩二合鉢囉二合底丁以反然六莎訶
時釋迦牟尼世尊入於寶處三昧說自心及眷屬眞言曰（四十）南麼三曼多勃馱喃一薩婆吃麗二合奢儞入素
捺那二薩婆達摩嚩始多鉢囉二合鉢多三伽伽那三摩引三摩四莎訶
毫相眞言曰（四一）南麼三曼多勃馱喃一嚩囉泥二去嚩囉鉢囉二合鉢帝吽三莎訶
一切諸佛頂眞言曰（四二）南麼三曼多勃馱喃一鑁鑁鑁二吽吽三發吒發吒莎訶
無能勝眞言曰（四三）南麼三曼多勃馱喃一地入㖫二合地入㖫二合㖫㖫四㖫二駬㖫二合三莎訶
無能勝妃眞言曰（四四）南麼三曼多勃馱喃一阿鉢囉二合儞帝二若衍底丁以反怛提帝三莎訶
地神眞言曰（四五）南麼三曼多勃陀喃一鉢㗚二合體反微以梅反無蓋曳二合平三莎訶
毗紐天眞言曰（四六）南麼三曼多勃馱喃一微瑟儜二合吠二莎訶
嚕捺囉眞言曰（四七）南麼三曼多勃馱喃一嚕捺囉二合也二莎訶
風神眞言曰（四八）南麼三曼多勃馱喃一嚩也吠二平莎訶
美音天眞言曰（四九）南麼三曼多勃馱喃一薩囉娑嚩二合底丁以反曳二合三莎訶
禰哩底眞言曰（五十）南麼三曼多勃馱喃一囉吃灑二合娑地鉢多曳二莎訶
閻魔眞言曰（五一）南麼三曼多勃馱喃一梅反無蓋嚩娑嚩二合哆也二莎訶
死王眞言曰（五二）南麼三曼多勃馱喃一沒㗚二合怛也二合吠二平娑嚩二合訶
黑夜神眞言曰（五三）南麼三曼多勃馱喃一迦囉囉怛唎二合曳二平娑嚩二合訶
七母等眞言曰（五四）南麼三曼多勃馱喃一忙怛㗚二合嚟反提也二娑嚩二合訶
釋提桓因眞言曰（五五）南麼三曼多勃馱喃一鑠吃囉二合也二娑嚩二合訶

嚩嚕拏龍王眞言曰（五六）南麼三曼多勃馱喃一阿半鉢多平二婆嚩訶

梵天眞言曰（五七）南麼三曼多勃馱喃一鉢囉合二闍鉢多曳平二婆嚩合三訶

日天眞言曰（五八）南麼三曼多勃馱喃一阿儞怛夜合二耶二婆嚩合三訶

月天眞言曰（五九）南麼三曼多勃馱喃一戰捺羅合二也二婆嚩合三訶

諸龍眞言曰（六十）南麼三曼多勃馱喃一謎伽引設濘曳平二婆嚩訶

難陀跋難陀眞言曰（六一）南麼三曼多勃馱喃一難徒鉢難捺瑜二婆嚩訶

時毘盧遮那世尊樂欲說自教際不空悉地一切佛菩薩母虛空眼明妃眞言曰（六二）南麼三曼多勃馱喃一伽伽上那嚩囉落乞灑合二儞平二伽伽那糝迷三薩婆覩嗢蘖合二多四避婆去囉二婆吠平五入縛合二羅去那讃阿目伽難去六婆嚩訶

復次薄伽梵爲息一切障故住於火生三昧說此大摧障聖者不動主眞言曰（六三）南麼三曼多伐折囉赧一戰拏摩訶路灑儜二薩破吒也三鉾怛囉合二迦四悍引曼引

復次降三世眞言曰（六四）南麼三曼多伐折囉赧一訶訶訶二微薩麼合二曳三薩婆怛他引揭多微灑也三婆嚩四怛麗合二路枳也合二微若也五鉾若六莎訶

諸聲聞眞言曰（六五）南麼三曼多勃馱喃一係睹鉢羅合二底丁以反也合二二微蘖多三羯磨涅入闍多四鉾

諸緣覺眞言曰（六六）南麼三曼多勃馱喃一莎嚩訶

普一切佛菩薩心眞言曰（六七）南麼三曼多勃馱喃一薩婆勃馱菩提薩埵二訶㗚捺耶三寗夜合二吠奢儞四耶麼薩婆尼泥去五莎訶

普世天等諸心眞言曰（六八）南麼三曼多勃馱喃一路迦路迦羯囉也二薩婆提波那伽藥吃沙合二健達婆阿蘇囉蘗嚕茶緊捺囉摩護囉伽儞三訶㗚合二捺耶四寗夜合二羯履灑合二也五微質怛囉合二蘖底丁以反六莎訶

一切諸佛眞言曰（六九）南麼三曼多勃馱喃一薩婆他二微麼底三微枳囉儜四達摩馱睹涅入闍多五糝糝

訶六莎訶

不可越守護門者眞言曰（七十）南麼三曼多勃馱喃一訥囉馱合二履沙合二摩訶路灑儜二上佉那也薩鑁平引怛他蘗多然矩嚕三莎訶

相向守護門者眞言曰（七一）南麼三曼多勃馱喃一係摩訶鉢囉二合戰拏阿毘目佉三蘗喋合二訶拏合二佉那耶四緊質囉也徙五三麼耶麼奴娑麼合二囉六莎訶

結大界眞言曰（七二）南麼三曼多勃馱喃一薩婆怛羅合二努蘗帝二滿馱也徙滿引三摩訶三摩耶喋入闍去帝四娑麼二合囉嬭五阿鉢囉二合底丁以反訶諦六馱迦馱迦七折囉折囉八滿馱滿馱九捺奢儞𤚥十薩婆怛他引蘗多努壤帝十一鉢囉二合嚩囉達摩臘馱微若曳平十二薄伽嚩底丁以反十三微矩麗微矩麗十四麗嚕補履十五毘矩履十六莎訶

菩提眞言曰（七三）南麼三曼多勃馱喃一阿上

行眞言曰（七四）南麼三曼多勃馱喃一阿去

成菩提眞言曰（七五）南麼三曼多勃馱喃一暗

涅槃眞言曰（七六）南麼三曼多勃馱喃一噁

降三世眞言曰（七七）南麼三曼多伐折囉赧一訶去

不動尊眞言曰（七八）南麼三曼多伐折囉赧一悍

除蓋障眞言曰（七九）南麼三曼多勃馱喃一阿去急呼

觀自在眞言曰（八十）南麼三曼多勃馱喃一娑上

金剛手眞言曰（八一）南麼三曼多伐折囉赧一鑁急呼

妙吉祥眞言曰（八二）南麼三曼多勃馱喃一𤚥

虛空眼眞言曰（八三）南麼三曼多勃馱喃一儼[illegible]呼

法界眞言曰（八四）南麼三曼多勃馱喃一藍

大勤勇眞言曰(八五)南麼三曼多勃馱喃一欠平

水自在眞言曰(八六)南麼三曼多勃馱喃一嚩去

多羅尊眞言曰(八七)南麼三曼多勃馱喃一躭

毗俱胝眞言曰(八八)南麼三曼多勃馱喃一勃㗚合二

得大勢眞言曰(八九)南麼三曼多勃馱喃一參

白處尊眞言曰(九十)南麼三曼多勃馱喃一半

何耶揭唎婆眞言曰(九一)南麼三曼多勃馱喃一含

耶輸陀羅眞言曰(九二)南麼三曼多勃馱喃一閻

寶掌眞言曰(九三)南麼三曼多勃馱喃一參

光網眞言曰(九四)南麼三曼多勃馱喃一髯

釋迦牟尼眞言曰(九五)南麼三曼多勃馱喃一婆上

三佛頂眞言曰(九六)南麼三曼多勃馱喃一鉡吒嚂

白傘佛頂眞言曰(九七)南麼三曼多勃馱喃一藍

勝佛頂眞言曰(九八)南麼三曼多勃馱喃一苫

最勝佛頂眞言曰(九九)南麼三曼多勃馱喃一賜

火聚佛頂眞言曰(百)南麼三曼多勃馱喃一怛嚂合二

除障佛頂眞言曰(百一)南麼三曼多勃馱喃一訶啉合二

世明妃眞言曰(百二)南麼三曼多勃馱喃一躭合半合閻

無能勝眞言曰(百三)南麼三曼多勃馱喃一鉡

地神眞言曰(百四)南麼三曼多勃馱喃一微

計設尼眞言曰（百五）南麼三曼多勃馱喃一枳履

烏波計設尼眞言曰（百六）南麼三曼多勃馱喃一儞履

質多童子眞言曰（百七）南麼三曼多勃馱喃一弭履

財慧童子眞言曰（百八）南麼三曼多勃馱喃一係履

除疑怪眞言曰（百九）南麼三曼多勃馱喃一訶婆難

施一切衆生無畏眞言曰（百十）南麼三曼多勃馱喃一囉婆難

除一切惡趣眞言曰（百十一）南麼三曼多勃馱喃一特懵二合婆難

哀愍慧眞言曰（百十二）南麼三曼多勃馱喃一微訶婆難

大慈生眞言曰（百十三）南麼三曼多勃馱喃一[illegible]

大悲纏眞言曰（百十四）南麼三曼多勃馱喃一闇

除一切熱惱眞言曰（百十五）南麼三曼多勃馱喃一繿

不思議慧眞言曰（百十六）南麼三曼多勃馱喃一汙

寶處眞言曰（百十七）南麼三曼多勃馱喃一難上

寶手眞言曰（百十八）南麼三曼多勃馱喃一衫

持地眞言曰（百十九）南麼三曼多勃馱喃一喰

復次眞言曰（百二十）南麼三曼多勃馱喃一[illegible]

寶印手眞言曰（百二十一）南麼三曼多勃馱喃一泛普含反

堅固意眞言曰（百二十二）南麼三曼多勃馱喃一薇

虛空無垢眞言曰（百二十三）南麼三曼多勃馱喃一含

虛空慧眞言曰（百二十四）南麼三曼多勃馱喃一歸

淸淨慧眞言曰（百二五）南麼三曼多勃馱喃一蘖丹都瘨反

行慧眞言曰（百二六）南麼三曼多勃馱喃一地藍

安慧眞言曰（百二七）南麼三曼多勃馱喃一許

諸奉教者眞言曰（百二八）南麼三曼多勃馱喃一地室唎二合唅沒藍二合

諸菩薩所說眞言曰（百二九）南麼三曼多勃馱喃一吃沙二合拏囉闍劍

淨居天眞言曰（百三十）南麼三曼多勃馱喃一滿弩囉麼二達摩三婆去嚩三微婆上嚩迦那四三二五莎訶

羅刹娑眞言曰（百三一）南麼三曼多勃馱喃一吃嚂二合計履

諸荼吉尼眞言曰（百三二）南麼三曼多勃馱喃一訶唎二合訶

諸藥叉女眞言曰（百三三）南麼三曼多勃馱喃一藥吃叉二合尾儞夜二合達㗚

諸毗舍遮眞言曰（百三四）南麼三曼多勃馱喃一比旨比旨

諸部多眞言曰（百三五）南麼三曼多勃馱喃一喁縊喁伊上懵散寧去

諸阿脩羅眞言曰（百三六）南麼三曼多勃馱喃一囉吒知紆反囉吒同上特懵躭沒囉波囉二合

諸摩睺羅伽眞言曰（百三七）南麼三曼多勃馱喃一蘖囉藍尾羅藍二

諸緊那羅眞言曰（百三八）南麼三曼多勃馱喃一訶散難微訶散難

諸人眞言曰（百三九）南麼三曼多勃馱喃一壹車去鉢嚂二麼弩輕麼曳迷去莎訶

祕密主。是等一切眞言我已宣說。是中一切眞言之心。汝當諦聽。所謂阿字門。念此一切諸眞言心最爲無上。是一切眞言所住。於此眞言而得決定

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第二

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第三 (麗染)(宋詩)(元詩)(明賢)

世間成就品第五

爾時世尊.復告執金剛祕密主.而說偈言

如眞言教法　成就於彼果　當字字相應　句句亦如是　作心想念誦　善住一落叉　初字菩提心
第二名爲聲　句想爲本尊　而於自處作　第三句當知　卽諸佛勝句　行者觀住彼　極圓淨月輪
於中諦誠想　諸字如次第　中置字句等　而想淨其命　命者所謂風　念隨出入息　彼等淨除已
作先持誦法　善住眞言者　次一月念誦　行者前方便　一一句通達　諸佛大名稱　說此先受持
次當隨所有　奉塗香華等　爲成正覺故　回向自菩提　如是於兩月　眞言當無畏　次滿此月已
行者入持誦　山峯或牛欄　及諸河潬等　四衢道一室　神室大天室　彼曼荼羅處　悉如金剛宮
是處而結護　行者作成就　卽以中夜分　或於日出時　智者應當知　有如是相現　鉡聲或鼓音
若復地震動　及聞虛空中　有悅意言辭　應知如是相　悉地總如意　諸佛兩足尊　宣說於彼果
住是眞言行　必定當成佛　應一切種類　常念持眞言　古佛大仙說　故應當憶念

悉地出現品第六

爾時世尊.復觀諸大衆會.爲欲滿足一切願故.復說三世無量門決定智圓滿法句

虛空無垢無自性　能授種種諸巧智　由本自性常空故　緣起甚深難可見　於長恒時殊勝進
隨念遍與無上果　譬如一切趣宮室　離依虛空無著行　此淸淨法亦如是　三有無餘淸淨生
昔勝生嚴修此故　得有一切如來行　非他句有轉可得　作世遍明如世尊　說極淸淨修行法

深廣無盡離分別

爾時毗盧遮那世尊說是偈已。觀察金剛手等諸大衆會。告執金剛言。善男子。各各當現法界神力悉地流出句。若諸衆生見如是法。歡喜踊躍得安樂住。如是說已。諸執金剛爲毗盧遮那世尊。作禮。如是法主依所教勅。復請佛言。唯願世尊哀愍我等。示現悉地流出句。何以故。於尊者薄伽梵前。而自宣示所通達法。非是所宜。善哉世尊。唯願利益安樂未來衆生故。時薄伽梵毗盧遮那。告一切諸執金剛言。善哉善哉善男子。如來所說法毗奈耶稱讃一法所謂有羞。若有羞善男子善女人。見如是法。速生二事。謂不作所不應作。衆所稱讃。復有二事。謂所未至令至。得與佛菩薩同處。復有二事。謂住尸羅。生於人天。善哉諦聽善思念之。我當宣說眞言成就流出相應句。諸流出相應句。眞言門修菩提諸菩薩。速於是中。當得眞言悉地。若行者見漫荼羅。尊所印可。成就眞語。發菩提心。深信。慈悲。無有慳悋。住於調伏。能善分別從緣所生。受持禁戒。善住衆學。具巧方便。勇健。知時非時。好行惠捨。心無怖畏。勤修眞言行法。通達眞言實義。當樂坐禪。樂作成就。祕密主。譬如欲界。有自在悅滿意明。乃至一切欲處天子。於此迷醉。出衆妙雜類戲笑。及現種種雜類受用遍受用。授與自所變化他化自在天等。而亦自受用之。又善男子。如摩醯首羅天。有勝意生明。能作三千大千世界衆生利益。化一切受用遍受用。授與淨居諸天。亦復自受用之。又如幻術眞言。能現種種園林人物。如阿修羅眞言。現幻化事。如世咒術。攝毒及寒熱等。摩怛哩神眞言。能作衆生疾疫災癘。及世間呪術。攝除衆毒及寒熱等。能變熾火而生清涼。是故善男子。當信如是流出句眞言威德。此眞言威德。非從眞言中出。亦不入衆生。不於持誦者處而有可得。善男子。眞言加持力故。法爾而生。無所過越。以三昧不越故。甚深不思議緣生理故。是故善男子。當隨順通達不思議法性。常不斷絕眞言道

爾時世尊。復住三世無礙力依。如來加持不思議力依。莊嚴清淨藏三昧。即時世尊。從三摩鉢底中。出無盡界無盡語表。依法界力無等力正等覺信解。以一音聲四處流出。普遍一切法界。與虚空等。無所不至。眞言曰 (百四十)

南麼薩婆怛他(引)蘖帝弊(毘庾反一)微濕嚩(二合)目契弊(毘也反二)薩婆他(三)阿阿(引)闇噁(四)

正等覺心。從是普遍。即時一切法界諸聲聞從正等覺標幟之音。而互出聲。諸菩薩聞是已。得未曾有開敷眼。發

微妙言音。於一切智離熱者前。而說頌曰

奇哉眞言行　能具廣大智　若遍布此者　成佛兩足尊　是故勤精進　於諸佛語心　常作無間修
淨心離於我　爾時薄伽梵　復說此法句　於正等覺心　而作成就者　於園苑僧房　若在巖窟中
或意所樂處　觀彼菩提心　乃至初安住　不生疑慮意　隨取彼一心　以心置於心　證於極淨句
無垢安不動　不分別如鏡　現前甚微細　若彼常觀察　修習而相應　乃至本所尊　自身像皆現
第二正覺句　於鏡漫荼羅　大蓮華王座　深邃住三昧　總持髮髻冠　圍繞無量光　離妄執分別
本寂如虛空　於彼中思惟　作攝意念誦　一月修等引　持滿一落叉　是爲最初月　持眞言法則
次於第二月　奉塗香華等　而以作饒益　種種衆生類　又復於他月　捨棄諸利養　時彼於瑜伽
思惟而自在　願一切無障　安樂諸群生　樂欲成如來　所稱讚圓果　或滿足一切　有情衆希願
應理無障蓋　而生是攀緣　傍生相噉食　所有苦永除　常令諸鬼界　飲食皆充滿　地獄中受苦
種種諸楚毒　當願速除滅　以我功德故　及餘無量門　數數心思惟　發廣大悲愍　三種加持句
想念於一切　心誦持眞言　以我功德力　如來加持力　及與法界力　周遍衆生界　諸念求義利
悉皆饒益之　彼一切如理　所念皆成就

於是薄伽梵卽於爾時。說虛空等力虛空藏轉明妃曰（百四一）南麼薩婆怛他引蘖帝弊毘庾反一微濕嚩二合目契弊毘也反二薩婆他三欠四嗢弩蘖帝薩叵二合囉係門五伽伽娜劒六莎訶

持此三轉。隨彼所生。善願皆亦成就

行人於滿月　次入作持誦　山峯牛欄中　寒林或河灘　四衢獨樹下　忙怛哩天室　一切金剛色
壇淨同金剛　彼中諸障者　攝伏心迷亂　四方相周帀　一門及通道　金剛互連屬　金剛結相應
門門二守護　不可越相向　擬手而上指　朱目奮怒形　殷勤畫隅角　輪羅簇光印　中妙金剛座
方位正相直　其上大蓮華　八葉鬚蘂敷　當結金剛手　金剛之慧印　稽首一切佛　數數堅誓願

應護持是處　及淨諸藥物　於此夜持誦　清淨無障礙　或於中夜分　或於日出時　彼藥物當轉
圓光普暉焰　眞言者自取　遊步於大空　住壽大威德　於生死自在　行於世界頂　現種種色身
具德吉祥者　展轉而供養　眞言所成物　是名爲悉地　以分別藥物　成就無分別

祕密主。一切世界。諸現在等如來應正等覺。通達方便波羅蜜。彼如來知一切分別本性空。以方便波羅蜜力故。而於無爲以有爲爲表。展轉相應而爲衆生。示現遍於法界。令得見法安樂住。發歡喜心。或得長壽。五欲嬉戲而自娛樂。爲佛世尊而作供養。讚如是句。一切世人所不能信。如來見此義利故。以歡喜心。說此菩薩眞言行道次第法則。何以故。於無量劫勤求。修諸苦行所不能得。而眞言門行道諸菩薩。卽於此生而獲得之。復次祕密主。眞言門修菩薩行菩薩如是計都揭伽。傘蓋。履屣。眞陀摩尼。安膳那藥。盧遮那等。持三落叉而作成就。亦得悉地。祕密主。若具方便。善男子善女人。隨所樂求而有所作。彼唯心自在而得成就。祕密主。諸樂欲因果者。祕密主。非彼愚夫。能知眞言諸眞言相。何以故

說因非作者　彼果則不生　此因因尚空　云何而有果　當知眞言果　悉離於因業　乃至身證觸
無相三摩地　眞言者當得　悉地從心生

爾時金剛手白佛言。世尊。唯願復說此正等覺句悉地成就句。諸見此法善男子善女人等。心得歡喜。受安樂住。不害法界。何以故。世尊。法界者。一切如來應正等覺。說名卽不思議界。是故世尊。眞言門修菩薩行諸菩薩得是通達法界不可分析破壞。如是說已。世尊告執金剛祕密主言。善哉善哉祕密主。汝復善哉。能問如來如是義。汝當諦聽善思念之。吾今演說。祕密主言。如是世尊。願樂欲聞。佛告祕密主。以阿字門而作成就。若在僧所住處。若山窟中。或於淨室。以阿字遍布一切支分持三落叉。次於滿月。盡其所有而以供養。乃至普賢菩薩。文殊師利。執金剛等。或餘聖天現前。摩頂唱言。善哉行者。應當稽首作禮。奉閼伽水。卽時得不忘菩提心三昧。又以如是身心輕安。而誦習之。當得隨生。心清淨。身清淨。置於耳上持之。當得耳根清淨。以阿字門作出入息。三時思惟。行者爾時能持。壽命長劫住世。願囉闍等之所愛敬。卽以訶字門作所應度者。授與鉢頭摩華。自持商佉而互相觀。卽生

歡喜

爾時毗盧遮那世尊。復觀一切大會。告執金剛祕密主言。金剛手。有諸如來意生。作業戲行舞。廣演品類。攝持四界安住心王。等同虛空。成就廣大見非見果。出生一切聲聞。及辟支佛。諸菩薩位。令眞言門修行諸菩薩。一切希願皆悉滿足。具種種業。利益無量衆生。汝當諦聽善思念之。吾今演說。祕密主。云何行舞。而作一切廣大成壞果。持眞言者一切親證耶。爾時世尊而說頌曰

行者如次第　先作自眞實　如前依法住　正思念如來　阿字爲自體　幷置大空點　端嚴遍金色
四角金剛標　於彼中思念　一切處尊佛　是諸正等覺　說自眞實相　修行不疑慮　自眞實相生
當得爲世間　一切衆利樂　具廣大希有　住於如幻句　無始時宿植　無智諸有迫　行者成等引
一切皆消除　若觀於彼心　無上菩提心　持眞言業故　於淨非淨果　應理常無染　如蓮出淤泥
何況於自體　得成人中尊

爾時毗盧遮那世尊。又復住於降伏四魔金剛戲三昧。說降伏四魔解脫六趣。滿足一切智智金剛字句　（百四

二）南麽三曼多勃馱喃。阿（去急呼）味囉吽欠（帶欠字呼之）

時金剛手祕密主等諸執金剛。普賢等諸菩薩。及一切大衆。得未曾有開敷眼。稽首一切薩婆若。而說偈言

此諸佛菩薩　救世諸車載　由是一切佛　菩薩救世者　及與因緣覺　聲聞害煩惱　能遍所行地
起種種神通　彼得無上智　正覺無上智　是故願廣說　此致諸方便　及與布想等　種種衆事業
諸志求大乘　無上眞言行　見法安住者　當得歡喜住　說如是偈已　大日世尊言　菩皆應諦聽
一心住等引　大金剛地際　時加持下身　爲說此法故　而現菩提座　最勝阿字句　大因陀羅輪
當知內外等　金剛漫荼羅　中思惟一切　說名瑜伽座　阿字第一命　是爲引攝句　當安大空點
能攝授諸果　行者於一月　結金剛慧印　三時作持誦　摧毀無智城　得不動堅固　天脩羅莫壞
乃至隨自意　增益事成就　行者一切當　漫荼羅中作　金色光明身　上持髮髻冠　正覺住三昧

名大金剛句　金剛蓮華刀　素鵝及金地　眞陀末尼寶　是等衆器物　觀大因陀羅　而作諸悉地
今說攝持法　一切一心聽　行者一緣想　八峯彌盧山　上觀妙蓮華　立金剛智印　瑜伽者於上
字門威焰光　而用置其頂　安住不傾動　百轉所持藥　行者應服之　先世業生疾　是等悉除愈
佛子應復聽　第一嚩字門　雪乳商佉色　而自臍中起　鮮白蓮華臺　而於彼中住　甚深寂然定
秋夕素月光　如是漫荼羅　諸佛說希有　思惟以純白　輪圓成九重　住於霏霧中　除一切熱惱
淨乳猶珠鬘　水精與月光　普遍而流注　一切處充滿　行者心思惟　出離諸障毒　如是於圓壇
等引作成就　乳酪生熟酥　頗胝迦珠鬘　藕水等衆物　次第成悉地　當得無量壽　應現殊特身
一切患除息　天人咸恭敬　多聞成總持　善慧淨無垢　由斯作成就　速登悉地果　是名寂災者
吉祥漫荼羅　第一攝持相　安以大空點　囉字勝眞實　佛說火中上　所有衆罪業　應受無擇報
瑜祇善修者　等引皆消除　所住三角形　悅意遍形赤　寂然周焰鬘　三角在其心　相應觀彼中
囉字大空點　智者如瑜伽　以此成衆事　日曜諸眷屬　及作一切火　攝取發怨對　消枯衆支分
是等所應作　皆於智火輪　訶字第一實　風輪之所生　及與因業果　諸種子增長　彼一切摧壞
幷以大空點　今說彼色像　深玄大威德　示現暴怒形　焰鬘普周徧　住漫荼羅位　智者觀眉間
深青半月輪　吹動幢幡相　而於彼中想　最勝訶字門　住彼漫荼羅　成就所應事　作一切義利
應現諸衆生　不捨於此身　逮得神境通　遊步大空位　而成身祕密　天耳眼根淨　能開深密處
住此一心壇　而成衆事業　菩薩大名稱　初坐菩提場　降伏魔軍衆　諸因不可得　因無性無果
如是業不生　彼三無性故　而得空智慧　大德正遍知　宣說於彼色　佉字及空點　尊勝虛空空
秉持慧刀印　所作速成就　法輪及羂索　朅伽那剌遮　幷目朅嵐等　不久成斯句

爾時毘盧遮那世尊。觀大衆會。告執金剛祕密主。而說偈言

若於眞言門　修行諸菩薩　阿字爲自身　內外悉同等　諸義利皆捨　等礫石金寶　遠離衆罪業

及與貪瞋等　當得俱淸淨　同諸佛牟尼　能作諸利益　離一切諸過　復次於嚩字　行者依瑜伽
解作業儀式　利益衆生故　內身救世者　一切皆如是　心水滿盈滿　潔白猶雪乳　當生決定意
出於一切身　悉遍諸毛孔　流注極淸淨　從此內充溢　遍滿於大地　以是悲愍水　觀世苦衆生
諸有飮用者　或復身所觸　一切皆決定　得成就菩提　思惟在等引　一切囉字門　周輪生焰光
寂然而普照　瑜祇光外轉　而遍一切處　利世隨樂欲　行者起神通　身上囉字門　嚩字齎輪中
出火而降雨　俱時而應現　地獄極寒苦　囉字能消除　嚩字鎔熾然　住眞言法故　囉字爲下身
訶字爲標幟　作業速成就　救重罪衆生　住大因陀羅　作水龍事業　一切攝除等　眞言者勿疑
風遍一切處　一切悉團壞　此種種雜類　各各衆事業　色漫荼羅中　依法而作之　觸心而念持
速得意根淨　輕舉習經行　中誦獲神足　宴坐觀阿字　想在於耳根　念持滿一月　當得耳淸淨
祕密主。如是等。意生悉地句。祕密主觀此。無有形色。種種雜類衆行衆生。於思念頃纔轉誦之。能作如是一切善業種子。復次祕密主。如來無所不作。於眞言門修行諸菩薩。同於影像。隨順一切處。隨順一切衆生心。悉住其前。令諸有情咸得歡喜。皆由如來無分別意離諸境界故。而說偈言

無時方造作　離於法非法　能授悉地句　眞言行發生　是故一切智　如來悉地果　最爲尊勝句
應當作成就

成就悉地品第七

時吉祥金剛　奇特開敷眼　手轉金剛印　流散如火光　其明普遍照　一切諸佛刹　微妙音稱歎
法自在牟尼　說諸眞言行　彼行不可得　眞言從何來　所去至何所　諸佛說如是　更無過上句
一切法歸趣　如衆流世海

如是說已。世尊告持金剛祕密主言

摩訶薩意處　說名漫荼羅　諸眞言心位　了知得成果　諸有所分別　悉皆從意生　分辯白黃赤
是等從心起　決定心歡喜　說名內心處　眞言住斯位　能授廣大果　念彼蓮華處　八葉鬚蘂敷
華臺阿字門　焰鬘皆妙好　光暉普周遍　照明衆生故　如合會千電　持佛巧色形　深居圓鏡中
應現諸方所　猶如淨水月　普現衆生前　知心性如是　得住眞言行　次於其首上　頂會交際中
標以大空點　而思惟闇字　妙好淨無垢　如水精月電　說寂靜法身　一切所依持　諸眞言悉地
能現殊類形　得天樂解脫　逮見如來句　囉字爲眼界　輝燭猶明燈　俛頸小低頭　舌近於齶間
而以觀心處　當心現等引　無垢妙淸淨　圓鏡常現前　如是眞實心　古佛所宣說　照了心明道
諸色皆發光　眞言者當見　正覺兩足尊　若見成悉地　第一常恆體　從此次思惟　轉此囉字門
還字大空點　置之於眼位　見一切空句　得成不死句　若欲廣大智　或起五神通　長壽童子身
成就持明等　眞言者未得　由不隨順之　眞言發起智　是最勝實知　一切佛菩薩　救世之庫藏
由是諸正覺　菩薩救世者　及諸聲聞等　遊涉他方所　一切佛刹中　皆作如是說　故得無上智
佛無過上智

轉字輪漫荼羅行品第八

爾時毘盧遮那世尊。觀察一切大會。以修習大慈悲眼。觀察衆生界。住甘露生三昧。時佛由是定故。復說一切三世無礙力明妃曰　（百四三一）怛姪他（一）伽伽娜三迷（二）阿鉢囉（二合）底（丁以反）三迷（三）薩婆怛他（引）蘗多三麼哆弩蘗帝（四）伽伽那三摩（五）嚩囉落吃灑（二合）嬭（六平）莎訶

善男子。以此明妃如來身無二境界。而說偈言

由是佛加持　菩薩大名稱　於法無罣礙　能滅除衆苦

時毘盧遮那世尊。尋念諸佛本初不生。加持自身及與持金剛者。告金剛手等上首執金剛言。善男子。諦聽轉字

輪漫荼羅行品。眞言門修行諸菩薩。能作佛事普現其身。爾時執金剛。從金剛蓮華座。旋轉而下。頂禮世尊而讚歎言

歸命菩提心　歸命發菩提　稽首於行地　地波羅蜜等　恭禮先造作　歸命證空者

祕密主如是歎已。而白佛言。唯願法王。哀愍護念我等而演說之。爲利益衆生故。如所說眞言修圓滿故。如是說已。毘盧遮那世尊。告執金剛祕密主言

我一切本初　號名世所依　說法無等比　本寂無有上

時佛說此伽他。如是而作加持。以加持故。執金剛者及諸菩薩。能見勝願佛菩提座。世尊猶如虛空無戲論。無二行瑜伽相。是業成熟。即時世尊身諸支分。皆悉出現是字。於一切世間出世間。聲聞緣覺靜慮思惟。勤修成就悉地。皆同請命同種子。同依處同救世者（一百四四）南麼三曼多勃馱喃一阿

善男子。此阿字。一切如來之所加持。眞言門修菩薩行諸菩薩。能作佛事普現色身。於阿字門。一切法轉。是故祕密主。眞言門修菩薩行諸菩薩。若欲見佛。若欲供養。欲證發菩提心。欲與諸菩薩同會。欲利益衆生。欲求悉地。欲求一切智智者。於此一切佛心。當勤修習

爾時毘盧遮那世尊。復決定說大悲藏生漫荼羅王。敷置聖天之位。三昧神通眞言行。不思議法。彼阿闍梨。先住阿字一切智門。持修多羅。稽首一切諸佛。東方申之旋轉而南。以及西方。周於北方。次作金剛薩埵。以執金剛加持自身。或以彼印或以囉字。入於內心。置漫荼羅。如是第二漫荼羅。亦本寂加持自身故。無二瑜伽形。如來形容性形。次捨所行道二分量大處。遠離二分住如來位。東方申修多羅。周帀旋轉。所餘二漫荼羅。亦當以是方便作諸事業。復以大日加持自身。念廣法界而布衆色。眞言行者應以潔白爲先。說伽陀曰

以此淨法界　淨除諸業生　自體如如來　遠離一切過　如是而觀想　思惟囉字門　寂然光焰鬘

淨月而依色　第二布赤色　行者當憶持　思惟字照明　本無大空點　煥炳初日暉　最勝無能壞

第三眞言者　次還布黃色　定意遍字門　當隨於法教　身相黃眞金　正受害諸毒　光明遍一切

金色同牟尼　次當布青色　超度於生死　思惟嚩字門　大寂菩提座　身色如虹霓　除一切怖畏
最後布黑色　其彩甚玄妙　思惟訶字門　周遍生圓光　如劫災猛焰　寶冠舉手印　能怖一切惡
降伏諸魔軍

爾時世尊毘盧遮那。從三昧起。住於無量勝三昧。佛於定中。顯示遍一切無能害力明妃。於一切如來境界中生。
其明曰（百四五）　南麼薩婆怛他引蘖帝弊毘也反一 薩婆目契弊二同上 阿婆迷三 鉢囉迷四 阿者麗五 伽伽泥薩麼二合囉嬭六平 薩婆怛羅引二合 弩蘖帝七 莎訶

次調彩色頂禮世尊及般若波羅蜜。持此明妃八遍。從座而起。旋繞漫茶羅。入於內心。以大慈大悲力。念諸弟子。阿闍梨復以羯磨金剛薩埵。加持自身。以嚩字門及施願金剛已。當畫大悲藏生大曼茶羅。彼安祥在於內心而造大日世尊。坐白蓮華首戴髮髻。鉢吒爲裙。上被綃縠。身相金色周身焰鬘。或以如來頂印。或以字句。謂阿字門。東方一切諸佛。以阿字門及大空點。伊舍尼方。一切如來母虛空眼。應書伽字。火天方。一切諸菩薩。畫眞陀摩尼寶。或置伽字。夜叉方觀世自在。蓮華印幷畫一生補處菩薩眷屬。或作婆字。焰摩方。越三分位置金剛慧印。持金剛祕密主幷眷屬。或書嚩字。彼復棄三分位。畫一切諸執金剛印。或書字句。所謂絣字。次涅哩底方。於大日如來下。作不動尊。坐於石上。手持羂索慧刀。周帀焰鬘。擬作障者。或置彼印。或書字句。所謂唅字。風天方。降三世尊。摧大障者。上有光焰。大勢威怒猶如焰摩。其形黑色。於可怖中極令怖畏。手轉金剛。或作彼印。或書字句。所謂訶字長聲 次於四方。畫四大護。帝釋方。名無畏結護者。金色白衣。面現少忿怒相。手持檀茶。或作彼印。或置字句。所謂作嚩字。夜叉方。名壞諸怖結護者。白色素衣。手持竭伽。幷有光焰。能壞諸怖。或畫彼印。或置字句。所謂博字。龍方名難降伏結護者。亦如無優華色。被朱衣面像微笑。在光焰中。而觀一切衆會。或置彼印。或置字句。所謂索字。焰摩方。名金剛無勝結護者。黑色玄衣。毘俱胝形。眉間浪文。上戴髮冠。自身威光照衆生界。手持檀茶。能壞大爲障者。或作彼印。或置字句。所謂吃讖二四字。及一切眷屬使者。皆坐白蓮華上。眞言者如是敷置已。次第出外。於第二分畫釋迦種牟尼王。被袈裟衣。三十二導師相。爲說最勝教施一切衆生無畏故。或袈裟鉢印。或以字句。所謂婆字。

次於外漫荼羅。以法界性加持自身。發菩提心。彼捨三分位。當三作禮。心念大日世尊。如前調色。於第三分。帝釋方。作施願金剛童子形。三昧手持靑蓮華。上置金剛慧杵。以諸瓔珞而自莊嚴。上妙絹縠爲裙、極輕細者。用爲上服。身鬱金色。頂上有五髻。或置密印。或置字句。眞言曰 (百四六) 南麼三曼多勃馱喃一𤙖

於其右邊。光網童子。一切身分皆悉圓滿。三昧手執持寶冠。慧手持鉤。或置彼印。或書字句。所謂染字。依焰摩方。除一切蓋障菩薩。金色髮冠。持如意寶。或畫彼印或置字句。所謂噁字長聲 夜叉方。地藏菩薩。色如鉢孕遇華。手持蓮華。以諸瓔珞莊嚴。或置彼印。或置字句。所謂伊字。龍方虛空藏。白色白衣身有光焰。以諸瓔珞莊嚴。手持堨伽。或置彼印。或置字句。所謂伊字長聲

眞言者宴坐　安住於法界　我即法界性　而住菩提心　向於帝釋方　結金剛慧印　次作金剛事
殷勤修供養　現諸佛救世　三昧耶印等　念一切方所　三轉持眞言　依法召弟子　向壇而作淨
授彼三自歸　住勝菩提心　當爲諸弟子　結法界性印　次結法輪印　一心同彼體　繒帛覆面門
而起悲愍心　令作不空手　圓滿菩提故　耳語而告彼　無上正等戒　次當爲彼結　正等三昧印
授彼開敷華　令發菩提意　隨其所至處　而教於學人　作如是要誓　一切應傳授
具德持金剛　又請白世尊　唯願人中勝　演說灌頂法　爾時薄伽梵　安住於法界　而告金剛手
一心應諦聽　我說諸法教　勝自在攝持　師以如來性　加持於自體　或復以密印　次應召弟子
令住法界性　大蓮華王中　以四大菩薩　所加持寶瓶　結支分生印　而用灌其頂　髻中寶授與
大空闇字門　心置無生句　曾表無垢字　或一切阿字　髮髻金色光　住白蓮華臺　等同於仁者

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第四　麗　宋　元　明　(宮)

密印品第九

爾時薄伽梵毗盧遮那。觀察諸大衆會。告執金剛祕密主言。祕密主。有同如來莊嚴具。同法界趣標幟。菩薩由是嚴身故。處生死中巡歷諸趣。於一切如來大會。以此大菩提幢而標幟之。諸天龍夜叉乾達婆阿蘇囉揭嚕荼緊那囉摩睺羅伽人非人等。敬而遠之受教而行。汝今諦聽極善思念。吾當演說。如是說已。金剛手白言。世尊今正是時。世尊今正是時

爾時薄伽梵。卽便住於身無害力三昧。住斯定故。說一切如來入三昧耶遍一切無能障礙力無等三昧力明妃曰

(百四七)　南麼三曼多勃馱喃一阿三迷二呾嚟二合三迷三三麼曳四莎訶

祕密主。如是明妃。示現一切如來地。不越三法道界圓滿地波羅蜜。是密印相。當用定慧手。作空心合掌。以定慧二虛空輪。並合而建立之。頌曰

此一切諸佛　救世之大印　正覺三昧耶　於此印而住

又以定慧手爲拳。虛空輪入於掌中。而舒風輪。是爲淨法界印。眞言曰

(百四八)　南麼三曼多勃陀喃一達摩駄睹二薩嚩二合婆嚩句痕三

復以定慧手。五輪皆等迭翻相鉤。二虛空輪。首俱相向。頌曰

是名爲勝願　吉祥法輪印　世依救世者　悉皆轉此輪

眞言曰

(百四九)　南麼三曼多勃馱喃一伐折囉二合呾麼二合句痕

復舒定慧二手。作歸命合掌。風輪相捻。以二空輪加於上。形如揭伽。頌曰

此大慧刀印　一切佛所說　能斷於諸見　謂俱生身見

眞言曰（百五十）南麽三曼多勃馱喃一摩訶塌伽䟦囉閣二達摩珊捺囉奢合二迦婆訶閣三 薩迦耶捺哰合二瑟
致二合聲吃反諾入迦四怛他引蘗多地目吃底丁以反爾入社多五䟦羅引伽嗟摩爾入社多泮
復以定慧二手。作虛心合掌。屈二風輪。以二空輪絞之。形如商佉。頌曰
　此名爲勝願　吉祥法螺印　諸佛世之師　菩薩救世者　皆說無垢法　至寂靜涅槃
眞言曰（百五一）南麽三曼多勃馱喃一暗
復以定慧手。相合舒散之。猶如健吒。二地輪二空輪相持。令火風輪和合。頌曰
　吉祥顯蓮華　諸佛救世者　不壞金剛座　覺悟名爲佛　菩提與佛子　悉皆從是生
眞言曰（百五二）南麽三曼多勃馱喃一阿去急呼
復以定慧手。五輪外向爲拳。建立火輪。舒二風輪。屈爲鉤形。在傍持之。虛空地輪並面直上。水輪交合如跋折囉。
頌曰
　金剛大慧印　能壞無智城　喚覺睡眠者　天人不能壞
眞言曰（百五三）南麽三曼多伐折羅赧二鍐
復以定慧手。五輪內向爲拳。建立火輪。以二風輪置傍。屈二虛空相並。頌曰
　頂印摩訶印　所謂如來頂　適纔結作之　即同於世尊
眞言曰（百五四）南麽三曼多勃馱喃一許許
復次以智慧手爲拳。置於眉間。頌曰
　此名毫相藏　佛常滿願印　以纔作此故　即同人中勝
眞言曰（百五五）南麽三曼多勃馱喃一阿去急呼痕惹急呼
作僧伽胝。持鉢相應。以定慧手。俱在臍間。是名釋迦牟尼大鉢印
眞言曰（百五六）南麽三曼多勃馱喃一婆上急呼

復次以智慧手。上向而作施無畏形。頌曰

　能施與一切　衆生類無畏　若結此大印　名施無畏者

眞言曰　（百五七）　南麼三曼多勃馱喃一薩婆他二爾娜爾娜三佩也那奢那四莎縛訶

復次以智慧手。下垂作施願形。頌曰

　如是與願印　世依之所說　適纔結此者　諸佛滿其願

眞言曰　（百五八）　南麼三曼多勃馱喃一嚩囉娜伐折囉引二合怛麼二合迦三莎嚩二合訶

復次以智慧手爲拳。而舒風輪。以毗俱胝形。住於等引。頌曰

　以如是大印　諸佛救世尊　恐怖諸障者　隨意成悉地　由結是印故　大惡魔軍衆　及餘諸障者

　馳散無所礙

眞言曰　（百五九）　南麼三曼多勃馱喃一摩訶引沫羅嚩底丁以反二捺奢嚩路嗢婆二合吠平三摩訶引昧怛囉也二合毗庾二合嗢蘖二合底丁以反四莎嚩二合訶

復次以智慧手爲拳。而舒火輪水輪。以虛空輪。而在其下。頌曰

　此名一切佛　世依悲生眼　想置於眼界　智者成佛眼

眞言曰　（百六十）　南麼三曼多勃馱喃一伽伽那嚩羅落吃灑二合一傳二上迦嚕傳麼耶三怛他蘖多斫吃芻二合四莎嚩二合訶

復次以定慧手。五輪內向爲拳。而舒風輪。圓屈相合。頌曰

　此勝願索印　壞諸造惡者　眞言者結之　能縛諸不善

眞言曰　（百六一）　南麼三曼多勃馱喃一係係摩訶引播奢二鉢羅二合娑哆那履也二合三薩埵馱睹四微模訶迦五怛他引蘖多引地目吃底丁以反二合六儞入社多七莎訶

復次以定慧手。一合爲拳。舒智慧手風輪。屈第三節。猶如環相。頌曰

如是名鉤印　諸佛救世者　招集於一切　住於十地位　菩提大心者　及惡思衆生

眞言曰（百六二）南麼三曼多勃馱喃一阿去急呼薩婆怛囉引合二鉢囉二合底丁以反訶諦二怛他蘖黨炬奢三菩提淅囉耶二合鉢履布囉迦四莎訶

即此鉤印。舒其火輪。而少屈之。是謂如來心印。彼眞言曰（百六三）南麼三曼多勃馱喃一壞怒嗢婆二合二嚩二合莎嚩合二訶

復以此印。舒其水輪。而竪立之。名如來臍印。彼眞言曰（百六四）南麼三曼多勃馱喃一阿沒嘌二合覩嗢婆二合嚩二莎嚩二合訶

即以此印。直舒水輪。餘亦竪之。名如來腰印。彼眞言曰（百六五）南麼三曼多勃馱喃一怛他引蘖多二婆嚩二莎嚩合二訶

復以定慧手。作空心合掌。以二風輪。屈入於內。二水輪亦然。其二地輪令少屈。而伸火輪。此是如來藏印。彼眞言曰（百六六）南麼薩婆怛他引蘖帝弊毘也反一藍嚂嗒略二莎嚩二合訶

即以此印。散其水輪。向上置之。名大界印。彼眞言曰（百六七）南麼三曼多勃馱喃一麗嚕補履微矩麗二莎訶

即以此印。其二火輪。鉤屈相合。散舒風輪。名無堪忍大護印。彼眞言曰（百六八）南麼薩婆怛他引蘖帝弊毘也反下同一薩婆陀也微蘖帝弊二微濕嚩目契弊三薩婆他引四唅欠五囉吃灑二合摩訶引沫麗六薩婆怛他引蘖多本抳也二合儞入社帝吽吽八怛囉引二吒輭怛囉吒九同上阿鉢囉二合底丁以反訶諦十莎訶

復以風輪。而散舒之。空輪並入於其中。名普光印。彼眞言曰（百六九）南麼三曼多勃馱喃一入嚩二合羅引摩履儞二平怛他引蘖哆嘌旨三二合莎訶

又以定慧手。作空心合掌。以二風輪。持火輪側。名如來甲印

屈二水輪。二空輪合。入掌中押二水輪甲上。是名如來舌相印。眞言曰（百七十）南麼三曼多勃馱喃一怛他引蘖多爾訶嚩二合薩底也二合達摩鉢囉二合底瑟恥二合多三莎訶

以此印。合風水輪。屈而相捻。空輪向上而少屈之。火輪正直相會。地輪亦如是。名如來語門印。彼眞言曰（百七一）南麼三曼多勃馱喃一怛他引蘖多摩訶引𡆗無各反吃怛囉三合二微濕𡆗二合壞引蘖摩護娜也三莎訶

如前印。以二風輪。屈入掌中。向上。名如來牙印。彼眞言曰（百七二）南麼三曼多勃馱喃一怛他引蘖多能去瑟吒囉三合二囉娑囉娑引鈝囉二合三參鉢囉引二合博迦四薩婆怛他引蘖多五微灑也參婆上𡆗六莎訶

又如前印相。以二風輪。向上置之。屈第三節。名如來辯說印。彼眞言曰（百七三）南麼三曼多勃馱喃一阿振底也二合一那部二合二多二路波𡆗引增三麼哆上鉢囉引二合鉢多二合三微輸上馱婆𡆗二合囉四莎𡆗二合訶

復次以定慧手。和合一相。作空心合掌。二地輪空輪。屈入相合。此是如來持十力印。彼眞言曰（百七四）南麼三曼多勃馱喃一捺奢麼浪伽𡆗達囉二吽參髯三莎訶

又如前印。以二空輪風輪。屈上節相合。是如來念處印。彼眞言曰（百七五）南麼三曼多勃馱喃一怛他引蘖多娑麼嘌三合二底二薩埵係哆弊毘庾反嚧蘖多三伽伽那糝忙引糝麼四莎訶

又如前印。以二空輪。在水輪上。名一切法平等開悟印。彼眞言曰（百七六）南麼三曼多勃馱喃一薩婆達麼三麼哆鉢囉引二合鉢多二合二怛他引蘖哆弩蘖多三莎訶

復以定慧手。合爲一。以二風輪。加火輪上。餘如前。是普賢如意珠印。彼眞言曰（百七七）南麼三曼多勃馱喃一參麼哆弩蘖多二微囉惹達摩儞入社多三摩訶引摩訶四莎訶

卽此虛心合掌。以二風輪。屈在二火輪下。餘如前。是慈氏印。彼眞言曰（百七八）南麼三曼多勃馱喃一阿儞單惹也二薩婆薩埵奢夜弩蘖多三莎訶

又如前印。以二虛空輪入中。名虛空藏印。眞言曰（百七九）南麼三曼多勃馱喃一阿去迦引奢參麼哆弩蘖多二微質怛嚂二合二嚩囉達囉三莎訶

又如前印。以二水輪二地輪。屈入掌中。二風輪火輪相合。是除一切蓋障印。彼眞言曰（百八十）南麼三曼多勃馱喃一阿去急呼薩埵係哆弊毘庾反嚧蘖多二怛嚂怛嚂三嚂嚂四莎訶

如前以定慧手相合。散舒五輪。猶如鈴鐸。以虛空地輪。和合相持。作蓮華形。是觀自在印。眞言曰　（百八二）　南麼三曼多勃馱喃一薩婆怛他引蘖哆嚩路吉多二羯嚕儜麼也三囉囉囉吽若四莎訶

如前以定慧手。作空心合掌。猶如未開敷蓮。是得大勢印。彼眞言曰　百八二　南麼三曼多勃馱喃一髯髯娑二急呼莎訶

如前以定慧手。五輪內向爲拳。擧二風輪。猶如針鋒。二虛空輪加之。是多羅尊印。彼眞言曰　（百八三）　南麼三曼多勃馱喃一哆囇哆嚟提二羯嚕拏嗢婆上二合吠平三莎訶

如前印。擧二風輪。參差相押。是毗俱胝印。彼眞言曰　（百八四）　南麼三曼多勃馱喃一薩婆佩也怛囉合引二散儞入二件婆破合二吒也三莎訶

如前以定慧手。空心合掌。水輪空輪皆入於中。是白處尊印。彼眞言曰　（百八五）　南麼三曼多勃馱喃一怛他引蘖多微灑也三婆上吠平二鉢曇摩合二忙履儞入三莎訶

如前印。屈二風輪。置虛空輪下。相去猶如穬麥。是何耶揭哩嚩印。彼眞言曰　（百八六）　南麼三曼多勃馱喃一佉那也吽畔惹婆破合二吒也三莎訶

同前印。伸二水輪風輪。餘如拳。是地藏菩薩印。彼眞言曰　（百八七）　南麼三曼多勃馱喃一訶訶訶二蘇上怛弩三莎訶

復以定慧手。作空心合掌。火輪水輪交結相持。以二風輪。置二虛空輪上。猶如鉤形。餘如前。是聖者文殊師利印。彼眞言曰　（百八八）　南麼三曼多勃馱喃一係係矩忙囉二微目吃底合二鉢他悉體多合引三娑麼合二囉娑麼合二囉四鉢囉合二底然五莎訶

以三昧手爲拳。而擧風輪。猶如鉤形。是光網鉤印。彼眞言曰　（百八九）　南麼三曼多勃馱喃一係係矩忙引囉二忙引耶蘖多娑嚩合二婆去嚩悉體多合引四三曼多三莎訶

即如前印。一切輪相皆少屈之。是無垢光印。彼眞言曰　（百九十）　南麼三曼多勃馱喃一係矩忙引囉二毗質

怛囉二合二 嚩底矩忙引囉二 嚩弩娑麼二合囉四 莎訶
如前以智慧手爲拳。其風火輪相合爲一舒之。是纔室尼刀印。彼眞言曰（百九一）南麼三曼多勃馱喃一 係
係炬忙引履計二 娜耶壤難娑麼二合囉三 鉢囉二合二 底然四 莎訶
如前以智慧手爲拳。而伸火輪。猶如戟形。是優波髻室尼戟印。彼眞言曰（百九二）南麼三曼多勃馱喃一 頻
去娜夜壤難二 係炬忙四 履計三 莎訶
如前以三昧手爲拳。而舒水輪地輪。是地輪慧幢印。彼眞言曰（百九三）南麼三曼多勃馱喃一 係娑麼二合囉
壤那計覩二 莎嚩二合 訶
以慧手爲拳而舒風輪。猶如鉤形。是請召童子印。彼眞言曰（百九四）南麼三曼多勃馱喃一 阿去羯囉灑二合也
薩鑁引 矩魯阿去然三 矩忙引囉寫四 莎訶
如前以定慧手爲拳。舒二風輪。屈節相合。是諸奉教者印。彼眞言曰（百九五）南麼三曼多 勃馱喃一 呼去急 微婆
麼二合二 也儜曳平二 莎訶
如前以定慧手爲拳。而舒火輪。屈第三節。是除疑怪金剛印。彼眞言曰（百九六）南麼三曼多勃馱喃一 微麼
底掣鴆曳反 諾迦二 莎訶
舉毗鉢舍那臂。作施無畏手。是施無畏者印。彼眞言曰（百九七）南麼三曼多勃馱喃一 阿佩延娜娜二 莎訶
如前舒智手。而上舉之。是除惡趣印。彼眞言曰（百九八）南麼三曼多勃馱喃一 阿弊毘庾反 達囉儜上 薩埵馱敦
二 莎訶
如前以慧手掩心。是救護慧印。彼眞言曰（百九九）南麼三曼多勃馱喃一 係摩訶引摩訶二 娑麼二合囉 鉢囉二合
底然三 莎訶
如前以慧手。作持華狀。是大慈生印。彼眞言曰（二百）南麼三曼多勃馱喃一 娑嚩二合二 制妬嗢蘖二合二 多三 莎訶
如前以慧手覆心。稍屈火輪。是悲念者印。彼眞言曰（二百一）南麼三曼多勃馱喃一 羯嚕儜沒麗二合二 晲多二

莎訶
如前以慧手作施願相。是除一切熱惱印。彼眞言曰　（二百二）　南麼三曼多勃馱喃一係嚩囉娜二嚩囉鉢囉
二合鉢多三合莎訶
如前以智慧手。如執持眞多摩尼寶形。是不思議慧印。彼眞言曰　（二百三）　南麼三曼多勃馱喃一薩麼舍鉢
履布囉二莎訶
如前以定慧手爲拳。令二火輪開敷。是地藏旗印。彼眞言曰　（二百四）　南麼三曼多勃馱喃一訶訶訶微娑麼
二合曳平三莎訶
慧手爲拳。而舒三輪。是寶處印。彼眞言曰　（二百五）　南麼三曼多勃馱喃一係摩訶引摩訶二莎訶
以此慧手。舒其水輪。是寶手菩薩印。彼眞言曰　（二百六）　南麼三曼多勃馱喃一囉怛怒二合嗢婆上嚩二莎訶
以定慧手作反相叉合掌。定手空輪慧手地輪相交。般若於三昧。亦復如是。餘如跋折羅狀。是持地印。彼眞言曰
（二百七）　南麼三曼多勃馱喃一達囉尼尼仁反達囉二莎訶
如前作五股金剛戟形。是寶印手印。彼眞言曰　（二百八）　南麼三曼多勃馱喃一囉怛娜二合儞入嚩儞二合多二莎
嚩二合訶
即以此印。令一切輪相合。是發堅固意印。彼眞言曰　（二百九）　南麼三曼多勃馱喃一伐折囉二合二娑嚩二莎訶
如前以定慧二手作刀。是虛空無垢菩薩印。彼眞言曰　（二百十）　南麼三曼多勃馱喃一伽伽娜引阿難多愚者
囉莎訶
如前輪印。是虛空慧印。彼眞言曰　（二百十一）　南麼三曼多勃馱喃一斫吃囉二合嚩入喇底丁以反二合二莎嚩訶
如前商佉印。是淸淨慧印。彼眞言曰　（二百十二）　南麼三曼多勃馱喃一達麼三婆嚩二莎嚩二合訶
如前蓮華印。是行慧印。彼眞言曰　（二百十三）　南麼三曼多勃馱喃一鉢曇摩二合阿羅上耶二莎嚩二合訶
同前靑蓮華印。而稍開敷。是安住慧印。彼眞言曰（二百十四）　南麼三曼多勃馱喃一塢答嚂婆二合嚩二莎嚩二合訶

如前以二手相合。而屈水輪。相交入於掌中。二火輪地輪。向上相持。而舒風輪。屈第三節。令不相著。猶如穬麥。是執金剛印。彼眞言曰（二百十五）南麼三曼多勃馱喃一伐折囉赧一戰拏摩訶引路灑拏吽二

如前印以二空輪地輪。屈入掌中。是忙莽雞印。彼眞言曰（二百十六）南麼三曼多伐折囉赧一怛嘌二合吒輕怛嘌吒二同上若衍底丁以反三莎嚩二合訶

如前以定慧手。諸輪反叉。相糺向於自體。而旋轉之。設若空輪。加三昧虛空輪。是金剛鎖印。彼眞言曰（二百十七）南麼三曼多伐折囉赧一吽滿馱滿馱二慕吒耶慕吒耶三伐折路嗢婆二合吠平四薩婆怛囉引鉢囉二合底丁以反訶帝五莎訶

以此金剛慧印。少屈虛空輪。以持風輪。而不相至。是忿怒月黶印。彼眞言曰（二百十八）南麼三曼多伐折囉赧一曷唎二合急呼吽發吒輕二莎嚩二合訶

如前以定慧手爲拳。建立二風輪。而以相持。是金剛針印。彼眞言曰（二百十九）南麼三曼多伐折囉赧一薩婆達磨儞入吠達儞二伐折囉二合素旨嚩囉泥三莎嚩二合訶

如前以定慧手爲拳。而置於心。是金剛拳印。彼眞言曰（二百二十）南麼三曼多伐折囉赧一薩破二合吒也伐折囉二合三婆吠平二莎訶

以三昧手爲拳。舉翼開敷。智慧手亦作拳。而舒風輪。猶如忿怒相擬形。是無能勝印。彼眞言曰（二百二十一）南麼三曼多伐折囉赧一訥達里沙二合摩訶盧灑拏二佉引捺耶薩鑁引薩他引蘖單然炬嚕三莎訶

以慧手爲拳。作相擊勢持之。是阿毘目佉印。彼眞言曰（二百二十二）南麼三曼多伐折囉赧一係阿毘目佉摩訶鉢囉二合戰拏二佉引那也緊旨囉引也徙三三摩耶摩弩薩摩二合囉四莎訶

如前持鉢相。是釋迦鉢印。彼眞言曰（二百二十三）南麼三曼多勃馱喃一薩嚩吃麗二合舍儞入素捺那二薩婆達摩嚩始多引鉢囉二合鉢多二合伽伽那三迷四莎嚩二合訶

釋迦毫相印。如上又以慧手指峯。聚置頂上。是一切佛頂印。彼眞言曰（二百二十四）南麼三曼多勃馱喃一鑁鑁

二吽吽吽三發吒輕四娑訶

以三昧手爲拳。舒火風輪。而以虛空。加地水輪上。其智慧手。伸風火輪。入三昧掌中。亦以虛空。加地水輪上。如在刀鞘。是不動尊印　如前金剛慧印。是降三世印　如前以定慧手。合爲一相。其地水輪皆向下。而伸火輪二峯相連。屈二風輪。置於第三節上。並虛空輪。如三目形。是如來頂印　佛菩薩母復以三昧手。覆而舒之。慧手爲拳。而舉風輪。猶如蓋形。是白傘佛頂印　如前刀印。是勝佛頂印　如前輪印。是最勝佛頂印　如前鉤印。慧手爲拳。舉其風輪。而少屈之。是除業佛頂印　如前佛頂印。是火聚佛頂印　如前蓮華印。是發生佛頂印　如前商佉印。是無量音聲佛頂印　以智慧手爲拳。置在眉間。是眞多摩尼毫相印　如前佛頂印。是佛眼印。復有少異。所謂金剛標相　智慧手在心。如執蓮華像。直伸脅摩他臂。左輪上舒。而外向距之。是無能勝印　定慧手向內爲拳。二虛空輪。上向屈之如口。是無能勝明妃印　以智慧手承頰。是自在天印　即以此印。令風火輪。差戾伸之。是普華天子印　同前印以虛空輪。在於掌中。是光鬘天子印　同前印以虛空風輪。作持華相。是滿意天子印　以智慧手。虛空水輪相加。其風火輪地輪。皆散舒之。以掩其耳。是遍音聲天印　定慧手相合。二虛空輪圓屈。其餘四輪亦如是。是名地神印　如前以智慧手。作施無畏相。以空輪在於掌中。是請召火天印　即以施無畏形。以虛空輪。持水輪第二節。是一切諸仙印。隨其次第。相應用之　如前以定慧手相合。風輪地輪。入於掌中。餘皆上向。是焰摩但茶印　慧手向下。猶如健吒。是焰摩妃鐸印　以三昧手爲拳。舒風火輪。是暗夜天印　即以此天印。又屈風輪。是嚕達羅戟印　如前印作持蓮華形。是梵天明妃印　如前印屈其風輪。加火輪背第三節。是嬌末離螺底印　即以此印。令風輪加虛空上。是那羅延后輪印　三昧手爲拳。令虛空輪直上。是焰魔七母鏈印　仰其定手。如持劫鉢羅相。是遮文茶印　如前羯伽印。是涅哩底刀印　如前輪印。以三昧手爲之。是那羅延輪印　以轉定慧手。左右相加。是難陀跋難陀二雲印　如前伸三昧手。虛空地輪相加。是商羯羅三戟印　如前伸三昧手。虛空地輪相持。是商羯羅三后印　即以此印。直舒三輪。是商羯羅妃印　以三昧手。作蓮華相。是梵天印　因作潔白觀。是月天印　以定慧手。顯現合掌。屈虛空輪。置水輪側。是日天暴輅印　合般若

三昧手。地輪風輪內向。其水火輪。相持如弓。是社耶毘社耶印　如前幢印。是風天印　仰三昧手。在於齊輪。智慧手。空風相持。向身運動。如奏音樂。是妙音天費拏印　如前羂索印。是諸龍印

如前妙音天印。而屈風輪。交空輪上。是一切阿脩羅印。眞言曰　（二百二五）　南麼三曼多勃馱喃一藥囉遲延二莎訶

內向爲拳。而舒水輪。是乾闥婆印。眞言曰　（二百二六）　南麼三曼多勃馱喃一微輸馱薩縛二合囉縛引係儞三平莎訶

即以此印。而屈風輪。是一切藥叉印。眞言曰　（二百二七）　南麼三曼多勃馱喃一藥乞釵濕嚩二合囉莎訶

又以此印。虛空輪地輪相持。而伸火風。是藥叉女印。眞言曰　（二百二八）　南麼三曼多勃馱喃一藥乞叉二合尼儞耶二合達履二莎訶

內向爲拳。而舒火輪。是諸毘舍遮印。眞言曰　（二百二九）　南麼三曼多勃馱喃一比舍引遮蘖底丁以反莎訶

改屈火輪。是諸毘舍支印。眞言曰　（二百三十）　南麼三曼多勃馱喃一比旨比旨二莎訶

如前以定慧手相合。並虛空輪。而建立之。是一切執曜印。眞言曰　（二百三一）　南麼三曼多勃馱喃一蘖囉二合醯濕鞞二合履耶二合鉢囉二合鉢多二合孺底丁以反娑麼耶三莎訶

復以此印。虛空火輪相交。是一切宿印。眞言曰　（二百三二）　南麼三曼多勃馱喃一娜吃灑二合怛囉二合儞入囊捺儞平曳三莎訶

即以此印。屈二水輪。入於掌中。是諸羅剎娑印。眞言曰　（二百三三）　南麼三曼多勃馱喃一囉吃灑二合娑引地鉢多曳二莎訶

伸三昧手。以覆面門。儞賀薄觸之。是諸荼吉尼印。眞言曰　（二百三四）　南麼三曼多勃馱喃一頡履二合訶二合急呼

祕密主。如是上首諸如來印。從如來信解生。即同菩薩之標幟。其數無量。又祕密主。乃至身分擧動住止。應知皆是密印。舌相所轉衆多言說。應知皆是眞言。是故祕密主。眞言門修菩薩行諸菩薩。已發菩提心。應當住如來地。畫漫荼羅。若異此者。同謗諸佛菩薩。越三昧耶。決定墮於惡趣

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第四

密印品第九

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第五（麗染二宋詩三元詩三明貫）

字輪品第十

爾時薄伽梵毗盧遮那．告持金剛祕密主言．諦聽祕密主．有遍一切處法門．祕密主．若菩薩住此字門．一切事業皆得成就（二百三十五）南麼三曼多勃馱喃阿（二百三十六）南麼三曼多勃馱喃娑（二百三十七）南麼三曼多伐折囉赧嚩（又二百三十七）迦佉哦伽遮車惹社吒咤拏荼多他娜馱波頗麼婆野囉邏嚩奢沙娑訶吃灑（二合右此一轉皆上聲短呼之）

（二百三十八）南麼三曼多勃馱喃阿（二百三十九）南麼三曼多勃馱喃娑（二百四十）南麼三曼多伐折囉赧嚩（又二百四十）迦佉哦伽遮車惹社吒咤拏荼多他娜馱波頗麼婆野囉邏嚩奢沙娑訶吃灑（二合右此一轉皆去聲長呼之）

（二百四十一）南麼三曼多勃馱喃暗（二百四十二）南麼三曼多勃馱喃糝（二百四十三）南麼三曼多伐折囉赧鑁（又二百四十三）劒欠儼儉古禮染瞻黵諂喃湛擔探喃淡噉唌曮嚹閻嚂藍鑁睒衫參甜吃衫（二合其日邊字皆帶第一轉本音呼之）

（二百四十四）南麼三曼多勃馱喃噁（二百四十五）南麼三曼多勃馱喃索（二百四十六）南麼三曼多伐折囉赧嘆（又二百四十六）膈却虐噱灼綽弱杓礫坼搦擇喠託諾鐸博泊漠嚩藥嚼落嘆鑠嗦索矐吃索（二合皆帶第一轉音入聲呼之）

（二百四十七）伊縊塢烏哩嚟里狸翳藹汙奧（二百四十八）仰壤拏曩莽喁穰儜囊忙喚聻喃南鑁噱弱搦諾莫

祕密主．如是字門道．善巧法門．次第住眞言道．一切如來神力之所加持．善解正遍知道．菩薩行無過去未來現在諸佛世尊．已說當說今說．祕密主．我今普觀諸佛刹土．無不見此遍一切處法門．彼諸如來．無有不宣說者．是故祕密主．若欲了知眞言門修菩薩行諸菩薩．於此遍一切處法門．應勤修學．於蚵遮吒多波．初中後相加．以等持品類相入．自然獲得菩提心行．成等正覺．及般涅槃．有此等所說字門相與．和合眞言法教．初中後俱．眞言者若如是知．隨其自心而得自在．於此一一句．決定意用之．以慧覺知．當授無上殊勝句．如是一輪．輪轉字輪．眞言

者了知此故、常照世間、如大日世尊、而轉法輪

祕密漫荼羅品第十一

爾時薄伽梵毘盧遮那、以如來眼、觀察一切法界、入於法界俱舍、以如來奮迅平等莊嚴藏三昧、以現法界無盡嚴故、以是眞言行門、度無餘衆生界、滿足本願故、時佛在三昧中、於如是無盡衆生界、從衆聲門、出隨類音聲、如其本性、業生成熟、受用果報、顯形諸色、種種語言、心所思念、而爲説法、令一切衆生皆得歡喜、復於一一毛孔、法界增身出現、出已、等同虚空、於無量世界中、以一音聲法界語表、演説如來發生偈

能生隨類形　諸法之法相　諸佛與聲聞　救世因緣覺　勤勇菩薩衆　及人尊亦然　衆生器世界
次第而成立　生住等諸法　常恒如是生　由具智方便　離於無慧疑　而觀此道故　諸正遍知説

爾時法界生如來身、一切法界、自身表化雲遍滿、毘盧遮那世尊、纔生心頃、諸毛孔中出無量佛、展轉加持已、還入法界宮中、於是大日世尊、復告持金剛祕密主言、祕密主、有造漫荼羅聖尊分位、種子標幟、汝當諦聽善思念之、吾今演説、持金剛祕密主言、如是世尊願樂欲聞、時薄伽梵以偈頌曰

眞言者圓壇　先置於自體　自足而至臍　成大金剛輪　從此而至心　當思惟水輪　水輪上火輪
火輪上風輪　次應念持地　而圖衆形像

爾時金剛手、昇於大日世尊身語意地、法平等觀、念彼未來衆生、爲斷一切疑故、説大眞言王曰（二百四九）南麼三曼多勃馱喃一阿三忙引鉢多二合達摩馱覩三蘖登孕反蘖哆喃三薩婆他四引暗引欠引暗噁五惨索六含二合鶴七嚂落八縛嚩九急呼莎訶吽十嚂落訶囉二合鶴十一莎訶藍落十二莎訶

持金剛祕密主、説此眞言王已、時一切如來、住十方世界、各舒右手、摩執金剛頂、以善哉聲而稱歎言、善哉善哉佛子、汝已超昇毘盧遮那世尊身語意地、爲欲照明一切方所住平等眞言道諸菩薩故、説此眞言王、何以故、毘盧遮那世尊應正等覺、坐菩提座、觀十二句法界、降伏四魔、此法界生三處流出、破壞天魔軍衆、次得世尊身語

意平等。身量等同虛空。語意量亦如是。逮得無邊智生。於一切法自在而演說法。所謂此十二句。眞言之王。佛子。汝今現證毘盧遮那世尊平等身語意故。衆所知識。同於正遍知者。而說偈言

汝問一切智　大日正覺尊　最勝眞言行　當演說法教　我往昔由是　發覺妙菩提　開示一切法
令至於滅度　現在十方界　諸佛咸證知

爾時具德金剛手。心大歡喜。諸佛威神所加持故。而說偈言

是法無有盡　無自性無住　於業生解脫　同於正遍知　諸救世方便　隨於悲願轉　開悟無生智
諸法如是相

時執金剛祕密主。復說優陀那偈。請問毘盧遮那世尊。於此大悲藏生大漫荼羅。決斷所疑。爲未來世諸衆生故

已斷一切疑　種智離熱惱　我爲衆生故　請問於導師　漫荼羅何先　唯大牟尼說　阿闍梨有幾
弟子復幾種　云何知地相　云何而擇治　云何當作淨　云何彼堅住　及淨諸弟子　唯願導師說
云何已淨相　以何而作護　云何加持地　事業誰爲初　修多羅有幾　云何作地分　幾種修供養
云何華香等　此華當獻誰　香亦復如是　云何而奉獻　應以何華香　諸食與護摩　各以何軌儀
及諸聖天座　願說此教法　身相顯形色　唯次第開演　所尊之密印　及與自敷座　何故名爲印
是印從何生　灌頂復幾種　三摩耶有幾　眞言者幾時　勤修眞言行　當具菩薩道　云何是眞語
悉地有幾種　及與成就時　云何昇大空　云何身祕密　不捨於此身　而得成天身　種種諸變化
彼復從何生　日月火方等　曜宿星時分　所現諸不祥　生死受衆苦　云何令不起　所起盡除滅
而得常親近　諸佛兩足尊　幾種護摩火　幾事而增威　諸佛差別性　唯願導師說　無餘諸世界
及與出世間　彼果及數量　殊勝三摩地　成熟在何所　未成熟云何　復齊於幾時　業生得解脫
正覺一切智　離熱惱世尊　告金剛手言　善哉大勤勇　祕密漫荼羅　決定聖天位　大悲根本生
無上摩訶衍　諸佛最祕密　如汝之所問　大力持金剛　我今略宣說　漫荼羅初業　佛子應諦聽

十二支句生　大力持明王　所應最先作　住於本三昧　解了瑜伽道　而作衆事業　阿闍梨有二
通達印眞言　彼相亦如是　深祕顯畧分　能知深廣義　可傳者方授　正覺之長子　遠離於世業
第二來現法　深著癡攀緣　世間漫荼羅　一切爲斯作　諸佛二足尊　灌頂傳教者　說四種弟子
時非時差別　一者時念誦　非時俱非俱　具有一切相　佛說爲弟子　最初知地相　即所謂心地
我已說作淨　如前修事業　若離於過患　心地無所畏　當得成眞淨　離一切諸過　堅住如是知
見自三菩提　若異於此者　非能淸淨地　若住妄分別　行者淨其地　祕密主非淨　以離菩提心
故應捨分別　淨除一切地　我廣說法敎　所有漫荼羅　是中所先事　愚癡不知解　非名世間覺
亦非一切智　乃至不能捨　分別諸害因　應當爲弟子　而淨菩提心　護以不動尊　或用降三世
若弟子不爲　妄執之所動　當成最正覺　無垢喻虛空　初加持是地　依於諸佛敎　第二心自在
唯此非餘敎　四種蘇多羅　謂白黃赤黑　第五所應念　所謂虛空色　空中而等持　印定漫荼羅
第二持綖經　置於道場地　一切如來座　及諸佛智子　悅意妙蓮華　世間稱吉祥　緣覺諸聲聞
所謂遍智者　當知所敷座　菱荷靑蓮葉　世界諸天神　梵衆以爲初　赤色鉢曇華　彼稱爲座王
降此如所應　念居其地分　供養有四種　謂作禮合掌　幷及慈悲等　世間與華香　從手發生華
奉諸救世者　結支分生印　而觀菩提心　各各諸如來　彼所生子等　以是無過華　芬妙復光顯
法界爲樹王　供養人中尊　眞語以加持　三昧自在轉　勝妙廣大雲　法界中出生　從彼雨衆華
常遍諸佛前　其餘世天等　亦當散此華　奉獻隨相應　本眞言性類　如是塗香等　亦隨其所應
空水輪相持　是謂吉祥印　彼所奉華等　當自心獻之　若諸世天神　應知在者位　或金剛拳印
若復運華鬘　而在空中獻　導師救世者　乃至諸世天　各如其次第　護摩有二種　所謂內及外
業生得解脫　復有芽種生　以能燒業故　說爲內護摩　外用有三位　三位三中住　成就三業道
世間勝護摩　若異此作者　不解護摩業　彼癡不得果　捨離眞言智　如來部眞言　及諸正覺說

當知白與黃　金剛具衆色　觀自在眞言　純素隨事遷　四方相重普　輪圓如次第　三隅半月輪
而說形亦然　初應知色像　所謂男女身　或復一切處　隨其類形色　不思議智生　是故不思議
應物有殊異　智智證常一　乃至心廣博　當知是其量　座印亦如是　以及諸天神　如諸佛所生
印等同彼生　以此法生印　印持諸弟子　故略說法界　用是爲標幟　灌頂有三種　佛子至心聽
若祕印方便　則離於作業　是名初勝法　如來所灌頂　所謂第二者　令起作衆事　第三以心授
悉離於時方　令尊歡喜故　如所說應作　現前佛灌頂　是則最殊勝　正等覺略說　五種三昧耶
初見漫荼羅　具足三昧耶　未傳眞實語　不授彼密印　第二三昧耶　入觀聖天會　第三具壇印
隨教修妙業　復次許傳教　說具三昧耶　雖具印壇位　如教之所說　未逮心灌頂　祕密慧不生
是故眞言者　祕密道場中　具第五要誓　隨法應灌頂　當知異此者　非名三昧耶　善住若觀意
眞言者覺心　不得於三處　說彼爲菩薩　得無緣觀行　方便利衆生　爲植衆善本　故號人中勝
於諸法本寂　常無自性中　安住如須彌　是名爲見諦　此空卽實際　非虛妄言說　所見猶如佛
先佛如是見　逮得菩提心　悉地最無上　從此有五種　諸悉地差別　所謂入修行　及勝進諸地
世間五神通　諸佛緣覺等　修業無間息　乃至心續淨　未熟令成熟　爾時悉地成　於彼一時頃
淨業心俱等　眞言者當得　悉地隨意生　悉地昇空界　如幻無畏者　呪術網所惑　同於帝釋網
如乾闥婆城　所有諸人民　身祕密如是　非身亦非識　又如於睡夢　而遊諸天宮　不捨於此身
亦不至於彼　如是瑜伽夢　住眞言行者　所生功德業　身相猶虹霓　眞言如意珠　出生意語身
隨念雨衆物　而無分別想　猶十方虛空　離諸有爲行　眞言者不染　一切分別行　解了唯有想
如是遍觀察　爾時眞言者　諸佛同隨喜　正覺兩足尊　說二種護摩　所謂內及外　增減亦如是
諸尊殊類性　觀察當證知　世間諸眞言　今說彼限量　福德自在等　衆知識天神　彼所說明呪
及與大力印　彼皆現世果　故說有分量　雖成不堅住　悉是生滅法　出世間眞言　無作本不生

業生悉已斷　戰勝離三過　犢角無師者　又佛聲聞衆　菩薩諸眞言　彼量我當說　超越於三時
衆緣所生起　可見非見果　從意語身生　世間之所傳　果數經一劫　等正覺所說　眞言過劫數
大仙正等覺　佛子衆三昧　淸淨離於想　有慧爲世間　從業而獲果　有成熟熟時　若得成悉地
自在轉諸業　心無自性故　遠離於因果　解脫於業生　生等同虛空

復次祕密主諦聽。彼密印形相。敷置聖天之位。威驗現前。三昧所趣。如是五者。往昔諸佛成菩提。法界虛空行。本所誓願。度脫無餘衆生界。爲欲利益安樂彼眞言門修菩薩行諸菩薩故。金剛手言。如是世尊願樂欲聞。時薄伽梵以偈頌曰

最初正等覺　敷置漫荼羅　密中之祕密　大悲胎藏生　及無量世間　出世漫荼羅　彼所有圖像
次第說當聽　四方普周帀　一門及通道　金剛印遍嚴　中羯磨金剛　其上妙蓮華　開敷含果實
於彼大蓮印　大空點莊嚴　八葉悉圓整　善好具鬚蘂　十二支生句　普遍華臺中　其上兩足尊
導師成正覺　以八漫荼羅　眷屬自圍繞　當知此最初　悲生漫荼羅　從此流諸壇　各如其本教
事業形悉地　安置諸佛子　復次祕密主　如來漫荼羅　猶如淨圓月　內現商佉色　一切佛三角
在於白蓮華　空點爲標幟　金剛印圍繞　從彼眞言主　周帀放光明　以無疑慮心　普遍而流出
復次祕密主　觀世自在者　祕密漫荼羅　佛子一心聽　普遍四方相　中吉祥商佉　出生鉢曇華
開敷含果實　上表金剛慧　承以大蓮印　布一切種子　善巧以爲種　多羅毗俱知　及與白處尊
明妃資財主　及與大勢至　諸吉祥受教　皆在漫荼羅　得自在者印　殊妙作標相　何耶揭哩婆
如法住三角　漫荼羅圍繞　嚴好初日暉　當在明王邊　巧智者安立
復次祕密主　今說第三壇　正等四方相　金剛印圍繞　一切妙金色　內心蓮華敷　臺現迦羅奢
光色如淨月　亦以大空點　周帀自莊嚴　上表大風印　靉靆猶玄雲　鼓動幢旛相　空點爲標幟
其上生猛焰　同於劫末火　而作三角形　三角以圍之　光鬘相周普　晨朝日暉色　是中鉢頭摩

朱黰猶劫火　彼上金剛印　流散發焰暉　持以鈝字聲　勝妙種子字　先佛說是汝　勤勇漫荼羅
部母商慸羅　及金剛部生　金剛鉤素支　大德持明王　一切皆於此　大漫荼羅中　印壇諸佛子
形色各如次　隨類而相應　諸業善成就　復次我所說　金剛自在者　謂虛空無垢　金剛輪及牙
妙住與名稱　大忿及迅利　寂然大金剛　幷及青金剛　蓮華及廣眼　妙金剛金剛　及住無戲論
無量虛空步　是等漫荼羅　所說白黃赤　乃至黑色等　印形及所餘　三戟一股印　二首皆五峯
或執金剛鬘　隨色類區別　一切作種子　大福德當知　不動漫荼羅　風輪與火俱　依涅哩底方
大日如來下　及種子圍繞　微妙大慧刀　或復羂索印　具慧者安布　降三世殊異　謂在風輪中
繞以金剛印　而住於三處
復次祕密主　先說漫荼羅　諸佛菩薩母　安置壇形像　方正眞金色　金剛印圍繞　最勝漫荼羅
今當示尊相　彼中大蓮華　暉焰遍黃色　中置如來頂　超越於中分　而至三分位　應作如來眼
自住光焰中　遍布彼種子　次一切菩薩　大如意寶尊　謂彼漫荼羅　圓白而四出　遍寂極淸淨
滿一切希願
復次應諦聽　釋迦師子壇　謂大因陀羅　妙善眞金色　四方相均等　如前金剛印　上現波頭摩
周遍皆黃暉　大鉢具光焰　金剛印圍繞　袈裟錫杖等　置之如次第　五種如來頂　諦聽今當說
白傘以傘印　具慧者勝頂　圍以大慧刀　普遍皆流光　最勝頂輪印　除障頂鉤印　大士頂髻相
是名火聚印　廣生跋折羅　發生以蓮華　無量聲商佉　觀察知像類　毫相摩尼珠　佛眼次當聽
頂髻遍黃色　圍以跋折羅　無能勝妃印　以手持蓮華　無能勝大口　而在黑蓮上　淨境界之行
所謂淨居天　置彼諸印相　佛子應諦聽　所謂思惟手　善手及笑手　華手虛空手　畫之如法則
地神迦羅奢　圓白金剛圍　請召火天印　當以大仙手　迦攝驕答摩　末建拏竭伽　婆私倪剌婆
各如其次第　應畫華陀手　而居火壇內　閻摩但茶印　常處風輪中　沒栗底鈴印　黑夜計都印

諸達羅輪羅　大梵妃蓮華　俱摩利鑠底　毘瑟女輪印　當知焰摩后　以彼揭羅印　嬌吠離耶后
用劫跛羅印　如是等皆在　風漫荼羅中　烏鷲及婆栖　野干等圍繞　若欲成悉地　依法以圖之
涅哩底大刀　毘紐滕妙輪　鳩摩羅鑠底　難陀跋難陀　密雲與電俱　皆其清潭色　夾輔門廂衛
在釋師子壇　商羯羅三戟　妃作鉢胝印　月天迦羅奢　淨白蓮華敷　日天金剛輪　表以輿輅像
社耶毘社耶　當知大力者　俱以大弓印　在因陀羅輪　風方風幢印　妙音樂器印　縛嚕拏羂索
而在圓壇中　汝大我應知　種子字環繞　如是等標誌　如次漫荼羅　釋師子眷屬　今已略宣說
佛子次諦聽　施願金剛壇　四方相均普　衛以金剛印　當於彼中作　火生漫荼羅　內心復安置
妙音青蓮印　智者曼殊音　本眞言圍之　如法布種子　而以爲種子　復於其四傍　嚴飾以青蓮
圖作勇猛衆　各如其次第　光網以鉤印　寶冠持寶印　無垢光童子　青蓮而未敷　妙音具大慧
所說諸使者　當如彼密印　各如其所應　髻設尼刀印　優波髻羅印　質怛羅杖印　地慧以幢印
彼招召使者　以鷲俱尸印　一切如是作　圍以青蓮華　所有諸奉教　皆是揭磔印
復次南方印　除一切蓋障　大精進種子　謂眞陀摩尼　住於火輪中　翼從端嚴衆　當知彼眷屬
祕密之標誌　次第應圖畫　我今廣宣說　除疑以寶瓶　置一股金剛　聖者施無畏　作施無畏手
除一切惡趣　發起手爲相　救意慧菩薩　悲手常在心　大慈生菩薩　應以執華手　悲念在心上
垂栢火輪手　除一切熱惱　作施諸願手　甘露水流注　遍在諸指端　具不思議慧　持如意珠手
皆住蓮華上　在漫荼羅中　北方地藏尊　密印次當說　先作莊嚴座　在因陀羅境　大蓮發光焰
明雜備衆色　於彼建大幢　大寶在其端　是名爲最勝　密印之形像　復當慇懃作　上首諸眷屬
無量寶聚衆　彼諸寶蓮羅　寶作於寶上　三股金剛印　寶掌於寶上　一股金剛印　持地於寶上
二首金剛印　寶印手寶上　五股金剛印　堅意於寶上　羯磨金剛印　一切皆應作　彼漫荼羅中
西方虛空藏　皓白悅意壇　大白蓮華座　置大慧刀印　如是堅利刃　鋒銳猶冰霜　自種子爲稱

智者當安布　及畫諸眷屬　印形如法教　虛空無垢尊　應當以輪印　輪像自圍繞　具足在風壇
虛空慧商佉　在風漫荼羅　清淨慧白蓮　在風漫荼羅　行慧之印相　當以硨磲寶　上插青蓮華
在風漫荼羅　安慧金剛蓮　在風漫荼羅　畧說佛祕藏　諸尊密印竟

入祕密漫荼羅法品第十二

爾時世尊.又復宣說入祕密漫荼羅法.優陀那曰
眞言遍學者　通達祕密壇　如法爲弟子　燒盡一切罪　壽命悉焚滅　令彼不復生　同於灰燼已
彼壽命還復　謂以字燒字　因字而更生　一切壽及生　清淨遍無垢　以十二支句　而作於彼器
如是三昧耶　一切諸如來　菩薩救世者　及佛聲聞衆　乃至諸世間　平等不違逆　解此平等誓
祕密漫荼羅　入一切法教　諸壇得自在　我身等同彼　眞言者亦然　以不相異故　說名三昧耶

入祕密漫荼羅位品第十三

爾時大日世尊.入於等至三昧觀未來世諸衆生故.住於定中.卽時諸佛國土.地平如掌.五寶間錯.懸大寶蓋.莊嚴門標.衆色流蘇.其相長廣.寶鈴白拂.名衣.幡珮.綺絢垂布而校飾之.於八方隅.建摩尼幢.八功德水芬馥盈滿.無量衆鳥鴛鴦鵝鵠.出和雅音.種種浴池.時華雜樹敷榮間列芳茂嚴好.八方合繫五寶瓔珞.其地柔輭猶如綿纊.觸踐之者皆受快樂.無量樂器自然諧韻.其聲微妙人所樂聞.無量菩薩隨福所感.宮室殿堂意生之座.如來信解願力所生.法界標幟.大蓮華王出現.如來法界性身.安住其中.隨諸衆生種種性欲.令得歡喜.時彼如來一切支分無障礙力.從十智力信解所生.無量形色莊嚴之相.無數百千俱胝那由他劫.布施持戒忍辱精進禪定智慧.諸度功德所資長身.卽時出現.彼出現已.於諸世界大衆會中.發大音聲而說偈言
諸佛甚奇特　權智不思議　無阿賴耶慧　含藏說諸法　若解無所得　諸法之法相　彼無得而得

得諸佛導師

說如是音聲已。還入如來不思議法身

爾時世尊。復告執金剛祕密主言。善男子。諦聽內心漫荼羅。祕密主。彼身地。卽是法界自性。眞言密印加持。而加持之。以本性淸淨故。羯磨金剛所護持故。淨除一切塵垢。我人衆生壽者意生。儒童造立者等。株杌過患。方壇四門西向通達。周旋界道。內現意生八葉大蓮華王。抽莖敷蘂綵絢端妙。其中如來。一切世間最尊特身。超越身語意地至於心地。逮得殊勝悅意之果。於彼東方寶幢如來。南方開敷華王如來。北方鼓音如來。西方無量壽如來。東南方普賢菩薩。東北方觀自在菩薩。西南方妙吉祥童子。西北方慈氏菩薩。一切衆中。佛菩薩母。六波羅蜜三昧眷屬。而自莊嚴。下列持明諸忿怒衆。持金剛主菩薩。以爲其臺。處於無盡大海。一切地居天等其數無量。而環繞之

爾時行者。爲成三昧耶故。應以意生香華燈明塗香種種肴膳。一切皆以獻之。優陀那曰

眞言者誠諦　圖畫漫荼羅　自身爲大我　囉字淨諸垢　安住瑜伽座　尋念諸如來　頂授諸弟子
阿字大空點　智者傳妙華　令散於自身　爲說內所見　行人宗奉處　此最上壇故　應與三昧耶

祕密八印品第十四

爾時毗盧遮那世尊。復觀諸大衆會。告執金剛祕密主言。佛子有祕密八印。最爲祕密。聖天之位威神所同。自眞言道以爲標幟。圖具漫荼羅。如本尊相應。若依法敎。於眞言門修菩薩行諸菩薩。應如是知自身住本尊形。堅固不動。知本尊已。如本尊住。而得悉地。云何八印。謂以智慧三昧手。作空心合掌。而散風輪地輪。如放光焰。是世尊大威德生印。其漫荼羅三角而具光明。彼眞言曰 (一百五十一) 南麼三曼多勃馱喃(一) 藍嚂(二) 莎訶

卽以此印。而屈風輪。在虛空輪上。如嚩字形。是世尊金剛不壞印。其漫荼羅。如嚩字相。有金剛光。彼眞言曰 (一百五十二) 南麼三曼多勃馱喃(一) 鑁嚩(二)急呼 莎訶

復以初印。而散水輪火輪。是名蓮華藏印。其漫荼羅。如月輪相。以波頭摩華而圍繞之。彼眞言曰（二百五二）南麼三曼多勃馱喃一糝索二莎訶

卽以此印。屈二地輪。入於掌中。是如來萬德莊嚴印。其漫荼羅。猶如半月形。以大空點圍之。彼眞言曰（二百五三）南麼三曼多勃馱喃一含鶴二莎訶

復以定慧手。作未開敷華合掌。建立二虛空輪。而稍屈之。是如來一切支分生印。其漫荼羅。如迦羅捨滿月之形。金剛圍之。彼眞言曰（二百五四）南麼三曼多勃馱喃一暗噁二莎訶

卽以此印。屈其火輪。餘相如前。是世尊陀羅尼印。其漫荼羅。猶如彩虹。而遍圍之。垂金剛幡。彼眞言曰（二百五五）南麼三曼多勃馱喃一勃馱陀羅尼上二娑沒㗚合三底沫羅馱那羯嚩三馱囉也薩鑁四薄伽輕嚩底五阿去迦引囉嚩底六三麼曳七莎訶

復以虛心合掌。開散火輪。其地輪空輪。和合相持。是謂如來法住印。其漫荼羅。猶如虛空。以雜色圍之。有二空點。彼眞言曰（二百五六）南麼三曼多勃馱喃一阿去吠娜尾泥二莎訶

同前虛心合掌。以智慧二味手。互相加持。而自旋轉。是謂世尊迅疾持印。其漫荼羅。亦如虛空。而用青點嚴之。彼眞言曰（二百五七）南麼三曼多勃馱喃一摩訶引瑜伽輕瑜擬宜以反寧上二瑜詣說嚩嚦三欠若唎計四莎訶

祕密主。是名如來祕密印。最勝祕密。不應輒授與人。除已灌頂。其性調柔。精勤堅固。發殊勝願。恭敬師長。念恩德者。內外清淨。捨自身命而求法者

持明禁戒品第十五

爾時金剛手。復以偈頌。請問大日世尊持明禁戒。爲眞言門修菩薩行諸菩薩故

云何成禁戒　云何住尸羅　云何隨所住　修行離諸著　修行幾時月　禁戒得終竟　住於何法教
而知彼威德　離時方作業　及法非法等　云何而速成　願佛說其量　先佛所宣說　令得於悉地

我問一切智　正覺兩足尊　爲未來衆生　人中尊證知

是時薄伽梵毗盧遮那。哀愍衆生故。而說偈言

善哉勤勇士　大德持金剛　所說殊勝戒　古佛所開演　緣明所起戒　住戒如正覺　令得成悉地
爲利世間故　等起自眞實　不生疑慮心　當住於等引　修行戒當竟　菩提心及法　及修學業果
和合爲一相　遠離諸造作　具戒如佛智　異此非具戒　得諸法自在　通達利衆生　常修無著行
等礫石衆寶　乃至滿落叉　所說眞言教　畢於時月等　禁戒量終竟　最初金輪觀　住大因陀羅
當結金剛印　飲乳以養身　行者一月滿　能調出入息　次於第二月　嚴整水輪中　應以蓮華印
而服醇淨水　次於第三月　勝妙火輪觀　噉不求之食　印以大慧刀　燒滅一切罪　而生身意語
第四月風輪　行者常服風　結轉法輪印　攝心以持誦　金剛水輪觀　依住於瑜伽　是爲第五月
遠離得非得　行者無所著　等同三菩提　和合風火輪　出過衆過患　復一月持誦　亦捨利非利
梵釋等天衆　摩醯毗舍遮　遠住而敬禮　一切爲守護　皆悉奉教命　彼常得如是　人天藥草神
持明諸靈仙　翊侍其左右　隨所命當作　不善爲障者　羅刹七母等　見持眞言者　恭敬而遠之
見是處光明　驅散如猛火　隨所住法教　皆依明禁故　等正覺眞子　一切得自在　調伏難降者
如大執金剛　饒益諸群生　同於觀世音　經逾六月已　隨所願成果　常當於自他　悲愍而救護

阿闍梨眞實智品第十六

爾時持金剛者。次復請問大日世尊。諸漫荼羅眞言之心。而說偈言

云何爲一切　眞言實語心　云何而解了　說名阿闍梨　爾時薄伽梵　大毗盧遮那　慰喩金剛手
善哉摩訶薩　令彼心歡喜　復告如是言　祕中最祕　眞言智大心　今爲汝宣說　一心應諦聽
所謂阿字者　一切眞言心　從此遍流出　無量諸眞言　一切戲論息　能生巧智慧　祕密主何等

一切眞言心　佛兩足尊說　阿字名種子　故一切如是　安住諸支分　如相應布已　依法皆遍授
由彼本初字　遍在增加字　衆字以成音　支體由是生　故此遍一切　身生種種德　今說所分布
佛子一心聽　以心而作心　餘以布支分　一切如是作　卽同於我體　安住瑜伽座　專念諸如來
若於此教法　解斯廣大智　正覺大功德　說爲阿闍梨　是卽爲如來　亦卽名爲佛　菩薩及梵天
毗紐摩醯羅　日月天水天　帝釋世間主　黑夜焰摩等　地神與妙音　梵志及常浴　亦名梵行者
漏盡比丘衆　吉祥持祕密　一切智見者　法自在財富　若住菩提心　及與聲智性　不著一切法
說名遍一切　卽是眞語者　持吉祥眞言　眞實語之王　持執金剛印　所有諸字輪　若在於支分
當知住眉間　鉡字金剛句　娑字在胸下　是謂蓮華句　我卽同心位　一切處自在　普遍於種種
有情及非情　阿字第一命　嚩字名爲水　囉字名爲火　鉡字名忿怒　佉字同虛空　所謂極空點
知此最眞實　說名阿闍梨　故應具方便　了知佛所說　常作精勤修　當得不死句

布字品第十七

爾時世尊。復告金剛手言

復次祕密主　諸佛所宣說　安布諸字門　佛子一心聽　迦字在咽下　佉字在齶上　哦字以爲頸
伽字在喉中　遮字爲舌根　車字在舌中　若字爲舌端　闍字舌生處　吒字以爲脛　咤字應知髀
拏字說爲腰　荼字以安坐　多字最後分　他字應知腹　娜字爲二手　馱字名爲脇　波字以爲背
頗字應知胸　麼字爲二肘　婆字次臂下　莽字住於心　耶字陰藏相　囉字名爲眼　囉字爲廣額
縊伊在二眥　塢烏爲二脣　翳藹爲二耳　汙奧爲二頰　暗字菩提句　噁字般涅槃　知是一切法
行者成正覺　一切智資財　常在於其心　世號一切智　是謂薩婆若

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第五

大毘盧遮那成佛神變加持經卷第六

（麗染 宋詩 元詩 明賢）

受方便學處品第十八

爾時執金剛祕密主。白佛言。世尊。願說諸菩薩摩訶薩等。具智慧方便。所修學句。令歸依者。於諸菩薩摩訶薩。無有二意。離疑惑心。於生死流轉中。常不可壞。如是說已。毘盧遮那世尊。以如來眼。觀一切法界。告執金剛祕密主言。諦聽金剛手。今說善巧修行道。若菩薩摩訶薩。住於此者。當於大乘而得通達。祕密主。菩薩持不奪生命戒。所不應爲。持不與取。及欲邪行。虛誑語。麤惡語。兩舌語。無義語戒。貪欲。瞋恚。邪見等。皆不應作。祕密主。如是所修學句。菩薩隨所修學。則與正覺世尊。及諸菩薩。同行。應如是學

爾時執金剛祕密主。白佛言。世尊。薄伽梵。於聲聞乘。亦說如是十善業道。世間人民及諸外道。亦於十善業道。常願修行。世尊。彼有何差別。云何種種殊異。如是說已。佛告執金剛祕密主言。善哉善哉。祕密主。汝復善哉。能問如來如是義。祕密主。應當諦聽。吾今演說差別道一道法門。祕密主。若聲聞乘學處。我說離慧方便。教令成就。闕發遍智。非等行十善業道法。彼諸世間。復離執著我故。他因所轉。菩薩修行大乘。入一切法平等。攝受智慧方便。自他俱故。諸所作轉。是故祕密主。菩薩於此攝智方便。入一切法平等。當勤修學

爾時世尊。復以大悲眼。觀察諸衆生界。告金剛手菩薩言。祕密主。彼諸菩薩。盡形壽。持不奪生命戒。應捨刀杖。離殺害意。護他壽命。猶如己身。有餘方便。於諸衆生類中。隨其事業。爲解脫彼惡業報故。有所施作。非惡害心

復次祕密主。菩薩持不與取戒。若他所攝諸受用物。不起觸取之心。況復餘物不與而取。有餘方便。見諸衆生。慳悋積聚。不修施福。隨其像類。害彼慳故。離於自他。爲彼行施。因讚時施。獲妙色等。祕密主。若菩薩發起貪心。而觸取之。是菩薩。退菩提分。越無爲毘奈耶法

復次祕密主。菩薩持不邪婬戒。若他所攝。自妻。自種族。標相所護。不發貪心。況復非道。二身交會。有餘方便。隨所

應度。攝護衆生

復次祕密主。菩薩盡形壽。持不妄語戒。設爲活命因緣。不應妄語。卽無欺誑諸佛菩提。祕密主。是名菩薩住於最上大乘。若妄語者。越失佛菩提法。是故祕密主。此法門。應如是知。捨離不眞實語

復次祕密主。菩薩受持不麤惡罵戒。應當以柔輭心語。隨類言辭。攝受諸衆生等。何以故。祕密主。菩提薩埵初行。利樂衆生。或餘菩薩見住惡趣因者。爲折伏之。而現麤語

復次祕密主。菩薩受持不兩舌語戒。離間隙語。離惱害語。犯者。非名菩薩。不於衆生起離坼之心。有異方便。若彼衆生。隨所見處生著。如其像類。說離間言語。令住於一道。所謂一切智智道

復次祕密主。菩薩持不綺語戒。以隨類言辭。時方和合。出生義利。令一切衆生。發歡喜心淨耳根道。何以故。菩薩。有差別語故。或餘菩薩。以戲笑爲先。發起衆生欲樂。令住佛法。雖具出無義利語。如是菩薩。不著生死流轉

復次祕密主。菩薩應當持不貪戒。於彼受用他物中。不起染思。何以故。無有菩薩生著心故。若菩薩。心有染思。彼於一切智門。無力而墮一邊。又祕密主。菩薩應發起歡喜。生如是心。我所應作。令彼自然而生。極爲善哉。數自慶慰。勿令彼諸衆生。損失資財故

復次祕密主。菩薩應當持不瞋戒。遍一切處常修安忍。不著瞋喜。於怨及親。其心平等而轉。何以故。非菩提薩埵而懷惡意。所以者何。以菩薩本性淸淨故。是故祕密主。菩薩應持不瞋恚戒

復次祕密主。菩薩應當捨離邪見。行於正見。怖畏他世無害無曲無諂。其心端直。於佛法僧。心得決定。是故祕密主。邪見最爲極大過失。能斷菩薩一切善根。是爲一切諸不善法之母。是故祕密主。下至戲笑。亦當不起邪見因緣

爾時執金剛祕密主。白佛言。世尊。願說十善道戒。斷極根斷。云何菩薩。王位自在。處於宮殿。父母妻子眷屬圍繞。受天妙樂而不生過。如是說已。佛告執金剛言。善哉善哉祕密主。汝當諦聽善思念之。吾今演說菩薩毘尼決定善巧。祕密主。應知菩薩有二種。云何爲二。所謂在家出家。祕密主。彼在家菩薩受持五戒句。勢位自在。以種種方

便道。隨順時方。自在攝受求一切智。所謂具足方便。示現釋梵天祠主等種種藝處。隨彼彼方便。以四攝法。攝取衆生。皆使志求阿耨多羅三藐三菩提。謂持不奪生命戒。及不與取。虛妄語。欲邪行。邪見等。是名在家五戒句。菩薩受持如所說善戒。應具諦信當勤修學。隨順往昔諸如來學處。住有爲戒。具足智慧方便。得至如來無上吉祥無爲戒蘊。有四種根本罪。乃至活命因緣。亦不應犯。云何爲四。謂謗諸法。捨離菩提心。慳悋。惱害衆生。所以者何。此性是染。非持菩薩戒。何以故

過去諸正覺　及與未來世　現在人中尊　具足智方便　修行無上覺　得無漏悉地　亦說餘學處
離於方便智　當知大勤勇　誘進諸聲聞

說百字生品第十九

爾時毘盧遮那世尊。觀察諸大會衆。說不空教隨樂欲。成就一切眞言自在。眞言之王。眞言導師。大威德者。安住三三昧耶。圓滿三法故。以妙音聲。告大力金剛手言。勤勇士一心。諦聽諸眞言。眞言導師。卽時住於智生三昧。而說出生種種巧智。百光遍照眞言曰　（二百五八）南麼三曼多勃馱喃一暗

佛告金剛手　此一切眞言　眞言救世者　成就大威德　卽是正等覺　法自在牟尼　破諸無智暗
如日輪普現　是我之自體　大牟尼加持　利益衆生故　應化作神變　乃至令一切　隨思願生起
悉能爲施作　神變無上句　故當一切種　淨身離諸垢　應理當勤修　志願佛菩提

百字果相應品第二十

爾時毘盧遮那世尊。告執金剛祕密主言。祕密主。若入大覺世尊大智灌頂地。自見住於三三昧耶句。祕密主。入薄伽梵大智灌頂。卽以陀羅尼形。示現佛事。爾時大覺世尊。隨住一切諸衆生前。施作佛事。演說三三昧耶句。佛言。祕密主。觀我語輪境界。廣長遍至無量世界淸淨門。如其本性。表示隨類法界門。令一切衆生皆得歡喜。亦如

今者釋迦牟尼世尊。流遍無盡虛空界。於諸刹土勤作佛事。祕密主。非諸有情能知世尊是語意相。流出正覺妙音莊嚴瓔珞。從胎藏生佛之影像。隨衆生性欲。令發歡喜。爾時世尊。於無量世界海門。遍法界。慇懃發起菩提。出生普賢菩薩行願。於此妙華布地胎藏莊嚴世界。種性海中受生。以種種性清淨門。淨除佛刹。現菩提場。而作佛事。次復志求三藐三菩提句。以知心無量故。知身無量。知身無量故。知智無量。知智無量故。即知衆生無量。知衆生無量故。即知虛空界無量。祕密主。由心無量故。得四種無量。得已。成最正覺。具十智力。降伏四魔。以無所畏而師子吼。佛說偈言

勤勇此一切　無上覺者句　於百門學處　諸佛所說心

百字位成品第二十一

爾時執金剛祕密主。得未曾有。而說偈言

佛說眞言救世者　能生一切諸眞言　摩訶牟尼云何知　誰能知此從何處　誰生如是諸眞言
生者爲誰唯演說　大勤勇士說中上　如此一切願開示

爾時薄伽梵　法自在牟尼　圓滿普周遍　悉遍諸世界　一切智慧者　大日尊告言　善哉摩訶薩
大德金剛手　吾當一切說　微密最希有　諸佛之祕要　外道不能知　若悲生漫荼　得大乘灌頂
調柔具善行　常悲利他者　有緣觀菩提　當所不能見　彼能有如此　內心之大我　隨其自心位
導師所住處　八葉從意生　蓮華極嚴麗　圓滿月輪中　無垢猶淨鏡　於彼常安住　眞言救世尊
金色具光焰　住三昧害毒　如日難可觀　諸衆生亦然　常恆於內外　普周遍加持　以如是慧眼
了知意明鏡　眞言者慧眼　觀是圓鏡故　當見自形色　寂然正覺相　身身生影像　意從意所生
常出生清淨　種種自作業　次於彼光現　圓照如電焰　眞言者能作　一切諸佛事　若見成清淨
聞等亦復然　如意所思念　能作諸事業

復次祕密主。眞言門修菩薩行諸菩薩。如是自身影像生起。無有殊勝過三菩提。如眼耳鼻舌身意等。四大種攝持集聚。彼如是自性空。唯有名字所執。猶如虛空。無所執著等於影像。彼如來成正覺。互相緣起無有間絕。若從緣生。彼卽如影像生。是故諸本尊卽我。我卽本尊。互相發起。身所生身。尊形像生。祕密主。觀是法緣通達慧。通達慧緣法。彼等遞爲作業。無作性空。祕密主。云何從意生。意能生影像。祕密主。譬如著白著黃著赤。作意者作時染著意生。彼同頭。如是身轉。祕密主。又如內觀意中漫荼羅。療治熱病。彼衆生熱病。卽時除愈。無有疑惑。非漫荼羅異意。非意異漫荼羅。何以故。彼漫荼羅一相故。祕密主。又如幻者幻作男子。而彼男子又復作化。祕密主。於意云何。彼何者爲勝。時金剛手白佛言。世尊。此二人者。無相異也。何以故。世尊。非實生故。是二男子本性空故。等同於幻。如是祕密主。意生衆事及意所生。如是俱空。無二無別

百字成就持誦品第二十二

爾時世尊告執金剛祕密主言。諦聽祕密主。眞言救世者。身身無有異分。意從意生。令善淨除。普皆有光。彼處流出。相應而起遍諸支分。彼愚夫類當所不知。不達此道。乃至身所主分。無量種故。如是眞言救世者分說。亦無量。譬如吉祥眞陀摩尼。隨諸樂欲。而作饒益。如是世間照世者身。一切義利無所不成。祕密主。云何無分別法界。一切作業隨轉。祕密主。亦如虛空界。非衆生非壽者。非摩奴闍非摩納婆。非作者非吠陀。非能執非所執。離一切分別及無分別。而彼無盡衆生界。一切去來。諸有所作。不生疑心。如是無分別一切智智。等同虛空。於一切衆生。內外而轉

爾時世尊。又復宣說淨除無盡衆生界句。流出三昧句。不思議句。轉他門句

若本無所有　隨順世間生　云何了知空　生此瑜伽者　若自性如是　覺名不可得　當等空心生
所謂菩提心　應發起慈悲　隨順諸世間　住於唯想行　是卽名諸佛　當知是造立　觀此爲空空
如下數法轉　增一而分異　勤勇空亦然　增長隨次第　卽此阿字等　自然智加持

（二百五十九）　阿娑嚩迦佉哦伽遮車若社吒咤拏荼多他那馱波頗麼婆野囉攞嚩奢沙娑訶乞灑仰壤拏曩莽

祕密主。觀此。空中流散假立。阿字之所加持。成就三昧道。祕密主。如是阿字。住於種種莊嚴布列圖位。是一切法本不生故。顯示自然形。或以不可得義。現嚩字形。或諸法遠離造作故。現迦字形。或一切法等虛空故。現佉字形。或行不可得故。現哦字形。或諸法一合相不可得故。現伽字形。或一切法離生滅故。現遮字形。或一切法法無影像故。現車字形。或一切法生不可得故。現若字形。或一切法離戰敵故。現社呼上聲字形。或一切法離我慢故。現吒字形。或一切法離養育故。現咤字形。或一切法離怨對故。現拏字形。或一切法離熱變故。現荼字形。或一切法離如如故。現多字形。或一切法離住處故。現他字形。或一切法離施故。現那字形。或一切法界不可得故。現陀字形。或一切法勝義諦不可得故。現波字形。或諸法不堅如聚沫故。現頗字形。或一切法離繫縛故。現麼字形。或一切法諸觀不可得故。現婆字形。或一切法諸乘不可得故。現野字形。或一切法離一切塵故。現囉字形。或一切法無相故。現囉字形。或一切法離言絕故。現嚩字形。或一切法離寂故。現奢字形。或一切法本性鈍故。現沙字形。或一切法諦不可得故。現娑字形。或一切法離因故。現訶字形

祕密主。隨入此等一一三昧門。祕密主觀是。乃至三十二大人相等。皆從此中出。仰壤儜曩莽等於一切法。自在而轉。此等隨現成就三藐三佛陀隨形好

百字眞言法品第二十三

復次祕密主。於此三昧門。以空加持。於一切法。自在成就最正覺。是故此字。即爲本尊。而說偈言

祕密主當知　阿字第一句　明法普周遍　字輪以圍繞　彼尊無有相　遠離諸見相　無相衆聖尊
而現相中來　聲從於字出　字生於眞言　眞言成立果　諸救世尊說　當知聲性空　即空所造作
一切衆生類　如言而妄執　非空亦非聲　爲修行者說　入於聲解脫　即證三摩地　依法布相應
以字爲照明　故阿字等類　無量眞言想

説菩提性品第二十四

譬如十方虚空相　當遍一切無所依　如是眞言救世者　於一切法無所依　又如空中諸色像
雖可現見無依處　眞言救世者亦然　非彼諸法所依處　世間成立虚空量　遠離去來現在世
若見眞言救世者　亦復出過三世法
唯住於名邊　遠離作者等　虚空衆假名　導師所宣説　名字無所依　亦復如虚空　眞言自在然
現見離言説　非火水風等　非地非日光　非月等衆曜　非晝亦非夜　非生非老病　非死非損傷
非刹那時分　亦非年歳等　亦非有成壞　劫數不可得　非淨染受生　或果亦不生　若無如是等
種種世分別　於彼常勤修　求一切智句

三三昧耶品第二十五

爾時執金剛祕密主、白佛言、世尊所説三三昧耶、云何説此法爲三三昧耶、如是言已、世尊告執金剛祕密主言、善哉善哉祕密主、汝問吾如是義、祕密主、汝當諦聽善思念之、吾今演説、金剛手言、如是世尊、願樂欲聞、佛言、有三種法相續、除障相應生名三三昧耶、云何彼法相續生、所謂初心不觀自性、從此發慧、如實智生、離無盡分別網、是名第二心、菩提相、無分別正等覺句、祕密主、彼如實見已、觀察無盡衆生界、悲自在轉、無緣觀菩提心生、所謂離一切戲論、安置衆生、皆令住於無相菩提、是名三三昧耶句

復次祕密主　有三三昧耶　最初正覺心　第二名爲法　彼心相續生　所謂和合僧　此三三昧耶
諸佛導師説　若住此三等　修行菩提行　諸導門上首　爲利諸衆生　當得成菩提　三身自在轉

祕密主、三覺三佛陀、安立眞故、以一身加持、所謂初變化身、復次祕密主、次於一身示現三種、所謂佛法僧、復次祕密主、從此成立説三種乘、廣作佛事、現般涅槃、成熟衆生、祕密主、觀彼諸眞言門修菩提行諸菩薩、若解三等、

於眞言法則。而作成就。彼不著一切妄執。無能爲障礙者。除不樂欲。懈怠。無利談話。不生信心。積集資財者。復應不作二事。謂飲諸酒。及寢牀上

說如來品第二十六

爾時。執金剛祕密主。白世尊言

云何爲如來　云何人中尊　云何名菩薩　云何爲正覺　導師大牟尼　願斷我所疑　菩薩大名稱
棄捨疑慮心　當修摩訶衍　行王無有上

爾時。薄伽梵毘盧遮那。觀察諸大會衆。告執金剛祕密主言。善哉善哉金剛手。能問吾如是義。祕密主。汝當諦聽善思念之。吾今演說摩訶衍道。頌曰

菩提虛空相　離一切分別　樂求彼菩提　名菩提薩埵　成就十地等　自在善通達　諸法空如幻
知此一切同　解諸世間趣　故名爲正覺　法如虛空相　無二唯一相　成佛十智力　故號三菩提
唯慧害無明　自性離言說　自證之智慧　故說名如來

世出世護摩法品第二十七

復次祕密主。往昔一時。我爲菩薩。行菩薩行住於梵世。時有梵天來問我言。大梵。我等欲知火有幾種。時我如是答言

所謂大梵天　名我慢自然　次大梵天子　彼名皤嚩何　世間之火初　其子名梵飲　子名畢怛囉
吠濕婆捺羅　復生訶嚩奴　合毘嚩訶那　皤說三鼻覩　及阿闥末拏　彼子鉢體多　補色迦路陶
如是諸火天　次第以相生　復次置胎藏　用忙路多火　欲後澡盥身　嚩訶忙囊火　浴妻之所用
以曹藥盧火　若生子之後　用鉢伽蒲火　爲子初立名　用皤體無火　飲食時所用　當知戍脂火

為子作髻時　應用穀吡火　次受禁戒時　三讃婆嚩火　禁滿施牛時　用素哩耶火　童子婚媾時
以瑜闍迦火　造作衆事業　跛那易迦火　供養諸天神　以鑁嚩句火　造房以梵火　惠施扇鄰火
縛羊之所用　阿縛賀寧火　觸穢之所用　以微吠脂火　熱食之所用　以婆訶婆火　拜日天時用
合微誓耶火　拜月天時用　所謂儞地火　蒲燒之所用　阿密栗多火　彼於息災時　用那嚕拏火
作增益法時　訖栗旦多火　降伏怨對時　當以忿怒火　召攝諸資財　用迦摩奴火　若焚燒林木
應用使者火　所食令消化　用社吒路火　若授諸火時　所謂薄叉火　海中有火名　縛拏婆目佉
焚燒盡時火　名曰瑜乾多　為汝諸仁者　已畧說諸火　修習韋陀者　梵行所傳讀　此四十四種
爾時我宣說　復次祕密主　我於往昔時　不知諸火性　作諸護摩事　彼非護摩行　非能成業果
我復成菩提　演說十二火　智火最為初　名大因陀羅　端嚴淨金相　增益施威力　熾焰住三昧
當知智圓滿　第二名行滿　普光秋月華　吉祥圓輪中　珠鬘鮮白衣　第三摩嚕多　黑色風燥形
第四盧醯多　色如朝日暉　第五沒嚟拏　多髮淺黃色　備顯大威光　遍一切寘慇　第六名忿怒
眇目壺燼色　鋒髮而震吼　大力現四牙　第七闍吒羅　迅疾備衆彩　第八迄灑耶　猶如電光聚
第九名意生　大勢巧色身　第十羯一微　赤黑唵字印　第十一火神　（魏本闕名）　十二讃賀那
衆生所迷惑　祕密主此等　火色之所持　隨其自形色　藥物等同彼　而作外護摩　隨意成悉地
復次於內心　一性而具三　三處合為一　瑜祇內護摩　大慈大悲心　是謂息災法　彼兼具欣喜
是為增益法　忿怒從胎藏　而造衆事業　又彼祕密主　如其所說處　隨相應事業　通信解焚燒

爾時。金剛手白佛言。世尊。云何火爐三摩地。云何而用散灑。云何藉敷吉祥草。云何具緣衆物。如是說已

爾時金剛手　白佛言世尊　云何火爐定　云何用散灑　藉敷吉祥草　云何具衆物　佛告祕密主
持金剛者言　火爐如肘量　四方相均等　四節為緣界　周帀金剛印　藉之以生茅　繞爐而右旋
不以末加本　應以本加末　次持吉祥草　依法而右灑　以塗香華灑　次尊於火天　行人以一華

供養浚嚩茶　安置於座位　復當用灌灑　應當作滿施　持以本眞言　大息災護摩　或以增益法
如是世護摩　說名爲外事　復次內護摩　滅除於業生　了知自末那　遠離色聲等　眼耳鼻舌身
及與語意業　皆悉從心起　依止於心王　眼等分別生　及色等境界　智慧未生障　風燥火能滅
燒除妄分別　成淨菩提心　此名內護摩　爲諸菩薩說

說本尊三昧品第二十八

爾時。執金剛祕密主。白佛言。世尊願說諸尊色像威驗現前。令眞言門修菩薩行諸菩薩。觀緣本尊形故。即本尊身以爲自身。無有疑惑而得悉地。如是說已。佛告執金剛祕密主言。善哉善哉祕密主。汝能問吾如是義。善哉諦聽極善作意。吾今演說。金剛手言。如是世尊。願樂欲聞。佛言祕密主。諸尊有三種身。所謂字印形像。彼字有二種。謂聲及菩提心。印有二種。所謂有形無形。本尊之身亦有二種。所謂淸淨非淸淨。彼證淨身離一切相。非淨有想之身。則有顯形衆色。彼二種尊形。成就二種事。有想故成就有相悉地。無想故隨生無相悉地。而說偈言

佛說有想故　樂欲成有相　以住無想故　獲無相悉地　是故一切種　當住於非想

說無相三昧品第二十九

復次薄伽梵毗盧遮那。告執金剛祕密主言。祕密主。彼眞言門修菩薩行諸菩薩。樂欲成就無相三昧。當如是思惟。想從何生。爲自身耶。自心意耶。若從身生。身如草木瓦石。自性如是。離於造作。無所識知。因業所生。應當等觀同於外事。又如造立形像。非火非水非刃非毒。非金剛等之所傷壞。或忿恚麤語。而能少分令其動作。若以飲食衣服塗香華鬘。或以塗香梅檀龍腦如是等類。種種殊勝受用之具。諸天世人奉事供給。亦不生喜。何以故。愚童凡夫於自性空形像。自我分生。顚倒不實。起諸分別。或復供養。或加毀害。祕密主。當如是住循身念。觀察性空
復次祕密主。心無自性。離一切想故。當思惟性空。祕密主。心於三時求不可得。以過三世故。如是自性遠離諸相。

祕密主。有心思者。卽是愚童凡夫之所分別。由不了知。有如是等虛妄横計。如彼不實不生當如是思念。祕密主。此眞言門修菩薩行諸菩薩。證得無相三昧。由住無相三昧故。如來所說眞語。親對其人。常現在前

世出世持誦品第三十

復次。祕密主。今說祕密持眞言法

一一諸眞言　作心意念誦　出入息爲二　常第一相應　異此而受持　眞言闕支分　內與外相應
我說有四種　彼世間念誦　有所緣相應　住種子字句　或心隨本尊　故說有攀緣　出入息爲上
當知出世心　遠離於諸字　自尊爲一相　無二無取著　不壞意色像　勿異於法則　所說三落叉
乜種持眞言　乃至衆罪除　眞言者淸淨　如念誦數量　勿異如是敎

囑累品第三十一

爾時世尊。告一切衆會言。汝今應當住不放逸。於此法門。若不知根性。不應授與他人。除我弟子具標相者。我今復說。汝等當一心聽。若於吉祥執宿時生。志求勝事。有微細慧。常念恩德。生渴仰心。聞法歡喜而住。其相靑白或白色。廣首長頸。額廣平正。其鼻脩直。面輪圓滿。端嚴相稱。如是佛子。應當殷勤而敎授之。爾時一切具威德者。咸懷慶悅。聞已頂受。一心奉持。是諸衆會。以種種莊嚴廣大供養已。稽首佛足。恭敬合掌。而說是言。唯願於此法敎。演說救世加持句。令法眼道遍一切處久住世間。爾時世尊於此法門。說加持句眞言曰〔三百六十〕

南麼三曼多勃馱喃一　薩婆他引勝勝二　怛曖二合怛曖二合三　頞頞四　達隆達隆五　婆他引二跛也婆他引二跛也六　勃馱薩底也二合七　達摩薩底也二合八　僧伽薩底也二合九　吽吽十　吠那尾吠十一　莎訶

時佛說此經已。一切持金剛者及普賢等上首諸菩薩。聞佛所說。皆大歡喜。信受奉行

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第六

大毘盧遮那成佛神變加持經卷第七 〔麗染三 宋詩三 元詩三 明賢〕

供養念誦三昧耶法門眞言行學處品第一

稽首毘盧遮那佛　開敷淨眼如青蓮　我依大日經王說　供養所資衆儀軌　爲成次第眞言法
如彼當得速成就　又令本心離垢故　我今隨要略宣說　然初自他利成就　無上智願之方便
成彼方便雖無量　發起悉地由信解　於滿悉地諸勝願　一切如來勝生子　彼等佛身眞言形
所住種種印威儀　殊勝眞言所行道　及方廣乘皆諦信　有情信解上中下　世尊說彼證修法
哀愍輪迴六趣衆　隨順饒益故開演　應當恭敬決定意　亦起勤誠深信心　若於最勝方廣乘
知妙眞言調伏行　隨善逝子所修習　無上持明別律儀　解了具緣衆支分　得受傳教印可等
見如是師恭敬禮　爲利他故一心俱　瞻仰猶如世導師　亦如善友及所親　發起殷勤殊勝意
供養給侍隨所作　善順師意令歡喜　慈悲攝受相對時　稽首請勝善逝行　願尊如應教授我
彼師自在而建立　大悲藏等妙圓壇　依法召入漫荼羅　隨器授與三昧耶　道場教本眞言印
親於尊所口傳授　獲勝三昧耶及護　爾乃應當如說行　然此契經之所說　攝正眞言平等行
哀愍劣慧弟子故　分別漸次之儀式　於造勝利天中天　從正覺心所生子　下至世天身語印
入此眞言最上乘　導諸密行軌範者　皆當敬重不輕毀　以能饒益諸世間　是故勿生捨離心
當應無間而繫念　彼等廣大諸功德　隨其力分相應事　悉皆承奉而供養　佛聲聞衆及緣覺
說彼教門盡苦道　授學處師同梵行　一切勿懷毀慢心　善觀時宜所當作　和敬相應而給侍
不造愚童心行法　不於諸尊起嫌恨　如世導師契經說　能損大利莫過瞋　一念因緣悉焚滅
俱胝曠劫所修善　是故殷勤常捨離　此無義利之根本　淨菩提心如意寶　滿世出世勝希有

除疑究竟獲三昧　自利利他因是生　故應守護倍身命　觀具廣大功德藏　若身口意嬈衆生
下至少分皆遠離　除異方便多所濟　内住悲心而現瞋　於背恩德有情類　常行忍辱不觀過
又常具足大慈悲　及與喜捨無量心　隨力所能法食施　以慈利行化群生　或由大利相應心
爲俟時故而棄捨　若無勢力廣饒益　住法但觀菩提心　佛說此中具萬行　滿足清白醇淨法
以布施等諸度門　攝受衆生於大乘　令住受持讀誦等　及與思惟正修習　智者制止六情根
常當寂意修等引　毀壞事業由諸酒　一切不善法之根　如毒火刀霜雹等　故當遠離勿親近
又由佛說增我慢　不應坐臥高妙牀　取要言之具慧者　悉捨自損損他事　我依正三昧耶道
今已次第畧宣說　顯明佛說修多羅　令廣知解生決定　依此正住平等戒　復當離於毀犯因
謂習惡心及懈惰　妄念恐怖談話等　妙眞言門覺心者　如是正住三昧耶　當令障蓋漸消盡
以諸福德增益故　欲於此生入悉地　隨其所應思念之　親於尊所受明法　觀察相應作成就
當自安住眞言行　如所說明次第儀　先禮灌頂傳敎尊　請白眞言所修業　智者蒙師許可已
依於地分所宜處　妙山補峯半巖間　種種龕窟兩山中　於一切時得安隱　芰荷青蓮遍嚴池
大河潬川洲岸側　遠離人物衆憒閙　條葉扶疎悅意樹　多饒乳木及祥草　無有蚊虻苦寒熱
惡獸毒蟲衆妨難　或諸如來學弟子　嘗於往昔所遊居　寺塔練若古仙堂　當依自心意樂處
捨離在家絕諠務　勤轉五欲諸蓋纒　一向深樂於法味　長養其心求悉地　又常具足堪忍慧
能安饑渴諸疲苦　淨命善作或無作　常與妙法經卷俱　若顧諸佛菩薩行　於正眞言堅信解
具淨慧力能堪忍　精進不求諸世間　常樂堅固無怯弱　自他現法作成就　不隨餘天無畏依
具此名爲良助伴

増益守護清淨行品第二

彼作成就處所已　每日先住於念慧　依法寢息初起時　除諸無盡爲障者　是夜旋適所生罪
殷勤還淨皆悔除　實根具悲別益心　誓度無盡衆生界　如法澡浴或不浴　應令身口意清淨
次於齋室安靜處　散妙華等以莊嚴　隨置形像勝妙典　誠心思念十方佛　心目現觀諦明了
當依本尊所在方　至誠恭敬一心住　五輪投地而作禮　歸命十方正等覺　三世一切具三身
歸命一切大乘法　歸命不退菩提衆　歸命諸明眞實言　歸命一切諸密印　以身口意清淨業
殷勤無量恭敬禮

作禮方便眞言曰　（二百六十一）　唵一南麼薩婆怛他引蘖多二迦引耶嚩引吃質合二多三播娜鑁無范反娜難迦嚕弭四

由此作禮眞實言　卽能遍禮十方佛　右膝著地合爪掌　思惟說悔先罪業
我由無明所積集　身口意業造衆罪　貪欲恚癡覆心故　於佛正法賢聖僧　父母二師善知識
以及無量衆生所　無始生死流轉中　具造極重無盡罪　親對十方現在佛　悉皆懺悔不復作

出罪方便眞言曰　（二百六十二）　唵一薩婆播波薩怖合一吒二娜訶曩伐折羅合引二也三莎嚩訶

南無十方三世佛　三種常身正法藏　勝願菩提大心衆　我今皆悉正歸依

歸依方便眞言曰　（二百六十三）　唵一薩婆勃馱菩提薩怛鑁合引二一設囉襪平蘖車弭三伐折羅合二達磨四頡唎合二五

我淨此身離諸垢　及與三世身口意　過於大海剎塵數　奉獻一切諸如來

施身方便眞言曰　（二百六十四）　唵一薩婆怛他引蘖多二布闍鉢囉合二跛無渇反嘌多合二曩夜怛忙合去二難三涅㗚夜合二
哆夜弭四薩婆怛他引蘖多室栢合二一地底瑟咤二合救限反哆引五薩婆怛他引蘖多若難謎阿引味設覩六

淨菩提心勝願寶　我今起發濟群生　生苦等集所纏繞　及與無知所害身　救攝歸依令解脫
常當利益諸含識

發菩提心方便眞言曰　（二百六十五）　唵一菩提質多二母多播合引二娜夜弭三

是中增加句言。菩提心離一切物。謂蘊界處能執所執捨故。法無有我自。心平等。本來不生如大空自性。如佛世

纔結此密印　能淨如來地　地波羅蜜滿　成三法道界　所餘諸印等　次第如經說　眞言者當知
所作得成就
次結法界生　密慧之標幟　淨身口意故　遍轉於其身　般若三昧手　俱作金剛拳　二空在其掌
風輪皆正直　如是名法界　淸淨之祕印
法界生眞言曰　(二百七一)　南麽三曼多勃馱喃一達摩馱睹二薩嚩二合婆嚩句痕三
如法界自性　而觀於自身　或以眞實言　三轉而宣說　當見住法體　無垢如虛空　眞言印威力
加持行人故
爲令彼堅固　觀自金剛身　結金剛智印　止觀手相背　地水火風輪　左右互相持　二空各旋轉
合於慧掌中　是名爲法輪　最勝吉祥印　是人當不久　同於救世者　眞言印威力　成就者當見
常如寶輪轉　而轉大法輪
金剛薩埵眞言曰　(二百七二)　南麽三曼多伐折羅赧一伐折囉二合引二吧麽二合句痕
誦此眞言已　當住於等引　諦觀我此身　卽是執金剛　無量天魔等　諸有見之者　如金剛薩埵
勿生疑惑心
次以眞言印　而擐金剛甲　當觀所被服　遍體生焰光　用是嚴身故　諸魔爲障者　及餘惡心類
觀之咸四散　是中密印相　先作三補吒　止觀二風輪　糾持火輪上　二空自相並　而在於掌中
誦彼眞言已　當觀無垢字
金剛甲冑眞言曰　(二百七三)　南麽三曼多伐折囉赧一唵二伐折囉二合迦嚩遮三吽
囉字色鮮白　空點以嚴之　如彼髻明珠　置之於頂上　設於百劫中　所積衆罪垢　由是悉除滅
福慧皆圓滿
彼眞言曰　(二百七四)　南麽三曼多勃馱喃一覽

眞言同法界　無量衆罪除　不久當成就　住於不退地　一切觸穢處　當加此字門　赤色具威光
　焰鬘遍圍繞
　次爲降伏魔　制諸大障故　當念大護者　無能堪忍明
無堪忍大護明曰（二百七五）南麽薩婆怛他引蘖帝弊一薩婆佩也微蘖帝弊二微濕嚩目契弊薩婆他引三含
欠四囉吃灑二合摩訶引沫禮五薩婆怛他引蘖多奔抳也二合涅社帝六吽吽怛囉引二合七吒吒囉吒引上八阿鉢囉二合底訶
諦九莎嚩訶
　由纔憶念故　諸毗那也迦　惡形羅刹等　彼一切馳散

供養儀式品第三

　如是正徧淨其身　住定觀本眞言主　以眞言印而召請　先當示現三昧耶　眞言相應除障者
　兼以不動慧刀印　稽首奉獻閼伽水　行者復獻眞言座　次應供養花香等　去垢亦以無動尊
　辟除作淨皆如是　加持以本眞言王　或觀諸佛勝生子　無量無數衆圍遶
右攝頌竟下當次第分別說
　現前觀囉字　具點廣嚴飾　謂淨光焰鬘　赫如朝日暉　念聲眞實義　能除一切障　解脫三毒垢
　諸法亦復然　先自淨心地　復淨道場地　悉除衆過患　其相如虛空　如金剛所持　此地亦如是
　最初於下位　思惟彼風輪　訶字所安住　黑光焰流布
彼眞言曰（二百七六）南麽三曼多勃馱喃唅
　次上安水輪　其色猶雪乳　嚩字所安住　頗胝月電光
彼眞言曰（二百七七）南麽三曼多勃馱喃鑁
　復於水輪上　觀作金剛輪　想置本初字　四方遍黃色

彼眞言曰　(二百七八)　南麽三曼多勃馱喃阿

是輪如金剛　名大因陀羅　光焰淨金色　普皆遍流出　於彼中思惟　導師諸佛子　水中觀白蓮
妙色金剛莖　八葉具鬚蘂　衆寶自莊嚴　常出無量光　百千衆蓮繞　其上復觀想　大覺師子座
寶王以校飾　在大宮殿中　寶樹皆行列　遍有諸幢蓋　珠鬘等交絡　垂懸妙寶衣　周布香華雲
及與衆寶雲　普雨雜華等　繽紛以嚴地　諧韻所愛聲　而奏諸音樂　宮中想淨妙　賢瓶與閼伽
寶樹王開敷　照以摩尼燈　三昧總持地　自在之婇女　佛波羅蜜等　菩提妙嚴華　方便作樂伎
歌詠妙法音　以我功德力　如來加持力　及以法界力　普供養而住

虛空藏轉明妃曰　(二百七九)　南麽薩婆怛他引蘖帝驃一微濕嚩二合目契弊二薩婆他三欠四嗢娜蘖帝薩叵二合囉係門五伽伽娜劍六莎訶

由此持一切　眞實無有異　作金剛合掌　是則加持印　一切法不生　自性本寂故　想念此眞實
阿字置其中　次當轉阿字　成大日牟尼　無盡刹塵衆　普現圓光內　千界爲增數　流出光焰輪　遍至衆生界
隨性令開悟　身語遍一切　佛心亦復然　閻浮淨金色　爲應世間故　加趺坐蓮上　正受離諸毒
身被綃縠衣　自然髮髻冠　若釋迦牟尼　彼中想婆字　復轉如是字　而成能仁尊　勤勇袈裟衣　四八大人相

釋迦種子心曰　(二百八十)　南麽三曼多勃馱喃婆

字門轉成佛　亦利諸衆生　猶如大日尊　瑜伽者觀察　一身與二身　乃至無量身　同入於本體
流出亦如是　於佛右蓮上　當觀本所尊　左置執金剛　勤勇諸眷屬　前後華臺中　廣大菩薩衆
一生補處等　饒益衆生者　右邊華座下　眞言者所居
若持妙吉祥　中置無我字　是字轉成身　如前之所觀

文殊師利心曰（二百八十一） 南麽三曼多勃馱喃

若觀世自在　或金剛薩埵　慈氏及普賢　地藏除蓋障　佛眼幷白處　多利毗俱知　忙莽商羯羅
金輪與馬頭　持明男女使　忿怒諸奉教　隨其所樂欲　依前法而轉　爲令心喜故　奉獻外華香
燈明閼伽水　皆如本教說　不動以去垢　辟除使光顯　本法自相加　及護持我身　結諸方界等
或以降三世　召請如本教　所用印眞言　及此普通印　眞言王相應

聖者不動尊眞言曰（二百八十二） 南麽三曼多伐折囉赧一戰拏摩訶路灑儜二去薩破二合吒也三𤙖怛囉二合迦四悍引漫引含三遍

當以定慧手　皆作金剛拳　正直舒火風　屈容持地水　三昧手爲鞘　般若以爲刀　慧刀入住出
皆在三昧鞘　是則無動尊　密印之威儀　定手住其心　慧手普旋轉　應知所觸物　即名爲去垢
以此而左旋　因是成辟除　若結方隅界　皆令隨右轉　所餘衆事業　滅惡淨諸障　亦當如是作
隨類而相應
次以眞言印　而請召衆聖　諸佛菩薩說　依本誓而來

召請方便眞言曰（二百八十三） 南麽三曼多勃馱喃一阿去急呼薩嚩怛羅引二合鉢囉二合底訶諦三怛他引蘗黨矩奢
三菩提浙囉耶二合鉢囉布囉迦四莎訶七應誦七遍

以歸命合掌　固結金剛縛　當令智慧手　直舒彼風輪　便屈其上節　故是爲鉤印　諸聖救世者
以茲召一切　安住十地等　大力諸菩薩　及餘難調伏　不善心衆生
次奉三昧耶　具以眞言印　即相如前說　諸三昧耶教

三昧耶眞言曰（二百八十四） 南麽三曼多勃馱喃一阿三迷二怛嚟三迷三三麽曳四莎訶五應誦三遍

以如是方便　正示三昧耶　則能普增益　一切衆生類　當得成悉地　速滿無上願　令本眞言主
諸明歡喜故

所獻閼伽水　先已具嚴備　用本眞言印　如法以加持　奉諸善逝者　用浴無垢身　次當淨一切
佛口所生子

閼伽眞言曰（二百八五）　南麼三曼多勃馱喃（一）伽伽娜三摩（引）三摩（二）莎訶（當誦二十五遍以不動尊印示之）

次奉所敷座　具密印眞言　結作蓮華臺　遍置一切處　覺者所安坐　證最勝菩提　爲得如是處
故持以上獻

如來座眞言曰（二百八六）　南麼三曼多勃馱喃　阿（引聲急呼）

其中密印相　定慧手相合　而普舒散之　猶如鈴鐸形　二空與地輪　聚合以爲臺　水輪稍相遠
是卽蓮華印
復次當辟除　自身所生障　以大慧刀印　聖不動眞言　當見同於彼　最勝金剛焰　焚燒一切障
令盡無有餘
智者當轉作　金剛薩埵身　眞言印相應　遍布諸支分

金剛種子心曰（二百八七）　南麼三曼多勃馱喃　鑁

念此眞實義　諸法離言說　以具印等故　卽同執金剛　當知彼印相　先以三補吒　火輪爲中鋒
端鏡自相合　風輪以爲鉤　舒屈置其傍　水輪互相交　而在於掌內

金剛薩埵眞言曰（二百八八）　南麼三曼多伐折囉赧（一）戰拏摩訶路灑赧（平二）許

或用三昧手　作半金剛印　或以餘契經　所說之軌儀　次當周遍身　被服金剛鎧　身語之密印
前已依法說　以佉字及點　而置於頂上　思惟此眞言　諸法如虛空

彼眞言曰（二百八九）　南麼三曼多勃馱喃　欠

應先住此字門然後作金剛薩埵身

次應一心作　摧伏諸魔印　智者應普轉　眞語共相應　能除極猛利　諸有惡心者　當見遍此地

金剛熾焰光

降伏魔眞言曰（二百九十）南麼三曼多勃馱喃一摩訶引沫羅嚩底二捺奢嚩路嗢婆二合吠平三摩訶引昧怛囉也三毘庾二合嗢蘖二合底四莎訶

當以智慧手　而作金剛拳　正直舒風輪　加於白毫際　如毗俱知形　是則彼標幟　此印名大印
念之除衆魔　縛結是法故　無量天魔軍　及餘爲障者　必定皆退散
次用難堪忍　密印及眞言　而用結周界　威猛無能覩

無能堪忍眞言曰（二百九十一）南麼三曼多勃馱喃一三莽多努蘖帝二滿馱也徙𤚥引三摩訶三摩耶毘闍去帝四娑麼二合囉拏五阿鉢囉二合底訶諦六馱迦馱迦七折囉折囉八滿馱滿馱九捺奢儞㰤十薩婆怛他引蘖多引努壞帝十一鉢囉二合嚩囉達摩攞馱尾若曳十二薄伽嚩底十三微矩㘑微矩㘑十四㘑魯補㘑微矩㘑十五莎訶十六當誦三遍

或以第二略說眞言曰（二百九十二）南麼三曼多勃馱喃一㘑魯補㘑微矩㘑二莎訶當誦七遍

先以三補吒　風輪在於掌　二空及地輪　內屈猶如鉤　火輪合爲峯　開散其水輪　旋轉指十方
是名結大界　用持十方國　能令悉堅住　是故三世事　悉能普護之
或以不動尊　成辦一切事　護身處令淨　結諸方界等

不動尊種子心曰（二百九十三）南麼三曼多伐折囉赧悍

次先恭敬禮　復獻於閼伽　如經說香等　依法修供養　復以聖不動　加持此衆物　結彼慧刀印
普皆遍灑之　是諸香華等　所辦供養具　數以密印灑　復頻誦眞言　各說本眞言　及自所持明
應如是作已　稱名而奉獻　一切先遍置　清淨法界心　所謂囕字門　如前所開示

所稱名中塗香眞言曰（二百九十四）南麼三曼多勃馱喃一微輸上馱健杜引嗢婆二合嚩二莎訶當誦三遍

次說華眞言曰（二百九十五）南麼三曼多勃馱喃一摩訶引妹怛㘑也二三毘庾二合嗢蘖二合帝三莎訶當誦三遍

次說焚香眞言曰（二百九十六）南麼三曼多勃馱喃一達摩馱睹弩蘖帝二莎訶當誦三遍

次說然燈眞言曰（二百九七）南麼三曼多勃馱喃（一）怛他引揭多引喇旨（二合）薩頗（二合）囉拏（合）嚩婆（去）娑那（三）伽伽
猱那哩耶（四）莎訶

次說諸食眞言曰（二百九八）南麼三曼多勃馱喃（一）阿囉囉伽囉囉（二）沫隣捺泥（三）摩訶引沫履（四）莎訶（五）

及餘供養具　所應奉獻者　依隨此法則　淨以無動尊　當令定慧掌　五輪互相叉　是則持衆物
普通供養印　眞言具慧者　敬養衆聖尊　復作心儀式　淸淨極嚴麗　所獻皆充滿　平等如法界
此方及餘刹　普入諸趣中　依諸佛菩薩　福德而生起　幢幡諸瓔蓋　廣大妙樓閣　及天寶樹王
遍有諸資具　衆香華雲等　無際猶虛空　各雨諸供物　供養成佛事　思惟奉一切　諸佛及菩薩
以虛空藏明　普通供養印　三轉作加持　所願皆成就

持虛空藏明增加句云

依我功德力　及與法界力　一切時易獲　廣多復淸淨　大供莊嚴雲　依一切如來　及諸菩薩衆
海會而流出　以一切諸佛　菩薩加持故　如法所修事　積集諸功德　迴向成悉地　爲利諸衆生
以如是心說　願明行淸淨　諸障得銷除　功德自圓滿　隨時修正行　是則無定期　若諸眞言人
此生求悉地　先依法持誦　但作心供養　所爲既終竟　次經於一月　具以外儀軌　而受持眞言
又以持金剛　殊勝之諷詠　供養佛菩薩　當得速成就

執金剛阿利沙偈曰

無等無所動　平等堅固法　悲愍流轉者　援修衆苦患　善能授悉地　一切諸功德　離垢不遷變
無比勝願法　等同於虛空　彼不可爲喩　隣塵千萬分　尙不及其一　恒於衆生界　成就果願中
於悉地無盡　故離於譬喩　常無垢翳悲　依於精進生　隨願成悉地　法爾無能蔽　作衆生義利
所及普周遍　照明恒不斷　眞悲廣大身　離障無罣礙　行於悲行者　周流三世中　施眞成就願
於無量之量　令至究竟處　奇哉此妙法　善逝之所到　唯不越本誓　授我無上果　若施斯願者

恒至殊勝宅　廣及於世間　能滿勝希願　不染一切趣　三界無所依

右此偈即同眞言當誦梵本

誦持如是偈讚已　至誠歸命世尊師　惟願垂慈授與我　悉濟有情之悉地　復次爲欲利他故
觀佛化雲遍一切　我所修福備加持　普賢自體法界力　坐蓮華臺往十方　隨順性欲導衆生
依諸如來本誓願　淨除一切內外障　開現出世衆資具　如其信解充滿之　以我功德所莊嚴
及淨法界中出生　如來神力加持故　成就衆生諸義利　備足諸佛之庫藏　出無盡寶不思議
三誦虛空藏轉明　及密印相如前說　此眞言乘諸學者　是故當生誠信心　一切導師所宣說
不應誹謗生疑悔

持誦法則品第四

如是具法供養已　起利無盡衆生心　稽首諸佛聖天等　住相應座入三昧　四種靜慮之軌儀
能令內心生喜樂　以眞實義加持故　當得眞言成等引　若作眞言念誦時　今當次說彼方便
智者如先所開示　現前而觀本所尊　於其心月圓明中　悉皆照見眞言字　即應次第而受持
乃至令心淨無垢　數及時分相現等　依隨經教已滿足　志求有相之義利　眞言悉地猶意成
是名世間具相行　四支禪門復殊異　行者應生決定意　先當一緣觀本尊　持彼眞言祕密印
自作瑜伽本尊像　如其色相威儀等　我身無二行亦同　由住本地相應身　至少福者亦成就
瑜伽勝義品中說　次應轉變明字門　而以觀作本尊形　速見身祕之標幟　契經略說有二相
正遍知觀最爲先　次及菩薩聖天觀　妙吉祥尊爲上首　亦依彼乘位而轉　以相應印及眞言

文殊種子，所謂滿字門，已於前品中說

本尊三昧相應者　以心置心爲種子　彼應如是自觀察　安住清淨菩提心　衆所知識之形像

隨順彼行而勿異　當知聖者妙音尊　身相猶如鬱金色　頂現童眞五髻相　左佇折羅在青蓮
以智慧手旋無畏　或作金剛與願印
文殊師利眞言曰　（二百九九）　南麽三曼多勃馱喃一係係具摩囉迦二微目吃底合二鉢他悉體合二多三薩麽二合囉
薩麽合二囉四鉢囉合二底然五莎訶
合定慧手虛心掌　火輪交結持水輪　二風環屈加大空　其相如鉤成密印　而用遍置自支分
爾乃修行衆事業　當知諸佛菩薩等　轉字瑜伽亦復然　或餘經說眞言印　如是用之不違背
或依彼說異儀軌　或以普通三密門　若能解了旋轉者　諸有所作皆成就
普通種子心曰　（三百）　南麽三曼多勃馱喃迦
契經所說迦字門　一切諸法無造作　當以如是理光明　而觀此聲眞實義　眞陀摩尼寶王印
定慧五輪五相交　金剛合掌之標式　普通一切菩薩法
一切諸菩薩眞言曰　（三百一）　南麽三曼多勃馱喃一薩婆他二微末底三微枳羅儜四上達摩馱睹涅闍多五參
參訶六莎訶
佉字含衆色　增加大空點　如前所宣說　置之於頂上　當得等虛空　說諸法亦然　復於其首內
想念本初字　純白點嚴飾　最勝百明心　眼界猶明燈　大空無垢字　住於本尊位　正覺當現前
乃至諦明了　應當如意見　又觀彼心處　圓滿淨月輪　炳現阿字門　遍作金剛色　說聲眞實義
諸法本無生　於中正觀察　皆從此心起　聲字如華鬘　煇焰自圍遶　其光普明淨　能破無明害
迦字以爲首　或復餘字門　皆當修是法　念以聲眞實　或所持眞言　環列在圓明　單字與句因
隨息而出入　或修意支法　應理如等引　緣念成悉地　普利衆生心　方便作持誦　懈極然後已
或以眞言字　運布心月中　隨其深密意　思念聲眞實　如是受持者　復爲一方便　諸有修福聚
成就諸善根　當習意支法　無有定時分　若樂求現法　上中下悉地　應以斯方便　先作心受持

正覺諸世尊　所說法如是　或奉香華等　隨力修供養

是中、先持誦法略有二種。一者依時故、二者依相故。時、謂所期數滿、及定時日月限等。相、謂佛塔圖像、出生光焰普雷等。當知是眞言行者、罪障淨除之相也。彼如經所說、先作意念誦已、復持滿一落叉、又從此經第二月、遍修具支方便。然後齎其本願、作成就法。若有障者、先依現相門、以心意持誦、然後於第二月、具支供養。應如是知

復爲樂修習　如來三密門　經于一月者　次說彼方便　行者若持誦　大毘盧遮那　正覺眞言印
當依如是法

大日如來種子心曰　（三百二）　南麼三曼多勃馱喃阿

阿字門、所謂一切法本不生故、已如前說

是中身密印　正覺白毫相　慧手金剛拳　而在於眉間

如來毫相眞言曰　（三百三）　南麼三曼多勃馱喃阿（去聲）痕若（平聲）

如前轉阿字　而成大日尊　法力所持故　與自身無異　住本尊瑜伽　加以五支字　下體及臍上
心頂與眉間　於三摩呬多　運相而安立　以依是法住　即同牟尼尊　阿字遍金色　用作金剛輪
加持於下體　說名瑜伽座　鑁字素月光　在於霧聚中　加持自臍上　是名大悲水　覽字初日暉
彤赤在三角　加持本心位　是名智火光　唅字劫災焰　黑色在風輪　加持白毫際　說名自在力
佉字及空點　相成一切色　加持在頂上　故名爲大空

此五種眞言心、第二品中已說（又此五偈、隨便者觀具[illegible]使文、[illegible]也）

五字以嚴身　威德具成就　熾然大悲焰　滅除衆罪業　天魔軍衆等　及餘爲障者　當見如是人
[illegible]業同金剛　又於首中置　百光遍照王　安立無垢眼　猶燈明顯照　如前住瑜伽　加持亦如是
智者觀自體　等同如來身　心月圓明處　[illegible]與相應　字字無間斷　猶如聞鈴鐸　正等覺眞言
隨取而受持　當以此方便　速得成悉地

復次若觀念　釋迦牟尼尊　所用明字門　我今次宣說
釋迦種子.所謂婆字門.已於前品中說
是中聲實義　所謂離諸觀　彼佛身密印　以如來鉢等　當用智慧手　加於三昧掌　正受之儀式
而在於齊輪
釋迦牟尼佛眞言曰（三百四）南麼三曼多勃馱喃一薩婆吃麗二合奢喔素捺那二薩婆達摩嚩始多引鉢曪引二合鉢多三二合伽伽娜三摩引二摩四莎訶
如是.或餘等正覺密印眞言.各依本經所用.亦當如前方便.以字門觀轉.作本尊身.住瑜伽法.運布種子.然後持誦所受眞言.若依此如來行者.當於大悲胎藏生漫荼羅王.得阿闍梨灌頂.乃應具足修行.非但得持明灌頂者之所堪也.其四支禪門方便次第.設餘經中所說儀軌.有所虧缺.若加此法修之.得離諸過.以本尊歡喜故.增其威勢.功德隨生.又持誦畢已.輒用本法而護持之.雖餘經有不說者.亦當通用此意.令修行人速得成就
復次本尊之所住　漫荼羅位之儀式　如彼形色壇亦然　依此瑜伽疾成就　當知悉地有三種
寂災增益降伏心　分別事業凡四分　隨其物類所當用　純素黃赤深玄色　圓方三角蓮華壇
北面勝方住蓮座　惔怕之心寂災事　東面初方吉祥座　悅樂之容增益事　西面後方在賢座
喜怒與俱攝召事　南面下方蹲踞等　忿怒之像降伏事　若知祕密之標幟　性位形色及威儀
奉華香等隨所應　皆當如是廣分別　淨障增福圓滿等　捨處遠遊摧害事　眞言之初以唵字
後加莎訶寂災用　若眞言初以唵字　後加吽發召攝用　初後納麼增益用　初後吽發降伏用
吽字發字通三處　增其名號在中間　如是分別眞言相　智者應當悉知解

眞言事業品第五

爾時眞言行者.隨其所應.如法持誦已.復當如前事業.而自加持.作金剛薩埵身.思惟佛菩薩衆無量功德.於無

盡衆生界。興大悲心。隨其所有資具。而修供養。供養已。又當一心合掌。以金剛諷誦。及餘微妙言辭。稱歎如來眞實功德

次持所造衆善。迴向發願。作如是言。如大覺世尊。所證知解了積集功德。迴向無上菩提。我今亦復如是。所有福聚。與法界衆生。共之咸使度生死海。咸遍知道。自利利他法皆滿足。依於如來大住而住。非獨爲己身故求菩提也。乃至往返生死。利諸衆生同得一切種智以來。常當修集福德智慧。不造餘業。願我等得到第一安樂。所求悉攝。離諸障礙。一切圓滿故。復更思惟。令我速當具足若內若外種種淸淨妙寶。而自莊嚴。相續無間。普皆流出。以是因緣故。能滿一切衆生所有希願

有略說如是。若廣修行者。當如普賢行願。及餘大乘修多羅所說。以決定意而稱述之。或云如諸佛菩薩。自所證知。與大悲願。我亦如是發願也

次當奉獻閼伽。作歸命合掌。置之頂上。思惟諸佛菩薩眞實功德。至誠作禮而說偈言

諸有永離一切過　無量功德莊嚴身　一向饒益衆生者　我今悉皆歸命禮

次當啓白衆聖。說是偈言

現前諸如來　救世諸菩薩　不斷大乘教　到殊勝位者　唯願聖天衆　決定證知我　各當隨所安

後復垂哀赴

次當以三昧耶眞言密印。於頂上解之。而生是念。諸有結護加持。皆令解脫。以此方便故。先所奉請諸尊。各還所住。不爲無等大誓之所留止也。復用法界本性。加持自體。思惟淨菩提心。而住金剛薩埵身。是中明印。第二品中已說。若念誦竟。以此三印持身。所有眞言行門終畢。法則皆悉圓滿

又應如前方便。觀法界字。以爲頂相。被服金剛甲冑。由斯秘密莊嚴故。即得如金剛自性。無能沮壞之者。諸有聞其音聲。或見或觸。皆必定於阿耨多羅三藐三菩提。一切功德皆悉成就。與大日世尊。等無有異也

次復起增上心。修行殊勝事業。於淸淨處。以香華。先令自身作觀世音菩薩。或住如來自性。依前方便。以眞言

密印加持。然後以法施心。讀誦大乘方廣經典。或以心誦。而請諸天神等。令聽受之。如所說偈言

金剛頂經說　觀世蓮華眼　卽同一切佛　無盡莊嚴身　或以世尊師　諸法自在者　隨取一名號

作本性加持

觀自在種子心曰　(三百五)　南麼三曼多勃馱喃娑呼急

字門眞實義　諸法無染著　音聲所流出　當作如是觀　此身中密相　所謂蓮華印　如前奉敷座

我已分別說

次說觀自在眞言曰　(三百六)　南麼三曼多勃馱喃一薩縛怛他引蘖多縛路吉多二羯魯拏麼也三囉囉囉吽若四短聲莎訶

前以法界心字。置之在頂。又用此眞言密印。相加。隨力所堪。讀誦經法。或造制底漫荼羅等。所爲已畢。次從座起。以和敬相應接諸人事。又爲身輪得支持故。次行乞食或檀越請。或僧中所得。當離魚肉葷菜。及供養本尊諸佛之餘。乃至種種殘宿不淨。諸酒木果等漿。可以醉人者。皆不應飮噉

次奉摶食。用獻本尊。又作隨意食法。若故有餘。更出少分。爲濟饑乏乞求故。當生是心。我爲任持身器。安隱行道。受是段食。如膏車鐧。令不敗傷。有所至到。不應以滋味故。增減其心。及生悅澤嚴身之想。然後觀法界心字。遍淨諸食。以事業金剛。加持自身。是中種子。如鑁字眞言所說

復誦施十力明八遍方乃食之。說此明曰　(三百七)　南麼薩嚩勃馱菩提薩埵喃一唵麼蘭捺泥去帝孺忙栗寧二莎訶

如是住先成就本尊瑜伽。飯食訖已。所餘觸食。以成辦諸事眞言心。供養所應食者。當用不空威怒增加聖不動眞言。當誦一遍。受者歡喜。常隨行人。而護念之。彼眞言曰　(三百八)　南麼三曼多伐折囉赧一怛囉二合吒輕阿謨伽二戰拏摩訶路灑儜上三娑破二合吒野吽四怛囉二合麼野五怛囉二合麼野六吽七怛囉二合吒輕八悍漫九

彼食竟。休息少時

復當禮拜諸佛。懺悔衆罪。爲淨心故。如是修常業。乃至依前讀誦經典。恒依是住。於後日分亦復如是。初夜後夜思惟大乘。無得間絕。至中夜分。以事業金剛。如前被金剛甲。敬禮一切諸佛大菩薩等。次當運心如法供養。而作是念。我爲一切衆生。志求大事因緣故。應當愛護是身。少時安寢。非爲貪著睡眠之樂。先當正身威儀。重累二足。右脇而臥。若支體疲懈者。隨意轉側無咎。爲令速寤。常當係意在明。又復不應偃臥牀上。次於餘日亦如是行之。持眞言者。以不斷法則。無間勤修故。得眞言門修菩薩行之名號也。若於數時相現等持誦法中。作前方便。乃至具修勝業。猶不成就者。應自警悟。倍加精進。勿得生下劣想。而言是法非我所堪。如是屈其志力。自利利他。常不空過。以行者動識不休息故。衆聖玄照其心。則蒙威神建立。得離諸障。是中有二事。不應捨離。謂不捨諸佛菩薩。及饒益無盡衆生心。恒於一切智願。心不傾動。以此因緣。必定得成隨類悉地也

常依內法而澡浴　不應執著外淨法　於觸食等懷疑悔　如是皆所不應爲　若爲任持是身故
隨時盥沐除諸垢　於河流等如法數　與眞言印共相應　以法界心淨諸水　隨用不動降三世
眞言密印護方等　住於本尊自性觀　復當三轉持淨土　恒以一心正思惟　念聖不動眞言等
智者默然應澡浴

淨法界心及不動尊種子。刀印。皆前說

降三世種子心曰　（三百九）　南麼三曼多伐折囉赧　訶

此中阿字門　聲理如前說　少分差別者　所謂淨除相　降伏三界尊　身密之儀式　當用成事業
五智金剛印

次說降三世眞言曰　（三百十）　南麼三曼多伐折囉赧一訶訶訶二微薩麼二合曳三平薩婆怛他引揭多若灑也三
婆嚩四怛嚟二合路枳也二合微若也五吽若六莎訶

如是澡浴還淨已　具三昧耶護支分　思惟無盡聖天衆　三奉掬水而獻之　爲淨身心利他故
敬禮如來勝生子　遠離三毒分別等　寂閑諸根詣精室　或依水室異方便　心住如前所制儀

自身三等爲限量　爲求上中下法故　行者如是作持誦　所有罪流當永息　必定成就摧諸障
一切智句集其身　彼依世間成就品　或復餘經之所說　供養支分衆方便　如其次第所修行
未離有爲諸相故　是謂世間之悉地
次說無相最殊勝　具信解者所觀察　若眞言乘深慧人　此生志求無上果　隨所信解修觀照
如前心供養之儀　及依悉地流出品　出世間品瑜伽法　彼於眞實緣生句　內心支分離攀緣
依此方便而證修　常得出世間成就

如所說優陀那偈言

甚深無相法　劣慧所不堪　爲應彼等故　兼存有相說

右阿闍棃所集。大毗盧遮那成佛神變加持經中。供養儀式具足竟。傳度者頗存會意。又欲省文故。刪其重複眞言。旋轉用之。修行者。當綜括上下文義耳

大毗盧遮那成佛神變加持經卷第七

右大唐天竺國三藏輸波迦羅唐言善無畏譯

解深密經卷第一

麗蓋　宋此　元此　明效

大唐三藏法師玄奘奉　詔譯

序品第一

如是我聞。一時薄伽梵。住最勝光曜七寶莊嚴。放大光明普照一切無邊世界無量方所妙飾間列周圓無際。其量難測超過三界所行之處。勝出世間善根所起。最極自在淨識為相。如來所都。諸大菩薩衆所雲集。無量天龍夜叉健達縛阿素洛揭路荼緊捺洛牟呼洛伽人非人等常所翼從。廣大法味喜樂所持。作諸衆生一切義利。滅諸煩惱災橫纏垢。遠離衆魔過諸莊嚴。如來莊嚴之所依處。大念慧行以為遊路。大止妙觀以為所乘。大空無相無願解脫為所入門。無量功德衆所莊嚴。大寶花王衆所建立大宮殿中。是薄伽梵最清淨覺。不二現行趣無相法。住於佛住。逮得一切佛平等性。到無障處。不可轉法。所行無礙。其所成立不可思議。遊於三世平等法性。其身流布一切世界。於一切法智無疑滯。於一切行成就大覺。於諸法智無有疑惑。凡所現身不可分別。一切菩薩正所求智。得佛無二住勝彼岸。不相間雜如來解脫妙智究竟。證無中邊佛地平等。極於法界。盡虛空性。窮未來際。與無量大聲聞衆俱。一切調順皆是佛子。心善解脫慧善解脫。戒善清淨趣求法樂。多聞聞持其聞積集。善思所思善說所說善作所作。捷慧速慧利慧出慧勝決擇慧大慧廣慧及無等慧。慧寶成就具足三明。逮得第一現法樂住大淨福田。威儀寂靜無不圓滿。大忍柔和成就無減。已善奉行如來聖教。復有無量菩薩摩訶薩。從種種佛土而來集會。皆住大乘遊大乘法。於諸衆生其心平等。離諸分別及不分別種種分別。摧伏一切衆魔怨敵。遠離一切聲聞獨覺所有作意。廣大法味喜樂所持。超五怖畏。一向趣入不退轉地。息一切衆生一切苦惱所逼迫地。而現在前。其名曰解甚深義密意菩薩摩訶薩。如理請問菩薩摩訶薩。法涌菩薩摩訶薩。善清淨慧菩薩摩訶薩。廣慧菩薩摩訶薩。德本菩薩摩訶薩。勝義生菩薩摩訶薩。觀自在菩薩摩訶薩。慈氏菩薩摩訶薩。曼殊室利菩薩

品目上無經名○薩下三本俱有摩訶薩三字下同

告三本俱作謂○一者有爲二者同作所謂有爲無爲四字

執同作集下同

設上同無施字

等正同作正等下同○想元明俱作相下同

瓦礫草葉木三本俱作草葉木瓦礫下同○琉同作瑠下同○曉知同作知曉下同

摩訶薩等。而爲上首

解深密經勝義諦相品第二

爾時如理請問菩薩摩訶薩。即於佛前問解甚深義密意菩薩言。最勝子。言一切法無二。一切法無二者。何等一切法。云何爲無二。解甚深義密意菩薩告如理請問菩薩曰。善男子。一切法者略有二種。一者有爲。二者無爲。是中有爲非有爲非無爲。無爲亦非無爲非有爲。如理請問菩薩復問解甚深義密意菩薩言。最勝子。如何有爲非有爲非無爲。無爲亦非無爲非有爲。解甚深義密意菩薩謂如理請問菩薩曰。善男子。言有爲者。乃是本師假施設句。若是本師假施設句。即是徧計所執言辭所說。若是遍計所執言辭所說。即是究竟種種徧計言辭所說。不成實故非是有爲。善男子。言無爲者。亦墮言辭施設。離有爲無爲。少有所說其相亦爾。然非無事而有所說。何等爲事。謂諸聖者以聖智聖見離名言故。現等正覺。即於如是離言法性。爲欲令他現等覺故。假立名想謂之有爲。善男子。言無爲者。亦是本師假施設句。若是本師假施設句。即是徧計所執言辭所說。若是徧計所執言辭所說。即是究竟種種徧計言辭所說。不成實故非是無爲。善男子。言有爲者。亦墮言辭。設離無爲有爲。少有所說其相亦爾。然非無事而有所說。何等爲事。謂諸聖者以聖智聖見離名言故。現等正覺。即於如是離言法性。爲欲令他現等覺故。假立名想謂之無爲。爾時如理請問菩薩摩訶薩。復問解甚深義密意菩薩摩訶薩言。最勝子。如何此事。彼諸聖者以聖智聖見離名言故。現等正覺。即於如是離言法性。爲欲令他現等覺故。假立名想。或謂有爲或謂無爲。解甚深義密意菩薩謂如理請問菩薩曰。善男子。如善幻師或彼弟子。住四衢道積集瓦礫草葉木等。現作種種幻化事業。所謂象身馬身車身步身。末尼眞珠琉璃螺貝璧玉珊瑚種種財穀庫藏等身。若諸衆生愚癡頑鈍惡慧種類無所曉知。於瓦礫草葉木等上諸幻化事。見已聞已作如是念。此所見者實有象身實有馬身車身步身。末尼眞珠琉璃螺貝璧玉珊瑚種種財穀庫藏等身。如其所見如其所聞堅固執著隨起言說。唯此諦實餘皆愚妄。彼於後時應更觀察。若有衆生非愚非鈍善慧種類有所曉知。於瓦礫草葉木等上諸幻化事。見已聞

已作如是念。此所見者無實象身。無實馬身車身步身。末尼眞珠瑠璃螺貝璧玉珊瑚。種種財穀庫藏等身。然有幻狀迷惑眼事。於中發起大象身想。或大象身差別之想。乃至發起種種財穀庫藏等想。或彼種類差別之想。不如所見不如所聞堅固執著隨起言說。唯此諦實餘皆愚妄。爲欲表知如是義故。亦於此中隨起言說。彼於後時不須觀察。如是若有衆生是愚夫類是異生類。未得諸聖出世間慧。於一切法離言法性不能了知。彼於一切有爲無爲。見已聞已作如是念。此所得者決定實有有爲無爲。如其所見如其所聞堅固執著隨起言說。唯此諦實餘皆癡妄。彼於後時應更觀察。若有衆生非愚夫類。已見聖諦。已得諸聖出世間慧。於一切法離言法性如實了知。彼於一切有爲無爲。見已聞已作如是念。此所得者決定無實有爲無爲。然有分別所起行相。猶如幻事迷惑覺慧。於中發起爲無爲想。或爲無爲差別之想。不如所見不如所聞堅固執著隨起言說。唯此諦實餘皆癡妄。爲欲表知如是義故。亦於此中隨起言說。彼於後時不須觀察。如是善男子。彼諸聖者於此事中。以聖智聖見離名言故現等正覺。即於如是離言法性。爲欲令他現等覺故。假立名想。謂之有爲謂之無爲。爾時解甚深義密意菩薩。欲重宣此義而說頌曰

佛說離言無二義、　甚深非愚之所行　愚夫於此癡所惑　樂著二依言戲論

彼或不定或邪定　流轉極長生死苦　復違如是正智論　當生牛羊等類中

爾時法涌菩薩白佛言。世尊。從此東方過七十二殑伽河沙等世界。有世界名具大名稱。是中如來號廣大名稱。我於先日從彼佛土發來至此。我於彼佛土曾見一處有七萬七千外道。并其師首同一會坐。爲思諸法勝義諦相。彼共思議稱量觀察遍推求時。於一切法勝義諦相竟不能得。唯除種種意解。別異意解。變異意解。互相違背共興諍論。口出矛矟更相矟已刺已惱已壞已。各各離散。世尊。我於爾時竊作是念。如來出世甚奇希有。由出世故乃於如是超過一切尋思所行。勝義諦相亦有通達作證可得。說是語已。爾時世尊告法涌菩薩曰。善男子。如是如是如汝所說。我於超過一切尋思。勝義諦相現等正覺。現等覺已爲他宣說。顯現開解施設照了。何以故。我說勝義是諸聖者內自所證。尋思所行是諸異生展轉所證。是故法涌。由此道理當知勝義超過一切尋思境相。

伽下三本俱無河字〔後下同〕
無佛字
菩同作等

矟已刺已惱已
壞已同作矟刺
惱壞已六字
〔等〕正同作正
等〇相下同無
復次二字下同

如三本俱作謂

彼同作此

復次法涌。我說勝義無相所行。尋思但行有相境界。是故法涌。由此道理當知勝義。超過一切尋思境相。復次法涌。我說勝義不可言說。尋思但行言說境界。是故法涌。由此道理當知勝義。超過一切尋思境相。復次法涌。我說勝義絕諸表示。尋思但行表示境界。是故法涌。由此道理當知勝義。超過一切尋思境相。法涌當知。譬如有人盡其壽量習辛苦味。於蜜石蜜上妙美味不能尋思。不能比度不能信解。或於長夜由欲貪勝解。諸欲熾火所燒然故。於內除滅一切色聲香味觸相。妙遠離樂不能尋思。不能比度不能信解。或於長夜由言說勝解。樂著世間綺言說故。於內寂靜聖默然樂不能尋思。不能比度不能信解。或於長夜由見聞覺知表示勝解。樂著世間諸表示故。於永除斷一切表示。薩迦耶滅究竟涅槃。不能尋思不能比度不能信解。法涌當知。譬如有人於其長夜。由有種種我所攝受諍論勝解。樂著世間諸諍論故。於北拘盧洲無我所無攝受離諍論。不能尋思不能比度不能信解。如是法涌。諸尋思者。於超一切尋思所行勝義諦相。不能尋思不能比度不能信解。爾時世尊欲重宣此義。而說頌曰

內證無相之所行　不可言說絕表示　息諸諍論勝義諦　超過一切尋思相

爾時善清淨慧菩薩白佛言。世尊甚奇。乃至世尊善說。如世尊言。勝義諦相微細甚深。超過諸法一異性相。難可通達。世尊。我即於此會見一處。有眾菩薩等正修行勝解行地。同一會坐。皆共思議勝義諦相。與諸行相一異性相。於此會中一類菩薩作如是言。勝義諦相與諸行相都無有異。一類菩薩復作是言。非勝義諦相與諸行相都無有異。然勝義諦相異諸行相。有餘菩薩疑惑猶豫復作是言。是諸菩薩誰言諦實誰言虛妄。誰如理行誰不如理。或唱是言。勝義諦相與諸行相都無有異。或唱是言。勝義諦相異諸行相。世尊。我見彼已竊作是念。此諸善男子。愚癡頑鈍不明不善不如理行。於勝義諦微細甚深。超過諸行一異性相。不能解了。說是語已。爾時世尊告善清淨慧菩薩曰。善男子。如是如是如汝所說。彼諸善男子。愚癡頑鈍不明不善不如理行。於勝義諦微細甚深。超過諸行一異性相。不能解了。何以故。善清淨慧。非於諸行如是行時。名能通達勝義諦相。或於勝義諦而得作證。何以故。善清淨慧。若勝義諦相與諸行相都無異者。應於今時一切異生皆已見諦。又諸異生皆應已得無上方

菩提三本但無
復次二字文同

便安隱涅槃。或應已證阿耨多羅三藐三菩提。若勝義諦相與諸行相一向異者，已見諦者於諸行相應不除遣。若不除遣諸行相者，應於相縛不得解脫。此見諦者於諸相縛不解脫故，於麤重縛亦應不脫。由於二縛不解脫故，已見諦者應不能得無上方便安隱涅槃。或不應證阿耨多羅三藐三菩提。善清淨慧，由於今時非諸異生，皆已見諦非諸異生，已能獲得無上方便安隱涅槃，亦非已證阿耨多羅三藐三菩提。是故勝義諦相與諸行相都無異相不應道理。若於此中作如是言，勝義諦相與諸行相都無異者，由此道理當知一切非如理行不如正理。善清淨慧，由於今時非見諦者於諸行相不能除遣，然能除遣；非見諦者於諸相縛不能解脫，然能解脫；非見諦者於麤重縛不能解脫，然能解脫。以於二障能解脫故，亦能獲得無上方便安隱涅槃，或有能證阿耨多羅三藐三菩提。是故勝義諦相與諸行相一向異相不應道理。若於此中作如是言，勝義諦相與諸行相一向異者，由此道理當知一切非如理行不如正理。復次善清淨慧，若勝義諦相與諸行相都無異者，如諸行相墮雜染相，此勝義諦相亦應如是墮雜染相。善清淨慧，若勝義諦相與諸行相一向異者，應非一切行相共相名勝義諦相。善清淨慧，由於今時勝義諦相非墮雜染相，諸行共相名勝義諦相。是故勝義諦相與諸行相都無異相不應道理，勝義諦相與諸行相一向異相不應道理。若於此中作如是言，勝義諦相與諸行相都無有異，或勝義諦相與諸行相一向異者，由此道理當知一切非如理行不如正理。復次善清淨慧，若勝義諦相與諸行相都無異者，如勝義諦相於諸行相無有差別，一切行相亦應如是無有差別。修觀行者於諸行中，如其所見如其所聞如其所覺如其所知，不應後時更求勝義。若勝義諦相與諸行相一向異者，應非諸行唯無我性唯無自性之所顯現是勝義相。又應俱時別相成立，謂雜染相及清淨相。善清淨慧，由於今時一切行相皆有差別非無差別，修觀行者於諸行中，如其所見如其所聞如其所覺如其所知，復於後時更求勝義。又即諸行唯無我性唯無自性之所顯現名勝義相。又非俱時染淨二相別相成立。是故勝義諦相與諸行相都無有異，或一向異不應道理。若於此中作如是言，勝義諦相與諸行相都無有異，或一向異者，由此道理當知一切非如理行不如正理。善清淨慧，如螺貝上鮮白色性，不易施設與彼螺貝一相異相。如螺貝上鮮白色性，金上黃色亦復如是。如箜篌聲上美妙曲性，不易

施設與箜篌聲一相異相。如黑沈上有妙香性。不易施設與彼黑沈一相異相。如胡椒上辛猛利性。不易施設與
彼胡椒一相異相。如胡椒上辛猛利性。訶棃澁性亦復如是。如蠹羅綿上有柔輭性。不易施設與蠹羅綿一相異
相。如熟酥上所有醍醐。不易施設與彼熟酥一相異相。又如一切行上無常性。一切有漏法上苦性。一切法上補
特伽羅無我性。不易施設與彼行等一相異相。又如貪上不寂靜相及雜染相。不易施設此與彼貪一相異相。如
於貪上於瞋癡上當知亦爾。如是善清淨慧。勝義諦相。不可施設與諸行相一相異相。善清淨慧。我於如是微細
極微細甚深極甚深。難通達極難通達。超過諸法一異性相。勝義諦相現正等覺。現等覺已為他宣說。顯示開解
施設照了。爾時世尊欲重宣此義。而說頌曰

行界勝義相　離一異性相　若分別一異　彼非如理行　衆生爲相縛　及彼麤重縛　要勤修止觀
爾乃得解脫

爾時世尊告長老善現曰。善現。汝於有情界中。知幾有情懷增上慢。爲增上慢所執持故。記別所解。汝於有情界
中。知幾有情離增上慢。記別所解。爾時長老善現白佛言。世尊。我知有情界中。少分有情離增上慢記別所解。世
尊。我知有情界中。有無量無數不可說有情懷增上慢。爲增上慢所執持故。記別所解。世尊。我於一時。住阿練若
大樹林中。時有衆多苾芻。亦於此林依近我住。我見彼諸苾芻。於日後分展轉聚集。依有所得現觀。各說種種相
法。記別所解。於中一類由得蘊故。得蘊相故。得蘊起故。得蘊盡故。得蘊滅故。得蘊滅作證故。記別所解。如此一類
由得蘊故。復有一類由得處故。復有一類得緣起故。當知亦爾。復有一類由得食故。得食相故。得食起故。得食盡
故。得食滅故。得食滅作證故。記別所解。復有一類由得諦故。得諦相故。得諦遍知故。得諦永斷故。得諦作證故。得
諦修習故。記別所解。復有一類由得界故。得界相故。得界種種性故。得界非一性故。得界滅故。得界滅作證故。記
別所解。復有一類由得念住故。得念住相故。得念住能治所治故。得念住修故。得念住未生令生故。得念住生已
堅住不忘。倍修增廣故。記別所解。如有一類得念住故。復有一類得正斷故。得神足故。得諸根故。得諸力故。得覺
支故。當知亦爾。復有一類得八支聖道故。得八支聖道相故。得八支聖道能治所治故。得八支聖道修故。得八支

澁明作澀
此元明俱作比
彼三本俱作爲
長老三本俱作尊者下同○增明作憎

竊三本俱作便

如同作謂

相下同無復次二字次同

味宋作昧

然三本俱作爾

品目心上宋元俱有解深密經四字

聖道未生令生故。得八支聖道生已堅住不忘。倍修增廣故。記別所解。世尊。我見彼已竊作是念。此諸長老依有所得現觀。各說種種相法。記別所解。當知彼諸長老。一切皆懷增上慢。爲增上慢所執持故。於勝義諦遍一切一味相不能解了。是故世尊甚奇。乃至世尊善說。如世尊言。勝義諦相微細最微細。甚深最甚深。難通達最難通達。遍一切一味相。世尊。此聖教中修行苾芻。於勝義諦遍一切一味相。尚難通達。況諸外道。爾時世尊告長老善現曰。如是如是。善現。我於微細最微細。甚深最甚深。難通達最難通達。遍一切一味相勝義諦。現正等覺。現等覺已爲他宣說。顯示開解施設照了。何以故。善現。我已顯示於一切蘊中清淨所緣是勝義諦。我已顯示於一切處緣起。食諦界念住正斷神足根力覺支道支中清淨所緣。是勝義諦此清淨所緣。於一切蘊中是一味相無別異相。如於蘊中。如是於一切處中乃至一切道支中。是一味相無別異相。是故善現。由此道理當知勝義諦是遍一切一味相。復次善現。修觀行苾芻。通達一蘊眞如勝義法無我性已。更不尋求各別餘蘊諸處緣起。食諦界念住正斷神足根力覺支道支。眞如勝義法無我性。唯卽隨此眞如勝義無二智爲依止故。於遍一切一味相勝義諦審察趣證。是故善現。由此道理當知勝義諦是遍一切一味相。復次善現。如彼諸蘊展轉異相。如彼諸處緣起。食諦界念住正斷神足根力覺支道支展轉異相。若一切法眞如勝義法無我性亦異相者。是則眞如勝義法無我性亦應有因從因所生。若從因生應是有爲。若是有爲應非勝義。若非勝義應更尋求餘勝義諦。善現。由此眞如勝義法無我性。不名有因非因所生。亦非有爲是勝義諦。得此勝義更不尋求餘勝義諦。唯有常常時恒恒時如來出世若不出世。諸法法性安立法界安住。是故善現。由此道理當知勝義諦是遍一切一味相。善現。譬如種種非一品類異相色中。虛空無相無分別無變異遍一切一味相。如是異性異相一切法中。勝義諦遍一切一味相。當知亦然。爾時世尊欲重宣此義。而說頌曰

此遍一切一味相　勝義諸佛說無異
若有於中異分別　彼定愚癡依上慢

心意識相品第三

爾時廣慧菩薩摩訶薩白佛言。世尊。如世尊說。於心意識祕密善巧菩薩。於心意識祕密善巧菩薩者。齊何名爲於心意識祕密善巧菩薩。如來齊何施設彼爲於心意識祕密善巧菩薩。說是語已。爾時世尊告廣慧菩薩摩訶薩曰。善哉善哉。廣慧。汝今乃能請問如來如是深義。汝今爲欲利益安樂無量衆生。哀愍世間及諸天人阿素洛等。爲令獲得義利安樂故發斯問。汝應諦聽。吾當爲汝說心意識祕密之義。廣慧當知。於六趣生死彼彼有情墮彼彼有情衆中。或在卵生。或在胎生。或在濕生。或在化生身分生起。於中最初一切種子心識成熟展轉和合增長廣大。依二執受。一者有色諸根及所依執受。二者相名分別言說戲論習氣執受。有色界中具二執受。無色界中不具二種。廣慧。此識亦名阿陀那識。何以故。由此識於身隨逐執持故。亦名阿賴耶識。何以故。由此識於身攝受藏隱同安危義故。亦名爲心。何以故。由此識色聲香味觸等積集滋長故。廣慧。阿陀那識爲依止爲建立故。六識身轉。謂眼識耳鼻舌身意識。此中有識。眼及色爲緣生眼識。與眼識俱隨行。同時同境有分別意識轉。有識。耳鼻舌身及聲香味觸爲緣。生耳鼻舌身識。與耳鼻舌身識俱隨行。同時同境有分別意識轉。廣慧。若於爾時一眼識轉。即於此時唯有一分別意識。與眼識同所行轉。若於爾時二三四五諸識身轉。即於此時唯有一分別意識。與五識身同所行轉。廣慧。譬如大瀑水流。若有一浪生緣現前唯一浪轉。若二若多浪生緣現前有多浪轉。然此瀑水自類恒流無斷無盡。又如善淨鏡面。若有一影生緣現前唯一影起。若二若多影生緣現前有多影起。非此鏡面轉變爲影。亦無受用滅盡可得。如是廣慧。由似瀑流阿陀那識爲依止爲建立故。若於爾時有一眼識生緣現前。即於此時一眼識轉。若於爾時乃至有五識身生緣現前。即於此時五識身轉。廣慧。如是菩薩雖由法住智。爲依止爲建立故。於心意識祕密善巧。然諸如來不齊於此施設彼爲於心意識一切祕密善巧菩薩。廣慧。若諸菩薩於內各別。如實不見阿陀那。不見阿陀那識。不見阿賴耶。不見阿賴耶識。不見積集。不見心。不見眼色及眼識。不見耳聲及耳識。不見鼻香及鼻識。不見舌味及舌識。不見身觸及身識。不見意法及意識。是名勝義善巧菩薩。如來施設彼爲勝義善巧菩薩。廣慧。齊此名爲於心意識一切祕密善巧菩薩。如來齊此施設彼爲於心意識一切祕密善巧菩薩。爾時世尊欲重宣此義而說頌曰

俱元作具
瀑三本俱作暴下同

我於乃至瀑流
二句同前後

阿陀那識甚深細　我於凡愚不開演
一切種子如瀑流　恐彼分別執爲我

解深密經卷第一

心意識相品第三

解深密經卷第二

〔麗蓋〕〔宋此〕〔元此〕〔明效〕

一〇

大唐三藏法師玄奘奉　詔譯

一切法相品第四

爾時德本菩薩摩訶薩白佛言。世尊。如世尊說於諸法相善巧菩薩。於諸法相善巧菩薩者。齊何名為於諸法相善巧菩薩。如來齊何施設彼為於諸法相善巧菩薩。說是語已。爾時世尊告德本菩薩曰。善哉德本。汝今乃能請問如來如是深義。汝今為欲利益安樂無量眾生。哀愍世間及諸天人阿素洛等。為令獲得義利安樂故發斯問。汝應諦聽。吾當為汝說諸法相。謂諸法相略有三種。何等為三。一者遍計所執相。二者依他起相。三者圓成實相。云何諸法遍計所執相。謂一切法名假安立自性差別。乃至為令隨起言說。云何諸法依他起相。謂一切法緣生自性。則此有故彼有。此生故彼生。謂無明緣行。乃至招集純大苦蘊。云何諸法圓成實相。謂一切法平等真如。於此真如。諸菩薩眾勇猛精進為因緣故。如理作意無倒思惟為因緣故。乃能通達。於此通達漸漸修集。乃至無上正等菩提方證圓滿。善男子。如眩瞖人眼中所有眩瞖過患。遍計所執相當知亦爾。如眩瞖人眩瞖眾相。或髮毛輪蜂蠅巨勝。或復青黃赤白等相差別現前。依他起相當知亦爾。如淨眼人遠離眼中眩瞖過患。即此淨眼本性所行無亂境界。圓成實相當知亦爾。善男子。譬如清淨頗胝迦寶。若與青染色合。則似帝青大青末尼寶像。由邪執取帝青大青末尼寶故。惑亂有情。若與赤染色合。則似琥珀末尼寶像。由邪執取琥珀末尼寶故。惑亂有情。若與綠染色合。則似末羅羯多末尼寶像。由邪執取末羅羯多末尼寶故。惑亂有情。若與黃染色合。則似金像。由邪執取真金像故。惑亂有情。如是德本。如彼清淨頗胝迦上所有染色相應。依他起相上遍計所執相言說習氣當知亦爾。如彼清淨頗胝迦上所有帝青大青琥珀末羅羯多金等邪執。依他起相上遍計所執相執當知亦爾。如彼清淨頗胝迦寶依他起相當知亦爾。如彼清淨頗胝迦上所有帝青大青琥珀末羅羯多真金等相。於常常時

集三本俱作習
瞖同作翳下同
巨勝元明俱作苣蕂
像元及南北藏俱作偏

於恒恒時.無有眞實無自性性.卽依他起相上.由遍計所執相.於常常時於恒恒時.無有眞實無自性性.圓成實相當知亦爾.復次德本.相名相應以爲緣故.遍計所執相而可了知.依他起相上遍計所執相.執以爲緣故.依他起相而可了知.依他起相上遍計所執相.無執以爲緣故.圓成實相而可了知.善男子.若諸菩薩能於諸法依他起相上.如實了知遍計所執相.卽能如實了知一切無相之法.若諸菩薩如實了知依他起相.卽能如實了知一切雜染相法.若諸菩薩如實了知圓成實相.卽能如實了知一切淸淨相法.善男子.若諸菩薩能於依他起相上.如實了知無相之法.卽能斷滅雜染相法.若能斷滅雜染相法.卽能證得淸淨相法.如是德本.由諸菩薩如實了知遍計所執相依他起相圓成實相故.如實了知諸無相法雜染相法淸淨相法.如實了知無相法故.斷滅一切雜染相法.斷滅一切雜染相法故.證得一切淸淨相法.齊此名爲於諸法相善巧菩薩.如來齊此施設彼.爲於諸法相善巧菩薩.爾時世尊欲重宣此義.而說頌曰

若不了知無相法　雜染相法不能斷　不斷雜染相法故　壞證微妙淨相法　不觀諸行衆過失
放逸過失害衆生　懈怠住法動法中　無有失壞可憐愍

解深密經無自性相品第五

爾時勝義生菩薩摩訶薩白佛言.世尊.我曾獨在靜處.心生如是尋思.世尊以無量門.曾說諸蘊所有自相生相滅相永斷遍知.如說諸蘊.諸處緣起諸食亦爾.以無量門曾說諸諦.所有自相遍知永斷作證修習.以無量門曾說諸界.所有自相種種界性.非一界性永斷遍知.以無量門曾說念住.所有自相能治所治.及以修習未生令生.生已堅住不忘倍修增長廣大.如說念住正斷神足根力覺支亦復如是.以無量門曾說八支聖道.所有自相能治所治.及以修習未生令生.生已堅住不忘倍修增長廣大.世尊.復說一切諸法皆無自性無生無滅本來寂靜自性涅槃.未審世尊.依何密意作如是說.一切諸法皆無自性無生無滅本來寂靜自性涅槃.我今請問如來斯義.惟願如來哀愍解釋.說一切法皆無自性無生無滅.本來寂靜自性涅槃所有密意.爾時世尊告勝義生菩薩

曰。善哉善哉。勝義生。汝所尋思甚爲如理。善哉善哉。善男子。汝今乃能請問如來如是深義。汝今爲欲利益安樂無量衆生。哀愍世間及諸天人阿素洛等。爲令獲得義利安樂故發斯問。汝應諦聽。吾當爲汝解釋所說一切諸法皆無自性無生無滅本來寂靜自性涅槃所有密意。勝義生當知。我依三種無自性性密意。說言一切諸法皆無自性。所謂相無自性性。生無自性性。勝義無自性性。善男子。云何諸法相無自性性。謂諸法遍計所執相。何以故。此由假名安立爲相。非由自相安立爲相。是故說名相無自性性。云何諸法生無自性性。謂諸法依他起相。何以故。此由依他緣力故有。非自然有。是故說名生無自性性。云何諸法勝義無自性性。謂諸法由生無自性性故。說名無自性性。卽緣生法。亦名勝義無自性性。何以故。於諸法中若是淸淨所緣境界。我顯示彼以爲勝義無自性性。依他起相非是淸淨所緣境界。是故亦說名爲勝義無自性性。復有諸法圓成實相。亦名勝義無自性性。何以故。一切諸法法無我性名爲勝義。亦得名爲無自性性。是一切法勝義諦故。無自性性之所顯故。由此因緣。名爲勝義無自性性。善男子。譬如空花相。無自性性當知亦爾。譬如幻像生。無自性性當知亦爾。一分勝義無自性性當知亦爾。譬如虛空惟是衆色無性所顯遍一切處。一分勝義無自性性當知亦爾。法無我性之所顯故。遍一切故。善男子。我依如是三種無自性性密意。說言一切諸法皆無自性。勝義生當知。我依相無自性性密意。說言一切諸法無生無滅本來寂靜自性涅槃。何以故。若法自相都無所有則無有生。若無有生則無有滅。若無生無滅則本來寂靜。若本來寂靜則自性涅槃。於中都無少分所有更可令其般涅槃故。是故我依相無自性性密意。說言一切諸法無生無滅本來寂靜自性涅槃。善男子。我亦依法無我性所顯勝義無自性性密意。說言一切諸法無生無滅本來寂靜自性涅槃。何以故。法無我性所顯勝義無自性性。於常常時於恒恒時。諸法法性安住無爲。一切雜染不相應故。於常常時於恒恒時。諸法法性安住故無爲。由無爲故無生無滅。一切雜染不相應故。本來寂靜自性涅槃。是故我依法無我性所顯勝義無自性性密意。說言一切諸法無生無滅本來寂靜自性涅槃。

復次勝義生。非由有情界中諸有情類。別觀遍計所執自性爲自性故。亦非由彼別觀依他起自性及圓成實自性爲自性故。我立三種無自性性。然由有情於依他起自性及圓成實自性上。增益遍計所執自性故。我立三種

落三本俱作諸

熟上同有成字

簡同作揀

槃三本俱作槃下同

種元明俱作[illegible]

無自性性。由遍計所執自性相故。彼諸有情於依他起自性及圓成實自性中。隨起言說。如如隨起言說。如是如是由言說熏習心故。由言說隨覺故。由言說隨眠故。於依他起自性及圓成實自性中。執著遍計所執自性相。如如執著如是。如是於依他起自性及圓成實自性上。執著遍計所執自性。由是因緣。生當來世依他起自性。由此因緣。或為煩惱雜染所染。或為業雜染所染。或為生雜染所染。於生死中長時馳騁。長時流轉無有休息。或在那落迦。或在傍生。或在餓鬼。或在天上。或在阿素洛。或在人中受諸苦惱。復次勝義生。若諸有情從本已來未種善根。未清淨障。未成熟相續。未多修勝解。未能積集福德智慧二種資糧。我為彼故。依生無自性性宣說諸法。彼聞是已。能於一切緣生行中。隨分解了無常無恒是不安隱變壞法已。於一切行心生怖畏深起厭患。心生怖畏深厭患已。遮止諸惡。於諸惡法能不造作。於諸善法能勤修習。習善因故。未種善根能種善根。未清淨障能令清淨。未熟相續能令成熟。由此因緣。多修勝解。亦多積集福德智慧二種資糧。彼雖如是種諸善根。乃至積集福德智慧二種資糧。然於生無自性性中。未能如實了知相無自性性及二種勝義無自性性。於一切行未能正厭。未正離欲。未正解脫。未遍解脫煩惱雜染。未遍解脫諸業雜染。未遍解脫諸生雜染。如來為彼更說法要。謂相無自性性。及勝義無自性性。為欲令其於一切行能正厭故。正離欲故。正解脫故。超過一切煩惱雜染故。超過一切業雜染故。超過一切生雜染故。彼聞如是所說法已。於生無自性性中。能正信解相無自性性及勝義無自性性。簡擇思惟如實通達。於依他起自性中。能不執著遍計所執自性相。由言說不熏習智故。由言說不隨覺智故。由言說離隨眠智故。能滅依他起相。於現法中智力所持。能永斷滅當來世因。由此因緣。於一切行能正厭患。能正離欲。能正解脫。能遍解脫煩惱業生三種雜染。復次勝義生。諸聲聞乘種性有情。亦由此道此行迹故。證得無上安隱涅槃。諸獨覺乘種性有情。諸如來乘種性有情。亦由此道此行迹故。證得無上安隱涅槃。一切聲聞獨覺菩薩。皆共此一妙清淨道。皆同此一究竟清淨。更無第二。我依此故。密意說言唯有一乘。非於一切有情界中無有種種有情種性。或鈍根性。或中根性。或利根性有情差別。善男子。若一向趣寂聲聞種性補特伽羅。雖蒙諸佛施設種種勇猛加行方便化導。終不能令當坐道場證得阿耨多羅三藐三菩提。何以故。由彼本來唯有下劣種性故。一

向慈悲薄弱故。一向怖畏衆苦故。由彼一向慈悲薄弱。是故一向棄背利益諸衆生事。由彼一向怖畏衆苦。是故一向棄背發起諸行所作。我終不說一向棄背利益衆生事者。一向棄背發起諸行所作者。當坐道場能得阿耨多羅三藐三菩提。是故說彼名爲一向趣寂聲聞。若迴向菩提聲聞種性補特伽羅。我亦異門說爲菩薩。何以故。彼旣解脫煩惱障已。若蒙諸佛等覺悟時。於所知障其心亦可當得解脫。由彼最初爲自利益。修行加行脫煩惱障。是故如來施設彼爲聲聞種性。復次勝義生。如是於我善說善制法毗奈耶最極淸淨意樂所說善敎法中。諸有情類意解種種差別可得。善男子。如來但依如是三種無自性性由深密意。於所宣說不了義經。以隱密相說諸法要。謂一切法皆無自性無生無滅本來寂靜自性涅槃。於是經中。若諸有情。已種上品善根。已淸淨諸障。已成熟相續。已多修勝解。已能積集上品福德智慧資糧。彼若聽聞如是法已。於我甚深密意言說如實解了。於如是法深生信解。於如是義以無倒慧如實通達。依此通達善修習故。速疾能證最極究竟。亦於我所深生淨信。知是如來應正等覺。於一切法現正等覺。若諸有情已種上品善根。已淸淨諸障。已成熟相續。已多修勝解。未能積集上品福德智慧資糧。其性質直。是質直類。雖無力能思擇廢立。而不安住自見取中。彼若聽聞如是法已。於我甚深祕密言說。雖無力能如實解了。然於此法能生勝解。發淸淨信。信此經典。是如來說。是其甚深顯現。甚深空性相應難見難悟不可尋思。非諸尋思所行境界。微細詳審聰明智者之所解了。於此經典所說義中。自輕而住作如是言。諸佛菩提爲最甚深。諸法法性亦最甚深。唯佛如來能善了達。非是我等所能解了。諸佛如來爲彼種種勝解有情轉正法敎。諸佛如來無邊智見。我等智見猶如牛跡。於此經典雖能恭敬爲他宣說。書寫護持披閱流布。殷重供養受誦溫習。然猶未能以其修相發起加行。是故於我甚深密意所說言辭不能通達。由此因緣彼諸有情。亦能增長福德智慧二種資糧。於彼相續未成熟者亦能成熟。若諸有情廣說乃至。未能積集上品福德智慧資糧。性非質直。非質直類。雖有力能思擇廢立。而復安住自見取中。彼若聽聞如是法已。於我甚深密意言說不能如實解了。於如是法雖生信解。然於其義隨言執著。謂一切法決定皆無自性。決定不生不滅。決定本來寂靜。決定自性涅槃。由此因緣於一切法。獲得無見及無相見。由得無見無相見故。撥一切相皆是無相。誹撥諸

依三本俱作於
殷三本俱作慇
彼同作後

法遍計所執相。依他起相。圓成實相。何以故。由有依他起相及圓成實相故。遍計所執相方可施設。若於依他起相及圓成實相見爲無相。彼亦誹撥遍計所執相。是故說彼誹撥三相。雖於我法起於法想。而非義中起於義想。由於我法起法想故。及非義中起義想故。於是法中持爲是法。於非義中持爲是義。彼雖於法起信解故福德增長。然於非義起執著故退失智慧。智慧退故退失廣大無量善法。復有有情從他聽聞。謂法爲法非義爲義。若隨其見。彼即於法起於法想。於非義中起於義想。執法爲法非義爲義。由此因緣當知同彼退失善法。若有有情不隨其見。從彼欻聞一切諸法皆無自性無生無滅本來寂靜自性涅槃。便生恐怖。生恐怖已作如是言。此非佛語是魔所說。作此解已於是經典誹謗毀罵。由此因緣獲大衰損觸大業障。由是緣故我說。若有於一切相起無相見。於非義中宣說爲義。是起廣大業障方便。由彼陷墜無量衆生。令其獲得大業障故。善男子。若諸有情未種善根未清淨障。未熟相續無多勝解。未集福德智慧資糧。性非質直非質直類。雖有力能思擇廢立。而常安住自見取中。彼若聽聞如是法已。不能如實解我甚深密意言說。亦於此法不生信解。於是法中起非法想。於是義中起非義想。於是法中執爲非法。於是義中執爲非義。唱如是言。此非佛語是魔所說。作此解已於是經典誹謗毀罵撥爲虛僞。以無量門毀滅摧伏如是經典。於諸信解此經典者起怨家想。彼先爲諸業障所障。由此因緣復爲如是業障所障。如是業障初易施設。乃至齊於百千俱胝那庾多劫無有出期。善男子。如是於我善說善制法毗柰耶最極清淨意樂所說善教法中。有如是等諸有情類。意解種種差別可得。爾時世尊欲重宣此義。而說頌曰

一切諸法皆無性　無生無滅本來寂　諸法自性恒涅槃　誰有智言無密意　相生勝義無自性
如是我皆已顯示　若不知佛此密意　失壞正道不能往　依諸淨道清淨者　惟依此一無第二
故於其中立一乘　非有情性無差別　衆生界中無量生　惟度一身趣寂滅　大悲勇猛證涅槃
不捨衆生甚難得　微妙難思無漏界　於中解脫等無差　一切義成離惑苦　二種異說謂常樂

爾時勝義生菩薩復白佛言。世尊。諸佛如來密意語言甚奇希有。乃至微妙最微妙。甚深最甚深。難通達最難通達。如是我今領解世尊所說義者。若於分別所行遍計所執相。所依行相中假名安立以爲色蘊。或自性相或差

別相。假名安立爲色蘊生爲色蘊滅。及爲色蘊永斷遍知。或自性相或差別相。是名遍計所執相。世尊。依此施設諸法相無自性性。若卽分別所行遍計所執相所依行相。是名依他起相。世尊。依此施設諸法生無自性性。及一分勝義無自性性。如是我今領解世尊所說義者。若卽於此分別所行遍計所執相所依行相中。由遍計所執相不成實故。卽此自性無自性性。法無我眞如淸淨所緣。是名圓成實相。世尊。依此施設一分勝義無自性性。如於色蘊。如是於餘蘊皆應廣說。如於諸蘊如是於十二處。一一處中皆應廣說。於十二有支一一支中皆應廣說。於四種食一一食中皆應廣說。於六界十八界。一一界中皆應廣說。如是我今領解世尊所說義者。若於分別所行遍計所執相所依行相中。假名安立以爲苦諦。苦諦遍知或自性相或差別相。是名遍計所執相。世尊。依此施設諸法相無自性性。若卽分別所行遍計所執相所依行相。是名依他起相。世尊。依此施設諸法生無自性性。及一分勝義無自性性。如是我今領解世尊所說義者。若卽於此分別所行遍計所執相所依行相中。由遍計所執相不成實故。卽此自性無自性性。法無我眞如淸淨所緣。是名圓成實相。世尊。依此施設一分勝義無自性性。如於苦諦如是於餘諦皆應廣說。如於聖諦如是於諸念住正斷神足根力覺支道支中。一一皆應廣說。如是我今領解世尊所說義者。若於分別所行遍計所執相所依行相中。假名安立以爲正定。及爲正定能治所治。若正修未生令生生已堅住不忘倍修增長廣大。或自性相或差別相。是名遍計所執相。世尊。依此施設諸法相無自性性。若卽分別所行遍計所執相所依行相。是名依他起相。世尊。依此施設諸法生無自性性。及一分勝義無自性性。如是我今領解世尊所說義者。若卽於此分別所行遍計所執相所依行相中。由遍計所執相不成實故。卽此自性無自性性。法無我眞如淸淨所緣。是名圓成實相。世尊。依此施設諸法一分勝義無自性性。世尊。譬如毗濕縛藥一切散藥仙藥方中皆應安處。如是世尊。依此諸法皆無自性無生無滅。本來寂靜自性涅槃。無自性性了義言敎。遍於一切不了義經皆應安處。世尊。如彩畫地遍於一切。彩畫事業皆同一味。或靑或黃或赤或白。復能顯發彩畫事業。如是世尊。依此諸法皆無自性。廣說乃至自性涅槃無自性性了義言敎。遍於一切不了義經皆同一味。復能顯發彼諸經中所不了義。世尊。譬如一切成熟珍羞諸餠果內。投之熟酥更生勝味。如是世尊。依此諸

修 三本俱作習

法皆無自性．廣說乃至自性涅槃無自性性了義言教．置於一切不了義經生勝歡喜．世尊．譬如虛空遍一切處皆同一味．不障一切所作事業．如是世尊．依此諸法皆無自性．廣說乃至自性涅槃無自性性了義言教．遍於一切不了義經皆同一味．不障一切聲聞獨覺及諸大乘所修事業．說是語已、爾時世尊歎勝義生菩薩曰．善哉．善男子．汝今乃能善解如來所說甚深密意言義．復於此義善作譬喻．所謂世間毗濕縛藥雜彩畫地熟酥虛空．勝義生．如是如是更無有異．如是如是汝應受持．爾時勝義生菩薩復白佛言．世尊．初於一時在婆羅痆斯仙人墮處施鹿林中．惟為發趣聲聞乘者．以四諦相轉正法輪．雖是甚奇甚為希有．一切世間諸天人等先無有能如法轉者．而於彼時所轉法輪．有上有容是未了義．是諸諍論安足處所．世尊．在昔第二時中惟為發趣修大乘者．依一切法皆無自性無生無滅．本來寂靜自性涅槃．以隱密相轉正法輪．雖更甚奇甚為希有．而於彼時所轉法輪．亦是有上有所容受．猶未了義．是諸諍論安足處所．世尊．於今第三時中普為發趣一切乘者．依一切法皆無自性無生無滅．本來寂靜自性涅槃無自性性．以顯了相轉正法輪．第一甚奇最為希有．于今世尊所轉法輪．無上無容是真了義．非諸諍論安足處所．世尊．若善男子或善女人．於此如來依一切法皆無自性無生無滅．本來寂靜自性涅槃．所說甚深了義言教．聞已信解書寫護持供養流布受誦．修習如理思惟．以其修相發起加行生幾所福．說是語已．爾時世尊告勝義生菩薩曰．勝義生．是善男子或善女人．其所生福無量無數難可喻知．吾今為汝略說少分．如爪上土比大地土．百分不及一．千分不及一．百千分不及一．數算計喻鄔波尼殺曇分亦不及一．或如牛跡中水比四大海水．百分不及一．廣說乃至鄔波尼殺曇分亦不及一．如是於諸不了義經．聞已信解廣說乃至．以其修相發起加行所獲功德．比此所說了義經教．聞已信解所集功德．廣說乃至以其修相發起加行所集功德．百分不及一．廣說乃至鄔波尼殺曇分亦不及一．說是語已．爾時勝義生菩薩復白佛言．世尊．於是解深密法門中．當何名此教．我當云何奉持．佛告勝義生菩薩曰．善男子．此名勝義了義之教．於此勝義了義之教．汝當奉持．說此勝義了義教時．於大會中有六百千眾生發阿耨多羅三藐三菩提心．三百千聲聞遠塵離垢．於諸法中得法眼淨．一百五十千聲聞永盡諸漏心得解脫．七十五千菩薩得無上法忍

解深密經卷第二

解深密經卷第三

麗盖（宋此元此明效）

大唐三藏法師玄奘奉　詔譯

分別瑜伽品第六

爾時慈氏菩薩摩訶薩白佛言。世尊。菩薩何依何住於大乘中修奢摩他毘鉢舍那。佛告慈氏菩薩曰。善男子當知菩薩法假安立。及不捨阿耨多羅三藐三菩提願。爲依爲住於大乘中修奢摩他毘鉢舍那。慈氏菩薩復白佛言。如世尊說四種所緣境事。一者有分別影像所緣境事。二者無分別影像所緣境事。三者事邊際所緣境事。四者所作成辦所緣境事。於此四中幾是奢摩他所緣境事。幾是毘鉢舍那所緣境事。幾是俱所緣境事。佛告慈氏菩薩曰。善男子。一是奢摩他所緣境事。謂無分別影像。一是毘鉢舍那所緣境事。謂有分別影像。二是俱所緣境事。謂事邊際所作成辦。慈氏菩薩復白佛言。世尊。云何菩薩依是四種奢摩他毘鉢舍那所緣境事。能求奢摩他能善毘鉢舍那。佛告慈氏菩薩曰。善男子。如我爲諸菩薩所說法假安立。所謂契經應誦記別諷誦自說因緣譬喩本事本生方廣希法論議。菩薩於此善聽善受言善通利意善尋思見善通達。卽於如所善思惟法。獨處空閑作意思惟。復卽於此能思惟心。內心相續作意思惟。如是正行多安住故。起身輕安及心輕安。是名奢摩他。如是菩薩能求奢摩他。彼由獲得身心輕安爲所依故。卽於如所善思惟法。內三摩地所行影像。觀察勝解捨離心相。卽於如是三摩地影像所知義中。能正思擇最極思擇。周徧尋思周徧伺察。若忍若樂若慧若見若觀。是名毘鉢舍那。如是菩薩能善毘鉢舍那。慈氏菩薩復白佛言。世尊。若諸菩薩緣心爲境內思惟心。乃至未得身心輕安。所有作意當名何等。佛告慈氏菩薩曰。善男子。非奢摩他作意。是隨順奢摩他勝解相應作意。世尊。若諸菩薩乃至未得身心輕安。於如所思所有諸法內三摩地所緣影像作意思惟。如是作意當名何等。善男子。非毘鉢舍那作意。是隨順毘鉢舍那勝解相應作意。慈氏菩薩復白佛言。世尊。奢摩他道與毘鉢舍那道。當言有異當言無異。佛

唯宋作惟下同

告慈氏菩薩曰。善男子。當言非有異非無異。何故非有異。以毘鉢舍那所緣境心爲所緣故。何故非無異。有分別影像非所緣故。慈氏菩薩復白佛言。世尊。諸毘鉢舍那三摩地所行影像。彼與此心當言有異當言無異。佛告慈氏菩薩曰。善男子。當言無異。何以故。由彼影像唯是識故。善男子。我說識所緣唯識所現故。世尊。若彼所行影像卽與此心無有異者。云何此心還見此心。善男子。此中無有少法能見少法。然卽此心如是生時。卽有如是影像顯現。善男子。如依善瑩淸淨鏡面。以質爲緣還見本質。而謂我今見於影像。及謂離質別有所行影像顯現。如是此心生時相似有異。三摩地所行影像顯現。世尊。若諸有情自性而住。緣色等心所行影像。彼與此心亦無異耶。善男子。亦無有異。而諸愚夫由顚倒覺。於諸影像不能如實知唯是識。作顚倒解。慈氏菩薩復白佛言。世尊。齊何當言菩薩一向修毘鉢舍那。佛告慈氏菩薩曰。善男子。若相續作意唯思惟心相。世尊。齊何當言菩薩一向修奢摩他。善男子。若相續作意唯思惟無間心。世尊。齊何當言菩薩奢摩他毘鉢舍那和合俱轉。善男子。若正思惟心一境性。世尊。云何心相。善男子。謂三摩地所行。有分別影像。毘鉢舍那所緣。世尊。云何無間心。善男子。謂緣彼影像心。奢摩他所緣。世尊。云何心一境性。善男子。謂通達三摩地所行影像唯是其識。或通達此已復思惟如性。慈氏菩薩復白佛言。世尊。毘鉢舍那凡有幾種。佛告慈氏菩薩曰。善男子。略有三種。一者有相毘鉢舍那。二者尋求毘鉢舍那。三者伺察毘鉢舍那。云何有相毘鉢舍那。謂純思惟三摩地所行。有分別影像毘鉢舍那。云何尋求毘鉢舍那。謂由慧故。徧於彼彼未善解了一切法中。爲善了故。作意思惟毘鉢舍那。云何伺察毘鉢舍那。謂由慧故遍於彼彼已善解了一切法中。爲善證得極解脫故。作意思惟毘鉢舍那。慈氏菩薩復白佛言。世尊。是奢摩他凡有幾種。佛告慈氏菩薩曰。善男子。卽由隨彼無間心故。當知此中亦有三種。復有八種。謂初靜慮乃至非想非非想處。各有一種奢摩他故。復有四種。謂慈悲喜捨四無量中。各有一種奢摩他故。慈氏菩薩復白佛言。世尊。如說依法奢摩他毘鉢舍那。復說不依法奢摩他毘鉢舍那。云何名依法奢摩他毘鉢舍那。云何復名不依法奢摩他毘鉢舍那。佛告慈氏菩薩曰。善男子。若諸菩薩隨先所受所思法相。而於其義得奢摩他毘鉢舍那。名依法奢摩他毘鉢舍那。若諸菩薩不待所受所思法相。但依於他敎誡敎授。而於其義得奢摩他毘鉢舍那。謂觀靑瘀及膿

積元明俱作聚

分下三本俱有別字

唯同作惟下同

闡等。或一切行皆是無常。或諸行苦。或一切法皆無有我。或復涅槃畢竟寂靜。如是等類奢摩他毘鉢舍那。名不依法奢摩他毘鉢舍那。由依止法得奢摩他毘鉢舍那故。我施設隨法行菩薩是利根性。由不依法得奢摩他毘鉢舍那故。我施設隨信行菩薩是鈍根性。慈氏菩薩復白佛言。世尊。如說緣別法奢摩他毘鉢舍那。復說緣總法奢摩他毘鉢舍那。云何名爲緣別法奢摩他毘鉢舍那。云何復名緣總法奢摩他毘鉢舍那。佛告慈氏菩薩曰。善男子。若諸菩薩緣於各別契經等法。於如所受所思惟法。修奢摩他毘鉢舍那。是名緣別法奢摩他毘鉢舍那。若諸菩薩即緣一切契經等法。集爲一團一積一分一聚作意思惟。此一切法隨順眞如。趣向眞如。臨入眞如。隨順菩提隨順涅槃。隨順尊依及趣向彼。若臨入彼此一切法。宣說無量無數善法。如是思惟修奢摩他毘鉢舍那。是名緣總法奢摩他毘鉢舍那。慈氏菩薩復白佛言。世尊。如說緣小總法奢摩他毘鉢舍那。復說緣大總法奢摩他毘鉢舍那。又說緣無量總法奢摩他毘鉢舍那。云何名緣小總法奢摩他毘鉢舍那。云何名緣大總法奢摩他毘鉢舍那。云何復名緣無量總法奢摩他毘鉢舍那。佛告慈氏菩薩曰。善男子。若緣各別契經乃至各別論義。爲一團等作意思惟。當知是名緣小總法奢摩他毘鉢舍那。若緣乃至所受所思契經等法。爲一團等作意思惟非緣各別。當知是名緣大總法奢摩他毘鉢舍那。若緣無量如來法教。無量法句文字。無量後後慧所照了。爲一團等作意思惟非緣乃至所受所思。當知是名緣無量總法奢摩他毘鉢舍那。慈氏菩薩復白佛言。世尊。菩薩齊何名得緣總法奢摩他毘鉢舍那。佛告慈氏菩薩曰。善男子。由五緣故。當知名得。一者於思惟時刹那刹那。融消一切麤重所依。二者離種種想得樂法樂。三者解了十方無差別相無量法光。四者所作成滿相應淨分無分別相恒現在前。五者爲令法身得成滿故。攝受後後轉勝妙因。慈氏菩薩復白佛言。世尊。此緣總法奢摩他毘鉢舍那。當知從何名爲通達。從何名得。佛告慈氏菩薩曰。善男子。從初極喜地名爲通達。從第三發光地乃名爲得。善男子。初業菩薩亦於是中隨學作意。雖未可歎不應懈廢。慈氏菩薩復白佛言。世尊。是奢摩他毘鉢舍那。云何名有尋有伺三摩地。云何名無尋唯伺三摩地。云何名無尋無伺三摩地。佛告慈氏菩薩曰。善男子。於如所取尋伺法相。若有麤顯領受觀察。諸奢摩他毘鉢舍那。是名有尋有伺三摩地。若於彼相雖無麤顯領受觀察。而有微細彼光

明念。領受觀察諸奢摩他毘鉢舍那。是名無尋唯伺三摩地。若即於彼一切法相都無作意領受觀察諸奢摩他毘鉢舍那。是名無尋無伺三摩地。復次善男子。若有尋求奢摩他毘鉢舍那。是名有尋有伺三摩地。若有伺察奢摩他毘鉢舍那。是名無尋唯伺三摩地。若緣總法奢摩他毘鉢舍那。是名無尋無伺三摩地。慈氏菩薩復白佛言。世尊。云何止相。云何舉相。云何捨相。佛告慈氏菩薩曰。善男子。若心掉舉。或恐掉舉時。諸可厭法作意。及彼無間心作意。是名止相。若心沈沒。或恐沈沒時。諸可欣法作意。及彼心相作意。是名舉相。若於一向止道。或於一向觀道。或於雙運轉道。二隨煩惱所染汙時。諸無功用作意。及心任運轉中所有作意。是名捨相。慈氏菩薩復白佛言。世尊。修奢摩他毘鉢舍那諸菩薩衆知法知義。云何知法。云何知義。佛告慈氏菩薩曰。善男子。彼諸菩薩。由五種相了知於法。一者知名。二者知句。三者知文。四者知別。五者知總。云何爲名。謂於一切染淨法中。所立自性想假施設。云何爲句。謂即於彼名聚集中。能隨宣說諸染淨義依持建立。云何爲文。謂即彼二所依止字。云何於彼各別了知。謂由各別所緣作意。云何於彼總合了知。謂由總合所緣作意。如是一切總略爲一。名爲知法。如是名爲菩薩知法。善男子。彼諸菩薩由十種相了知於義。一者知盡所有性。二者知如所有性。三者知能取義。四者知所取義。五者知建立義。六者知受用義。七者知顚倒義。八者知無倒義。九者知雜染義。十者知清淨義。善男子。盡所有性者。謂諸雜染清淨法中。所有一切品別邊際。是名此中盡所有性。如五數蘊。六數內處。六數外處。如是一切。如所有性者。謂即一切染淨法中所有眞如。是名此中如所有性。此復七種。一者流轉眞如。謂一切行無先後性。二者相眞如。謂一切法補特伽羅無我性及法無我性。三者了義眞如。謂一切行唯是識性。四者安立眞如。謂我所說諸苦聖諦。五者邪行眞如。謂我所說諸集聖諦。六者清淨眞如。謂我所說諸滅聖諦。七者正行眞如。謂我所說諸道聖諦。當知此中由流轉眞如安立眞如邪行眞如故。一切有情平等平等。由相眞如了義眞如故。一切諸法平等平等。由清淨眞如故。一切聲聞菩提獨覺菩提阿耨多羅三藐三菩提平等平等。由正行眞如故。聽聞正法緣總境界。勝奢摩他毘鉢舍那所攝受慧平等平等。能取義者。謂內五色處。若心意識及諸心法。所取義者。謂外六處。又能取義亦所取義。建立義者。謂器世界於中可得建立一切諸有情界。謂一村田若百村田若千村田

謂三本俱作諸

拘明作俱

有同作謂

者上三本俱無四字

品下同有類字

義上同無諸字

若百千村田.或一大地至海邊際.此百此千.若此百千.或一贍部洲.此百此千若此百千.或一四大洲.此百此千若此百千.或一小千世界.此百此千若此百千.或一中千世界.此百此千若此百千.或一三千大千世界.此百此千若此百千.或此拘胝此百拘胝此千拘胝此百千拘胝.或此無數此百無數此千無數此百千無數.或三千大千世界無數百千微塵量等.於十方面無量無數諸器世界.受用義者.謂我所說諸有情類.爲受用故攝受資具.顚倒義者.謂即於彼能取等義.無常計常.想倒心倒見倒.苦計爲樂.不淨計淨.無我計我.想倒心倒見倒.無倒義者.與上相違能對治彼.應知其相.雜染義者.謂三界中三種雜染.一者煩惱雜染.二者業雜染.三者生雜染.淸淨義者.謂即如是三種雜染.所有離繫菩提分法.善男子.如是十種當知普攝一切諸義.復次善男子.彼諸菩薩由能了知五種義故.名爲知義.何等五義.一者遍知事.二者遍知義.三者遍知因.四者得遍知果.五者於此覺了.善男子.此中遍知事者.當知即是一切所知.謂或諸蘊.或諸內處.或諸外處.如是一切.遍知義者.乃至所有品類差別所應知境.謂世俗故.或勝義故.或功德故.或過失故.緣故.世故.或生或住或壞相故.或如病等故.或苦集等故.或眞如實際法界等故.或廣略故.或一向記故.或分別記故.或反問記故.或置記故.或隱密故.或顯了故.如是等類.當知一切名遍知義.言遍知因者.當知即是能取前二菩提分法.所謂念住或正斷等.得遍知果者.謂貪恚癡永斷.毘奈耶及貪恚癡一切永斷.諸沙門果.及我所說聲聞如來.若共不共世出世間所有功德.於彼作證.於此覺了者.謂即於此作證法中.諸解脫智.廣爲他說.宣揚開示.善男子.如是五義.當知普攝一切諸義.復次善男子.彼諸菩薩由能了知四種義故.名爲知義.何等四義.一者心執受義.二者領納義.三者了別義.四者雜染淸淨義.善男子.如是四義.當知普攝一切諸義.復次善男子.彼諸菩薩由能了知三種義故.名爲知義.何等三義.一者文義.二者義義.三者界義.善男子.言文義者.謂名身等.義義當知復有十種.一者眞實相.二者遍知相.三者永斷相.四者作證相.五者修習相.六者即彼眞實相等品差別相.七者所依能依相屬相.八者即遍知等障礙法相.九者即彼隨順法相.十者不遍知等及遍知等過患功德相.言界義者.謂五種界.一者器世界.二者有情界.三者法界.四者所調伏界.五者調伏方便界.善男子.如是五義.當知普攝一切諸義.慈氏菩薩復白佛言.世尊.若聞所成慧

見　宋元俱作是

如　元作知

加　三本俱作如

了知其義。若思所成慧了知其義。若奢摩他毗鉢舍那。修所成慧了知其義。此何差別。佛告慈氏菩薩曰。善男子。聞所成慧依止於文。但如其說。未善意趣。未現在前。隨順解脫。未能領受成解脫義。思所成慧亦依於文。不唯如說。能善意趣。未現在前轉順解脫。未能領受成解脫義。若諸菩薩修所成慧。亦依於文亦不依文。亦如其說亦不如說。能善意趣。所知事同分三摩地所行。影像現前極順解脫。已能領受成解脫義。善男子。是名三種知義差別。慈氏菩薩復白佛言。世尊。修奢摩他毗鉢舍那諸菩薩衆。知法知義。云何爲智。云何爲見。佛告慈氏菩薩曰。善男子。我無量門宣說智見二種差別。今當爲汝略說其相。若緣總法修奢摩他毗鉢舍那。所有妙慧是名爲智。若緣別法修奢摩他毗鉢舍那。所有妙慧是名爲見。慈氏菩薩復白佛言。世尊。修奢摩他毗鉢舍那諸菩薩衆。由何作意何等。云何除遣諸相。佛告慈氏菩薩曰。善男子。由眞如作意除遣法相及與義相。若於其名及名自性無所得時。亦不觀彼所依之相。如是除遣。如於其名於句於文。於一切義當知亦爾。乃至於界及界自性無所得時。亦不觀彼所依之相。如是除遣。世尊。諸所了知眞如義相。此眞如相亦可遣不。善男子。於所了知眞如義中。都無有相亦無所得。當何所遣。善男子。我說了知眞如義時。能伏一切法義之相。非此了達餘所能伏。世尊。如世尊說濁水器喩。不淨鏡喩。撓泉池喩。不任觀察自面影相。若堪任者與上相違。如是若有不善修心。則不堪任如實觀察所有眞如。若善修心堪任觀察。此說何等能觀察心。依何眞如而作是說。善男子。此說三種能觀察心。謂聞所成能觀察心。若思所成能觀察心。若修所成能觀察心。依了別眞如作如是說。世尊。如是了知法義菩薩。爲遣諸相勤修加行。有幾種相難可除遣。誰能除遣。善男子。有十種相空能除遣。何等爲十。一者了知法義故。有種種文字相。此由一切法空能正除遣。二者了知安立眞如義故。有生滅住異性相續隨轉相。此由相空及無先後空能正除遣。三者了知能取義故。有顧戀身相及我慢相。此由內空及無所得空能正除遣。四者了知所取義故。有顧戀財相。此由外空能正除遣。五者了知受用義男女承事資具相應故。有內安樂相外淨妙相。此由內外空及本性空能正除遣。六者了知建立義故有無量相。此由大空能正除遣。七者了知無色故。有內寂靜解脫相。此由有爲空能正除遣。八者了知相眞如義故。有補特伽羅無我相法無我相。若唯識相及勝義相。此由畢竟空無性空無性

善下三本俱無清淨戒三字

自性空及勝義空能正除遣.九者由了清知淨眞如義故.有無爲相無變異相.此由無爲空無變異空能正除遣.十者卽於彼相對治空性作意思惟故.有空性相.此由空空能正除遣.世尊.除遣如是十種相時.除遣何等.從何等相而得解脫.善男子.除遣三摩地所行影像相.從雜染縛相而得解脫.彼亦除遣.善男子.當知就勝說如是空治如是相.非不一一治一切相.譬如無明非不能生.乃至老死諸雜染法.就勝但說能生於行.由是諸行親近緣故.此中道理當知亦爾.爾時慈氏菩薩復白佛言.世尊.此中何等空.是總空性相.若諸菩薩了知是已無有失壞.於空性相離增上慢.爾時世尊歎慈氏菩薩曰.善哉善哉.善男子.汝今乃能請問如來如是深義.令諸菩薩於空性相無有失壞.何以故.善男子.若諸菩薩於空性相有失壞者.便爲失壞一切大乘.是故汝應諦聽諦聽.當爲汝說總空性相.善男子.若於依他起相及圓成實相中.一切品類雜染清淨遍計所執相畢竟遠離性.及於此中都無所得.如是名爲於大乘中總空性相.慈氏菩薩復白佛言.世尊.此奢摩他毘鉢舍那.能攝幾種勝三摩地.佛告慈氏菩薩曰.善男子.如我所說無量聲聞菩薩如來.有無量種勝三摩地.當知一切皆此所攝.世尊.此奢摩他毘鉢舍那以何爲因.善男子.清淨尸羅清淨聞思所成正見.以爲其因.世尊.此奢摩他毘鉢舍那以何爲果.善男子.善清淨戒清淨心善清淨慧.以爲其果.復次善男子.一切聲聞及如來等.所有世間及出世間一切善法.當知皆是此奢摩他毘鉢舍那所得之果.世尊.此奢摩他毘鉢舍那能作何業.善男子.此能解脫二縛爲業.所謂相縛及麤重縛.世尊.如佛所說五種繫中.幾是奢摩他障.幾是毘鉢舍那障.幾是俱障.善男子.顧戀身財是奢摩他障.於諸聖教不得隨欲.是毘鉢舍那障.樂相雜住於少喜足.當知俱障.由第一故不能造修.由第二故所修加行不到究竟.世尊.於五蓋中幾是奢摩他障.幾是毘鉢舍那障.幾是俱障.善男子.掉舉惡作是奢摩他障.惛沈睡眠疑是毘鉢舍那障.貪欲瞋恚當知俱障.世尊.齊何名得奢摩他道圓滿清淨.善男子.乃至所有惛沈睡眠正善除遣.齊是名得奢摩他道圓滿清淨.世尊.齊何名得毘鉢舍那道圓滿清淨.善男子.乃至所有掉舉惡作正善除遣.齊是名得毘鉢舍那道圓滿清淨.世尊.若諸菩薩於奢摩他毘鉢舍那現在前時.應知幾種心散動法.善男子.應知五種.一者作意散動.二者外心散動.三者內心散動.四者相散動.五者麤重散動.善男子.若諸菩薩捨於大乘相應

誤三本倶作悞

楔宋作揳下同

作意。隨在聲聞獨覺相應諸作意中。當知是名作意散動。若於其外五種妙欲諸雜亂相。所有尋思隨煩惱中。及於其外所緣境中縱心流散。當知是名外心散動。若由惛沈及以睡眠。或由沈沒或由愛味三摩鉢底。或由隨一三摩鉢底諸隨煩惱之所染汙。當知是名內心散動。若依外相。於內等持所行諸相。作意思惟名相散動。若內作意。爲緣生起所有諸受由麤重身計我起慢。當知是名麤重散動。世尊。此奢摩他毗鉢舍那從初菩薩地乃至如來地。能對治何障。善男子。此奢摩他毗鉢舍那。於初地中對治惡趣煩惱業生雜染障。第二地中對治微細誤犯現行障。第三地中對治欲貪障。第四地中對治定愛及法愛障。第五地中對治生死涅槃一向背趣障。第六地中對治相多現行障。第七地中對治細相現行障。第八地中對治於無相作功用。及於有相不得自在障。第九地中對治於一切種善巧言辭不得自在障。第十地中對治不得圓滿法身證得障。善男子。此奢摩他毗鉢舍那。於如來地對治極微細最極微細煩惱障及所知障。由能永害如是障故。究竟證得無著無礙一切智見。依於所作成滿所緣。建立最極清淨法身。慈氏菩薩復白佛言。世尊。云何菩薩依奢摩他毗鉢舍那勤修行故。證得阿耨多羅三藐三菩提。佛告慈氏菩薩曰。善男子。若諸菩薩已得奢摩他毗鉢舍那。依七眞如。於如所聞所思法中。由勝定心於善審定。於善思量於善安立。眞如性中內正思惟。彼於眞如正思惟故。心於一切細相現行。尚能棄捨。何況麤相。善男子。言細相者。謂心所執受相。或領納相。或了別相。或雜染清淨相。或內相。或外相。或內外相。或謂我當修行一切利有情相。或正智相。或眞如相。或苦集滅道相。或有爲相。或無爲相。或有常相。或無常相。或苦有變異性相。或苦無變異性相。或有爲異相相。或有爲同相相。或知一切是一切已有一切相。或補特伽羅無我相。或法無我相。於彼現行心能棄捨。彼既多住如是行故。於時時間從其一切繫蓋散動善修治心。從是已後於七眞如有七各別。自內所證通達智生。名爲見道。由得此故。名入菩薩正性離生。生如來家證得初地。又能受用此地勝德。彼於先時由得奢摩他毗鉢舍那故。已得二種所緣。謂有分別影像所緣及無分別影像所緣。彼於今時得見道故。更證得事邊際所緣。復於後後一切地中進修修道。即於如是二種所緣作意思惟。譬如有人以其細楔出於麤楔。如是菩薩依此以楔出楔方便遣內相故。一切隨順雜染分相皆悉除遣。相除遣故麤重亦遣。永害一切

煉同作鍊元明俱作具次同〇提下三本俱有心字

相麤重故。漸次於彼彼後後地中。如煉金法陶煉其心。乃至證得阿耨多羅三藐三菩提。又得所作成滿所緣善男子。如是菩薩於內止觀正修行故。證得阿耨多羅三藐三菩提。慈氏菩薩復白佛言。世尊。云何修行引發菩薩廣大威德。善男子。若諸菩薩善知六處。便能引發菩薩所有廣大威德。一者善知心生。二者善知心住。三者善知心出。四者善知心增。五者善知心減。六者善知方便。云何善知心生。謂如實知十六行心生起差別。是名善知心生。十六行心生起差別者。一者不可覺知堅住器識生。謂阿陀那識。二者種種行相所緣識生。謂頓取一切色等境界分別意識。及頓取內外境界覺受。或頓於一念瞬息須臾。現入多定見多佛土多見如來分別意識。三者小相所緣識生。謂欲界繫識。四者大相所緣識生。謂色界繫識。五者無量相所緣識生。謂空識無邊處繫識。六者微細相所緣識生。謂無所有處繫識。七者邊際相所緣識生。謂非想非非想處繫識。八者無相識生。謂出世識及緣滅識。九者苦俱行識生。謂地獄識。十者雜受俱行識生。謂欲行識。十一喜俱行識生。謂初二靜慮識。十二樂俱行識生。謂第三靜慮識。十三不苦不樂俱行識生。謂從第四靜慮乃至非想非非想處識。十四染汙俱行識生。謂諸煩惱及隨煩惱相應識。十五善俱行識生。謂信等相應識。十六無記俱行識生。謂彼俱不相應識。云何善知心住。謂如實知了別眞如。云何善知心出。謂如實知出二種縛。所謂相縛及麤重縛。此能善知應令其心從如是出。云何善知心增。謂如實知能治相縛麤重縛心。彼增長時彼積集時。亦得增長亦得積集。名善知增。云何善知心減。謂如實知彼所對治相。及麤重所雜染心。彼衰退時。彼損減時。此亦衰退此亦損減。名善知減。云何善知方便。謂如實知解脫勝處及與遍處。或修或遣。善男子。如是菩薩於諸菩薩廣大威德。或已引發或當引發或現引發。慈氏菩薩復白佛言。世尊。如世尊說。於無餘依涅槃界中。一切諸受無餘永滅。何等諸受於此永滅。善男子。以要言之。有二種受無餘永滅。何等爲二。一者所依麤重受。二者彼果境界受。所依麤重受當知有四種。一者有色所依受。二者無色所依受。三者果已成滿麤重受。四者果未成滿麤重受。果已成滿受者。謂現在受。果未成滿受者。謂未來因受。彼果境界受亦有四種。一者依持受。二者資具受。三者受用受。四者顧戀受。於有餘依涅槃界中。果未成滿受。一切已滅。領彼對治。明觸生受領受共有。或復彼果已成滿受。又二種受一切已滅。唯現領受明觸生受。於

離三本俱作難

無餘依涅槃界中。般涅槃時此亦永滅。是故說言。於無餘依涅槃界中。一切諸受無餘永滅。爾時世尊說是語已。復告慈氏菩薩曰。善哉善哉。善男子。汝今善能依止圓滿最極清淨妙瑜伽道。請問如來。汝於瑜伽已得決定最極善巧。吾已爲汝宣說圓滿最極清淨妙瑜伽道。所有一切過去未來正等覺者。已說當說皆亦如是。諸善男子若善女人。皆應依此勇猛精進當正修學。爾時世尊欲重宣此義。而說頌曰

於法假立瑜伽中　若行放逸失大義　依止此法及瑜伽　若正修行得大覺
若謂此見爲得法　慈氏彼去瑜伽遠　譬如大地與虛空　見有所得求免離
智者作此窮劫量　便得最上離染喜　利生堅固而不作　悟已勤修利有情
反更遊行而乞匄　若人爲欲而說法　彼名捨欲還取欲　愚癡得法無價寶
於諍諠雜戲論著　應捨發起上精進　爲度諸天及世間　於此瑜伽汝當學

爾時慈氏菩薩復白佛言。世尊。於是解深密法門中。當何名此教。我當云何奉持。佛告慈氏菩薩曰。善男子。此名瑜伽了義之教。於此瑜伽了義之教汝當奉持。說此瑜伽了義教時。於大會中有六百千衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。三百千聲聞遠塵離垢。於諸法中得法眼淨。一百五十千聲聞諸漏永盡心得解脫。七十五千菩薩獲得廣大瑜伽作意

解深密經卷第三

解深密經卷第四

麗蓋 宋此 元此 明效

大唐三藏法師玄奘奉　詔譯

地波羅蜜多品第七

爾時觀自在菩薩白佛言．世尊．如佛所說菩薩十地．所謂極喜地離垢地發光地焰慧地極難勝地現前地遠行地不動地善慧地法雲地．復說佛地為第十一．如是諸地幾種清淨幾分所攝．爾時世尊告觀自在菩薩曰．善男子．當知諸地四種清淨十一分攝．云何名為四種清淨能攝諸地．謂增上意樂清淨攝於初地．增上戒清淨攝第二地．增上心清淨攝第三地．增上慧清淨於後後地轉勝妙故．當知能攝從第四地乃至佛地．善男子．當知如是四種清淨普攝諸地．云何名為十一種分能攝諸地．謂諸菩薩先於勝解行地．依十法行極善修習勝解忍故．超過彼地證入菩薩正性離生．彼諸菩薩由是因緣此分圓滿．而未能於微細毀犯誤現行中正知而行．由是因緣於此分中猶未圓滿．為令此分得圓滿故．精勤修習便能證得．彼諸菩薩由是因緣此分圓滿．而未能得世間圓滿等持等至．及圓滿聞持陀羅尼．由是因緣於此分中猶未圓滿．為令此分得圓滿故．精勤修習便能證得．彼諸菩薩由是因緣此分圓滿．而未能令隨所獲得菩提分法多修習住．心未能捨諸等至愛及與法愛．由是因緣於此分中猶未圓滿．為令此分得圓滿故．精勤修習便能證得．彼諸菩薩由是因緣此分圓滿．而未能於諸諦道理如實觀察．又未能於生死涅槃棄捨一向背趣作意．又未能修方便所攝菩提分法．由是因緣於此分中猶未圓滿．為令此分得圓滿故．精勤修習便能證得．彼諸菩薩由是因緣此分圓滿．而未能於生死流轉如實觀察．又由於彼多生厭故．未能多住無相作意．由是因緣於此分中猶未圓滿．為令此分得圓滿故．精勤修習便能證得．彼諸菩薩由是因緣此分圓滿．而未能令無相作意無缺無間多修習住．由是因緣於此分中猶未圓滿．為令此分得圓滿故．精勤修習便能證得．彼諸菩薩由是因緣此分圓滿．而未能於無相住中捨離功用．又未能得於相自

在由是因緣於此分中猶未圓滿。爲令此分得圓滿故。精勤修習便能證得。彼諸菩薩由是因緣此分圓滿。而未能於異名衆相訓詞差別一切品類。宜說法中得大自在。由是因緣於此分中猶未圓滿。爲令此分得圓滿故。精勤修習便能證得。彼諸菩薩由是因緣此分圓滿。而未能得圓滿法身現前證受。由是因緣於此分中猶未圓滿。爲令此分得圓滿故。精勤修習便能證得。彼諸菩薩由是因緣此分圓滿。而未能得遍於一切所知境界。無著無礙妙智妙見。由是因緣於此分中猶未圓滿。爲令此分得圓滿故。精勤修習便能證得。由是因緣此分圓滿。此分圓滿故於一切分皆得圓滿。善男子。當知如是十一種分普攝諸地。觀自在菩薩復白佛言。世尊。何緣最初名極喜地。乃至何緣說名佛地。佛告觀自在菩薩曰。善男子。成就大義得未曾得出世間心生大歡喜。是故最初名極喜地。遠離一切微細犯戒。是故第二名離垢地。由彼所得三摩地及聞持陀羅尼。能爲無量智光依止。是故第三名發光地。由彼所得菩提分法。燒諸煩惱智如火焰。是故第四名焰慧地。由即於彼菩提分法方便修習。最極艱難方得自在。是故第五名極難勝地。現前觀察諸行流轉。又於無相多修作意方現在前。是故第六名現前地。能遠證入無缺無間無相作意。與清淨地共相鄰接。是故第七名遠行地。由於無相得無功用。於諸相中不爲現行煩惱所動。是故第八名不動地。於一切種說法自在。獲得無罪廣大智慧。是故第九名善慧地。麤重之身廣如虛空。法身圓滿譬如大雲皆能遍覆。是故第十名法雲地。永斷最極微細煩惱及所知障無著無礙。於一切種所知境界現正等覺。故第十一說名佛地。觀自在菩薩復白佛言。於此諸地有幾愚癡有幾麤重。爲所對治。佛告觀自在菩薩曰。善男子。此諸地中有二十二種愚癡十一種麤重。爲所對治。謂於初地有二愚癡。一者執著補特伽羅及法愚癡。二者惡趣雜染愚癡。及彼麤重爲所對治。於第二地有二愚癡。一者微細誤犯愚癡。二者種種業趣愚癡及彼麤重爲所對治。於第三地有二愚癡。一者欲貪愚癡。二者圓滿聞持陀羅尼愚癡。及彼麤重爲所對治。於第四地有二愚癡。一者等至愛愚癡。二者法愛愚癡。及彼麤重爲所對治。於第五地有二愚癡。一者一向作意棄背生死愚癡。二者一向作意趣向涅槃愚癡。及彼麤重爲所對治。於第六地有二愚癡。一者現前觀察諸行流轉愚癡。二者相多現行愚癡。及彼麤重爲所對治。於第七地有二愚癡。一者微細相現行愚癡。二者一向無相作意

詞明作辭

罪三本俱作癡

到三本俱作至

唯同作惟下同

慧上三本俱有智字

方便愚癡。及彼麤重爲所對治。於第八地有二愚癡。一者於無相作功用愚癡。二者於相自在愚癡。及彼麤重爲所對治。於第九地有二愚癡。一者於無量說法無量法句文字後後慧辯陀羅尼自在愚癡。二者辯才自在愚癡。及彼麤重爲所對治。於第十地有二愚癡。一者大神通愚癡。二者悟入微細祕密愚癡。及彼麤重爲所對治。於如來地有二愚癡。一者於一切所知境界極微細著愚癡。二者極微細礙愚癡。及彼麤重爲所對治。善男子。由此二十二種愚癡及十一種麤重故。安立諸地而阿耨多羅三藐三菩提離彼繫縛。觀自在菩薩復白佛言。世尊。阿耨多羅三藐三菩提。甚奇希有乃至成就大利大果。令諸菩薩能破如是大愚癡羅網。能越如是大麤重稠林。現前證得阿耨多羅三藐三菩提。觀自在菩薩復白佛言。世尊。如是諸地幾種殊勝之所安立。佛告觀自在菩薩曰。善男子。略有八種。一者增上意樂清淨。二者心清淨。三者悲清淨。四者到彼岸清淨。五者見佛供養承事清淨。六者成熟有情清淨。七者生清淨。八者威德清淨。善男子。於初地中所有增上意樂清淨乃至威德清淨。後後諸地乃至佛地所有增上意樂清淨乃至威德清淨。當知彼諸清淨展轉增勝。唯於佛地除生清淨。又初地中所有功德。於上諸地平等皆有。當知自地功德殊勝。一切菩薩十地功德皆是有上。佛地功德當知無上。觀自在菩薩復白佛言。世尊。何因緣故。說菩薩生於諸有生最爲殊勝。佛告觀自在菩薩曰。善男子。四因緣故。一者極淨善根所集起故。二者故意思擇力所取故。三者悲愍濟度諸衆生故。四者自能無染除他染故。觀自在菩薩復白佛言。世尊。何因緣故。說諸菩薩行廣大願妙願勝願。佛告觀自在菩薩曰。善男子。四因緣故。謂諸菩薩能善了知涅槃樂住。堪能速證而復棄捨。速證樂住無緣無待發大願心。爲欲利益諸有情故。處多種種長時大苦。是故我說彼諸菩薩行廣大願妙願勝願。觀自在菩薩復白佛言。世尊。是諸菩薩凡有幾種所應學事。佛告觀自在菩薩曰。善男子。菩薩學事略有六種。所謂布施持戒忍辱精進靜慮慧到彼岸。觀自在菩薩復白佛言。世尊。如是六種所應學事。幾是增上戒學所攝。幾是增上心學所攝。幾是增上慧學所攝。佛告觀自在菩薩曰。善男子。當知初三但是增上戒學所攝。靜慮一種但是增上心學所攝。慧是增上慧學所攝。我說精進遍於一切。觀自在菩薩復白佛言。世尊。如是六種所應學事。幾是福德資糧所攝。幾是智慧資糧所攝。佛告觀自在菩薩曰。善男子。若增上戒學所攝者。

由同作與

是名福德資糧所攝。至增上慧學所攝者。是名智慧資糧所攝。我說精進靜慮二種遍於一切。觀自在菩薩復白佛言。世尊。於此六種所學事中。菩薩云何應當修學。佛告觀自在菩薩曰。善男子。由五種相應當修學。一者最初於菩薩藏波羅蜜多相應微妙正法教中猛利信解。二者次於十種法行以聞思修所成妙智精進修行。三者隨護菩提之心。四者親近眞善知識。五者無間勤修善品。觀自在菩薩復白佛言。世尊。何因緣故。施設如是所應學事。但有六數。佛告觀自在菩薩曰。善男子。二因緣故。一者饒益諸有情故。二者對治諸煩惱故。當知前三饒益有情。後三對治一切煩惱。前三饒益諸有情者。謂諸菩薩由布施故。攝受資具饒益有情。由持戒故不行損害逼迫惱亂饒益有情。由忍辱故於彼損害逼迫惱亂。堪能忍受饒益有情。後三對治諸煩惱者。謂諸菩薩由精進故。雖未永伏一切煩惱。亦未永害一切隨眠。而能勇猛修諸善品。彼諸煩惱不能傾動善品加行。由靜慮故永伏煩惱。由般若故永害隨眠。觀自在菩薩復白佛言。世尊。何因緣故。施設所餘波羅蜜多。但有四數。佛告觀自在菩薩曰。善男子。由前六種波羅蜜多為助伴故。謂諸菩薩於前三種波羅蜜多所攝有情。以諸攝事方便善巧。而攝受之安置善品。是故我說方便善巧波羅蜜多。與前三種而為助伴。若諸菩薩於現法中煩惱多故。於修無間無有堪能。羸劣意樂故。下界勝解故。於內心住無有堪能。於菩薩藏不能聞緣善修習故。所有靜慮不能引發出世間慧。彼便攝受少分狹劣福德資糧。為未來世煩惱輕微心生正願。如是名願波羅蜜多。由此願故煩惱微薄能修精進。是故我說願波羅蜜多與精進波羅蜜多而為助伴。若諸菩薩親近善士。聽聞正法如理作意。為因緣故轉劣意樂成勝意樂。亦能獲得上界勝解。如是名力波羅蜜多。由此力故於內心住有所堪能。是故我說力波羅蜜多與靜慮波羅蜜多而為助伴。若諸菩薩於菩薩藏。已能聞緣善修習故。能發靜慮。如是名智波羅蜜多。由此智故堪能引發出世間慧。是故我說智波羅蜜多與慧波羅蜜多而為助伴。觀自在菩薩復白佛言。世尊。何因緣故。宣說六種波羅蜜多如是次第。佛告觀自在菩薩曰。善男子。能為後後引發依故。謂諸菩薩若於身財無所顧悋便能受持清淨禁戒。為護禁戒便修忍辱。修忍辱已能發精進。發精進已能辦靜慮。具靜慮已便能獲得出世間慧。是故我說波羅蜜多如是次第。觀自在菩薩復白佛言。世尊。如是六種波羅蜜多。各有幾種品類差別。佛告觀自

者上三本俱無種字

間元明俱作閒

慇三本俱作殷下同

暫三本俱作蹔

在菩薩曰。善男子。各有三種。施三種者。一者法施。二者財施。三者無畏施。戒三種者。一者轉捨不善戒。二者轉生善戒。三者轉生饒益有情戒。忍三種者。一者耐怨害忍。二者安受苦忍。三者諦察法忍。精進三種者。一者被甲精進。二者轉生善法加行精進。三者饒益有情加行精進。靜慮三種者。一者無分別寂靜極寂靜無罪故對治煩惱衆苦樂住靜慮。二者引發功德靜慮。三者引發饒益有情靜慮。慧三種者。一者緣世俗諦慧。二者緣勝義諦慧。三者緣饒益有情慧。觀自在菩薩復白佛言。世尊。何因緣故。波羅蜜多說名波羅蜜多。佛告觀自在菩薩曰。善男子。五因緣故。一者無染著故。二者無顧戀故。三者無罪過故。四者無分別故。五者正迴向故。無染著者。謂不染著波羅蜜多諸相違事。無顧戀者。謂於一切波羅蜜多諸果異熟及報恩中心無繫縛。無罪過者。謂於如是波羅蜜多無間雜染法。離非方便行。無分別者。謂於如是波羅蜜多。不如言詞執著自相。正迴向者。謂以如是所作所集波羅蜜多。迴求無上大菩提果。世尊。何等名為波羅蜜多諸相違事。善男子。當知此事略有六種。一者於喜樂欲財富自在諸欲樂中深見功德及與勝利。二者於隨所樂縱身語意而現行中深見功德及與勝利。三者於他輕蔑不堪忍中深見功德及與勝利。四者於不勤修著欲樂中深見功德及與勝利。五者於處憒鬧世雜亂行深見功德及與勝利。六者於見聞覺知言說戲論深見功德及與勝利。世尊。如是一切波羅蜜多何果異熟。善男子。當知此亦略有六種。一者得大財富。二者往生善趣。三者無怨無壞多諸喜樂。四者為衆生主。五者身無惱害。六者有大宗葉。世尊。何等名為波羅蜜多間雜染法。善男子。當知略由四種加行。一者無悲加行故。二者不如理加行故。三者不常加行故。四者不慇重加行故。不如理加行者。謂修行餘波羅蜜多時。於餘波羅蜜多遠離失壞。世尊。何等名為非方便行。善男子。若諸菩薩以波羅蜜多饒益衆生時。但攝財物饒益衆生便為喜足。而不令其出不善處安置善處。如是名為非方便行。何以故。善男子。非於衆生唯作此事名實饒益。譬如糞穢若多若少。終無有能令成香潔。如是衆生由行苦故。其性是苦。無有方便但以財物暫相饒益可令成樂。唯有安處妙善法中。方可得名第一饒益。觀自在菩薩復白佛言。世尊。如是一切波羅蜜多有幾清淨。佛告觀自在菩薩曰。善男子。我終不說波羅蜜多除上五相有餘清淨。然我即依如是諸事總別。當說波羅蜜多清淨之相。總說一切波羅蜜多清淨相

陵同作淩

及明作叉

者。當知七種。何等爲七。一者菩薩於此諸法不求他知。二者於此諸法見已不生執著。三者卽於如是諸法不生疑惑。謂爲能得大菩提不。四者終不自讃毀他有所輕蔑。五者終不憍傲放逸。六者終不少有所得便生喜足。七者終不由此諸法於他發起嫉妬慳悋。別說一切波羅蜜多淸淨相者。亦有七種。何等爲七。謂諸菩薩如我所說七種布施淸淨之相。隨順修行。一者由施物淸淨行淸淨施。二者由戒淸淨行淸淨施。三者由見淸淨行淸淨施。四者由心淸淨行淸淨施。五者由語淸淨行淸淨施。六者由智淸淨行淸淨施。七者由垢淸淨行淸淨施。是名七種施淸淨相。又諸菩薩能善了知制立律儀一切學處。能善了知出離所犯。具常尸羅堅固尸羅常作尸羅常轉尸羅。受學一切所有學處。是名七種戒淸淨相。若諸菩薩於自所有業果異熟深生依信。一切所有不饒益事現在前時。不生憤發亦不反罵。不瞋不打不恐不弄。不以種種不饒益事反相加害。不懷怨結。若諫誨時不令恚惱。亦復不待他來諫誨。不由恐怖有染愛心而行忍辱。不以作恩而便放捨。是名七種忍淸淨相。若諸菩薩通達精進平等之性。不由勇猛勤精進故。自擧陵他具大勢力具大精進有所堪能。堅固勇猛於諸善法終不捨軛。如是名爲七種精進淸淨之相。若諸菩薩有善通達相三摩地靜慮。有圓滿三摩地靜慮。有俱分三摩地靜慮。有運轉三摩地靜慮。有無所依三摩地靜慮。有善修治三摩地靜慮。有於菩薩藏聞緣修習無量三摩地靜慮。如是名爲七種靜慮淸淨之相。若諸菩薩遠離增益損減二邊行於中道。是名爲慧。由此慧故如實了知解脫門義。謂空無願無相三解脫門。如實了知有自性義。謂遍計所執若依他起若圓成實三種自性。如實了知無自性義。謂相生勝義三種無自性性。如實了知世俗諦義。謂於五明處。如實了知勝義諦義。謂於七眞如。又無分別。離諸戲論純一理趣。多所住故。無量總法爲所緣故。及毗鉢舍那故。能善成辦法隨法行。是名七種慧淸淨相。觀自在菩薩復白佛言。世尊。如是五相各有何業。佛告觀自在菩薩曰。善男子。當知彼相有五種業。謂諸菩薩無染著故。於現法中於所修習波羅蜜多。恒常慇重勤修加行無有放逸。無顧戀故攝受當來不放逸因。無罪過故能正修習極善圓滿極善淸淨極善鮮白波羅蜜多。無分別故方便善巧波羅蜜多速得圓滿。正迴向故一切生處波羅蜜多。及彼可愛諸果異熟皆得無盡。乃至無上正等菩提。觀自在菩薩復白佛言。世尊。如是所說波羅蜜多。何者最廣大。

白上三本俱有復字

何者無染汚.何者最明盛.何者不可動.何者最清淨.佛告觀自在菩薩曰.善男子.無染著性無顧戀性正迴向性.最爲廣大.無罪過性無分別性無有染汚.思擇所作最爲明盛.已入無退轉法地者.名不可動.若十地攝佛地攝者.名最清淨.觀自在菩薩復白佛言.世尊.何因緣故.菩薩所得波羅蜜多.諸可愛果及諸異熟常無有盡.波羅蜜多亦無有盡.佛告觀自在菩薩曰.善男子.展轉相依生起修習無間斷故.觀自在菩薩復白佛言.世尊.何因緣故.是諸菩薩深信愛樂波羅蜜多.非於如是波羅蜜多所得可愛諸果異熟.佛告觀自在菩薩曰.善男子.五因緣故.一者波羅蜜多是最增上喜樂因故.二者波羅蜜多是其究竟饒益一切自他因故.三者波羅蜜多是當來世彼可愛果異熟因故.四者波羅蜜多非諸雜染所依事故.五者波羅蜜多非是畢竟變壞法故.觀自在菩薩復白佛言.世尊.一切波羅蜜多.各有幾種最勝威德.佛告觀自在菩薩曰.善男子.當知一切波羅蜜多.各有四種最勝威德.一者於此波羅蜜多正修行時.能捨慳悋犯戒心憤懈怠散亂見趣所治.二者於此正修行時.能爲無上正等菩提眞實資糧.三者於此正修行時.於現法中能自攝受饒益有情.四者於此正修行時.於未來世能得廣大無盡可愛諸果異熟.觀自在菩薩復白佛言.世尊.如是一切波羅蜜多.何因何果有何義利.佛告觀自在菩薩曰.善男子.如是一切波羅蜜多大悲爲因.微妙可愛諸果異熟饒益一切有情爲果.圓滿無上廣大菩提爲大義利.觀自在菩薩白佛言.世尊.若諸菩薩具足一切無盡財寶成就大悲.何緣世間現有衆生貧窮可得.佛告觀自在菩薩曰.善男子.是諸衆生自業過失.若不爾者.菩薩常懷饒益他心.又常具足無盡財寶.若諸衆生無自惡業能爲障礙.何有世間貧窮可得.譬如餓鬼爲大熱渴逼迫其身.見大海水悉皆涸竭.非大海過.是諸餓鬼自業過耳.如是菩薩所施財寶.猶如大海無有過失.是諸衆生自業過耳.猶如餓鬼自惡業力令無有果.觀自在菩薩復白佛言.世尊.菩薩以何等波羅蜜多.取一切法無自性性.佛告觀自在菩薩曰.善男子.以般若波羅蜜多.能取諸法無自性性.世尊.若般若波羅蜜多.能取諸法無自性性.何故不取有自性性.善男子.我終不說以無自性性取無自性性.然無自性性離諸文字.自内所證不可捨於言說文字而能宣說.是故我說般若波羅蜜多.能取諸法無自性性.觀自在菩薩復白佛言.世尊.如佛所說波羅蜜多近波羅蜜多大波羅蜜多.云何波羅蜜多.云何近波羅蜜

多.云何大波羅蜜多.佛告觀自在菩薩曰.善男子.若諸菩薩經無量時.修行施等成就善法.而諸煩惱猶故現行.未能制伏然爲彼伏.謂於勝解行地軟中勝解轉時.是名波羅蜜多.復於無量時修行施等.漸復增上成就善法.而諸煩惱猶故現行.然能制伏非彼所伏.謂從初地已上.是名近波羅蜜多.復於無量時修行|布施等.轉復增上成就善法.一切煩惱皆不現行.謂從八地已上.是名大波羅蜜多.觀自在菩薩復白佛言.世尊.此諸地中煩惱隨眠可有幾種.佛告觀自在菩薩曰.善男子.略有三種.一者害伴隨眠.謂於前五地.何以故.善男子.諸不俱生現行煩惱.是俱生煩惱現行助伴.彼於爾時永無復有.是故說名害伴隨眠.二者羸劣隨眠.謂於第六第七地中微細現行.若修所伏不現行故.三者微細隨眠.謂於第八地已上從此已去一切煩惱不復現行.|唯有所知障爲依止故.觀自在菩薩復白佛言.世尊.此諸隨眠幾種麤重斷所顯示.佛告觀自在菩薩曰.善男子.但由二種.謂由在皮麤重斷故顯彼初二.復由在膚麤重斷故顯彼第三.若在於骨麤重斷者.我說永離一切隨眠位在佛地.觀自在菩薩復白佛言.世尊.經幾不可數劫能斷如是麤重.佛告觀自在菩薩曰.善男子.經於三大不可數劫或無量劫.所謂年月半月晝夜一時半時.須臾瞬息剎那量劫不可數故.觀自在菩薩復白佛言.世尊.是諸菩薩於諸地中所生煩惱.當知何相何失何德.佛告觀自在菩薩曰.善男子.無染汙相.何以故.是諸菩薩於初地中定.於一切諸法法界已善通達.由此因緣菩薩要知.方起煩惱非爲不知.是故說名無染汙相.於自身中不能生苦故.無過失菩薩生起如是煩惱.於有情界能斷苦因.是故彼有無量功德.觀自在菩薩復白佛言.甚奇世尊.無上菩提乃有如是大功德利.令諸菩薩生起煩惱.尚勝一切有情聲聞獨覺善根.何況其餘無量功德.觀自在菩薩復白佛言.世尊.如世尊說若聲聞乘若復大乘|唯是一乘.此何密意.佛告觀自在菩薩曰.善男子.如我於彼聲聞乘中宣說種種諸法自性.所謂五蘊或內六處或外六處.如是等類.於大乘中卽說彼法.同一法界同一理趣故.我不說乘差別性.於中或有如言於義妄起分別.|一類增益一類損減.又於諸乘差別道理謂互相違.如是展轉遞興諍論.如是名爲此中密意.爾時世尊欲重宣此義.而說頌曰

諸地攝想所對治　殊勝生願及諸學
由依佛說是大乘　於此善修成大覺
宣說諸法種種性

施上三本俱無布字

一元明俱作二

復說皆同一理趣　謂於下乘或上乘　故我說乘無異性　如言於義妄分別　或有增益或損減

謂此二種互相違　愚癡意解咸乖諍

爾時觀自在菩薩摩訶薩復白佛言.世尊.於是解深密法門中此名何教.我當云何奉持.佛告觀自在菩薩曰.善男子.此名諸地波羅蜜多了義之教.於此諸地波羅蜜多了義之教汝當奉持.說此諸地波羅蜜多了義教時.於大會中有七十五千菩薩.皆得菩薩大乘光明三摩地

解深密經卷第五

〔麗蓋二　宋此三　元此二　明敎二〕

大唐三藏法師玄奘奉　詔譯

如來成所作事品第八

爾時曼殊室利菩薩摩訶薩請問佛言。世尊。如佛所說如來法身。如來法身有何等相。佛告曼殊室利菩薩曰。善男子。若於諸地波羅蜜多。善修出離轉依成滿。是名如來法身之相。當知此相二因緣故。不可思議無戲論故。無所爲故。而諸衆生計著戲論有所爲故。世尊。聲聞獨覺所得轉依。名法身不。善男子。不名法身。世尊。當名何身。善男子。名解脫身。由解脫身故說一切聲聞獨覺與諸如來平等平等。由法身故說有差別。如來法身有差別故。無量功德最勝差別。算數譬喩所不能及。曼殊室利菩薩復白佛言。世尊。我當云何應知如來生起之相。佛告曼殊室利菩薩曰。善男子。一切如來化身作業。如世界起一切種類。如來功德衆所莊嚴住持爲相。當知化身相有生起。法身之相無有生起。曼殊室利菩薩復白佛言。世尊。云何應知示現化身方便善巧。佛告曼殊室利菩薩曰。善男子。遍於一切三千大千佛國土中。或衆推許增上王家。或衆推許大福田家。同時入胎誕生長大受欲出家示行苦行。捨苦行已成等正覺次第示現。是名如來示現化身方便善巧。曼殊室利菩薩復白佛言。世尊。凡有幾種一切如來身所住持言音差別。由此言音所化有情。未成熟者令其成熟。已成熟者緣此爲境速得解脫。佛告曼殊室利菩薩曰。善男子。如來言音略有三種。一者契經。二者調伏。三者本母。世尊。云何契經。云何調伏。云何本母。曼殊室利。若於是處我依攝事顯示諸法。是名契經。謂依四事或依九事。或復依於二十九事。云何四事。一者聽聞事。二者歸趣事。三者修學事。四者菩提事。云何九事。一者施設有情事。二者彼所受用事。三者彼生起事。四者彼生已住事。五者彼染淨事。六者彼差別事。七者能宣說事。八者所宣說事。九者諸衆會事。云何名爲二十九事。謂依雜染品有攝諸行事。彼次第隨轉事。即於是中作補特伽羅想已。於當來世流轉因事。作是想已於當來世

請問　三本俱作白

是　三本俱作法

修上同無不棄
二字

流轉因事。依清淨品有繫念於所緣事。卽於是中勤精進事。心安住事。現法樂住事。超一切苦緣方便事。彼遍知事。此復三種。顚倒徧知所依處故。依有情想外有情中。邪行遍知所依處故。內離增上慢遍知所依處故。修依處事。作證事。修習事。令彼堅固事。彼行相事。彼所緣事。已斷未斷觀察善巧事。彼散亂事。彼不散亂事。不散亂依處事。不棄修習劬勞加行事。修習勝利事。彼堅牢事。攝聖行事。攝聖行眷屬事。通達眞實事。證得涅槃事。於善說法毗奈耶中世間正見。超昇一切外道所得正見頂事。及卽於此不修退事。於善說法毗奈耶中。不修習故說名爲退。非見過失故名爲退。曼殊室利。若於是處我依聲聞及諸菩薩。顯示別解脫及別解脫相應之法。是名調伏。世尊。菩薩別解脫義相所攝。善男子。當知七相。一者宣說受軌則事故。二者宣說隨順他勝事故。三者宣說隨順毀犯事故。四者宣說有犯自性故。五者宣說無犯自性故。六者宣說出所犯故。七者宣說捨律儀故。曼殊室利。若於是處。我以十一種相。決了分別顯示諸法。是名本母。何等名爲十一種相。一者世俗相。二者勝義相。三者菩提分法所緣相。四者行相。五者自性相。六者彼果相。七者彼領受開示相。八者彼障礙法相。九者彼隨順法相。十者彼過患相。十一者彼勝利相。世俗相者。當知三種。一者宣說補特伽羅故。二者宣說遍計所執自性故。三者宣說諸法作用事業故。勝義相者。當知宣說七種眞如故。菩提分法所緣相者。當知宣說遍一切種所知事故。行相者。當知宣說八行觀故。云何名爲八行觀耶。一者諦實故。二者安住故。三者過失故。四者功德故。五者理趣故。六者流轉故。七者道理故。八者總別故。諦實者。謂諸法眞如。安住者。謂或安立補特伽羅。或復安立諸法遍計所執自性。或復安立一向分別反問置記。或復安立隱密顯了記別差別。過失者。謂我宣說諸雜染法。有無量門差別過患。功德者。謂我宣說諸清淨法。有無量門差別勝利。理趣者。當知六種。一者眞義理趣。二者證得理趣。三者教導理趣。四者遠離二邊理趣。五者不可思議理趣。六者意趣理趣。流轉者。所謂三世三有爲相及四種緣。道理者。當知四種。一者觀待道理。二者作用道理。三者證成道理。四者法爾道理。觀待道理者。謂若因若緣能生諸行及起隨說。如是名爲觀待道理。作用道理者。謂若因若緣能得諸法。或能成辦。或復生已作諸業用。如是名爲作用道理。證成道理者。謂若因若緣能令所立所說所標義得成立令正覺悟。如是名爲證成道理。又此道理略有二種。一

現三本俱作見

相者同作者相

故下同無相故二字〇何下同無由字

亦三本俱作是

者清淨。二者不清淨。由五種相名為清淨。由七種相名不清淨。云何由五種相名為清淨。一者現見所得相。二者依止現見所得相。三者自類譬喻所引相。四者圓成實相。五者善清淨言教相。現見所得相者。謂一切行皆無常性。一切行皆是苦性。一切法皆無我性。此為世間現量所得。如是等類是名現見所得相。依止現見所得相者。謂一切行皆剎那性。他世有性。淨不淨業無失壞性。由彼能依麤無常性現可得故。由諸有情種種差別。依種種業現可得故。由諸有情若樂若苦。淨不淨業以為依止現可得故。由此因緣於不現見可為比度。如是等類是名依止現見所得相。自類譬喻所引相者。謂於內外諸行聚中。引諸世間共所了知所得生死以為譬喻。引諸世間共所了知所得生等種種苦相以為譬喻。引諸世間共所了知所得不自在相以為譬喻。又復於外引諸世間共所了知所得衰盛以為譬喻。如是等類。當知是名自類譬喻所引相。圓成實相者。謂即如是現見所得相。若依止現見所得相。若自類譬喻所得相。於所成立決定能成。當知是名圓成實相。善清淨言教相者。謂一切智者之所宣說。如言涅槃究竟寂靜。如是等類。當知是名善清淨言教相。善男子。是故由此五種相故。名善觀察清淨道理。由清淨故應可修習。曼殊室利菩薩復白佛言。世尊。一切智相者。當知有幾種。佛告曼殊室利菩薩曰。善男子。略有五種。一者若有出現世間。一切智聲無不普聞。二者成就三十二種大丈夫相。三者具足十力。能斷一切眾生一切疑惑。四者具足四無所畏宣說正法。不為一切他論所伏。而能摧伏一切邪論。五者於善說法毘奈耶中。八支聖道四沙門等。皆現可得。如是生故。相故。斷疑網故。非他所伏能伏他故。聖道沙門現可得故。如是五種。當知名為一切智相。善男子。如是證成道理。由現量故。由比量故。由聖教量故。由五種相名為清淨。云何由七種相名不清淨。一者此餘同類可得相。二者此餘異類可得相。三者一切同類可得相。四者一切異類可得相。五者異類譬喻所得相。六者非圓成實相。七者非善清淨言教相。若一切法意識所識性。是名一切同類可得相。若一切法相性業法因果異相。由隨如是一一異相。決定展轉各各異相。是名一切異類可得相。善男子。若於此餘同類可得相及譬喻中。有一切異類相者。由此因緣於所成立非決定故。是名非圓成實相。又於此餘異類可得相及譬喻中。有一切同類相者。由此因緣於所成立不決定故。亦名非圓成實相。非圓成實故。非善觀察清淨道理。不清淨

白上同無復字○唯同作惟下同○詞同作辭

故不應修習。若異類譬喩所引相。若非善清淨言教相。當知體性皆不清淨。法爾道理者。謂如來出世若不出世。法性安住法住法界。是名法爾道理。總別者。謂先總說一句法已。後後諸句差別分別究竟顯了。自性相者。謂我所說有行有緣。所有能取菩提分法。謂念住等。如是名爲彼自性相。彼果相者。謂若世間若出世間諸煩惱斷。及所引發世出世間諸果功德。如是名爲得彼果相。彼領受開示相者。謂即於彼以解脫智而領受之。及廣爲他宣說開示。如是名爲彼領受開示相。彼障礙法相者。謂即於修菩提分法。能隨障礙諸染汙法。是名彼障礙法相。彼隨順法相者。謂即於彼多所作法。是名彼隨順法相。彼過患相者。當知即彼諸障礙法所有過失。是名彼過患相。彼勝利相者。當知即彼諸隨順法所有功德。是名彼勝利相。曼殊室利菩薩復白佛言。唯願世尊。爲諸菩薩略說契經調伏本母不共外道陀羅尼義。由此不共陀羅尼義。令諸菩薩得入如來說諸所法甚深密意。佛告曼殊室利菩薩曰。善男子。汝今諦聽。吾當爲汝略說不共陀羅尼義。令諸菩薩於我所說密意言詞能善悟入。善男子。若雜染法若清淨法。我說一切皆無作用。亦都無有補特伽羅。以一切種離所爲故非離染法。先染後淨非清淨法。後淨先染凡夫異生。於麤重身執著諸法。補特伽羅自性差別隨眠妄見。以爲緣故計我我所。由此妄見謂我見我聞我齅我嘗我觸我知我食我作我染我淨。如是等類邪加行轉。若有如實知如是者。便能永斷麤重之身。獲得一切煩惱不住。最極清淨離諸戲論。無爲依止無有加行。善男子。當知是名略說不共陀羅尼義。爾時世尊欲重宣此義。復說頌曰

一切雜染清淨法　皆無作用數取趣　由我宣說離所爲　染汙清淨非先後　於麤重身隨眠見
爲緣計我及我所　由此妄謂我見等　我食我爲我染淨　若如實知如是者　乃能永斷麤重身
得無染淨無戲論　無爲依止無加行

爾時曼殊室利菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。云何應知諸如來心生起之相。佛告曼殊室利菩薩曰。善男子。夫如來者非心意識生起所顯。然諸如來有無加行心法生起。當知此事猶如變化。曼殊室利菩薩復白佛言。世尊。若諸如來法身遠離一切加行。既無加行。云何而有心法生起。佛告曼殊室利菩薩曰。善男子。先所修習方便般若。

加行力故有心生起．善男子．譬如正入無心睡眠．非於覺悟而作加行．由先所作加行勢力而復覺悟．又如正在滅盡定中．非於起定而作加行．由先所作加行勢力還從定起．如從睡眠及滅盡定心更生起．如是如來由先修習．方便般若加行力故．當知復有心法生起．曼殊室利菩薩復白佛言．世尊．如來化身．當言有心爲無心耶．佛告曼殊室利菩薩曰．善男子．非是有心亦非無心．何以故．無自依心故．有依他心故．曼殊室利菩薩復白佛言．世尊．如來所行如來境界．此之二種有何差別．佛告曼殊室利菩薩曰．善男子．如來所行．謂一切種如來共有不可思議無量功德．衆所莊嚴清淨佛土．如來境界．謂一切種五界差別．何等爲五．一者有情界．二者世界．三者法界．四者調伏界．五者調伏方便界．如是名爲二種差別．曼殊室利菩薩復白佛言．世尊．如來成等正覺．轉正法輪．入大涅槃．如是三種當知何相．佛告曼殊室利菩薩曰．善男子．當知此三皆無二相．謂非成等正覺．非不成等正覺．非轉正法輪．非不轉正法輪．非入大涅槃．非不入大涅槃．何以故．如來法身究竟淨故．如來化身常示現故．曼殊室利菩薩復白佛言．世尊．諸有情類．但於化身．見聞奉事生諸功德．如來於彼有何因緣．佛告曼殊室利菩薩曰．善男子．如來是彼增上所緣之因緣故．又彼化身是如來力所住持故．曼殊室利菩薩復白佛言．世尊．等無加行．何因緣故．如來法身爲諸有情放大智光．及出無量化身影像．聲聞獨覺解脫之身無如是事．佛告曼殊室利菩薩曰．善男子．譬如等無加行．從日月輪水火二種頗胝迦寶放大光明．非餘水火頗胝迦寶．謂大威德有情所住持故．諸有情業增上力故．又如從彼善工業者之所雕飾．末尼寶珠出印文像．不從所餘不雕飾者．如是緣於無量法界．方便般若極善修習．磨瑩集成如來法身．從是能放大智光明．及出種種化身影像．非唯從彼解脫之身有如斯事．曼殊室利菩薩復白佛言．世尊．如世尊說．如來菩薩威德住持．令諸衆生於欲界中．生剎帝利婆羅門等大富貴家．人身財寶無不圓滿．或欲界天色無色界．一切身財圓滿可得．世尊．此中有何密意．佛告曼殊室利菩薩曰．善男子．如來菩薩威德住持．若道若行於一切處．能令衆生獲得身財皆圓滿者．即隨所應爲彼宣說此道此行．若有能於此道此行正修行者．於一切處所獲身財無不圓滿．若有衆生於此道行違背輕毀．又於我所起損惱心及瞋恚心．命終已後於一切處．所得身財無不下劣．曼殊室利．由是因緣．當知如來及諸菩薩威德住持．

毀元明俱作毁

薩下三本俱有摩訶薩三字次同〇此宮作是

非但能令身財圓滿。如來菩薩住持威德。亦令衆生身財下劣。曼殊室利菩薩復白佛言。世尊。諸穢土中何事易得何事難得。諸淨土中何事易得何事難得。佛告曼殊室利菩薩曰。善男子。諸穢土中八事易得。二事難得。何等名爲八事易得。一者外道。二者有苦衆生。三者種姓家世興衰差別。四者行諸惡行。五者毀犯尸羅。六者惡趣。七者下乘。八者下劣意樂加行菩薩。何等名爲二事難得。一者增上意樂加行菩薩之所遊集。二者如來出現于世。曼殊室利。諸淨土中與上相違。當知八事甚爲難得。二事易得。爾時曼殊室利菩薩白佛言。世尊。於此解深密法門中。此名何教。我當云何奉持。佛告曼殊室利菩薩曰。善男子。此名如來成所作事了義之教。於此如來成所作事了義之教。汝當奉持。說是如來成所作事了義教時。於大會中有七十五千菩薩摩訶薩。皆得圓滿法身證覺

解深密經卷第五

品目二下三本俱無之字次卷亦同

大乘本生心地觀經卷第二

〔麗匡〕〔宋刻〕〔元刻〕〔明興〕

大唐罽賓國三藏般若奉　詔譯

報恩品第二之上

爾時世尊從三昧安詳而起。告彌勒菩薩摩訶薩言。善哉善哉。汝等大士。諸善男子。爲欲親近世間之父。爲欲聽聞出世之法。爲欲思惟如如之理。爲欲修習如如之智。來詣佛所供養恭敬。我今演說心地妙法。引導衆生令入佛智。如是妙法諸佛如來。過無量劫時乃說之。如來世尊出興於世。甚難値遇如優曇華。假使如來出現於世。說此妙法亦復爲難。所以者何。一切衆生遠離大乘菩薩行願。趣向聲聞緣覺菩提。厭離生死永入涅槃。不樂大乘常樂妙果。然諸如來轉於法輪。遠離四失說相應法。一無非處。二無非時。三無非器。四無非法。應病與藥令得復除。卽是如來不共之德。聲聞緣覺未得自在。諸菩薩衆不共之境。以是因緣難見難聞菩提正道心地法門。若有善男子善女人。聞是妙法一經於耳。須臾之頃攝念觀心。熏成無上大菩提種。不久當坐菩提樹王金剛寶座。得成阿耨多羅三藐三菩提。爾時王舍大城。有五百長者。其名曰妙德長者。勇猛長者。善法長者。念佛長者。妙智長者。菩提長者。妙辯長者。法眼長者。光明長者。滿願長者。如是等大富長者成就正見。供養如來及諸聖衆。是諸長者。聞是世尊讚歎大乘心地法門。而作是念。我見如來放金色光。影現菩薩難行苦行。我不愛樂行苦行。心詎能永劫住於生死。而爲衆生受諸苦惱。作是念已。卽從座起。偏袒右肩右膝著地。合掌恭敬異口同音。前白佛言。世尊。我等不樂大乘諸菩薩行。亦不喜聞苦行音聲。所以者何。一切菩薩所修行願。皆悉不是知恩報恩。何以故。遠離父母趣於出家。以自妻子施於所欲。頭目髓腦隨其願求。悉皆布施受諸逼惱。三僧祇劫具修諸度八萬四千波羅蜜行。越生死流方至菩提大安樂處。不如趣向二乘道果。三生百劫修集資糧。斷生死因證涅槃果。速至安樂方名報恩。爾時佛告五百長者。善哉善哉。汝等聞於讚歎大乘。心生退轉發起妙義。利益安樂未來世中。不知

出世同作間之
終三本俱作經
或同作遂
徵同作徵
先同作皆

恩德。一切衆生。諦聽諦聽。善思念之。我今爲汝分別演說世出世間有恩之處。善男子。汝等所言未可正理。何以故世出世恩有其四種。一父母恩。二衆生恩。三國王恩。四三寶恩。如是四恩。一切衆生平等荷負。善男子。父母恩者。父有慈恩。母有悲恩。母悲恩者。若我住世於一劫中說不能盡。我今爲汝宣說少分。假使有人爲福德故。恭敬供養一百淨行大婆羅門。一百五通諸大神仙。一百善友。安置七寶上妙堂內。以百千種上妙珍膳。垂諸瓔珞。衆寶衣服。栴檀沈香立諸房舍。百寶莊嚴牀臥敷具。療治衆病百種湯藥。一心供養滿百千劫。不如一念住孝順心。以微少物色養悲母隨所供侍。比前功德百千萬分不可校量。世間悲母念子無比。恩及未形。始自受胎終於十月。行住坐臥受諸苦惱。非口所宣。雖得欲樂飲食衣服。而不生愛。憂念之心恒無休息。但自思惟將欲生產。漸受諸苦晝夜愁惱。若產難時如百千刃競來屠割。或致無常。若無苦惱諸親眷屬喜樂無盡。猶如貧女得如意珠。其子發聲如聞音樂。以母胸臆而爲寢處。左右膝上常爲遊履。於胸臆中出甘露泉。長養之恩彌於普天。憐愍之德廣大無比。世間所高莫過山岳。悲母之恩逾於須彌。世間之重大地爲尤。悲母之恩亦過於彼。若有男女背恩不順。令其父母生怨念心。母發惡言子即墮落。或在地獄餓鬼畜生。世間之疾莫過猛風。怨念之徵復速於彼。一切如來金剛天等及五通仙不能救護。若善男子善女人。依悲母教承順無違。諸天護念福樂無盡。如是男女即名尊貴天人種類。或是菩薩爲度衆生。現爲男女饒益父母。若善男子善女人。爲報母恩經於一劫。每日三時割自身肉以養父母。而未能報一日之恩。所以者何。一切男女處于胎中。口吮乳根飲噉母血。及出胎已幼稚之前。所飲母乳百八十斛。母得上味先與其子。珍妙衣服亦復如是。愚癡鄙陋情愛無二。昔有女人遠遊佗國。抱所生子渡殑伽河。其水暴漲力不能前。愛念不捨母子俱沒。以是慈心善根力故。即得上生色究竟天作大梵王。以是因緣母有十德。一名大地。於母胎中爲所依故。二名能生。經歷衆苦而能生故。三名能正。恒以母手理五根故。四名養育。隨四時宜能長養故。五名智者。能以方便生智慧故。六名莊嚴。以妙瓔珞而嚴飾故。七名安隱。以母懷抱爲止息故。八名教授。善巧方便導引子故。九名教誡。以善言辭離衆惡故。十名與業。能以家業付囑子故。善男子。於諸世間何者最富。何者最貧。悲母在堂名之爲富。悲母不在名之爲貧。悲母在時名爲日中。悲母死時名爲日沒。

恩同作悲

主三本俱作王

天主元作天王

任元明俱作住

悲母在時名爲月明。悲母亡時名爲闇夜。是故汝等。勤加修習孝養父母。若人供佛福等無異。應當如是報父母恩。善男子。衆生恩者。卽無始來一切衆生輪轉五道經百千劫。於多生中互爲父母。以互爲父母故。一切男子卽是慈父。一切女人卽是悲母。昔生生中有大恩故。猶如現在父母之恩等無差別。如是昔恩猶未能報。或因妄業生諸違順。以執著故反爲其怨。何以故。無明覆障宿住智明。不了前生曾爲父母。所可報恩互爲饒益。無饒益者名爲不孝。以是因緣諸衆生類。於一切時亦有大恩實爲難報。如是之事名衆生恩。國王恩者。福德最勝雖生人間得自在故。三十三天諸天子等。恆與其力常護持故。於其國界山河大地。盡大海際屬于國王。一人福德勝過一切衆生福故。是大聖王以正法化。能使衆生悉皆安樂。譬如世間一切堂殿柱爲根本。人民豐樂王爲根本。依王有故。亦如梵王能生萬物。聖王能生治國之法利衆生故。如日天子能照世間。聖王亦能觀察天下人安樂故。王失正治人無所依。若以正化八大恐怖不入其國。所謂他國侵逼。自界叛逆。惡鬼疾疫。國土飢饉。非時風雨。過時風雨。日月薄蝕。星宿變怪。人王正化利益人民。如是八難不能侵故。譬如長者唯有一子。愛念無比憐愍饒益常與安樂晝夜不捨。國大聖王亦復如是。等示群生如同一子。擁護之心晝夜無捨。如是人王令修十善。名福德主。若不令修名非福主。所以者何。若王國內一人修善。其所作福皆爲七分。造善之人得其五分。於彼國王常獲二分。善因王修同福利故。造十惡業亦復如是。同其事故。一切國內田地園林所生之物。皆爲七分亦復如是。若有人王成就正見。如法化世名爲天主。以天善法化世間故。諸天善神及護世王。常來加護守王宮故。雖處人間修行天業。賞罰之心無偏黨故。一切聖王法皆如是。如是聖主名正法王。以是因緣成就十德。一名能照。以智慧眼照世間故。二名莊嚴。以大福智莊嚴國故。三名與樂。以大安樂與人民故。四名伏怨。一切怨敵自然伏故。五名離怖。能卻八難離恐怖故。六名任賢。集諸賢人評國事故。七名法本。萬姓安住依國王故。八名持世。以天王法持世間故。九名業主。善惡諸業屬國王故。十名人主。一切人民王爲主故。一切國王以先世福。成就如是十種勝德。大梵天王及忉利天。常助人王受勝妙樂。諸羅刹王及諸神等。雖不現身潛來衛護王及眷屬。王見人民造諸不善不能制止。諸天神等悉皆遠離。若見修善歡喜讚歎。盡皆唱言。我之聖王。龍天喜悅澍甘露雨。五穀成熟人民

豐樂。若不親近諸惡人等。普利世間咸從正化。如意寶珠必現王國。於王隣國咸來歸服。人與非人無不稱歎。若有惡人於王國內而生逆心。於須臾頃。如是之人福自衰滅。命終當墮地獄之中。經歷畜生備受諸苦。所以者何。由於聖王不知恩故。起諸惡逆得如是報。若有人民能行善心。敬輔仁王尊重如佛。是人現世安隱豐樂。有所願求無不稱心。所以者何。一切國王於過去時。曾受如來淸淨禁戒。常爲人王安隱快樂。以是因緣違順果報皆如響應。聖王恩德廣大如是。善男子。三寶恩者。名不思議。利樂衆生無有休息。是諸佛身眞善無漏。無數大劫修因所證。三有業果永盡無餘。功德寶山巍巍無比。一切有情所不能知。福德甚深猶如大海。智慧無礙等於虛空。神通變化充滿世間。光明徧照十方三世。一切衆生煩惱業障都不覺知。沈淪苦海生死無窮。三寶出世作大船師。能截愛流超昇彼岸。諸有智者悉皆瞻仰。善男子等。唯一佛寶具三種身。一自性身。二受用身。三變化身。第一佛身有大斷德。二空所顯一切諸佛悉皆平等。第二佛身有大智德。眞常無漏一切諸佛悉皆同意。第三佛身有大恩德。定通變現一切諸佛悉皆同事。善男子。其自性身無始無終。離一切相絕諸戲論。周圓無際凝然常住。其受用身。有二種相。一自受用。二他受用。自受用身。三僧祇劫所修萬行。利益安樂諸衆生已。十地滿心。運身直往色究竟天。出過三界淨妙國土坐無數量大寶蓮華。而不可說海會菩薩前後圍遶。以無垢繒繫於頂上。供養恭敬尊重讚歎。如是名爲後報利益。爾時菩薩入金剛定。斷除一切微細所知諸煩惱障。證得阿耨多羅三藐三菩提。如是妙果名現報利益。是眞報身有始無終。壽命劫數無有限量。初成正覺窮未來際。諸根相好徧周法界。四智圓滿是眞報身受用法樂。一大圓鏡智。轉異熟識得此智慧。如大圓鏡現諸色像。如是如來鏡智之中。能現衆生諸善惡業。以是因緣。此智名爲大圓鏡智。依大悲故恒緣衆生。依大智故常如法性。雙觀眞俗無有間斷。常能執持無漏根身。一切功德爲所依止。二平等性智。轉我見識得此智慧。是以能證自他平等二無我性。如是名爲平等性智。三妙觀察智。轉分別識得此智慧。能觀諸法自相共相。於衆會前說諸妙法。能令衆生得不退轉。以是名爲妙觀察智。四成所作智。轉五種識得此智慧。能現一切種種化身。令諸衆生成熟善業。以是因緣。名爲成所作智。如是四智而爲上首。具足八萬四千智門。如是一切諸功德法。名爲如來自受用身。諸善男子。二者如來他受

現下三本俱無報字〇命同作欲
二無同作無二

滿上三本俱無圓字

用身具足八萬四千相好。居眞淨土說一乘法。令諸菩薩受用大乘微妙法樂。一切如來爲化十地諸菩薩衆。現於十種他受用身。第一佛身。坐百葉蓮華。爲初地菩薩說百法明門。菩薩悟已起大神通。變化滿於百佛世界。利益安樂無數衆生。第二佛身。坐千葉蓮華。爲二地菩薩說千法明門。菩薩悟已起大神通。變化滿於千佛世界。利益安樂無量衆生。第三佛身。坐萬葉蓮華。爲三地菩薩說萬法明門。菩薩悟已起大神通。變化滿於萬佛國土。利益安樂無數衆生。如是如來漸漸增長。乃至十地他受用身。坐不可說妙寶蓮華。爲十地菩薩說不可說諸法明門。菩薩悟已起大神通。變化滿於不可說佛微妙國土。利益安樂不可宣說不可宣說無量無邊種類衆生。如是十身皆坐七寶菩提樹王。證得阿耨多羅三藐三菩提。諸善男子。一一華葉各各爲一三千世界。各有百億妙高山王。及四大洲日月星辰。三界諸天無不具足。一一葉上諸贍部洲。有金剛座菩提樹王。其百千萬至不可說大小化佛。各於樹下破魔軍已。一時證得阿耨多羅三藐三菩提。如是大小諸化佛身。各各具足三十二相八十種好。爲諸資糧及四善根諸菩薩等二乘凡夫。隨宜爲說三乘妙法。爲諸菩薩說應六波羅蜜。令得阿耨多羅三藐三菩提究竟佛慧。爲求辟支佛者。說應十二因緣法。爲求聲聞者。說應四諦法。度生老病死究竟涅槃。爲除衆生說人天教。令得人天安樂妙果。諸如是等大小化佛。皆悉名爲佛變化身。善男子。如是二種應化身佛。顯現滅度。而此佛身相續常住。諸善男子。如一佛寶。有如是等無量無邊不可思議利樂衆生廣大恩德。以是因緣。名爲如來應正徧知明行圓滿善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。善男子。一佛寶中具足六種微妙功德。一者無上大功德田。二者無上有大恩德。三者無足二足及以多足衆生中尊。四者極難値遇如優曇華。五者獨一出現三千大千世界。六者世出世間功德圓滿一切義依。具如是等六種功德。常能利樂一切衆生。是名佛寶不思議恩。爾時五百長者白佛言。世尊。佛如所說。一佛寶中無量化佛。充滿世界利樂衆生。以何因緣。世間衆生多不見佛受諸苦惱。佛告五百長者。譬如日光天子放百千光照明世界。而有盲者不見光明。汝善男子。於意云何。日光天子而有過否。時長者言。不也世尊。佛言。善男子。諸佛如來常演正法利樂有情。是諸衆生常造惡業。都不覺知無慚愧心。於佛法僧不樂親近。如是衆生罪根深重經無量劫不得見聞三寶名字。如彼盲者不覩日光。若

爲無爲果同作無爲妙果

有衆生恭敬如來愛樂大乘尊重三寶.當知是人業障銷除福智增長.成就善根速得見佛.永離生死當證菩提.諸善男子.如一佛寶有無量佛.如來所說法寶亦然.一法寶中有無量義.善男子.於法寶中有其四種.一者教法.二者理法.三者行法.四者果法.一切無漏能破無明煩惱業障.聲名句文名爲教法.有無諸法名爲理法.戒定慧行名爲行法.爲無爲果名爲果法.如是四種名爲法寶.引導衆生出生死海到於彼岸.善男子.諸佛所師卽是法寶.所以者何.三世諸佛依法修行.斷一切障得成菩提.盡未來際利益衆生.以是因緣.三世如來常能供養諸波羅蜜微妙法寶.何況三世一切衆生未得解脫.而不能敬微妙法寶.善男子.我昔曾爲求法人王.入大火坑而求正法.永斷生死得大菩提.是故法寶能破一切生死牢獄.猶如金剛能壞萬物.法寶能照癡闇衆生.如日天子能照世界.法寶能救貧乏衆生.如摩尼珠.雨衆寶故.法寶能與衆生喜樂.猶如天鼓樂諸天故.法寶能爲諸天寶階.聽聞正法得生天故.法寶能爲堅牢大船.渡生死海到彼岸故.法寶猶如轉輪聖王.能除三毒煩惱賊故.法寶能爲珍妙衣服.覆蓋無慚諸衆生故.法寶猶如金剛甲冑.能破四魔證菩提故.法寶猶如智慧利劒.割斷生死離繫縛故.法寶正是三乘寶車.運載衆生出火宅故.法寶猶如一切明燈.能照三塗黑闇處故.法寶猶如弓箭矛矟.能鎭國界摧怨敵故.法寶猶如險路導師.善誘衆生達寶所故.善男子.三世如來所說妙法.有如是等難思議事.是名法寶不思議恩.善男子.世出世間有三種僧.一菩薩僧.二聲聞僧.三凡夫僧.文殊師利及彌勒等.是菩薩僧.如舍利弗目犍連等.是聲聞僧.若有成就別解脫戒眞善凡夫.乃至具足一切正見.能廣爲他演說開示衆聖道法.利樂衆生.名凡夫僧.雖未能得無漏戒定及慧解脫.而供養者獲無量福.如是三種名眞福田僧.復有一類名福田僧.於佛舍利及佛形像.幷諸法僧聖所制戒.深生敬信.自無邪見令他亦然.能宣正法讚歎一乘.深信因果常發善願.隨其過犯悔除業障.當知是人信三寶力.勝諸外道百千萬倍.亦勝四種轉輪聖王.何況餘類一切衆生.如鬱金華雖然萎悴.猶勝一切諸雜類華.正見比丘亦復如是.勝餘衆生百千萬倍.雖毀禁戒不壞正見.以是因緣名福田僧.若善男子善女人等.供養如是福田僧者.所得福德無有窮盡.供養前三眞實僧寶.所獲功德正等無異.如是四類聖凡僧寶.利樂有情恒無暫捨.是名僧寶不思議恩.爾時五百長者白佛言.世尊.我等今日聞佛

眞下三本俱無實字○一下同有切字

法音．得悟三寶利益世間．然今不知以何義故．說佛法僧得名爲寶．願佛解說顯示衆會及未來世敬信三寶一切有情．永斷疑網得不壞信．令入三寶不思議海．爾時佛告諸長者言．善哉善哉．汝善男子．能問如來甚深妙法．於未來世利益安樂一切衆生．譬如世間第一珍寶具足十義．莊嚴國界饒益有情．佛法僧寶亦復如是．一者堅牢．如摩尼寶無人能破．佛法僧寶亦復如是．外道天魔不能破故．二者無垢．世間勝寶清淨光潔不雜塵穢．佛法僧寶亦復如是．悉能遠離煩惱塵垢．三者與樂．如天德瓶能與安樂．佛法僧寶亦復如是．能與衆生世出世樂．四者難遇．如吉祥寶希有難得．佛法僧寶亦復如是．業障有情億劫難遇．五者能破．如如意寶能破貧窮．佛法僧寶亦復如是．能破世間諸貧苦故．六者威德．如轉輪王所有輪寶能伏諸怨．佛法僧寶亦復如是．具六神通降伏四魔．七者滿願．如摩尼珠隨心所求能雨衆寶．佛法僧寶亦復如是．能滿衆生所修善願．八者莊嚴．如世珍寶莊嚴王宮．佛法僧寶亦復如是．莊嚴法王菩提寶宮．九者最妙．如天妙寶最爲微妙．佛法僧寶亦復如是．超諸世間最勝妙寶．十者不變．譬如眞金入火不變．佛法僧寶亦復如是．世間八風不能傾動．佛法僧寶具足無量神通變化．利樂有情曾無休息．以是義故．諸佛法僧說名爲寶．善男子．我爲汝等略說四種世出世間有恩之處．汝等當知．修菩薩行應報如是四種之恩．爾時五百長者白佛言．世尊．如是四恩甚爲難報．當修何行而報是恩．佛告諸長者言．善男子．爲求菩提．有其三種十波羅蜜．一者十種布施波羅蜜多．二者十種親近波羅蜜多．三者十種眞實波羅蜜多．若有善男子善女人．發阿耨多羅三藐三菩提心．能以七寶滿於三千大千世界．布施無量貧窮衆生．如是布施但名布施波羅蜜多．不名眞實波羅蜜多．若有善男子善女人．發大悲心爲求無上正等菩提．以自妻子施與他人心無悋惜．身肉手足頭目髓腦．乃至身命施來求者．如是布施但名親近波羅蜜多．未名眞實波羅蜜多．若善男子善女人．發起無上大菩提心．住無所得．勸諸衆生同發此心．以眞實法一四句偈．施一衆生．使向無上正等菩提．是名眞實波羅蜜多．前二布施未名報恩．若善男子善女人．能修如是第三眞實波羅蜜多．乃名眞實能報四恩．所以者何．前二布施．有所得心．第三施者無所得心．以眞實法施一有情．令發無上大菩提心．是人當得證菩提時．廣度衆生無有窮盡．紹三寶種使不斷絕．以是因緣名爲報恩．爾時五百長者．從佛聞是昔所

未聞報恩之法。心懷踊躍得未曾有。發心求趣無上菩提。得忍辱三昧入不思議智。永不退轉。爾時會中八萬四千衆生。發菩提心得堅固信。及此三昧海會大衆。悉得金剛忍辱三昧。悟無生忍及柔順忍。或證初地得不起忍。無量衆生發菩提心住不退位。爾時佛告五百長者。未來世中一切衆生。若有得聞此心地觀報四恩品。受持讀習解說書寫廣令流布。如是人等福智增長。諸天衛護。現身無疾壽命延長。若命終時卽得往生彌勒內宮。觀白毫相超越生死。龍華三會當得解脫。十方淨土隨意往生。見佛聞法入正定聚。速成阿耨多羅三藐三菩提如來智慧。

大乘本生心地觀經卷第二

譯號大唐元作周大和年其他同異如首卷

無三本俱作卑

大乘本生心地觀經卷第三

大唐罽賓國三藏般若奉　詔譯

〔麗匡　宋刻　元刻　明與〕

報恩品第二之下

爾時王舍大城東北八十由旬。有一小國名增長福。於彼國中。有一長者名曰智光。其年衰邁唯有一子。其子惡性不順父母。所有教誨皆不能從。遙聞釋迦牟尼如來。在王舍城耆闍崛山。爲濁惡世無量衆生。宣說大乘報恩之法。父母及子幷諸眷屬。爲聽法故。齎持供具來詣佛所。供養恭敬而白佛言。我有一子其性弊惡不受父母所有教誨。今聞佛說報四種恩。爲聽法故來詣佛所。唯願世尊。爲我等類及諸眷屬。宣說四恩甚深妙義。令彼惡子生孝順心。此世當生令得安樂。爾時佛告智光。善哉善哉。汝爲法故來至我所。供養恭敬樂聞是法。汝等諦聽善思念之。若有善男子善女人。發菩提心爲聞法要。舉足下足隨其遠近所踐之地。微塵數量。以是因緣。感得金輪轉輪聖王。聖王下報盡作欲天王。欲天報盡作梵天王。見佛聞法速證妙果。汝大長者及餘衆等。爲於法故來至我所。如是經過八十由旬。大地微塵一一塵數。能感人天輪王果報。既聞法已。當來證得阿耨多羅三藐三菩提。我曩先說甚深四恩微妙義趣。今復爲汝重宣此義。而說偈言

最勝法王大聖主　一切人天無等倫　具諸相好以嚴身　智海如空無有量　自他利行皆圓滿
名稱普聞諸國土　永斷煩惱餘習氣　善持密行護諸根　百四十種不共德　廣大福海悉圓滿
三昧神通皆具足　八自在宮常遊樂　十方人天及外道　無有能難調御師　金口能宣無礙辯
雖無能問而自說　如大海潮時不失　亦如天鼓稱天心　如是自在唯佛有　非五通僊魔梵等
難思劫海修行願　證獲如是大神通　我入三昧大寂室　觀察諸根及藥病　自出禪定而讚歎
三世佛法心地門　時諸長者退大心　樂住二乘自利行　我開大智方便教　引入三空解脫門

授同作受

房下三本俱無百寶乃至甘露二句

母同作擧

脂同作胎

如來意趣莫能量　唯佛能知眞祕密　利根聲聞及獨覺　勤求不退諸菩薩　十二劫數共度量
無有能知其少分　假使十方凡聖智　授與一人爲智者　如是智者如竹林　不能測量其少分
世間凡夫無慧眼　迷於恩處失妙果　五濁惡世諸衆生　不悟深恩恒背德　我爲開示於四恩
令入正見菩提道　慈父悲母長養恩　一切男女皆安樂　慈父恩高如山王　悲母恩深如大海
若我住世於一劫　說悲母恩不能盡　我今略說於少分　猶如蚊虻飲大海　假使有人爲福德
供養淨行婆羅門　五通神仙自在者　大智師長及善友　安置七珍爲堂殿　及以牛頭栴檀房
百寶臥具各敷陳　世間美味如甘露　療治萬病諸湯藥　盛滿金銀器物中　如是供養日三時
乃至數盈於百劫　不如一念申少分　供養悲母大恩田　福德無邊不可量　算分喩分皆無比
世間悲母孕其子　十月懷胎長受苦　於五欲樂情不著　隨時飲食亦同然　晝夜常懷悲愍心
行住坐臥受諸苦　若正誕其胎藏子　如攢鋒刃解肢節　迷惑東西不能辯　徧身疼痛無所堪
或因此難而命終　六親眷屬咸悲惱　如是衆苦皆由子　憂悲痛切非口宣　若得平復身安樂
如貧獲寶喜難量　顧視容顏無厭足　憐念之心不暫捨　母子恩情常若是　出入不離脅臆前
母乳猶如甘露泉　長養及時曾無竭　慈念之恩實難比　鞠育之德亦難量　世間大地稱爲重
悲母恩重過於彼　世間須彌稱爲高　悲母恩高過於彼　世間速疾唯猛風　母心一念過於彼
若有衆生行不孝　令母暫時起恨心　怨念之情少分生　子乃隨言遭苦難　一切佛與金剛天
神仙祕法無能救　若有男女依母教　承順顏色不相違　一切災難盡消除　諸天擁護常安樂
若能承順於悲母　如是男女悉非凡　大悲菩薩化人間　示現報恩諸方便　若有男子及女人
爲報母恩行孝養　割肉刺血常供給　如是數盈於一劫　種種勤修於孝道　猶未能報暫時恩
十月處於胎藏中　常銜乳根飲脂血　自爲嬰孩及童子　所飲母乳百斛餘　飲食湯藥妙衣服
子先母後爲常則　子若愚癡人所惡　母亦恩憐不棄遺　昔有女人抱其子　渡於恒河水漾流

汎同作氾
記下同無是故乃至其名二句
女三本俱作子

以汎水故力難前 與子俱沒無能捨 爲是慈念善根力 命終上生於梵天 長受梵天三昧樂
得遇如來受佛記 是故悲母有十德 隨應養利立其名 一名大地二能生 三能正者四養育
五與智者六莊嚴 七名安隱八教授 九教誡者十與業 餘恩不過於母恩 何法世間最富有
何法世間最貧無 母在堂時爲最富 母不在時爲最貧 母在之時爲日中 悲母亡時爲日沒
母在之時皆圓滿 悲母亡時悉空虛 世間一切善男女 恩重父母如丘山 應當孝敬恒在心
知恩報恩是聖道 不惜身命奉甘旨 未曾一念虧色養 如其父母奄喪時 將欲報恩誠不及
佛昔修行爲慈母 感得相好金色身 名聞廣大徧十方 一切人天咸稽首 人與非人皆恭敬
自緣往昔報慈恩 我昇三十三天宮 三月爲母說眞法 令母聽聞歸正道 悟無生忍常不退
如是皆爲報悲恩 雖報恩深猶未足 神通第一目犍連 已斷三界諸煩惱 以神通力觀慈母
見在受苦餓鬼中 目連自往報母恩 救免慈親所受苦 上生他化諸天衆 共爲遊樂處天宮
當知父母恩最深 諸佛聖賢咸報德 若人至心供養佛 復有精勤修孝養 如是二人福無異
三世受報亦無窮 世人爲子造諸罪 墮在三塗長受苦 男女非聖無神通 不見輪迴難可報
哀哉世人無聖力 不能拔濟於慈母 以是因緣汝當知 勤修福利諸功德 以其男女追勝福
有大金光照地獄 光中演說深妙音 開悟父母令發意 憶昔所生常造罪 一念悔心悉除滅
口稱南無三世佛 得脫無暇苦難身 往生人天長受樂 見佛聞法當成佛 或生十方淨土中
七寶蓮華爲父母 華開見佛悟無生 不退菩薩爲同學 獲六神通自在力 得入菩提微妙宮
皆是菩薩爲男女 乘大願力化人間 是名眞報父母恩 汝等衆生共修學 有情輪迴生六道
猶如車輪無始終 或爲父母爲男女 世世生生互有恩 如見父母等無差 不證聖智無由識
一切男子皆是父 一切女人皆是母 如何未報前世恩 却生異念成怨嫌 常須報恩互饒益
不應打罵致怨嫌 若欲增修福智門 晝夜六時當發願 願我生生無量劫 得宿住智大神通

非元作邪
異下三本俱無
勿謂乃至王修
二句

能知過去百千生　更相憶識爲父母　循環六趣四生中　令我一念常至彼　爲說妙法離苦因
使得人天長受樂　勸發堅固菩提願　修行菩薩六度門　永斷二種生死因　疾證涅槃無上道
十方一切諸國王　正法化人爲聖主　國王福德爲最勝　所作自在名爲天　三十三天及餘天
恒將福力助王化　諸天擁護如一子　以是得稱天子名　世間以王爲根本　一切人民爲所依
猶如世間諸舍宅　柱爲根本而成立　王以正法化人民　如大梵王生萬物　王行非法無政理
如琰魔王滅世間　王所容受姧邪人　象蹋華池等無異　勿謂時逢濁惡世　當知善惡是王修
如日天子照世間　國王化世亦如是　日光夜分雖不照　能使有情得安樂　王以非法化於世
一切人民無所依　世間所有諸恐怖　依王福力不能生　人民所成安隱樂　當知是王福所及
世間所有勝妙華　依王福力而開敷　世間所有妙園林　依王福力皆滋茂　世間所有諸藥草
依王福力差諸疾　世間百穀及苗稼　依王福力皆成實　世間人民受豐樂　依王福力常自然
譬如長者有一子　智慧端嚴世無比　父母恩愛如眼目　晝夜常生護念心　國大聖王亦如是
愛念衆生如一子　養育耆年拯孤獨　賞罰之心常不二　如是仁王爲聖主　群生敬仰等如來
仁王化治國無災　萬姓恭勤常安隱　國王無法化於世　疾疫流行災有情　如是一切人非人
罪福昭然無所覆　善惡法中分七分　造者獲五王得二　園林田宅悉皆然　所稅等分亦如是
轉輪聖王出現時　分作六分王得一　時諸人民得五分　善惡業報亦皆然　若有人王修正見
如法化世名天主　以依天法化世間　毗沙門王常擁護　及餘三天羅刹衆　皆當守護聖王宮
聖王出世理國時　饒益衆生成十德　一名能照於國界　二名莊嚴於國土　三名能與諸安樂
四名能伏諸怨敵　五名能遮諸恐怖　六名修集諸聖賢　七名諸法爲根本　八名護持於世間
九名能作造化功　十名國界人民主　若王成就十勝德　梵王帝釋及諸天　夜叉羅刹鬼神王
隱身常來護國界　龍王歡喜降甘雨　五穀成熟萬姓安　國中處處生珍寶　人馬彊力無怨敵

誡同作諄
王元作土
得明作德
終三本俱作倘

如意寶珠現王前　境外諸王自賓伏　若生不善於王國　一念起心感衆惡　是人命終墮地獄
受苦永劫無出期　若有勤誡明國王　諸天護念增榮祿　智光長者汝應知　一切人王業所感
諸法無不因緣成　若無因緣無諸法　說無生天及惡趣　如是之人不了因　無因無果大邪見
不知罪福生妄計　王今所受諸福樂　往昔曾持三淨戒　戒德熏修所招感　人天妙果獲王身
若人發起菩提心　願力資成無上果　堅持上品淸淨戒　起居自在爲法王　神通變化滿十方
隨緣普濟諸群品　中品受持菩薩戒　福得自在轉輪王　隨心所在盡皆成　無量人天悉遵奉
下上品持大鬼王　一切非人咸率伏　受持戒品雖缺犯　由戒勝故得爲王　下中品持禽獸王
一切飛走皆歸伏　於淸淨戒有缺犯　由戒勝故得爲王　下下品持琰魔王　處地獄中常自在
雖毀禁戒生惡道　由戒勝故得爲王　以是義故諸衆生　應受菩薩淸淨戒　善能護持無缺犯
隨所生處作人王　若有不受如來戒　終不能得野干身　何況能感人天中　最勝快樂居王位
是故王者非無因　戒業精勤成妙果　國王自是人民主　慈愍如母養嬰兒　如是人王有大恩
撫育之心難可報　以是因緣諸有情　若能修證大菩提　於諸衆生起大悲　應受如來三聚戒
若欲如法受戒者　應當懺罪令消滅　起罪之因有十緣　身三口四及意三　生死無始罪無窮
煩惱大海深無底　業障峻極如須彌　造業由因二種起　所謂現行及種子　藏識持緣一切種
如影隨形不離身　一切時中障聖道　近障人天妙樂果　遠障無上菩提果　在家能招煩惱因
出家亦破淸淨戒　若能如法懺悔者　所有煩惱悉皆除　猶如劫火壞世間　燒盡須彌幷巨海
懺悔能燒煩惱薪　懺悔能往生天路　懺悔能得四禪樂　懺悔雨寶摩尼珠　懺悔能延金剛壽
懺悔能入常樂宮　懺悔能出三界獄　懺悔能開菩提華　懺悔見佛大圓鏡　懺悔能至於寶所
若能如法懺悔者　當依二種觀門修　一者觀事滅罪門　二者觀理滅罪門　觀事滅罪有其三
上中下根爲三品　若有上根求淨戒　發大精進心無退　悲淚泣血常精懇　哀慟徧身皆血現

唯同作惟下同
戒下三本俱無若有乃至諸罪二句○涕同作若
提下同無能感乃至懺悔二句○起同作是
器同作品
欲明作於
偏三本俱作徧

繫念十方三寶所　幷餘六道諸衆生　長跪合掌心不亂　發露洗心求懺悔　唯願十方三世佛
以大慈悲哀愍我　我處輪廻無所依　生死長夜常不覺　我在凡夫具諸縛　狂心顚倒徧攀緣
我處三界火宅中　妄染六塵無救護　我生貧窮下賤家　不得自在常受苦　我生邪見父母家
造罪依於惡眷屬　唯願諸佛大慈尊　哀愍護念如一子　一懺不復造諸罪　三世如來當證明
如是勇猛懺悔者　名爲上品求淨戒　若有中根求戒者　一心勇猛懺諸罪　涕淚交橫不覺知
徧身流汗哀求佛　發露無始生死業　願大悲水洗塵勞　滌除罪障淨六根　施我菩薩三聚戒
我願堅持不退轉　精修度脫苦衆生　自未得度先度他　盡未來際常無斷　如是精勤勇猛者
不惜身命求菩提　能感三寶靈異相　是名中品大懺悔　若有下根求淨戒　發起無上菩提心
涕淚悲泣身毛竪　於所造罪深慚愧　對於十方三寶所　及以六道衆生前　至誠發露無始來
所有惱亂諸衆生　起於無礙大悲心　不惜身命悔三業　已作之罪皆發露　未作之惡更不造
如是三品懺諸罪　皆名第一淸淨戒　以慙愧水洗塵勞　身心俱爲淸淨器　諸善男子汝當知
已說淨觀諸懺悔　於其事理無差別　但以根緣應不同　若欲修習觀正理　遠離一切諸散亂
著新淨衣跏趺坐　攝心正念離諸緣　常觀諸佛妙法身　體性如空不可得　一切諸罪性皆如
顚倒因緣妄心起　如是罪相本來空　三世之中無所得　非內非外非中間　性相如如俱不動
眞如妙理絕名言　唯有聖智能通達　非有非無非有無　非不有無離名相　周偏法界無上滅
諸佛本來同一體　惟願諸佛垂加護　能滅一切顚倒心　願我早悟眞性源　速證如來無上道
若有淸信善男子　日夜能觀妙理空　一切罪障自消除　是名最上持淨戒　若人觀知實相空
能滅一切諸重罪　猶如大風吹猛火　能燒無量諸草木　諸善男子眞實觀　名爲諸佛祕要門
若欲爲他廣分別　無智人中勿宣說　一切凡愚衆生類　聞必生疑心不信　若有智者生信解
念念觀察悟眞如　十方諸佛皆現前　菩提妙果自然證　善男子等我滅後　未來世中淨信者

上明作尙

具三本俱作俱

當同作嘗

於二觀門當懺悔　當受菩薩三聚戒　若欲受持上品戒　應請戒師佛菩薩　請我釋迦牟尼佛
當爲菩薩戒和上　龍種淨智尊王佛　當爲淨戒阿闍梨　未來導師彌勒佛　當爲清淨教授師
現在十方兩足尊　當爲清淨證戒師　十方一切諸菩薩　當爲修學戒伴侶　釋梵四王金剛天
當爲學戒外護衆　奉請如是佛菩薩　及以現前傳戒師　普爲報於四恩故　發起清淨菩提心
應受菩薩三聚戒　饒益一切有情戒　修攝一切善法戒　修攝一切律儀戒　如是三聚清淨戒
三世如來所護念　無聞非法諸有情　無量劫中未聞見　唯有過去十方佛　已受淨戒當護持
二障煩惱永斷除　獲證無上菩提果　未來一切諸世尊　守護三聚淨戒寶　斷除二障并習氣
當證正等大菩提　現在十方諸善逝　具修三聚淨戒因　永斷生死苦輪迴　得證三身菩提果
超越生死深大海　菩薩淨戒爲船筏　永斷貪瞋癡繫縛　菩薩淨戒爲利劍　生死險道諸怖畏
菩薩淨戒爲舍宅　息除貧賤諸苦因　淨戒能爲如意寶　鬼魅所著諸疾病　菩薩淨戒爲良藥
人天爲王得自在　三聚淨戒作良緣　及餘四趣諸王身　淨戒爲緣獲勝果　是故能修自在因
當得爲王受尊貴　應先禮敬十方佛　日夜增修清淨戒　諸佛護念常受持　戒等金剛無破壞
三界諸天諸善神　衞護王身及眷屬　一切怨敵皆歸伏　萬姓歡娛感王化　是故受持菩薩戒
感世出世無爲果　三寶當住化於世　恩德廣大不思議　過未及現劫海中　功德利生無休息
佛日千光恒照世　利益群生度有緣　無緣不覩佛慈光　猶如盲者無所見　法寶一味無變易
前佛後佛說皆同　如雨一味普能霑　草木滋榮大小別　衆生隨根各得解　草木稟潤亦差殊
菩薩聲聞化衆生　如大河水流不竭　衆生無信化不被　如處幽冥日暫照　如來月光甚清涼
能除衆罪亦如是　猶如覆盆月不照　逆惡衆生亦如是　法寶甘露妙良藥　能治一切煩惱病
有信服藥證菩提　無信隨緣墮惡道　菩薩聲聞當在世　無數方便度衆生　若有衆生信樂心
各入三乘安樂位　如來不出於世間　一切衆生入邪道　永離甘露飲毒藥　長溺苦海無出期

邪 三本俱作耶

佛日出現三千界　放大光明照長夜　衆生如睡不覺知　蒙光得入無爲室　如來未說一乘法
十方國土悉空虛　發心修行成正覺　一切佛土皆嚴淨　一乘法寶諸佛母　三世如來從此生
般若方便無間修　解脫道成登妙覺　若佛菩薩不出現　世間衆生無導師　生死險難無由過
如何得至於寶所　以大願力爲善友　常說妙法令修行　趣向十地證菩提　善入涅槃安樂處
大悲菩薩化世間　方便引導衆生故　內祕一乘眞實行　外現緣覺及聲聞　鈍根小智聞一乘
怖畏發心經多劫　不知身有如來藏　唯欣寂滅厭塵勞　衆生本有菩提種　悉在賴耶藏識中
若遇善友發大心　三種鍊磨修妙行　永斷煩惱所知障　證得如來常住身　菩提妙果不難成
眞善知識實難遇　一切菩薩修勝道　四種法要應當知　親近善友爲第一　聽聞正法爲第二
如理思量爲第三　如法修證爲第四　十方一切大聖主　修是四法證菩提　汝諸長者大會衆
及未來世淸信士　如是四法菩薩地　要當修習成佛道　善男子等應諦聽　如來所說四恩者
佛寶之恩最爲上　爲度衆生發大心　三僧企邪大劫中　具修百千諸苦行　功德圓滿徧法界
十地究竟證三身　法身體徧諸衆生　萬德凝然性常住　不生不滅無來去　不一不異非常斷
法界徧滿如虛空　一切如來共修證　有爲無爲諸功德　依止法身常淸淨　法身本性如虛空
遠離六塵無所染　法身無形離諸相　能相所相悉皆空　如是諸佛妙法身　戲論言辭相寂滅
遠離一切諸分別　心行處滅體皆如　爲欲證得如來身　菩薩善修於萬行　智體無爲眞法性
色心一切諸佛同　譬如飛鳥至金山　能使鳥身同彼色　一切菩薩如飛鳥　法身佛體類金山
自受用身諸相好　一一徧滿十方剎　四智圓明受法樂　前佛後佛體皆同　雖徧法界無障礙
如是妙境不思議　是身常住報佛土　自受法樂無間斷　他受用身諸相好　隨機應現無增減
爲化地上諸菩薩　一佛現於十種身　隨所應現各不同　展轉倍增至無極　稱根爲說諸法要
令受法樂入一乘　彼獲神通漸增長　所悟法門亦如是　下地菩薩起智慧　不能了達於上地

物下三本俱無法寶能照乃至塵界二句

極同作種

能化所化隨地增 各隨本緣爲所屬 或一菩薩多佛化 或多菩薩一佛化 如是十佛成正覺
各生七寶菩提樹 前佛入滅後佛成 不同化佛經劫現 十佛所坐蓮華臺 周徧各有百千葉
一一葉中一佛土 卽是三千大千界 一一界中有百億 日月星辰四大洲 六欲諸天及四禪
空處識處非想等 其四洲中南贍部 一一各有金剛座 及以菩提大樹王 爾所變化諸佛身
一時證得菩提道 轉妙法輪於大千 菩薩緣覺及聲聞 隨所根宜成聖果 如是所說三身佛
最上無比名爲寶 應化二身所說法 教理行果爲法寶 諸佛以法爲大師 修心所證菩提道
法寶三世無變易 一切諸佛皆歸學 我今頂禮薩婆若 故說法寶爲佛師 或入猛火不能燒
應時卽得眞解脫 法寶能摧生死獄 猶如金剛碎萬物 法寶能照衆生心 如日天子臨塵界
法寶能作堅牢船 能渡愛河超彼岸 法寶能與衆生樂 譬如天鼓應天心 法寶能濟衆生貧
如摩尼珠雨衆寶 法寶能爲三寶階 開法修因生上界 法寶金輪大聖王 以大法力破四魔
法寶能爲大寶車 能運衆生出火宅 法寶能爲大導師 能引衆生至寶所 法寶能吹大法螺
覺悟衆生成佛道 法寶能爲大法燈 能照生死諸黑闇 法寶能爲金剛箭 能鎭國界伏諸惡
三世如來所說法 能利衆生脫苦縛 引入涅槃安樂城 是名法寶恩難報 智光長者汝諦聽
世出世僧有三極 菩薩聲聞聖凡衆 能益衆生爲福田 文殊師利大聖尊 三世諸佛以爲母
十方如來初發心 皆是文殊教化力 一切世界諸有情 聞名見身及光相 幷見隨類諸化現
皆成佛道難思議 彌勒菩薩法王子 從初發心不食肉 以是因緣名慈氏 爲欲成熟諸衆生
處於第四兜率天 四十九重如意殿 晝夜恒說不退行 無數方便度人天 八功德水妙華池
諸有緣者悉同生 我今弟子付彌勒 龍華會中得解脫 於末法中善男子 一摶之食施衆生
以是善根見彌勒 當得菩提究竟道 舍利弗等大聲聞 智慧神通化群生 若能成就解脫戒
眞是修行正見人 爲他說法傳大乘 如是福田爲第一 或有一類凡夫僧 戒品不全生正見

讚詠一乘微妙法　隨犯隨悔障銷除　爲諸衆生成佛因　如是凡夫亦僧寶　如鬱金華雖萎悴
猶勝一切諸妙華　正見比丘亦如是　四種輪王所不及　如是四類聖凡僧　利樂有情無暫歇
稱爲世間良福田　是名僧寶大恩德　如我所說四恩義　是名能造世間因　一切萬物從是生
若離四恩不可得　譬如世間諸色塵　能造四大而得生　有情世間亦復然　由彼四恩得安立

爾時智光長者及諸子等。聞佛所說四種大恩。得未曾有。歡喜合掌。而白佛言。善哉善哉。大慈世尊。爲濁惡世不信因果不孝父母邪見衆生。說眞妙法利樂世間。唯願世尊。說報恩義。我等既悟甚深四恩。而今未知修何善業而報是恩。佛告長者。善男子等。我爲五百長者先已廣說。而今爲汝略說少分。若善男子善女人。爲得阿耨多羅三藐三菩提。精勤修行十波羅蜜。若有所得未名報恩。若人須臾能行一善。心無所得乃名報恩。所以者何。一切如來觸無所得。乃成佛道化諸衆生。若有淨信善男子等。得聞是經信解受持解說書寫。以無所得三輪體空。爲爲一人說四句法。除邪見心趣向菩提。是即名爲報於四恩。何以故。是人當得無上菩提。展轉敎化無量衆生令入佛道。三寶種子永不斷絕。爾時智光長者聞是偈已。得忍辱三昧。厭離世間得不退轉。時諸子等八千人俱得此三昧。皆發無等等阿耨多羅三藐三菩提心。四萬八千人亦證三昧。遠塵離垢得法眼淨。

大乘本生心地觀經卷第三

銷同作消
因三本俱作田

大正六年 八 月二十二日印刷
大正六年 八 月二十五日發行
大正七年十一月二十三日再版發行
昭和二年十二月十 三 日三版發行

〔國譯大藏經 經部 第十卷〕

【非賣品】

（岡山製本）

編輯兼發行者　國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者　鶴田久作
東京市本鄕區西片町十番地

印刷者　君島潔
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所　共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　國民文庫刊行會
電話神田 五三五番 八三八番
振替東京一八五七二番